KAIZO

改造

四月特別號

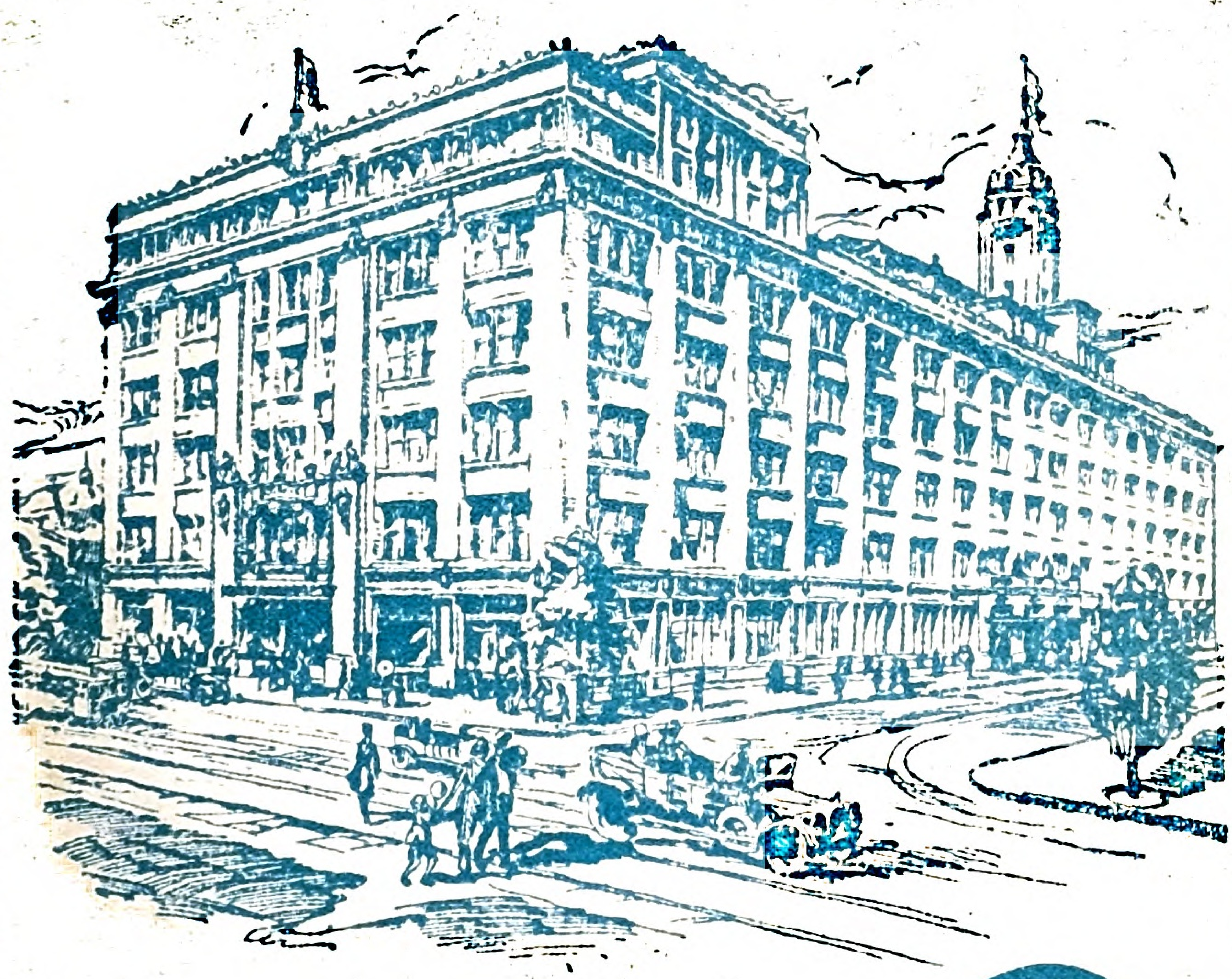
1927

三越の修築完了

四月七日より開館・同日より

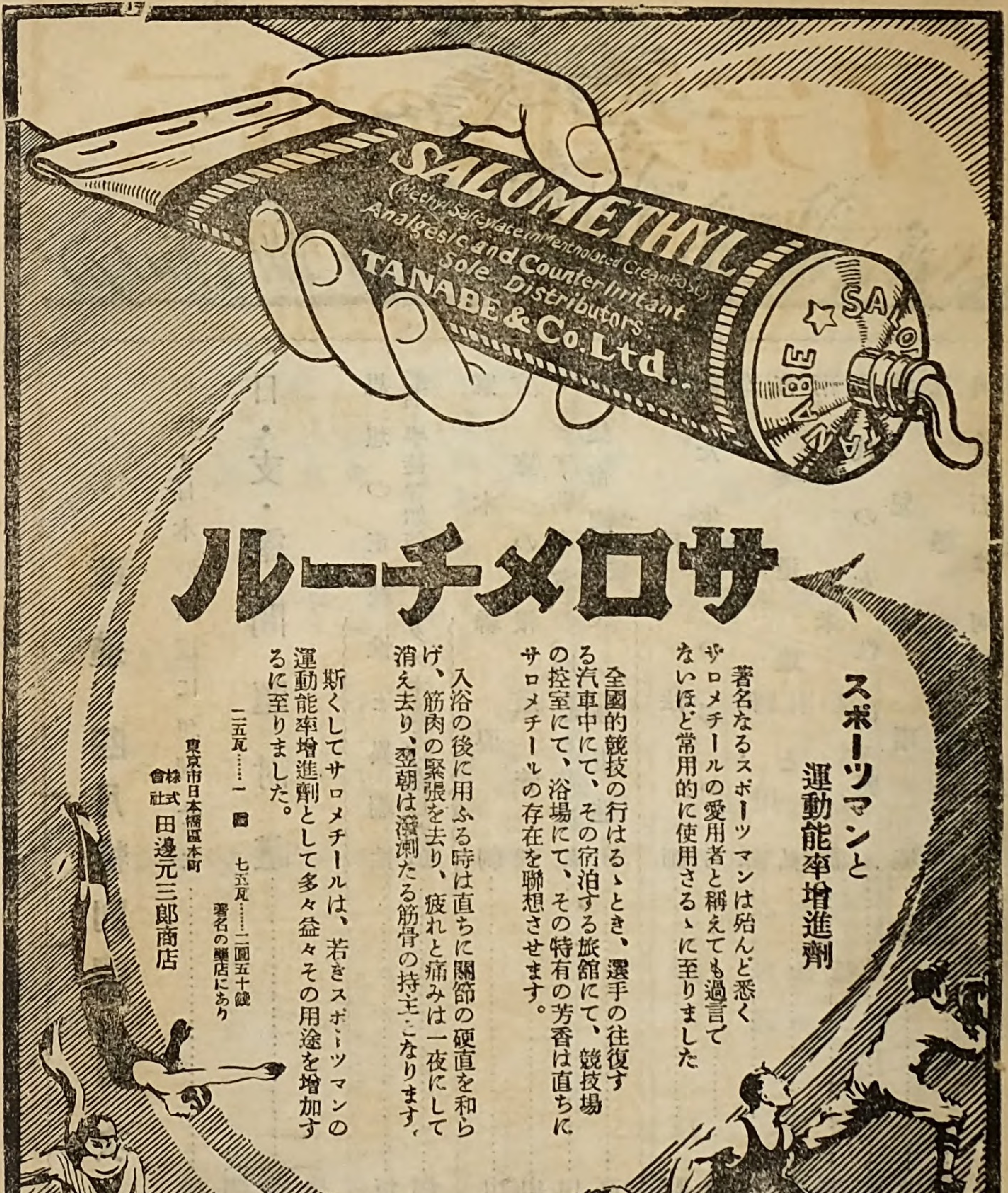
世界風俗博覧會

萬國美術工藝品大展觀



三越呉服店

東京駿河町


SALOMETHYL
(Methyl Salicylate in Mentholated Cream Base)
Analgesic and Counter Irritant
Sole Distributors
TANABE & Co. Ltd.
SALO
TANABE
サロメチール
スポーツマンと
運動能率增進劑
著名なるスポーツマンは殆んど悉くサロメチールの愛用者と稱えても過言でないほど常用的に使用さるゝに至りました
全國的競技の行はるゝとき、選手の往復する汽車中にて、その宿泊する旅館にて、競技場の控室にて、浴場にて、その特有の芳香は直ちにサロメチールの存在を聯想させます。
入浴の後に用ふる時は直ちに關節の硬直を和らげ、筋肉の緊張を去り、疲れと痛みは一夜にして消え去り、翌朝は潑剌たる筋骨の持主となります。
斯くしてサロメチールは、若きスポーツマンの運動能率增進劑として多々益々その用途を增加するに至りました。
二五瓦……一圓　七五瓦……二圓五十錢
著名の藥店にあり
東京市日本橋區本町
株式會社田邊元三郎商店



改造 四月特別號 目次



本社觀劇招待會に於ける各國の駐日大公使

再言。日本の永遠に想到せよ

失望と反抗との外、何者をも國民に與へなかつた今期議會は、又しても震手、出版法案で恥の上塗をなし、結局國民は自分の頭上にふりかかる負擔の苦惱に對し、泣寢入りするより外に道がないだらうか。普選を斷行した、憲政會內閣は何故にかくまでに濃厚な資本主義色彩を出さねばならなくなつたか我々の解釋に苦むところである。震手問題は松島事件や、瓦斯事件のごとき局部的の問題でなく、實に若槻內閣財政策の正系を代表するものであり、憲政會內閣が資本主義に對して勇敢なる庇護者であることをも雄辯に物語るものである。我々はただ當面の景氣が一時的に回復さるるからと云つてかくの如き道義を紊る政策には斷じて贊成することが出來ない。まして四苦八苦して震手を完濟した立派な財界の勇者達に對して政府及議會は如何に見んとするか。否、その新負擔額の二億幾萬圓は誰が負擔するのであるか。

一部分の政商輩を利せんが爲にかかる暴擧を說明なしに通過せる憲本兩黨の傍若無人振りは國民の忍ぶ能はざるものである。我々は我が國民が自分の眉毛に火がついていてもまだ政治の何たるかを深刻に意識し得ないことをも憫むものだ。自分のことを全くよそ事にのみ思ひつつあることを不可思議に思ふものだ。さるにつけても無產政黨があまりに仲間揉めと、些々たる理論の上にのみ拘泥して同志の結成をなし得ず、國民の雲の如き期待を空しくしつつあることをも齒痒く思ふものだ。

見よ！　我既成政黨及若槻內閣が醜惡極まる正體を暴露しつつある間に支那革命は着々成功し、英國は全く長江沿岸に於て勢力を失墜し、支那は攻守同盟以上の地步を鞏固に築き上げたるにあらずや。そして我國の地位は一刻は一刻と南支に於て危殆に瀕しつつあるのだ。幣原外相のブルジョア意識は南支革命軍の態度が表面日本に對して靜謐に見えるのを見て我國が窮地に立つていないやうな觀測を下しているが、今日の日本の政局はプロレタリア意識の明確でないものには判りつこがない。國民はこの嵐の前のやうな外交政局の前に深刻徹底せる覺悟を鍊りに鍊らねばならぬ。我々が今回の如く血を以て再び國民に警告する裡には異常のことが橫はり居るのを看取してのことだ。現在進行しつつある支那革命がどう云ふ筋書で、どう云ふ性質のものであることを正確に確認して外交しないならば取返しのつかぬことになる。最近南支に派遣せられた二外交官の報告の如きも現下進行しつつある支那及世界の政局から見ればいかにも世界の違つた見方で、見當違ゐが多い。英・米の資本主義思想を經緯として育まれ來つた時代錯誤の我外交の全空氣は我國を危殆に導く以外何者もない。我々は國家の前途を深憂する上より重要なる外交官の悉くがプロレタリヤ意識に立てるものより任官するが刻下の時局を救ふ所以だと確信する。國民も、政黨も無智と、私慾から一日も早く解放されよ、そしてブルジョア意識に樹てる總ての政策を拋棄せよ。たらひ廻しの策謀なぞは永遠なる汝の墓場をつくるのみだ。眼を轉じて日本の永遠に想到せよ。

日・支・露問題討議

福田徳三
戴天仇
後藤新平

福田氏。……ヤア……。
戴氏。……福田先生ですか……いつかあなたの講演をきいたことがありました。
福田氏。……黎明會のときでしたかネ……
戴氏。左樣でしたらう。
福田氏。寺尾博士の政治學校でも、たしかあなたに御目にかゝつたことがありました。兎に角隨分御久し振です。
戴氏。吉野博士は如何ですか。
福田氏。此頃は明治文化研究に夢中になつて居られます。しかし中央公論には、不相變健筆を揮つて居られる樣です。
戴氏。「改造」は支那に幾部位出て居ますか？　支那の青年の間に一番多く讀まれてゐるやうですが……
山本　その正確な調査はないが、大賣捌店を軒別に調べればその數字は直に出ます。（山本は改造社長のことだ）
戴氏。……日本の社會運動は、どういふ分派に別れてゐますか。
福田氏。分派と云へば、數へ切れない程ある樣ですが、大體を云へば勞働組合を中心とするものと、然らざるものとに分れると云つてもいゝかも知れません。然し近來は學生間にも社會運動に志す人が相應にある樣ですし、又た文士の間にも、其樣云ふ傾向もないではありません。
戴氏。大學教授の間に於ける社會思想の傾向はドンナものですか。
福田氏。大學教授と一口に云つても色々ありますが、あなたが知つて居られる人々に就て云へば、東京の諸先生は、皆夫々一人一黨主義で別に纏つて、一つの社會思想の旗下に集ると云ふことはありま

せんから、一の傾向を指摘して云ふことは出來ません。殊に此頃は形式社會學だの論理主義哲學だのと云つて、メトドロギーとかイデオロギーとか云ふことを八ヶ間敷云ふことが、若い人々の間に一種の流行の樣になつて、各人區々な考を發表して居ますから、黎明會時代とは大分趣きが異つて居ります。其れとも一つは、歴史的研究の聲が多少起りまして、但し歴史的研究其ものは、未だ此れと云ふ纏つたものは見えない樣ですけれども、其研究の必要を叫ぶ叫び聲丈けはかなり大向をうならせて居る樣です。要するに、十人十色と云ふのが、特色と云へば、云へるでせう。

敷氏。　京都の方は如何ですか。

福田氏。　京都の方は、不相替、河上博士がリーダーらしいです。然し此頃は福本と云ふ、或意味で云へばエライ人が飛び出して來て、大分河上博士を揉んで居る樣です。然し河上博士の事ですから、必ず面白い應酬をすることでせう。何しろ辯證法一點張と云ふのですから、事柄は餘り込入つては居ない。河上博士を中心として櫛田、森戸、其れから或點までは東京の大内君等は、終始一貫マルキシストの立場を固守して奮闘して居る樣です。此の一つの傾向を除いては、今京都にも指導的社會思想家は居ない樣です、尤も佐々木博士の樣な本當に獨立的に眞面目にやつて居る人の下には、相當の人が集つて居るでせうが、私は京都の事は此頃は全く知りませんから、ハッキリしたことは申上げられません。

私立大學では、大山君が流行兒で最近も大分賑やかな問題が早大にあつたやうですが、トウ〳〵同君は早大を去つて勞働農民黨の大將に專門的になる決心をせられた樣です。同時に北澤、安部兩氏も政黨の大將になられたソウですが、學校の方と縣持だソウですから、大山君の樣に眞劍な活動は、トテモ出來ないでせう。惜しいと云へば惜しいし、賢いと云へば賢いでせう。何となれば、無產政黨の產婆役は兎に角其政黨が本當の政黨になれば、知識階級排斥が起るだらうと思はれますから、此はあなたも廣東で既に御經驗になつたことでせう、而して遠からざる將來に更らに續いて起ることでせう。縣持なら何時でも早變りが出來ますが、大山君の樣になると、其時の引込みが六ヶ敷なる、ソコデ初めて本當の無產黨首としての大山君、學究看板一腳の大山君が出來上るわけですが、安部君や北澤君は、其時は引込むでせう、而して頭の空ッポになり濟せた教授として學生を苦しめることになるでせう。

敷氏。　今實際の社會運動に指導を與へ、又實際運動に參加して居る……何と云ひますか、指導者の中に主に如何云ふ思想が中心になつて居ますか。

福田氏。　其れは頗る難問です、何となれば、私の見る所では、中心思想と目す可きものが見當らないからです。昔は勞資協調主義、溫情主義などと云ふ事も、多少は意味あるものとして一の中心思想を爲して居たとも云へますが、此頃は、ドンナ時代後れの人でも、ソンナ事を中心思想とする人はありません。早い話が鈴木君の友愛會時代には、添田博士や、澁澤子爵が、溫情主義五分、社會事業五分と云ふ樣な處で、友愛會の世話をして、鈴木君も一生懸命に其れにパッを合せて居た樣ですが、今ではソンナ事もあつたかねと云ふ次

第ですから。

溫情主義に入れ代つて起つて來たのが勞働組合中心思想でせう。これは今日でも中々勢力があります。大體日本勞働總同盟の現中心者達は、此思想の中堅と見て差支ないでせう。殊に麻生君一派の分離後は、著しく其の色彩を鮮かに示して居ます。

勞働總同盟も、一時は著しく左傾したやうですが、其れは實は一時の惡夢か善夢か兎に角一の夢で、此頃は其の本性に立還つたものと見て大過ないでせう。

デスから、實際運働者中の一大陣營は、勞働組合中心思想の人々によつて立形され、而して其大本營が日本勞働總同盟であると見れば間違ひはなさゝうです。

之れに對抗する他の陣營は、まだブルーイング（釀造中）だと云つたらいゝでせうが、其中で棚橋、麻生君等の日本勞働農民黨（大山君のは日本なしの勞働農民黨です、甚だやゝこしいが、混同しないで下さい）が、今の處一番見込のあるものでせう。これが他日日本の勞働運動の中堅となるや否やは、今では何とも云へないことですけれども、兎に角景氣は大分いゝ樣ですから、麻生君の熱心と誠意とが今の儘に繼續するものなら、其前途は刮目して見る可きのものでせう。唯麻生君は、少し計畫に富み過ぎて居り、從つて急變的危險なしと限りませんから、其點は心配物です。

此派の中心思想は、組合主義ではありません。さりとて組合を輕視しすぎるのでもなし、マルキシストの樣でもあり、ない樣でもあり、其點は大山君の方が、シツカリして居ます。私の想像では、他日兩者が一緒になることありとするならば、其は思想上に於て麻生君等が大山學派となり從つてマルキシスト——或はレニスト——となり、反對に實際運動の上では、大山君が顧問に降格して、麻生君等の制を受ける時ではないかと想像して居ます。しかし離合集散常なきが人生デスから、將來の豫言などは滅多には出來ません。

兎に角、私は吉野博士の社會民衆黨は、麻生君などなくしては、先以て見込なかるべしとの淺い考から、初は、切りに兩君の提携の破れざらんことを窃かに祈つて居たのですが、其以後兩派の發展の有樣を見ると、合せものは離れもの、これは、行く可き所に行つたもので、覆水盆に返らずぢやないかと思つて居ます。而して政黨としての戰ふ力は麻生黨の方により多くありはしないか、社會民衆黨は餘り品が善過ぎて、實業同志會と五十步、百步の間隔の邊をブラブラするのぢやないかを虞れるものです、其が杞憂に終れば仕合ですが。

兎に角社會民衆黨は勞働組合中心と云ふ外には、殆んど何等の纏つた統制的思想を今の處持合さず、日本の附く勞働農民黨即ち麻生黨も詮じ詰めれば、此れと云ふ統制思想を持たず、ブランコをして居ると云つても、別に例の福田の惡口雜言と難ぜられる憂はないものと思つて居ます。此間にあつて、兎に角淺いか深いかは別として、大山君——北澤君と混同しては困ります、北澤君は我々程度の本箱虫派を出ては居ません、我々と違ふ所は、北澤君が極めて悧巧な人であると云ふ丈けでせう——大山君丈けは、シツカリした思想を掴つて居ると云へば云へます。尤も早大を退くときの態度は、

餘りシツカりして居たとは云へません此點は吉野博士の批評の方が本當でせう。然し愈々黨首になつて來れば大山君の小兒病──コンナ言葉が、日本では流行ります──も全快するでせう、其時は兎に角一の中心思想として、勞働組合一點張に優に對抗することになるでせう。

戴氏。 政治運動としての日本の無産政黨運動ですね、是はどう云ふ傾向を取つて進んで行くかと云ふあなたの御觀察ですか。

福田氏。 右申した通りですから、政治運動としての前途の傾向は丸で分らないとお答した方が當つてゐるかも知れませんが、政黨によらざる政治運動としての無産者運動は、日本では迚も發育する見込はないと斷言することだけは出來ると思ひます。既に政黨運動であれば、議會に勢力を得なければ何もありません。從つて、理屈は何とでも付くでせうが。實際の政治運動としての無産者運動は、日本に於ては、革命運動とはならないで、議會を中心とする運動となることと思ひます。手近く云へば、選擧毎に出來る丈け多くの無産代議士を議會へ送り込むことに主力を注ぐことになる外はあるまいと思ひます、御承知の通り、次回からは普通選擧ですから、此の傾向は著しく刺戟されるに相違ありません。ですから實は思想としての統制中心の思想の有り合せがなくとも、無産政治は榮へて行くでせう、而して其れで間に合つて行くでせう。否、たとへマルキシストでもレニストでも政治運動をなすからには、組合主義者と別に變りはないことになりませう。而して議會に入つての一々の現實問題に就ては、當分は迚も決定的勢力とはならないから、共産主義でも社會主義でも又は其を否認する人でも、餘り差ひはないでせう。其差別が顯はれて來、其が現實問題となるのは、無産代議士が少くとも今の床次黨位な數を得る時でせう。否左様なつても、矢張り妥協とか何とかで結局、グヂヤグヂヤになりはしますまいか知ら、ソコデ當分は、主義や思想の問題は、所謂思想鬪爭屋──先刻申した福本氏等のやつて居る──の專業となるのではありますまいか。

(後藤新平氏來場)

戴氏。 大分久しくお目にかゝりませんでした。

後藤氏。丁度貴方の來られたことを聞いて居ましたけれども、改造社から御案内があつて丁度いゝ機會だからお目にかゝらうと思つて居ました。

戴氏。 着いてから直ぐ、一時も早くお目にかゝらうと存じて居りましたが、此兩三日非常に混雜して居るので……。

後藤氏。 およばれが多いやうですね。

戴氏。 失禮して居ります。

山本。 (後藤氏に向つて)中村さんもとう/\……(この日前東京市長中村是公氏逝く)

後藤氏。 惜しい人でした。あんなさつぱりした人を……さつぱりした人と云ふものは勉强しないもので、其職に當ると獻身的に勉强する人は少くない。人間と云ふものは然と二人でなければ働かぬものが多いもの……(戴天仇氏に向つて)今度は何時まで御滯在ですか。

戴氏。 出來れば花を見て歸りたいと考へて居りますが、多分それまでの暇がなからうと思ひます。國の方もいろ/\用があるのですか

ら早く歸らなければならぬと思ひます。大分久しぶりですから出來る丈居りたいと考へておりますが。

後藤氏。お國の方のナニは新聞では、段々やりますが、新聞より多くの混雜ですか、新聞より少ない混雜ですか。それはものにもよるけれども、大體に於て……。

戴氏。私は現在の支那の狀態は極く簡單に見て居ります、

後藤氏。はゝあ。

戴氏。新聞紙上の混雜と云ふのは、ごく個人々々の立場を、そのまゝ新聞に表はしただけのことで、支那の事情は新聞紙上の混雜程混雜して居ないと私は思ひます。一番明白に事實問題として見ることの出來るのは現在支那の國家的立場、又國民の經濟的生活狀態から觀まして、今日ごく簡單な問題しかないのですから、恐らく問題とするのは、國家の獨立を全うすると云ふごく單純なもので、問題と云ふのは眼の前の問題で、此國民的希望が完全に實現するまでの支那はごく簡單な支那です。政治問題にしましても、亦社會問題にしましても、ごく簡單であると私は觀て居ります。

是は又、例へば現在の民衆運動、凡ての社會狀態と云ふものが非常に複雜になつて居ると云ふのは事實です。併し、政治的に現はれて來る所の民衆運動と云ふものはごく簡單なものです。一般的思想と云ふか、實際の目的と云ふか、現在支那民族の國家的解放を求める以外に殆ど基調がない。今、一切の民衆運動が、個々別々の生活改善運動と云ふのか、是も今日の所では處々に依つて違ひますけれども、一般の今日の經濟運動と云ふのが、政治運動の形として、政治運動の形の下に於て行はれて居るもので、獨立した經濟運動として、此生活運動としてはまだ極く僅かな所以外には——上海の樣な、若くは漢口の樣な、機械工業のある地方以外には純然たる經濟的運動としての民衆運動と云ふものは殆ど見えませぬ。今の、特に日本で此二、三日方々できかれますが、農民運動ですね。是は今の所、段々人が氣付いて來ましたけれども、實際昨年の半頃までは人が農民運動に注意を拂つて居ない。是は恐らく、私の觀る所では有ゆる支那の民衆運動の基調になつて居る一つの運動である。將來支那の國家的統一の上に、又總ての社會建設の上に、農民運動、農民の組織と農民生活改善の要求と云ふものは、總ての問題の中心になりはしないかと思ふ。現在支那が農業國であると云ふことは是は誰も認めて居る事實であるが、農民生活の困難と云ふことは恐らく日本や他の外國の人々の想像して居る以上に困難して居る。現在の農民運動と云ふものは、地主反抗でなく、詰り小作民と地主との間の問題よりも、一般的政治問題と、一般的經濟問題としての農民運動が現在の事實です。假に農民協會運動として事實に現はれて居る所の此農民協會の組織から見ましても其傾向が判りますが、日本に於ける所謂小作民の組合運動と違つて、小作民、自作農、又或る程度までの地主、支那では今農民協會と云つて居る。百畝以下の地主、百畝と云ふと、日本のどの位の坪數になりますか、一萬六千坪か、八千坪か——それから農業勞働者、是等なんかの大同團結と云ふ形で現はれて來ると云ふのを見ても判るんでありますが、詰り、今農民の生活に脅威を與へつゝあるのは軍閥、それから非常に腐敗しきつた官僚

です。それから、地方で働かずして農民の利益を剝削する高利貸、それから高利貸と官吏との間に働いて居る、色々な詰らぬ、浮浪者所謂劣紳士豪の手先になつて居る無頼漢連、さう云ふものは詰り、農民の敵なんです。であるから此農民運動がどう云ふ形に依つて現れて居るかと云ふことは、總體としての支那の國家的生活の改善が出來なければ、個々別々の改善の途がないのであるから、全體の國家生活の改善と云ふのを目標として、國民革命運動として現はれつつある。であるからして、農民運動から見ましても、問題がごく簡單で、矢張一般の社會運動と云ふものは凡て國家の獨立を全うするものと同時に、現在の政治組織、政治の實質を改良して行くと云ふのが一般の基調になつて居る。それで、中國國民黨と云ふものは、此凡ゆる國民の個々別々の利益を代表するものでなく、總體としての一般の國民的利害を代表して居るものである。此國民黨の代表して居る國民運動の發展と云ふのは、即ち支那の問題のごく簡單であると云ふことを說明して居ると思ふ。私は大體として見て居るのでございますが思想上から觀ますれば、色々個々別々の主義とか、色々な思想が外國から入つて來て、それから國內に於ても色々な潮流があるけれども、今日の青年、所謂革命思想を有つて居る青年の思想の根柢と云ふものはどこに在るかと云ふと、まだ今日支那の一般の思想界と云ふものは具體化して居ない。或る一つの確然たるものが出來て居ない。さう云ふ思想をどう評していゝかと云ふと、舊い社會を打破する。舊い思想を打破すると云ふ漠然たる要求が今日の思想狀態であると評したい舊いものが必ずしも惡いのぢやない。惡いのではないが、現在の人達が詰り、自分の生活不滿足であり、自分の生活が不滿足であるから、此滿足し得ない生活がどこから來て居るかと云ふと、詰り現存して居る社會、及此社會の歷史と云ふものに滿足が得られないと云ふのが一つの因であると云ふ風に觀て居る。さうすると兎に角之を改革しなければならぬ。改善しなくちやならぬ。隨つて舊思想打破と云ふ、單に漠然たる要求が一般の思想界の根柢になつて居るのではなからうかと思ふ。それと同時に之に對抗して一つの反動思想と云ふものが自然生じて來る。此反動思想が生じて來ると云ふよりも、詰り何でも固有物を守り來つて、それを其儘保存したい。是も漠然たるもので、何を保存するかと云ふと保存する物を一々擧げる事が出來ない。兎に角革命的に前へ進んで行く思想に對抗する一つの潮流があると云ふのは爭はれない事實です。けれども此力はごく微弱なものである、微弱であると云ふのは今迄支那の思想と云ふのが。舊い思想界の人物を見ましても、所謂舊思想といふものは權威を失つた。この舊思想が權威を失つて來ると云ふことを思想として見るよりも、從來の政治組織其ものが保存すべき價値がない。從來の社會組織其ものが總て現代の生活に脅威され實質的に破壞されつゝある。

さうして一般の生活狀態が非常に困難と云ふよりも、自存の出來ない程、潰れていつたと云ふ現狀であるからして、守ると云ふても其守るべき物がない。實質的に無いから舊思想が單に一つの感情として殘つては居るが、實際の權威を有つことは出來ぬ。

是は日本なんかのやうに整頓して居る國と違つて、日本は守ると

云ふ、守るべき實質的のものがあるけれども、支那に於ては現在守るべき實質と云ふものがない。又社會の實生活の狀態から見ればそれが無い。であるからして此守舊思想と云ふものは守るべき物がないから突進的に舊い物を打破すると云ふ思想に對抗することが出來ない。それと同時に舊思想打破の人々は舊思想を打破すると云ふことを唱へて居ると同時に、民族を保存しなければならぬと云ふ大きい目的がある。是だけは一般の生存問題であるから保存しなくてはならぬと云ふ。尤も保守的と云ふならば是こそ守るべきものがあるのですね。であるから守舊思想と云ふものが、現代の革命思想と云ふものに對抗するだけの權威がどうしても無い。單に一つの感情として現はれつゝあるのであるが、大なる權威はない。是は私の大體の見方です。だからして支那を極く簡單に見て行くと今の支那の現狀と云ふものは、新聞若は色々な詰らぬ書物や何かに現はれて居る程の複雜もなければ混雜もないと。私は斯う思つて居ります。

(後藤氏に向つて)貴方は先生と同じく、人を癒やす學問から國を癒やす立場に立つて居られる。今、如何にして支那を癒やし、又世界を癒やすかと云ふことに付て御意見を伺ひたい。

後藤氏。 重大なお問ひで、是も先生の文法に從つて云へば簡單であると云ふ様にもあるし、複雜な様にもあるけれども、大體支那に對してと云ふことは私の知識は古いのですから、今の支那を餘り知つて居らぬから、今の支那に斯うと云ふことは私が確かな說を云ふことは出來ませぬけれども今の支那の現在には皆が色々の事を說いてあるやうだ。其中の誰が聽いても尤もだと思ふのは、今の武斷政策を廢めるのが一番だと、斯う云ふと大變單調の様に聞える。是がために經濟上の利益も現在とは全く異つた狀態に進む、斯う云ふ事を云ふけれども、私決して武斷政策を賞揚するのでもなければ、總督政治を良いと思つて居る譯でもないけれども、さう云ふ風に簡單に行けるものぢやないと、斯う從來の話から云ふと久しく私の思つて居つたのですが、支那の經濟問題と云ふ根本に行くとどうも私は日本に於ける皆の考と全く違つたものを持つて居る。それは支那の一番安住を得る途は、支那の政治上の中心は經濟であると斯ふ思ふ。此經濟の問題、經濟學者として云ふのと私のは違ふ經濟だ。一番害せられたものは何から害せられるかと云ふと似而非道德とまでは云はぬけれども、道德觀念のために非常に害せられた物がある。それは何であるかと云ふと良いこともあるけれども、ミショネリーに害せられて居る。それの具體的のものを云ふと阿片問題です。此阿片問題と云ふものに付ては非常に外國の壓迫を蒙つて居る。さうして其壓迫が政治の非倫理なる或ものを持つて來て居る。又信仰なりとて持つて來て支那の國民が皆それに魅せられて居る。

私の云ふ事は宗教家でないから耶蘇教を惡く云ふ様にとられては困るが、支那に來て居るミショネリーの中に善い人もあるが、わるい人もある。大體に於て是が支那に禍して居るものが多いと考へる。是は昔からの私の考である。現在に於てどうだと云ふことを私は云ふのではない、昔からさうだ、現在も尙然りと、斯う考へて私はお話する。それは何であるかと云ふと、阿片制度を改定しようとして私が臺灣にやつた通りの事をやつたならば支那の經濟は根本から變ると

云ふことは、是は何十年來の宿論である。確かお話をした事があるかも知れない。是は實は袁世凱が極道臺をやつて、私が臺灣民政長官をやつて居る時に實行するばかりになつた。支那は大きいから先づ周圍の各省から幾らか妨げられると云ふこともあるので、それは臺灣でやるやうには容易く行かぬ。確に袁の力を以てやるならば、直隷だけにやつても宜い。全清國などと云ふ考なしにやつたらよからうと云ふ話をした。やるばかりになつたがイギリスの當時公使の方から各方面に金をやつて、彼に百五十萬俩かなんぼかやつて其話をやめにしてしまつた。是は昔の話で斯う云ふ事があつて支那でもやらうとはしかかつたが之をやる事が大變に困難である。今日でも私はあの嚴禁をやつた方が一番いゝと思ふ。あれは私の議論にすれば漸禁說、漸次に禁ずる方法をやつて行けばそれがために支那の經濟と云ふものが根本から立つ。此經濟が立つ樣になればもう自然に支那の總督政治などを改善して行く事も亦出來る。どうしてだかと云ふと、阿片警察を置くと同時に、ごくシステマチックの警察が起つて來ると云ふと總督政治の裁兵が行はれる樣になる。斯う云ふのが私の元から持つて居る議論である。今でもさう思ふ。此事は餘程經濟上から安住を得せしむると云ふ事の根本の考である。其順序方法となつたら、是は私が臺灣にやつたやうな事が行けると思ふ。それは單簡な方法ではない。餘程困難であるが、併し支那に於ては臺灣よりもまだ容易な點もあるのだから、双方差引すれば結局同じものである。斯う云ふ考を有つ居るのが一つ、其次はどうしても外來思想の問題今の貴方のお話の新舊思想の戰ひの樣な話だが、是は最近に於て青年の思想が變つて來て居るから、どうしても舊思想を破壞せいと云ふのではないが、舊支那も保存すべしであるが、新思想を尊重して行くより外に未來の思想を作る途がない。是に付ての施設に付て、十分なる考をする方がいゝと私は思ふ。此思想が、但し、新舊の思想と云ふと單簡である樣だが、中々思想も單純でなく複雜なものになる、そこはまあ取捨すべき別でありますが、大體に於て新舊思想の戰に付ては舊思想の保存すべきものは顧みなければならぬけれども、青年の新思想の採用と云ふか、それに付て宜しきを得る基礎を拵へなければいかぬであらうと、斯う私は大體に於て考へて居る。先づ支那では經濟上に重きを置く事にしてやらなくちやいかぬけれども、其順序としては今支那の事情に依つて、何から手を着けたらいゝかと云ふことは、最近の支那を研究しければ本當の事は云へないが、阿片制度は是は御參考になるかと思ふ日本と支那との間に西洋風の侵略論が行はれたことが澤山ある。是は貴方が能く知つて居られる。

或時、私は死んだ伊藤公爵と話をした時に、公爵に、餘り武斷派の人が斯う云ふ事を云ふとか、陸軍が斯うだとか云ふやうなことで種々の議論が日本にあつた。それは日本人の議論で、陸軍の人の考がいゝとか惡いとか云ふ事に付て議論があつた。當時私は伊藤公に支那を與れると云ふて來たら日本はどうするのです。統治の大計大略はありますかと言つた所が伊藤公が莨を吹いてをつたが、一寸止めてしまつてホッと考へて、姑くして、それは自分は考へた事がないと言明され、それは正直に云はれた話で、初め自分が支那に行く時に

支那人必ず支那を治むるの途如何と云ふぢやらうから、其時には自分の考へることはあつた支那人の統治法として何だと云ふことに付て種々に考へて居つた。その時李鴻章とも意見を交換したことがあるが、そんな破天荒な話に入つた事はないのだ。云はれて併しそれから考へなければいかぬぢやないか、それを貰つて出來る位ならば侵略することも出來るんだが、貰つて出來るだけの者はありますかと斯う云つたが、其時伊藤公の返答は、そこを考へなければならぬ。それは考へた事はないが、併しそれは重大な問題だから今はそれに答へる事は出來ないけれども。と云ふ話であつたであつた。支那は支那で治めると云ふ對支論の話があつた假令日本でも之を全部與れると云つても全支那の統治が日本人に出來る話ぢやないから、侵略論などを武斷派が考へることは間違ひであると云ふ事は論を俟たぬが、そこに付ては大いに講究すべき問題だと思ふ。それからでなければいかぬぢやないかと云つた事がありますが、是は座談で、すんで、其答案は聽いた事はないけれども到底それは、支那は支那人の考で治めると云ふより外にないと云ふことに歸着するのである。其前提としてはさう云ふ問題を伊藤公と話したことがある。今日では支那は支那の支那だから支那で治めると云ふことは誰も異論のない事であるから、其事は誰も疑はぬけれども、支那人が治めると云ふことに付てはどうしたらいゝかと云ふ、斯う云ふ事は先づ經濟問題を基礎としてやるのが一番いゝ。それには私は阿片だと、斯う云ふことを申上げる。

戴氏。　あなたのお話は以前から、餘程前のことでしたが承つて居ります。

後藤氏。　あなたに會つた時にお話をしたやうに覺えて居ますが……

戴氏。　委しい話を聞いたことを記憶して居る。

後藤氏。　その時あなたは、日本の着物を着て、羽織を着て來たやうでした。

戴氏。　今、近代支那の歴史は無論阿片問題から起つて來る。其阿片問題に關しての歴史は即ち支那の近代史である。現に支那の民衆運動の方法と云ふものは、阿片問題の解決にあるのですから、簡單に言へばさう言へる。阿片戰爭があつて、南京條約があつて、一切の支那の國家的境遇と云ふものが今のやうになつて來た。此問題の解決と云ふのは、即ち今の革命運動の中の、國民運動となつて現れて來た。さうして今、總ての國民運動、即ち國家の獨立を全うすると云ふ運動、又國民の生活改善と云ふのが、先づ第一に國家の獨立を全うすると云ふことになる。不平等條約撤廢の問題も、結局南京條約から以來の問題である。であるからして阿片問題に歸着する。今如何にして此問題の解決が出來るか。後藤先生の言ふ如く、支那問題は、支那自ら解決するよりほかはない。此原則の下に言へば、もう一つ付加へて言へば、支那の問題は、支那に由つて解決しなくてはならぬ、支那は支那の人民が治めて行かなければならぬと云ふことが必要である。で私は現在の支那の狀態を、斯う言ひたいのです。總ての國家と云ふものは、或一ツの宜く働く政治的支配階級があつて、其階級の力と云ふものは、優越なる經濟的條件の下に於て、さうして怠けて居ない、宜く全體の社會的生活の爲めに働くも

のであると云ふ一ッの階級がなくてはならぬ。日本の維新を見ましても、日本の維新は町人、百姓を解放したのが事實であるが、矢張り是は士と云ふ階級の自覺である。その力に依つて出來たものであるものと、斯う言へると思ふのです。支那の國家を政治的に統一する社會的中心力と云ふのはどこにあるか。是が一ッの總ての事實問題を解釋する上に於て、最も必要なる問題であると私は思ふ。それを階級とか何とか云ふやうな名前を付けて言ふと、或は非常に人がそれを嫌ふ。又非常にナニするかも知れないが、是は一ッの事實問題で、近代までの支那は所謂四民平等で、餘り國民生活には大した差がなかつた。經濟的立場の差と云ふものは餘りない。さうして清朝時代、昔からの所謂科擧制度と云ふものがあつて、總ての人が、極く書物も簡單であるし、學問も容易く出來たのであるから、此簡單な生活の上に於ける政治組織、總ての人が皆、政治的支配階級と云はず、政治的に生活し、如何なる人でも政治的支配の機能を有つ機會があつた。その科擧制度が今から見ると惡いけれども、昔しは其れでよかつた。だん／＼社會が複雜になり、社會の生活の組織が人口の增加、又土地の兼併と云ふ二ッの事情に依つてだん／＼變つて來て居る。それから一方、諸外國から輸入して來る所の工業品の壓迫を受けて、益々舊社會の經濟的根柢と云ふものは潰れて行つた。さうしてそれと同時に、從來の農業に根據を置いて居る所の、以前の支配階級と云ふもの、單に飯を喰つて行くと云ふことよりほかの仕事が出來ないさう云ふ人達が、だん／＼墮落して行く近代支那に於て、工業が發達して居ない、通商貿易も發達して居ない。一般の諸外國の如く、所謂近代のブルジョアジーの社會と云ふものが出來て居ない。是も舊い所謂統治の機能を有つて居る人達が、近代の政治を操縱して行くだけの機能を有たず、それだけの能力を持たなくなると同時に、近代に於ける工業的、近代の所謂資本家階級の權威と云ふものがない。それで支那と云ふ國を治めて行くには、從來は極く事が簡單であつた。どうしても多くの人民が自覺して、今現在生產的に生存して居る、農業に從事して居る、又工業に從事して居る一般の人が、政治的に自覺して來なければこの國を治めて行くことが出來ない。それで或る人達が支那と云ふやうな厖大な國には、非常な民權制度を行ふのが不適當であると云ふやうに考へるが、本當のデモクラシー、一般の生產者に政治的權利を與へて、彼等を政治に參加させると云ふだけの組織が出來ない以上は、支那の統一、本當の政治的建設と云ふのが出來て來ない。言葉を換へて云ふと、今の支那を統治して行くには、單に人民の爲に架空の政治を行つて行くと云ふことでは出來ない。人民自ら意識的に、政治的に生きて來なければ、革命の權力と云ふものを建設することが出來ないと云ふ事情にあるからして、今までの革命の經過を見ると、私は斯う言ひたい。民國十三年前の革命の總ての傾向、人民の爲に多くの人の爲に、革命をやると云ふことであるが、十三年以後の成行と云ふのが、それでは機能を有たぬぢやないか、多くの人に革命と云ふ意識を與へ政治的意識を與へて、政治的に、革命的に生きて來なければ、革命が成功して行くものでない。言葉を換へて云へば、即ち新しく此國を建てる政治的統治の權力と云ふのを造り上げること

が出來ない。此の意味から云へば現在の革命運動は即ち凡ての生産階級の政治的自覺に生きて來たのだと云ひたい。

後藤氏。　それはその通りで、私もさう思ふ。

戴氏。　現在の狀態もさうである。それで現在の一切の民衆運動と云ふものは、どう云ふ方向に向つて進んで居るかと云ふと、即ち多數の人民の政治的自覺、政治的、意識的に、革命的に生きて來ると云ふ組織と團結を與へつゝあると云ふのが、現在の國民黨のやつて居る仕事である。此上に基礎を築上げなくちやならぬと、私は大體に考へて居る。のみならず一般的に人が之をさう見て考へて居る。是は國內だけでやつて行くことが出來るかと云ふと、現在の支那は如何に支那の國民が生きて來るにしても、生きて來ることが非常に困難である。全世界が一種の封建制度を布いて居る。列强の矛盾、經濟的、政治的の矛盾が其儘支那に實現して居る。さうして其一切の矛盾が支那に、實現して居ると同時に、阿片戰爭、所謂南京條約、今の不平等條約に依つて支那を束縛して居る。或一人の外國人が支那に來れば、一ケの皇帝である。總ての權力、一切を支配する權利を有つて居ると云ふやうな形では、如何に支那の國民が組織しよう、團結しようと思つても、列强の爭ひに依つて、支那の國民が十分なる團結と組織が得られない。であるからして、此革命が自然不平等條約の撤廢と云ふことに向つて進み、國際間に於ける國家の獨立を全うすると云ふ方向に向つて進む。何故かと云ふと、斯うでなければ一切の建設のみならず、單に統一の權能を造ることでも出來ぬのであるから、詰り支那と云ふ國家の上に、尙は優越の諸外國の制限――治外法權と云ふ、實の政治的權力から解放されなければ、支那の獨立と云ふものは全うすることが出來ない。それから實質的の現在の問題として考へると云ふと、是はいろ／＼云ひ方がありますが、單に私は阿片問題として考へても、是は全體の話を離れて、單に阿片問題と云ふ一ケの問題として考へて、恐らく支那は、後藤先生の考へて居る政策が――現在それは廣東では其方法を試驗的に執つて居る。あなたの言ふ通り漸次に禁止する方法を執つて居るけれども此方法を執つて行つて良いか惡いかと云ふことに付いて私は研究中である。と云ふのは私は斯う考へた。今廣東では、あなたの言ふ程の實が擧つて居ない。又あなたは相當計算を立てゝ居るのですが、その計算の十分の一、恐らく二十分の一三十分の一も、擧つて居るのでない。極く薄弱なものである、と云ふのは今一つの問題が、是は實際的に恐らく此問題に關して後藤先生の考へて居るのは、客觀的の考へで、主觀的に實際阿片を吸つて居る人、又吸つて居る人達の一切の經濟的影響、政治的影響を、それを餘りに小さく見過ぎたのではないかと思ひますが、非常に玆に困難なことがある。今の支那が民族的に衰微して來た原因、それから生産的に適しなくなる原因はどこにあるかと云ふと、要するに體力の衰微、精神力の衰微と云ふ二つに歸着する。此二つの衰微から救ふには、恐らく漸次的でなく、大英斷を要する。なか／＼むつかしい問題で、阿片嚴禁といふものは漸次的に禁止するならば容易く出來るやうに考へられる問題であるが、なか／＼困難で、急速的に、野蠻的にやるので却つてやり易い。是は私は漠然たる私の考へでなく、民國元年、二年、此二ケ年の經過を見ると分ります

が、其時に各地方に於ける禁煙状態と云ふものは非常によかつた。所がそれから革命の氣風が壓迫されて、革命の氣風が弱つて行くと同時に、阿片の跋扈と云ふことが非常になつて來た。今は殆ど清朝の末代よりも餘程增加して居る。さうであるから阿片禁止と云ふのは、急速的に出來ぬことでなく、出來ることである。それと同時に實際の經濟から打算すると、阿片を栽培して居る場所と云ふものは他の必要品の生産が減じて來る。田畑がそれだけしか無いのだから阿片を植えるならば、ほかのものを植えることが出來なくなる。それともう一つ、阿片を植えた場所ほど地力の回復と云ふものは困難である。例へば今年阿片を植える。それから來年になると、餘程肥料でも使はなければ地力の回復が出來ない。一種の特別な植物だから、一般の經濟からみましても、斯う云ふ苦しい立場に至つて居る支那だから、如何にして支那を救ふかと云ふことは、支那の人間を生産的に造り變へなければならぬ。努力しなければならぬ。働かなければならない。人を生産的に働かせると云ふのが、要するに實際政治の方針でなければならぬと斯う考へる。さうすると急速的に、急進的に阿片を禁止すると同時に、生産的に地力を回復する。生産的に人力を回復すると云ふのが、現在政治上に於ける一般的必要ではなからうかと、私は斯う考へる。又實際の打算をみると、阿片と云ふものは悪いものである。悪い物だから、之に阿片の爲だとか何とか云ふことを言ふのは、青年や何かは非常に嫌ふ。

後藤氏。　それは其のやうです。それは議論の上からさうなつて居る。

戴氏。　是は實情なんです。廣東なんかは漸進的に禁止する方針に於いて阿片專賣をやる。此れも勿論臨時的試驗的にやつて居ることで早晩嚴禁の方針に換へる計畫になつて居るが阿片專賣なんかに從事する官吏なぞは碌な者でない、思想あり、學問あり、革命の氣風を備へて居るやうな人間に、阿片の徵税若しくは專賣の仕事を吾々がさせようとしたところがいかない。極く腐敗した人しか其役に就かない、さうすると取締の上からも非常に困る。だからして專賣問題として、一般的、打算的に考へるならば後藤先生の說は、非常に宜く行はれるやうに考へるが、愈々それを行ふと云ふことになると、果て利益があるか無いかと云ふのが甚だ分らなくなる。もつと研究を要する。此弊害を取除くには、もつと英斷を要する。さうして此禁止は國民の精神問題になる。國民の精神が一體に回復して來ることは、物質的打算よりも、一體に政治的に回復すると云ふのが、支那を救ふ上に於て、他の一般の、一々算盤に立てた打算よりもつと必要なことになる。是は漠然たる話であるけれども、政治の實際に觸れて、十數年間の經過を見ると、どうも是は必要である。

後藤氏。　今の支那ではさうかも知れません。

戴氏。　それだから經濟的に利益は絕對にない、財政的には或は多少目前に利益がある。何故かと云ふと、經濟的には現在の生産率を減ずることになる、少くすることになるのだから經濟的の利益にはならぬけれども、財政の急を救ふ爲には極く短期間やつて宜いかも知れない。此れも根本的に財政上から考へると財政を救ふ爲に經濟上の生産力を復活させて、社會的生産力の增進に由て財政を救ふと云ふのが根本です。であるから、現在の財政の急を救ふ爲にやつて居

ると云ふのは、民國二三年以來、阿片が斯う跋扈して來たと云ふのは、總ての軍閥が、財政の急を救ふ爲にやつて來たと云ふことが現在の失敗である。吾々の考は財政の急を救ふと云ふことは、どうも仕方がない。戰爭の最中か何かでゝもなければ、此政策を行ふことは絶對は宜くない、國民黨の現在の考へでは、成るべく一策として之を禁止する方針を執りたい。まだ執つてはゐないけれども執る決議になつて居る。

後藤氏。 禁止方針を執つたのでせう。採つたけれども私の聞く所に依れば行はれなかつた。當初から確信なき試みの側を實行したのだから――。

戴氏。 さうぢやない。非常に成績が良かつた。清朝の末代から、光緒の末年から民國二年までの間、大分經過が良い。あの時代と云ふものは、國民の氣風でも何でも、阿片の禁止に依つて一時よくなつた。所が袁世凱の時代になつて、地方々々の戰爭がだん／＼激しくなつて來た。さうすると軍資の必要が起つて來る。さうして一般の督軍とか何とか云ふものは、毒藥を飲んでも現在は忍ばなければならぬと云ふ立場に立つて、財政の急を救ふ爲に、國民の經濟的利益を棄てると云ふ、方針が兎に角、現在の狀態になつた。であるからして、此政策は財政の急を救ふには、採つて宜いかも知らぬが、併し是は勿論戰爭をして居る最中で、餘儀なくでなければ、此政策はやつても、害があつて益がないと云ふことになる。是は特に此數年間、最初あなたの話を聞いた時は、私はさう考へなかつたが、此數年間、愈々實際の政治に觸れて、責任を以て此問題を、特に最近是を一つの事實として計算してみた。財政的に考へると、其職務に就いて居る者が碌な者が無い、絶對禁止でもしなければ行政の整理も財政の整理も出來ない。職務の性質がよくないからどんなことをしても良い人が其職務に就かない。

後藤氏。 其職務に良い人が就かぬと云ふこともあるだらうが、それは成るほど支那の事情ではさうでせう。

戴氏。 であるから私は早晩嚴禁の政策を採るのが一番宜いと思ふ經濟的に……。

後藤氏。 私の考へて居る所は斯うであります。其役人に弊害があつて、やつても出來ないと云ふことは、是は確に支那に私はあると思ふ。其地味が惡くなつていかぬと云ふことは、支那の全體に於てまだあゝ云ふアブリツールのサイエンスが、全く幼稚だからさう云ふことが起るのだ。支那の現在のサイエンスの資もある。制度の上から云ふと、私の言ふ所のものは、中央政府なら中央政府と云ふものに、政權があるものとして考へて居る所のものであつて、そこに第一の差がある。それからサイエンスの關係に於て、阿片栽培の上より未開土地の利用と云ふことに付ては、二樣に考へなければならぬ。何故かと云ふと、私の聞いて居る所では、支那では阿片の栽培をしないと云ふことにしようと云ふことを、國際條約の上に萬國會議に決めて居る。それは實際行はれて居らぬ。それで支那の土地の利用上からと云ふことは、是は先づサイエンスの上から云つたならば、阿片が妙な植物であつて、土地を非常に瘦地にすると云ふこと、回復のむづかしいと云ふことは、是はサイエンスの上から云へば問題

にならないことである。支那で栽培した阿片をやらなければならぬと云ふことはないから、支那の栽培だけは禁ずると云ふが、臺灣も阿片を禁じて居る。一つも作つて居ない。それと同じやうに外から持つて來た阿片で宜いのだ。それで假りに地味の力を減ずると云ふことが、避くべからざるものと假定すると、支那の中に阿片栽培を禁じさへすれば、それは出來るけれども、役人の腐敗すると云ふことは、是は支那の今の時代に於て避くべからざるもの だらうと思ふ。現在の督軍政治に於て、是が一つの金庫になつて居る。

その金庫になつてゐる爲に、非常な弊害があると云ふことは、是は私確に方々から聞いて居る。此事は、制度と綱紀の問題で、是は別問題であるけれどもが、支那の中の阿片の栽培は是は地味の問題である。地味はサイエンスの上から、農業の進歩から云ふと是は問題にならぬけれども、先づ是は假りに栽培を禁じさへすれば避けることが出來る。內地のことはそれで地味を害すると云ふことはなくなるけれども、人氣が惡くなる。

戴氏。　ほかに生産力が——人の生産力が——減る。

後藤氏。　人間の生産力と云ふことになると、是は全く制度上の欠陷から來るので、臺灣あたりはずつと、是が爲に何等害を蒙つて居ない。是は官吏の力の如何に依るのですね。實際阿片を喫むから人が怠惰になり、阿片に關係した者は皆惡い役人であるからいかぬと云ふことは、是は制度官紀上の議論で標準にはならぬけれども、支那に於ては已むを得ないかも知れない。實際上臺灣あたりでは、阿片に關係した役人には、惡い役人はやらない。阿片を取扱ふ所の支那人——臺灣人と云つても皆是等が腐敗墮落したと云ふことはない。是は官吏訓練上の關係で、決してさうはならないと云ふことを、私は保證する。支那人に於て、今の中央政府の力が完全なものとして考へることは出來ないから、或は茲に於ては嚴禁する方が宜いと、斯う云ふことになるかも知れぬけれども、大體地味の說は是は、サイエンスの上のことである、憂へとするに足らぬ。支那內地に於てはやらせない。人間の事に至つては是は、私は制度のことで、唯原則に於てどうであるか、孫大人と三遍話をした。最初には決してそれに同意を表さない。終局の時は、大人自身にどう考へられたか知らぬが、又反覆して私が說明した時に、大變議論が變つて居つたやうであつた。と云ふのは、あの人はキリスト信仰があります。耶蘇教の信仰がある。所が嗜好品と戰つて政權が勝つたと云ふことはない。決してそれはない。無用な勞をするものであると云ふ話を、二度目の時に強くした。あなたは外國のことも調べて居る、博識であるから考へて御覽、嗜好品と戰つて政府が勝つたことはない。それを宜く調べて見て貰ひたいと、斯う云ふことを言つて居つた。三回目にあつた時には、今の阿片を喫む者は惰弱になると云ふことから、生物學の原則上、阿片嚴禁がさうはいかぬけれども、阿片を多量に飲めば癈者に陷る、酒と阿片とは同じことである。生理學上、急に嚴禁と云ふものはいかぬかと云ふ話まで私はしたのですが、最後に孫大人に會つた時は、あれは宜いけれども、どうも、中央政府の政治の力により、あなたの臺灣にやつたやうな政治と、私(支那)の國の政府とは違ふから、自分の政府が組織的たる後はどうか知らぬけれども、今の

支那の督軍の政府である以上には、是は至難と考慮しなければならぬと云ふやうなことを申されたことを、私は記憶して居る。それであなたの調べも實際はさうだらう。さうだらうが要するに僅かに三四ヶ月の統計ぢや其制の可否を決することはいかない。臺灣で最初やつた時には、數字はよく覺えて居らぬが、大體が阿片吸飲者七萬か八萬かの人、それは私が行く前の話で、行つてから後に之をずつと勵行して行つた。所が十七萬人まで殖えた——約倍の十七萬人に殖えたで、そこで世人はこの此制度と云ふものは失敗だと思ひまして兒玉總督に諫告をした人もあつたが、どうしてもそれぢや繼續してやつてみやうと云ふのでやつつけた所が、だん／＼減るやうになつた。同一方針で施行方法三度やり直した。それはどう云ふ譯であるかと云と、七萬人ばかりであつたのが十七萬人になつた。それは、五人の吸飲者ある家內がある處で、一人阿片の鑑札を貰つて居る。さうすると是だけの人が皆喫む。それが警察の力で、阿片の鑑札を皆貰はなければならぬやうになつて來たから、其實吸飲者數がずつと殖えるが臺灣では其畑地で阿片が生產するのでなく皆輸入ですからその輸入の統計を見ると、矢張り其總額統計は阿片吸飲者の增加と共に其數を增さぬ。即ち阿片はモノポリーでやつて居るから、輸入の統計によりて正しき判斷になつて來た。そこで人數の殖えることは何等憂ふるに足らぬから、どこまでもやつて行くと云ふのでやつたのが、今は臺灣に於て減つて喫む者が僅に三萬何千人になつてしつた。最初は、あれは後藤民政長官が、統計を作らせるので人爲のことだと言はれた。殊に阪谷男爵などでさへ、さう云つたものを書いた物などが殘つて居る。所がだんだんやつてみると、今では三萬人になつたからもう誰も何とも言はない。ゼネバの萬國會議でも之を是認する位に明瞭になつた。併ながらそれをどうして最近臺灣阿片制度に非難があるのは既に阿片を喫む者が、三萬何千人に減つたと云ふのに、矢張り阿片の臺灣政府の收入が減少することなくやつて居るのはどう云ふのかと云ふことである。是は支那に密輸入する譯であつて、臺灣に於ては事實は減つて居る。

戴氏。　大體目前の、支那を經濟的に復活させるには、一番必要とするのは關稅問題です。一つは極く幼稚な、微弱な薄弱は產業を保護すると同時に、國民的節儉國民的節制、と云ふことが今の支那の經濟上一番必要なことである。さうして此阿片の嚴禁と云ふのは、極く最近の、國民黨の中央の會議には、殆ど每回此問題が出る。嚴禁すると云ふ方針に一致して居る。其の嚴禁は、是は理想でなく事實問題である。是より以外に方法がありませぬ。嚴禁は一番し易い。さうして財政的には何等の影響がない。經濟上には宜い。財政上には影響がないと云ふのは今の總ての調べに由つてわかる。

福田氏。　阿政的に影響がないと云ふのはどうしてですか。

戴氏。　阿片に依つて收入が入つて來ない。あるにしても、財政上の援けになるにしても極く微々たるもので何にもなりませぬ。

後藤氏。　財政上に何にもならぬと云ふけれども、輸入して居るのだから、計算して見ると財政上何にも關係なしといふ譯はない。けれどもそれは役人に依るのだから、それは今戴大人の言はれる通りの事は私は役人より來る事實と思ふ。

福田氏。　さう云ふことで、財政上に結果が上らない位に官吏が腐敗して居るのに、どうして全部の嚴禁が出來ますか。

戴氏。　一番の問題は此處なのです。今必要とするのは、さう云ふ人を使はぬと云ふのが一番必要である。外の方面に使ふべき人は、良い人が來るのだけれども、阿片と云ふ問題に觸れると良い人が行かぬ。

福田氏。　だから全然禁止する。輸入も禁止する。斯ういふやうに阿片を嚴禁するには警察がシッカリしてゐなければ出來ない。それだけの警察が出來ますか。

戴氏。　私の言ふのは警察問題ぢやない。阿片問題に觸れて居る官吏と云ふものは、極く少數なのです。

福田氏。　阿片を喫む者は澤山方々にある。それを取締らなければ禁止する意味を爲さぬ。

戴氏。　今は此問題に觸れてゐない。

福田氏。　全然禁止し、而して、それを實行しようと云ふのには其實行を保障するだけの力がなくちやならぬ。

戴氏。　話が混雜して居る。現在私が言つてゐる禁止問題は、僅かな一部分です。一地方に於て試驗的にやつてゐるだけで、それが失敗してゐる。現在一般の他の地方では此問題に觸れてゐない、放任してある。それで一般に財政的に現れてゐない。廣東では僅か數ヶ月間此事をやつて失敗してゐる。と云ふのは、阿片を販賣する者、それに關係する者は、普通の人は關係したくない、腐敗して居る者が關係してゐる。

福田氏。　官吏腐敗の爲めに專賣をやることが、出來ないと云ふわけなのですか。

戴氏。　此腐敗の爲と云ふのぢやない。腐敗といふより人が從事したくない。或る一部分の事を腐敗した人が……。

福田氏。　革命の大事業を捨てゝも、阿片取締の事務に專心從事する人がありますか。

戴氏。　革命を捨てゝもやる程の大事業ぢやないが、然し阿片禁止も其れ自身は即ち一個の大なる革命政治である。故に嚴禁は革命の上から考へて必要です。

福田氏。　唯だ法律で嚴禁すると宣言した丈けでは、決して革命的意味を持つものではありますまい、獻身的に其實行に從事する人がなければ何の意味も成さないではありませんか。

戴氏。　それは理想なのです。あなたの言ふのは、一つの想像です。政治と云ふものは或程度まで想像で行くものぢやない。一つの氣風に依つて、社會的に阿片を禁止すると云ふのは、革命政府の號下では他の政府が單にやらうと云ふ意味に依つては、それはそれで出來ると云ふよりも、一般の民衆の力に依つては、社會的に防止して行くと云ふのか、是が一つの力になる。

福田氏。　禁止して命令を出してそれが行はれなければ日本の少年禁酒法と同じ事である。大きな理想を掲げて實行しないよりも寧ろ弊害を忍んでも、出來ることをやつた方が宜いではありますまいか。

戴氏。　さうぢやない、過去の事實に依つて、絶對禁止といふのは非常にし易い。

福田氏。　其れは無論です、然し其れは勵行が出來ると云ふ前提の下

に於てのみ云ひ得可き事です、單なる法律發布丈けでは何にもなりません。法律を實行する丈けの警察、それに要する權力がなければならぬ。後藤さんが臺灣でやられたことも其れ丈けの權力が背景にあつたからの話です。其權力がなければ行はれません。

戴氏。私の言ふのは一つの例だけで、財政的に援けにならぬと云ふのは、一例で、私の言ふ所の歸結する所は、經濟的に害があると云ふのことである。

福田氏。害があると云ふので、其害を無くなさうと云ふのには、完全に禁止する必要がある。法律を作つただけでは何にもならぬ。法律を勵行して其害を無くしなければならぬ。然るに法律の勵行が出來ぬと云ふのが、支那の根本的の弱點の一つではありませんか。

戴氏。それは法律的にさう改善出來ぬと云ふのが支那の弱點であると云ふよりも、それは單に私が言うた過去に於ける腐敗し切つた所の過去の官吏の害である、今革命的に覺醒し來つた所の民衆の、弊害でも、弱點でもなければ、革命的に意識してゐる所の革命黨の弱點でもない。

福田氏。革命の精神が、一般の支那の民衆の大部分に傳つて、政治を執る所の官吏も、革命政治をやるやうになるには、若干の歲月を要する。其歲月の間はどうしますか。

戴氏。此れは普通の政治的經驗上からの話で革命的氣風の養成又增長は、さう遲いものでない、然し一つの仕事としては是は當分の所、絕對禁止か暫時其れを勵行する暇がなければ放任する方が宜い。

福田氏。そこが後藤さんの考と根本的に違ふ所でせう。

戴氏。寧ろそれだけの財政的收入を捨てる方が宜い。

後藤氏。そこが違ふ。

戴氏。現在他の實際問題と比較して重大ではあるがそれ程の研究問題ぢやないから、出來る時になるならばやる……。

福田氏。重大問題であると云ふことと、出來る時になればやると云ふこととは、大變に違ふ。

戴氏。權威ある政府の建立と行政の整理が一通り出來て來ると同時に、直ぐ嚴禁すると云ふ方が寧ろ宜いのですね。

後藤氏。露西亞のウオツカの禁止、亞米利加の禁酒で一年ばかり非常な經驗を得た。其時に初め私は自分の說が誤りだらうかなと云ふことを深く研究して見た。と云ふのは私の此意見を採用したのは伊藤公である。其時分日本の内閣に勢力のあつたのは、白根專一、渡邊國武さんと云ふのが内閣に居つた。さうして阿片嚴禁急施說を以て反對した。私の漸禁說を伊藤公が採用したと云ふ時には、伊藤公は姑息な人だ、英斷が出來ない人が、今斷然禁止すると云ふことは出來ないから、姑息に私の說を採用したのだと、是は山縣派からの攻擊だ。其元を私が作つたからと云ふので、白根專一なども非常に私を攻擊したものであつた。私を國賊とまでいふ非難があつた。が斷じて行つて來た。其元は何であるかと云ふと、嗜好品と戰ふ程政府の愚なる戰はない。終に酒でも煙草でも勝つたものはないのだから……然し漸次に教育上の關係で向上心を養ふより外にないものだと云ふことが根據で、之に伊藤公が同意した。斯う云ふのである。所がウオツカを禁じた露西亞は大變良くなつたと云ふが最近の話だけれ

ども、さう云ふことがあるかと思つたか、全然結果が反對である。其次は亞米利加だが、是が亦非常に反對なんだ、そこであるから、嗜好品の事を根據として、生物學的に倫理的に根據に置くと云ふことは、まだ強いもんだと私は强味を持つて來た。斯う云ふ考から言ふと、今戴大人の言ふ所のものは、支那の事情として尤もなことかも考へるけれども、嚴禁がやれゝば早く出來ると云うて、過去の一二年又は一二ヶ月の成績で行くと云ふことは、之は論斷が早い。是は支那現在の政府、官吏の爲に出來ないと云ふことに私は之を見る、斯う思ふけれども、其他に人の精神生活の上に、根本に互つて、之を嚴禁すると云ふ意氣を以てやることが、今の支那には必要と、いふ其說は私は是認してやつても宜い一つのポリチックである。けれども是が嗜好品と戰つて、支那だけは勝てると云ふことは、どうしても生物學上むづかしい。斯う云ふことが私の考です。

山本。 戴さんの時間がないのでございますが、それでもう約二十五分しかない。阿片のお話も大變面白いですが、打切つて戴いて、今回の革命政府の種類、及露西亞と、日本との關係、之に於て二十五分間討議して戴きたいのです。

後藤氏。 それは第一に戴大人から聞く方が宜い。

福田。 今の阿片問題は重大問題だと思ふが、山本さんの御希望があるから、其れに就て戴さんの御話を伺ひ度いと思ひます。

戴氏。 先きの話の續きです。

今一般に支那と露西亞の問題はどうなつて居るかと云ふことは、日本に來て到る處で受ける質問である。總ての人が此事に關しての質問をする。之に對して私は二つの事を申上げる、先刻申上げた、討論して來た所の支那の近代歷史の起り、即ち英國の阿片政策、の結果としての南京條約以來曾て諸列國が支那に對して、不平等條約を撤廢したことはないが革命後の露西亞が始めて不平等條約を棄てた、支那は今どう云ふ國に對して好感を持つかと云ふと、當然現代國際的に束縛せられて居る支那の現在の狀態と云ふものは、支那國民の最も苦痛とする狀態であるから、此狀態より解放すると云ふことを求めるのは、支那國民の希望の總てゞある、であるからして不平等條約を撤廢した露西亞に對しては好感を持ち、それと同時に親交を結ぶと云ふのが、是が當然のことである、又事實的に支那の立場から當然にあるべきことである。と云ふのが是は極く分り易い話であると思ふ。之に對して何等の疑もなければ、何等の祕すべき事柄もない之が一つ、それからもう一つ支那の革命と云ふことに付て、一般に私は斯う云ふことを事實として申上げたい。先づ支那の革命と云ふものに二つの時代があつたと云ふが一番分り易い事と思ふ。日本の維新と云ふものは、東洋に於ける一番大きな最初の革命である。日本では、革命と言はぬけれども、革命と云ふ言葉と維新と云ふ言葉は、支那では同じやうに使つて居る。日本は維新に依つて此國政を改革し、さうしてそれに依つて國際的地位が增したと云ふことは、支那國民に對しては、革命的の非常な刺激である。それで過去の事實は、後藤先生は私共よりも能く過去の多くの事實を知つて居られますが、大體中山先生の率ゐて居る一番最初の統一した革命黨、中華革命同盟會と云ふものが東京に於て發會式を擧げた、

東京の留學生を根據にして、基礎にして作り上げたと云ふ事實に徵しても判ることである。其時代の支那の一般地方民の者と云ふものが、どうであるかと云ふと殆ど、東京へ行けば、何か得られて歸る、つまり東京と云ふのは支那革命の策源地である、兎に角一度東京に行かなければ、支那を改革するについて知識も能力も持たないと云ふ位に、支那の一般の所謂有識者靑年が、東京に對して、非常に望を持つて居つた、是は又實際一番近い改革の實を擧げた、模範である。それで此時代は何を作り上げたかと云ふと、中華民國の名は即ち之に依つて作り上げられた。それから民國三年頃に歐羅巴の戰爭が起つた、歐羅巴の戰爭がどう云ふことを、來たしたかと云ふと列强の帝國主義の爭の結果が、各國民衆の革命となつて現れ、又露西亞、獨逸と云ふ二つの帝國が倒れ、さうして巴爾幹から全亞細亞に於ける民族運動特に民主的民族運動として現れた。歐洲戰爭の影響と云ふものは、もう戰爭が始つた當時から、支那の一般の民衆が、今まで世界問題に注意しなかつたが、支那の民衆が全世界の事に注意を拂ふことを敎へられた。歐洲戰爭の結果、全亞細亞に於ける總ての民族の獨立運動と云ふものが、支那に非常な刺激を與へた、之が最近支那の國民運動の一番の刺激となつた。故に第二の時代と云ふものは歐洲戰爭の結果に刺激せられて出現したのであつた。是は又歷史事實として誰も否認することの出來ない事である。であるから支那と露西亞の關係と云ふものは、極く簡單な事である。若し經濟的政治的關係から云へば、新に人民の生活に觸れた現在の關係から云へば、日本との關係は、露西亞よりもずつと深い關係を有する事實に依つて具へて居つたけれども、一般の國民の心理狀態、特に革命的に傾いて居る人民の心理狀態は、どうであるかと云ふと、露西亞に對して、露西亞の革命後は何等の不安を懷いて居ない、と云ふのは露西亞の革命前は一般の人が非常に恐れて居つた、恐れて居つたと云ふのは、露西亞が支那から色々なものを取つて行くのでなからうかと云ふので恐れて居たのであつて、革命後に於て、一般の支那の國民が露西亞を恐れて居ないと云ふのは、露西亞が今支那に於て他の國々と同じやうに有つて居る治外法權、有つて居る租界を支那に還付した、返したと云ふ事實が存在して居る、それで今日支那の國際關係と云ふものは、どう言ひ現はすかと云ふと、各國が支那の自由を束縛して居る、それで今日支那と云ふ國は自由の國際關係を有つて居ない。凡ての國際問題に關して、同等の地位に居らない。各國とも支那に對して、不平等條約を撤廢して支那を自由の地位に置いたならば、一方に於て支那の統一が之に依つて始めて出來ると同時に、支那の國際的地位も始めて自由になり、國際的判斷も始めて自由につく、今の所では兎に角支那に自由を與へる國民は、支那の友であると云ふ極く簡單な觀念しかない、又是以上あるべきことはない。私は恐らく、是は總ての事實の根本になるであらうと思ふ、是は私の意見でない、支那の如何なる人でも之を否認することは出來ぬであらうと思ふ。現在此東洋の狀態につき、世界の狀態につき、私が、憂ふる許りでなく、多くの人が同樣に憂ふるであらう。今、東洋の狀態は歐洲戰爭後數箇年經過して來たが、日露戰爭前の狀態に段々復歸しつゝあるではないか。世界の狀態は、歐洲戰爭

が終つて數年經過して來た今日、又歐洲戰前の狀態に復しつゝあるではないかと云ふ心配がある。斯う云ふ一つの觀念を有つて居る。歐洲戰前の總ての國際の矛盾と云ふものが、一般的に植民地に對して、緊張して來たのであるが、今の世界的不安と云ふものが、恐らく一般の植民地問題と云ふよりも、支那問題が總ての中心になつて、緊張しつゝあると云ふ徴候が見えるのである。それで私の考では、今支那の國際的解放と云ふのは東洋に於けるのみならず、世界に於ける不安を取除く一般的原因となり、さうして此國際的矛盾は現在一般國際的矛盾の中心になつて居る原因を無くする根本でなからうかと私は考へて居る。

デ能く中日間の親交の關係を言ひますが、私は中日間の親交と云ふのは、中日露の自由なる立場の上に於て始めて作り上げることが出來る。互に自由なる立場の上に立たなければそれを作り上げることが出來ぬ。此自由なる立場と云ふのは、何に依つて保障するかと云ふと、即ち支那を現在の地位から解放すると云ふことが一番必要である。是は極ざつとした漠然たる話であるが、是以上目前の大問題はない。又今度私が日本に來て總ての話、公開的に言ひましても、座談的に言ひましても、此話以外に私は何の考も持つて居りませぬ、私は忌憚なく極く露骨に言ふのですが、是は他の人々はもつと綺麗な言葉を使つて色々な事を言ふのです、併し事實今日支那の何處へ行つても、誰に聞いても、特に上海邊りは十數年前からの事でありますが、色々な歌とか何とか、特に一般に下等社會の句調なんかを聞いても分る事である、私が忌憚なく申上げると、一般的に日本に好感を持つて居ない、今まで支那の一般の國民が十數年前までは排日運動が非常に激烈であつたが、其後段々排日運動が薄くなりつつあると云ふことは、是は一つの事實である、此事實は何に依つて段々緩和して來たかと云ふと、恐らく是は民國二年中山先生が日本に來て、日本から歸り始めて中山先生に依つて、どうとしても日支の關係を回復しなければならぬと云ふ說を一般的に皷吹したのが一番の原因である、それから變つて世界戰爭の時代になつたのであります、それ以來、それまで英國對支那の關係が今までのやうに緊張して來ない、對英關係と云ふものは、其時代から益々惡くなつたのである、之に依つて見ても此支那の國民が日本に對して親交を結びたいと云ふ考は十分にあると思ふ、好感は持たぬが、好感を持たぬと云ふのは過去の事に關しての事で、將來の事に付ては親交を持ちたい、親交を作り上げたいと云ふ希望を一般に持つて居ると云ふことは是で分る、であるから此兩國の關係を厚くして、別に一つの別天地を作ると云ふ將來の兩國國民間の關係は、最も注目し注意すべき事である、是が總ての問題の根本義であると云ふことを私共は考へて居る、近來日本に來て時々聞くことは、支那が露西亞との關係を絕つて終へば、日本は支那に對して援助をしようと云ふやうな話をする人が大分あります、之は私は甚だ理論の立たない事であると思ふ。

後藤氏。　それは民間の人ですか、役人ですか陸海軍ですか。

戴氏。　兎に角さう云ふ人があると云ふのは事實です、露西亞と支那との關係と云ふものは、支那の人が露西亞人になつたと云ふ事でな

ければ、特別に露西亜から輸入品が入つて來たのでもない。

福田氏。　廣東の今の國民政府は勞農共和國聯邦の一員ではないのですか。

戴氏。　是は博識の貴方から聞くのは驚くですな、私は此話は始めて聞きましたが、全然それはありませぬ。

福田氏。　私は最近來朝したセミヨノフ將軍から直接に聞いたのであるが、彼曰く今の露西亜と云ふものは、澤山ある共和國の一で、日本に來て居る大使は露西亜から來て居るのでなくして、勞農共和社會主義共和國聯邦の代表者である、其聯邦の中には澤山の共和國が入つて居る、廣東も表面に立つては居ないが、實際該共和國中の一だ、而して、事面倒になると、露國は、其聯邦から脱出して、一切の義務を免れるかも知れないと、さう言ひました。

戴氏。　セミヨノフならば其位の事は言ひさうなことである。

福田氏。　噓なんですか、全然さう云ふことはないのですか。

戴氏。　セミヨノフでなければ其位の事は言ひ得ないでせう。

福田氏。　然らば其點はセミヨノフの一家言として捨て去るとして次に、伺ひ度い事は、露西亜が不平等條約を棄てたと云ふ一點丈けで、廣東側が露國と共鳴して居るのですか。露國の側として見れば唯だ單に國際的に虐げられて居る支那を援けてやると云ふ意味丈けでせうか、其れとも、露國の南方支那を助けるのは、世界革命の同志として、而して支那の革命を世界革命の一の實行として助けると云ふのでせうか。

戴氏。　貴方は革命の氣分と、革命の實際の利害と云ふものを‥‥

福田氏。　露國としては、支那革命を世界革命の一部と見て居るのではないか否かを伺つたのです。

戴氏。　世界革命と云ふものは、可なり複雜にして簡單な問題でない、大體今日の支那の立場は、支那の革命と云ふのをどう云ふ意味に見て居るか知らぬが、現在支那では此全世界の國際的壓迫から解放されたいと云ふのが、支那國民の現在の漠然たる考、又漠然たる希望である。而して此の漠然たる考へは即ち支那に取つて一番必要であり確實である。

福田氏。　支那が帝國主義的諸列强の壓迫から逃れる爲めには世界革命に依るの外はないと露西亜は敎へつゝあるのではありませんか。さうでなければ彼等は自分の説を立てたものと云はねばなりますまい。露西亜は俺の國だけは不平等條約を捨てるが、他の國は帝國主義の國であるから、世界革命の洗禮を受くるにあらざれば決して不平等條約を捨てるものでないと說きつゝあるのではありませんか。

戴氏。　若し他の國々が不平等條約を撤廢しないと云ふ事が存在してゐる以上は‥‥

福田氏。　不平等條約の廢棄だけですか。

戴氏。　今吾々が現在求めるのがそれです。

福田氏。　それは極く手近かな昔のブルジョア政治家が言ひさうな事ではありませんか。‥‥革命家のあなた方は、日本の前の條約と同じ位なことで滿足してゐるのですか。

戴氏。　滿足してゐるかゐないかは、あなた方思想家の問題で、吾々現在實際の政治に觸れてゐる者は、現在、現實と云ふものを尊重し

て行く。今吾々の一番必要とするのは是であるから、現在此責任を果すと云ふのが即ち‥‥

福田氏。 それぢや支那の革命黨の理想と云ふものは、現在世界に於いて自由なる發言權さへ得れば其れで足れりと云ふのですか、それならば遠き將來を待たずして出來ることぢやありませんか。あなた方は唯だそれだけのことの爲めに革命と云ふ大事業をやつてゐるのですか。

戴氏。 それはあなたの考で、學者としては‥‥

福田氏。 學者の問題としてでなく、あなた方の現實の問題として、私共はあなた方が、もう少し大きな理想に依つて動いてゐるのぢやないかと思つて居ます。少くとも南方支那の幹部の人達は‥‥

戴氏。 それは理想と云ふものは大きい理想を持つてゐませう。

福田氏。 民衆に分つて居らぬけれども、革命の幹部の人位は‥‥

戴氏。 併し私共が現在どう云ふことを負擔して居るかと云ふと、現在吾々は政治上の責任と云ふものを帶びてやつて居る。政治上の責任を帶びてやつて居る人が、現在の必要と云ふ以外に吾々の實際の仕事がない。

福田氏。 後藤さんはどんなことをしたか、阿片政策が成功したと云ふのは、單に小手先が器用であつたと云ふばかりではあるまい。後藤さんでなくても、もつと詰らない政治家でも、多少もう少し遠い事を考へてゐやしないかと思ふ。況んや革命の中華民國と云ふものは可成り高い理想を持つてゐるものだと思ひますが、如何ですか。

戴氏。 それは即ち私共が主張してゐる所の、三民主義の高い理想である。吾々は此の理想を、單に支那に行はうと考へてゐるのみならず、之を他の國、他の民族にも及ぼすと云ふのが、吾々の理想です。是は單に理想でなく、世界の色々な國に依つて、──それ等は稱へる所が違ふかも知れないが、世界の現在の實情が、總て三民主義に依つて支配されてゐると吾々は觀て居る。

福田氏。 あなた方が露西亞の革命思想が、世界革命であること、而して其れはあなた方の三民主義とは違ふことが分つた時には、今度東に働いてゐる人なり、其後に立つてゐる人々とあなた方とは非常な衝突をすることになりはしないか、三民主義と世界革命の思想とは兩立しないことになりはせぬか。

戴氏。 私は少くとも此問題は餘程遠い將來の問題であつて‥‥

福田氏。 私共はそれは決して遠き將來の問題ではないと思ふ。

戴氏。 若しあなたが、所謂客觀的社會と云ふのを見るのであるならば、若しあなたが、遠くない將來の問題であると見るならば、現在の世界に於て、現在起るべき矛盾があると云ふことを認めるのですか。

福田氏。 矛盾を認めるのです。其の矛盾が第一に中華民國に於て現れやしないかと云ふことを‥‥

戴氏。 あなたの理想がそれで、他の‥‥

福田氏。 私の理想の問題ではありません。私の伺ひ度いのは、今支那を動かしてゐる所の一番高い理想は何處であるか、其れが中山先生の三民主義であるとしたならば、此三民主義は、實質に於ても、理想としても、露西亞の世界革命の理想とは兩立しないものではな

いか。實行上に於いては或程度までは一致しませうが、ずつと行くと兩立しない。一致するものでないに相違ないと思ふが如何です。

戴氏。　此の問題はあなた方の机上の批評であつて、實際の事實問題はもつと具體的に考ふべきことであつて、吾々が現在は……

福田氏。　現在の事實はどう云ふ風なものか私は詳しいことは知らないが、革命を始められた國民黨が出來てからは、無論理想に依つて導かれて居るに相違ない。元來中山先生の三民主義は、露西亞の革命主義には少しも觸れて居ないのである。問題は極めて徹底して居る。露西亞に結ぶやうになつたのは、三民主義の實現の道程の一階段に於て結んだであらうと思ふのですが、或る所まで進んで行つた後には、折角支那を援ける露西亞が、あなた方の敵になりはしないかと思ふ。

戴氏。　現在私はさう思ひませぬ。

福田氏。　露西亞の人は彼等自らの理想を持つて居る。あなた方は三民主義を持つて居る。兩者は結局相容れないのではないか。

戴氏。　是で一致し得ないことはないと思ふ。現在の世界に於て、そこまで衝突が起ると云ふことは、餘程遠い將來の問題であつて現在はもつと大なる矛盾が存在して居ると思ふ。

後藤氏。　遠い將來に於て何か起ると云ふことになるか、起らぬと云ふことになるかと云ふのが……

戴氏。　是は餘程遠い將來の問題である。現在の支那革命の責任を帶びて居る吾々が、そこまで心配しなくても宜い。將來の問題は、將來の人の責任であると吾々は考へて居る。

福田氏。　私は左樣は思はぬ。遠い將來の事ぢやない、着々と事實の上に現れて來ると思ふ。世界革命主義の實行と、三民主義の實行とが相衝突すると云ふことが着々現はれると思ふ。

戴氏。　恐らく現在はアジアの總ての國々に依つて、特に印度ペルシヤから、トルコまでの總ての實情に照して、現在如何なる理想があるにしても、現在ではアジアの各民族が、自分の獨立を全ふし、自分の生活改善を先づ圖つてから世界の事がどうなるかと云ふのが、——詰り其國の生產力が或程度まで進んで來て、共に世界の全體の問題を……

福田氏。　露西亞の人々は、國民の生產力を進めるには、政權をプロレタリア、無產階級の手に取らなければ出來ないと斯う見て居る。生產力の促進と云ふ手近な問題を解決すべく無產階級に政權を取らねばならぬ。然し其政權なるものは決して斯くあるべきものではない。先程から承ると戴さんは支那の國家が強くなり、統一したものが出來ると云ふことが、是が當面の大きな問題だと力說して居られる。此れは日本人も大抵云ふ所である。然るに、露西亞の人はさうぢやない。所謂國家と云ふもの、即ち戴さんの力說せらるゝ樣な國家なるものは、無產階級が政權を取つた時に無くなつて仕舞ふ可きものであると主張する。國家と云ふ形があるだけで、其れは結局、無くなる可き道行をふみつゝあるものである。無產階級が政權を取ると云ふ革命が起れば、國家と云ふものゝ正味は既に無くなつて仕舞ふ。國家は唯だ風袋だけのものとして餘命を保つに過ぎない。斯う言ふのです。然るに戴さんは支那の國家をして強い統一した國家

たらしめんが爲めに、阿片の嚴禁もやつて見ると仰つてゐられるが、露西亞は國家をして結果無權力なものたらしめんが爲めに、無產階級をして先づ政權を奪取せしめ、之れによりて經濟的の絞り取り制度の漸廢を實現せしめる、其過程として暫時無產階級獨裁の國家を認めると言ふのである。兩者相容れざること氷炭の如くではありませんか。

戴氏。それは露西亞の主觀的考えであつて吾々は客觀的にさうは見て居ません。ロシアの現實がさうではありません。

福田氏。いや私は現實も大部さうなつて來てゐると思ふ。

戴氏。吾々客觀的には、露西亞を一個の國家として見てゐます。露西亞と支那との關係は一つの國家と國家としての關係でしかない。……おそらく私は日本が維新革命によつて出來た國家と私がいふ國家とは餘程違はない氣がする……勿論國家の根底は違つてゐます、日本は帝國であり支那は民國であるから……

福田氏。……それは政體のことだ。國家たる所以に於ては日本も英吉利も、獨逸も佛蘭西も同じく國家である……

戴氏。露西亞の國家も、私共の考えてゐる意味に於ては、左程他の國家と違はないと思ひます。自分で主觀的に違つてゐると主張するだけで、事實は余り違つてゐないと思つてゐる。

福田氏。それは間違つてゐると思ふ。私は一昨年數週間露西亞に滯在して見ました、元よりホンの瞥見ですが、露國は決して單に宣言斗りして居るのではない、少くとも其主張を實現したいと云ふ誠意は充實して居ることと觀察した。單に主觀的とのみ輕視することは當らないと思ふ。尤も其れは見る人によつて色々に解釋せられるだらう。然し少くとも、一の固い信念として、一の實現せらる可き理想として、露國の指導者を導きつゝあるは勿論、民衆も段々教育されて、所謂プロレットカルトによつて——其れは色々な工夫を以てなされて居る——此信念は、段々擴まりつゝある、決して減退することはないと、私は觀察した。其れでなければ今日まで幾多の困難を排しつゝ兎に角彼れ迄來ることは、不可能であると信じて居る。

戴氏。いや私は矢張り、國家そのもの實質からは大して違ひないと思ひます。

福田氏。餘り長くなると、次の點に移れぬから、右の話は、他日の再考を期して、次に支那と日本との關係について戴さんの御意見を伺ふことにします。戴さん、貴方は、日本と親交を結びたいとおつしやるが、日本は資本主義の國であり對外的にも帝國主義の色彩がないとは云へない。そして日本はそれを脱却し得ない國柄であるかも知れない。貴方はその日本に對して、本當に心から親交を結んで、兩立して提携して行くといふ考えですか、何處かで露西亞に對するのと違つた關係に於て、矛盾が起りはしませんか。

戴氏。そのお議論は、理論としてはさうもありませうが、社會と同樣に、國家關係はさういふ單純なものではなく、又一時に凡ての問題が解決し得るものでもありません。支那が、露西亞の關係と、日本との關係との間に大した解決し得ない矛盾もないと思ひます。現在日本が支那に對して不平等條約を撤廢すれば三國間の關係は總て比較的圓滿に行くに違ひないと思ひます。

福田氏。根底から違へばどうしても一緒になれるものではない。單に不平等條約を撤廢したり、租界を返還したりなどした丈けで、永遠の親交なるものが得られるものとは思はれない、永遠に兩立す可き基礎が確立せられなければならない。日本の發展が帝國主義的、利權侵略的であるとするならば、決して眞正確固たる日支の親交は望み得られないものではないか。結局先へ行つて衝突するものなら、親交々々と今骨折つて見たとて何にもならぬ樣に思はれる。此點は支那の問題たる斗りでなく、あなた方の日本に對する高等批評として伺ひ度い。

戴氏。人間各自の生活、思想、性質は勿論違つてゐますが、併し皆な共通點があります。人間の總ての交渉が接近して來るのはその共通點の接近があるからではないでせうか。その接近の爲めに全然同じ人間になつて仕舞ふことはあり得べきことではないと思ひます。

福田氏。共通點と云へば、現在の英露關係が其れを持つて居りはしませんか。英國は帝國主義の國であり、露國は帝國主義と戰はんと覺悟して居る國である。又支英關係も段々其れに近いて來たのではないか。露英の關係が緊張して來つゝある。支英の關係も緊張せんとしつゝある。此歴史は他日日支間に繰返される虞はないか。共通點と云へば寧ろ此邊に存して居るのではあるまいか。即ち帝國主義の國同志は一の共通點を有ち、非帝國主義の國同志は一の共通點を有つ、此兩者の間には、共通點處か共敵點が永遠に殘る。然し帝國主義の甲國と乙國とは互に衝突する如く、非帝國主義の甲國と乙國とも互に衝突すること無しとは云へぬ。共通點があると云ふことは、凡てに一致すると云ふことを拘束するものではあるまい。

戴氏。私は今、英吉利國民に對して何等反感を持つてゐません。若し英吉利が、今まで支那に持つてゐる一切の特權、特に政治的特權を捨てゝしまへば、支那と英吉利國民の間に何等の隔てはありません。

福田氏。英國は帝國主義を捨てたくとも捨てられない國である。支那に於て帝國主義を捨てなければならなくなれば止むを得ず一時は捨てるでせうが、英國は現在の儘である限り腹からそれを捨てることは出來ない。とロシア人は見てゐる。貴方はさうは見えませんか、戴さん、あなたは英吉利が腹から帝國主義を捨てると見てゐますか。

戴氏。それは現在支那の政治問題としては打算しません。それより以上の世界の問題を現實問題より以上の思想問題として解決することは、思想家の爲すべきことで、吾々は一時的に悉く一切の問題を解決し得ると見てゐません。

福田氏。大體分りました。現實の政治に囚はれないで、高い理想を掲げて、その精神を皷吹しつゝある點に於て露西亞の傾向は吾々も好ましいと思つてゐる。——が實行の點に於ては最近の露西亞は滅茶苦茶です。先づ一つもとり得る點がない。しかし兎に角一の高い理想を掲げてゐるといふことは實に感服します。其理想には私は決して感服しませんが、理想に對する態度には敬服せざるを得ません。私はあなた方が單に手近な政略にのみ沒頭せず、高い理想によつて動くこと其の如くならんことを切望して已まないもので、此點

に於て中山先生に深く敬服するものです。但しあなた方が中山先生の理想に忠實なる限り、結局あなた方と、露國とは離るゝことになることを思はざるを得ないのです。

戴氏。　この點について日本人が充分に考へてほしいのですが、吾々の標榜してゐる三民主義は理想として立派なものであり、又支那に於て現に確立し得る理論であり、又確立し得る實質であるのです。

福田氏。　中山先生の三民主義は理想として立派なものだと思ふ。がこれは露西亜の理想とは兩立しないものだと思ふ。

戴氏。　そこまでは……

福田氏。　ほんの僅かな處で一致してゐるので、ずつと行けば當然に離れてしもふものだと思ひます。その時露西亜との關係……

戴氏。　私は實際家ですから、實際を尊重します、そこまで來るのは餘程將來の問題であつて、少なくとも現實の總ての事實に徴しては、兩立し得ない程のものとは思ひません……

山本。　大變面白いお話で……時間があるとよかつたのですが、戴氏が六時から他の會合に出席される約束がありますので——もうその時間を大分經過してゐますので今夜の談話會はこれでおしまひに致します。——非常に御迷惑をおかけ致しました。

戴李陶氏附記

今度改造社の折角の招きで充分に話をする積りであつたのがどうも初めから議論の限度が決つて居ない爲めに色々の雜談で時間をついやして仕舞ひ而して一番議論の要點になつてる處は速記者の記錄が不充分であつたのと未だ結論になるまでの話が進んで居ないのとで充分に相互の意見を盡して居らなかつた。然し私の意見を是非系統的に改造に發表してもらひたいのですから少し暇が出來ると直ぐ書くからなるべく五月號にまに會ふ様に致します。

日本の維新の刺激に由つて支那國民が中華民國の國體を作り上げたが名義だけであつて實質は未だ上らない。世界戰爭の結果全世界に瀰漫して來た處の民衆の自覺運動——社會運動と民族運動は支那の國民に一層實際的刺激を與へて中華民國の實質を與へつゝある。今支那は全世界の帝國主義的列强のあらゆる矛盾の中心になつて居る支那の國家的民族的解放が完全に出來ない以上は全世界は凡て最も不幸なる暗雲につゝまれて居る。故に支那の國民革命運動は小にして支那を拯ひ大にしては世界を拯ふ運動である。私は充分に信ず三千萬の日本民族の獨立と云ふ大業の成功は亜細亜諸民族に非常なる助力を與へたが四億五千萬の支那民族の獨立運動の成功は全世界の人類解放に必ず非常なる助力を與へるに違ひない。强權と云ふ鎖は文明の創造に力になるでせうが文明の共享を要求する民衆の力は必ず强權を打破するのである。支那民族は今意識的に自分の民族を拯ひつゝあり而して無意識的には全人類を拯ひつゝある。車同軌、書同文、行同倫、と云ふ物質的大同運動は確か今日の凡ての國民運動の基調をなして居る。此れは決して矛盾ではない小より大に少數より多數に異より同に特殊的より普遍的に進む社會的進化の原則は充分には吾々に確信を與へるのである。

七年振りに日本に來て日本の民衆が非常に進歩したのを見て悦んだ

勿論滿足にはなりません然し滿足し得ない處は世界進化の眞なる目的が存在し大なる力量が存在する、お互に努力しよう。　草々

戴季陶附記　三月十日　アタミホテルにて

一、支那國民とロシア國民との親交は不平等條約撤廢の上に建立したのであつて全世界の國家が不平等條約を以つて支那を束縛して居る以上は他の國民と平等なる親交を建立する仕樣がない。日本と支那との關係は歷史的、文化上血統上の關係を充分に持つて居り特に近代に於いては經濟的需要供給の關係に由つて密切の度を加へて居る。若し兩國間に於ける親交を眞に建立せむと欲せば不平等條約の撤廢より始まるではないのか、此れは支那國民の日本に對する親切なる希望である。

二、政治組織、又社會組織が行きつまると革命が興る、支那民族は南京條約以來、凡て行きつまつて仕舞つた、故に革命が興るのは自然の結果である、革命の完全に成功するでなければ決して中止し得るものでない。今支那の革命の力は中國國民黨に由つて組織し指揮して居る。全國が中國國民黨に由つて完全に統一する日がもう既に來つゝある。

三、今日全世界の問題は民族問題、民權問題、民生問題以外にない此れに根本的而して統一的解決を與へるのは三民主義の原則である國民黨の奉持してる三民主義は一個の最も事實的實際的革命理論にして國家又社會建設の原則である。其の實際の建設政策は中山先生の建國方略に書してある、諸君の一讚を乞ふ。　忙中再記

◇支那人の好む鬪爭

ポスト(ワシントン)紙所載

ロシアや日英其他の列弟にけしかけられて、支那にはいつても内亂が絕えない。ただアメリカ人だけが、それを苦々しい事と心配してゐる。



思想の正統性と異端性

恒藤恭

一

思想の內容を成す諸々の意味は、思想から抽象されて其れ自身に存在するものと考へ得られるであらうけれど、思想が現實の世界との交渉を有するものとして視られる爲には、個々の經驗的主觀、即ち個々の人間の意識のうちに內在して居るのでなければならぬ。但し個人の意識に內在する思想はすべてその個人の思想であるとは言へない。甲、乙、丙等の個人の意識の內容をしらべて見て、各自の意識に內在する思想を悉く摘出し得たと假定しても、それだけでは、甲、乙、丙等がそれぞれ如何なる思想を抱くものであるかを知ることは出來ない。一定內容の思想の上に『甲の思想』、『乙の思想』、『丙の思想』といふ如き烙印が捺されるのは、その思想が或る一定の時において甲、乙、丙の人格の構成要素の一つとなつて居ることを意味するのであつて、一定內容の思想と其れを把握する主觀の人格的個性との關係において初めて、何人が如何なる思想を所有するかが認識されるのである。

一定內容の思想を個人の人格の構成分子として攝取する機能をいとなむものは、その思想を肯定し又は是認するところの意志の作用に他ならぬ、或る思想の內容の何たるかを理解する知性の作用と雖も、斯かる理解を獲得せむと欲する意志の作用の根柢の上に成り立つものではあるけれど、この段階にあつては、意志は謂はば知性の背後に潛みつつ、知性をして意識の舞臺の上に働かしめる。意志がみづから此舞臺の上に現れ來り、その內容について理解を獲得した或る思想を肯定するとき、後者は意志の主體たる人格の內包に融入するのである。斯かる肯定の作用其者は、さまざまの複雜なる事情によつて左右されることは勿論であるけれど、根本において其作用の主體たる個人の人格の個性によつて制約されるものであり、それ故にこそ、斯かる作用に因り、或る思想は新たに該個人の人格の構成分子たる屬性を取得し、彼の個性の成長における一因素たり能ふわけである。

個人の人格の構成分子として採擇された諸々の思想は、互ひに有機的なる關聯を保ちつつ個人の人格の內面に存立し、彈力性に富んだ動的體系を形成する。一つの思想が新しくこの思想體系の中に加入する

とき、又は從來この體系內に存在してゐた一つの思想が其中から除却されるとき、全體系はこの事實に對して何等かの活動と反應とを示さねばやまぬ。すなはち一定內容の思想は或る個人の意識に內在して彼の人格的個性の一構成分子となると同時に、彼の全精神生活と共に生き、何等かの程度において後者の存立發展に參かる運命を荷ふに至るのである。

だから、甲なる個人が一定內容の思想を肯定するとき、若しも乙なる個人が同一內容の思想を抱いて居るとするならば、之を乙の立場から見れば、甲は間接に乙の人格の一構成分子を肯定することを意味するわけである。この場合に、人間の心理的性狀の一つの現れとして、乙は甲の爲した肯定に向つて滿足の感情をいだく傾向をもつ、之に反して、右の思想を甲が否定する場合には、乙は甲の否定に向つて不滿を感じるのが普通である。そして人間に通有な弱點として、乙は自己の人格の或る一部分に向つて加へられた肯定又は否定を、やゝともすれば自己の人格のより大なる部分に對する肯定又は否定として意識し易く、更には、自己の全人格に對する肯定又は否定として意識しがちである。それに應じて乙の意識する滿足又は不滿の感情は增大するであらう。而して問題たる思想が、乙の人格の內面的構造において比較的重要なる地位に在るものであればある程、甲の肯定又は否定に對して乙のいだく快又は不快の感情はより多く昂揚するのである。

次に、右の事柄を甲の人格に結びつけて考へるならば、甲が乙の抱く一定內容の思想を肯定し又は否定するのは、根本においてはやはり甲自身の人格的個性の制約の下にさうするのであつて、甲が乙の所有する或る思想を是認し又は否認するのは、甲の人格の中に乙の人格の構成分子と或は一致し或は相容れざる構成分子の存在することに基くわけである。だから甲が乙のいだく或る思想を肯定し又は否定するとき、乙は一方には甲による自己の人格の部分的肯定又は部分的否定の意識からして快又は不快を感じると共に、他方には自己の人格と部分的に一致し又は一致せざる甲の人格その者に向つて親和の感情もしくは反離の感情をもつにいたる傾向を存するのである。

この場合に、乙が甲の肯定を肯定し又は否定する態度、又は甲の否定を肯定し又は否定する態度を表明するならば、甲は斯かる乙の態度に對し、乙が甲に向つて有つ感情に平行した快又は不快を感じるであらう。かやうにして甲が乙の思想を肯定し又は否定するといふ事實に基因して、甲と乙との間に親和の關係又は反離の關係が何等かの程度及び何等かの持續性において成り立つに至る傾向のあることを、吾々は經驗によつて知るのである。

一般に人間と人間とが接觸し交涉する處において、その間に親和又は反離の現象の成り立つとき、その一方又は雙方が他方の所有する思想を肯定し又は否定することが、斯かる現象の成り立つに至る原因たる場合は決してすくなくない。思想の正統性と異端性との問題は、かやうな社會的事實と關聯して發生するものである。

二

甲なる個人の意識にあらはれたAなる思想が、甲の人格的個性の制約の下に肯定されることに因り、思想Aは、甲の人格の內包の中に攝取

されて、甲の思想となる。この場合に甲が思想Aを肯定するのは、甲がAに對して一定の立場を執ることによつて可能とされるのであるが、其際、この立場が單に自己の人格的個性の要求によつて支持されるものと、甲が意識する場合と、この立場が更に何等かの權威によつて正當とされるものと、甲が意識する場合とが、區別しえられる。

簡單なる例をあげるならば、甲が何か葡萄の果を食べた經驗にもとづいて、『葡萄の果はうまい』といふ意識を得、かやうな思想を肯定するとき、其れは甲の思想の一つとなり、たとへ重要性の甚だ微小なものであるとは云へ、甲の人格的個性の構成分子の一つとなる。かやうな場合には、普通には、甲は『葡萄の果はうまい』と云ふ思想が自己以上の何等かの權威によつて支持されるものとは考へぬ。何故にぶだうの果はうまいと思ふかといふ問を受けたならば、葡萄の果はうまいと思はざるを得ないことの理由を、甲は結局自分みづからの嗜好に歸せざるを得ないであらう。甲をしてぶだうの果をうまいと思はせる所のものが、甲の自我その者の裡に存在し、『葡萄の果はうまい』といふ思想において自己を表出するのである。だから若しも乙なる個人が『ぶだうの果はうまい』といふ甲の思想を否定して、『ぶだうの果はまづい』と主張したところで、甲はかやうな乙の主張に對して抱く不滿の感情を、彼自らの思想を支持する何等かの權威と聯絡し、斯かる聯想から生まれる不滿の感情を併せ持しつつ乙に向つて或る態度に出るといふことを爲さぬであらう。

次に例へば、『豐臣秀吉は偉人である』といふことを教師から教へられた生徒丙が、それ以來、『豐臣秀吉は偉人である』といふ思想をいだいて居るとすれば、丙はこの思想の肯定を新たに反覆すべき機會の生じる場合には、この思想を彼にあたへた教師に向つて彼の認める權威に想到し、彼の爲す肯定の力强さを感じるのである。それ故、若しも丙の友人丁が『豐臣秀吉は偉人ではない』と斷言するならば、丙は、自己の人格の一構成分子に向つて加へられた否定に對して不滿と反感とを感じるばかりでなく、彼の思想を支持する教師の權威に向つて間接に加へられた否定に對しても亦ひとしく不滿と反感とを覺えるのである。

個人が何ものかに向つて權威をみとめるのは、彼が其者を意識にのぼせるときに、其者に向つて尊嚴の感情をいだかざるを得ないこと、而して其者が何事かを彼に要求するとき無條件にこれに服從せざるを得ないといふ感情をもつことを意味する。だから、思想に關して個人が何ものかに向つて權威をみとめる場合には、其者によつて或る思想の肯定を要求されるとき、個人はその儘にその思想を肯定せざるを得ないと云ふ感情をもつのである。しかも斯かる服從は彼みづからの人格的個性と牴觸するものではなく、かへつて後者と調和し合致する。けだし彼をして何者かに向つて權威を認めしめるものは、彼自身の人格的個性に深く根ざす要求に他ならぬからである。或る權威の要求にしたがつて或る思想を肯定するとき、個人は之によつて自己の人格内容に一成分を加へたことを意識すると共に、この採擇を基礎づけるところの權威が新たに增加された自己の人格の一部分に光彩をあたへることを信じる。この光彩は權威の源から發出して個人の人格の一部分に附着し、個人がその權威を承認する限りは、個人の意識における礎

固たる事實として存在する。だから個人が或る權威の承認にもとづいて一定內容の思想を有する場合に、他人が之を否定するときは、個人は自己の人格の一分子が其れに附着せる超自我的光彩と共に否定されることを意識して、複合的なる不滿の感情をもつのである。

『ぶだうの果はうまい』といふ思想の眞實の意味は、『或る個人にとつてぶだうの果はうまい』といふことにある。だから斯やうな思想の正當性については、その個人が最高の審判者である。之に反して、『豐臣秀吉は偉人である』といふやうな思想の正當性については、各人は他人に比して無條件により高い審判者である筈はない。かやうな思想の正當性の判定に關して個人が或る者の權威をみとめるとき、個人は後者の判斷が自己を超越して妥當することを信ずる、そして斯かる超越性はひとり自己にとつてのみならず、また他人にとつても存立するものと思ひ込む傾向をもつ。そこで、自己にとつて權威ある者の判斷にもとづいて個人が承認するところの思想と、他人が否定する場合には個人は他人の人格の內面に、承認す可き思想を承認しやうと欲しない所の性向の存すること、すなはち權威ある者の權威に服從せざらむとする所の性向の存することを意識し、斯かる意識からしても亦その他人に對して不快の感情をいだく傾向がある。反對に、他人が斯かる思想を肯定するときは、まさに肯定すべき所のものを肯定せむとする正しい性向が、その他人の人格的個性の一成分として存在することを意識して、個人はその他人に對し親しさ賴もしさの感情をいだく傾向がある。

或る個人が何等かの權威によつて基礎づけられた立場からして一定內容の思想を肯定するとき、この思想は彼にとつて正統的であり、この思想と相容れざる思想は彼にとつて異端的である。或る時に或る個人の有する諸々の中で、何等かの權威によつて支持される立場において彼の承認する思想をえらび出すならば、彼にとつてこの正統的思想の特有なる體系がおのづと姿をあらはすであらう。かやうな思想の個性的體系は、個人の精神生活の發展につれて、その內容の變動を來すものであり、これと平行して、個人にとつての異端的思想の存立範圍もまた變動を受けるのである。

三

自己の有する一定內容の思想を他人が肯定するときは、個人はその他人に向つて親和の感情をいだく。斯かる他人の數が增加するにしたがつて、個人が親和の感情を寄せる他人の範圍は擴大する。この場合に、その思想が個人にとつて權威づけられた思想であり、且つ他の人々にとつても同じ意味において權威づけられた思想であるならば、その思想の正統性は此れらの人々を範圍として成り立つわけである。

尊嚴の感情は人間の意識の底深き內面から湧き出る感情であり、個人の人格的個性の核心的部分の色彩を意識の表面に反映する感情である。人が何に向つて尊嚴の感情を寄せるかといふことは、彼みづからが如何なる尊嚴に値するかといふことを、反射的にあらはす。だから個人が尊嚴の感情をささげる對象について、他人がその尊嚴性を否定するならば、個人は自己の心奧に地位を占める所のものを冒瀆されたと云ふやうな意識をもつ。逆に、他人が同一の對象に向つて尊嚴の感

情をそゝぐことを意識するときは、個人は一方には尊嚴に値ひする所のものに尊嚴の感情の寄せられることについて滿足すると共に、他方にはその對象に自己が尊嚴の感情を寄せることがいはれのある心の働きであるといふことの保證を得て、一種のこころ安らかさを覺えるのである。

人は新しい思想を絶えずわがものとすることによつて、自己の人格的個性をより豐かならしめることを希望するが、他方には過去の精神生活の果實として現に成り立つてゐる自己の全思情の中の核心的部分、即ち自己にとつての正統的思想の體系をば、なる可く其儘に保持せむとする欲求をもつのが普通である。だから、一度或る權威づけられた思想をわがものとした後は、他人も亦その思想を肯定する事實によつて、その思想の正當性に關する信念をより强固たらしめむと欲し、新たに或る思想を權威づけられたものとして獲得するに當つては、他人も亦その思想を承認するか否かの事實を明かにして、正當性の疑はしい思想をわがものとする危險をなるべく避けやうと欲する。個人がこの點について他人の肯定を重んずれば重んずるほど、肯定作用の主體たる他人の數のなるべく大きいことを望むわけである。

一定内容の思想の正統性をみとめる人々は、おのづと相互の結合せむとする傾向をもつものであるが、この心理的傾向にもとづいて何等かの程度の客觀的結合性をそなへた集團が、それらの人々の間に成り立つときは、その思想はこの集團にとつてこの正統的思想となり、之と矛盾する思想はこの集團にとつての異端的思想となる。自己の有する思想を肯定する他人の一群が集團の形態をとつて現れるとき、自己の正統性についてのその個人の信念はより强固となると共に、これを容れざる思想を異端視する個人の感情は一層はげしくなるの傾向をもつ。

或る集團が若干數の正統的思想を支持するときは、その集團の正統的思想の體系が成り立ち、或る期間この體系が存續するときは、その集團の傳統は權威づけられた自己の思想を其儘に維持せむとする個人の欲求の社會的對應物であり、かやうな個人の心理的傾向の基礎の上に、集團の傳統は確固たる存立を續けて行く。

或る思想が或る社會單位において永き時期にわたつて存立する事實は、その思想に對して權威の外觀をさづける。新しい思想のもつ魅力と清新さに對應するものを、古い思想は威嚴と堅實さにおいて個人の意識に訴へる。集團に屬する個人は、集團その者に向つて超越的權威をみとめやうとする傾向をもち、集團が永きにわたつて存續すれば、個人は一層この傾向を强くする。かくして集團の傳統的思想は、それに屬する個人にとつて、十分に權威づけられたものとして意識される次第であり、他面において、傳統的思想と矛盾する思想は、集團の側の人々にとりて、忌はしきもの、憎むべきもの、呪はしきものたる性質を増大するわけである。

四

或る集團の傳統的思想を否定し、これと相容れない思想を肯定する人々が、他の集團を形成して居るときは、前者は後者を目して異端者の集團となし、後者の有する傳統を異端的傳統として敵視する。

集團Aに屬する個人甲は、Aにとつて異端的なる傳統をもつ集團Bに向つてはその權威をみとめるものでないけれど、一般に個人は集團が自己に對して優越せる威力をもつことを感じる傾向がある爲に、集團Bが集團Aに傳統的思想を否定するとき、甲は斯かる集團Bの否定を以て權威ある否定と認めないにも拘らず、何となく其れが自己を壓する力をもつことを意識する。そして個人は、集團Bの態度により、自己の集團の權威の光耀に或る陰翳が加はること、自己の集團の存立及び利益が侵害されることを感じる。かやうな個人の意識が集團Aの集團Bを異端視する態度を規定する。すなはち集團Aは、自己及び相手方Bを超越すると信ずる所の權威の名において、集團Bの傳統的思想の無權威さ、無價値さを主張し、自己の傳統的思想の正當性を主張することに努める、且つ能ふかぎりの集團Bの勢力を減損し、又は後者の存立その者を滅却することに力をつくす。これに對して集團Bもまた集團Aに對して同樣の態度を持し同樣の努力を行ふのである。

集團は正統者としての立場から自己にとつての異端者たる外部の個人及び集團に向つて壓迫を加へるばかりでなく、自己の内部においても往々にして異端者を見出し、これに向つて壓迫を加へることを怠らぬ。

集團に屬する或る個人は、集團の正統的思想の全部を肯定することもあり、その一部分を肯定し他の部分を否定することもあり、その全部を否定することもある。第三の場合には、個人は集團の存立その者を否定するのであつて、若しも或る集團に屬する大多數の個人がかやうな思想をいだくに到るときは、その集團は崩壞する外はない。然らざる場合には、個人は若しも自己の意志によつて集團から脱退し能ふならば、それから脱退するであらうが、自由に脱退し得ないならば、集團に對して忍從的態度に出るか、又は抗爭的態度に出るであらう。集團の立場からは、かやうな意味での異端的思想傳播を防止し、能ふべくんば斯かる思想を根絶せむと努めるであらう。第二の場合において集團が異端的思想に向つてとる態度は、或は全く之を放任することもあり、壓迫につとめることもあるであらう。集團の正當的思想の體系について個人が否定せむとする部分が、その體系において重要なる地位を占めるものであるならば、集團は異端的思想の壓迫に力をそゝぐであらうし、また個人の否認する思想が、傳統的思想の體系において比較的輕い意義をもつものであつても、それの否認がもたらす實質的不利益が大きい場合には、集團はやはり高壓的手段をとらうとするであらう。而して集團に向つて個人が異端的思想を把持する場合に、彼が誠意をもつて斯かる態度をとるのである限り、集團がその異端的思想の把持又は宣傳に向つて加へるところの一切の壓迫手段は、その個人には不當なる迫害として意識されるであらう。

集團内の異端者の努力が效を奏して集團の傳統の一部分が除却され又は變革された場合に、從來斯かる努力に反對した人々がその反對意見を改めぬときは、此れらの人々の思想の地位は一變して異端性を帶びるに至る。他方には、新たに集團の正統的思想として採用された思想に向つて、更に新たなる變革を加へむとする思想が興起することもあるであらう。そこで、或る集團の内面に、復古的異端思想と、急進

的又は革命的異端思想とが並び存し、これらの異端思想が正統思想に向つて反抗すると共に、相互の間に爭ひを交へる狀態が發生する。この場合に、復古的異端思想は、以前に有つてゐた正統的地位の故に、急進的異端思想との關係において自己を正統視し、更には集團の思想をも異端視せむとするのである。

五

不偏なる第三者の立場から見て、或る思想を正統的思想とよび、これと矛盾する他の思想を異端的思想とよび、兩者をたがひに對立せしめることと自體には、兩者のいづれかを稱揚し、他方を貶下するといふ意味はふくまれてゐない。或る思想圏内における正統的思想と異端的思想との區別は、決してはじめから絶對的に定まつてゐる筈のものではなく、或る一定の立場からみて權威ありとされる思想を、その立場に即して正統的であるとなし、何等かの意味において之に反對する思想を右の立場に即して異端的であるとなすに過ぎない。

だから、どの立場から見ても、自己みづからの思想及び自己に追隨する思想はすべて正統的であり、自己に附和せぬ又は自己に反抗する思想はいづれも皆異端的である。さうした心持は、何時の世の如何なる立場を固持する人にも常に共通な心持である。即ち一切の權威をかざす者に向つて飽くまでも異端者としての矜りを持せむと欲する人々自身も、自分みづからの斯やうな態度を肯定する限りは、心ひそかに他の一切のいはゆる正統的なるものを、自己みづからの立場に對する異端として、外道として取扱ふことに、興味と快感とを覺えるものと言ひえられる。

かやうに考へて來ると、原理的には、あらゆる思想は、それを支持する立場と相容れない他の立場との關係において、或は正統的であり、或は異端的であるわけであるが、玆にその間に或る程度の絶對性即ち相對的絶對性ともいふべきものを有つ立場が固定され、その立場からして思想の正統性と異端性とを區別することが可能であり、また現實にも行はれてゐる。

個人と個人との結合關係において、この關係を成り立たしめる條件から見て、一方が他方に對し一般的に權威ある者として立つと思惟される場合には、かやうな地位に在る個人の思想は、その結合關係においては正統性を有し、之と牴觸する思想は異端性をもつ、たとへば親と子、兄と弟、戸主と家族、教師と生徒、師匠と弟子、親方と徒弟、上役と下役、主人と使用人、親分と子分などの個人的相互關係は、屢々思想に關して正統者と異端者との對立を生ぜしめる。一般に年長者は年少者に對して思想の判定につき權威ある者として臨まうとする傾向をもつが、右に擧示したやうな關係においては、一方の個人は他方に比して年長者である場合が多い、加ふるに一方の個人は、より多くの經驗又は勢力をもつ者、より優れたる知力又は技能をもつ者との意識において、自己の支持する思想を權威ある思想として把持し、他方をして無條件に之を肯定せしめむとする傾向をもつ。そして第三者としての一般人も斯かる態度を是認することに傾き易く、雙方の間の思想上の爭ひを正統對異端の爭ひとして考へがちである。

次に、一層一般的に社會的勢力關係といふ見地から考へると、社會

的勢力によつて支持される思想は、その社會的勢力と之れが支配に服する個人との關係においては、正統的であり、斯かる思想と相容れない思想は、右の關係においては、異端的である。しかしながら社會の內面にはいつも無數の社會的勢力が存在し、個人は諸々の社會的勢力の支配に服するのであるから、より廣い限界において思想の正統異端をわかつ標準が求められねばならぬ。

二個以上の社會的勢力相互の間に、勢力の大小の相違がある場合には、より强大なる社會的勢力によつて支持される思想は、この勢力に反抗する立場に在るところの、より弱小なる社會的勢力によつて支持される思想に對し、正統對異端の關係に立つものと考へ得られるであらう。今何等かの標準により一定範圍の社會を限界するとき、其處に比較的に最も强大なる社會的勢力を見出しうるならば、この社會的勢力の立場からしてその社會範圍內の思想の正統異端を識別し能ふわけである。かやうな限界方法の最も便宜なるものとして、地域によつて社會の範圍を劃するときは、國家の意志、支配階級の要求、及び民族的傳統精神の三者が、思想の正統異端をわかつための相對的—絕對的標準を與へるものとして見られるのである。限界方法を變更するにしたがつて、その他の分類標準が立て得られることは勿論である。

六

或る時代の或る社會範圍においては、其處に存在する最も强大なる社會的勢力の立場を基準として、政治、經濟、藝術、宗教、法律、教育といつたやうな諸々の文化領域にわたつて、正統的思想と異端的思想との區別を或る程度まで行ふことが能きる。これらの個々の文化領域において、社會的勢力が完全に統一化され、其れにより唯一つの思想方向が支持されるやうなことは、事實上ほとんど皆無であると言つても可い位である。この事實の由つて來る所以のものが何であるかは別問題として、一定の思想內容の定立は、それを否定する思想內容の反立を生み出す契機を包藏するといふ辯證法的論理的關係が、現實には人間の心理的性向を通じて、或る社會的勢力によつて支持される思想と、これに對抗する思想との爭ひとなつて現れるのである。同じ事柄を異なる角度から視て言ひあらはすならば、或る社會に存在する人々は、その社會における諸々の文化領域の各個において、相互に正統對異端の關係に立つ思想の群れの孰れか一方に就き、他方にそむかうとする傾向を示す。それは經驗的にあたへられた多樣の原因の複雜な結合にもとづくものであり、この點についての個人の去就に關し一義的なる解明をあたへることは不可能である。

諸々の社會的勢力によつて支持される種々の思想に對し個人が自己の態度を決する上に影響を及ぼす最も重要なる要素として考へられるのは、思想の內容その者に向つて個人が下すところの價値判斷である。斯かる價値判斷は、その思想を支持する社會的勢力に對し個人が現實に如何なる關係に立つかによつて、著しい影響を受けることは勿論であるが、この影響が全く決定的なものであると見るのは、經驗的事實に忠實な觀察であるとは言へない。

次に、個人は從來自己が從屬し來つたところの社會的勢力の支持する思想又はこれに近似する思想は、一般に之を肯定しやうとする傾向

をもつ。第三に、思想の內容の何たるかに拘らず、或る思想を肯定することが何等かの利益をもたらし、又は何等かの不利益を免れしめるものであるときは、個人はその思想を肯定せむとする傾向をもつ。

右のやうな條件に即して考へると、或る時代の或る社會において、或る文化領域に關して、個人が正統的思想に就くか、異端的思想につくかは、甚しく不定な事柄であると云ふ外はないが、或る種類の人々については、いくらか決定的な豫見的な、仕方で彼等の去就の方向を規定し得ないでもない。と云ふのは、或る種類の人々は、かれらの屬する社會の或る文化領域において、比較的に最も著しく正統的思想と銘を打たれてゐる思想に、いつでも無條件に附和し追隨しやうとする先天的心理的傾向をもつて居り、之に反して或る種類の人々は、比較的に最も異端性の鮮明なる思想に、いつでも躊躇なしに共鳴し左袒しやうと待ち構へてゐる事實を、吾々は經驗的に知つてゐるからである。

此れらの二種類の人々は、その赴かむとする方向が常に正反對ではあるけれど、かれらを牽引する思想の內容については寧ろ無頓着であり、唯その牽引される方向その者に興味と愛着とをもつといふ點に至つては、全くその趣を一にするものである。この種の人々は、前後のちがつた時期において、それが單に正統的であるの故を以て、又は單に異端的であるの故を以て、內容的に全く相容れない若干の思想を支持することを敢てする。もとより何時の世のいかなる社會でも、正統的思想であることの故に其內容の如何に拘らず之を肯定する人間は夥しいのであるが、その中には、ひとへに自己の利益のためにさうすると云ふのではなく、謂はば本能的にさうした態度に出る人間も少くないのである。

これらの人々が二つの相反對する思想方向のいづれかに對して感じるところの興味と愛着とは、かなり人間に本質的な心のはたらきの現れであるに相違ない。斯かる性情は種々の複雜な成分に分析しえられるであらうが、大ざつぱな云ひ方をするならば──正統的方向に引き付けられがちな人々は──好く言へば、素朴な人間、物事をすなほに受け容れる性質の人間、平和と安樂とをよろこぶ人間、順調な生活過程と明るい生活氣分とをこのむ人間に屬するものであり。惡くいへば、獨斷的な人間、長いものに卷かれろといふ事大主義の精神に富む人間寄らば大樹の蔭といつたやうな自己保身の途に專念する人間、虎の威を借る狐と同じ意味により高い者の後光を身に被ることをたのしむ人間の範疇に屬するのである。反對に、異端的方面に吸ひ寄せられ易い人々は、惡くいへば、ひねくれた人間、陰慘な生活環境と不安な、落ち着きのない生活基調とに耽溺する人間、事實の暗黑な方面、缺陷にみちた方面に對して感覺のするどく働く人間であり、よく言へば、批判的な人間、懷疑と省察と徹底とを愛する人間、世俗的權威に眼をくらまされぬ人間、いつ迄經つても現在に與へられたものに滿足しないで、絕えず何物かを未來に向つて期待する人間なのである。

これらの二つの類型のいづれにも偏しないで、各者のそなへる良い素質、良い氣象を併せもつことが、理想として望ましい事柄であるし、人間全體の歷史から見て眞に意義ある破壞と建設とは、さうした條件をそなへる人々によつてのみ遂行され得るのである。

七

傳統的思想は民族の統一を確保する最要の條件を成す。民族の思想の一様性に動揺を生じ、懐疑的精神があらはれ、傳統的思想の內容を變革せむとする努力を生じるときは、民族は傳統的思想の權威を擁護し、異端的思想を抑壓するための反動的努力を行ふ。この場合に異端的思想が、民族の外部における社會に存在するところの思想と內容において一致し又は類似せるか、又は後者の直接又は間接の刺戟に因つて發生したものであるときは、民族に固有する排他的本能が民族の反動的努力に氣勢を添へるのであつて、異端的思想は民族自身の歷史的發展の方向に條件付けられて發生したものであると否とに拘らず、偏へに外部より侵入せる思想たるものと視られ、外來的異端思想の名目において排斥さるのである。しかしながら、民族は新たなる社會的歷史的環境に自己を順應する作用を行ひ、外來的たると否とを問はず價値ある異端思想を自己の正統思想として採擇する過程を繰り返すのでなければ、自己の生活內容を豐富にし活潑にし、統一的永續的生命を保持することは不可能である。

二個以上の民族が一つの國民を形成するときは、支配的地位にある民族の傳統思想と其他の民族の其れとの間に、正統對異端の關係を生じる。支配的民族は他の民族をして自己の傳統的思想を承認せしめやうと努力するが、兩者の勢力の懸隔が著しく大きくない場合には、前者は後者の傳統思想の存立を如何ともすることを得ない。從つて前者は後者の有する異端的傳統思想が、後者の內面においては正統的思想として妥當することを肯定せざるを得ぬ次第である。

國家意志の立場は民族の傳統的精神の立場と甚だ密接なる關係をもつけれども、二者は必ずしも一致するものでない。これらの二つの立場と國民における支配階級の立場との關係についても同然である。

國家は各種の文化領域にわたつて活動範圍を有し、その各領域に關してそれぞれ一群の思想を肯定し支持する。これらの思想はその意味の上からおのづと體系を形成し、各文化領域に關して國家の正統思想の體系を提示するのである。かやうな國家的思想體系の中に包容され得る思想は、國家の立場から見て正統的であり、これと矛盾する思想は異端的である。國家はその統治に服する社會範圍において現に存在し又は將來存在するであらう所の諸々の思想に對し、何等かの積極的態度に出るのが通常である。そこで、思想に對して如何なる政策をとる可きであるかと云ふ問題に關する國家の思想が、この問題に關する正統的思想として現れ、これと矛盾する思想を異端視するのである。思想の教育、研究、發表、宣傳等につき、國家の立場から見て正統的なる思想と、異端的なる思想との間に、思想の社會的價値の差別を主張するのが、右の問題に關する國家の思想の根本的前提である。

八

國民の中に支配階級と被支配階級とが對立するとき、前者の階級意識の立場から肯定される思想は之と矛盾する思想に對し、正統異端の關係に立つ。この點につき支配階級に屬する個人はすべて正統思想を有し、被支配階級に屬する個人はすべて異端思想をいだくとは限らぬ。

支配階級の中にも異端思想をもつ者もあれば、被支配階級の側にも正統思想をもつ者が少くないからである。

支配階級は權力及び富力を有する事と權威を有する事とを同一視し自己の有する思想、ことに自己の利益の擁護に役立つ思想を以て、權威ある思想と思惟する傾向をもつ。だから、之と相容れない思想の持主は、支配階級に屬するか被支配階級に屬するかを問はず、異端者として敵視される。思想の發表、宣傳、研究、敎育のための一切の手段と機關とを利用して、支配階級が自己にとつての正統思想を擁護し傳播すること、及び異端思想を排斥し驅逐することに努力するのは、知れ渡つた事實である。支配階級は此目的のために一方には國家の權力を自己に有利な仕方で活動せしめることに努力し、他方には民族の傳統的意識を自己に有利な仕方で刺戟し鼓舞することに努力する。これらの三様の社會的勢力の立場が互ひに一致してゐる範圍においては、思想の正統性と異端性とが特に鮮かな色彩の相違を示すのである。

被支配階級の側において異端的思想を把持する人々の社會的勢力が増大すればする程、その思想の異端性が支配階級によつて鋭く意識されるが、その思想の所有者自身は、一方には支配階級に向つて異端者的態度をより力強く固持すると共に、他方には正統思想を所有する人々を――それが支配階級に屬するか被支配階級に屬するかを問はず――異端者視せむとする意識を増大するのである。

被支配階級の側に、更に數個の階級が分れて居る場合には、思想の正統性と異端性とに關する意識の社會的構成は一層複雜となる。假りに、甲乙二個の被支配階級が並び存在し、甲は支配階級の正統思想を肯定し、乙は之を否定するとすれば、甲の有する思想は正統的であり、乙の其れは異端的と視られるわけであるが、被支配階級にとつては支配階級の立場に反抗する立場が權威ある立場であると考へることが能きるから、支配階級の立場を肯定するところの甲の思想は異端的であり、反對に乙の思想は正統的であるとも視られ得るのである。

支配階級の立場に對抗して、被支配階級の利益を擁護せむとする立場に根ざす異端思想の中にも、互ひに衝突する立場に立つ思想の群れが分れる場合がある。それは或は被支配階級の側において二個以上の階級が並び存することに原因し、或は同一の被支配階級の内面に異なる立場に就く黨派の區別を存することに原因する。これらの場合に、社會的勢力において優越せる階級又は黨派は、他の階級又は黨派の思想を異端視する傾向を示す。すなはち前者の立場から見れば、後者の思想は、支配階級の立場に反抗する立場に根ざす點においては、被支配階級にとつての正統性をもつけれど、自己の立場と相容れない點においては、自己にとつて異端的であると視られるのである。

この點については、思想の内容の上から支配階級の立場に對する妥協的精神を藏するところの立場に根ざす思想は、然らざる立場に根ざす思想に比べて、支配階級の側からはより少く異端的であると考へられるであらうし、被支配階級の中の非妥協的精神の立場からしては、被支配階級にとつての異端的思想として視られるであらう。そこで、被支配階級の側において非妥協的精神を支持する階級又は黨派の勢力が、妥協的精神をもつ階級又は黨派のそれに優越する場合には、前者は後者の有する思想を一層强く異端視することとなる。

九

或る思想を權威づけるところの或る立場は、それ自身權威づけられて居るのでなければ、その思想を權威づけることを得ない。しかし或る立場に對して權威をさづける他の立場も亦、更に何等かの他の立場によつて權威づけられる外はない。だから思想の正統性を主張する者は、他の立場によつて權威づけられるのではなく、それ自らの裡にそれ自らを權威づける權威をもつところの立場を求めむとする傾向をもつ。

斯かる立場として考へられがちなのは、神の立場である。他によつて權威づけられるところの相對的權威者に對し、神はあらゆる相對的權威者をして權威あらしめるところの絶對的權威者たるものとして槪念されるからである。だから、自己の所有する思想は神の權威によつて權威づけられると信ずる者は、思想の正統性と異端性との差別を最も明瞭に最も力強く意識するのである。

神又は絶對者に關する一定內容の思想を個人が肯定するのは、彼の人格の最も根本的なる部分の働きに因るのであり、彼の人格的個性をさして現にその在るが如くに在らしめるところの彼の全過去の個性的歴史條件によつて制約される。それ故、斯かる思想を他人が肯定するか否定するかの事實を基礎として、個人と他人との間に發生する親和及び反離の關係は、深刻なる內容を帶びる傾向をもつ。斯かる關係を最も顯著に反映するものは、宗教的集團の存在の現象及び宗教的集團の相互的反目の現象であり、これらの現象と關聯して、思想の正統と異端の對立が特異の樣相を呈する。

神が如何なる立場を是認するか、その立場からして如何なる思想を肯定するかについて、各人が自己の判斷を以て最も良く神の思慮に叶ふと考へるならば、有力なる宗團の成立は不可能である。何等か或る個人又は或る少數の個人の一團の判斷が最も良く神の意志を代表するとの信仰の存する處に、はじめて此可能性はあたへられる。而して一度或る思想が神の意志により權威づけられるものとして定立された後は、能ふ限り其儘の內容において之を保持することが、宗團の存立のために好都合である。但し思想は何等かの形式又は手段との結合においてのみ保存されるのであるから、一定の形式又は手段を通しての思想の內容の解釋が動搖することは、宗團にとつて望ましくない。かくて宗團の正統的思想の解釋は、一定の個人又は合議體の獨占的權利とされるであらう。

かやうな仕方が固定された宗團の傳統的思想に對し全的なる肯定をあたへることは、最も良く神意に遵ふ所以であり、斯かる肯定を行ふこと自體が、神への奉仕の第一條件であり、神への奉仕その者でもある。同時に、斯かる肯定を拒み又は之を否定する者の思想に對し、教化又は抑壓の手段を執ることも亦、神への義務と考へられる。絶對者の支持する思想を自己の思想として所有するとの意識は、個人をして自己の人格の一部分が絶對化されたとの信念をいだかしめる。そして、斯かる思想の否定も亦絶對性を帶びてあらはれ、ゆるす可からざる絶對惡として視られるのである。

さうした個人的心理傾向が社會的には宗團による傳統の擁護の勢

力、異端の迫害となつて現れる。あらゆる異端者迫害の中でも、宗教的異端者迫害は最も苛烈殘酷な方法を以て行はれ、しかも最も確固たる正當性の信念の下に行はれる。迫害に對して異端者が最も勇敢に、最も執拗に、最も頑强に反抗するのも、宗教的思想の場合において觀取される所である。

迫害は個人にとつては信仰の試錬の機會であると共に、迫害による受苦それ自身が意義あるものと考へられる。迫害は、それを蒙る者にとつては、生活の平凡の打破であり、異常なる生活內容の展開を意味する。迫害との鬪ひにおいて個人の生涯は英雄的光彩を帶びるに至るし、この鬪ひにおいて外面的にはうち敗れつつも、內心的には打ち勝つことによつて、より近く神の傍らに在ることを個人は意識する。そして斯やうな深刻な精神的經驗が、個人をして一層固く異端的思想の價値を信ぜしめる。

もとより迫害に會して容易に思想を一變して正統思想に趨る者、及び不本意ながら異端思想を抛棄し又はその外觀をよそほふ者は、いつの場合にも數多いであらう。また積極的に反抗的態度に出ることはせぬが、異端思想を打ちすてるのでもなく、消極的に無抵抗的態度に出る者もあり得るわけである。迫害に對して無抵抗的態度をとることこそは神意に叶ふと主張する宗教的思想の立場からすれば、迫害も、これに對する反抗も、共に惡魔的所業とみとめられるであらうし、迫害に對する反抗を肯定する立場からは、迫害に對する無抵抗は消極的罪惡と視られるであらう。

十

權威は之を承認する者の主觀性を超越する性質をもつ故に、その者に對して權威たる意義を有する。その限りにおいて權威は之に服する者にとつて絶對性をもつ。反面から云ふならば、或る權威に服する者はその權威を絶對化して考へようとする傾向をもつ。權威づけられた思想をもつ者が、何等かの原因により自己の思想の權威について鋭い意識をもつときは、その權威を絶對化せむとする傾向を示す。たとへば强大なる社會的勢力によつて支持される思想と、强大ならざる社會的勢力によつて支持される思想とが、正統對異端の關係に立ち、前の勢力と後の勢力とが思想について爭ふ場合には、前者の側においては正統思想の權威を、後者の側においては異端思想の權威を絶對化せむとする意識があらはれがちである。この意味において、權威が神の信仰の基礎の上に絶對化されると、其他の信念にもとづいて絶對化されるとを問はず、正統と異端との思想的鬪爭は、宗教的又は形而上學的色彩を帶びるに至る傾向をもつ。

思想の正統性と異端性との對立が生まれるのは、思想の眞理性の根據が、思想の內容と思想の對象との內面的關係に求められないで、思想の內容に對して外在的、超越的であるところの權威に求められることに基因する。かやうな思想の眞理性の根據づけの要求は、思想を支持する權威を絶對化することによつて、はじめて十分に滿足されるわけである。すなはち神、靈、精神、物質、生命力、等々の絶對的なるものが、その要求の根本的滿足をあたへるのである。

思想を支持する權威を絶對化することの可能性を肯定する思想に對して、その可能性を否定する思想が存在する。かやうな思想は、一般に思想の權威を否定するものではないが、思想の權威は之を承認する者にとつてのみ權威たるものと主張する。だからその立場においては、思想の正統性と異端性との對立は、十分なる意味においては問題とならぬ筈である。或はまた、その立場からしては、一切の思想は正統的であるとも、言ひえられるであらう。

それとは異なつて、一般に思想を權威づけることの不可能を主張する立場が考へられる。それは思想其者への叛逆の立場であるとも、言ふべきであらう。

十一

自己の立場からは肯定し得ない思想を他人が所有することを知るとき、吾人は他人の思想について全く無關心であり能ふものでない。しかし他人が如何なる思想をいだくかに關しては成るべく無關心、無頓着であるのを可とする態度は考へられる。それは、唯我主義の立場であり、また利己主義の立場である。

他人が自己の思想と相容れない思想をもつとき、他人の思想について無關心であることを不可とする立場をとるときは、しからば如何なる態度をとる可きかが問題とする。この問題は、いかなる心持をもつて他人の思想に對すべきであるかといふ問題と、如何なる行動を以て之に對すべきであるかといふ問題と、如何なる行動を以て之に對すべきであるかといふ問題とに分つて考へ得られる。

『他人は自己の立場と異なる立場をとる權利をもたぬ、しかるに他人が自己の立場と異なる立場を執つて居るのは、不都合である。勘辨ならぬといふ心持をもつて、自己の思想と衝突する他人の思想を問題としようとするのは、不寛容主義、呪詛主義の態度である。——『何人にとつても彼の所有する思想は彼自身の人格的個性の一成分たる意義をもつ。各人は彼自身の人格の內容を自己の個性に從つて構成する權利をもつ。故にこの權利に基いて他人が或る思想を所有することに對しては、一應、他人の權利をみとめてやつて然る可きである』といふ心持をもつて、自己の思想と相容れざる他人の思想を考慮するのは、寛容主義、非呪咀主義の態度である。

次に、自己の思想と相容れない他人の思想に向つて如何なる行動をとる可きかの問題については、全く傍觀す可きであるといふ主張と、必ず之に干涉すべきであるといふ主張と、或る場合には之に干涉すべきであるといふ主張とが考へ得られる。第一の主張は、他人の運命に向つては積極的に干涉を加ふべきではないとする人生觀に立脚するものであり、斯かる人生觀を肯定せぬ者は、第二又は第三の主張のいづれかを肯定するであらう。しかるに第二の主張は、よし觀念上には肯定され能ふとしても、事實上はその儘實現され能はぬものであり、實行の上からは第三の主張に歸するであらう。言ひかへると、第三の主張からして、成るべく多くの場合に他人の思想に干涉を加へたとする態度と、なるべく干涉を加へまいとする態度とが生まれるであらう。

自己の思想と容れざる思想を他人が懷抱することを知るとき、斯かる意識は、自己の思想に對しては如何なる態度をとる可きであるかの

問題の考慮を促すわけである。他人が如何なる思想をもつかについて無關心であることを望ましいと考へる者にとつては、この問題は考慮に値ひしない筈である。不寛容主義又は寛容主義をとる者の立場からすれば、自己の思想を否定する思想を他人が所有する事を知つたとき、自己の思想に對して一應反省を加へることが望ましいとする主張と、何等の反省をも加へることを要しないとする主張との二つが立て得られる。前の主張は批判的態度を生み、後の主張は獨斷的態度を生む。

批判的態度を肯定する者は、他人が自己の思想を否定する思想をいだく事實を機緣として、自己の思想の眞理性の根據を再吟味し、自分がその眞理性を肯定することの權利を確かめようと心がける。そして斯かる反省により、自己の思想のあやまつて居ることを知るならば、他人の思想に向つて干渉を加ふることをしないであらう。之に反して、反省の後にも自己の思想の眞理性を依然として確信し得る場合には——若しも彼が干渉主義を是認するならば——反省の前に比して、より大なる信念を以て他人の思想に對し積極的態度に出ることを得るであらう。

批判的態度は必ずしも常に寛容主義的態度をもたらすものではなく、獨斷的態度は必ずしも常に不寛容主義的態度を伴ふものではないが、多くの場合に、さうした事實の生ずる傾向がある。異なる立場に立つ他人の思想を機因として自己の立場をかへりみることを肯んじない者は、自己の思想を支持する權威を盲信する所から斯かる態度を執るのであり、從つて他人の思想の立脚する見地を無條件に否認する態度に出ざるを得ない。彼は自己の立場に反對する他人に對し常に信仰審判を開始しようと待ち構へてゐるのである。

Aなる立場に立つLなる思想を否定して、Bなる立場からMなる思想を肯定する者があるとき、やはり思想Lを否定しはするけれど、さりとて思想Mを肯定することを爲さず、Cなる立場からなるNなる思想を否定する者が現はれる場合が多い。かやうな思想Mの所有者が、思想Lとの關係においては、自己の思想Mを支持する立場Bに反省を加へる批判的態度をとりながら、思想Nとの關係においては、自己の立場Bに反省を加へることを肯んじない獨斷的態度をとる場合がある。斯くの如きは、半批判的態度とも呼ばる可きであらう。或正統思想を固持する獨斷的立場を攻撃する者が、同一の攻撃方針をとりながらも自己に向つて別個の攻撃を加へるところの思想所有者を異端視する現象が、かやうにして發生する。

以上に考慮したやうな問題は、社會的集團の立場についても亦、一方には自己の構成員の思想との關係において、他方には他の集團及びその構成員の思想との關係において、問題となるのであるが、この場合には、集團の存在目的が特に考慮の中心に置かれる點が趣を異にする次第である。

十二

あらゆる思想を支持する立場がすべて平等の地位に置かれたと、假定する。然るときは、或る立場から或る思想を肯定する者は、一方には之と矛盾する他の立場に立つ他の思想を否定することにおいて、異

端者的精神を把握することを要し、他方には之と矛盾する他の立場に立つ他の思想から受ける否定に向つて自己の思想を肯定することにおいて、正統者的精神を把握することを要する。かくて、Ａなる立場に立つ思想ｌを否定して、Ｍなる立場から思想ｍを肯定する者は、立場Ｍを否定して立場Ｂから思想ｐを肯定する者に向つては、その立場Ｂを否定することによつて、自己の立場Ｍに反省を加へ、之をして一層確固たる根據に立脚する立場Ｍ'として現れしめることにより、思想ｍをして眞理性において一層豐富なるすがたを有つ思想ｍ'たらしめねばならぬ。そして若しも更に、立場Ｃから立場Ｍ'を否定して思想ｃを肯定する者が現れた場合には、立場Ｃの否定によつて立場Ｍ'を反省し、以て新たなる立場Ｍ"を獲得することに因り思想ｍ'を新たなるすがたｍ"において肯定しなければならぬ。

かやうにして、自己の立場と矛盾する立場から自己の思想に加へられる否定に向つては、正統者的精神を以て自己の立場を防禦し、自己の立場と矛盾する立場から自己の思想と相容れない思想に加へられる肯定に向つては、異端者的精神を以て他の立場を攻撃するといふ——批判的、自己革新的思惟方法のみが、個人及び社會的集團をして眞理の目標へと一歩々々前進し得させるところの確實なる道程を成すのである。

思想は何人かの思想であり、何物かについての思想である。思想の内容を意識する主觀及び思想の内容によつて把捉される對象との關係から全く離れて、思想の内容たる意味自體と云ふやうなものの存立を思惟し得るか否かは、別論として、思想の眞理性又は正統性が問題とされる限りにおいては、思想は其れの所有者及び其れの對象との關係において思惟されなければならぬ。

思想の正統性と異端性との對立の意識は、思想の眞理性と非眞理性との對立の意識と關聯して發生する。即ち思想について其眞理性が問題とされる場合に、權威者によつて支持されることが思想の眞理性の標準たるものと信ぜられるとき、或る權威者の立場を把持して或る思想を所有する者は、正統性の名目において自己の思想の眞理性を主張し、異端性の名目において自己の思想と矛盾する思想の非眞理性を主張するのである。けれども、思想の眞理性は、思想の意味する内容とこれによつて規定される對象との關係からしてのみ定まるものであつて、思想が或る權威者の立場によつて肯定される事實は、一般的に思想の眞理性を保證する力をもつものではない。だから、思想の正統性と異端性との對立を以て、思想の眞理性と非眞理性の對立と平行するものと見ることは、到底許され能はぬ錯覺的見解たるものと言ふ可きである。

畢竟、思想の正統性と異端性との對立は、思想が個人の意識を通じて社會生活の現實と交渉する事實的關係の一面に他ならぬ。かやうな事實的關係において、この對立を眞理性と非眞理性との對立たるものと意識する個人又は集團の錯覺が、社會生活の現實に對してさまざまの重大なる影響を及ぼすことは疑ひないけれど、思想の眞理性その者は斯かる社會的事實によつて何等の動搖をも來すものではない。——とは言へ、社會生活の現實のうちに存在するわれわれ個人にとつてはかやうな事實が正に大いなる關心の對象たるのである。

思想の主體たる個人の意識から思想の内容を抽象して考察するならば、思想の内容の世界において、異なる思想と異ならざる思想とが、不動の境界線をへだてて永久に靜止しつつ相對峙するのを見るであらう。

だが、生ける現實の世界においては、あらゆる思想は個人の意識と共に活動し跳躍する。此處では、無數の思想は正統の立場と異端の立場とに分れて爭ひ合ふが、鬪爭の場面は常に新たに展開してやまず、それにつれて個々の思想の運命も變化せざるを得ない。——唯、この現實の思想の世界がそれからそれへと展開して行く様相をば、かの抽象的なる思想の内容の世界に投影して考へるとき、異なる思想の領域の次第に擴張する傾向の存することを觀取し得て、われわれは之を人間の社會生活の進歩なりとして喜悦するのである。(一九二七・三・一〇)

『若き學徒』はいかにマルクス主義を防衛したか？

——北浦氏の挑戰にお應へする——

福本和夫

一、北浦氏の挑戰

「若き學徒」北浦千太郎氏は本誌前號に於て、「アンチ福本イズム」なる論文を發表された。

この論文は、氏一個の意見にあらずして、氏と傾向を同じうする一派の人々を代表するものであるといふ。

「福本イズムは今『流行』の最中である。此の流行は多くの損害を無産階級に與へつゝある」さうである。

氏は「斯かる損害が何に原因するかを見極めやうとして」、私の「著書を漁」られた結果、「其處に『辯證法』の美服を纏へる『ブルジョア思想』『反動的唯心論』を發見し、マルクスの『建設展開』に名を藉るマルクス主義の否定を見出」された。

かくて、氏の「任務は此の『左翼』の翼を折り、『辯證法』のウスモノを剝ぎ取り、其の『唯心論』の本體を曝露してその最後の避難所たる『辯證法』から唯心論を追ひ出すことにあつた」。（本誌、前月號、北浦氏論文、七一頁）

だが「追ひ出」されたのは、抑々、何者であつたか？

それは正に北浦千太郎氏その人である！

何故にかく云ふか？

氏はかの所謂折衷主義の理論家とゝもに、我々の理論鬪爭に對して無關心、乃至は無理解に止まられ來つた。

從つて、わが無産階級政黨運動最近の展開について、氏はつひに、

運動展開の内的必然の經路を追跡しえられずして、極度の混亂に陷られた（無産者新聞、第五十八、五十九號社說參照）

氏のこの極度の混亂は、必然に、氏自らの意識化の開始であつた。そして、それは、所謂左翼大衆の、折衷主義よりの、離脫前進と共に、氏自らの後退――沒落の開始であつた。

氏の本誌前號に於ける論文は正にこの沒落の氏自らによる宣言であり表明である。

しかも、氏の意識化は、從來の我々の鬪爭に對する氏の無關心、乃至は無理解をして、つひに、吾々の鬪爭の理論的基礎に對する意識的積極的な誣妄――漫罵にまで轉化せしめた。

しかり、狼狽と輕卒、誤讀と曲解、捏造と虛構にまで！

所謂「一派の人々」にとつて、あまりにも、ふさはしいドン・キホーテではある！

この「若き」騎士は調整器のこはれた自働人形の如くに亂舞された。

我々をしてその亂舞の有樣を見せしめよ！

二、氏の論理の根底

類推的並列

氏の論理の根底を貫くところのものは、類推的並列である。

この類推的並列の方法は、又、正に、氏の最も得意とせらるるところでもある。吾々はその最も顯著なるあらはれを、氏の論文「組合統一運動の展開」（勞働者）第一卷第一號）に適用せられたる統計方法に於て見ることが出來る。

一

氏は、「私は以上で、唯物史觀を眞實に理解することは、同時に唯物史觀を建設展開すること――マルクスによつて基礎づけられたる方法に從ひて――でなければならぬ……」（圈點―筆者）といふ私の主張と「其の（史的モニズム）理論の根據から出發して、理論を訂正し或ひは展開させやうと欲してゐる」圈點―筆者）經驗的批判論者バグダノフの意圖とを、何等その構成を分析批判することなく、單に、言葉の上の些細の類似――否、注意深い讀者の容易に看取せられるであらう如く、筆者の打つた圈點はその根本的差違を示す――を以て、直ちに兩者の立場の同一を立證されたものゝ如く思ひ込んで居られる。

更に、バグダノフが絕對眞理と相對眞理との辯證法的連關を理解しえずして、之を排他的分裂的に表象することによつて放ちえたるエンゲルスに對する非難と、エンゲルスが唯物史觀の構成過程に於ける經濟學批判の決定的意義を沒却したことに對する私の批判とを全然混同し去られて居る。

北浦氏よ！　先づ揚げ得たと信ずる凱歌を、一應、呑み込み給へ！

二

氏は唯物辯證法の何ものなるかを徹底的に理解せられない。

「氏（福本）にありては理論は、頭から捻り出されるか又は全ての

實在と折り合はせるものであるから、充分に鬪爭を認識しないでも存在の價値があるのである。換言すれば氏の頭で作り上げた辯證法は自然の辯證法と同一であり、折合せることが出來るものである。」(同、六九頁傍點筆者)

氏に於ては、ナイーヴにも、事物に於ける辯證法のみが存在するものゝ如くである。

唯物辯證法が自然辯證法、社會辯證法並に思考辯證法の統一であることは、氏の夢想だにしえざるところである。

思考の辯證法が實在の辯證法の「反映」であることにのみ拘泥して、「事實の辯證法的性質に、辯證法的思考の法則の意識を折合はせ」(エンゲルス)なければならぬことを見られない。

故に、吾々が、所謂方向轉換過程最近の發展段階に於て、マルクス主義の意識的行爲性を高調したことに對して、氏は、吾々が「『辯證法』を思考構成にのみ局限してゐる」(六六頁下段)かの如き表象を描かれる。

かくして、又、氏の類推的並列が始まる。

「…換言すれば思考の辯證法的方法は、自然の辯證法の反映であることを福本氏は、全然自覺することが出來ない。

「…故に氏の無産者運動の批判に於て、往々夫が唯心論的である—…」(傍點—筆者)

「之と如何に鬪爭すべきかに就て我々はブハーリンの『史的唯物主義の理論』から學ぶことが出來る。

『今日まで——そして發展しつゝある段階に於て——意識過程を物質過程から分離する試みがなされつゝある——具體性に何等該當しない所の二三の方法によつて、辯證法を特に思考構成にのみ變化させやうとする試みがなされつゝある。此の點に於て表象的なのはマツクス・アドラアを首領とする「オーストリー・マルクス主義」である。此のマルクス主義の曲解——明白に反唯物主義的曲解に對して如何に戰ふことが必要であるか？ それは餘りにも明白で、辯證法の物質的根據を解剖することが必要である。即ち活動する物質の形態の中にヘーゲルの辯證法的公式に該當するものを把握することである』」(同、六〇頁、圈點のみ筆者)

かくの如き類推的並列をその論理の根底とせられる氏の論文全體が捏造、虛構、誣妄たる以外、何等の價値を有せざることは、我々のあらかじめ容易に看破し得るところである。

かくの如きは、煽動家のみよくなしうるところである。

以下、氏の論文を全體に亘つて追跡することによつて、その然る所以を曝露するであらう。

三 「認識論」の問題

一 史的唯物論の認識主體

史的唯物論に於て認識主體とは何を指すか？

「古き唯物論の立場は有産者社會であり。新しき唯物論の立場は人間的社會又は社會的人間である」(フォイエルバッハ「論綱」一〇)

「人間的社會」又は「社會的人間」とは無產階級である。

故に、我々が認識主體に就て語るとき、それは「哲學」に於て所謂「我」ではあり得ない。

我々が「我」に就て語りうるのは、「社會に於て生産するところの個々人」、從つて、「社會的に決定せられたところの生産」に於ける「個々人」の場合に於てのみである。

「人間は言葉通りの意味に於て、政治的動物である。單に社會的動物たるに止まらず、社會のうちに於てのみ個性化するところの動物である（經濟學批判、XIII―XIV）

しかるに、北浦氏にあつては、かゝる差違は、つひに、氏の意識に上らない、問題となりえない。

氏が主體――客體の統一の意義を理解しえられざる理論的根據はまづこゝにあるのである。

二　主體―客體の統一と社會的生存―社會的自覺の同一

しからば、認識主體としての無産階級は如何なる社會的、歴史的特性を有するか？

「人間は、無産階級に於て、自分自身を忘失しては居るが、同時にこの忘失の理論的意識を得たるのみならず、もはや拒否し得ざる、もはや掩ひえざる、絶對命令的な必然――必然性の實行的表現――によつて、直接に、この非人間性に對する叛逆にまで餘儀なくされてゐる。

「それ故に、無産階級は自らを解放しうるし、又解放せざるをえぬ。しかし、彼自身の生活條件を揚棄することなくしては、自分自身を揚棄することはできぬ。無産者は、彼の狀態のうちに集中されてゐる、今日の社會のあらゆる　　　　を揚棄することなくしては、彼自身の生活條件を揚棄することは出來ぬ。」（マルクス、エンゲルス遺稿、第一卷一三三頁）

「無産階級が從來の世界　　　　を宣告するとき、彼はたゞ彼自身の存在の秘密を告白するに過ぎない。なんとなれば、その秘密は、この世界秩序の事實的解體であるから。」（同、三九八頁）

故に無産階級の、階級としての特殊地位、その歴史的使命の特質は、彼が常に徹底的に自己の階級利益を主張するところにある。彼は決して、直に社會全體の利益を主張するものではない。

だが、無産階級の階級利益の實現は、その内的特質により、階級利益一般を揚棄することなくしては實現されえない。即ち、無産階級が自己の階級利益を徹底的に主張することは、必然に、全階級利益を揚棄することゝなる。そして、彼は、かゝる階級利益の揚棄をば、直接に自己の階級利益を徹底的に主張することによつてのみ實現しうるのである。

かくして無産階級は、その社會的存在の必然により、事物を全體性に於て觀察せざるをえない。その自己認識が同時に全社會の客觀的認識たらざるを得ないのである。

そしてまた、かゝる認識に對して、この階級は認識の主體たると同時に客體たるをうべく、またたらずにはゐられないのである。

かくして、歴史的には、この階級の出現によつて、はじめて、主體

――客體の統一がその合理的形態に於て完成せられ、實現せられるのである。

しかるに北浦氏にあつては、主體―客體の統一が主體―客體の同一として理解せられる。

「即ち福本氏にありては、認識の主體は同時に客體であるとなつてゐる。換言すれば、『我』は同時に『非我』となつてゐる。」(五八頁上傍點――筆者)

かくて、又しても、氏の類推的並列がはじまる。

「即ち福本氏の認識はバグダノフと同じく經驗批判主義である。だからバグダノフの

『社會的生存と社會的自覺は的確な意味に於て同一である』といふ定義と

『認識の主體たると同時に客體たり得る』との福本氏の定義とは同一のものとなる。」(五八頁、下、傍點――筆者)

かゝる斷定は混亂せる北浦氏の頭の中に於てのみ成立しうるところのものでなければならぬ。

まづバグダノフの「定義」を吟味する。

「社會的生存と社會的自覺は同一ではない――全ての生存が全ての自覺と同一ではないやうに。人間が交際するに、自覺物としてそれをなすことは、些かも社會的自覺は社會的生存と同一であつたといふことにはならない。……社會的自覺は社會的生存を反映する……反映は正しく、接近してをり、反映されるものゝ寫本であり得る。だが之を同一と言ふことは愚である。……」(レーニン、北浦氏譯 載による)

經驗批判論者の決定的誤謬は、「社會的生存」と「社會的自覺」とのかゝる關係を抹殺して、兩者の不可分離の結合――否、後者との不可分離の結合に於てのみの前者の存在――兩者の「的確な意味に於ての同一」を主張するところにある。

第二に、我々が「認識の主體たると同時に客體たりうる」といふとき、既に前述せるところによつても明らかなるが如く、「認識の主體」とは、史的唯物論の立場からすれば、無産階級を指すものであり、「客體」とは、その社會的歴史的特殊地位よりして、全體性の擔當者たるべき必然性を有する無産階級を、對立物として包含するところの「一つの全體」――有産者社會をいふ。

そして、我々が、無産階級が「認識の主體であると同時に客體である」といはずして、「認識の主體たると同時に客體たりうる」といふ所以は、それが「同一」にあらずして、統一たることを示すからである。

即ち、無産階級がかゝる統一をその合理的形態にまで完成し、實現し得るのは、その直接的具體に於てゞはなくして、その媒介的具體に於て觀察されたるときであり、その組織過程――階級形成過程――階級鬪爭過程に於てなのである。

第三に、從つて、史的唯物論の所謂「認識の主體」は經驗批判論の所謂「社會的生存」――單なる社會的存在――ではない。況んや「客體」と「社會的自覺」とは根本的にことなる。

しかも、北浦氏によれば、「社會的生存と社會的自覺は的確な意味に於て同一である」＝「認識の主體たると同時に客體たり得る」といふ恒等式が成り立つ！

かんとすばらしい。類推的並列主義の數學なることよ！

見よ！　かくて、氏には次の如き眞に嗤ふべきデッチあげさへも可能なのだ！

「故に氏（福本）にありては

『その自己認識は同時に全社會の客觀的認識たり得』（即ち我々の例に採られた農民が麥を賣るや、之によつて世界市場に於て世界中の麥の生産者と「交際」してゐることを世界中の麥生産者と共に認識してをり）『かゝる認識に對して、この階級は認識の主體たると同時に客體たり得』（即ち社會的自覺は社會的生存と同一である）

　といふ風に辯證法は、氏の經驗批判主義の爲に依然として唯心論の域を脱してゐない。」（六〇頁）

　この引用句の合成は何を語るか？

「その自己認識が同時に全社會の客觀的認識たりえ」、「かゝる認識に對して、認識の主體たると同時に客體たりうる」ところの階級は無產階級以外にない。しかるに、氏はレーニンの例にとりたる「農民」を拉し來つて、無產階級にすりかえてゐる。

　氏は、かくして、マルクス主義に對して完全に盲目なることを自ら曝露せられてゐる。

（かくも血迷へるドン・キホーテのために、ロシナンテとサンチヨの役割を振あてられたるレーニンとブハーリンを、神よ、許させ給へ！）

四　「辯證法的方法」

一　唯物辯證法的方法

「福本氏の唯物辯證法的方法は

第一――事物を媒介性に於て觀察する

第二――事物を生成に於て

第三――全體性に於て

の三つである。そして常に氏によつて用ひらるゝ方法は第一と第三である」（五九頁）

　まづ、こゝで問題となるのは、氏が、私によつてあげられたる無產階級の社會認識の特性――「社會の構成＝並に變革の過程」の唯物辯證法的考察――の第四――

「かゝる認識に對して、この階級は、認識の主體たると同時に客體たりうべく、また、たらずにはゐられない。」（拙著、「社會の構成＝並に變革の過程」二七―八頁參照）

を脱落せられたることである。

　先にも述べたるが如く、この第四は、所謂方向轉換過程に於て、今や現實に全無產階級的政治鬪爭をはじめつゝあるわが無產階級にとつては、殊に、決定的意義を帶び來るべきところのものである。

　氏はいはれる、「常に氏（福本）によつて用ひらるゝ方法は第一と第三である」と。

　何故さうなのか？

　氏は、つひに、之に關しては、口を緘して語るところなく、何等積極的に立證せらるゝところがない。

だが、わが無產階級運動の所謂方向轉換過程に於て、これを生成に於て、運動に於て發展轉化に於て見ることを常に最も力說し來つたのはそもそも誰であつたか？

そして、かゝる見地を理解することなく、運動の內的發展を看取しえず、從つて、常に現象を蒐集羅列するに止まり、遂に日本勞農黨が出現するに至つては、その階級的本質の分析究明に失敗して、徒らに愁訴哀歎し、それによつて自らの馬脚を曝露せざるをえなかつたのは、誰であつたか？

氏よ、これ以上はいふを要しないであらう。

二　「有機的」と「機械的」

「福本氏の科學的說明は常に『有機的』（『內的』）といふ言葉によつて表現されてゐるが、之が如何に非科學的說明であるか、解剖して見やう」（六〇頁）

しからば、氏は如何に「解剖」されたか？

「此の『有機的』と『機械的』の對立…はそれ自身辯證法的に變化したのである。即ち現在の原子に對する認識は古い見解を放棄し、絕對に分離しそして無質の原子は存在しなくなり、エレメントの連絡、相互繫依、新性質の發生等は全ての法則に確立されたので、『機械的』と『有機的』との對立は全然無意義になつて仕舞つた。」（六一頁傍點——筆者）

だが、私は未だ嘗て氏の理解されたるが如き「有機的」なる表現を用ひたことはない。否、更に、所謂歷史の「有機的發展」の概念は筆者自らの最も強く排斥し來つたところである。

では、如何にして、北浦氏はかゝる誣妄を敢てなし得たか？

氏の引用せられたるが如く、

「もはや我が無產階級の『方向轉換』——『戰線の擴大』は單に機械的な『轉換』『擴大』ではありえない。」（拙著「社會の構成＝並に變革の過程」二頁）

しかるに、氏にあつては、「單なる機械的な『轉換』『擴大』ではありえない」といふことは、直に、「有機的な轉換、擴大」を意味するものゝ如くである。

かくて、氏は、無暴にも私が「未だに其內容に於て既にブルジョア的になつた『有機的』…を使用」（六一頁）してゐると論斷せらるゝのである。

だが、「機械的」の反對極は、氏の信ぜらるゝが如く、所謂「有機的」ではない。

氏自身、議論の進行中に於て、その立場を變更してゐられる。

「第三に——『有機』と『無機』『辯證法』と『機械學』（『機械學』!!）を對立させてゐることによつて、認識論を辯證法的に把握してゐないことを曝露し…」（七〇頁）

即ち、本來「有機的」は「無機的」に、「機械的」は「辯證的」に對立すべきテルミノロギーであつたのだ。

而して、この「有機的」と「無機的」、「機械的」と「辯證的」との對立は、最近に於ける原子論——物質觀の革命によつて、單なる排他的對立にあらずして、辯證法的對立なることが明らかにせられたので

ある。

そして、この立場が、正に、レーニン、従つて又、一般にマルクス主義者の立場なのである。

しかるに、北浦氏にあつては、「無機的」と「辯證的」とが各々その對立的地位から抹消されて、「有機的」と「機械的」とが對立せしめられる。しかも、氏は、この間に辯證法的關係を設定せんとせられる――かゝるテルミノロギーの支離滅裂な混用、マルクス主義文獻のでたらめな引用、それによる無稽な牽強附會を、しからば、氏は如何にしてなしえたか、又、何故になしたか？

氏の粗雜なる經驗主義の故に、その徹底的俗學主義の故に。しかも氏の急速なる意識化――沒落を自ら糊塗し、救濟せんとして、手段をえらぶところなく「敵手」を傷け倒さんとする焦慮の故に。

三　揚棄と放棄

「現在の原子に對する認識は古い見解を放棄し、絶對に分離しそして無質の原子は存在しなくなり、エレメントの連絡、相互聯依、新性質の發生等々は全ての法則に確立されたので……」（六六一頁）

氏は「辯證法」を繰り返し云々せられる。

しかも、氏は、辯證法の基本的問題たる揚棄の意義に就て、全然無理解なることをこゝに告白されて居る。

辯證法に於て、所謂揚棄は決して古き形態の放棄ではない。

原子論の革命は原子に關する「古い見解」を「放棄」したのではない、單に否定したのではない。「新しい見解」は「古い見解」を、その終局まで、論理的、全面的に發展せしめたものであり、かくして、「古い見解」は「新しい見解」のより高度の規定の中に、批判的に攝取せられるのである。

五　終局的決定要因としての「生産力」の問題

「『唯物辯證法論者――（マルクス）――は、この作用――關係をば『生産を終局的決定要素（過程）とする所の、諸要素間の交互作用』を認むるのであります。』「社會の構成＝並に變革の過程」一七頁

と述べられてゐるが、何故生産力が全てを解說する終局的原因であるかといふことに就ては少しも理解してゐない。」（六二頁）

私は、この問題に關して、「社會の構成＝並に變革の過程」の論稿の許す範圍に於て、最も詳細に說明を與へた。

だが、氏は放言せられる、「何故生産力が全てを解說する終局的原因であるかといふことに就ては少しも理解してゐない」と。

氏のかゝる放言は、しからば、いかなる根據から生ずるのであるか？

「……福本氏は……

『河上博士によれば、所謂終局的決定要因はかの生産力を更に決定する所の、人間の意志欲望であるといふ。

唯物史觀は、因より、生産力がこれらの要因によつて決定さるゝことを否定するものではない。

だが、進んで、これらの要因が終局的にはまた生産力によつて決定せられてゐるものであることを認めるのだ』（唯物史觀と中間派史觀」一〇六頁）

即ち生産力を生産關係（經濟的要素）に置き換へてゐる福本氏は雞は卵を生み、卵は雞となるといふこと以外に、此のマルクス主義の唯心論的曲解者に對して、何等戰ふ武器を持たれ得ない。斯かる堂々廻りは、敵を打ち倒すには全然無力である。」（六三頁）

即ち、知る、氏をしてかゝる放言をなさしめるところの根據は、「生産を終局的決定要素（過程）とする所の交互關係」の意義に對する氏の完全なる無知にあることを。

氏の理解するところによれば、交互作用とは、「雞が卵を生み卵は雞となるといふこと」であり、「堂々廻り」の謂である！

「若き學徒」によるマルクス主義の防衛ぶりも、こゝまで來れば、人をして、滑稽を通りこし悲慘の感を催さしめる。

氏よ、聞け！　辯證法のいふ交互作用とは、要約すればかうだ。

それは、氏の主張するが如き一方的意義に於る因果關係ではない。又、河上博士の發見されたるが如き、かゝる因果關係を「絶對に排除してしまつ」たあとに認めらるゝ所の所謂相關關係でもないのだ。因果關係がその一段高度の規定に於て過渡したるもの、之を交互作用といふのである。

「生産は生産の對立的規定に於ける自分自身とおなじくまた他の要素——（分配、交換、消費）——をも支配する。生産からして過程は絶えず新たに開始する。

「けれども生産も亦、その一方的形態に於ては、こんどは他の要素によつて決定せられる。……最後に消費、欲望も生産を決定する。種々の要素間に交互作用が起る。かくの如きはあらゆる有機的全體に於てしかるところである。」（經濟學批判」XXXIV）

（原因と結果とを、相互に、かたく相對立した兩極だとみなす（ことは）原因と結果についての、通俗の非辯證法的表象（であり）交互作用の絶對的な看過（である）」（エンゲルス、メーリングへの手紙——一八九三年。）

六　生産—「下層建築」

「社會學の中心問題を解決し得なかつた福本氏は、更に生産關係をも正當に理解することが出來ない。」

「生産力を生産關係（經濟的要素）に置き換へてゐる福本氏は……

「如何に氏が之（生産力と生産關係——筆者）混同、誤解してゐるか、例へば『生産（下層建築）（見よ！　福本氏は生産を下層建築と呼ぶ）を終局的決定要素とし、歴史に於ける終局的な決定要素は生産……である』といひ他の著書では「だがこれらの要因が終局的にはまた生産力によつて決定せられる」といふ風に生産と生産力とが何等の斷りなしに氣儘に使用されてゐる。そして生産は氏によりて下層建築とされてゐるから、生産力と生産關係が混合されてゐることも明らかである。」（六三頁）

引用のでたらめは後に論ずることゝして、氏は經濟學批判に所謂「狹義に於ける生産」と「廣義に於ける生産」とを全然「混同」し誤

解」されてゐる。

我々が決定要因に就て語るとき、人はそれに、「狹義」と「廣義」の二つがあることを知らなければならぬ。

「狹義に於ける生産」とは「直接的生産過程」であり、「生産」——(「生産手段」「生産樣式」「生産關係」)並に「生産及交通」(運輸)である。

「廣義に於ける生産」とは、その上層建築に對する關係に於ける下層建築——「生産關係の總和」——「社會の經濟的構造」——「經濟關係」——「社會の眞實の土臺」である。(註)

(註、詳細は「社會の構成=並に變革の過程」四八—八〇頁參照)

だから、氏の私にむかつて放たれる非難の一系列は、かへつて、「生産」「生産力」、「生産關係」を「何等の斷りなしに氣儘に使用——(混同、誤解)——されてゐる」ところの氏に、ソックリソノマヽ、あてはまるものといはなければならぬ。

しかも、氏はなほ執拗にいはれる、

「だが見逃せないのは氏が

「生産(下層建築)は終局的な決定要素である」と定義してそれ以上はマルクスも亦私(福本氏)も嘗て主張したことはないと斷言されることで、マルクスは『マルクスに從へば生産關係は社會の物質的基礎である』(ブハーリン)と言はれてゐるから、福本氏はマルクス主義を歪めたのである。」(六三頁、下)

北浦氏よ! 君の狼狽、輕卒はあまりにひどい。

もう一度、氣を落ちつけて、君の引用せられた箇所を讀まれよ。

——唯物史觀に從へば、歷史に於ける終局的な決定要素は生産…

…である。それ以上はマルクスも亦私も嘗つて主張したことはない——(「社會の構成=並に變革の過程」一七五頁)

この一句は引用符を以てはじまつてゐる、しかもそれは、それだけでは、引用符を以てとぢられてはゐない。北浦氏よ! ページをかへしたまへ! そこで引用符はとぢられてゐる。その下に何が書かれてあるか?

氏よ! それはエンゲルスのメーリングへあてた手紙なのだ。こゝに「私」とあるのはエンゲルス以外の誰でもない!

この引用句は私が「マルクス(並にエンゲルス)によつて基礎づけられた方法に從」つてゐることを示すだけだ。

しかも君は、この引用句を以て、私が「マルクス主義を歪めた」と喚かれる!

「斯かる曲解、混同」を以て、私を「扱き下」さんとされる氏が「斯かる醜態を演じられるのは、眞に同情に絕えない。」

七　生産關係と階級關係

「氏は

『生産關係即ち階級階級である』と云つてゐるが、この『即ち』は甚だ曖昧で正當に理解することが困難である……」(六四頁、下)

「福本氏の『生産關係即ち階級關係である』。といふ定義は間違つてゐる」(六五頁、上)

氏はかゝる「定義」を、一體、どこから探し出して來られたか?

私は生産關係と階級關係との關係を、生産關係即ち階級關係などと

簡單に片づけてはゐない。

だから、氏による、かゝる「定義づけ」は、又しても、氏の虚構の産物である。

だが、氏をして、かくの如き虚構をなさしめたところの「材料」は、しからば、何處にあつたか？

それは、恐らく、次の一句であらう。

「かくの如くして、原始的共同團體の解體以後、生産過程――生産關係は、同時に階級過程――階級關係であります。（社會の構成＝並に變革の過程」一二〇頁）

だが、かゝる規定が、そもそも、如何なる手續をへてなされたかゞ問題だ。

「分配が生産物の分配たる以前に、分配は、第一に――生産用具（生産手段）の分配であり、第二に――同一關係の一層つき進んだ規定に於ては、生産の種々なる種類の下への社會成員の分配――（一定の生産關係の下への個々人の攝取）――である。」（「經濟學批判」XXX）

「搾取階級と被搾取階級。支配階級と被支配階級とに於ける社會の分裂は、生産の發達が以前僅かであつたことの必然的結果であつた。

社會の全勞働が、凡ての人々の窮乏的生存のための必需品を超ゆること極めて僅なる收益を提供するにすぎざる限り、從つて勞働が社會成員の大多數の凡ての、又は、殆んど凡ての時間を要求する限り、社會は必然的に階級に分れる。

「けれども、よし上述によつて、階級分劃が或る歴史的是認をもつとするも、それはかゝる是認を與へられた時期、與へられた社會的條件に對してのみ有するにすぎぬ。それは生産性の不十分に基いた。だからそれは、近代生産力の十分なる開展によつて掃ひ去らるゝであらう。」（「社會主義の空想より科學への發展」五〇頁）

即ち、「生産の種々なる種類の下への社會成員の分配」が「生産性の不十分」なる發展段階に於ける生産關係の下に於て起るとき、それはまた必然に階級となるのである。

そして、また、かゝる「社會成員の分配」は、終局的には、生産によつて決定せられる。

かゝる手續を經て、はじめて、先の規定にまでつき進むのである。

しかるに、北浦氏は、イキナリ、かゝる規定そのものから「論を進める。」

だから、氏は私の圖式を、證據に論を進めるより仕方がなくなる。

だから氏は「圖式」にあらはされた形のみを問題とせられる。生産關係と階級關係とが「別居」「並立」せるが如くに表象せられる。

かくて、氏に於ては、虚構が可能となる。

八　社會の變革の過程

一　階級の形成過程―鬪爭過程

「生産關係の矛盾の發展は『必然に革命階級の發展』となりはしない」（六七頁、下）

氏は氏のこの見解を裏づけんとして、ブハーリンを引用せられる。

『階級的精神並に階級的思想、階級による、その目前の利益ばかりではなく、その永續的な一般的な利益の自覺は生產に於ける階級の狀態から發生する。だが之は、生產に於ける狀態が直ちに自己の一般的根本的な利益を階級として理解するといふことではない。事實は反對で斯かることは殆んど何時だつてないのである。』（『史的唯物論の理論』）

氏がブハーリンをいかに誤解してゐるかの根據は次に論ずることゝする。だが

「一二の無產者が（否全無產階級であつても）何を目的として、一時、表象してゐるかといふことが問題でなくて、無產者とはいかなるものであるか、また、無產者は、その存在によつて、歷史的に何をなすべく餘儀なくされてゐるか、といふことが問題だ。

「彼の目的と彼の歷史的行爲とは、彼の自身の生活狀態のうちに――また今日の有產者社會の全組織のうちに――分明に、打ち消し難く指示されてゐる。」（『遺稿』第二卷一三三頁）

單に所謂一定の物質的條件の存在の發展のみを以てしては、決して變革は可能ではない。

生產力と生產關係との矛盾が、革命的階級によつて意識せられ、實踐的にたゝかひつくさるゝことによつて、即ち變革主體たる革命的階級の變革行爲が加へらるゝことによつて、社會は現實に變革されてゆくのである。

そして、かゝる矛盾の意識化は、無產階級が資本家階級に對して行ふ執拗なる鬪爭のうちに、その階級意識として意識せられ、かくして階級形成は成就せられるのである。

だから、「生產力と生產關係との矛盾の發展は、必然にまた階級對立の發展、從つて、、階級の發展となる。」「かくして、社會變革の過程は必然に（階級對立社會に於ては）階級形成の過程であり、階級鬪爭の過程である。』

だが、資本に對しては一つの階級であるところの無產階級は、いかにして、自らを自分自身に對しての階級として形成するのであるか？その內的連絡――內的發展＝轉化は、いかにしてまた、何故に實現されうるし、また、されなければならぬか？

だが、氏にあつてはそれは問題たりえない、だから氏はこの轉化の外形、その「相異」「區別」のみをあげうるに止まる。

「マルクスの階級『それ自身』と『自己の爲の』階級との相違を區別し得なかつた福本氏は‥‥

「氏にありては『生產力と生產關係の矛盾の發展は必然に革命階級の發展』となり、『社會變革の過程は階級形成の過程』であるとなつてゐるが、階級形成の過程即ち階級『それ自身』の發達過程と、革命階級の發展としての變革の過程即ち『自己の爲の』階級の發達過程とは全然相異してゐることを知らなければならない。」（六八頁）

しかも、わが無產階級の方向轉換過程、現下の發展段階――無產階級運動の現實的進行がかゝる「發展」「轉化」を、その實踐に於て、證明しつゝあるときに、氏はかくの如き一般的理解――讀者の既に見られたるが如く、それは精密に言へば、無理解である――に蠢動、跼蹐せ

られてゐる。

それは一の後退運動である。我々は次にそれを見るであらう。

二　方向轉換過程

氏は、私の示した社會變革の諸過程をあげたるのち、いはれる。

「だが此の理論が正しいか何うか、實際生活を持つて來れば直ちに判別する。氏は現在を指して政治過程と稱してゐるが、然らば現在經濟的鬪爭を全然拋棄すべきかといふと氏は然り！　と即時に答へる。だが、實踐に於て我々は我が無産階級は氏の所謂五つの過程を同時に持つてゐることを知る。蓋し生産關係の矛盾が存在してゐるし、之を意識する者と意識しない者とがあり、經濟鬪爭もやれば、政治鬪爭もやり、國際的協同戰線も弱いながら張つてゐる。故に氏の變革の過程は哲學的虛妄であり虛構である。」（六七頁、上）

我々はこゝに、所謂折衷主義論者のうちにあつて、しかも組合主義的傾向の最も強き北浦氏が、わが無産階級運動の所謂方向轉換過程を理解しえず、從つて、所謂左右兩翼の深刻なる對立抗爭の尖鋭化とゝもに、急速に意識化し、沒落しはじむるにいたつたところの全秘密を見うるのである。

おもふに、有産者社會の全生活過程は、これを大別すれば、有産者的の物質的生産過程、政治的生活過程、精神的生産過程から構成されてゐる。

かゝる構成の過程に變革の過程——鬪爭の過程從つてまた組織の過程——が對應する。變革の全過程はかくて、（一）經濟的鬪爭過程（二）政治的鬪爭過程（三）意識鬪爭の過程に分析することが出來る。

即ち、第一に、基本的過程たるところの純經濟過程（生産過程）に於て、生産力の發展が生産關係と矛盾するにいたる。

此矛盾はまづ意識に反映する。こゝに意識的鬪爭が開始せられる。

だが、無産階級が、その階級意識を意識する過程は同時に、その階級鬪爭の過程である。

かくて、こゝに辯證法的交互作用が行はれる。無産階級はその階級意識を十分に意識することによつてのみ、その階級鬪爭を意識的鬪爭たらしめることができる。同時にまた、その鬪爭を十分に戰ふことによつてのみ、その意識を戰鬪的のものたらしめることができる。

物質的生産の過程（經濟過程）が基本的過程たることに對應して、經濟的鬪爭過程が基本的、原始的なものである。だが、それは決定的なものではない。けだし、「階級の本質的利害は根本的政治的變形によつてのみ充たされうるところである」から。けだし、「政治は經濟の集中的表現である」から。故に決定的なものは、むしろ政治的鬪爭の過程でなければならぬ。

而して、勞働者階級はその歷史的存在、社會的地位の必然により、有産者社會の全部的變革をその歷史的使命としてゐるのであるが、有産者社會に於て、勞働者階級が本來主として許されてゐる所の生活過程には明白なる限度がある。

その過程は、即ち物質的生活の過程——經濟過程である。

それ故に、

勞働者階級の生活過程、鬪爭過程は基本的原始的なものである。

だが、それらは明白なる限度をもつものである。

勿論、勞働者階級が、單に純經濟過程——從つてまた純經濟的鬪爭のみを過程するといふのではない。だが、彼の過程する他の諸過程は結局あくまで所謂組合主義的鬪爭並に意識、組合主義的政治鬪爭並に意識の限度を超えることが出來ない。

しかるに、かゝる過程、鬪爭の地盤の「外部」から無產階級運動に來り投ずるかの所謂「新なる要素」——所謂革命的知識階級は、主として政治生活の過程、精神的生產の過程（意識過程）を生活する。

即ちこの要素は、

第一に——政治過程、意識過程を廣汎に生活する。

第二に——だが、直接、經濟過程に入り込むものではない。しかしながら、この要素の一部は、勞働者階級の成熟從つて階級對立が——鬪爭の發展が一定段階に到達するとゝもにまづその廣汎なる生活過程の批判より出發して、經濟過程へ近接し之をも批判するの生活要求に導かれうるしまた導かれずにはゐない。

從つて、この要素が有產者社會に向けうる批判の領域は、その全生活過程にまで及びうるのである。（註）

（註、）從來、マルキシストの間に行はれたる、所謂革命的知識階級のかゝる轉向の分析究明は、主として、この要素が意識過程を最も廣汎に生活するといふことに限られて居た。（レーニン、「何をなすべきか、」——「大衆の自然生長性と社會民主々義の目的意識性」の項を參照せよ。）

だが、私はこれに政治的生活の過程を加へる。私は他日これを詳論する機會をもつであらう。）

所謂方向轉換過程は、まさに、これらの二要素——大衆の自然生長性とマルクス主義の意識的行爲性——の結び付きによる、勞働者運動組合鬪爭意識から全無產者運動、全無產階級的政治鬪爭意識への發展の過程である。

かゝる結び付き……發展、轉化によつてのみ、階級鬪爭は眞實に意識的變革的性質を獲得しうるのである。

かくて、今や、わが無產者階級はその歷史的任務の現實的完成——實現の具體的開始につきつゝあるのである。

かくて、わが無產階級は、今やはじめて、一切の問題を合理的に解決しうる。彼は、今やはじめて、あらゆる經濟鬪爭、あらゆる自然生長的政治鬪爭——それ自身にゆだねられては、具體的改良的要求に立ちとゞまらんとするところの——を、あらゆる人民層——————主として、、、、、に向けられ、それに終止せんとするところの——をも全無產階級的、、、、、せしめ、たかめることができる。

更に又、彼は、今やはじめて、、、、、、、、に於けるその役割の眞實の擔當者たらんとしつゝある。

しかも、氏は私の主張を虛構していはれる。

「氏は現在を指して政治過程と稱してゐるが、然らば現在經濟的鬪爭を全然拋棄すべきかといふと氏は然り！と即時に答へる」と。

氏は社會變革の諸過程間の關係、その交互作用を見きはめえられないのだ。氏は現象を蒐集、羅列することしかしえない。

されぱこそ、氏はつゞいていはれる。

「生産關係の予盾が存在してゐるし、之を意識する者としない者とがあり、經濟鬪爭もやれば政治鬪爭もやり、國際的協同戰線も弱いながら張つてゐる」と。

三　理論鬪爭

「階級『それ自身』と『自己の爲の』階級との相異を認識し得ない福本イズムは、更に進んで理論と鬪爭を分離させてゐる。

「斯かる唯心論的認識は、必然に『理論』と『鬪爭』の分離なる理論を生み出すのである。」(六九頁、上)

では、「理論」と「鬪爭」はいかなる關係にあるといふのであるか？氏はつひに一言もそれに觸れられない。否、それは、實は、氏の理解の限度を、はるかに遠く超えた問題なのだ。

マルクス主義の「理論」とは、しからば、何か？

マルクス主義者の

「理論的敎義は、決して、世界改良屋によつて發明され又は發見されたところの觀念又は、原則に依存するものではない。それらは、現前の階級鬪爭の、——吾人の眼前に行はるゝ歷史的運動の、——事實上の諸關係の一般的表現に外ならない。」(マルクス)

だが、旣に闡明したるが如く、わが無産階級にとつては、その社會的存在の必然により、その自己認識の體系——理論は同時に全社會の客觀的認識——客觀的眞理——理論となる。

勿論、かゝる理論は一擧に、あるひははじめから完成したものではありえない。

それは、常に、有産者社會の全面的批判によつて、無産者自身のうちに執拗に成長するところの有産者的意識形態との假借するところなき鬪爭によつて、大衆的鬪爭の經驗の批判的攝取によつて、絕えず深化されなければならぬ。

しからずんば、それは必然に「公式化」され、固定し、社會の現實性と乖離するにいたる。

かくして、理論が益々適確に社會の變革過程を把握するに從つて、理論の革命的職能——「理論」と「實行」の辯證法的統一——は常により高き形態に於て完成されゆくのである。

理論のかゝる職能を見えざる北浦氏は必然に所謂方向轉換過程に於て、組合主義的鬪爭より全無産階級的政治鬪爭への發展——轉化を可能ならしめるために、まづ戰はるべき理論鬪爭の意義を把握することに完全に失敗される。

だから、氏はいはれる。

「氏(福本)によれば無産者階級は

『經濟主義、日和見主義との鬪爭は當分理論鬪爭に局限する』底の『方向轉換』をしなければならないのだが、だが實踐は『諸主義との鬪爭は理論鬪爭に局限』されてをらず、ヨリ多く實際鬪爭に於ても行はれてゐることを示してゐる」と。(六九頁、下)

しからば、私は私の「方向轉換」論に於て、「この原則(「無産者結合に關するマルクス的原理」)を戰ひとるがための鬪爭は當分理論的鬪爭の範圍に制限せられざるをえぬであらう」といつた。だが、私は、そ

もそも、いかなる形勢の下に於て、かくいつたか？

當時、わが無産階級が「始めて、結合――全國的一大政黨樹立の必然に當面してゐる」形勢の下に於て。

故に、私の主張せんとするところは、當時、直ちに組織的對立にまで對立することの不可なることを明らかにするにあつた。

「この原則を戰ひとるがための鬪爭」は、當時の形勢の下に於ては、「理論的鬪爭」の限度、形態に於て戰はるべきであつた。

そして、かゝる「理論的鬪爭」の展開のうちに、マルクス的要素は自らを昂揚し結晶せしめうるのであつた。

かくして、はじめて、「單なる意見の相違」――同一傾向內の――と見えたところのものを「組織問題」にまで、從つて單に「精神的に鬪爭する」に止まりしものを「政治的、戰術的鬪爭」にまで開展しうるのであつた。

しかも、かゝる限度、形態の制限をはるかに超えて、所謂方向轉換過程現下の發展段階が全無産階級的政治鬪爭にまでたかまりつゝあるものなるとき、我々の鬪爭を目して「理論鬪爭に局限する底の方向轉換」をなすものだとするは、まことに、誣ひるの甚だしきものといはなければならぬ。

九　北浦氏の企圖の失敗の根據

北浦氏は私の理論的根據をつかんとして、あらゆる曲論と虛構を試みられた。

しかも、以上によつて明らかなるが如く、かゝる氏の企圖は、いともあはれなる失敗を遂げてゐる。

しからば、かゝる失敗の根據は如何？

氏の立場を貫くところのものは、常に「經濟」が「政治」に對して優位にあることを主張する經濟主義である。故に、氏は政治的鬪爭の過程が決定的のものなることを到底理解しえられない。これ、氏の企圖を失敗せしめたる第一の根據。

氏は、從つて、理論鬪爭の意義を把握されるに由ない。氏の理論鬪爭に對する從來の無關心――無理解は、累積し來つて、つひに、虛構と漫罵にまで激變した。直接には、日本勞農黨の出現と、それによる氏の極度の混亂を契機として、これその第二。

最後に、氏の論策をして、あれほどまでに悲慘な失敗に終らしめたのは、氏が、私の立場にのぞむに、「先驗的に一の構成をもつて」せられたからである。

氏はいたましくも、自らそれを告白して居る。ではないか？

「福本イズムは今『流行』の最中である。此の流行は多くの損害を無産階級に與へつゝある。それを自覺し得ないのは『福本宗』の信者のみである。……

故に筆者は斯かる損害が何に原因するかを見極めやうとして、福本氏の著書を漁つた。」（七一頁、上）

――（一九二七、二、二三、稿了）――

帝國主義の理論とその陥落の過程……猪俣津南雄

本期に於ける帝國主義の變質……高橋龜吉

資本主義の「安定」とその性質……山川均

日本資本主義發達の現段階……薄茂人

題　未　定……山田盛太郎

資本主義安定の理論的批判……ジャン・ステン

支那に於ける反帝國主義運動……市村今朝藏

支那太平洋を中心とする日英米の帝國主義的葛藤……マヌイルスキー

モスクワ對極東就中對支那民族政策……スターリン

資本の蓄積と帝國主義……エス、デウウオイラツキー

帝國主義的政治過程……淺野晃

アメリカ帝國主義の本質ダラア・デイプロマシイ……佐々木修一郎

オツトー・バーウヰエルの資本の蓄積と帝國主義……向坂逸郎

ジエー・ロヴエストンのアメリカのヨーロツパ征服……岡田宗司

帝國主義に關する文獻集録……

（定價壹圓貳十錢　送料十錢）

改造社

憲本聯盟劇

山川均

○

このほど、吉右衛門といふ役者が誰とかに扮した出來榮へは見事であつたが、その誰れとかはおり〳〵金歯を光らせるのが目障りで宜しくない、いや惡るくない、といふ論爭を或る新聞の投書欄で見受けたが、さもなくても日頃から播磨屋は、ひどくその金歯を氣にやんでゐる、といふことも書いてあつた。舞臺の上に立つ役者は、些細なことにも慘憺たる苦心をしてゐることであらうが、見物人がこの苦心を、どれだけ買つてゐるかは分らない。いくら苦心を重ねた扮裝でも、美人の頬骨が出つ張つてゐたり、足が毛もくぢやだつたりするのは感服せぬ。

ブルジア政治の舞臺を勤める政治劇の役者の役のすることも、その通りであつて、役者としてはもちろん肝膽を碎いてゐることではあらうが、根が男が女になつたり女が男に化けたりするのだから、どこかにあらが見へざるを得ぬ。舞臺よりも天井の方に近い三等席や四等席で見物してゐる素人の吾々の目にさへもとまるような、おかしな事がいくらもある。

○

五十二議會は開幕前から、だん〳〵雲行きが怪しくなつた。開幕劈頭、政本兩黨の不信任案の提出によつて、五十二議會は解散のほかなき形勢に追ひつめられたかのようであつた。しかし見物人のうちの果して幾人が、この芝居の大詰は必ず解散にちがひないと信じ得たらうか。多くの見物人は、形勢がこゝまで切迫しても、まだ何とかなりそうだ、たとへば思ひがけない人物が花道から驅けつけて、局面が急變はしないだらうか、そして、こゝまでになつても、何だかまだ解散にありそうにないといふ漠然たる豫想を一掃することができなかつた。

これは第一には、過去において見せられた多くの芝居が、そう思はせた。第二には、不信任案の內容が特にそう思はせた。在野黨がいきり立つて突きつけた不信任案には、拔き差しのならぬ實際政策上の問題は、注意深く避けられてゐたからである。第三には、この芝居の花形役者たる政友本黨の身振りが、そう思はせた。本黨はこの逆樣式不信任案の提出をもつて、政友會との提携劇の大詰にしようとしてゐたのである。

三黨首の會見――その脚本は、本黨側と研究會側とで書きおろされたとまで噂されてゐる――は舞臺の光景を一變した。もう一度舞臺が廻つて憲本聯盟の場面が現はれる。

○

憲本聯盟とは一たい何だらう。吾々は先づ舞臺における演出者のせりふに傾聽してみよう。

『昭和新政の初頭朝見の御儀において、優渥なる聖詔を垂れさせ給ひ百僚民庶の嚮ふ所を示させらる、叡慮高遠率土感激せざるなし、吾人籍を政黨に置き國政の重きに參ずる者にありては、發憤勵精聖旨を奉體して献替の至誠を竭さんことを誓ひ率らざるべからず』。憲政會內閣と『皇室に對する意見を異にし』それがために『忠誠なる臣子の能く忍ぶ所に非ら』ざるところを無理矢理にも忍んで出した不信任の決議を引つ込めるためには、これだけの掛け聲が必要であつた。、、なる』ブルジア政黨首領の一擧一動、進むにも、、、、、、、、、退くにも、、、、、、、、、、そして瓦斯體のような『發信』が固定して固形體になつたものが、三黨首の會見、花道から決議案の、逆戻り本黨政友提携の打切り、それから憲本聯盟への寢返へり等々なのである。そしてこれはみな――床次總裁の聲明によると――畏くも昭和新政の初頭、、、、、、、、において垂れさせたまふた、、、、、、、、淵源したのである。

かように、、、、の塊まりで出來上がつてゐる在野黨――なかんづく政本黨――は、『昭和第一の議會をして、必要の豫算へ國民の財布からたつた十七億圓ばかりつかみ出す豫算と、それから序でをもつて、一億圓ばかりのはした金を或る財閥にくれてやる氣前のいゝ法案をも添へ物にして』を成立せしめ、平和に（たしかに平和にちがひない）終始するの適當なるを感じ、斷然從來の經緯（いやに足元に絡らみついてくる政友會との從來のかゝり合ひ）を截斷して、政局を安定し、大喪に服するの意を決したり』。何と殊勝な心掛けではないか！

○

日本魂は義侠の魂である。だから憲本聯盟で一杯食はされた政友會の方に、幾らかの安價な同情が向いてゐる。しかしよく〳〵考へて見ると、魚は針に釣られる前に食慾に釣られるように、詐僞に引つ掛つた人の百人のうちの九十九人までは、欺僞師の巧妙に欺かれる前に、自分の慾張りに欺かれてゐるのである。政友本黨といふ油揚を咬へて政權の沖空に舞ひあがらうとしてゐた政友會、そしてこの大切な油揚をさらはれた政友會、これは一概氣の毒にはちがひないが、しかしよくよく考へて見ると、この爲にも、虫のよすぎるところがあつた。

三黨首の妥協で不信任案が豫定の如く片附くと、床次總裁は政本提携の結末をほのめかした。しかし政友會側では、どうでもかうでも

の提携を續づけてゆかうとした。何時まで續づけるのか？『三黨首の妥協による深甚の考慮の實現するまで』つゞけようといふのである。

かように昔から利巧者で通ほつてゐる猿は柿の木の下まで蟹と一緒に行かうとした。それが先きは？政本提携には、もとよりそれから先きの約束は含まれてゐなかつた。ところがブルジョア政黨にとつては

ほんとに重要な問題は、それから先きであつた。問題は柿の木の下まで辿りつくことではなくて、誰れがその柿の實を食ふかといふことであつた。深甚の考慮が實現したあとで、誰れが熟柿にありついて、誰れが澁柿を投げつけられるのか分らぬやうな提携の約束は、ブルジョア政黨にとつては一片の反古である。反古のうちでも新聞反古か何かである。憲本聯盟が、一と通りの提携なんかのやうな薄弱なものではないと誇つてゐるのは、その約束のうちに、熟柿の處分を包括してゐることを意味してゐる。政本提携は、柿の木の下まで辿りつく同盟であつた。憲本聯盟は、手廻はしのよいそれから先きの同盟である。

○

若槻首相は早晩、深甚の考慮をするにちがひない。政友會はチンチンとお預けとを同時にして、この深甚の考慮を待つてゐた。

ところが若槻首相は、通り一ぺんの深甚の考慮を約束したばかりでなく、もつと深甚なる『深甚の考慮』を約束した。かれは政友會の要求する『深甚の考慮』をする上に、も一つおまけに、この深甚の考慮のその先きのことまでも、序でに深甚の考慮をしたのである。

この深甚にして且つ深甚なる考慮が、憲本聯盟であつた。

しかし深甚の考慮をしたのは、若槻首相だけではない。床次總裁にいたつては、恐らくもつと深甚の考慮をしたにちがひない。そこで若槻首相の深甚の考慮のその先きのことを心配するといふ點では、若槻氏と床次氏とは憂ひを同じくする人であつた。即ち『天下同憂の士』であつた。であるから『國家を念とし政策を本位とし』そのほかの私ごとは一切氣にかけぬ床次總裁は、『區々の感情を抛棄し從來の行懸りに拘泥せず（言葉をかへて云へば恥も外聞もお構ひなく）天下同憂の士と共に誓つて碎勵の誠を致す』ことに取り極めたのであつた。

いかにも筋道が立つてゐる。筋道が立つてゐるといふのは、誰れにも道がよく分かる、誰れにも筋道が見え透いてゐるといふ意味である。從つて憲本聯盟をさして、政權獲得の『陰謀』よばはりする政友會の連中こそ、尻餅をついた拍子に目がくらんでゐるのであつて、苟も目の明いてゐる者には、これは少しも『陰謀』ではなくて、種をあかした手品である。『惟予に日新の皇猷を翼賛するがため、わが黨の獻替すべきもの……政治の公明を期するはその一なり、政權の爭奪に沒頭し、陰謀術數をこれ事とするが如きは、斷じて排せざるべからず』とは、いみじくも云つたものである。芝居もこれだけ大つ平に打たれゝば、桟敷の隅々にまでよく見へる。ひとり舞臺の上ばかりでなく、樂屋の中までまる見へである。役者の方で敢へて皺くちやの顔を塗りかくさうとしなければ、見物人の方でも、金歯の光るくらいの些細のことは、固より氣にならぬ。

○

憲本聯盟の芝居のもう一人の花形役者たる安達遞相は、憲政會代議士會での演説のうちに、『昭和新政の政局は安定してゐるかどうかと申せば、決して安定してゐると云ふ譯にはゆかぬ』と云ひ、『この聯盟の外、目下の政局に處する安定策なしと堅く信じて居ります』と述べて

ゐる。そこでブルジョア政治家の謂ゆる『政治の安定』とは、第一には、内閣がこの議會を無事に切り抜けられるといふ、見込みの立つことであり、第二にはこの内閣の次には、政權がどこへ落ち着くかといふ見込みの立つたこと──なかんづく、自分に取つて都合のよいところへ落ち着く見込みの立つたこと──なのである。なるほどこの意味では、憲本聯盟の成立する以前の『政局』なるものは、ずいぶん不安定──そう精確にいへば不安心──なものであつて、憲本聯盟の成立が、内閣と憲政會側とのこの不安心を一掃し、政局を安定せしめたにちがひない。

しかし『政治の安定』といふ言葉を、もつと廣義に──或はもつと狹義に──用ひたなら、憲本聯盟劇によつて謂ゆる『政局』が安定したり不安定になつたりすることが──即ち憲本聯盟劇が上演せられるといふことが──實はブルジョア政治勢力の安定してゐる何よりの證據であつて、ブルジョアジーの政治的支配は、聯盟劇を待たずして、充分に安定してゐたのである。

○

五十二議會は、第一には、憲政會が存在の理由──存在のブルジア的理由──としてゐた謂ゆる緊縮政策が、もはや終りを告げ、從つて憲政會内閣の壽命が終りを告げたことを意味してゐる。緊縮政策とは、戰爭の終りのために、急にその脚の下で收縮した基礎に相應して新しい權衡狀態を恢復するために日本の資本主義のうちに行はれ──また行はれる必要のあつた──調整作用の、財政上の方面であつた。これは日本の資本主義の生存の必要と、全ブルジョアジーの必要とが命じた政策であつた。なかんづく、それは小企業や小資本を犧牲として大企業と大資本が生き殘り、銀行資本が工業資本と合體するために必要な政策であつたから、從つて既成政黨が直接に代表してゐる社會層にとつて、必要欠くべからざる政策であつた。そこでどの政黨も、齒ぎしりをしながらも、この政策に對してばかりは、正面から弓を引くわけにはゆかなかつた。

しかしこの調整の作用は、ほゞ一段落をつげた。ブルジョアジーはもはや緊縮政策ばかりでは滿足できなくなつた。この必要を代表したものが、例の『不景氣問題』であつた。

憲政會内閣はうはべでこそ、依然として緊縮政策の古看板をかゝげてはゐるが、内實は、看板と違つた品物を賣り出しかけてゐる。明年度の豫算がこれを證據だてゝゐる。

そこで憲政會の財政々策は、大たいにおいて、憲政會の財政々策ではなくて、ブルジョアジーの財政々策であり、從つて政友會の財政々策であり、政本黨の財政々策である。そこで『政策本位』で行動することを信條とする在野黨の諸君は、十七億あらうが十八億あらうが、昭和新政のオブラートに包んで呑みこむことに、少しの不都合をも見なかつた。あくまで政策本位である。そこで政策以外の問題を選んで政府不信の理由とすることが、最も正しい條理であつた。

かように五十二議會は、既成のブルジョア政黨の間には、根本的な政策上の相異がないこと、彼等の政策は──或る特殊な利益の分配を除いては──いつでも取つ替へこの出來得るものだといふことを、明

るい舞臺の上で、棧敷の隅々までも見へ渡るやうに、實演によつて示してくれたのである。

『ブルジョア諸政黨が、少なくとも主要な政策において一致してゐるといふことは、これこの政黨が、同一の利害を代表してゐる證據である。そして同一の利害を代表してゐるといふことは、同一の社會層を代表してゐる證據である。これを舞臺の上のせりふに反譯すると、『國家を本位』とするといふことになる。どの政黨もどの政黨も、彼等のいはゆる『國家』といふものを本位とした政策で『邁進』するのだから、それは一本の軌道の上を走つてゐる機關車であつて、決して正面からも側面からも衝突する筈はない。その代り、絕え間なく追突がおこる。この追突をさして、政局の不安定といふのである。

○

ブルジョアの三大政黨が、同じ軌道の上を走つてゐるといふことは、ブルジョアジーの內部に進行してゐる分解の作用が、まだ政治上に現はれてゐないといふことを意味してゐる。

ブルジョアジーが新興階級として成長してゐる發育盛かりの時代には、そのうちに含んでゐる諸層の分化はまだそれほどひどくない。從つてブルジョアジーは、ほゞ純一な內容をもつた一階級であつた。それはどの部分を切り取つて見ても、ほゞ同じやうな縞柄と色合とをして居つた。資本と企業の集積と集中がもつと進んで來、ブルジョアジーの內部が大資本と中小の資本、大企業と中小の企業の諸層に分かれても、資本主義が登り坂を辿つて居り、從つて大資本が支配を强よめにゆく作用によつて、ブルジョアジー全體が潤ほうてゆく餘裕のある間は、利害の相異は、まだそれほど露骨に現はれない。

ところがブルジョアジーの內部における諸層の間の利害の相異は、大資本がだん／＼と獨占的な性質をもつにつれ、そして一方には、資本主義が下り阪に向うにつれ、おひ／＼と烈しくなつて來る。そして資本主義の衰退の作用が激烈に進行する時期には、この利害の衝突も勢ひ銳どい形で現はれる

ブルジョアジーの內部におけるかやうな分化と、從つてその間の利害の對立とは、だん／＼に著しくなつてゐる。ことに戰後における經濟界の整理──資本主義の再調整──の作用は、同時に中小の資本を犧牲として、金融資本の支配を增大する作用であつたから、從つてまた、かやうな分化と對立とを、一そう甚しくしたのである。

しかしブルジョアジーの內閣に進行してゐるこうした對立は、まだ政治勢力の分野の上に、はつきりと現はれては居らぬ。ブルジョアの政黨は依然として、直接には財閥と大地主の利害を代表した政黨であつて、一般商工階級ないしは小ブルジョアの社會層は、獨立した──もちろん或る程度までの獨立である──政治勢力となつて現はれては居らぬ。これは言葉をかへて云へば、一般商工階級にしても小地主の社會層にしても、經濟上の利害の對立はだん／＼深刻になつてはゆくが、政治的には、まだ完全に財閥大地主の指導にくつ着いてゐることを意味してゐる。

○

これはもう一度言葉をかへていへば、ブルジョアジーの政治勢力のうちには、これを内部から堀りくづす力、ブルジョアジーの政治勢力を分解する力が、今日はまだ働らひて居らぬ――少なくとも鋭どい力では働らひて居らぬ――といふことを意味してゐる。

これはもう一つ言ひかへれば、ブルジョアジーの政治勢力は――安達派相の心配にもかゝはらず――『安定』してゐるといふことになる。かような廣い（同時に狹いとも云はれる）意味でブルジョアジーの政治勢力が安定してゐる間は、『政局の不安定』といふ言葉が、ブルジョア政治家によつて、たゞブルジョア勢力の追突の意味で用ひられるのは、少しも不思議はない。

そこで憲本聯盟劇の脚本が、政局安定のために書きおろされ、それがまた『目下の政局に處する』唯一の安定策となるのである。

ブルジョアの政治勢力を分解させ、その安定を破る力がその内部において鋭利に働らいてゐないばかりでなく、これを外から壓迫する力も、今日はまだ極めて弱々しい。

そこでブルジョアの政治勢力は、そつくりそのまゝ全體として、いよ〱ます〱反動化してゆく財閥と大地主の指導の下に、封建的な反動勢力の遺物を取り入れつゝ、強大な帝國主義的政治勢力となつて固まつてゐる。

しかるに――少なくとも現在では――内からも外からも、この強大な帝國主義的反動勢力の固まつてゆく作用を攪亂する何らの有力な力も働らいて居らぬ。

これが今日、日本の政治上の形勢の特徴なのである。

この政治上の形勢は、精密に、經濟上の形勢に一致する。

日本の資本主義は歐洲戰爭と戰後の時期において、金融資本を特徴とする時期に頭を突つ込んだ。日本の資本主義は行き詰つてゐるか？もちろん行き詰つてゐる。しかし日本の資本主義が行き詰つてゐるといふ場合には、帝國主義的政策が成功せぬ限りは、行き詰つてゐるといふ意味である。日本の資本主義には、まだ發展の餘地が殘されてゐるか？もちろん殘されてゐる、しかし日本の資本主義の前途に發展の餘地が殘されてゐるといふことは、日本の帝國主義が成功する場合には、といふ條件がついてゐる。

日本の資本主義は――世界の資本主義と同じように――戰後期の一大衝擊を受けた。この手傷は漸やく癒へかけた。日本の資本主義は苦しい再調整の煉獄をでゝ、新しい發展への一歩を踏み出そうと身構へてゐる。そしてその前には、帝國主義といふたゞ一筋の道が開かれてゐる。

この經濟上の安定――一時的の安定であるにもせよ、そして安定への作用が、同時にこの安定を破る要素をはごくんでゐるにもせよ――に照應したものが、何らの攪亂的な要素も働らいてゐない、安定した現在の政治上の形勢であつて、同時に新しい發展への身構への政治上の現はれが、帝國主義的反動勢力の結成なのである。

この反動化への傾向は、五十二議會の著しい特徴であつた。これは五十二議會に提出せられた（又は提出せられんとした）主要な法案がこれを證據だてゝゐる。

今日のあらゆる宗教は、文字通りに『民衆の阿片』であるが、この阿片の國家專賣制度が即ち宗教法案である。宗教法案は、現存秩序に虫のつくことを豫防する最も有効な防腐劑たる宗教を、國家の制統の下に置かうとするものであり、民衆を精神的に支配する最も有効な道具を、國家の直接の監督の下に移そうとするものである。（近頃ある無産者運動に關した新聞で、宗教法案は、信教の自由に干渉するものだといふ立場に立つた反對論を見た。しかしすべての宗教が、完全に支配階級の支配の機關になり終つてゐる時に、信教の自由といふ問題はあり得ない）。勞働組合法案は、組合運動の發達といふ既成の事實を承認して、これを積極的に合法化しようとする法案ではなくて、組合運動を制限し、その發達の方向を指揮命令する權利までも、ブルジョア政黨によつて組織せられる政府と官憲の手に收めるための法案である。小作法案にいたつては、小作人の組合運動を合法化するといふ假面をさへも着けないで、公然とこれが潰滅を企てるものに外ならぬ。

たゞ『國家を念とする』ために、一億圓でどの財閥を喜ばせるかについて取つ組み合ふことを辭しない對立政黨でも、こうした反動政策の採用には、仲よく一致して『昭和の新政』に獻替するのである。

○

政本提携、不信任案の提出、三黨首の會見と深甚の考慮、不信任案の逆戻り、憲本聯盟、床次總裁の得意と田中總裁の落膽、等々々——政局の舞臺は百日足らずのうちに一轉し、再轉し、三轉した。しかしこうした政局の幾回轉は、決して一定の心棒なしに回轉したわけではない。それは前後を一貫した、一本の心棒をめぐつて回轉した。

そしてこの政局幾回轉の心棒となつたものは、解散の回避にほかならぬ。普通選擧の實施と、必然にこれに伴ふ無産階級政治勢力の擡頭に對して、なほ一年間に準備の餘裕を得たいといふ熱望において、二つのブルジョア政黨は、完全に一致したのである。政局の目まぐるしい回轉は、三黨派の不一致を心棒として回轉したのではなくて、この一致のために、欺むくものは能く欺くことができ、欺かれるものは、自ら好んで欺かれた。

これが昭和新政の初頭に、國民が十七億圓の觀覧料と引きかへに見せられた芝居である。

官憲の報道管理

山根眞治郎

英米の採つてゐる自由主義の出版立法を、そのまゝ丸呑みにして日本に布けよとは私は云はない。しかしこゝに考へたいのは、英國にせよ米國にせよ、あの自由な出版立法で何の不都合もなく、何の危險もなく、むしろ反つて繁瑣な規定を設けてゐる國々——特に日本などよりか非常にいい効果を擧げてゐると云ふことである。出版に對する矢鱈な干渉は、ひとり出版文化を迫害するに止まらず、ひいては文化人の生活を、退轉逆行せしむるものであつて、この點につき英米が早くから進歩した自由主義を採用し、言論自由の原則を如實に行ふてゐることに、先づ何よりも賛意を表して置かなければならない。

今度政府の提出した出物法案を見るに、舊態依然たる警戒立法であつて、四五の條項を除いては、各條ことごとくが出版への鐵條網であり出版人への鐵柵であり、憲法の與へた言論の自由は根本から覆され『法律の範圍內に於て自由である』のでなくて、『法律命令の許した處に於てのみ自由である』とされてゐる、言論自由の抹殺——、極端なやうであるが、私はこう斷言して憚らないのである、以下少しくこれについての私見を述べて見やう。

一

法案第二十八條を見て、誰しもが心附くのは、內務大臣の記事制限權を創設したことである、これまでも軍事外交の機密に關しては、それぞれの主務大臣に於て自由に禁止制限を發令することが、出來たのであるが、廣汎な意味に於て——治安維持と云ふ內容不明な茫漠たる意味に於ての自由なる記事制限權は、いづれの機關にも附與してなかつた處である。たゞ一つ、發賣禁止を命じた場合に於てのみ、內務大臣は引つゞき同一事項を新聞紙に掲載することを差止むることが出來たのであるが、これは發賣禁止に伴ふ一種の附加刑とも見るべきものであつて、法案の事前禁止權とは性質に於ても、威力に於ても非常な相違があつたのである。

本來出版物に對する法的威力の干渉は、言論自由の原則に鑑みて、極めて例外の場合に限られなくてはならない。處が日本の現行新聞紙法は何うであらう。

甲、法律によるもの。

イ、記事の禁止制限、

一、新聞紙は犯罪を煽動し犯人を賞恤し又は刑事被告人を陥害する記事を掲げることが出來ぬ。

二、公判に附する以前に於て豫審の內容について書くことが出來ぬ。

三、公開を止めた公判の辯論を書く事が出來ぬ。

四、官公署又は議會に於て公にせざる文書又は不公開の議事の內容を掲載することが出來ぬ。

ロ、發行廢止の推定

ハ、正誤の强制

乙、裁判によるもの

裁判所は軍事外交に關する禁令に違犯した事項、安寧秩序風俗を害する事項、皇室朝憲政體に危害を及ぼす事項等を新聞紙に掲げた場合、事案の裁判に伴ふてその新聞紙の發行禁止を言渡すことが出來る、

丙、命令によるもの

イ、發行差止(發行手續違反の場合)

ロ、發賣禁止　安寧秩序風俗を害する記事を掲げた時、

ハ、差押、

ニ、記事差止、

A、檢事を命令主體とする場合、即ち通常云ふ記事差止であつて刑事々件の捜査又は豫審中に發せられるもの

B、陸海軍大臣を命令主體とする場合、

C、記事の內容が安寧秩序風俗を害するため內務大臣が發賣頒布を禁止した時、爾後同一記事の掲載を差止むるもの、

以上甲乙丙の三様に亘つて、澤山な干涉規定を設けて居り、この外にも少年法、刑事訴訟法、軍機保護法、要塞地帶法などに種々なる制限規定がある、而して今回の出版物法案は、右述べた現行法の干涉規定を、殆んどそのまゝ繼承し、第二十五條に於て掲載禁止事項を列擧主義に則つて皇室の尊嚴を冒瀆する事項外六項目を掲げ、第二十六條に於ては刑事訴訟書類の內容掲載につき公判開廷前と改めて、現行法の公判に附する以前とあるに制限の一歩を進め(刑訴五五條と脉絡するため)第二十七條、第二十九條、第三十條、第三十一條みなそれぞれ現行法同様の苛酷な制限と干涉を規定して、うつ然たる警戒法典の體様を完備せしめてゐる、しかもその第二十八條に於ては、治安維持令以上の暴威を暗示する、內務大臣の事前禁止權なるものが、嵎を負ふ猛虎のやうに、爛々たる警戒の眼を光らせてゐるのである。

第二十八條　內務大臣は治安維持上重大なる影響を及ほすの虞ある事件に關し、特に事項を指示して之を新聞紙又は雜誌に掲載することを禁止し又は之を制限することを得

この一ヶ條は、どんな無神經な人間にも、錐のやうな强い刺戟を與へずには置くまい。つまり時の政府は、治安維持と云ふ雲を摑むにひとしい理由の下に、何時でも自由に新聞雜誌の記事を制限禁止し得るのである、たとへば一個の利權運動に關する記事でも、また政黨と政商との取引記事でも、それが政府になにがしかの關係をもち、記事の掲出によつて世論を呼び起しさうにでも見られた場合、忽ち治安維持と

云ふ内容空漠な怪物が飛び出して、即時に掲載禁止となるのである、今日のやうに政治道徳が頽廢し、既成政黨があらん限りの醜態をつくしてゐるやうな場合、かやうな事前禁止權を政府に與へて置くのは、世に云ふ狂人に刄物も同樣であつて、その危險眞に驚嘆すべきものであると信ずるのである。

政府は實の處餘程以前から、この事前禁止を行ふてゐた、法文にも無い横暴な禁止制限を平氣の平左でやつて來てゐたのである、一例を云へば某銀行が滅茶苦茶な貸附をして收拾不能の危地に陥つてゐるのを保護し、その彌縫運動を穩密の間に進行させるがために、「某銀行に關する記事を掲載すると禁止處分に附せられる」と云つた風に警視廳をして新聞社を威嚇せしめてゐたのである。一銀行の内面暴露が何うして一國の治安に影響があらう、これは云ふまでもなく、某銀行を特別に庇護する必要があつたからで、一國の治安維持には何の關係も糸瓜もなかつたこと勿論ある、處で今度の出版物法案では、この特別手段が立派に成文化し、出版物法第二十八條となつて、大ビラに干渉威嚇の巨砲を据え込んでしまつたのである、驚嘆せざらんとするも得べからずと云ふべきである。

一銀行の内面暴露をさへ、一國の治安に危害あるものとするなれば、日夕の政治的經濟的社會的の出來事の主なるものは擧げて悉く治安に影響ありと云ふ事が出來やう、若槻床次の聯盟はもとより、瓦斯議員の會合、震災手形の密談、小作爭議勞働運動、等々擧げて悉く記事掲載禁止の目的となつて、一切の醜悪と權謀とは、出版法第二十八條と云ふ、變幻自在の黒幕に擁せられて、公然同樣に行はれるであらうと考へられる、天下の不幸これより大なるはない。

〔註〕いま議會の問題となつてゐる、震手法案に關係ありと傳へられる某銀行のことについても、早くから禁止にひとしい威嚇命令が出てゐる。

二

新聞紙雜誌の記事に對し、本人又は直接關係者から正誤の申込があつた時は、之に應じなければならない――。

これは當然過ぎた當然であつて、誰あつてこの法意を非議する者はあるまい。處で問題は條文の解釋適用の上に起る。新聞雜誌の報道は自由であるがその内容は眞實であることを必要とする。もし誤りを世間に傳へた場合、その新聞雜誌はいかなる責を負ふべきであらうか。

出版法案第十九條は、これ一つの規範を與へた。

新聞紙又は雜誌に掲載したる事項につき、其事項に關する本人又は直接關係者より、正誤の請求又は正誤書若くは辯駁書の掲載の請求ありたるときは、其の請求を受けたる後日刊の新聞紙に在りては第三回迄、其の他の新聞紙又は雜誌に在りては第二回迄の發行の新聞紙又は雜誌に於て、正誤を爲し又は正誤書若は辯駁書の全文を掲載すべし(下略)

こう云ふのである。つまり掲載記事に對して正誤の申込があれば、右に掲げた期間内に正誤せなければならぬのであつて强制規定である。出版倫理の上から云つても斯くあるべき道理であつて、何人も一點之に異議を挿む謂はれはない。が而し乍ら玆に考へたいのは正誤

取消の要求は無條件であるがどうか――具體的に云へば正誤の目的たる記事が眞實であらうと、錯誤であらうと、掲載そのものに對し正誤要求權が成立つのかどうかと云ふことである、現行新聞紙法第十七條には「掲載したる事項の錯誤につき……」と云ふ文字があつて錯誤と正誤とを相對の立場に置いてゐるが、新法案では特に錯誤と云ふ文字を削つてゐる。疑は一層深くならざるを得ぬ、そこで順序として先づ現行法第十七條の錯誤とは何を指すのであるかについて考へて見るにこれ又内容の一定しない不可解の文字であつて、書かれた本人又は直接關係者から見た間違の意味であるか、それとも第三者が公平な立場から見て間違つてゐたといふ意味であるか、二者何れとも判じ兼ねて出版人を迷はすこと甚しいものである、然るに多數の裁判例は、錯誤の意味を前者に解釋し、報道内容の眞否に係はることなく、何でも彼も正誤取消の求めに應ずべきものとなしてゐる、即ち正誤要求權は、悪人にも名譽毀損の要償權があると等しく、報道がよし眞實であつても正誤取消の要求權は存在するとするのである。眞實の否認が法律によつて公然權利づけられた處に、我等の大なる怒りがあつた。

〔法曹會決議〕　正誤の請求を受けたる時は其事項の眞實なると否とを問はず正誤をなすの義務ありとす。

新法案十九條に於て錯誤の文字を削つたことは、恐らくこの二字を無用としたのであらう、右に掲げた法曹會が代辯してゐる通り、司法界一般の解釋が斯くある以上、も早や錯誤を理由とするところの古い觀念は立法技術上、何の價値をも持たない筈である、法案十九條はかくして出版人を脅威し、眞實の否認をすら擁護するの横暴を逞へるてすに至るであらう、社會正義の理念から見て、これは果して妥當であらうか何うか。識者の一考を煩はしたいものである。

三

法案第五條は編輯者を定義して「新聞紙又は雜誌の編輯を管理する者」とし、第七條第一項第六號によつて屆出を命じてゐるが、更に「新聞又は雜誌の版に依り其の編輯者を異にする時は其版別編輯者」をも屆出ねばならぬこととし、こゝに新しい版別編輯者なる觀念を作り上げた。

新聞紙について云へば、毎日の版數二三十、しかも編輯者は決して一人とは限らない、殊に地方版の如き一版一人の編輯者であることが常である場合、この版別編輯者は何人を指すのであらうか、第五條の定義に從へば管理する者である、管理とはどの程度の事務を意味するのであるか不明であるが、現行法第九條の更生版してこの法文を見る時、管理とは擔當の意味ではないかとの疑が生ずるのである、もしも管理を擔當の意味であるとしたならば其結果は何うであらう、法案第三十二條は、編輯者の屆出に虚僞を以てしたものに對して發行差止を命ずるであらうと定めてゐる。版別編輯者の詮議立は内務官憲の自由であつて、この權力行爲を以て新聞社に臨み、一々別管理者の屆出を強要したとすると、その脅威や眞に新聞社をして、氣死せしむるに足るものがあるであらう。

殊に新聞紙の版別編輯などゝ云ふのは、もと〳〵机上の空論であつて、記事の轉々錯雜し、伸縮が除されて行く有樣を見ては、誰かよく

責任者を定め得やう。徒らに管理者の氏名を羅列せしめて、事前の責任の歸處を明かにして置かうとするのは、實際を知らざる迂遠千萬の沙汰であつて警戒立法の行詰りである、私はこの點について、やはり現行法第九條の事後に責任を定めやうとする立法態度に賛意を表するものである。

(註)、判例によると現行法第九條のいはゆる實際に編輯を擔當した者とは、署名人以外に編輯を擔當したものを云ひ、編輯の一部分を受持つた者をも含むことになつてゐる——大正三年れ第一八九七號大審院判決——、もし今度の新法案がかゝる詮議立を廢止して、届出でられたる編輯管理者のみを刑責負擔者とするのも法意であるとするなれば、新聞界の實情に適合した立法であると云へないこともない。而かも前に述べた第三十二條の脅威を何うするであらう。尙問題となるのは著作者の責任に關する二種の規定である、即ち(一)皇室、國體、政治組織の大綱、私有財産制度を法益とする出版犯罪には著作者(新聞雜誌に於ては外交記者に相當する)をも二年以下の禁錮に處し、(二)軍事外交の機密侵害、犯罪煽動、刑事被告人被疑者の賞恤及び陷害、治安維持上重大なる影響を及ぼすべき虚僞又は誇大な事項、亂倫殘忍わいせつ記事等を署名著作した者及び公判開廷前刑事事件の書類の內容を書いた場合とか、檢事の差止事項を報道した場合とかには署名著作者もまた禁錮又は罰金に處せられることゝしたのである。(こゝに注意すべきは、前揭第一の場合には署名の文字を缺き、第二の合に於て署名したる者と云つてゐる事である——出版法案第四十八條)これについても相當議論のあることゝ信ずるが、こゝにはたゞ問題として提出するだけに止めて置く。

四

安寧秩序と云ふ化物が引つ込んだかと思ふと、今度は私有財産制度否認、虚僞誇大事項と云ふ正體不明のものが現はれた、一體これは何の意味なのだらう。

私有財産制度を否認せんとする事項——法案第二十五條第四號後段

社會の不安を惹起し治安維持上重大なる影響を及ぼすべき虚僞又は誇大の事項——法案二十五條第六號、

この二つの條文を讀んで正しい解釋を附け得るものがあつたとしたら、それは偶然でなければ奇跡だ、否認せんとするとは一體何を指すのであるか、恐らくこれは立法者と云へども例示に苦しむ處であらうたとへば內亂を起さんとすると云ふのであれば、これは行爲を意味するのであつて直ぐにも判別はつくが、文書の上で否認せんとすると云ふのであつては、何處をどうつかまへているのか容易に判別されるものではない。もしも頭の硬化し化石化した裁判官があつて、昨今の新思想——特に經濟思潮を見たなれば愕然として驚き「これこそ否認せんとするもの」であると判決するかも知れない、事實見やう見方によつては一切の新經濟思潮新社會思潮は私有財産制度を否認せしめんとするものであるかも知れないからである。現行法上の朝憲紊亂安寧秩序の解釋が、いかに裁判官によつて苛酷深刻であるかはこゝに云ふまでもない、幾多の判例はひとしく「思索及び研究は自由なるもその發表は法律の許す範圍內ならざるべからず」としてゐるのに思ひ合せて、

法案實施の結果が如何に重大であらうかはこゝに說くまでもない事である、即ち私有財產制度の可否善惡を論ずるは、許されたる學問の領域であり研究の範圍に屬するものであつて、何等刑責に問はるべきでないとしても、一朝研究に可否の結論を附した場合、果して狹量なる官憲が、これを默止するであらうか何うか、著者對官憲の爭議は、この一ヶ條によつて百出千出萬出するであらうことを疾呼して置く。

――虛僞又は誇大の事項――、白張提灯も臆病者には幽靈と見え、取殘した洗濯物も、野呂間には怪物の姿と見えるであらう。枯尾花ならずとも、見る人の眼によつては、萬象一切が悉く怪奇のもとなるに違ひない、何をか誇大と云ふ、容を改めて聞きたいものである。

〔註〕宣傳ビラは普通出版物である、勞働、社會、反動諸團體の諸君は、今後誇大の法禁に觸れてはならない。

五

以上述べた處によつて、大つかみながら出版物法案についての、私見の大體は盡きたと思ふ要するにこの法案は、二種の現行法を統一して一つの單行法律に作り替へたと云ふの外、出版文化についての貢獻は極めて尠く、反つて警察干涉の惡制度を布いて、著述者編輯者發行者を官憲の前に跪伏せしめようとしたものである、時の政府、時の權力者によつて、この出版物法が劍ともなり刀伏ともなつた時、由々しい反動は躍るが如く皆の下から起るであらう。

惡法を葬れ――。たゞこれだけを述べて結論とする。

×　　×

〔註〕出版物法案中にも、幾らか贊成していゝ氣の利いた箇所が無いではない、試みにその主なるものを並べて見る。

一、免責時効の規定、現行出版法にはこの規定があるが、新聞紙法中に缺けてゐた處のものである。之を三種に區別することが出來る。

A、新聞紙又は雜誌の正誤責任を六ヶ月とした點

B、出版法違反の罪責時効を一年とした點

C、出版物掲載事項の名譽毀損による要償につき特別の免責時効を設けた點（從來は附帶私訴についてのみこの規定があつたのを、獨立した民事々件にまで擴張したのである）

二、普通出版物中營利を目的としないものは、出版營業者以外の一般人にも發行を許した點。

三、發行禁止權の縮少　皇室國體を法益とする犯罪につき處斷する場合に限り發行禁止を言渡し得ることにした點（現行法は風俗かい亂軍事外交の禁令違反にも發行禁止權を認めてゐる）

四、行政處分に事項を指示することゝし、且差押物の一部還附の制を設けた點

（二年三月二日）

ロシア共産黨の「内訌」と其波紋

田中九一

一　事件の概略

昨年の歐洲解放運動界に於て最も注目すべき事件が二つあつた。その一は言ふまでもなく英國の大罷業であり、他は玆に述べんとするロシア共産黨の所謂『内訌』である。而してこの兩者は共に、一昨年具體的な形をとつて現はれたが一時休戰狀態となり、更に昨年春頃に再び勃發し、晩秋に至つて漸く一段落がついた點も類似してゐる。而も兩者は決して並行する二つのものではなく、後述の如く相關連する點を有する。只兩者の相違は、一がブルジョア階級の極度の不安を以て始り、その一時的安堵を以て終つたのに反し、他が多大の期待を以て彼等に迎へられながら、終に之を失望せしめた事にある。而し兩者共決して決定的に終結したのではなく、問題は將來に殘されてゐる。苟も時の動きに關心を持つ者は凡て、この問題を看過する事は出來ぬ。

この小文の目的は之等の人々に對して右の二大事件の一を――主として兩派の爭點を中心にして――出來得る限り正確に傳へ、以て今後の發展に對する判斷の資料を供せんとするに外ならぬ。

ロシア共産黨内部の紛爭は從來屢々行はれた。一九一七年十月革命の時のジノヴイエフ、カメネフ等の反對、一九二一年新經濟政策實施の時の『勞働反對派』、一九二四年のトロツキー失脚事件、及び一九二五年の第十四回共産黨大會に於ける所謂『新反對派』(ジノヴイエフ、カメネフ等)等はその主なるものである。然るにこの新反對派事件の繼續と見るべき昨年の『聯合反對派』事件は從來の『内訌』よりも遙かに重大視すべきものであつた。何となればそれは、從來黨の多數派に反對はしながらもそれ〴〵相異る立場を採て相反對してゐた所のトロツキーと『新反對派』とが共同戰線を張つて多數派に反抗したのみならず、その態度が從來の反對派の如く合法的論爭の範圍に止らずして、陰謀的行動に依つて黨に一分派をつくつて多數派幹部を倒さんとし、更に外國共産黨の不平分子と聯絡をとつてこの目的を達せんとしたからである。

今その運動を極めて簡單に述べれば、反對派は第十四回大會以後昨年七月までの間に(1)モスコー近郊の森林中に不法なる陰謀的會合をなし、(2)黨の秘密書類を印刷、頒布し、(3)地方支部に赴いて分派をつくる運動をなし、(4)インタナショナルの機關を濫用して諸外國の共産黨員又は共産黨より除名せられたる者(後述す)と聯絡を圖つた。共産黨中央委員會は之等の行爲が黨規を亂しプロレタリアートの利益に反するものとして、ジノヴエフ等中心人物を懲戒處分に附した。

然るに反對派は尙その態度を改めず、昨年九月末より益々分派的行動を盛にし、或は共産黨大學に於て、或はモスコウ、レニングラードを始め諸地方の支部に於て分派的運動を行つた。そこで共産黨中央委員會は愈々斷乎たる處置をとる事とし、十月中旬反對派に對して、黨規に絕對に服從する事、一切の分派的行動を止める事等を命令した。反對派も内外の形勢が自派に不利なるを見て、中心人物

六人の署名せる宣言書を以て、右の命令に服從する事を誓つた。但し彼等は同じ宣言書中に自己の見解は飽くまでも曲げず、今後も合法的手段を以て之を主張すべき事を斷言してゐる。

中央委員會は反對派がその命令に服したるため、彼等を黨より除名する事は差控へたが、然しトロツキー、カメネフ、ジノヴイエフ等を黨の重要なる地位より拒けた。共產インターナショナル執行委員會も亦十月下旬の會議に於て、ジノヴエフに對して執行委員長の職を免ずる事を決議した。(今は兩派の爭點を主として述べたいから、事件の經過は之以上立入らぬ。より詳しく知りたい人は『社會思想』昨年十月號及本年一月號を參照せられたし。)

二　兩派の爭點

中央委員會と反對派との爭點を最もよく示すものは、昨年十月末に開かれたる共產黨第十五會全國會議に於ける兩派の大論爭である。私はこの論爭に基いて兩派の主張を比較研究したいと思ふ。但し今は說明の便宜上問題毎に區切つて兩派の意見を對照するが、實際の論戰は各人が凡ての問題を續けて論じたものである。

(1)ロシア革命の性質及前途

中央委員(スターリン)――本問題は三つに分けて考へねばならぬ。即(イ)我國が世界に於ける唯一の無產者獨裁を行へる國にして、他の先進諸國の××、、、、、、、我國に於ける社會主義の勝利は可能なりや、(ロ)可能ならば、それを完全なる、終局的勝利と見得るか、(ハ)終局的勝利でないならば、之を然らしむるためには如何なる前提條件を必要とするか。

マルクスやエンゲルスが一國のみのプロレタリア×××不可能であると考へた事は、エンゲルスの「共產主義の諸原理」(社會思想社譯『無產階級の過去現在及未來』)の問答第十九に依つても明かである。然し之は帝國主義時代前の事情に基いた考にして今日にはあてはまらぬ。この點にレーニンは着眼して、エンゲルスとは反對の結論に達した。レーニンがこの結論を得たる根據は帝國主義時代に於ける諸國の『經濟的並に政治的發達の不同性』である。即、帝國主義時代には資本主義諸國の發達は決して一樣でなく、一國は必ず他を押しのけて進まねばならぬ。その結果之等の國の間に葛藤、戰爭を引起すが、この葛藤は或國の帝國主義の力を弱め、その國に於る社會主義の、、、、、、、しめるものである。その際帝國主義が先づ破られるのは、必ずしも工業の最も發達した所ではなく、その力が最も弱い所(例へば一九一七年のロシア、今日の印度の如き)である。之がレーニンの所謂『不同性』の骨子である。

我黨はレーニンのこの說に基いて、ロシア××の勝利を確信するものにして、十月革命は單に、、、、××の合圖や出發點たるのみならず、、、××の今後の發展の基礎をなし、ソヴイエット聯邦に於ける資本主義より社會主義への過渡期を開始し、この過渡期中、――國際的プロレタリアートの勢力及びソヴイエット聯邦のプロタリアートの勢力が、國際資本主義の我國に對する武力干涉を防止するに足るだけ强大なる限り――我々はプロレタリアートと農民とに對する正しい政策に依つて、完全なる、、、、、、に進み得る事を疑はぬ。而して右の前提條件たる武力干涉の防止に就て考ふるに、苟も資本主義國家と我々との對立する限り、この武力干涉の可能性は何人も否定し得ぬ。然し今日その可能性があるか、といふならば我々は無しと言ふので

ある。今日諸國のプロレタリアートは自國の×××依つて我々を支持する力を持たぬが、然し自國政府の我國に對する武力干渉を防止するだけの同情を我々に持つてゐる。今日の我々の國際的狀態はこの同情に依存してゐるのだ。社會主義の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、今日の如き過渡期に於ける前進には右の同情でも足りるのである。

然るにトロツキズムはロシア××の性質に就て全く別の見解をとる。即ロシア××はそれ自身決して社會主義××でなく、十月××は只西歐の社會主義××の合圖、出發點たるにすぎないものとして、若し極めて近き將來に於て西歐に××が成功しないならば、ロシアはプロレタリアートと農民との避くべからざる衝突に依つて、破壞せられ變質するの餘儀なきに至るであらうと、主張する。トロツキーのこの主張は彼の多くの著書中に之を見出し得る。例へば彼は一九一七年に著したる『平和綱領』中には、『革命的ロシアが保守的ヨーロツパに對抗し得ぬ』事を斷言し、又一九二二年に彼が同書に附したる序文には、『ロシアに於ける社會主義的經濟の眞の飛躍は、ヨーロツパの主要國に於けるプロレタリアートの勝利の後に初めて可能』である。と言つてゐる。之等の說が如何にレーニンの言葉と相異してゐるかを考ふべきである。要するにトロツキーの見解は、我々の革命を時期尚早となし、その持續性を否定する點に於て、社會民主々義と直接に接近するものである。トロツキーが昨年著したる『社會主義、資本主義の何れに向ひつゝあるか』(拙譯『ロシアは何處へ往く?』)を以て、多くの同志は彼が從來の立場を改めて、多數派の立場に服したものと見てゐるやうだが、余はそう思はぬ。彼は本書中に、我が經濟が社會主義に進みつゝあり、といふが、社會主義への到達の可能性を確信してゐない。之は重大なる誤である。

新反對派(ジノヴエフ、カメネフ等)は、第十四回大會當時までは、明かに右の如きトロツキズムに反對したるに拘らず、今度はこの異說者と握手したのである。故に我々は彼等をも亦社會民主主義に墮したるものと斷じなければならぬ。

反對派(カメネフ)——我々は分派的行動の非を悟つて之を解體したが、然し我々の主張の正當なる事は今も前と同樣に確信する。但しスターリンが我々の見解なりとして擧げたものゝ中には彼自身が發明したものもあるから、それと我々自身の見解とを區別しなければならぬ。第一にロシア××の性質に就ては(レーニンの言葉の解釋はスターリンと異る點もあるが)、それがプロレタリア××なりと認め、その勝利を確信する點に於て、多くの同志と異るものでない。若しこの重大問題に就て余が異見を持つならば、諸君と袂を別たねばならぬ。同意見を持てばこそ、飽くまで同じ黨に在つて協力せんとしてゐるではないか。

我國に於ける社會主義社會建設の前提條件としてスターリンは、國際資本の武力干渉を防止する事を指示してゐるが、余は之だけでは不十分であると思ふ。この大會にルイコフが提出し滿場一致で可決せられたる決議中にも『先進資本主義諸國の工業的發達の水準に到達し、更に之に優越する事に努力する必要がある』といふ言葉がある。之は何を意味するか、之は一九二二年にレーニンも言つた如く、我國に未だ社會主義的建設の經濟的基礎の欠缺せる事を意味するものに外ならぬ。この事を大衆に訴へ、この經濟的基礎をつくる事に努力せよと叫ぶは、大衆の勇猛心を喚起するに役立ちこそすれ、それが決して我國に於ける社會主義の勝利を疑ふ事にはならぬと

思ふ。又スターリンは我々が且て反對したるトロッキズムと握手したといふが、余は歷史的トロッキズムには今も反對である、只一定の問題に就てトロッキーと同意見であつたから協力したのである。

反對派（**トロッキー**）――スターリンが提案せる決議案中にトロッキズムの根據として引用せられたる文句は、余が何等かの偶然の機會に書いた重要ならざる書物中より、ほんの二三行をとり出したものにすぎぬ。其外に余は多くの重要なる文書――例へば一九二二年に黨の委任を受けて書きたる『テロリスムスウント コンムニスムス』や、コミンターン第三回大會に於て執行委員會の委任を受けて起草せるテーゼや、一九二三年の國際大會に於て執行委員會の委任を受けて書きし新經濟政策の報告――には凡て、我國に於ける社會主義建設の可能性、之が遂行の意氣込を明示してゐるでないか。之等凡てが、宛も風が吹きとばしてしまつたかの如く、全く引用せられず、前述の如き重要ならざる文書が故らに引用せられたる理由を解し難い。然し余は重要ならざる文書と雖も決して責任を回避するものでない。第一に『保守的ヨーロッパ』はドイツの帝政顚覆に依つてなくなつた。故に今はこの危險はない。第二に我國に於る社會主義の成功を、ヨーロッパ主要國のプロレタリアートの勝利と關連して考へる事は、レーニンも屢々なした所である。（レーニン全集第十五巻二八七頁、第二十巻Ⅱ、四八七頁等を見よ。）この點に於て余の見解とレーニンのそれとは全く一致するではないか。又スターリンは拙著『資本主義、社會主義の何れに向ひつゝあるか？』に、余のロシアに於ける社會主義的建設に對する無確信が表はれてゐる、と非難するが、之は余の意外とする所である。あれは初め『プラウダ』紙に揭載したものだが、同紙の編輯者は一度もこの中に異敎徒的思想が含まれてゐると非難した事はなかつた。スターリンは自分に都合のよい行を他と引離して引用してゐるが、余の序文を見よ。何處に社會主義建設の可能性に就ての確信が缺けてゐるか。

世界の資本主義がどちらに向うとも、我々は、三十年、五十年の間に自國のみで社會主義を完成する力と資源とを持つか、といふ質問をするのは、正しい考へ方ではない。それはあり得べからざる假定をつくり、それに頭を突込んでその出口を探し求めるにすぎぬ。我々は今社會主義的建設を促進する力を持ち、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

、、、、、、、、、、、、、、、我々は十分信頼してよいのだ。從つて余は一國のみで社會主義の完成は出來ないが、ソヴエット聯邦に於ける社會主義的建設の可能性を確信するのである。この確信を持たずして、どうして今迄黨內に止つてゐる事が出來やう。

反對派（**ジノヴイエフ**）――スターリンがエンゲルスやマルクスの說は陳腐となつたといふのは誤つてゐる。マルクスは『一八四九年の新年』中に一國にプロレタリア××を開始し得ると言つてゐるではないか。マルクス等は社會主義の終局的建設は、、のみでは出來ぬ、と言つたのである。余も亦我國に於ける社會主義の終局的建設は、、、、プロレタリアの勝利がなければ不可能であると思ふ。

中央委員（**ブハリン**）――反對派の者は自分が曾て言つた事を言はぬと言つて、我々と反對派との意見の相違を極めて小さくしやうとしてゐるのは卑怯だ。

中央委員（**スターリン**）――トロツキーが自から曾て言つた言葉を、如何に強て辯證せんとしても駄目だ。彼が自己の立場を辯護せんとして援用したレーニンの言葉そのもの何

の機會に書かれたのか。正にその時のトロツキーの誤謬を論破するために書かれたものではないか。又ジノヴイエフがマルクスやエンゲルスの説を强ひて辯護するは當らぬ。成程マルクスは後に稍々說を緩和し一國のみの××の開始の可能性を認めたが、然しその成功は直ぐ續いて起る、、、、、、條件としてゐるのだ。それは兎に角、エンゲルスの『共産主義の諸原理』の誤謬は何處までも之を誤謬としなければならぬ。何となればエンゲルスが玆に言つてゐる××、、、社會主義の終局的勝利の意味でなく、ソヴエット聯邦が今まで遂行し來つたやうなものを意味する事は、第十八問答に明かである。故にエンゲルスの誤謬は我國の事實が之を證明したのだ、それにも拘らず今日も尙社會民主黨は、このエンゲルスの言葉を盾にして、彼等の消極的態度を辯護してゐる。故に我々はこの誤謬を特に指摘する必要があるのだ。ロシア、、、、、、社會主義の終局的建設が可能だなどとは、我々も一度も言つた事はない。今それを問題にしてゐるのではない

反對派が如何に自己を辯護しても、彼等がコミンターンに對する宣戰をなしたるその事が、反對派諸君が××家たり國際主義者たる事を辭したる何よりの證據である。諸君は只××や國際主義の饒舌家にすぎぬ。

(2)、國際資本主義の安定

中央委員 スターリン）――一九二五年の我黨第十四回大會は、資本主義の一時的安定（並に一國に於ける社會主義の建設）を決議したる點に於て、共産黨及コミンターンの史上に特筆すべき大會であつた。爾來我々は、先進資本主義諸國は部分的、一時的安定の狀態にある事を認め、從つて此時期に於ける我々の國際政策は、今後のプロレタリアの勝利のための準備をなす事、即今日の資本の攻勢に對してプロレタリアートの反對攻勢に出づべき力を養ふ事を基調としなければならぬ、と考へてゐる。この目的のために我々は、今改良主義的勞働組合や第二インターナショナルの陣營内にある幾百萬の大衆を、、、、、、、、、、。從つて、、、の戰術は、我々にとつて必要缺くべからざるものである。

然るに反對派は、我々の××の內部的力を信ぜず、、、、××の遲延に自暴自棄となり、××的冒險主義に墮して、資本主義の部分的安定を否認し、猪突猛進の方法を採る事を主張してゐる。この立場より反對派は共同戰線の戰術の修正、英露合同協議會の破壞を要求し、今日に於ける勞働組合の役割を理解せずして、組合を見すてゝ新說明の『××的』組織を以て解決せんとしてゐる。

反對派（カメネフ）――余も亦資本主義の一時的安定を認める。然しこの安定はプロレタリアートに依つて動搖し得るものであり、多かれ少なかれ見透し得る將來に於て、資本主義に對するプロレタリアート、、、に轉ぜしめ得るものと思ふ。それが明日にも可能だとは思はぬが、然しロゾフスキーの如く安定が十年以上も持續するといふ事には多數黨員も與せざる所だらうと思ふ。

反對派（トロツキー）――我々は多數派が資本主義の安定を重視しすぎる事に反對する。例へばイギリスの何處に安定があるか。英帝國の衰退、受動的國際貸借關係、輸出減少、生産減少、等に安定があるか。今日イギリスの崩解を防止してゐるのはボールドウインでもなくトーマスでもない。實にパーセルなのだ。パーセル主義は今日のイギリスの安定の僞名である。故に我々は總同盟罷業を行へる大衆を前にして、パーセルを直接、間接に支持する事に反對し、英露合同協議會の支持に反對したのだ。

反對派(ジノヴイエフ)――我々は安定を認める。而して、この安定を二重の意味に解する。曰く、第一に世界市場に於ける物價下落は、我國の經濟的發達に大影響を持つであらう、第二に帝國主義的諸國團の我國に對する攻擊戰は近づきつゝある、と。尙今日の安定を破り得るや否やに就ては、余は主觀的要素を重視するものである。

(3)勞働者=農民同盟

中央委員(スターリン)――黨は、『プロレタリアートと農民との、、、、、、以てプロレタリアートをして指導的役割及び國家權力を、、得せしむる事に存する』といふレーニンの言葉を出發點としてゐる。プロレタリアートは單に權力獲得の時のみならず、建設時代にも農民の指導者とならねばならぬ。又農村の工業化は、大部分の農民(貧農及中農)の物質的狀態の漸次的改善が出來て初めて、之を實現し得るものである。故に農民大衆と勞働者階級との協力を保障する政策(物價政策、租税政策等)を實行しなければならぬ。

然るに反對派は農民を我々の敵と認め、プロレタリアートと農民との協力を破るやうな政策を主張する。例へば彼等は(イ)工業生產品の價格引上を主張するが、それは貧農及中農の大部分を窮迫に陷れ、國內市場の購買力を減少せしめ、プロレタリアートと農民とを離反せしめ、チェルウオネッツ留を下落せしめて勞働者の實質賃銀を低下せしむる事となる。又彼等は(ロ)農民に對して最高限度の課税をなすべき事を主張するが、之は勞働者と農民との同盟を破裂せしむるものである。

反對派(カメネフ)――余は農村のクラーク(富農)及都市のネップマン(ネップ即新經濟政策に依て出來た成金)の許に於ける蓄積が益々增大しつゝある事を危險視する。クラークはその蓄積に依つて、貧農を自已の味方に引入れんとしてゐる。農民とプロレタリアートとの協力の必要なるは今更言ふまでもない。只問題は如何にして之を實現するかにある。我々は農民を敵視した事はない。クラークは確に我々の敵だと言つたのだ。これを實現する方法は、農民を商品饑饉に陷れず、安い商品を彼等に供給し、以て大工業の領域に於ける社會主義的經濟の有利な事を確信せしむる事である。然らばそのための資源が我國にありや、と問はゞ、余は然りと答へる。只この資源を開發利用する資金を何處から得るかゞ問題である。今の國際關係では外資に頼り得ぬ。茲に於てクラークやネップマンの蓄積に注目する必要があるのだ。余はこの蓄積を再分配し、之を國營工業にふり向ける事を主張する。それには鬪爭に依らねばならぬ。

反對派(トロツキー)――我々は農村に於ける貧富の差の益々大きくなりつゝあるのを阻止するために、貧農の四〇%には免税し、その代りに中農の上層と大農に重税を課すべきものと主張した。

中央委員(ブハリン)――反對派は前の說をコッソリと改め、前に中農と言つた所を今クラークに置き代へてゐる。

中央委員(スターリン)――反對派は勞働者に對する人氣取りのために、賃銀を三割乃至四割上げる事を主張し、その資金を得るために工業製品の大々的値上をなさんとした。之でも貧農の生活を安固ならしめ農民と勞働者との同盟を確保し得ると思ふか。

レーニンは農村に於ける小資本の蓄積の必ずしも恐るゝに足らぬ事を次の如く言つてゐる、――大工業の發達さへあれば、小ブルジヨアジーの資本の增大は恐るゝに足らぬ。大工業の生產缺乏の狀態は、プロレタリアートの小ブルジョアジーに對する抵抗力を弱める

ものであるから、かゝる場合にはたとへ小ブルジョアジーの側に少しも蓄積が行はれない時でも、警戒しなければならぬ、と。（本項に就ては『我等』本年一月號所載櫛田民藏氏の論文を參照せられたい。）

× × ×

兩派の主張は大體右の如くである。右の論爭にも現はれてゐるやうに、兩派の主張は一致したのではなく、兩派共今後黨規の範圍內で、堂々と戰ふべき事を言明してゐる。

三、國際的波紋

ロシア共產黨は世界の共產黨の樞軸にして、諸國共產黨は種々の意味に於てロシア共產黨に依存してゐる從つて右の問題が諸國の共產黨の間にも亦、大きな波紋を投じた事は言ふまでもない。然し既に與へられた頁を超過してゐるから、只その影響を最も激しく受けたる獨佛二國の共產黨に就て一言するに止める。

フランス共產黨の幹部中、ロシアの反對派に與した者はジヤコブとスザンヌ・ジロール女史とである。この二人の極左翼派は、ロシアの反對派が極右翼との提携をも厭はなかつた事までも反映せしめて、代議士ゴウテイエと結託して多數派に當らんとした。又右傾の廉を以て共產黨より除名せられたるスーヴアリヌは、好機到れりとばかりに盛にロシアの多數派攻擊をなしたが、トロツキーやジノヴイエフ等はフランス共產黨幹部に對して、このスーヴアリヌを再び共產黨に加入せしむべき事を勸告したのである。十月にロシアの反對派が解體した時、ジアコブは前非を承認して之を改める旨の宣言書を執行委員會に提出したが、スザンヌ・ジロールはこの事件に關する全文書を見るまでは是非を決し兼ねるが、今の所七十五パーセントまでは反對派に贊成すると斷言したといふ。

ドイツの反對派はロシアのそれとは獨立に發生したが、ロシアのそれに依つて大いに力を與へられた。何となればドイツ勞働者中ジノヴエフを厚く信賴する者が、之と協力する自國反對派に與したからである。ドイツに於ける反對派發生の原因としてスターリンは、ドイツ資本主義の一時的安定の結果、ドイツのブルジョアジーが從來の親露的政策をすててフランスと握手した結果、共產黨內の小ブルジョア的分子がこの政府の政策を反映して、ソヴエット政府に反旗を翻したのである、と見てゐる。反對派の主なる者はコルシユ、シユワルツ一派及ルート・フイツシヤー、マスロフ一派である。コルシユは極左翼の立場を取つてゐたが、昨年四月末代議士問題のために共產黨より除名せられて以來、益々反露的傾向を强め、現ロシア政府はブルジョアの代表者であるから、之に對して外國の資本主義が攻擊を起しても、ロシアのプロレタリアートは決して自國を防禦してはならぬ。若し防禦したならば、一九一四年のドイツ社會民主黨と同一轍をふむものである、とまで極言した。ルート・フイツシヤー及マスロフ等も前からコルシユに接近して居り、コルシユの共產黨除名にも反對した程であつたが、ロシアの反對派が分派運動を起すに至るや、自から進んでコルシユと團結をつくつてロシアの反對派を支持し、コミンターンに反抗したゝめ、昨年八月之亦共產黨より除名せられた。即ドイツ共產黨は、一九二一年ロシアの新經濟政策實施の際に、極左翼分子が同黨より脫退して、第四インターナショナル運動を起したのと類似の現象を示したのである。而して今度も亦前と同樣に、被除名派の勢力が發展するの可能性はないやうである。（一九二七・一二・八）

勞農帝國主義の極東進出

高畠素之

一

目糞が鼻糞を笑ふといふ譬はちと尾籠だが、勞農ロシアの擔ぎ廻る打倒帝國主義の看板にも、さういつた身のほど知らずさが見える。毒を以つて毒を制する氣轉にも通じやうが、そこにはまた觀音樣でお賽錢を釣るやうな外道的營利主義も働いてゐる。帝國主義といふものは、何も資本主義ばかりの專賣ではない。國にして帝國主義的ならざるはなしといふ、ムッソリーニ流の言ひ方には誇張もあらう。瑞西やモナコでも國でないとは言へぬからである。が、苟くも獨立の一國として優越の本能と燃ゆるが如き覇圖を有する程のものは、みな結論に於いて帝國主義的たることを避けられぬ。それは國家自我の實現と發展との努力に伴ふ必然的歸結だ。

勞農ロシアは社會主義國家である。少なくとも、社會主義國家たらんとしつつあるものだ。而も一面には、燃ゆるが如き國家的野心を帝制以來植ゑつけられてゐる。彼れの謂はゆる世界赤化とは、この兩要素の結合作用に外ならぬものである。だから、世界平和の使徒を以つて任ずる共產ロシアも、軍備擴張に汲々たることは人道主義の資本アメリカと兄たり難く弟たり難い。軍備は國防のためといふ御託を、いまさら共產ロシアから受賣りするにも及ぶまい。

要するに、國家的勢力範圍の擴張といふことが主一の目的だ。領土の擴張は、國家的勢力範圍擴張の素朴なる一形態に過ぎぬ。拳固で撫でるといふ祕法もある。やれ帝國主義打破の、民族解放のといふ口の下から、ドン／＼自國の勢力範圍を擴張して行けば世話はない。薄利多賣が多賣厚利の羊頭であり、社會奉仕が社會搾取と兩頭の蛇であり、デモクラシーが少數支配の一變形であるのと同じ意味で、勞農ロシアの反帝國主義は帝國主義の社會奉仕といへやう。

二

勞農ロシアの世界征服は『世界赤化』の假面を以つて現はれてゐる。『世界赤化』とは世界を擧げてロシア流の共產主義に化せしめるといふことであるが、世界といつても事情は一樣でない。歐米諸國では資本主義が完成されて、プロレタリアの自覺も進み勞働者の組織も發達してゐるが、有色諸民族は歐米列强の屬領又は植民地としてその搾取壓迫の下に呻吟してゐる。そこで歐米諸國に對しては、直接、勞働

者の階級的組織運動を共産主義的に刺戟し啓蒙して資本主義に當たらしめると同時に、劣弱被壓制民族、殊に東方諸民族に對しては、彼等の民族的自覺を促して歐米列强の帝國主義的羈絆を脫却せしめるといふ戰略を採つた。前者は階級鬪爭であり、後者は民族鬪爭である。前者を直接の赤化といふならば、後者は即ち間接の赤化である。第三インターナショナルは主として前者の目的遂行のために設けられたものであるが、後者に對しては特にスターリンを擧げて獨特の民族政策を遂行せしめた。

勞農ロシアは最初、第三インターナショナルに依る歐米赤化に向つて直進する計畫であつたらしいが、この方面の運動は事每に失敗して手も足も出なくなつてしまつた。しかるに、東洋方面に對する民族政策は着々その功を奏して、民族自決のお題目は巧みに舊露領諸民族を一括して勞農傘下に誘きよせる好餌となつた。尤も、歐露西北邊疆の諸州に對しては、三月革命以來の分離を基礎として夫々の獨立を認めたが、他の露領諸民族に對しては、一面民族自決權を與へると同時に、その內部には着々サウエートの勢力を扶植浸潤させて、分離はしても結局モスコーの支配下に舞ひ戾らずしては立ち行かぬやうにした。

だから、これらの屬領に對する民族自決主義といふものは、ちやうど資本主義の下に於ける『勞働の自由』のやうなもので、勞働者は勞働するもしないも自由の人格だといふが、勞働しなければ食へぬやうな位置に立たして置いてさういふのであるから、これは何のことはない、勞働への强制を胡粉で塗飾したものに過ぎぬ。露領劣弱民族もこの筆法で、民族自決を惠まれて、結局モスコー治下への復歸を自發的に强制された。

斯くして、一九二〇年から一九二一年五月に至る間、一度び獨立した白ロシア、ウクライナ、アゼルバイヂアン、アルメニア、ヂオルヂイア等各地方の共和政府は、モスコー政府と勞農同盟條約なるものを締結せしめられ、續いて一九二二年十二月に至り、これらの獨立共和國はサウエート社會主義共和國聯邦としてモスコー政府の下に統一された。その後更らに、ウズベック及びトルコマン兩共和國をも加へていまではモスコー政府（ロシア社會主義サウエート聯合共和國）の下に、白ロシア社會主義サウエート共和國、ウクライナ社會主義サウエート共和國、後コーカサス社會主義サウエート共和國、ウズベック社會主義サウエート共和國、トルコマン社會主義サウエート共和國の五共和國が統合されて、これをサウエート社會主義共和國聯邦と稱してゐる。これらのうち、ロシア、ウクライナ及び白ロシアの三つを除き、他は悉く東洋民族國であつて、帝制以來ロシア政府の支配下に抑壓されてゐたものである。

三

モスコー政府は斯くの如く、露領諸民族に對しては民族自決主義の好餌を以つてこれを自家藥籠中のものとなし、聯邦として再統合することを得たのであるが、聯邦外の東洋諸民族に對しては、直接これを統合することの不可能を信じ、專ら帝國主義打破の標榜によつて支配國家への叛逆と各民族の自主的獨立とを援助し、以つて間接にこれを

自家勢力の圏内に誘ひ込むといふ戰略を採つた。この目的のために、勞農ロシアが今日まで最も熱心に力をこめたものは、近東及び中東諸國、即ちトルコ、ペルシヤ、アフガン及び印度の四ヶ國であつた。これらのうち前四者に對してはその支配勢力たるイギリスへの反抗を刺戟し、民族自主の實現を促した點に於いて、勞農ロシアの努力は相當の成績を收めたが、トルコに於けるケマル・パシアの蹶起は民族自主の軌道を文字通りに進行して、國家主義の樹立に到達し、赤化帝國主義の木乃伊とりを却つて木乃伊にしてしまふやうな皮肉の結論を示した。

ペルシヤ及びアフガンも、大體に於いて同樣の傾向を示すに至つた。印度に對しては、赤化の可能最も多きに拘らず、玆ではイギリス政府の警戒嚴重を極めて水も洩らさず、流石の勞農帝國も氣ながに出直しの機會を待つほかはなくなつた。

要するに、近東及び中東方面の赤化進出は思ひのほか困難であつて、對英反抗心と民族的自覺の喚起とは幸ひに功を奏することがあつたとしても、その結果は、兎もすれば勞農帝國本來の所期とは背馳した方向に進展して行く傾きがある。そこで勞農ロシアは方向を一轉して、極東方面にその民族政策的赤化帝國主義の鋒鋩を集中するやうになつた。

極東に於いては、從來でも滿蒙、支那本部、朝鮮等に對する赤化宣傳は相當旺んに行はれてゐたが、近東及び中東方面の苦がき體驗以來殊に極東への鋒鋩を鋭くしたことは疑はれぬ。殊に、支那に對する食ひ込みは極めて根強く深刻であつて、支那に於ける近時一切の排英運動も北伐軍の擡頭進出もその背後にあつて勞農帝國主義が直接絲を曳いてゐることは公然の祕密である。ただ、下手まごつくと、玆でも亦、木乃伊とりのロシアが却つて木乃伊にされる虞れがないでもない。木乃伊とりのロシアを木乃伊にするか、それとも支那みづからロシアの木乃伊にされるかは、一に懸つて自覺支那の聰明と決意の如何にあることだ。

新たに生れ出でんとする支那國家の將來を擔ふべき人的要素は、勞農ロシアの奴隷たるとに甘んずるが如き共産主義盲信の徒ではなく、勞農ロシアの帝國主義的野心をも逆に利用して支那國家確立の肥料たらしめんとする氣魄と識見とに富んだ純眞の愛國者でなければならぬ。ロシアに愛國者レーニンが出た如く、支那も亦支那それ自身のムッソリーニを生み、ケマル・パシアを生むことに成功しない限り、たとひ列强帝國主義の羈絆からは首尾よく脱出し得たとしても、遂には勞農帝國主義の食ひ物となる運命を免れることは出來ぬであらう。

四

勞農ロシアの極東政策は、支那に於ける勞農勢力の確立を主たる目的とするものであるが、この目的を達成するためには滿蒙一帶を擧げて勞農帝國の支配下に置くことが必要である。けれども滿洲には日本の勢力が張つてゐるから、うかとは手が出せない。そこで露領シベリアと直接隣接してゐるところの蒙古を先づ手に入れ、一面滿洲に魔手を伸ばしつつ、支那本部を意の儘に料理して行かうといふのである。シベリアから北京に達するには蒙古を經由することが最も近道である

のみでなく、蒙古はまた東、滿洲に通じ、西、新疆に接して、政治上これらの各地に勢力を張る上にも極めて便利な位置を占めてゐる。

勿論、ロシアが蒙古を併呑しようとする熱望は、單に斯かる地理的位置の上からばかり來てゐるのでなく、蒙古それ自身としても相當重要な資源を提供してゐる。

蒙古は面積百三十六萬方哩もあつて、一般に不毛の土地といはてゐるが、牧畜に適した地方も可なり多く、農耕採木にも適し、加ふるに砂金を産出することも少なくないから、ロシア人は玆に移住して本國から織物、諸雜貨を輸出し、この地から家畜獸皮その他を本國に輸入することが出來る。ロシアが蒙古に垂涎する一半の動機は、斯かる經濟上の理由からも來てゐる。

兎に角、これらの動機から、ロシアは今や蒙古を事實上の屬領としてゐるのであるが、一概に蒙古といつても外蒙古と内蒙古とでは事情を異にする點があり、ロシア勢力の扶植に於いては外蒙古の方が遙かに進んでゐる。ロシアの野心は、蒙古一帶を打つて一丸となし、謂はゆる蒙古聯盟なるものを確立して、玆に極東赤化の本源を完成しようとするにあるらしい。が、内蒙古は地理的位置の上から滿洲に接近し、早くから滿洲朝廷に服從してゐたが、外蒙古の親露傾向は殆んど傳統的ともいふべきものであつて、一六八八年外蒙古が滿洲朝廷に服するやうになつてから後も、ロシアに對する崇拜には何等動搖がなかつた。

そこでロシアも亦、外蒙古を手に入れることは左して困難でないと信ずるやうになつた。勞農ロシアは外蒙古のこの傳統的親露感情を利用して、その内部に赤化の魔手を伸し、いまでは事實上完全にこれを自家薬籠中のものとしてしまつたのであるが、表面上は矢張り支那の領土たることを認めたやうな形にしてある。この邊、ロシアのやり口は極めて帝國主義的に惡辣であつて、獨立の形で豫めこれを自己の事實的屬領となして置きながら、一面支那に對しては依然たる外蒙宗主權を認めるといふ態度を採つてゐる。

外蒙古に對する勞農ロシアの赤化經營は後に述べるが、一九二一年の外蒙獨立宣言は全くロシアの尻押しに成つたものである。この獨立宣言の後、一九二一年十一月五日モスコーに於いて露蒙修交條約なるものが締結された。この條約に依ると、勞農政府は明かに外蒙古の獨立を承認してゐる。しかるに、一九二四年三月十四日カラハン顧維鈞間に調印された露支協定を見ると、その第五條に於いて明かに蒙古の獨立承認を取消してゐるのであるが、それにも拘らず前記の露蒙修交條約は依然その儘にしてある。つまり蒙古に對しては、お前は立派な獨立國だといつて置きながら、支那に對しては蒙古の獨立を否認してゐるわけであつて、第三者から見ると何が何だか薩張り解らないのであるが、ロシア自身にして見ればこれが頗る要領を得てゐる。要するに、斯うして置いて、結局は身も骨もその儘そつくり攫つて行かうといふ腹なのだ。

五

一九二三年、勞農ロシアは外蒙古の北境ウエルフネヂンスクを首府とする地方一帶を中心にして、ブリヤート蒙古自治共和國を建設せし

め、これをロシア社會主義サウエート聯邦共和國に加入せしめた。バイカル湖附近イルクツカヤ縣に住するブリヤート人は約十一萬、ザバイカル州に住ずる者は約二十三萬であつて、總數三十四萬人に及ばないが、前者は早くからロシア文化に浴し、勞農政府樹立後は率先してその麾下に馳せ參じた關係上、勞農政府は先づ彼等を動かして遂にブリヤート蒙古共和國を建設させたのであるが、これには深い魂膽があつた。即ち玆に確立した自治共和國を媒鳥とし策源地として、外蒙古一帶に手を伸ばさうといふ計略であつた。

これより曩、勞農政府はウンゲルン軍に逐はれた蒙古亡命客をウエルフネヂンスク及びイルクック兩市に招待し、これに露國民たる蒙古人ブリヤート人等をも加へて蒙古國民黨なるものを組織せしめ、この團體の活動を通じて蒙古の獨立を行ひ、以つて全蒙にわたるロシア勢力の扶植を徹底せしめようとした。この運動は燎原の勢を以つて發展し、一九二一年設立當時には黨員わづかに百五十を算したに過ぎなかつたが、一九二三年には二千五百六十人、一九二四年には四千人となり、一九二五年には既に七千人を超ゆる盛況を呈した。

この團體の組織は第三インターナシヨナルに模つたもので、各地の代表者百三十八人より成り、國民黨議會なるものを機關とし、中央執行委員會を設けてこれが最高執行機關としてゐる。中央執行委員會は三十名の委員から成り、國務總理以下各閣僚の指名權を握り、國務會議の決定をも否認し得る權能を附與されてゐる。その牛耳を執る者は、言ふまでもなく共産主義者であつて、國民黨議會の名譽議員たるロシヤ人ワシリエフなるものがブリヤート人リンチノ等を手先として一切の切廻しをしてゐる。曩に述べた一九二一年の蒙古獨立革命も、これらの共産主義者が中心となり、勞農ロシアの尻押でなし遂げたものであるから、この獨立が全然ロシアに隷屬せんがための獨立であつたことは蔽ふべくもない。

蒙古國民黨が勞農政府の差金に依つてでつち上げられたものであることは上述の通りだが、その構成分子は最初から共産主義者のみであつたといふわけでない。獨立のための獨立といふ理想に燃ゆる純眞の愛國者も、少なからずこれに參加してゐた。けれども黨內に於ける共産主義者の勢力が伸張するにつれて、これらの愛國者は片ッぱしから彈き出された。

共産黨の彈壓に拮抗すべく彼等の實力は餘りに微弱、彼等の識見は餘りに不透明であつた上に、四圍の事情もトルコやペルシアの民族主義に於けるなどに有利でなかつた。これがため、彼等の民族運動は結果に於いて全然ロシア勢力扶植のための看板と肥料に利用される形となつた。

初め黨內にあつて熱心に活動してゐた者も、一度勞農帝國主義の野心遂行に對して邪魔になると見做されたが最後、遠慮なく黨外に彈き出されてしまふ。それのみか、國民黨創立者の一人にして嘗ては國民政府の首相の地位に上つたボドーを初めとして、內務總長ブンツク・ドルヂー、司法總長トフトホの如き有力なる黨員十五名は、反革命陰謀に加擔したといふ廉で共産主義者のために銃殺されたといふ事實もある。それは一九二二年秋のことであつたが、最近に於いても、國民黨創立者の一人にして國民議會の議長なるダンザン及びその參謀バ

サンの兩人は勞農ロシアの驅使に甘じない程の愛國者だといふところから、これまたロシア政府の使嗾に依つて銃殺された。

六

要するに、蒙古國民黨なるものは、民族主義の假面を被つた勞農帝國主義の傀儡であつて、蒙古一帶にロシア勢力を彌漫せしめんがための一手段たるに過ぎぬものとなつてしまつた。それに、この國民黨の別働隊として、いま一つ、青年共産黨なるものがある。これは二十五歳以下の共産主義者約三千人を以つて組織され、直接政治に關係することはないが、國民黨赤化の發電所として、また異分子剿絕の戰鬪的團體として、ロシア政府の公然たる手先を勤めてゐる。ロシア政府は、また、蒙古に於ける權力を永久に維持する目的で、クーロンに步兵一個聯隊、騎兵一個聯隊を駐在せしめてゐるが、これだけの兵力では外蒙古全體を鎭壓するに十分でない故、最近、軍官學校を設けて蒙古士官を養成し、蒙古人を教練して約二個師團を組織せしめた。

蒙古に對する鐵道敷設も亦、勞農政府年來の計畫であつた。最近の報道に依れば、勞農政府はこの計畫の第一着手として、先づシベリヤ鐵道の一都府ウエルフネヂンスクからキアクタ經由、外蒙の中心クーロンに達する鐵道の敷設計畫に着手し、既に諸種の材料を送つて、着々工事を進めてゐるとのことである。この鐵道計畫の實現に依つて、勞農ロシアがいよ〱外蒙一帶に對する通商上並びに政治上の實權を確立し、進んで支那內部への政治的及び經濟的進出を露骨にして來たことは疑ひを容れない。

元來、ロシア政府はキアクタから張家口に至る鐵道敷設の豫定計畫を立ててゐたので、右のウエルフネヂンスクからクーロンに至る鐵道計畫はこの豫定線の一部に過ぎぬ。そこでキアクタ・クーロン間線の落成を見た曉には、ロシア政府としては必らず過去の條約上の權利に基いて北京及び蒙古政府に對し、クーロンより張家口に至る鐵道敷設權を要求して、ウエルフネヂンスクから一路北京に至る直通線を實現することになるであらう。斯くしてロシアは一方に、支那中央に對する貿易上の通路を開くと共に、他方、支那政局に對しても直接の按脈を保つ位置に立つであらうことは、十分に豫測し得るところである。

七

勞農帝國主義の進出は、單に外蒙古のみでなく、進んで內蒙古にも食ひ入つて來た。茲でも運動の好餌に利用された看板は、お定まりの民族獨立である。この看板を餌として、外蒙古同樣の國民黨組織運動を起したのは一九二三年頃からであつたが、これには支那國民黨內で養成された急進的青年も加はり、一九二五年には黨員三百名、候補黨員三千名を算するに至つた。同年十月、第一回內蒙國民大會を張家口に開催し、外蒙古政府や廣東政府の代表もこれに參加した。馮玉祥も亦、その代表を送つた。彼れの國民軍と內蒙國民黨運動との間には、極めて密接な關係があつた。隨つて、一九二五年秋、郭松齡が奉天軍に對して叛旗を翻したときには、內蒙國民黨は狂喜してこれを迎へ、その成りゆきに非常なる希望を懸けてゐたのであるが、叛軍の慘敗たる敗北は內蒙赤化の機會を少なくとも一時的に葬つてしまふ結果とな

つた。彼等の信頼してゐた國民軍は北京を退き、張家口を棄てて、遠く甘肅省に撤退し、それと同時にまた、奉天政府の勢力が內蒙一帶に蔓つて來た。

かやうな有様で、內蒙古に對する勞農勢力の進出も一時停頓狀態に立つことを餘儀なくされたのであるが、ロシアは決してこの方面の運動を斷念したわけでないから、將來機會ある每に再び擡頭し來たることは疑ひを容れぬ。勞農帝國主義の蒙古聯盟計畫は單に外蒙及び內蒙を包括するのみでなく、例へば滿洲の西北角に位ゐして、東は興安嶺西は黑龍江の支流額爾古納河を以つて包圍せられる呼倫貝爾の如きも、その豫定計畫に含まれてゐることは明かである。この地は面積約五萬五千萬方哩、土地は概ね荒蕪であるけれども、採木採鑛に適し吉拉林金鑛や札賚諾爾炭鑛の採掘權はロシア人の手に歸して居り、また呼倫及び貝爾兩湖並びに額爾須河に對する漁業權の大半も、ロシア人の占むるところとなつてゐる。

この地の宗主權は、歷史的にロシア及び支那兩國の間を絕えず轉々して來た。が、一九一三年ロシアとの間に締結された協約に依ると、完全なる自治が認められたことになつてゐる。その後、ロシア革命が起つて、東方を顧みる遑がなくなつた際に乘じ、支那はこの地の自治を取消して、督辦呼倫貝爾善後事宜公署なるものを海拉爾に置き、これを統治したが、土人は依然として自治を要求してゐた。この要求に乘じて、勞農ロシアは玆にも亦、外蒙古同樣の民族運動を煽動して、同地一帶を蒙古聯盟計畫に引き入れようとしてゐる。この目的のため、最近國境に赤軍を移動し、呼倫貝爾駐在の支那文武官に贈賄するなど、あらゆる苦肉の策を講じてゐるとのことであるが、若しこの策謀が成功するとするとすれば、その影響の及ぶところ遂には滿洲をも勞農勢力圈內に拉致して行くことがないとも限らぬ。

滿洲といつても、南滿には日本の勢力が確立されてゐるから今のところ策の施しやうもないであらうか、帝制時代滿洲經營のために敷設した東支鐵道に對しては、舊ロシア政府の下に獲得した一切の權利及び利益を無報酬で支那に還附するといふカラハンの聲明があつたにも拘らず、勞農政府は斷じてこれを手放さうとしない。東支線の從業員は現在一萬二千五百人に達してゐるが、その大半(約一萬)は赤露系の分子に依つて占められ、沿線一帶にわたつて赤化帝國主義の魔手を擴げてゐる。と同時にまた、これらの從業員中には變裝した軍人をも加へ、彼等を基礎として自衞團なるものを編成せしめ、住民保護を名として沿線各地に於ける勞農勢力の扶植を武力的に徹底せしめようとしてゐる。この自衞團は相當武裝されてゐるものらしく、團員は現在一千名を出でないが、今後ます〳〵增加されて行く模樣である。

八

以上は滿洲に於ける勞農帝國主義進出の概況であるが、轉じて支那本部の狀況如何と見るに、玆では廣東政府の擡頭といひ、最近に於ける北伐軍の飛躍的進出といひ、英國勢力の驅逐といひ、西北國民軍の確立といひ、いづれも表面上は支那自身の國民的自覺の表現たることを看板とし、事實上にもその意味が過分に含まれてゐることを拒み得ないとはいへ、背後にあつて絲を曳いてゐるものが勞農帝國主義であ

る事實は蔽ふべくもない。

だから、假りにこの運動が豫定の筋書通りに成功して、イギリス以下列强帝國主義の干渉を悉く支那から驅逐し得たとしても、その曉には代つてロシアの帝國主義が支那を支配する如き結果を來たさないとも限らぬ。つまり、前門虎を防いで後門狼を入れるといふ筆法だが、さうなるもならないのも、一に自覺支那の覺悟と聰明と實力の如何に懸ることだ。支那にとつては、今こそ最も重大な時期である。

北伐軍の由來を說くには、國民黨の由來を明かにすることが順序であり、國民黨の由來を知るには、その創立者たる孫文の名を逸するわけには行かぬ。孫文は辛亥革命の元勳であつて、社會改造上にも極めて進んだ意見を有ち、これに共鳴する學者、靑年も決して少なくなかつたが、何分にも軍事上の實力に乏しく、外はイギリス政府の妨害と、內は北洋軍閥の壓迫とに挾撃されて、久しく廣東の一隅に跼蹐することを餘儀なくされてゐた。しかるに、勞農ロシアが支那に魔の手を伸ばさうとするに當つて、先づ目をつけたのは、この孫文である。即ち、彼れの三民主義なるもののうちには、共產主義の理論と相共通した要素を少なからず含んでゐるといふところから、これを餌として巧みに彼れを勞農ロシアの味方に誘ひ込んだのである。

孫文と勞農ロシアとの提携に機會を與へたものは、彼れの幕僚廖仲愷であつて、この男が一九二二年夏、熱海に靜養中のヨツフエを訪れて共產主義の洗禮を受けたのが、そも／＼始まりであると謂はれてゐる。けれども、彼れがヨツフエを訪れるについては、前以つて孫文の諒解があつたとすべき理由があるから、この訪問は寧ろ孫文側からロシアへの接近を持ちかけたものであつたかも知れぬ。

いづれにしても、この時以來兩者の間に密接な結合が成立した事は事實であつて、それから間もなく、孫文の片腕として陸軍參謀長として名聲嘖々たる蔣介石が露都に赴き、續いて一九二三年十二月、ロシアからは問題のボロヂンが廣東に來り込んで來た。彼れはモスコー政府から、二つの使命を託されて來た。一は軍官學校の建設援助、他は國民黨內への共產黨割込み、これである。彼れはその後二年足らずの間に、この二つの使命を完全に果した。國民黨及び廣東政府をして今日あらしめたのには、彼れの怪腕が與つて最も力あつたといはれてゐる。

九

孫文は支那革命の元勳であつたが、直屬の軍隊を有たず、つねに雲南廣西などの落武者たる客軍に依賴してゐた。勞農ロシアとの提携が成立した當時、廣東の客軍はいづれも建國軍と稱してゐたが、その出身各省に從つて夫々獨自の編成をなし、地方民の租稅を壟斷して橫暴いたらざるなき有樣であつた。軍隊としての素質は勿論劣惡であつて、金錢のためにはいつ鉾を逆まにするかも知れぬといふ利益本位の烏合の衆であつたから、流石の孫文もこれには大分手古摺らされたものである。

そこで、この客軍制を廢して、眞に主義主張のために戰ふところの精英的手勢を養はうといふことが、孫文の宿志であつた。そこへちやうど、ボロヂンの來廣に續いて、露都に行つてゐた蔣介石が歸つて來

た。彼れはロシアで赤軍の組織編成を實地目擊し、その優秀なる成績に動かされて來たものであるから、玆に急遽革命軍士官養成の議が纏まり、一九二四年廣東下流十六哩の黃埔に、國民黨軍官學校の看板が揭げられた。

この學校の設立について、勞農ロシアが多大の援助を與へたことは言ふ迄もない。ガロン將軍以下十數名の將校が敎官として、ロシアから派遣された。ボロヂンも亦、その名譽敎授となつた。斯くして、一九二四年五月五日に第一期生五百名を募集してから、昨年二月迄の間前後三回にわたつて給供された卒業生正に一萬人を下らないといはれてゐる。北伐軍はこれらの卒業生を中樞として編成されたもので、蔣介石を總司令となし、ボロヂン初め多數のロシア人共産主義者たちがその帷幄に參與してゐる。總司令部の指揮に服する廣東軍は、六軍團約二萬五千人であつて、これが北伐軍の中堅となり、それに廣西、湖南、湖北、江西、貴州等各地の軍隊が所屬し、總兵力十萬を超えてゐるとのことだ。總司令部には軍事部のほかに政治部も附屬してゐて、共産派中の最左翼たる鄧演達がその主任となつてゐる。

軍官學校に對するボロヂンの使命は斯くして見事に果たされたわけであるが、一方、國民黨內への共産黨割込みについても、これまた豫定以上の成功を見た。支那共産黨が初めて北京に設立されたのは、一九一八年の春であつた。勿論、當時の組織は極めて不完全なもので、獨立の一黨たるに相應しい內容も實力も殆んど備つて居らなかつた。その後、陳獨秀や李大釗などの奔走で幾分の黨勢伸張を見たとはいへ、近世工業の發達幼稚にして勞働者組織の進まざる支那に、共産黨單獨の運動を以つて鞏固なる地步を固めることは到底望むべくもない。

そこで南方に傳統的の潜勢力を有する國民黨に渡りをつけて、これを內部から共産主義化して行かうといふ方針を採るに至つた。ヨッフェが上海で國民黨の領袖と會つたとき、頻りに國民黨內への共産者抱擁を慫慂した所以もある。ボロヂンも亦、ロシアの援助を得る條件として廣東政府が共産黨を容るべきことを極力主張した。孫文これに贊成であつたが、國民黨內にはそれを喜ばぬ分子も少なくなかつた。斯くては、國民黨の信を天下に失墜することにもなり、かた〲國民黨の屋臺をその儘共産黨に乘つとられてしまふ虞れがないでもないといふのであつた。

この形勢を早くも見てとつたボロヂンは、先づ國民黨內の輿論を共産黨進出のため有利に展開せしめる必要を感じ、その一策として、かねて國民黨內に萠してゐた廣東閥と非廣東閥との暗鬪に乘じて、孫文直系の廣東閥に金錢や、武器や、彈藥やを供給し、非廣東派の頭目李鈞一味の勢力を挫くことに全力を盡した。

また、中間派の頭株をも次第に黨內から驅逐し、遂には汪兆銘、蔣介石等と三角同盟をつくつて廣東政府を支配した上に、蔣介石を使嗾してクーデターを行はしめ、以つて廣東に於ける反共産派の勢力を一掃しようと圖つた。けれども國民黨內に於ける反共産的傾向の擡頭は、一九二五年三月孫文の逝去以來ます〱露骨となり、同年八月には共産派の頭目たる廖仲愷暗殺され、同年十二月北京に集まつた右翼派國民黨員は公然と共産主義者排除、ボロヂン以下露人顧問の解傭を決議した程であつた。ボロヂン等が急遽北伐軍を起さしめた腹の底に

は、これに依つて共產派に對する黨內の不平を外に向はしめんとの魂膽も働いてゐたことは疑はれぬ。

北伐軍は破竹の勢ひを以つて、湖南を破り、武漢を突き、長驅して江西を陷れ、南京を變ふといふ空前の戰績を示したのであるが、これには上記軍官學校設立援助のほか武器彈藥等の供給についてロシア側から與へられた援助が與つて力あつたことも想像するに難くない。勿論、この方面の事實は特に祕密に附せられてゐるから、正確の計數を以つてこれを示すことは困難であるが、一說に依れば一九二四年末から最近に至るまで、勞農ロシアから支那に供給された武器は西北國民軍に對する分をも總計すると、小銃約十四五萬打、大砲約四百門に上り、その他これに相應した量で彈藥、機關銃、飛行機も供給されたとのことである。また軍資金としては、年々四千萬ルーブル見當の金額がロシアから供給されて居り、その少くとも三千萬ルーブルは廣東政府に交附されてゐるといふ說もある。

更らに、蔣介石がモスコー滯在中にロシア政府から六百萬元の借款を與へられたといふ說もあれば、最近に至り馮玉祥の西北國民軍が三百萬元の借款を受けたといふ風說も傳はつてゐる。また昨年八月末、露支兩國間に外蒙鐵道二線を敷設すること、サウエート聯邦政府は西北軍に每月十萬ルーブルを供給すること、帝國主義國家とサウエート聯邦とが開戰した場合には、西北軍は全軍の三分の一を出兵して、サウエート側を援助し、支那と帝國主義國家との間に戰端が開かれた場合には、サウエート政府は四萬の兵を出動して支那を援助すること、等の密約が結ばれたといふ風說も傳へられた。

これらの計數に現はれたところでは、物質的方面の援助がさまで甚だしいとは思はれないが、人力の供給に至つてはなか〳〵それどころでなく、一九二四年ボロヂン以下百五十名の顧問を廣東に派遣し、それが今では二百名近くに增員されて、いづれも政治、軍事、敎育等各方面の重要なる樞機に參畫してゐる。

十

勞農ロシアの支那進出は單に廣東北伐軍方面のみでなく、馮玉祥の率ゐる西北國民軍をも今では完全に共產主義化してしまつた。馮玉祥がロシアとの特殊關係を結ぶに至つたのは、ヨッフエの北京滯在當時からであるといはれてゐるが、一九二四年十月のクーデター前後から、この關係が特に具體化して來たことは疑ひを容れない。

元來、馮玉祥といふ男はクリチャン・ジエネラルといはれるだけに大した主義も主張もない俗物で、キリスト敎的功利主義で固めた權勢慾の權化として以外には殆んど取り得のない人物らしいが、この男、第二奉直戰では見事に多年推服する如く見せかけてゐた支那唯一の人格者吳佩孚を裏切つて、北京に三日天下の快感を貪ることが出來た。しかるに、奉直戰に勝つた張作霖は、部下の李景林を天津に向けて、國民軍の海外交通を遮斷してしまつた。これがため、國民軍は海路に依つて外國から武器彈丸の供給を受けることが出來ず、厭でも應でもロシアの手に縋るのほかはなくなつた。この形勢は、郭軍の敗北後ます〳〵甚だしくなつて來た。

郭松齡の叛逆が、馮玉祥の使嗾になつたことは、言ふまでもない。

馮といふ男は、火事泥か、裏切りか、さもなければ他人の褌でばかり商賣しようとしてゐる。それが祟つて、郭軍の敗北後は北京にも居たたまれず、遠く西北方面に退却することを餘儀なくされた。斯ういふ形勢が、彼れをしてます／＼ロシアの手にたよらしめる手引となつたのであつて、もと／＼孫文及びその一派の如く主義主張の共通を感じてロシアに接近して行つたものではない。

が、この日和見將軍も、いよ／＼ロシアの手に縋つて一九二六年春モスコーに赴いてからは、まるで主義者かぶれの海坊主となつてしまひ、『眼前の形勢は、明かに支那の將來がプロレタリアの勝利に歸結することを信ぜしめる』などと、一つ覺えの主義者的口吻を弄んで得々たる有樣となつた。

しかし、帝國主義ロシアの方からいへば、海坊主だらうが、蛸入道だらうが、そんなことは一向に頓着すべき筋合のものでない。一つこの蛸坊主を唆かして國民軍を盛り立て、これを南方の廣東軍と結合せしめようといふのが、ロシアの腹であつた。斯くして一九二六年九月、勞農ロシアは綏遠の五原に馮玉祥を中心として國民軍大會議を開かしめ、馮をその聯合總司令に戴いて、廣東軍と同一旗幟の下に南北相呼應して勞農帝國の御用を勤めしめることにした。

それには、國民軍と國民黨との接觸をもつと緊密にして置く必要があるといふので、國民軍の李鳴鐘及び徐謙を廣東に派遣せしめ、國民黨本部に向つて國民軍の總括的入黨を申込ませた。國民黨は直ちにこれを受理し、馮玉祥を擧げて正式に國民軍政府委員及び國民軍總代表に任じた。斯くして蔣介石と馮玉祥との間には、今や完全なる諒解及び結合が保たれ、ゆく／＼國民軍は長江以北を、廣東軍は長江以南を分擔し、支那全土を擧げて國民黨の天下にしようといふ默契成立したと傳へられてゐる。

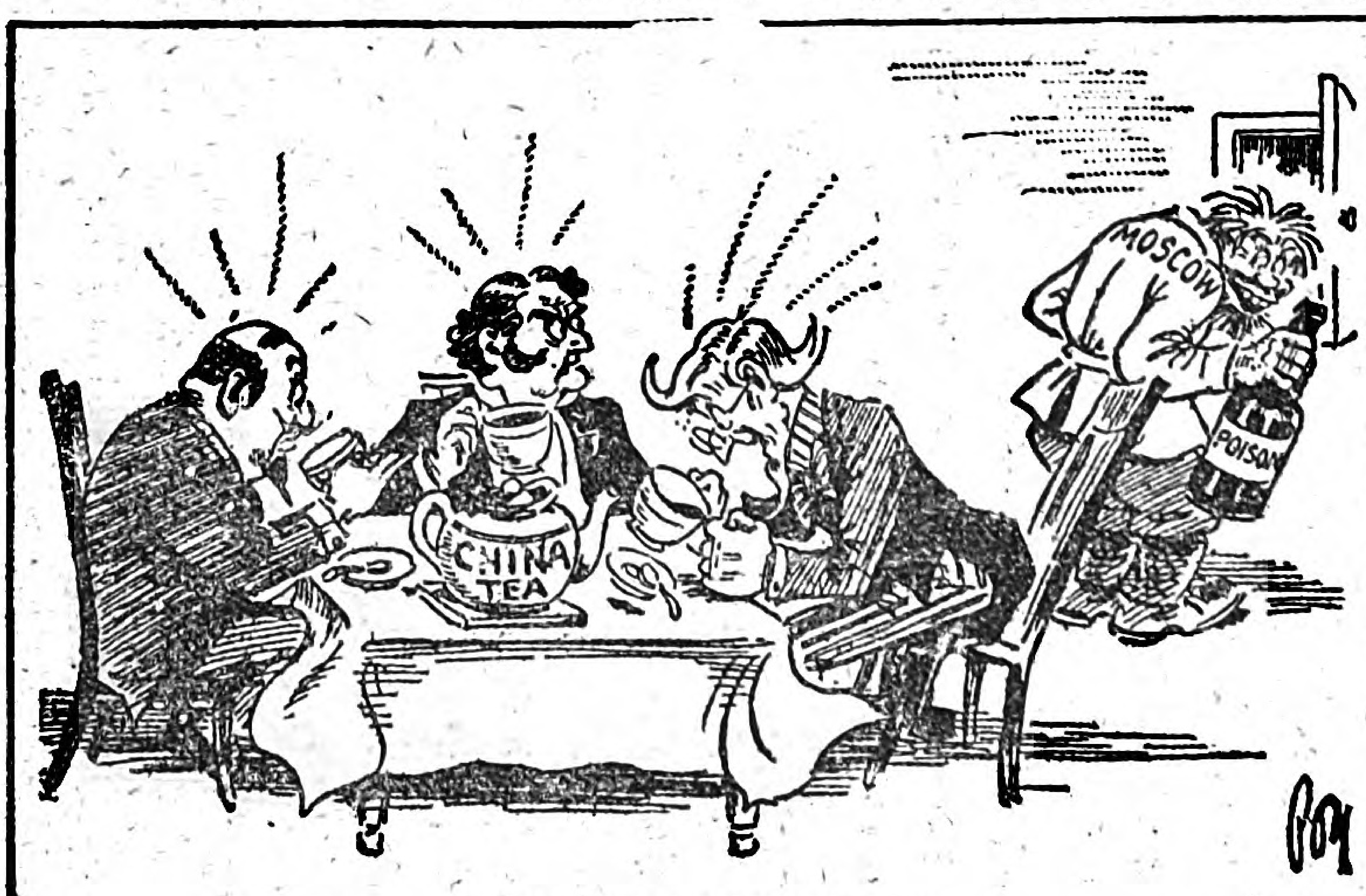
が、ロシアに對する態度の點では、國民軍及び廣東派兩者の間に多少の相違がないでもない。廣東派といつても、一概にはいへないが少なくとも、今以つて全然共產主義には行き切れない蔣介石などに比しると馮玉祥一派の方が形だけにしろ遙かロシア的に左傾した趣きが見える。けれども將來若し、馮玉祥一派に見られるやうな盲目的本能を軌道として支那の國民的運動が展開されるとすれば、支那の運命は明かに外蒙古の轍を踏むものであつた、前門に列强帝國主義の虎を防いでも後門からはロシア帝國主義の狼が大手を振つて闖入し、支那の自主的抱負を紙屑のやうにしてしまふことは見え透いてゐる。

ロシアを生かすものは、民族主義又は國民主義の餌を以つて極東一帶に勞農帝國主義の魔手を伸ばすことであるが、支那を生かすものは、支那それ自身の國民的確立でなければならぬ。列强帝國主義の驅逐も、この自主的努力の現はれに過ぎないのである。そのためにロシアが力を藉すといふなら、その援助は有り難く頂戴して置き、それはそれとして、支那は支那のための支那だといふ行き方に猛進せねばならないと思ふのだが、果してさういふ形に事態を展開せしめ得るかどうか。

目下來遊中の國民黨領袖戴天仇は、支那の國民運動にロシアの後援があることは拒まぬけれども、それは決して支那を共產主義化せんがための運動ではないといふことを强調した。若し果してこの言明の通

りであるとすれば、支那のため寔に結構なことだとは思ふが、さういふ口吻は、實をいふと、ボロジン一派でさへ洩らしてゐるところだ。即ち彼等は曰く『廣東政府はロシアの共産主義に共鳴して』これを支那に鼓吹するために、ロシアの援助を受けてゐるのではない。ただ、國民革命を遂行するために、ロシアを利用してゐるといふに過ぎぬ。必要がなくなれば、いつでもロシアと手を切る。我々はただ、孫文の三民主義を金科玉條として、その實現に全力を盡してゐるに過ぎぬのである』と。さう言ふ口の下から、彼等は共産主義に反對する者を片ッぱしから驅除しようとしてゐるのだから、これも結局は、他國の帝國主義に反對しつつ、ロシアだけの帝國主義を民族主義のオブラートに包んで弱小民族の口中にだまし込まふといふ、共産黨一流の例の社會奉仕的瞞着手段の應用とも見られる。赤化したとか、共産主義化したとかいはれるのは、國民黨として對內的にも對外的にも非常に損なことである。國民黨を通じて、支那を食ひ物にしようとたくらんでゐる勞農ロシアにしても同樣である。これがためには、ロシアも近東及び中東方面で再々苦がい經驗を嘗めさせられて來た。だから戴天仇の言明にしてもその儘ではなか〳〵おいそれと現金では買ひとれぬ譯である。

　されぱといつて、國民黨右派の連中に見られるやうな、獨裁專政主義反對の立場から共産黨に楯つくといふ行き方も、一向感服できぬ。問題は獨裁主義かデモクラシーかといふやうな、そんなフヤケタ方面に在るのではない。支那それ自身のための國民的國家の自主的確立如何といふことが、最も差し迫つた問題なのだ。それが獨裁だらうが、デモクラシーだらうが、そんなことのために今のところ氣をもむ必要は少しもない。共産主義だけが獨裁の一手專賣所といふわけではなし、獨裁でなければ當面の支那獨立が救はれぬといふなら、それもそれで結構な話ではないか。（三月五日）



BEEN TAMPERED WITH!

—*The Evening News* (London)

近著の外紙から

◇余計なおせつかい

イヴニング・ニウス（ロンドン）所載

（英米佛の諸國人が例の如く愛好する支那茶を飲まうとすれば、いつになく苦味がある。人相の惡いモスコウがソツと毒味を入れたのである。）

『獨歩集』につき

四月五日より配本

□「現代日本文學全集」中の『獨歩集』は近く發行の運びになりませう。本集の内容は殆ど間然するところなき完璧なものです。今後のものは誓つて讀者の期待にそむかないことを明言が出來ます。

□そして頁數なぞも公約より數十頁づつ増加していることは讀者も滿足して下さる處ですそして今後『漱石集』その他に對して本社がどれほどの犧牲的態度に出でるかは興味ある問題です。

□本全集は全集中の全集で編輯の苦心、内容の滋味到底類型のそれに比すべくもあらず。而して第一回の革命的出版として我國人の記念すべき好文獻です。加之、我々の先輩であり、同業である人々の作品であるが故に本全集ほど親みあるものなく、皆我々と血と血の繋がりである。

□『獨歩集』は四月五日より配本します。

□我國民にシックリする此全集！　我民族の精華であるこの全集、この全集こそ眞の我々の全集です。因に『獨歩集』の收容目次は

「武藏野」篇

○武藏野　○置土産
○源をぢ　○たき火
○詩想　○忘れえぬ人々
○鹿狩

「獨歩集」篇

○女雛　○正直者
○湯ヶ原より　○少年の悲哀
○春の鳥

「運命」篇

○運命論者　○巡査
○酒中日記　○馬上の友
○惡魔　○畫の悲み
○空知川の岸邊　○非凡なる凡人

「濤聲」篇

○二少女　○絹子
○死　○波の音
○號外　○戀を戀する人

「獨歩集第二」篇

○竹の木戸　○窮死
○疲勞　○二老人
○泣き笑ひ　○都の友へB生より
○湯ヶ原ゆき

「渚」篇

○渚　○岡本の手帳

詩篇

○告天子　○大連灣
○涙川　○冬の山家
○壅　○高峰の雲よ
○限なき空　○驚異
○夏の夜　○春來り冬ゆく

○戀のきはみ　○森に入る
○山林に自由存す　○沖の小島
○故郷の翁に與ふ　○風の音・
○山の聲　○わがこゝろ
○水際のすみれ　○夏來りぬ
○そのうた　○雲影
○たき火　○鎌倉妙本寺懐古

小品、隨筆篇

○無窮　○彼
○吾が土曜日の夜　○沙漠の雨
○落日に對す　○鎌倉の裏山
○畫　○驟雨
○死　○戀の日記
○わが過去　○趣味について
○青桐　○憐れなる兒
○信仰　○「獨歩吟」序
○予の作物と人氣　○秋の夕日
○「欺かざる記」の緒言　○海軍從軍記

主張、感想篇

○ワーヅワースの自然主義と余
○奈何にして小説家となりしか
○予が作品と事實　○机は部屋の置物
○雜談　○驚異
○人生何を求むる　○凡人の傳
○空想

逸文篇

○頭巾二つ　○友愛
○吾が海軍水兵の歌　○想出るまゝ

日記、書翰篇

○日記　○書・翰

著者	書名	内容	版	判型	定價
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○部縣制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會等	2?版	菊上 三六六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分離○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	17版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	?版	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	噓の効用	○噓の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	4?版	四六上 四四四	二・六〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	?4版	四六上 四三三	二・五〇 ・二二
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の回顧○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	18版	四六並 六〇	一・三〇 ・一二
ウンターマン著 森宏一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 二四三	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	?版	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存互助の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す	12版	四六上 三四〇	二・〇〇 ・二二
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	?版	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	?版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記十五ヶ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	24版	四六並 四一六	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	4版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇

本庄榮治郎著（最新刊）

日本財政史

菊判 上製 定價貳圓五拾錢 送料二十四錢

曩に日本社會史を公にされて、沈滯化石した我が社會科學界に波瀾を重疊せしめし博士の、その姉妹篇として數年來心血を濺ぎつゝあつた「日本財政史」が今玆に完成出版の期を告ぐるに到つた事は我、人共に歡喜に堪へぬ所だ。博士が文化事象に對する、その依つて以て立つ所の觀點の高邁にして嶄新なるは今更云はずもがな、資料の豐富にして理論の透徹せること、併せて行文の平易流麗なることは當に斯學界の獨歩人たるを失ない、時恰も夜長く燈火親しむの時、學生、政治家、經濟家を問はず、あらゆる人士の繙讀缺くべからざるを信ず。

渡邊一郎著

勞働問題原理

菊版 上製 定價貳圓 送料貳拾貳錢

勞働問題に對する正當な理解なしには現代人は何を爲すことも出來ない。學者政治家の權威ある言說、實業家實務家の事業企劃、一般人の日常談話、何れも之なしには壯を搔く外ない。著者は米國に於ける數年間の學理研究に英米獨佛に於ける實地視察と體驗、之に歸來日本に於ける現勢考察を加へて本書を完成した。勞働問題に對する凡ゆる原理、凡ゆる問題は容易に此中に見出し得られる。

（一）緒論（二）勞働所得（三）勞働の安定並に不要（四）婦女、幼年勞働問題（五）勞働組合主義（六）雇主企業者の救濟と對策（七）社會救濟（八）結論

武內義雄著

老子の研究

菊判 上製 定價 送料

本書は老子の研究者として學界に重きをなせる著者が二十年雕骨刻心の業績である。その一々稀覯の文獻に依り支那思想史發展の當然の過程として老子の存在を孔子以後と斷じ、道德經五千論を分析批判して千古の疑義を氷解せるが如き、誠に一世に驚倒するに足る卓見である。凡ゆる假托と寓言とをかなぐり捨てたる眞實の老子の姿を觀んとするは勿論、苟くも東洋の學術思想に關心を有するものの見逃す可らざる不朽の力の籠つた名著である。

高橋龜吉著

資本主義末期の研究

四六上版 定價壹圓 送料十八錢

著者が資本主義に對し權威める特殊の見解を持つてゐる事は學界周知の事實である。本書は（一）資本主義從來の長所が共爛熟と老衰につれて如何に變質し、如何に短所化したか（二）資本主義が發展期より衰退期に轉入するに連れて資本主義現象從來の公式が如何に變歪されるか、と云現ふ二觀點よりの研究を纒めたもので、飽迄も現實的事象の徹底的考察に根據を置く其の立論は行文の流麗と相俟つて、何人にも日常目睹の事物の裡に深遠なる學理を透視せしむるに容易である。

（緒言）資本主義末期の研究に就て（一）資本主義末期の一般的研究（二）資本主義末期に於ける社會現象の研究（三）資本主義末期に於ける農村經濟の研究（四）資本主義末期と日本經濟の研究（五）資本主義末期に於ける英國經濟の研究

發行所 東京市麴町區內幸町 幸ビルデイング一階 振替東京八四〇二二番 改造社

資本論解説 （近刊）

カール・カウツキー著
高畠素之譯

（四六判三三六頁　定價壹圓　送料十八錢）

今日マルクスを知らずして社會問題を論ずるものあらば愚の極だ。それ程マルクス學は今日諸理論諸運動の基調となつて居る。だが、彼の膨大にして難解なる資本論全卷を讀破することはその精力と時間に於いて我々萬人に許されざるものである。此の點本書の如き完全なる解説書は何時の時代までも大いなる、その役割を演じ得るものと斷言し得る。譯文また、數回の改譯を經て定評のもの。我が社が今日此の廉價版を出すは可成の社會的貢獻と信じてである。あらゆる人々に必讀を勸む。

木靴 （近刊）

久米正雄著

久米氏の快心の作中より自選せる力作のみである。氏の文壇に於ける地位と、その藝術的氣韻の高さは今更呶々爲する必要はあるまい。それは自らなる世の讃仰者の多數によつても充分に證し得られる應だ。木靴、舞子外數篇の短篇は皆文壇を賑かしたるもので、その心境の深かさと、その特有の詩的ふくよかさは誠に秋空の如き萬人の心底に滲みるもの。凡そ文藝を口にする者の必讀翫味すべき書である。

江戸子の死 （近刊）

岡本綺堂著

綺堂氏の美しき言葉と、見事なる技は實に驚くべきである、本書は氏が此の數年間の作中より嚴選せるものである。蓋し近來の大收獲である。「江戸子の死」外五篇、皆劇壇に好評嘖々たりしもので、誠に我が國のみが有し得る情緒物集である。讀む者、卷を掩ふを得ずして、その高き境地と、人間性の深き中に引きずられるであらう。筆者近來のあざやかに冴ゆる筆調は實に驚嘆の外ない。

法と宗教と社會生活 （最新刊）

田中耕太郎著

（四六判上製　定價貳圓五十錢　送料二十二錢）

本書は、その深き哲學的思索と現實生活の鋭き批判の上に生れたものである、吾々の社會生活が、それ自體に於いて法と宗教とに如何なる關係を有し、如何なる調和の上に立つべきであるか？著者は今それに、專門的なる考究を試み、明快なる哲學的理念を與へ又法學通論的方法でなくて法・國家及社會生活の意義を簡單に闡明して居る。宗教法案の喧々さるる時各人必讀の書だ。

發行所　東京市麹町區内幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社


ビヤ黨は笛吹く…
逸品は踊る。
サクラビール

西行法師

野口米次郎

一

西行の一生は外形的には見すぼらしい墨染の衣一枚に過ぎなかつたが、その魂は感傷的詩の情緒と忍辱苦惱の鎔鐵爐として日本の文學史を飾る最も強い最も弱い、所謂獨創的人物の一人であつた。彼は強い人間であつた……彼は二十三歳で出家して七十三歳で死ぬに至つた間、即ち『露の玉きゆればまたもあるものを賴みもなきは我が身なりけり』と人生の果敢なきを感じ『願はくば花のもとにて我死なんそのきさらぎの望月の頃』と釋迦入滅の頃の死を希つたこの二つの歌を繋ぐ一千七八百首の歌は彼が横目も振らずに辿つた一本道の記錄である。彼が強い人間で無かつたならば、どうしてかかる執拗片意地な行爲を生活に演ずることが出來よう。彼は弱い人間であつた……彼は涙のインクで佛陀神明の姿を山川草木の上に描いた、彼は永劫の自然から盛衰無常の現實界を眺めて泣き又傷心悲哀の涙を自然に注いで自然を強ひて自分の悲曲に合唱せしめた。彼は厭世家であつた、もつとはつきりいふと厭世そのものを樂む厭世家で、寂しさがなくては生きていかれなかつた日本一の泣男であつた。私は今この泣男が『鴫立澤』で踏む一人舞臺を想像する……一介の笠一介の杖の西行は花道の舞臺に近い所に立ち遙に月の金波銀波が危い岩に碎ける清見が關を心に浮べて『清見潟沖の岩こす白浪に光をかはす秋の夜の月』と口吟む。彼の瞬間的想像は夜を日中と一變させて、眼前の富士の裾野は颯々たる松籟に波打つやうに見え漫々たる青疊の海の上を風を孕んだ白帆が運歩を運ぶ。彼は頭をあげて烟立つ高根を眺め、『風になびく富士の烟の空に消えて行くへも知らぬ我が思かな』と口吟んで草枕旅寢の纏綿として盡きない情緒の戰慄を感ずる。から花道の思ひ入りが濟み『鴫立澤』の舞臺に入る時背景の夕日は晩鐘の響につれて沈みゆく……西行は『荻の上風身にしみて芦の枯葉のさやぎも寂しき』を覺える。舞臺一面に漲る空氣は灰色だ。舞臺と背景は渾然と溶けやつてまるで一幅狩野派の繪畫だ。この靜寂な畫面に何か動くものが三つ四つある、それが鳴き飛ぶ……私共はそれ等が鴫であることを直感する。今舞臺の中

央に立つ西行を見るとその黒い半面は輪廓がはつきりと暮色を拔いてゐる、この浮彫の顏は徵かに動き始める……

『心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ』、

ああこれぞ古今未曾有の一人舞臺である。私は未だ曾てこの鴫立澤の西行のやうに印象の深い舞臺藝術を見たことがない。全世界を通じて彼のやうに自然を支配し否自然に支配された人間の場合を見たことがない。自然は西行に向つては背景でなかつた。恰も波が海の表徵であるやうに彼が自然の表徵であつた時、彼は春花秋葉のうつろい易い琴線に觸れた。自然は力強い永遠性から傷み易い破れ易い瞬間的白露をこぼしゆく……西行はその一つ一つを拾つた。彼は『歎けとて月やは物を思はするかこち顏なる我が涙かな』と歌つた、その時月は彼の悲しい戀人である姉妹である、單に自然の一現象でなく彼と共に感情に生きる一人格である。白雲のやうに霞む春の櫻は眷々綿々たる戀愛の婦人となつて彼をとどめた。彼は路傍に立つてその人情を分つてめそめそ泣いた。彼は自然の非情の斷片を集めて悲哀の熱い淚で之れ等を人情化して詩の世界を作つた。

ああ弱い西行は强い西行であつた。彼は一度出家した以上墨の衣と順禮者の笠と杖を捨てなかつた。行爲の人として三十一文字以外に何物にも觸れなかつた。水は必ずしも俗塵の都會を流れることを辭するものでないが決してそこに止らない。西行も出家後時には都會の人と吟詠贈答し、『吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらん』と歌ひ又『還りゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり』と歌つて現實世界を忘れなかつたやうであるが、都會を流れる水がするりと都會を離れ或は森林に入つた月がするりと森林を離れる如く、彼はするりと都會を捨てて再び俗塵の人とならなかつた。彼は他の幾多の特殊人物のやうに强弱兩端の世界に住んだ……この矛盾が私共に異樣の興味を彼に感じさせる。この矛盾が彼を劇中の人物として最も特殊なものとした。彼が自分一人の道を步き自分一人の言葉を語り自分一人の行爲をした時、彼は立派に劇の一人舞臺を踏んだ。前記『鴫立澤』に匹敵するやうないくつもかの興味の場面を彼は演じてゐる。私共は彼を『特殊』の一語で蔽ふことが出來る。彼が如何に人の豫期しなかつたことを演じても、如何にも彼に相應しいの感を私共に與へる。彼は語つた、彼は行つた……その言葉、その行爲が如何にも西行らしい感を私共に與へた。

私は今『江口の遊女』の一條を語りたい、高安月郊の劇『櫻時雨』の三郎兵衞閑居は紅葉の秋を奏づる村時雨が横樣に落ちる銀の絲で一幅の畫面を裝飾して紹由と吉野太夫が沸る茶釜の松風の響につれて踊る一幕であるが、この『江口の遊女』も芦の枯葉をたたく村時雨でその幕は開く。時は治承二年長月二十日餘の頃とあるが、秋の季節でさへあれば必ずしも治承二年でなければならぬ譯はない。見すぼらしい頭陀僧の小い包を背に負つた西行は、謠曲の言葉を借ると『淀の川舟行末は鵜殿の芦のほの見えし松の煙の浪よする江口の里』へ着いて一軒の遊女屋の軒口に身を寄せて雨宿りをしてゐる。撰集抄に『怪しかる賤が伏屋』とあるから障子破れ疊の古びた曖昧屋であつたであらう。今しも裏座敷の危なつかしい欄干に寄つて下を滑りゆく引掛りさうにない

船頭を眺めて居つた遊女は、つと立上つて家の軒口に集る陰鬱な空氣をその寂しいが艶な姿でぱつと光らした。『軒に立つてはいけないよ、不景氣な…さつさと出てください』と遊女は西行に叫んだ。西行は取敢へず『世の中を厭ふまでこそつらからめ假りの宿りを惜む君かな』と口吟んだ。遊女はこれは話せる面白い乞食坊主だと思つて、『世を厭ふ人とし聞けば假りの宿に心とむなと思ふばかりぞ』と西行に答へた。

場面の舞臺はぐるつと半分廻はると、西行は遊女と對坐してゐる。薄暗い行燈の光は遊女の顏に落ちる…早や四十の坂を越えた姥櫻だが満更捨てたものでなく何處かに品がある。部屋の天井から下つた蜘蛛の絲は裏の川から吹いて來る微風に搖れ、驚くほど大きな綺麗な一疋の蛾は行燈を廻つてその影が破れた疊の上に落ちる。蟋蟀の小さい聲が手近な勝手口から聞えて來る。正にこれ場末の遊女の物語を聞くに屈竟の場面である。白居易の琵琶行もどきに語りだすこの遊女の物語も他の遊女の身の上話と異りはない。然し遊女が『女は殊に罪深きと承るにこの振舞をさへ侍る事げに前の世の宿習のほど思ひしられて侍りてうたてしく覺える』と語つた時、感傷詩人西行の人情の心は震へた。彼は人間生活の痛ましさに觸れて、風に搖れる蜘蛛の巣も蟋蟀も乃至は行燈を廻る蛾も彼と共に、否彼の涙に答へて悲しい人生の悲曲を奏づるやうに思つた。然し彼が告白は即ちそれ自身が濟度の行爲であると思つた時、眼前の遊女は麗しい希望の微光で後光がさすやうに感じた。遊女は言葉を續けた…『同じ野守の鏡なれども夕べは物の悲しくてすずろに涙にくらされて侍り、此の假初の浮世にはいつまでかあらずらんと味氣なく覺ゆ。曉には心の澄みて別れを惜ふ鳥の音など殊に哀に侍り、然あれど夕には今夜すぎなば如何にもならんと思ひ、曉には此の夜明けなば樣を變へて思とまらんとのみ思ひ侍れども年をへて思ひなれにし世の中とて雪山の鳥の心地して今までつれなく止みぬる悲しさ。』彼女はかく語つてしやくりあげて泣いた。ここがこの劇の高潮でこの後を語る必要がないと私は思ふ。芭蕉にも『一つ家に遊女も寢たり萩と月』の句があつて、奧羽行脚の時市振之關で『衣の上の御情に大慈の惠を垂れて結縁せさせ給へ』と袖に縋つた遊女をふり捨てた話があるが、西行の『江口の遊女』ほど私共の感情を動かさない。

私は撰集抄第六巻第十六のこの條を讀むと直ぐ謠曲の『江口』を考へさせられる。謠曲の面白味は現實から幻の世界を紡ぐ、即ち俗塵の世界を延長させて夢の理想へと及ばしめる點にある、故に遊女の歌の『假りの宿に心とむるなと』の言葉を敷衍して、『地「おもしろや、シテ「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地「隨縁眞如の波の、立たぬ日もなし〳〵、シテ「波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、地「心とめずば浮世もあらじ、シテ「人をも慕はじ、地「待つ暮もなく、シテ「別路も嵐吹く、地「花よ紅葉よ月雪の古言も、あらよしなや、シテ「思へば假の宿、地「思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり』とあつて、江口の作者は遊女を理想化して普賢菩薩にして仕舞つて、月の夜舟の川逍遙の有樣を見せて居つた彼女の船は白い象となつてそのまま白雲の彼方へ消えさせてゐる。この謠曲の最後を繪にした傑作は岩崎男所藏にかかる一幅「白象

の遊女江口の君』であらう…作家應擧は自分好みの小肥りした美人に遊女を描いてゐる、精緻微細を極めた毛髮に對照させる爲め金銀の菱形模樣を襠と帶に浮させて見るからに平靜優雅な理想再である。如何にも普賢菩薩の再來に相應しい女性の肖像である。私は應擧の藝術を餘り高く買ふものでないが、この一幅で彼は私に頭を下げさせる。

謠曲『江口』は月に花に自然の開落盛衰の理趣を人間生活の情景に照し合せた西行の一生を一貫する詩境であつて、遊女が西行に語つた言葉とある『宵には此の夜すぎなばと思ひ曉には明けなばと涙を流し侍る』の苦惱を敷衍說明したものである。西行は永劫不變の理趣と流動變轉の情景との二つの獄門にかかりその現實を取つて以て已が詩歌とあた。若し江口の遊女物語が西行の眞實の經驗であつたならば、彼は前記の言葉の苦境に立つ彼女の心理狀態は即ち彼の夫れで、彼は必ずや人事でないと同情の涙を流したに相違ない。然し人間の苦悶は希望の彼岸に達する船賃である。故に眞實の苦悶は即ち解脫の門である、濟度の微光は苦悶の涙にこその眞珠の色を流してゐる。人が苦悶に服膺してその祝福を受ける時始めて即身即佛の眞理を了解することが出來る。西行の歌の大部分は苦悶者が簡單赤裸に發した悲鳴である：：世界に詩多しと雖も西行位自己を暴露した詩人はゐない。彼は何等隱蔽する所がない、彼は日本あつて以來の最も正直無邪氣な詩人である。彼の三十一文字は佛の面前に捧げる告白である…この位尊い禮讃の言葉が何處に有らうぞ。彼は月に泣き花に心を傷めた…ああこの態度が自己解放でなくて何で有らうぞ。彼の悲鳴は即ち人間解脫の表徵でなくて何で有らうぞ。彼は櫻を禮讃して『たぐひなき花をし枝にさかすれば櫻にならぶ木ぞなかりける』と歌つた。西行自身も比類なき正直な歌を身に咲かせて即身即佛の理を明かにした。

西行の江口の遊女物語はまだその後篇がある。西行は彼女に分れて再訪問を約したがその意を果すことが出來なかつた。彼は彼女に『假初の世には思を殘すなと聞きし言の葉忘られもせず』の一首を贈つた。遊女はその返歌として、『髮おろし衣の色は染ぬるになほつれなきは心なりけり』と彼に答へた。いふまでもなく彼女はその時既に出家して居つたのである。この一首の如きは極めて西行張りの和歌だ、移して以て西行自身の自責の言葉とすることが出來る。芭蕉の『西行上人像讃』に、『捨てはてて身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ、花のふる日は浮かれこそすれ』とあるがこの位西行の西行たる所を道破し盡した文字はない。眞實の詩人は常に眞實の批評家である、即ち詩人芭蕉は批評家芭蕉である…この西行の批評だけを見ても優にそれを說明してゐる。芭蕉が西行の感傷的な『ものの哀れ』を心理的に或は表徵的に變形進步させて『さび』とした點は確に彼の大價値であるが、如何に彼が西行に私淑して居つたかは、彼が死ぬまで山家集を持つて歩いたことを見ても知れる。山家集は前記江口の遊女の『衣の色は染めぬるになほつれなきは心なりけり』の記錄に過ぎない。西行は世を捨てた、それでも春の花に冬の雪に浮かれた震へた…この煩悶を樂み生きて、彼は詩歌をして煩惱即菩提の表徵たらしめた。西行には詩歌は宗教であつたことはいふまでもない。彼は慈圓に和歌の道を質問された時、『和歌の奥旨は密教の奥旨だ、密教を學ばないと和歌は詠まれない』と答へたとあるが、明瞭にその消息を傳へた言葉といふ

ことが出來る。西行が『さもいみじかりける遊女にて侍る』と江口の遊女を褒めてゐるが、彼は彼女の歌に宗教を見たからである。彼女の名前は語られてゐないが、一夜の宿を彼女と共にすることを辭しないのは西行ばかりではあるまい。私は西行と共に『彼の遊女の最後の有樣何と侍るべき返す〴〵床しく侍る』と思はざるを得ない。惡業の法師が青樓に寢たと聞くと不自然のやうに思はれるが、この一挿話はどうしても西行物語になくてならないものである。西行は如何に不自然な場合でも、彼は單純な詩歌の魔法ですべてのものに自然の歸着を與へてゐる。彼は日本の歴史中稀れに見る特殊の人間であつた。

二

日本ばかりでなく世界いづれの國でも所謂中世紀、殊に中世紀末期の文學は面白くない。その理由は簡單である、その時代の表現はすべての場合に個性的でない‥‥假令個性的の場合があつても、それが委靡頽廢に傾いてもう一息といふ所で止まつてゐる。譬へると赤裸な蠻性を捨てた少年のやうなもので、特殊な個性を發揮するには間のある中途半端の時代である。若し私共に中世紀に興味があるとすると、私共はそれを一般の社會的見地から見ねばならぬ‥‥少くもその時代の人間は皆な類型的で一つの感がある。勿論中世紀の人間が同時代の生活世相や思想を眺めたならば彼等は樣々の變化を見出したに相違ないが、時代を遠く離れた今日の私共には、恰も遠方の海が一枚の廣い疊の如くに見えるやうに、それ等の起伏凹凸を見ることが出來ない。從つて如何なる國の中世紀でも色彩がない、假令色彩があつてもそれが稀薄で私共を力強く引付けない感が多い。

今日本の歴史で平安朝末期以降、特に西行が生きた所謂院政時代から鎌倉末期に至る間を考へると、矢張り前記批評の範圍を離れない。英邁な後三條天皇は横暴な藤原氏の權力を取つて壓へたが、次の白河鳥羽の兩帝が奢侈と逸樂とを喜ばれたが爲め宮中を氣の抜けたやうな和歌と見ては綺麗な容儀のバザーとして仕舞はれた。源氏平家が京都を淋漓たる赤い血で彩り町から町へと恐ろしい刀や鎗や矢で野蠻な行進曲を奏して歩いた間でも、所謂月卿雲客は恰も戸をぱつたり閉ぢた蝸牛のやうに御所の塀の內で姑息の安を貪つて平氣で暮らした。その後源頼朝が幕府を鎌倉に開いて國の政體が一變しても、彼等は意氣の沮喪した蝸牛生活を破るの力も無く又その機會も與へられなかつた。彼等が消閑の道具、卽ち暇潰しに和歌を口吟んで居つた有樣は、丁度花合せして居つたと同樣であつた。私共はかういふ人間から眞實の文學が望める筈がないのは當然である。眞實の文學は眞實の生活から生れるといふことは古今東西を論ぜずに一定不動の原則だ。それ等の月卿雲客に眞實の生活がなかつた、卽ち眞實の文學がないことに成つたのである。私は何も故意に彼等を罵倒して喜ぶものでない。私は彼等が負け將棊のやうに段々とかかる運命に追詰められて行つた事情を寧ろ憐れむものである。そもそもの最初を考へると彼等が東山大堰川を美風景の最大なるものとした京都數里の間を極樂淨土として月雪花の生活をしたといふことは、確に彼等の生活の更新であつた。人生の新發見であつた。然るにそれが傳習となつて彼等の生命を銷磨した時、彼等は云はば自繩自縛の詰らない悲劇を演じたのである。彼等

は己が作つた雰圍氣で窒息するに至つたのである。私は如何なる國の中世紀でも色彩がないといつたが、彼等に最初は人を驚かすに足る色彩があつた。そしてその色彩が漸次に消滅して行つたのである。譬へると彼等は色の褪せた烏帽子や指貫のやうなものになつたのである。

然しこの間にあつて大いに氣を吐く人間が一人居つた。それは他の人でない西行だ、世にありし日の鳥羽院下北面の武士佐藤義清だ。彼の系圖を案ずると彼は藤原房前の子魚名の末流、俵藤太秀郷が九代の後裔で、父を康清と云ひ母は監物清經の女であつた。して見ると彼は由緒正しい弓矢の家に生れた男だが、年二十三歳の時彼は手に握つた所謂將來なるものをかなぐり捨てて自分丈けの住む獨自の世界を作つた。二十三歳と云へば男子意を決すべきの秋だ。乃ち彼は意を決して自個創造の別世界に入つた……ああ、この西行またの名圓位法師の世界は掛値なしに自由の世界であつた。彼の時代の上に立つた人間は二つの階級に屬さざるを得なかつた。一は『櫻かざして今日も暮しつ』の遊惰な堂上人階級と、他は狹量な黨派氣質を軍馬の蹄で叫ばした武人階級であつた。この二つの階級の外に價値のある生活はないと思はれて居つた時代に、西行が別に大きな一新世界を作つて住んだといふことは偉大な行爲と云はねばならぬ。彼は自分丈けの世界に生きて、前にいつたやうに中世紀が失つた『赤裸な蠻性』を取返した。彼は中世紀の無個性の中途半端を離れて特殊の生活を發揮した。日本に詩人や英雄の數は多いが、西行位無束縛の生活に生きた人間はゐない、彼位自由の何物たるを味つた人間はゐない。彼あつて始めて日本の中世紀にも類型的でない人間が一人居つたことを誇ることが出來る。『行雲流水』といふ言葉があるが、西行の生活は正にそれであつた。然し彼はどうして實際生活の法則に掣肘されない自由の生活をすることが出來たか、もつと簡單に云ふと、彼はどうして出家後の飯を食つて來たか……今日この點を詳細にする記錄がないが、恐らく彼はその後の芭蕉の如く返濟しなくてもいい程度の借金を人にしたであらう、感謝しなくてもいい程度の厄介を人にかけたであらう、又人から歌の謝禮を貰つたであらう、罪にならない程度の無責任な讀經に對するお布施に預つたであらう、人の軒の下に立つ乞食をしたであらう、寺から寺へと宿つて歩いたであらう。然しかかる家無しの風羅坊生活も今日私共が想像するやうに不安な生活でなかつたかも知れない。若しこの一笠一杖の頭陀僧生活が事實上に苦しい生活であつたならば、如何に西行と雖もその不安な生活狀態を五十年の長日月に渡つて堪へることがどうして出來よう。

芭蕉が奥之細道に、『月日は百代の過客にして行き代ふ年も亦旅人也。船の上に生涯を浮べ、馬の口捕へて老を迎ふる者は、日々旅にて旅を棲所とす。古人も旅に死せるあり。予も何れの年よりか片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そぞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神の招きに會ひて取る物手につかず、股引の破れを綴り、笠の緒着け替へて、三里に灸すうるより松島の月先づ心にかかりて、住める方は人に讓り杉風が別墅にうつる』と書出した時、彼は確にその心に西行の無錢旅行を浮べたに相違ない。この旅行で彼が越前の沙越の松を

眺めて、西行の『終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる沙越の松』をあげて『數景盡きたりもし一辭を加へるものは無用の指を立るがごとし』といつてゐる。又路通が還俗したことを聞いて曲翠に送つた彼の手紙の文字にも『その志三年以前より見えたる事に候間驚くに足らず候とても西行能因が眞似はなる間敷く』とあるのを見ると、芭蕉は西行を理想とし西行の生活を詩人生活の模範と思つたであらう。『柴門辭』の中にも、『只釋阿西行の詞のみ假初に云ひちらしあだなるたはれごとも哀なる處多し後鳥羽上皇の書せ給ひし者にも此等は歌に實ありて而も悲しみをそふるとの給ひ侍りしとかや』とあつて何にかにつれ西行のことを語つてゐる。私はここで西行と芭蕉の比較論をするのでなく、彼等が共に自然により近く接觸する放浪生活に人間本來の面目がある眞實の詩歌がそこから生れると信じた點を指摘する。人間は城廓にもぐり込んで自然を離れ、風や雲や水やとの聖餐共受を否定した罪に問はれて次第に腐れゆく。然るに西行宗祇芭蕉の如き『眼に見えぬ神の御手に招かれてそよ吹く銀の風の如く聖き空をめぐつた』放浪の自然兒は、山水草木を解脱の表徴として禮讃したが爲め彼等は永劫に自由である。その生命は永遠に新しい。浮動變轉は宇宙の方則である。この方則に生きる旅人生活は則ち菩提の生活である、決して弱者の生活でない。實にその生活そのものが懺悔である、そしてその懺悔が詩歌である。

芭蕉時代の旅行も今日のやうに樂なものでなかつたが、それを昔に溯つた西行の漂浪旅行が如何に冒險的のものであつたかは容易に私共が想像する所である。西行は殆ど全國に渡つて山川を遊覽した……その遊覽が非常な忍耐の報酬であるから尊い。今彼の足跡を詳細確實に知ることは出來ないが、私は諸書の語る所を綜合して彼の生活をしのびたい。

そもそも花の吉野山は七世紀の末葉役の小角の開いた所で、奧の院の大峯山と本堂の藏王堂に附屬する堂塔僧舍を總稱して金峯山寺といつてゐる。山澤を拓いて自然と人間との津梁を架することは佛への服務の道だと信じた古代の僧侶に、この山へ櫻樹を植付けること位は何でもなかつたであらう。今日の私共には『歌書よりも軍書に悲しよしの山』として、又『眉雪老僧時止掃落花深處說南朝』の遺跡として有名であるが、平安朝時代の大宮人達はここへ遊山して、今日のやうに俗化しない以前の花の新鮮な姿を見たであらう。然しその頃の人々が後鳥羽院の歌にある如く『嵐もしろき春のあけぼのの落花』を賞美して居つた時に、西行が『眺むとて花にぞいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ』と花に悲哀を見出したといふことは彼の新發見であつた、西行が出家後何程の月日を經て吉野入りをしたかを私は知らない。撰集抄に、『山の有樣、花の色、木々の姿、處の靜なる事都にて思ひやりしには猶まさり面白く侍りき、ならのはまではこちたき深山の嵐を花の末によはり、櫻は雪に咲きかけり行くさま珍らかに侍り、上下の御前安禪寶塔の所有樣、心なからんすら見過ごし難く侍るべし、されば此の所は心も止まりしままに三年を過ぐし侍りき』とあるから、彼は三春の花をここで眺めた……『吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん』と口吟んで人足未踏の花を賞したり、又『吉野山やがで出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん』と歌つて京

都の空を眺めた、西行は金峯神社を右へ五六町入つた山懐にある今日所謂西行庵住の舊址でこの三個年を暮したであらうか。彼が『とくとくと落つる岩間の苔清水汲ほす程もなき住居かな』と歌つた苔清水は庵の手前に今も流れてゐる。芭蕉はここへ來て、「露とく〳〵こころみに浮世すすがばや」といつたが此處ならば彼等の好きさうな閑寂な一境である。

西行の吉野入りの頃は京都を矢叫び關の聲の修羅場とした保元平治を前に遡る十幾年の時ではあるが、眞夜中に既に曙の微動を感ずるやうに、洛中一般の空氣は陰欝不安で何か將來の悲慘を暗示する所があつたであらう。『この世をばわが世とぞ思ふ望月の』の藤原氏の歡樂榮華は亡びたけれども、一度破壊された皇室の威嚴は到底完全なものとなる理由はなく、御所を中心として生きた大宮人達は過去の夢と宗教の妄信のため明瞭な理性を失つて恰も暗い陰影の夕へ落ちるの感があつたに相違ない、詩人の敏感性は天津橋上で杜鵑一聲を耳にして戰亂を豫想する……假令詩人でなくても、彼が順良な心ある人間であつたならば、必ずやこの不愉快な現實の恐怖を逃れて憧憬の理想を何處かに求めようとしたであらう。この時彼が佛門に入つて大慈大悲の法味を受け光明の遍照に觸れて人生の變動を永劫の不變と變化させようとしたのは極めて自然の行動である。恐らくこの時代に人生の轉身策を佛の法悦に見出したものは西行ばかりではなかつたであらう。撰集抄中に、『吉野の三世不可得觀の僧侶』のことが書いてあるが、この人も西行式の一人であつたに相違ない。江口の遊女と同樣にその名は傳つてゐないが、倫理の廢頽時代には隱れた求道者が多いものだ。

西行が世がいよいよ亂れて保元の血の池地獄と顯れたのを見た時、彼は世外の放浪坊主としてかかる無道の悲劇に對し何等の干與者でないことを如何に喜んだであらう。久壽二人近衞天皇の御崩御について鳥羽法皇御他界あらせられた……西行は鳥羽殿落成の際歌を奉つて御劔を頂戴したことを德としてゐる、彼は法皇の御寵愛を蒙つた。彼は其當時高野にあつたが偶然に下山して法皇の御大葬に會ひ、『今宵こそ思ひしらるれ淺からぬ君に契のある身なりけり』又『道かはる御幸かなしき今宵かな限の旅と見るにつけても』と歌つて悲歎の涙にくれた、彼の悲歎はこれで止らなかつた、彼は御大葬の哀歌に征戰の叫びが續いて起るのを聞いた……左大臣頼長は流矢に中つて倒れた、源爲義は殺された、崇德新院は讃岐に遷御ましますに至つた。保元の亂につづいた平治の亂は京都を一層悲慘の巷と化した……藤原信頼源義朝は戰爭に敗れた、平淸盛は勝利者の勢力を得た。住吉慶忍筆平治物語の中で最も傑出してゐる院の御所三條殿夜討の卷を見たものは、容易に如何に殿舍が燃え宮嬪が叫喚し兵士が走つたかの酸鼻の有樣を想像することが出來る。『御所には軍兵四方を打ふせぎ火を放ちて洩出づる者をば射殺し切殺す、若しや助かるとて井にぞ多く落入りける、上下の女房局の女のわらべをめき叫びて走り出て倒れ伏す、馬に踏まれ人に踏まる、淺猿しともいふべかり無し』とこの繪卷物の言葉に書いてあるが、この實際を見たものは前大納言成通のやうに遁世を欲したであらう。西行は出家した成通に『いとふべきかりのやどりはいでぬなり今はまことの道を尋ねよ』の一首を贈つてゐる。恐らく彼はその時『これ見たことか云はないことでない』の感を持つたであらう。詭

岐に流され給つた崇徳上皇は歌人である。天養元年の撰集左右大夫藤原顯輔の詞花集にその御製が六首も入つてゐる。西行は敷島の道の運命はこの上皇の双肩にかかると思つて居つたであらう。上皇が讃岐に遷御ましました時彼は、『言の葉の情たえぬる折節にありあふ身こそ悲しかりけれ』と歌つてがつかりしてゐる。上皇は保元の亂後五六年目に讃岐の配所で憤懣のうちに崩御し給ふに至つたが、この悲報に接した西行が如何に悲歎にくれたかは想像に餘りある。彼は今紺縅の直垂に唐綾縅の鎧を着て重籐の弓を持つ武士でない、彼は大中黒の矢を負つて澤山の郎徒を從へる仙洞御前の佐藤義清でない。彼は墨染の衣を身に纏つて山野を放浪する西行であつてみると、彼は上皇の崩御を自分ひとりの悲みであるやうに感じ如何に彼はその菩提を弔つたであらう。時に西行年五十いくつであつたが、私はずつと溯つて彼の吉野庵住三年後からつづいて私の物語を續けたい。

西行は吉野を後にして熊野參詣の旅に出た。彼は紀州千里の濱で一夜を明かして那智の御山に着いた。彼は和光同塵の垂跡、平等方便の利生、八相成道の果證、般若妙法の眞法施、言秘密の法樂、臨終正念、往生極樂の爲めとてそこの千手觀音の瀧に入堂して禮拜の日を送つた。彼はその上にある一二の瀧を眺めて後南房僧都といふ先達に伴はれて大峯登山へ出發した。季節が秋であつたから夜は月を賞し晝は老杉古檜の間を彩る紅葉を眺めて行者返しといふ第一の難所も無事に越え、三重の瀧を過ぎ深山の岩屋に籠つて、『烈々たる明王の火災に我が罪障もうせたりと覺えて』とあつて、『露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずば如何にあやしからまし』の一首を口吟んだ。之れより彼が大和の國境に着くと山村水郭の田野に山鳩の鳴くのを聞いて、『古畑のひばのたつきにゐる鳩の友よぶ聲のすごく聞ゆる』と歌ひ、いよいよ里へ着いて安養淨土の望を就けたと有難涙を流して先達と分れた。

彼は其後津の國の住吉へ參拜したが道すがらの所謂名所舊蹟を訪れた。住吉で波が松を洗ふ有樣を『古の松のしづえを洗ひけん波を心にかけてこそ見よ』又『住吉の松の根あらふ波の音を木梢にかくる沖つしほ風』と歌つて、彼はここで一夕を過ごした。住吉明神は謠曲の文字を借りると、『忝くも西の海靑木が原の波間よりあらはれ出でし』和歌の神様である。西行はここで『岸うつ波も松風も颯々の鈴の聲ていとうの鼓の音』を聞きながら、明神へ誓約を與へその保護によつて『歌は陰陽二つの道を守る其の句を分つて五體とす、水火木金土なり、上下は卽ち天地人の三才の秘密』を學ばうとしたであらう。謠曲の『雨月』はこの西行訪問と撰集抄第三卷第十八の『賤が伏屋』の條を經緯として書いたもので私に一入の興味がある。これは私の好きな一篇で、恐らく最も詩的なものの一つであらう。假令この『賤が伏屋』が後世の作り話であつたにしても、かういふ工合に詩的に敷衍されるた物語の精神が面白く躍動して來る。

私は西行の住吉訪問から横道へそれたが、彼の歌心は過去數ヶ年に渡る山林放浪のため一段と澄み淸められて、彼は再び京都へ歸るに至つた。彼の不在中京都に樣々の變化があつて有爲轉變の感を彼に與へた。西行が振りすてた妻子の門邊へ佇んだといふ插話もある……其時八九歲位になつてゐた彼の娘は、立蔀から前庭の花を見て居つたが汚い乞食坊主を見て內へ引込んだといふことである。

西行は涙に咽んだが彼女を呼びとめることも出來ず、そのまま昔の自分の家を立去つたといふことである。彼は京都の何處に住みどうして生きたかは知る由もないが、崇德上皇が讃岐で崩御あらせられた頃は、京都と高野とを往來して居つたに相違ない。彼は應保元年の頃高野に住んで、其年崩御あらせられた美福門院の御骨を高野へ迎へ『今日や君おほふ五つの雲はれて』の一首を詠じて居る。西行は血の雨を降らした保元の亂に親子兄弟相爭ふといふ人倫の廢頽を見た。彼はそれに續いて起つた平治の慘状を見て如何に現實世界の住むに堪へ難きの感に打たれたであらう。

三

崇德上皇が讃岐へ遷御させられた前、意ならずも御髮を剃つて御室の仁和寺にお出になつた。西行は上皇に召されて御前に侍り、『厭離穢土の次第有爲無常の論理成佛得道場の因緣往生極樂の證跡』を詳しく言上した。上皇は彼に『われも同じ憂の身とならん爲に月の百首を詠まんと思ふ』と仰せられた時、西行は月十首を上皇に奉つた。

上皇が『都には今宵ばかりぞ住の江のきし道おりぬいかでつみ見し』との御歌があつて泣き叫ぶ女房達に別れ、草津から御船に乘せられ讃岐の松山へ入らせられた後の物語は、實に悲慘の極みである。

かくて崇德上皇は長寬二年八月二十六日御年四十六歲で崩御せられ白峯山上一片の煙と化せられた。上皇が讃岐へ下られた以來西行の同情は悲歎と高潮して、その熱烈な感情をいくつもかの歌に述べてゐる・・・『ながらへて遂に住むべき都かは此の世はよしやとてもかくても』『まぼろしの夢を現に見る人は目もあはせでやよを明すらん』『其の日より落つる涙をかたみにて思ひ忘るる時のまぞなき』。西行は一念上皇の涙をのんでの臨終を考へると茫茫たる夜半の涙を流さざるを得なかつた。彼は仁安三年十月十日四國遍歷の旅に立つたが、その主なる目的はいふまでもなく上皇の御墓に參拜してその跡を弔はんとするのであつた。出發の前彼は賀茂の社へお別れのため參詣したが、社内は木の間を洩れる微光の月に照らされて神寂びた感に打たれ『かしこまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふ心に』の一首を詠んだ。

彼は松山に着き上皇が幽閉遊ばされた海岸近くの山上の小屋はと見るに、岸打つ浪に亂れる濱千鳥の聲が悲しく聞えるのみで何の跡方もない。西行はこの餘りの御有樣に愕然たらざるを得ない・・・彼の歌に『松山の波の心は變らじをかたなく君はなりましにけり』。彼は低徊顧望ここを去ることが出來ない。彼は眼前の波濤のやうに百感が交々胸中に捲きかへるのを感じた・・・そもそも西行出家前の主家德大寺左大臣實能は鳥羽法皇の皇后即ち崇德上皇の御母待賢門院とは兄妹の間柄であつた。御外戚に主從の關係であつたことが崇德上皇と西行とを親しく結びつけた。そして彼等は詩歌をその生命とする感情の人であつた。今西行は上皇幽閉の形なき跡を彷徨して、如何に上皇の保元の御企ならず一戰敗れて仁和寺で剃髮姿を曝らされたかを考へる。西行は其時『かかる世に影もかはらずすむ月を見るわが身さへ恨めしきかな』と歌つて、如何に彼の心が限なき月光を眺めて亂れたであらう。

待賢門院御在世御繁昌の時代は西行の懐しい追憶である。鳥羽院北

北面の武士として彼の生活は華麗なものであつた……蹴鞠の催、南殿の御弓、さては四季折々に侍つた酒宴、鳳闕に坐して清涼殿の紫雲を望んだ事や紫宸殿の夜を守つて曙を迎へた時朝日の見事であつたことなど、どうして彼は忘れることが出來よう。特に彼に憶出の深いことは鳥羽御所の御障子の繪に歌を贊して一代の名譽を博したことである。初春の山に谷川の流れる繪に『降りつみし高根のみ雪とけにけり清瀧川の水の白波』と、世捨人の籠る柴の庵を梅の花が飾る繪に『とめこかし梅さかりなる我が宿を疎きも人は折にこそあれ』と、今を盛りと咲きこぼれる櫻樹の下で人が月を眺める繪に『雲にまがふ花の下にて眺むればおぼろに月も見ゆるなりけり』と、夏の初め山野を分けて時鳥を尋ねる繪に『聞かずともここを瀬にせむ時鳥山田の原の杉の村立』と、時鳥の血に鳴く聲を初めて聞きつけた繪に『時鳥高き峰より出にけり外山のすそに聲のきこゆる』と、女房が清水に影を投げる柳の傍に立つ繪に『道の邊の清水流るる柳影しばしとてこそたちとまりけれ』と、秋風に揺れる草葉の露のしげき繪に『あはれいかに草葉の露の氷るらん秋風立ちぬ宮城野の原』と、柴の庵近く鹿の鳴く繪に『小山田の庵近くなく鹿の音に驚かされておどろかしけり』と、月影が嵐に誘はれる小倉山の紅葉に落ちる繪に『小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるる月を見るかな』と、雲が高い山にかかり時雨來らんとする繪に『秋しのや外山の里やしぐるらん伊駒の岳に雲ぞかかれる』との十首を彼は奉つた。彼は今『道の邊の清水流るる柳影』の外さほど人を驚かせる作とは思はないが、人生の苦惱を體驗した今日の西行では到底詠ずることの出來ない新鮮艶麗な姿がそれぞれにあると思はざるを得ない。其時彼は朝日丸の御劍を頂戴した……殊に嬉しかつたのは中納言の前で、目もさめるやうな紅の十五重の御衣を賜つて肩にかけて貰つたことである。その頃の中納言は嬋妍たる美人であつた……それを今日小倉山引退の姿に比較すると何たる相違であらうと西行は思ふ。西行は都出發前に彼女を訪ふてその女僧姿を哀れに思つて、『山おろす嵐の音の烈しきにいつならひける君が住家ぞ』と詠むと彼女は『憂き世をば嵐の風に誘はれて家を出でにし住家とぞ見る』と答へられたことをその心に浮べる。彼女の住家は前は野邊後は山路で、白露しげき葛や尾花で埋もれ、枕に通ふ秋の上風や寢屋に音づれる松の嵐を聞いて如何に待賢門院御在世の時をしのばれてゐるだらうと思ふと、西行は熱い涙が頬に落ちるやうに感ぜざるを得ない。然し彼女の昔に變らない優しい心ばへは實に感服の至りだと彼は喜んだ。中納言を思ふにつけて忘れられない女房は堀川である……彼女は『長からん心も知らず黒髪の亂れて今朝は物こそ思へ』の作者だ。西行の『尋ぬとも風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が行くへ』の歌に彼女は『吹く風の行くへ知らする物ならば花と散るにもおくれざらまし』と答へた。かう待賢門院御一門並にその眷屬を崇つた人々の榮華の夢が醒め果てた今日泣くこと位心を慰めることはないと西行は思はざるを得なかつた。

今西行は崇德上皇の御墓があるといふ白峰を登つてゐる。『松柏は奥ふかく茂りあひて靑雲のたなびく日すら小雨そぼふるが如し、兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳えだちて千仞の谷底より雲きりおひのぼれば咫尺をもおぼつかなき心持せらるる』と雨月物語の『白峰』にある情景で

ある。西行は誰訪へとか呼子鳥の聲に驚き、寂しさに堪へられない猿に答へながら道のない山路を登つて、木の間の小高い土の上に石が三つ疊みかさねてある所へ着いた……あゝ、これが曾て一天萬乘をしろしめした上皇がこの世に殘された御跡かと思つて、彼は熱い涙にくれた。西行はかく九五の御位を踐んだ御人でも最早や有りし世の不平不滿に捕はれて迷つてはいけない、往生安樂の法悦に入つていただきたいと物語り、落ちる涙と共に左の一首を上皇の靈に奉つた。

『よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん。』

萬石の血涙を怨人の上皇の悲しい運命に泣く時西行は感情の詩人である。然し彼が理性の人にかへる時、彼は目を閉ぢて上皇の行爲を是認することが出來ない。彼は心のなかで何故に上皇は人慾の懊惱を支配し得ず徒に保元の亂に都の平和を破壞し給はつたかを恨まざるを得ない。彼は上皇は彼と等しく自然禮讃を解脱の道とすべき歌人ではなかつたかと思はざるを得ない。彼は前記の歌で佛果圓滿の位に昇り給へと歌つたのは、臣として過去の罪を問ひたくないからである。然し彼はその語調に彼の多少の激した心を匿すことが出來ない……彼は再び感情の詩人にかへつて、あら勿體なしの感に打たれるやうに思つたであらう。

上田秋成は『白峰』一篇で西行を上下に燃えあがる陰火の間に坐らせ、彼を『朱をそそぎたる龍顏に荊の髮膝にかかるまで亂れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつかせ給ひ、御衣は柿色のいたうすすびたるに、手足の爪は獸のごとく生のびてさながら魔王の形あさましくもおそろし』い崇德上皇の幽靈と對面させてゐる。秋成は保元物語の『新院御經沈めの事』から想像を弄し、『怨念晴れやらで天狗にならせ給へり』といふその當時の風說を敷衍したものだが、西行と上皇との對話は躍動して日本文學中稀れに見る所の奇蹟である。『一院崩御たまひて殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て御祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ重仁王の卽位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふときは、きのふまで君を慕ひしも今日は忽ち怨敵となりて、本意を遂げ給はで、昔より例なき刑を得給ひてかかる鄙の國の土とならせ給へり』と、西行の追求はいよいよ急である。上皇の靈は汝の理論はさること乍ら敵の無慈悲な態度を怒つて死んで大魔王となり今三百餘類の巨魁であると仰せられる。平治の亂も朝家への祟も豫定の行動で、『只淸盛が人果大にして親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず。汝見よ平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ゆべきぞ』と上皇は仰せられる。上皇は天に向いて誰かを呼ばれると、はあと答へて化鳥が飛んで來て彼の前にひれ伏す……上皇は化鳥に『何ぞはやく重盛が命を奪つて雅仁淸盛をくるしめざる』と仰せられると、化鳥は答へていふ『上皇(雅仁)の幸福いまだつきず重盛が忠信ちかづきがたし、今より支干一周を得ば重盛が命數既につきなむ、彼死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。』此時西行は餘りに魔道の淺ましさを見て前記の歌一首

を卒ると、上皇の幽靈は成程と合點されて化鳥と共に消え失せる。西行は程なく明ける朝の空に鳥の聲を聞いて、更に金剛經一卷を供養して下山するのである。

西行は白峰を下山してから善通寺へ參詣して寺の南大門の前に庵を結んだ。門内の東側に老松一株があつた、西行が都へ歸る時その名殘を惜んで『久に經て我が後の世をとへよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ』と詠んだ。彼は幾年間四國に滯在したか不明であるが、承安元年六月後白河法皇が熊野詣の途次住吉へ御幸があつた時彼もそれに出會つてゐるから、勿論その頃に彼は京へ歸つて居つたに相違ない。其時『後三條院のみゆき神も思ひ出給ふらんとおぼえて釣殿に書付侍し』と前書して、『絶えたりし君がみゆきを待つけて神いかばかりうれしかるらん』と歌つてゐる。推察するに西行はこの和歌の神への法皇の拜禮に崇徳上皇の崩御と共に亡びたと思つた詩歌の復活を認めて喜んだのであらう。

彼が四國遍歴へ出發した仁安三年は高倉天皇が大極殿で御即位あつた年である。天皇の御生母は入道淨海の北の方八條の二位の妹である。自然の結果として宮中府中に於ける平氏の勢力は、恰も東天の太陽の如く隆々として榮えんとして居つた。そして西行が旅から歸つてみると平氏の知行は三十餘ヶ國に及び、庄園田畑また幾程なるを知らずで『平氏の榮華は今を盛りとぞ見えし』といふ有様であつた。彼の時代は廻り燈籠のやうに動く……承安四年に義經は鞍馬山を脫して秀衡に投じた、法性寺の執行俊寛丹波の少將成經平判官康頼の三人は鹿谷に會合して平氏滅亡を計つて治承元年に鬼界ヶ島へ流された、天皇の中宮は毎夜御物怪に取りつかれ始められた。西行は治承四年に福原遷都の報を伊勢で聞いて、『雲のうへやふるき都に成にけりすむらん月の影はかはらで』と歌つてゐる。

西行は都會人である。都會人の價値はどこまでも主我主義者の韜晦を守つて、●環境の惡影響を巧に逃れる點にある。彼の心理狀態は生本で明瞭である。彼はその生活を整理して人間本來の生氣を浪費させない、故に彼の作る雰圍氣は中心へと集まる……彼はこの陰氣な薄暗い雰圍氣のなかで微笑する、彼は武者振り若々しく現實の野卑を呪咀する。私は嘗て『都會人は心の伊達者の態度で野卑に對して悲痛な戰鬪史を書き、彼は己が主義に殉ずる一國者だ』と書いたが、都會人位現實に執着する人間はない、即ち呪咀し乍らそれを忘れることが出來ない運命を持つてゐる。西行は都會人である……都會人の運命として京都を忘れることが出來ずに幾度も旅から京都へ歸つてゐる。彼は何を求めに京都へ歸つたか。他なし、彼は現實の野卑を呪咀せんが爲めに歸つた、彼は悲觀論を一層明瞭ならしめんが爲めに歸つた。そして彼はその悲觀論を宗教の神秘主義で肯定してゐるが、彼の宗教觀は矢張り都會人の宗教觀であつて、どこかに一種不思議な爽快味がある。云ひ換へると彼は悲觀を樂み、即ち涙を樂んで泣いてゐる。彼は『寂しさなくばうからまし』の人間である。由來都會は悲しい所である。必ずしも今日の東京でも倫敦でも巴里でも乃至は紐育でもさうであつて、必ずしも西行時代の京都ばかりの問題でない。然し私は幾年振りに四國遍歴から京都へ歸つた西行を想像する……彼のお主筋は殆ど滅亡して其跡を止めない。今彼は帝闕も仙洞も及ばない入道相國一家の豪奢生活

を見て何と感じたであらうか。彼は直にそれに歸るもの久しからずの理を讀んで、彼等を嫌ふよりは寧ろ悲哀の心で彼等を眺めたであらう。彼は久方振りで京都へ歸つたが、彼は京都に住むことが出來ない。そこで彼はまたもや放浪の旅に出たのである。

西行は四國遍歷の次に西國修行の旅に出でてゐるらしいが、私は治承四年伊勢に於ける彼を想像したい。彼は『雲のうへやふるき都に成にけり』と歌つて月卿雲客の都は亡び、紫宸清涼の詩歌管絃は再び聞くことが出來ないと思つたであらうか。假令耶雲が千年の御所を蔽つてもいつかはその神德を完全に發揮する時が來ると彼は信じたであらう。彼が

『宮柱したつ岩根にしき建てて露もくもらぬ日の光かな』

と歌つた時、彼の國體に對する渇仰禮讃は決して悲觀詩人の號泣でない。彼は平日の涙を忘れた壯嚴な豫言を語る日本主義者である。彼が『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる』と歌つた時、彼の涙は弱者の嗚咽でなく、感激しては泣くを恐れない日本人である……彼は無條件で神廟に額づいて八荒に光臨し給ふその威德に平伏する祖先崇拜者である。ここに於て西行の出離解脫の宗教觀は一變して現實的に成り、彼は西方の極樂世界を五十鈴川の神苑に發見する神道論者である。彼は歌ふ、『榊葉に心をかけんゆふしでを思へば神も佛なりけり』……彼の和光同塵說は決して矛盾でない。彼の神佛が合體してその神德を發揮する時彼の日本主義が確立して、生を此土に享くることを彼は如何にこの神廟に感謝したであらう。

私は今內宮へ崇敬の歩みを運ぶ西行を想像したい……彼の心は五十鈴川の水の如く清い。彼は天を突いて列なる大きな杉樹の間を過ぎ二の鳥居をくぐる。彼の心は嚴肅の感に打たれていよいよ益々澄んでゆく。彼が左に神樂殿を見て神路山の麓大宮居の前に進んだ時彼に崇德上皇の憤死も淨海入道の榮華もない……彼は眼前に天の岩戸を出て八荒に光臨し給ひしわが大君の幻を見るのみである。

彼は多くの場合に落花の悲哀を歌つた、然し彼はこの神苑の花を見ては、『岩戸あけし天つ命の其のかみに櫻を誰か植ゑはじめけん』或はまた『神路山みしめにこもる花ざかりこは如何ばかりうれしかるらん』の歌で久方の光のどけき櫻花の姿を喜んでゐる。彼は多くの場合に月を見て泣いた、然し彼は『神路山月さやかなる誓にて天の下をば照らすなりけり』の歌で、彼の自然禮讃は地上生活の是認となつてゐる。彼は悲觀的詩人である……然し眞實の詩人で誰か悲觀的ならざるものがあらう。彼に樂天的態度がないでない……然り眞實に悲觀的の人間で初めて眞實に現實を是認することが出來る。西行は眞實の詩人である。彼の悲觀が樂觀と一變した場合の嚴肅さを見ると、日本の如何なる詩人も彼に及ぶことが出來ない。彼は泣くことが出來た。故に彼は笑つて現實を禮讃することが出來た。

西行の晩年を飾るものは『御裳濯川歌合』三十六番であらう。これは伊勢內宮の法樂の爲めに集めたもので藤原俊成卿がその判をしてゐる。中に三十六番目左右の歌として、

『深く入りて神路の奧を尋ぬれば又うへもなき峯の松風』

『流れたえぬ波にや世をば治むらむ神風涼し御裳濯の岸』

ああ私共はこれ以上日本に神國意識の言葉があらうとは思はない。『御裳濯川歌合』は西行を國民歌人の最も偉大なものとするに十分であらう。これは彼が後世に殘した文學的遺產として價値あるものの一つで、彼を詩人として論ずる場合に是非共なくてならない作品である。これを他の悲觀的諸作に比較する時、彼はその他の大詩人の如くに兩極端を握つて之れ等を個性で統一した特異性の人であることを立證するであらう。

四

『蘆荻を折敷きたる樣にしあれなる住居見るもいと心すむさまなり。大精進菩薩の草を座とし給へりけるもかくやと覺えき。硯は石のわざとにはあらで、もとより水入るる所などくぼみたるを置かれたり。和歌の文臺は或時は花がたみ或時は扇やうの物を用ひき。歌の事を談ずとも「一生幾ならず來世近きにあり」といふ文を座臥の口ずさみに云はれあはれに貴く覺えしか』と西行が二見浦草庵の模樣が、彼の弟子蓮阿の隨筆に出てゐるさうだ。然し西行は何處で一時の草庵を結んでも、まづかかる生活をしたものであらうと想像される。そして彼が二見浦を去つた時弟子の誰彼が打ち集つてその名殘を惜み、西行も『君もとへ我もしのばん先き立たば月をかたみに思ひいでつつ』と歌つてゐるが、彼は至る所で詩歌の門人を見出したであらう。彼の名聲は生前既に文字通り津々浦々まで擴まつてゐたかも知れない。人々は至る所でこの飄々羈旅の一詩客を迎へ、それぞれ彼に便利を與へ彼の旅情を慰めたであらう。彼の旅行は乞食坊主の旅行ではなかつた

然し外形的には西行は破れた墨染の衣の頭陀袋に過ぎない、旅の見知らぬ人間が彼を尊敬する理由はなかつた。今伊勢を出て『東下り』の西行は、尾張三河を經て遠江の天龍川を渡つて小夜の中山を越し岡部の宿に着いた。西行の有名な歌として『年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山』の一首がある。してみると彼はこの前に一度東遊の旅をしてゐる筈だ。恐らく『心なき身にもあはれは知られけり』の鴫立澤の歌も前東遊の出來事であつたであらう。この前東遊は多分西行の吉野入りをした『幾內めぐり』の後であつたであらうが、關東の何處まで彼の旅行が及んだか知ることが出來ない。私は今西行が箱根山を越え大磯小磯を過ぎて鎌倉に着し鶴が岡八幡宮の鳥居の邊を徘徊してゐると想像する……時は文治二年八月十五日とある。治承四年伊勢で福原遷都を聞いて西行は、今源氏の世と成つてその首都鎌倉の地を踏んでゐる。ああ、この數年間に於ける源平二氏の盛衰は何たる無量の感慨を西行に與へたであらう……源三位賴政が高倉王を奉じての旗揚は宇治川の埋れ木となつた、木曾から立つた旭將軍は粟津原の朝露と消えた、榮拓得喪は掌を反するが如く平家一門は壇の浦の藻屑と亡びた。そして伊豆から起つた賴朝は今天下を掌中に收めて、西行の眼前で八幡宮へ參詣し武運長久を祈つてゐるのである。梶原景季は西行を怪しのものと睨んで彼の名前を尋ねた。西行は『昔は北面の武士佐藤兵衞義淸、今は浮世を捨てた一法師西行である』と答へた。賴朝はこのことを景季から聞いて、和歌の清談がしたいから館へ

來るやうにと西行へ告げさせた。西行は約束通り頼朝に伺候した。彼は語つた、『長承の末出家の望を遂げた時私は秀郷朝臣九代相傳の兵法を燒いて捨てた。それ以來弓馬の道は私の心にない。然し私の和歌は花月に對する感興の言葉であるのみで、私は人に語るやうなその奧旨を知らない。若し止むを得ざれば、私は和歌より寧ろ弓馬の道を物語つて折角君の御希望に添ひたい。』頼朝はそれでは有りし昔の武勇の秘術を聞かうとあつて、俊兼なるものに西行の談話を記録させた、そして彼等兩人は終夜物語に過ごした。翌日西行が頼朝の館を去る時、頼朝は引出物として銀の猫を西行に與へた。西行は銀の猫を手に持つて門前へ出た……無邪氣な子供がそこに遊んでゐるのを見た。『おいお前にこの猫をあげよう』といつて、西行は頼朝の引出物を子供の足下に投げた。この愉快な插話の後篇は傳へられてゐない。子供は銀の猫をどうしたであらうか。又頼朝はどういふ積りで旅の頭陀僧に銀の猫を與へたのか。然し私は輕い氣持になつて飄々乎として其處を立去る西行の姿が眼に見えるやうな氣がする。

彼は鎌倉を去つて『人も住まず草花色々に咲き亂れて百の錦を廣げたらん心地して武藏野は行けども秋のはてぞなき』の景に入つた。彼はここで花の札に法華經をならべ入於深山思惟佛道と聲をはり上げて讀經してゐる男を見た。この男は昔都芳門院の侍であつたが、今法華經の力で後世を思ふの外餘念がないのである。そして彼は西行に、『此の野中に住んで既に多くの年を送つてゐるが、御經の力であらうか、私は虎にも狼にも襲はれない。また其上腹が空いて來ると天童が雪のやうに白い物を持つて來て呉れる。私はそれを見ただけで滿腹の感を持つ』と語つた。西行はこれぞ尊い仙人であらうと感服して、人は讀誦念佛して御佛を頼むより外はないといつて、『いかで吾濁く曇らぬ身となりて心の月の影をみがかん』と歌つてゐる。西行は今草茫々たる武藏野を後にして奧羽路に入る……白川の關で秋風に澄み渡つた月を眺めて『白川の關屋を月のもるからに人の心をとむるなりけり』と歌ひ、又關屋で『都にて月を哀と思ひしは數にもあらぬすさびなりけり』と歌ふ。實に西行は地上の月だ。地上の月が天上の兄弟とその感情が通じ合ふのは極めて自然である。特に千里と都を離れた旅の孤客西行が奧の細路を照らす秋天の月を眺めた時、如何に彼は悲しい夜半の袂を濡らしたであらう。私は甞て書いた、『自然の現象の中で月位現實との接觸を嫌ひそれと偶然の握手さへ肯じられないものはない月は悠然として實世界の野卑粗俗から逃れる。花を見給へ、佛壇を飾る清淨な蓮の花でも人情的である、世俗との友情を交換するやうに見える。然るに月となるとその地上から逃遁する有樣は如何にも巧妙だ。月は樹木の挨拶にも答へずにさつさと上つてゆく。山にも丘にも月を捕へる力がない。雲でも月にかかるとするりと逃げられて仕舞ふ。』私はこの言葉を移して以て西行に適用したい……現實世界をするりと逃れて詩歌の法悦に遊ぶ西行は確に地上の月だ。月の姿は出離解脱そのものだ。月は永遠に生死の束縛を離れて每夜安養淨土の新生活を開拓しゆく。私は月に人間の言葉を吐かして西行のやうな歌をうたはせたい。

然し西行は稀れなる名僧知識の跡を考へて自分の世の捨工合が完全でないことを歎ずることがある、人間界の憶出に捕はれて生死に迷亂

することを思つて潸然と泣くことがある。彼は今葛の松原といふ所へ來て、松の木の下に竹の笈と麻の衣とがあるのを見出した。これには何か仔細が有らうと思つて周圍を見廻すと、松の木を削つてその上にかうかいてあつた『昔は應理圓實の覺徒として公家の梵筵に列り今は諸國流浪の乞食として終を葛の松にとる。「世の中の人にはくずの松原と呼ばるゝこそ嬉しけれ」于時保元二年二月十七日權少僧都覺英、生年四十一申の刻に終りぬ。』西行はこの人こそ後二條殿の御子富家の入道殿の御弟で、十年もその行方不明になつてゐたが『くづの松原と呼ばるる名こそ嬉しけれ』と最後せられたことは如何にも求道者の手本であると感激し、自分もそれに見習ひたいと自らを責めた。彼はそれから阿武隈川を渡つて壺の碑へ至ると、『去京一千五百里、去蝦夷國界一百二十里、去常陸國界四百十二里、去下野國界二百七十四里、去下野國界三千里』とある‥‥彼ははるばる遼方へ旅をしたものだと今更ながらに感じた。彼は沼館その他の諸村落を過ぎ、ある田畑の間を通つた時由緒ありげな墓が見えたから其邊の男に聞くと、それは實方中將の御墓だと答へた。西行はそれを聞いて『朽もせぬ其の名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみる』の一首を詠んだ。

『三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば北上川、南部より流るる大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入、康衡等が舊跡は衣ケ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見へたり。偖も義臣すぐりて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡。

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の像を安置す。七寶散らせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に打て、既に頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に圍て甍を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂。』

これは秀衡榮華の跡を弔ふ芭蕉の文であるが、西行はこの奧州の都會平泉が山に誇り谷に架して壯麗を極める姿を見た。淸衡が後三年役の功に依つて餅田の豐田城からここへ移り、衣川と太田川の中間に邸宅寺院市街を建設して子の基衡孫の秀衡に讓つた‥‥がここへ足を入れたのは正に秀衡繁昌の時代である。秀衡は鈴澤と猫間の二つの池の間に伽羅御前を、猫間の池の此方に高館を又彼方に柳の御所を建てた。北上川は東稲山の麓を洗れ、その流域からこの麓へかけて諸士の住邸や町家が櫛の歯のやうに並んだ。時に堂塔の總稱四十坊舍三百を誇る中尊寺も建築完成を六十年ばかり去つたのみであつたから、西行はその輪奐の美は京都にも比較なしと思つたであらう、又それ等を廻る山川の姿を見て彼は故郷懷しの感に打たれたであらう。

金色堂は三間四面、屋根は寶形造の銅瓦葺、內外四壁床板悉く金色燦爛と光る。內へ入ると柱欄斗拱何れも珠玉を鏤め螺鈿を嵌して寶草花文が所狹きまでに施してある。殊に內陣の四本の卷柱は七寶莊嚴で、その柱身に蒔繪で十二光佛が描いてあつて、佛像と佛像の間は螺鈿で寶草花が配置してある。西行はこれで阿彌陀如來の御國で精妙莊

殿の極だと感じたであらう。私は今西行が念佛を唱へながら須彌壇へ近づくと想像する……彼は牛肉打拔で描出してある孔雀に牡丹唐草さては寶相華を配した迦陵頻伽、見るもの悉く優麗典雅の粹を集めたもので自然に頭がさがるやうに思つた。彼はかういふ雄麗な構圖や卓越した意匠にも、花や月に於けるやうに涅槃の表現がある。彼はそれ等から菩提の妙音が響いてくるやうに思つて有難涙を流した。

西行は何故にはるばる一千數百里を旅したのであるか。それは單に風雅と念佛の旅行であつたか……いな、彼は風雅と念佛との外、後白河法皇の命を蒙つて東大寺再興の大勸進職を蒙つた俊乘房重源を助ける爲め、秀衡の喜捨を得んとて陸奥に下つたのである。彼が平泉に着いたのは文治二年十月十二日で嵐の烈しい降雪の日であつた。彼は『陸奥の東稻川のさくら花よしのの外にかかるしら雪』の歌から想像すると、翌年にかけてここに滯在したに相違ない。彼はこの寂しい北國で年を送つて『常よりも心細くぞおもほゆる旅の空にて年の暮るれば』と歌ひ、春光氷を破つて梅の花が白いのを見て『一人ぬる草の枕の移り香は垣根の梅の匂なりけり』と歌つた。彼は秀衡を訪問した。然し西行は秀衡の豪奢な生活には驚かなかつたが、彼の風流には感服した。秀衡はこの遠來の珍客を歡待したに相違ない。西行はそれに對する感謝の意味もあつて、彼が平泉を辭する時秀衡の所望通りに戀の百首を殘した。

彼は櫻の花が落ない中に平泉を立ち出羽の國に入り、瀧の山で『類なき思ひいではの櫻かなうすくれなゐの花の匂は』と再び櫻を詠んでゐる。彼はそれより越後に道を取り京へ歸つたが、幾程の歲月を費やしたか其邊の消息は想像することも出來ない。

西行は今京都をどう見出したであらうか。源平二氏の動亂は靜まつたが保元平治以來の痛ましい戰爭の痕跡は見るもの聞くものに殘つて彼の心を悲しましめ、彼は阿鼻叫喚の叫びの音や酸鼻極まる修羅場の幻を全く忘れることが出來なかつた。彼は往生極樂を夢み靜寂の心境を憧憬して出家したが、果してそれを得たであらうか……彼は純然として生死に迷動する人間である、現實から遣瀨ない追憶を引きだて暗涙にむせぶ人間である。彼は大内右近を過ぎ鳥羽院の昔をしのび萬感胸に溢れて、『情ありし昔のみなほ忍ばれてながらへばまた憂き世にもあるかな』と歌ひ、昔の知人を尋ねると早や死んで居つて女房だけが泣いてゐたので、彼は『亡き跡の面影をのみ殘しおきてさこそは人の戀しかるらめ』と歌つた。又ある時鳥邊山で亡き人を送り深夜の月をたち上る荼毘一片の煙の中に見て、『鳥邊山鷲の高根のすそならん煙をわけて出づる月影』と彼は歌つた。

西行は夜冷い床に横たはつて自分の如き不幸な人間はないと思ふことがある……彼が至心信樂の修行を邪魔するものは彼の詩歌である。彼は他を悲しましめる爲め現實世界を捨てたやうに感ずることがある。さういふ時に彼は『諸行無常の世だ』といつて僅に自分を慰める。

『（撰集抄第四卷第四）長承の末の年より無常心にしみて君の忠勤よしなくて、妻子をふり捨てて出で侍りしかば、我が身は流浪の桑門となり、契を結びし女は飾おろして高野の別所とかかやに住み侍る。始はゆかりにつきて都に留まりきと承りぬ。妻子三所に別れて睦言の

ぶるわざも侍らず、扨も胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巣ふと云ひならはせにや。海人のぬれ衣おもほえて又舊里に上りきて、住馴れし所を見るに築地崩れて門の傾きたりしを見しに、何となく哀に覺えて立ち入り見れば、ありしにもあらず、荒れ果てて人の通ふ氣色もなし。軒の苔垣の蔦、風ぞ僅に拂ひ侍る。尋くことなければ、まばらにて時雨も月もたまらじな。心のままに茂れる草の原にては蟲の聲々鳴きわたり、此處を寢屋とこそ古むべけれと思ひ侍る所までもさながら蟲の住家となりて殊に面白く侍りしかば、歸りて又是にも住まばやと覺え侍りき。身は舊宅の如しと云ふ文あり。此の住家の荒れたる樣我が身の無常思ひ知られて、いとど袂を絞りて歸り侍りき。』……これぞ人間斷腸の言葉である。然し西行は泣き乍らも新生活の門を宗教に見出した、そこが則ち弱い西行が強い西行である所以である。

謠曲『大原御幸』の言葉に、『シテ「山里はもののさびしき事こそあれ、世の憂きよりは中々に、シテ、ツレ「住みよかりける柴の局、都の方の音信は、間遠に結へる色垣や、憂き節繁き竹柱、立居につけて物思へど、人目なきこそ安かりけれ、歌「折々に心なけれど訪ふ物は、賤が妻木の斧の音、〳〵、梢の嵐猿の聲、これらの音ならでは、正木のかづら靑つづら、來る人稀になりはてて、草顏淵が巷に、繁き思ひの行方とて、雨原憲が局とも、濕ふ袖の涙かな』とあるが、西行の大原生活は『人目なきこそ安かりける』の生活であつた、山里は寂しいが住みよかりけるの生活であつた。それでも春の來ること遲いとあつては『み山こそ雪の下水とけざらめ都の空は春めきぬらん』と歌つて京の空を眺めた。一向佛道を修行しながらも追懐を語り合つて泣きたいと人を慕つた、彼の歌に『山里に憂き世厭はん人もがなくやしくすぎし昔かたらん』とある。

五

私の詩に『私の若い時には死にたい死にたいと私はいつた』の書出しの一篇がある。私は厭世家であつたが私に斷の一字を缺いたが爲め、爾來三十年も生きのびて今日に至つてゐることを歌つたものだ。然し二十前後の青年詩人で、恐らく三十年前の私のやうに、厭世觀に魅せられないものはあるまい。青春の心は柔かい、庭の芭蕉のやうに破れ易い。少くも私に西行に於ける同族の親友左衛門尉憲康の頓死のやうな事件があつたならば、私も現世を出離する僧院生活に入つて居つたであらう。又私の時代は十九世紀の末葉、私の生活場所は米國であつて、八百年前の陰鬱幽怪な京都でなかつた……西行の時代に厭世者となつて出家すること位篤實な人間に自然なことはなかつた。

保延五年に鳥羽上皇の後宮美福門院の御腹に皇子禮仁親王が生まれ、上皇が門院の愛に溺れて居られた結果當歳の皇子をあげて崇德天皇の皇嗣とせられた。この事は正に崇德天皇と生母待賢門院の衰亡を物語るもので、その外戚に當る人々即ち西行の主筋の德大寺左大臣一家が如何に失望したかは容易に想像される。この時代に皇室の外戚となることは則ち宮中の權勢を掌中に納めることであつた。君寵を目的として後宮間に行はれた爭奪戰の如何に激甚であつたは想像に餘りある。廷臣宮女の生活は神佛の祭祀法要に、春花秋月の遊興に、詩歌管絃に、表面上は如何に優美典雅に見えてもその心中の陋劣さは言語同

斷のものがあつたであらう。西行は備にこの消息に觸れた。彼はこの汚い人慾の暴露を何と思つたであらうか。今彼は自分の黨派の衰運を眺めて個人的同情を注ぐに吝なるものでなかつたが、彼には明瞭な理性があつて、批評なくて自黨の行動を許すことが出來なかつたであらう。彼は野卑鬱結な時代精神を不愉快に感ぜざるを得なかつた。憲康の頓死以前に西行はこの不愉快な雰圍氣を逃れるには出家の外に道はないと思つたに相違ない。出家するといふことは彼には生命の新開拓である擴大である、强者の行爲である。自然が一時的の榮枯盛衰の現實を離れて微笑み自分の姿を齊へる時、自然に解脱の姿がある往生極樂の姿がある。人間も自然の各存在のやうにその姿を整理する時に眞實の魂が生れる、そして眞實の魂の聲が即ち眞實の詩歌である。故に詩歌の道は即ち宗敎の道である。西行は出家すると同時に彼の詩歌が生れると信じた。

佐藤左衛門尉憲康も生死の問題に對し西行と同じ意見を持つて居つた。彼等は夕方の月を帶びながら連れだつて御所から家路を急いだ。彼等は松風淸い片山里で悟道に入りたいと語り合つて分れた。然るに西行は翌朝參殿の途次憲康の家へ立寄つて彼を同行しようとすると、門の内外で人々が騷ぎ悲鳴の聲が内から聞えた。西行はただ事でないと思つてその仔細をただすと、憲康は昨夜頓死したといふことである。西行は驚いて朝露の如き人生の果敢なさに打たれたが、これは彼を決心させる斷の善知識であらうと思つて友人の死に感謝し、直に鳥羽殿に伺候して、君に發心出家のことを申し入れた。龍顏近く仙洞に忠勤するのも今が限りかと思ふと、彼は名殘がいとど惜まれて袖も淚に濡れた。然し彼はこれで長きに渉つた大問題も落著したと思つた時彼の心は一種悲痛な淸々しさを感じた。彼は家へ歸つた……よく繪に西行が愛着の俗緣切れよとばかりに袂に縋る四歳の娘を椽から蹴落してゐる所が描いてあるが、西行はこの位の決心を以て家内に出家の止むを得ない理由を說いたであらう。妻は彼を理解しなかつた、又解して笑つて分れて吳れといふことは西行の無理であつた。『俺のいふ事が分らなければ勝手にしよ』と呶鳴りつけて、どたばたと西行は家を捨てていつたに違ひない。

西行の妻は案外理性の勝つた女であつたであらうと想像される。然し彼女は女だ……夫は俗塵を離れて佛の光明に浴するなどと口で綺麗なことをいつては、詰りは自分に厭いたので家を捨てたのだと彼女は思つたであらう。又或時は彼女は西行は他の女と一緒に何處かに隱れてゐるとさへ思つたかも知れない。彼女は理性の勝つた女だ……嫌はれたものならば後を追つたつて仕方ないとも思つたであらう。如何に時代が八百年以前でも西行の行方が分らないといふ理由はないが、西行は恐らく『畿內めぐりや熊野詣』をして直ぐ『東下り』と京都を離れて仕舞つて居つたであらう。彼の最初の東下りは富士山見物が主で鳴立澤邊までで、多分武藏野までには及んで居らなかつたであらう。保元の亂間近くなつて彼が京都と高野山とを往復して居つた頃には、彼の妻は最早や出家してゐであらう。

撰集抄第六卷中に西行が妻に立會つたことが書いてある、『神無月上の弓張月の比長谷寺にまゐり侍りき。日暮れかかり侍りて、入相の鐘の聲ばかりして物寂しき有樣椎の紅葉嵐にただよふ姿、何となく哀に

侍りき。擬聲音堂に籠りて法施なんど手向け侍りて、あたりを見めぐらすに、尼心を澄まして念珠をすりて侍りき、哀さにかく、

思ひ入りてすず音の聲すみて覺えずたまる我が涙かな

と詠み侍るを聞きて、此の尼こゑをあげて此は如何にとて袖にとりつきたるを見れば、年頃偕老同穴の契り淺からざりし女のはや樣かへにけるなり。』これぞ天から降つたか地から湧いたかの場面である。西行の妻は語つた、『私は君の遁世を疑ひ他の女と御一緒にお暮しかとも想像して、君を恨んでゐました…… 今君の御姿を見て、私は疑ひ深い女であつたことを恥ぢる。私共は君に捨てられて以來寂しい生活をしました。今では娘を母方の伯母の家にあづけて、私は御覽のやうに尼さんになつて只管後世を願つて居ります。』西行はそれを聞いて喜んだ。如何なる場合を問はず又どんな動機からでも、人が出家するといふことを聞く位西行を喜ばせることはなかつた。その後西行は四歳の時分れた娘に面會して彼女を出家させてゐると西行物語に出てゐる。西行に遁世勸誘病があつた。彼は公衞中將にそれを勸め又侍從大納言成通や中院右大臣雅定等にも勸誘してゐる。『いつ歎きいつ思ふべきことなれば後の世知らで人のすぐらん』と歌つて人に出家を勸めてゐるが、迷悟の境に立つといつた人に、『世を捨てぬ心のうちに闇こめて迷はんことは君ひとりかは』と歌つて自責の言葉としてゐる。

然し西行は人に風雅を勸誘して居らない。詩歌の道は自ら求むべきものだ、人から敎へられても何の役に立たないと彼は信じた。彼の詩歌は感興が自然に齎らす結果で豫定の行動でない。彼自身も如何にして彼の歌が出來たかの理由を人に語ることが出來なかつたに相違ない。私は文治二年鎌倉に於ける頼朝と西行との會見に興味を持つものだが、私の興味は西行が貰つた銀の猫を門前の小供に與へた所にない、……私の興味は彼が詩歌を頼朝に語らなかつた點にある。詩歌は祈禱である祈禱の言語は語られてもその心持は他に傳へられる筈のものでない。西行は詩歌は神聖で問題とすべきでないと思つて居つたであらう。この點が彼を和歌の第一人者だとするに十分である。彼は口で歌は語られないといふ……これが彼が作られた歌人でない證據でなくて何であらう。

愚秘抄に『先年仙洞にて老若の勝負の御歌合當座なりしに、西行出すなたて簡めてよませよと勅定なりき、げにもと覺えて侍りしが、さればその時はさまで秀逸とおぼしき歌なかりき』とあるが、これは當然過ぎる當然である。如何に西行と雖も自然の感興のなき所から立派な歌を生むことは出來ない。彼は頭で歌を習つた技巧家でない、所謂六條二條の門に敎を乞ふて辭章を練つた歌の製造人でない。西行は自然の諸現象に佛性を認めた時偶然に詩歌を拾つた汎神論者である。若し彼が普通の汎神論者と異つてゐるならば、それは自然の現象がいづれも彼と共に泣き或は時に笑ひ、罪障消滅の道として念佛を唱へてゐると思つた點にある。彼は自然の個性を認めた……即ち月は彼と共に泣き、秋の夕は彼と共に骨を嚙むやうな寂寞を味つた。西行位個々別々の現象の劇的表現を眺めた歌人はない。彼はものの哀れを歌つた、又寂寞を歌つた、そしてそれ等を劇的に取扱つた。彼の歌の大部分は感傷的のものであるが、その感傷性が適當に表現された劇的姿勢は麗しい。さういふ場合に彼の歌は自然の方則を音律に響かして自由の三

昧境に立つであらう。

彼の時代の詩歌精神は單調不活潑であつた、萎縮沈滯して千篇一律であつた。それ等が無味平凡な環境に吸込まれた時に、西行の歌だけは毅然として獨立の境地に立つた、如何となればそれが詩歌の現實主義であつたからである。今日の詩歌の現實主義は有名無實の感なしでないが、彼のそれは實際の行爲そのものであるが故に、その價値は永劫に光を放つと云へる。今日彼の歌が生きてゐるやうに百年後も五百年後も等しく日本人に生きるであらう。私は現實主義の半面は神秘主義であると信ずる……卽ち西行の歌はこの二面を備へてゐる。彼は山川草木を現實的に眺めた、故に神秘的の表現をすることが出來たのだ。この奧旨は彼だけに屬するもので、彼とても人に傳へることが出來ない。定家が宮河歌合の判に『ひとの心幽に歌の姿高くして空よりも測りがたし』といつたのは、その點を認めたものであらう。又後鳥羽院口傳にも、西行の歌は『おぼろげの人のまねびなんとすべき歌にあらず不可說の上手なり』といつてある。

西行が二見浦滯在中の弟子蓮阿は、西行は『よき歌は誠にたやすく出來がたし祈りもすべき事なり』と云ひ、又『和歌は常に心澄む故に惡念なくて後世を思ふも其の心を澄しむるなり』と云つたと書いてゐる。彼の歌は祈禱から生れたものだ。如何なるものでも祈禱の姿は麗しい。實に自然は祈禱のうちにその姿を齊へる……青い秋の空へ祈禱を捧げる欅の木の姿は麗しい。海岸に打寄せる春の海に祈禱を捧げる松の木の姿は麗しい。祈禱なきものは何物も生長しない。ああ詩歌が祈禱から生れる時何たる麗しい姿を備へるであらう。西行は『和歌はうるはしく詠むべきなり』といつたとあるが、それは決して外形的の言葉ではあるまい。詩歌は祈禱の姿を得て始めて麗しくなることが出來る。

然し彼の歌は彼の生活の脚註みたやうなものだ。彼の歌は彼の生活と相待つて十分の光輝を放つ。ある意味からいふと彼の生活の方が彼の歌より遙に暗示的であつたとも云へる。日本の文學史は長いが、西行位詩歌卽ち宗敎一つに生きた人間はない、彼の生活は普通の人間には奇怪に見えるであらう。然し彼自身には彼の生活は最も自然なものであつたに相違ない

私は西行が如何なる風采容貌の男であつたらうかと想像する。セント・フランシスは快活な小柄の人で一寸見たよりは實際の方が高かつたと聞いて居るが、西行もさういふ印象を人に與へたと思はれる。云はば中肉中背の日本人だ、きりつとし好男子であつたであらう。彼が出家前仙洞御所の武士であつた頃紺靑濃の直垂に唐綾縅の鎧を着け重籐の弓に二十四差したる大中黑の矢を負つた姿は、どんなに立派に彼が見えたであらう。彼は確に紫宸清涼兩殿を飾るに足る美丈夫であつたに相違ない。男振はよし歌は上手これぞ鬼に金棒だ……彼は御殿の女達の間に人氣男であつたに相違ない。女房堀川中納言の局さては待賢門院も非常な好感を彼に持つて居られたらう。堀川と西行との戀愛談を紡ぐことは出來ないが、晚年に至るも彼等の交際は續いて堀川か『此の世にて語らひ置かむ郭公死出の山路のしるべともなれ』といつて來たのに、西行は『郭公なくなくこそは語らはめ死出の山路に君しかからば』と答へてゐる、彼は所謂遁世後は洗濯もろくにしない着物

を綻びたまま着て居つたであらうが、いつも小綺麗にさつぱりと見えたと想像される。

小ざつぱりした好男子は得て潔癖家であるが、少くも精神的に西行は潔癖家であつた。古今著聞集にかういふ話が出てゐる、『西行法師出家より先は徳大寺左大臣(實能)の家人にて侍りけり。多年修行の後都に歸りて、年頃の主君にておはします睦まじさに、後徳大寺左大臣(實定)の御許にたどり參りて、まづ門外より內を見れば寢殿のむねに繩を張りけり。怪しく思ひて人に尋ねければ、あれは鳶すゑじとて張られたりと答へけるを聞きて、鳶の居る何かは苦しきとて疎みて歸りぬ。』これは一少事ではあるが西行の潔癖性を證明するに足る。それから、同文章に『又に實家の大納言はいづくにぞと尋ね聞きけるに、北の方の思ふやうにもおはせざりければ、あながちに利をも留めたる御振舞うたてしとて尋ね行かず』とあるが、彼の性癖から見ると成程と思はれる。

セント・フランシスは難行苦行と實際宗教の戰爭で疲勞して僅か五十歲で死んだが、わが西行法師は七十三歲(或は七十八歲)まで生きた……セント・フランシスより二十年も長命した理由は何處にあつたか、西行は『世を捨てぬ心の中に闇こめて惑はんことは君ひとりかは』と歌ひながらも山川草木の間に悠々と一笠一杖の生活を續けたからであらう。假令芭蕉のやうに臨終の詳細は知ることが出來なくとも、私共はもう少し詳しくこの雲水流浪の歌人修行者の臨終を知りたい。東山雙林寺の傍の草庵で、

『願はくば花の本にて我死なむその更衣の望月のころ』

と歌つて、釋迦入滅の頃花と月との間に死にたいと願つた西行は、今河內の弘川寺の病褥に横たはつてゐる。最早や酸鼻な保元平治の幻も彼に接近しない、崇德上皇の痛ましい追憶も彼を苦しめない。彼はうとりうとりとしながら大自然が響かせる平靜な音律の波に浮かんで、西方の極樂へと漂つてゆくやうに感ずる。彼は不思議な靈香を鼻に嗅ぐ、彼は棚引く紫雲と紫雲との間から聞える妙音を耳に聞く、彼は光明かがやく三尊の來迎を眼に見る……時は幽契違はず建久元年二月十六日。彼は西へ向つて微かに念佛し、最後の歌として……

『佛には櫻の花を奉れ我が後の世を人とぶらはば』

西行の死は廣く時の歌人の間に悼ました、俊成は『願ひ置きし花のもとにて終りみの蓮の上もたがはざらなん』と、定家は『望月の頃はたがはぬ空なれど消えけん雲の行方悲しき』と歌つて悲んだ。西行死後七百幾十年、自然は時々刻々に榮枯盛衰の挽歌を歌ふ、私共の眼に時と空間とを超絶する詩歌の世界にこの多情多恨の一求道者の姿が永遠に彷徨するのを見る。

觀た生活の影から

青野季吉

私はこゝに自傳をかくつもりはない。かなり心の老けてゐる私でも、まだ自傳を書いて見やうなどと言ふ、『出來た心』になつてゐない。たゞ私のこの眼で見て來た人間の生活を想ひ返して見たいのだ。

私は佐渡ヶ島の商家の末子に生れた。當時私の家は、廻船問屋もして居り、千石積の和船も持つて居り、造り酒屋でもあり、藍玉輸入商でもあつて、かなり榮えてゐた。が、私の生れた頃には、年寄がばたばたと倒れて、商賣の方も小さくなつて來るばかりであつた。これには勿論、時世も作用してゐた。近代ブルジョアジーの勃興につれて、汽船會社が出來たり、染料會社の活動が始まつたりする時、そんな封建的な商人が、それに對抗して行けるわけのものではなかつた。それにモウ一つ悪いことには、私の生れた年に佐渡の金山に暴動が起つた。その指導者は當時十八歳の一坑夫だつたとのことで、動機は米價騰貴からの坑夫の生活難であつた。そして誰言ふとなく、こんなに米が高くなるのは、私の家の船が島内の米を他國へ積み出すからだ、との流言蜚語が起つた。少年の頃、私の家の酒藏の老杜氏はよく、物語りめいた口調で、その時のことを話して、他人が困つてゐる時に島内の米を他國へ積出すなどと、そんなことは絶對にしはしなかつたのだが……と語つてゐたが、それはどうだか分るものでない。とにかく暴動は私の家を破壞し、鼻先の入江に浮んでゐた私の家の持船を石油をかけて燒拂ひ、酒藏の大樽のタガを切つて引上げ、その餘勢で島内を荒し廻つて、結局、越後の新發田から軍隊が出て、鎭まつたやうな騷ぎであつた。それで私の生家は、再び立つ能はざる狀態となつてしまつた。

そんな具合で、私が周圍を見廻すことの出來る年配になつた時は、あんなにいくつもあつた商賣すはつかり止めてしまつて、私の父の死と共に東京から呼び寄せられた長兄が、ぶらりと遊んでゐて、小作米を賣つて生活を立てるだけの家となつてゐた。この長兄は家のまだ盛んな頃に、東京に遊學したので、商賣のことは何一つ知らず、一個のオブロモフとして生家に歸つて來たのであつた。

Ｓ村のオブロモフである長兄は、もとより家を營んで行くことなどは、出來るものでなく、澤山の弟や妹だちをひかへ乍ら、ぼんやり居喰ひしてゐた。そして先づ田畑、次に家財と、それからそれと

失はれて行つた。私の小學や中學へ行く頃には、現金といふものは、ほとんど長兄の手になかつたと言つてよい。教科書を買ふので、金が欲しいと言つて、朝寢坊の長兄の枕元へひざまづくと、長兄は舌打ちをしながら、眼をこすりこすり古ぼけた金庫の重い扉を開いたが、そのなかには桐の小箱にいつもバラ錢がちらばつてゐるばかりであつた。

が、そんなことはその頃私に、あまり苦にならなかつた。それよりも幼ない頃から私のあづけられてゐた乳母の家の貧乏のさまは、深い印象を殘した。私が少しでも人間の生活と言ふものについて、しみじみと考へさせられたのは、それが初めてであつた。

乳母の夫といふのは當時モウ六十の老人で、もとは私の家の持船の船頭であつたのが、それを止めてそのころは烏賊を釣りに出るのが、唯一の職業であつた。乳母は手機を織つたり、畑へ出たりしてゐた。それだけのことで家計の立つて行く筈はない。夫婦の間に子供がないので、私をなめるやうに可愛がり、私も生家に引取られて後も、ほとんど毎日乳母の家へ行つたが、時とすると乳母がはづかしさうにして、私が親類や何から貰つてためてある貯金を貸してくれと言つたりした。貯金と言つたつて、いつも一圓内外であつたが、私がそれを引出して來てやると、その夕方に乳母は米のはいつた細長い袋を、どこからか持つて來て、上り框のところにどしんと置いた。子供心に私には、その音が私の魂を打つやうに思はれた。

私の大きくなるまでこの爺とこの乳母が生きてゐてくれればいい。私は何をしたつて二人を樂にさせてやる。どうかそれまで生きてゐてくれ。そんなことをどんなにつきつめて考へたか知れない。が、その甲斐はなかつた。乳母が死病にとりつかれたのは、私の中學の三年の頃で、最初は洋醫にもかゝつてゐたが、藥代がつゞかぬので、隣村の漢法醫から藥をあはせてもらつて、それを飮んでゐた。或る時、私はその漢法醫の草のいをりと言つたやうな家へ、藥をとりにいつた。貰つた水藥を見ると、まるで石炭をインキでといたやうな、ドロ〳〵した黒い液體であつた。私はふと、こんなものを飮んだつて、惡くこそなれよくはならないと思つて、途中で石の上へ藥瓶を叩きつけてしまつた。藥を待つてゐた乳母と夫とは私の泣きながらの說明を聞いて、默つて靑い顏をしてゐたが、それからしばらく乳母は、藥を斷つてしまつた。

乳母の死ぬ時の光景を、私は恐らく一生忘れないであらうし、私のものを考へるの時の基調でなくなる時は來ないであらう。――乳母の病が重くなつてから、私は每晚乳母の傍にねた。乳母を眞中にして、左と右に夫と私がねるのである。日本海をふきめぐる荒い秋風が、まるで人間の手でゆすぶるやうに北窓をゆすぶつてゐた夜であつた。私は何かの物音で眼がさめた。一分心の豆ランプの燈で見ると、ぼうぼうした髮に鉢卷をしてゐる乳母が床の上にすはつて手を合せてゐる。そして膝の上には、一本の細紐がある。私はとつさにそれと感じて、その細紐をつかんで、『何をするんさッ！』と聲をかけた。爺も起きたが、そのまゝ無言で、三人とも橫になつた。その夜の明け方、また私は物音で眼がさめた。乳母は前と同じ恰好をしてゐる。私はこんどは聲を立てないで、紐の端をしつかりと握つてゐた。乳母は病人にし

ては強い力で、その紐をグット引いて、首のあたりへ持つていつた。…その夜はそれで明けたが、あくる晩には同じことが繰返され、二度はその紐が乳母の首を締めた。乳母が本統になくなつたのは、その翌日で丁度來合せてゐた私の妹と私の手の中で、息を引取つた。貧乏で、正直で、親切で、勤勉だつた乳母夫婦は、たゞ貧乏のためにさう言ふ苦しみをした。いまの私は、昔と變らず乳母夫婦の貧乏のために歎くことを知つてゐるだけだ。歎いたつて始まることではない。その呪はしい貧乏を克服しなければ、乳母夫婦の靈はなぐさめられない。しかも私にはそれが出來ないのだ！

倒れかけた封建的中產階級の生活、貧しい漁師の暮し、少年の頃それを見せられた私は、次にどんな生活を眺めなければならぬ運命におかれたか。

その時分の私は、海を越えて、越後の片田舍で、小學校の教師をしてゐた。生家がダメになつて、東京へ勉强に出られないのと、田舍教師の靜かな『牧歌的』な生活に、いくらかの憧憬をもつたのと、一刻も早く長兄の手から獨立したいのと、とにかく島を出て一人の人間として生きて見たいのと、それらが一緒になつて私は越後の田舍で教師をすることになつたのである。

その田舍と言ふのは蒲原の平野の端つこにあるF村と言ふので、榛の並樹にかこまれた四五十軒の小さな村であつた。遠くから眺めると、黑い並樹につゝまれた全體が、平野の大海に浮んだ船のやうに見えるほど、左樣に小さな村であつた。その內部の生活は、最初に私がその村へ行つた時に想像したよりも、ずつとみぢめなものであつた。村の家々の生活はいづれも、百姓もし、龜田縞もつくると言つた半農半工の生活で、一家はあげてその仕事に、晝となく夜となく、從つて居た。物持らしい白壁の家は、一二軒あるにはあつたが、村全體が貧乏だつたと言つて差支ない。越後から全國に供給される娼妓の產地も、この邊一帶であつて、村中によく肥つた絹物づくめの女衒が見られた。

その學校へ行つた最初に、關羽髯の校長が、生徒の父兄と親しみを持つためと言ふので、私に受持の六年生の中で缺席率の多い生徒の家を歷訪させた。私は新しい仕事に興味を覺えてゐたので、同僚の書いてくれた地圖を手頼に、細い道やあぜ道を通つて生徒の家をまはつた。さうして結局私は、どの家へ行つても缺席をいましめることをせずに、それなら仕方がないが、なるべくと言つたやうないい加減な言葉を殘して、歸つて來る結果になつた。と言ふのは、家の樣があまりにもみぢめで、六年生になつた大きな子供を一人とられるといふことは、實際、その生活に差支ることであつた。かう言ふ狀態にあつて、教育がなんだと言ふ考へは、そのそもそもから私の頭に芽を吹いた。

教員の仲間は男女合せて六人であつた。例の關羽髯の校長と言ふのは、すぐ前まではN市の少年監獄の教戒師をやつてゐたとかで、眼のぎよろりとした大作りの男であつたが、人は極くよかつた。妻君と子供と三人で、村のお寺の離れ座敷をかりて、小さな暮しを立ててゐて、道樂と言つては、茶を立てゝ人にすゝめることと、少年監獄での經驗

を面白可笑しく語つて聞かせることであつた。私は用事の外によくその家へ遊びに行つたが、田舍の老教育家の斜げちよろけたやうな、くらい生活に呼吸もつまるやうに覺えた。

私のそばにいつも坐つてゐた教員は、そのころまだ三十そこそこであつたらうが、五十の老人のやうに老けて、默りこくつてゐた。たゞ話が文學のことになると、初めて元氣づいた口調になつて、よくしやべつた。私は田舍の文學青年のことを思ふ時、いつもいつもこの男を想ひ出す。この外に東京で學生々活をしてゐる間に、道樂をして田舍へ引戻されたが、別に仕事もないので代用教員になつて、教室で手紙ばかり書いて——多分東京の女へであらう——ゐる男、ふとん一組もたないで、この村の學校へ奉職して來て、學校がひけると貧乏德利を傍において、豆をかじつては考へ込んでゐる男、かつて大阪の小學校に勤めたことがあるとか言つた近眼の、ちぢれつ毛の、中年の女教師などがあつた。

私はその人だちと一緒に仕事をし、その人たちの生活を見てゐるにつけて、何と言ふさびしい、光りのない生活であらうと思つた。子供の教育とか、村の社會教育とか言つたことが、だいぶ氣まぐれではあつたが、私の口から洩れると、その人だちは寧ろ私を冷笑さへしてゐた。かう言ふ空氣、かう言ふ生活のなかにゐてはいけないと、私が自分を自分で叱つたのは、村へ入つてから一年とたたない中であつた。

かう言ふ村、かう言ふ人だちの間のいつものこととして、生活の唯一の興味は、本能的な行爲であつた。眼にあまるやうな男女の動作が、平氣で行はれてゐた。私は學校の八疊の宿直室に、起臥してゐたがすぐ前の運動場に一本ある大きな柿の樹の下などは、夏の夕など、若い男と女の此上ない密會所で、室内で蚊遣りをして腹匍ひになつて本を讀んでゐる私の存在などは、天で問題でなかつた。

その中に例の關羽髯の老いこけた校長までが、この空氣の中でせめても生活の光りを見やうとしたのには、驚いた。ある朝、教員室へ出ると校長がしかつめらしい顔をして、切口上で言ふのだ。私の妻は生理的缺陷があるので、本日限り離別した。もし村中にこの離別についてどんな評判が立たうと、それは全然ウソであるから、諸君は信じてはいけないと。それから三ケ月ばかりして、校長が突然他校へ轉勤したので、少し面喰つてゐると、間もなく例のちぢれつ毛の近眼の女教員が、その學校へ轉勤して、夫婦になつてゐた。その秋に信濃川の川開きに、見物に行つて、橋の上から何氣なく川面を眺めてゐると、河上から澤山にお客を乘せた乘合船が流れて來た。その船べりの方に、老校長とちぢれつ毛の女教師とが、寄りそつて橋の上を眺めてゐた。私の姿を見つけると、二人は打首にでもあつたやうに、頭をがつくさせたのを、今でも覺えてゐる。

私は二年目でこの村とこの學校とをすてて、暗い氣持になつて東京へ上つて來た。村の單調な生活、その希望のない暮し、學校の仕事の無意義、それに私の「戀」が、私をしてその決意をかためさせたのであつた。

私はいまその「戀」について一寸語つておかう。私の學校に一人の若い、肥つた、色の白い女教師がゐた。決して美しいと言ふのではないが、この村を背景とし、この教師だちを周圍として、彼女をおいて

考へると、今でも、若い私が彼女に親しみを持ち、『戀』を養ふのは自然だと思ふ。私はよくオルガンの傍で彼女の手をにぎり時刻をしめし合せてN市の夜の街を歩くべく、汽車に乘つて出掛けた。もしこの『戀』が、その實を結んだら、或は私は、他の條件がそのまゝであつたとしても、F村にとどまつてゐたかも知れない。そして村の人だちと同じ運命の下に、尠くとも或時期までは、服從してゐたかも知れない。

或る晩春の夕方だ。平生から何彼と私の心配をしてゐてくれる素朴な一人の村人が、風呂歸りの私をその家へ呼び込んで、言ひにくさうにして言ふのだ。『先生さまは、Sさんと仲よくしてゐらつしやるが、それだけは先生さまの爲めになりましねえ。仲よくするのが惡イと言ふぢやないが、Sさんの御家の系統を先生さまは御存じでか？』と。私は、斷崖から衝き落されたやうに感じた。この邊で系統が惡いと言へば、天刑病の系統のことを言ふことになつてゐる。私は、ころげるやうにして、その村人の家を出た。

F村での二年の生活は、まだ霞のかゝつてゐたやうな私の眼を、殘りなくはつきりさせてくれた。故郷で味はへた人間の生活が、こゝでは廓大されて、まざ〳〵と私の眼にうつつて來た。

どこかに明るい、輝く生活があるだらう。誰しも若い時は、さう想はないでは生きて居れぬであらう。が、F村から東京への汽車の中で若い私は、完全にその希望をすててしまつた。東京へ出るのは、たゞF村がいやになつたからであつた。

それから約五年の後、私は當時銀座一丁目の角に聳えたY新聞の記者となつてゐた。

Y新聞は東京で中位の新聞で、その頃唯一の文化主義の新聞であつた。七角形の編輯室には、イギリス生れの自由主義者のM社長が居り、小説家として名高いK氏が、編輯長をして居り、私の屬した社會部の長は、詩人のT氏であつた。私は特に記者の仕事に興味をもつた譯でなく、言はばたゞ生きて行く必要から、そこへ入つたに過ぎなかつた。

こゝの空氣も、この中に叫んだり、忙がしさうに歩き廻つてゐる人人も、決してF村のそれのやうなものではなかつた。活氣があつた。明るさがあつた。希望があつた。私は、働き甲斐のある世界に來たやうに思つて、最初の一年は、文字通りに夢中に暮してしまつた。が、さうかうする中に、記事にたいするイリユージョンもいつか醒めてしまひ、周圍にうごいてゐる人々の生活の内面も見え出して來た。

仕事と言へば、朝、出社すると、氣むづかしい顏の社會部長の前へ出て、問題――それはたいてい定まり切つたもので、無理にこしらあげた題目だ――をさづけられて、それの持ち込めさうな『名士』を考へ出して、それを訪問して、速席に話を聞いて、それを綴り合せるだけのものである。それでなければ、官廳の發表をききに行くとか、何かの事件の當面の人物に會ひに行くとか言つたものであつた。どこまで行つても、使ひ歩きであり、いつまでたつても人の話ばかりである。

私は特に美術などが好きだつたので、その方の仕事をよくやつたが、それにしても當時の文展の入選者を、郊外の端々まで、眞夜中に

さがして行くとか、いやがる審査員をつかまへて、話を聞くとか、兩國美術倶樂部の賣立に行つて、天目の茶碗が何萬圓、信實の三十六歌仙が何十萬圓とか言つたことを、聞いて來るだけのものであつた。かう言ふ仕事も、初めての經驗である場合には面白い。が、どこまで行つてもそれではやり切れない。

私と前後して入つた若い人だちも、やはり私と同じ心境をたどつた。社の仕事はそつちのけにして、社がひけると銀座通りの飲み屋をまはつたり、おでんやで夜をふかしたりした。かう言ふ出鱈目な行爲も、その底をあらつて見れば、この無意義な、生命のない仕事にたいする反抗なのであつた。その反抗力のない人々は、そんなことをする代りに、それぞれ自然に自分で工夫した生活法を講じてゐた。

或る四十男は、千種萬樣のだるまを蒐集して、誇りとしてゐた。他の三十男は、その生れつきの女性にたいする魅力を自信して、電車の中で女をつることに、生活の勞苦を忘れてゐた。また他の男は、月給をさいて小金をためて、早くこの道樂職業をやめて、小さな店でも出すことに腐心してゐた。

その頃、私の心を凍らせたやうな『小さな事件』があつた。いつも校正の部屋で、色のさめた紡績絣を着て、眼鏡を鼻の先にづらせて仕事をしてゐた五十男があつた。彼が突然、死んだ。聞けば彼は、二十幾歳にこの社へ校正係として入つて來て、爾來約三十年間こゝで送つて、死んで行つたのである。まるでこの社の校正をやるために生れて來たやうな生涯であつた。その男の子供がまたこの社の給仕となつてゐた。その子供はどこかの夜學にかよつてゐたが、彼もまた父と大して變らぬ生涯を送るのではないかと思つた時、私は呼吸のつまるやうな苦しさを覺えた。

私はうかうかと自分もその中にまぎれ込んでゐる俸給生活者のしがなさを、時のたつにつれて、犇々と感ぜられた。私の若い妻は、割合に生活に強い方で、金のないの位は平氣であつたが、友達でも家へ引張つてかへつた時、彼女が當惑した顏をして、『今日はほんとに、ワン・コペックもないのよ。』などと、笑ひにまぎらせて言ふと、月二十五圓の月給取りの身が、堪へられないほど淺猿しく思はれた。

しかしさう言ふことならまだ我慢が出來たのである。そのうちにたうてい我慢のならない事情にぶつかつた。と言ふのは誰にも言つた當時日本で唯一の文化主義のY新聞が、こんど軍閥に買收されて、その機關紙になると言ふのだ。そして軍閥の廻し者らしい人物が、日一日と編輯局にふえて來たのだ。――どうせかう言ふ生活を長くつゞけるつもりでない私だち若い文化主義者は、若い日の思ひ出に、一つには長く世話になつた社のために、敗け戰には定まつてゐるが、城を枕に一戰しやうと言ふことになつて、それらのミリタミストを向ふにまはして、反抗運動を起したのだつた。

この騷動のある意味で中心となつて働いた私は、社の出來上つてゐるからくりや、資本閥の力やを、まざまざと見せつけられた。この小さな私としては『大きな經驗』は、私が人間生活、人間のつくり出してゐる社會の生活の實際に觸れた最初のものであつたと言つてよい。

私だちの騷動も一つの原因となつて、社が政策的な解散になり、日腐れ金をもらつて退社した時、夜の郊外の道を歩いてゐて、私といま

まで一緒に行動した友達は、腹の底からしぼり出すやうな聲で言つた。

『僕等は、もつと社會を知らなければダメだね。社會の出來具合は又別だから。』

私はそれに答へた。

『これだけ知りや澤山だよ。たゞ觀る眼がないだけさ。これからつまらぬことはやめて、その眼を養はうぢやないか。さうしたらもつとしつかりしたことがやれるよ。』

その友達はその『眼』を十分以上にやしなつて、今は力強い改革者として、立つてゐる。ついこの間牢獄を出て來て、ぶらりとやつて來て、新しい仕事の準備に勉強しなければならんと言ひ殘して行つた。

聞けばY新聞で、だるまを蒐集してゐた男のコレクションは、今や驚く可き成績を示してゐると言ふことだ！

Y新聞社で、俸給生活者のしがない生活を見たり、自身でやつたりして來た自分は、俸給生活者といふものの今日の社會での位置をつきつめて考へないではをれない。私などのやうな、生活の安定にたいして早くから希望を失つたものこそ、がむしやらにその生活を脱出したが、一端その生活者となつたら、容易に脱出し得るものでない。

私は散歩がすきで、よく郊外の街をあてもなく歩き廻つて考へたり、周圍の生活を觀たりする。そんな時、いちばん眼につくのは、やはりお勤め人の、小ぢんまりした家だ。こゝにもまた生活に弱いインテリゲンチヤが、小さな巣をこしらへてゐるな、としみじみと考へる。そんな時、窓に安物のレースの窓掛がかゝつてゐたり、格子戸の中に赤い鼻緒のフエルト草履などがあつたり、障子のすき間から小さな書棚が見えたりすると、とても堪らない。

『今日は、ワン・コペックもないのよ。』若かつた頃の私の妻の聲が、そこから聞えて來るやうだ。

その俸給生活者をすてて、私は、自由文筆業者といふ、とても頼りのない生活に入つてゐる。生活としてはこれほど安定のない生活はないであらう。いや生活ではないのだ。

私は、現在私がその中にある、この『不思議』な生活について、具體的に書き記す勇氣を持たない。いつかその勇氣を持つときが來るであらう。そしてその時は、この生活を打ち切つてゐる時であらう。

音の世界

宮城道雄

私が光りの世界から斷たれたのは七才の頃からで九ッ頃まではほんの少しではあるが見えて居たのであるし、琴の入門をした時は手さぐり乍らも糸を見て彈て居たやうに覺えて居る。

それゆえ生れ乍ら物象を見たことのない盲人とはいろ〳〵の點に於て大分違つて居ることゝ思ふ。

音によつて物の色彩や形の幻影が浮ぶ、京の舞妓のコポ〳〵の音を聞けば幼い頃見た赤襟友禪のきものに帶をダラリと結んだ美しい姿を思ひ浮べる。美しい花の色も山や水の色も私には思ひ浮べることが出來る。

私の前に複雜極まりない音の世界が展開するので色彩に觸れぬさびしさは償はれる。これが私の住む世界だと思ふて居るので光りの世界もなつかしいと思ふこともあつたがもうなれてしまつて何とも思はなくなつた。

視覺を失つたかわりに聽覺が殊更鋭敏になつたのであらう、音についてはいろ〳〵と深く考へることが多い。

音と色彩

音と色とは離れることの出來ぬ關係を持つものだと思ふ、音には白い音黑い音黃色い音赤い音といふやうにいろ〳〵な色がある。

白い音は單純さや聖人や佾侶を思ひ浮べ、黑い色の音は暗黑や惡人やを思ひ浮べるといふやうに一つ一つの音に性格や色彩があると思ふ。

私の作曲はメロデーに重きをおいて表現したいことを云はして居るがハーモニーはこの音の色といふことを考へて效果をあげるやうに心がけて居る、湖水を表現しやうとする時はメロデーとそのハーモニーによつてあのすきとほるやうな紺碧の色を思ひ浮べるやうな音の構成を考へて居る、秋の氣分をもるためにはさびしいメロデーと共に枯葉散る秋の色を決して忘れては居ない。

聲相

手相人相骨相で性格、吉凶、運命を判斷して居るが聲相と云へるかどうか知らぬが、この聲でもきつと判斷が出來ると思ふ。

世界中で同じ人相がないと同樣聲も皆違つて居る、強弱、淸濁、高低、乾からびた聲潤のあるの、甘つたるい聲、鼻聲、泣き聲、威張つた聲、粗野な聲、悲觀した聲、得意な聲、それは〳〵千差萬別である。

その聲の調子によつて心性質の聲、營養質の聲、骨格質の聲、それらを何分と何分まぜた聲といふやうに分類も出來る。それによつて性格や境遇運勢も判斷が出來るから一々天眼鏡で見なくてもおほよそ見當はつく。

心になやみがあつてわざと快活な聲を出してもすぐわかるものである、よくお顏色が惡いがどうかなさいましたかと云ふところを私はお聲色が惡いがどうかなさいましたかと云ひたいところである。

昔或る檢校が大名屋敷に招かれた時鬪を杖でコツ〳〵叩いて今晩この邸には不吉なことがあると豫言したが果せるかな其晩殿の寢首をさゝんと忍んだ曲者があつて召取つたといふ話もある、音も深く研究すると神秘的なものがある、觀相家諸君もこの聲相方面をも研究して迷へる人々の運命開拓に資せられんことを希望する。

動作と音

私が朝鮮にゐた頃の話であるが月謝をおいて行つた人がある、そのあとにけいこをした人が前においてある月謝をぬすんだやうな氣がした、琴の下から手を入れて袂の奥にしまうまでちやんとわかつて居る、しかし見た

わけでないから何とも云ふわけにゆかぬ、あゝこれが盲根性といふものだ、人を疑つたりなどしてすまぬことだと自分で自分を叱つておいた、ところがやつぱりおいた筈の月謝がないことがわかつた。

その人は朝鮮人の亭主をもつて非常な生活難から板間稼ぎをやつて上げられたといふことをあとで聞いた。

よく子供にあることだが行儀悪くして居るのはすぐわかる、私がちやんと坐つてといふとビツクリして坐り直す。

暑い夏のことであつた尺八を合奏に來た書生さんが私にわからぬやうにそれはそれはそうつと着者をぬいで吹きかゝろうとする裸で涼しいでせうなと私が云つたら、や、見えましたかと驚ろいてきものを着たことがある。

人にあつて話をする時も近くに寄つて居ればその人の態度もの腰も手に取るやうにわかる、又談話中ふと外のとを考へたり、視線を外らせたりすれば聲の調子にすぐ變化が來る

いつか呂昇の紙治を聴いたことがあるが女房のおさんが簞笥から着物を出しながらものいふくだりで呂昇の顔は明らかに聽衆の方へ向いて居るに違ひないのだが其聲色語り口がいかにも後ろ向きになつて簞笥をあけたてしながら物云ふ如くにきこえたのでひどく感心したことがある。

音と天候

私の住居は省線までよほど離れて居るがあの省線電車の音がきこえる時は雨だなと思ふ、又どこか鐘の音もきつときこえて來る。

三味線の絲、琴の絲でもすぐわかる、絲がしめつて來るし音も冴えなくなる、今日は天氣がよいが二三日うちには雨になるといふことも大てい豫想はつくものである。

朝の氣持、晝の氣持、夜の氣持はいろ／＼の物音や空氣の觸覺でよくわかるものである。

自然の音

自然の音は音樂につかれて居るだけにもつとも親しいものである、同じ風でも松風の音こがらしの音、なでるやうな柳の風、サラサラと音する笹の葉、一つ一つに風情のあるものである。

私は雨の音がすきだ、取りわけ春の雨であるが軒うつ雫の音など引入れられてしまふ、雨の表現は私の曲の中にも數多く取入れてゐる。

海の遠鳴る音、千仭の瀧の音、小川のながれ谷川のせゝらぎ、水車の軋しる静寂な音など何れも趣のあるものである。

私は又小鳥がすきで都の中に住んで居ると自然の森に自由に囀る鳥の音を聴かれぬことがさびしい、私は作曲に感興がわき自然の音にしたりたいと思ふときなど居ても立つても居られぬほどなつかしい思ひがする。

自然の音は全く音樂ならざるはない、月並な詩を音樂に表はさうよりこの自然の音に耳をかたむけるとき、どれたけ勝れた感興を覺えるか知れない、私共が如何に努力してもあの一つにだつて勝れたものは出來ないだらう。

恐ろしい音

恐ろしい音は何と云つても雷の音だ、これ位私に禁物はない、私には命がけだ、ほんとに殺されるだろうと思ふ、雷の鳴る日はもう早くからわかつて居るので私はもう身の安定を失つて居る、非常に氣分が悪く何も手につかない、事々にかんしやくが起るあの威壓的な强音がだん／＼と襲ふて來るときはもう絶對絶命だ、あの恐ろしい强烈な雷光は私の五體に感ずる、どうか雷の鳴らない世界にゆきたいものだ。

次に恐ろしいのは、電車交叉點の雑音である、四方八方からうなりを立て走つて來る

電車、警笛を鳴らしながら走つて來る自動車其上にくらしい貨物自動車や、オートバイ鈍重な音を立てながら來る馬車牛車、向ふ見ずの小僧の乘つて來る自轉車、右往左往する人間、なにもかにも悉くながら私を目がけて突進して來るとより思はれない、誰に手をひかれて居ても不安でたまらない、思はず身をさけるやうな態度を取る。

私の尖つた神經はこのためにズタ〳〵に裂かれる思ひがする、なるべくあんな殺人的な音の交錯するところには行きたくない、恐ろしいことだ。

いろ〳〵の音

よく盲が一人で歩くのを不思議に思ふ人があるが案外なれると平氣なものである。

廣い道、狹い道、曲り角、四辻、小さな建物、大きな建物など空氣の壓力風の吹きやうによつてわかるものである。

角から何軒目は洋食屋次が蓄音器屋、次が風呂屋、次が空地で角のてんぷら屋で右に廻るんだとよくわかるものである。

私はよく手をひかれ乍ら道を敎えて行くことがある、自動車の運轉手にもよく道を敎えてやる、一ぺん覺えておいたらめあきよりもたしかである。

家近くなると一層よくわかる、近所の子供の聲や犬の聲にも親しみがある。

會などで誰それがまだ見えないと云つて居ても私にはどこかで聲を聞いてハハア來てると先に知ることがある。

旅行してもめあき程退屈がない、川、とんねる、堀割、谷がわかり景色も想像することが出來る、富士が見えると云へば私の心眼に雪のかぶつた山の姿が寫る。

急行列車でも通過線は音とポイントとホイントでコトンと體にさわるのでわかる、汽罐車をあとに一つつけたこれから坂だなと思ふ、

汽車が進むにつれて入れかわり立かわる客のお國言葉を聽くのも面白い。

文明の音がだん〳〵ふえて來ることもたのしいものだ、ラヂオなど音の世界に住むわれ〳〵には福音である。

晴れた日の飛行機のプロペラーのうなりは心よいものである。

音についての感興はつきるものではない。

宮城道雄と私

吉田晴風

ある暑い夏の夜のこと、私はいつもの通り一管の尺八を手にして戸山に涼みに出かけるのであつた、京城についてまもなくのことであつたので三曲界に知る人もなく誰か琴の上手な師匠を探したいとの心で、一ぱいであつた。

―とある露路をはいると私は立竦んでしまつた、何といふ魅力をもつた美妙な琴の音であろう、たゞその琴の音に耳を澄ますばかりであつた。

このやうに引つけられたのは私が少年の頃、長谷検校の三絃を用ひた時より外にかつてないことであつた。

表札には中管検校と書いてある、私は紹介もなくもう玄關に立つて居た、私は熊本の長谷検校の敎えを受けた尺八を吹く者ですが、一曲合奏していたゞきたいとたのんだ。

すぐに招じられて狹い陰氣な部屋を通つて二階へ上つた。今琴を弾いて居た人はこの人だ、二十そこその盲青年である、藝術家らしい顔かたちの如何にも敏感さうなそして少しも盲といふ感じのしない一種やわらかな感じを與へるけんそんな人であつた。

長谷検校と云へばかねて敎を受けたいと夢にも忘れたことのない師匠です、いろ〳〵お

話が承りたいと大によろこんだ。

四方山の話のあと手合せ願ふことにして殘月を合奏した。

音に强力があり强弱抑揚の妙、奏法のたしかさ、押して來るやうな意氣、思はず無我の境地に入り曲中の人となつて居た。

磯邊の松に葉がくれて沖のかたへと入る月の光や夢の世をはやうさめて眞如の明らけき月の都にすむやらん今はつてだにおぼろよの月日ばかりはめぐり來ても逢ひ惑つて漸く吾に歸つた。

私はこの合奏ほど意氣の乘つたことはない、渾身の力をもつて吹奏した、吾に歸つた時は涙さへ落ちるのであつた、今まで探して居た人はこの人だ、その人にめぐり合つたのだ。

それからはお互に眞劍の研究に餘念もなかつた。

彼にはその時までに數多くの作曲があつた十六歳の時に始めて手をつけた處女作「水の變態」は雲雨、雪霜、霰など水のさまざまを現したもので古今の名曲に比肩して勝るとも劣るものではない。

初鶯、春の夜、唐砧、秋の調等の如き大曲が作られて居た。獨擅的通人の企て及ばざる天才作曲家なることを如實に語るものである。

× × ×

彼の半生は受難の旅であつた、廿七年神戸に生れた、家貧しく其上に家庭的に不幸であつた、生母は彼が生れてまもなく家を去つた繼母に母ほどの温き情のある筈もなかつた、たゞ祖母のみが悲しんでくれたのはせめて人の世の情けを知ることが出來た。

七歳にして失明し、光りを失つてしまつた、九ツの時神戸、中島檢校に入門した、琴を奏でることは盲少年の唯一のたのしみであつた。

恐ろしいほど天才のあるところから師匠も殊の外愛して教へ導いた、十二の時にはすでに免狀を貰つた、祖母の手にひかれてあちこちと師匠の代げいこに廻るほどになつた。

いつかのこと近所の人が生母のところにつれて行つたことがあるが、その夫に如何にも遠慮のやうな來たことがめいわくさうなので母の心を察じてもう決して行かなかつたと云つて居る。

その頃兩親は朝鮮に渡つて雜貨商を營んで居たが暴徒のために襲はれ家財はもとより掠奪されその上、體の自由を失ふほどの傷を受けたのでわづかばかりの仕送りも杜絶してしまつた。

十四の時父より呼ばれ渡鮮して仁川に住ひ琴の師匠を始め、一家の生計を立てねばならなかつた、十四の少年の手でどうして一家が支えられやう、その貧苦はたとえやうはなかつた。

この間にも琴の勉强を休んだことはない教へる暇には曲を作るとに專念した、習ひ覺えた曲は數多くはない、朝鮮には教へてくれる人もなく歸國して習ふ程の餘裕のある筈もない、たゞ自分で作るより途はないと考へた泰西の名曲にはわづかばかりのレコードをたよりに聞入るのであつた、彼が洋學の樂式や和聲を知るに至つたのはレコードの勉强が力をなして居るものである。

弟の讀む小學讀本の水の變態の詩に感興をひかれて作曲したのは十六の春であつた。

たまたま伊藤博文公が仁川に來港され、夕の餘興にとの少年琴曲家が招かれることになつた、それは旗亭淺岡の女將のすゐせんによるものであつた。

公爵の前で演奏するほどの樂器もなければ被服をも持たぬ、樂器はお弟子より借るとが出來た、被服は母のかたびらの被服を縫ひ

通してやつと急場の間に合せることが出來た。

この處女作「水の變態」は伊藤公の前にて始めて演奏された、音樂に一見識をもたれた公はいたく感激され、一少年がかくの如き大曲をよくも作つたものだと激賞された。

この次に朝鮮に來た時きつと東京につれて歸るとの約束をされた、このありがたき言葉は生れて始めての喜びであつた。

伊藤公が露西亞の歸りに朝鮮に立寄られる其時こそ東京にお伴するのだとどんなにたのしみにしたことか、然るに何事ぞ、ハルビンにて凶徒のために斃されたとの號外を聞いた時は失望のあまり幾日も食事もとらず泣いて泣いて泣きあかした。

× × ×

私は京城で大豆問屋を營んでゐたが、血氣にはやつたことや銀行事件、相場の暴落などのために一擧にして一敗地にまみれた。

私は到底商人には向きやうがない、儲けどころか損をする點に於ては人後に落ちない名手である、商賣そのものに興味をもたぬ、興味を持たぬ、仕事に一生を捧げるのはもつたいないことだ。

趣味即職業であつてこそ生きがいもあるのである、こゝに於て廿四年の半生を棄てて一轉して藝術に精進すべく決心したのであつた。

京城を去るにのぞみ宮城君に君を迎へるために上京するのだ、京城では君を認めてくれる人は少い、どうせやるなら東京だ。東京で一旗擧げやう、と堅く誓つて別れた私は大正四年の秋上京して直に山田源一郎氏の音樂學校に入學して洋樂の研究を始めた、六年には尺八科が設置され其擔當者となつた、

去年彼は遂に來た、東京驛頭に彼を迎へた時は眞に感慨に堪えなかつた。

世を擧げて洋樂崇拜で邦樂は音樂ではないとの偏見にとらわれて居る頃であつた。

同時に保守主義の邦樂家よりは彼の作品は單に洋樂の糟粕を嘗めるものだと冷笑に附されるのみであつた。

邦樂の敵と呼ばれ國賊とのゝしられるあらゆる批難攻擊を受け、家計に苦しみ、世に入れられず、辛苦に辛苦を重ねた。

そのうちにも理解ある智識階級の人々に一人一人後援者を得ることを力にし、勝算なき無謀の會を催しては世評に問ひ、たゞひたぶるに研究に餘念なく努めた。

彼の作曲の主義は日本音樂の刷新である作曲は彼の本能の要求にもよることではあるが在來の邦樂が一つの型に囚はれて德川時代の繼承から一歩も踏み出して居ないのを遺憾とし、時代から棄て去られるであらうことを豫感したことによるものである。

模倣は遂に模倣であつて洋樂が我國民樂とはなり得ないことは當然なことである。

日本音樂の短所は棄て洋樂の長所はこれを習ふに恥ではない、そしてます／＼日本音樂の美點を發揮することに努めたならば時代に適應すると同時に遂には世界的にもなり得るものである。

この目標に向つて、邦樂に足らざるヘーモニーの構成につとめ、音域の不足を補ふために新たに樂器を創造し、歌詞にのみ從屬したる音を獨立せしめて器樂曲を作り音のみによつて曲の内容を表現して居る、かくの如くして漸新なる生命を盛つた曲を發表して居ることは日本音樂史上特筆さるべきことであらうと思ふ。

すでに十年をすぎて漸く一部の認めるところとなつたのはうれしい極みであると同時にます／＼奮ひ立たしむるものである。

私は彼の日となり力となり劃時代の天才作曲家を日本の誇りとするまでに努力せねばならぬ、日本音樂界のためのみでなく、よき音樂を創作することは廣く人類のためである。

南米記

堀口大學

それ等の國にあつては、小學生たちは、たつた百年ほどの自分の國の歴史を覺えればよいので、あんなに素直にのびのびとした人間にそだち上るらしいのです。私は思ふのです、神代を自分の國の歴史に持たぬ國民は、、だと。闇の中にものを探るやうな、判然としたかたちとては更に見えない古代から始めて、、、、、、、にわたる國史を無理やりに頭の中につめこんで大人になつた人間と、新聞の相場面のやうに明快なそして單純なそして分りのいい建國以來百年そこそこの國史をそらんじて歴史の課程を終了した人間と、同じな理由がないのです。

それ等の國、それは私たちの夏が冬であり、私たちの晝が夜であり私たちの朝が夕であり、それ等の人、彼等は私たちの蹠に彼等の蹠を向けて地球の上を歩いてゐるのです、私たちから、この地球の上にあつては一番に遠い所に住んで。新世界に於ける新共和國、ブラジルとアルゼンチンと、そこの自然のこと、そこの人間とのことに就いて、私は私の知つてゐることを今ここに物語らうとするのです。

二十歳前から始めて、十五年ほど、外國でばつかり暮してゐたのですけれど、そして、隨分さまざまな國々を渡り歩いたのですけれど、今日からして日本の東京に落ちついて、じつと考へて見るまでもなく私に一番に住み心地のよかつたのは、何と云つてもブラジルでした。そこで暮した五年間、——さうなのです、私はそんなに永くそこに滯つたのです、何しろ遠い國なので、一度行つてしまふと、一寸歸り惡い國なものですから、——その五年の間が、それは私の二十七歳から三十二歳の時まででした私の一生のうちで一番よい時期ではなかつたとさへ、私は思つてゐる程なのです。本當にさうなのです、ブラジルは實に樂しく私を暮させました。つまりはこの國が住みよく、暮しよく出來て居るからですね。物質は豐富であり、氣候は溫暖であり、——氣候溫暖で思ひ出しますが、私もかつて小學生であつた頃「わが國は氣候溫暖にして……」云々と習つたものです。そして長いことそれを信じてゐたものです然し今ではそれが嘘であることに氣がついてゐます、どなたが何とおつしやつても、わが國の氣候は人間の生活にとつてあまりに寒きに濟ぎますね。——國土は廣く、人口は稀薄であり、云はば人間を住ませるために神によつてつくられた土地と云ふものはこんな所だらうと思はれるやうな所なのです。

日本で、ブラジルの話をすると、多くの人たちはそれは、外國の田舍のやうな所だと思つてゐるのです。所が實際は、仲々それどころではないのです。私が五年の間暮したのは、この國の首府のリオ・デ・ジヤネエロと云ふ都ですが、それはすばらしい文明的な大都市です、今後五十年たつたとて、悲しいかなわが大東京があれだけの施設を持つた近代都市になり得るか否か、どうやら疑はしい程です。日本人の多くが外國の田舍だと思つてゐるブラジルの首府に、日本國中にありとあらゆる自動車を一列に並べて一度に全速力で走らせても埃の立つやうな道路は一本だつてありはしないと申上げたらそれは嘘だとおつしやるでせうか？ 尤も、だだつ廣いことで競爭しやうと云はれるとリオは東京の敵ではありません。然しそれにしても一つが寶石函であるならば、他の一つはあら木板の蜜柑箱ではあるでせう。

私は今でも、時々にさう思ふのです。そしてそのことを人にも語るのです、今後五十年か百年かたつたならば、やがて世界の中心が南米の太西洋岸に移るのではないか知らと。そして今まで、私のこの空想を聞いて誰れ一人その可能性を信じた人はなかつたのです、然るに最近になつて、人づてに私のこの空論をまた聞して、それを在り得ることだと思つて、私に是非そのことを書けと云ふ人が現はれたのです。その人と云ふのは山本改造社長です。そして彼の爲めに私はこの不思議な文章を綴るのです。

私は今考へて見るのです。どうして私があんなに心持のよい月日をブラジル在住中に持つたのであらうかと。するとどうやらそれは次のやうな答に到達するらしいのです。

最初に先づ、先づ最初に、それが明るい國であるからです。それは、實に明るい國なのです。例の外光派の畫のやうに、色眼鏡と日傘とはこの國の爲めに發明された品物で、どうやらそれはあるらしいのです元來私は、暗い憂鬱な性質の男なのでけれど、然もまた私は明るい空氣の中に生活することを愛するのです。すでに内側の暗い私はせめて外側だけでも明るいことを欲するものらしいのです。黄と緑と空色、その國旗のやうにブラジルは明るい國です。然るに光りと色と匂ひとは理學の三位一體です。明るい光りの國、激しい色の國、強い匂ひの國。それは感覺の天國でなくてまた何でせう。御承知ですか知ら、ブラジル人の珈琲はインキのやうに黒く、ブラジル人の煙草は針のやうに舌を刺すと。

明るい國に住む人たちは、自然その外側は明るいのです。内側は各自に自分自身にも見えぬ神秘な天地です。何で私が知るものですか。日に二十杯も三十杯もあの黒い珈琲の汁をのむのですから、多分内側は私のやうに、まつ黒になつてゐるだらうと思ふのですけれど、あべこべに、外側は明るい空氣にさらされて、何時か知ら彼等を明るい人間に造り上げてゐるらしいのです。内側の暗さ、そと側の明るさ、この矛盾から、骨にも皮にも肉にも血にも嘘が出て來ます、そしてこの嘘が人間の味だと私が云つたとしたら、世間の正直な人たちは腹を立てるでせうか？ 私にはそんなに思はれるのですけれど。

ここで私は、ブラジルの熱帶原始林について、語り度いのですけれ

ど、それはこの文章の前にも後にも、何等の關係もないものだと云つて讀者は反對するでせうか？　私はさうは思はぬのですけれど、そして是非ここでブラジルの熱帶林のことを云はうとするのですけれど。

それは片隅に立つてのぞくより他に見ようのない自然の大寺院であると私は思ふのです。中央へは到底歩み入ることの出來ぬものなのです、と云ふのはそれをすることは、われ等人間にとつて、物質的に不可能だからです。何はともあれそれは影と光りと、色と匂ひと、葉と花と、枝と果實と、幹と根と、籐と羊齒と。そしてそれ等をとりまく濕氣と霧氣とで出來てゐる見上げる許りの高さと果しれぬひろがりとを持つた大寺院なのです。時に怪しげな鳥の影が動いて歌に梵鐘のひびきがして。そこではあまりに植物が森々とむしろ淫がましい程に生ひ茂つてゐる爲めでせう、のぞき見る私たちが最初に受ける感じは一種恐怖の思ひです、夢に猛獸に直面した時のやうな、逃げ出したくなるおそれです。其所にあつては、影も光りも、それは極地に近い北國のさだかならぬ尨大な影をつくるそれとはまた別な氣味のわるさで影はあくまで黑く、光りはあくまで明るく、然も垂直に槍のやうにものの中までしみこんで、おそろしい加速度で、其所へ降りかかるのです。其處にあつては色も匂ひも、すべては毒々しく飽和して、眼にしみ鼻をおそふのです。アンリイ・ルウフオの繪にある怪しげな花の色をごぞんじでせうか？　あれなのです。腐敗しやうとする一分前のよく熟れた果實の匂ひの甘美さをごぞんじでせうか？　あれなのです其所にあつては花も葉も、世の常ならぬ形を持ち大きさを持つて居り只もう怪異だとよりほかには私は名狀のしかたも知らぬのです。そして怪しきまでに生き生きして、これが果して植物性の生命であるか、それとももはや動物性の生命の中に分類さる可き種類の生命であるか疑はしくなる程な生命感、否否、生殖感に滿ちあふれて、これ等の花、これ等の葉の間に行はれるであらう戀愛行爲の激しさなまめかしさに思ひ到る時、私はわれにもあらずこの空想のものすごさに顏の青ざめるのを感じる程なのです。其所にあつてはまた、枝も果實も、すべてはおびただしい黴菌の世界のやうに、數限もなく入りみだれて、見る間にのきのきと生長し、またたくひまに成年に達して、生の快樂にふけつてゐるらしいのです。其所にあつてはまた幹も根も、生きもののやうに自由自在にのたうちまはつて、一塊のみみずのやうに入りみだれ歌麿の枕繪のやうにからみ合ひもつれ合ひ、雲雨のうめきも聞えて來さうな息ぐるしい風情にのきのきとぬきんでて。其所にあつてはまた、籐も羊齒も、世の常ならぬ有様にのびふとり、籐は帆綱のやうに上下に流れ、羊齒は青い帆のやうにふくらみ上り、日にかがやき、影ににじみ。其所にはまた溫室の中のやうな濕氣と溫氣とが漲つてすべてのものをうるほし、あたため、芽ぐませ、ふとらせ、浴するオダリスクに轉身させるのです。おわかりになつたでせうか？　私のこの記述で、ブラジルの熱帶原始林の空氣が、ありやうが？　そこにきらびやかな色鳥が住みそこに巨大なつややかな色紙細工の蜥蜴が住み、そこに扇のやうに翼を持つた蝶がものうげに舞ひ、そこに女陰の姿に樺いろのオルキデが咲き、そこに桃色珊瑚の毒蛇が午睡し、そこに鸚鵡が群がり、そこに鸚哥がささやき、そこに山鳩ほどの大きさを持つた蜘蛛が網をはり、そこに蜂雀が花から花へ虹の彩色ある稲妻をかけ

わたし、そこに尾長猿、手長猿、綿猿、夜猿、梟猿、蜘蛛猿、鐵帽猿ポケット猿等々々の猿どもが、とんだり、はねたり、泣いたり笑つたりしてゐるのです。

私は思ふのです、ブラジル全國に住んでゐる猿猴の總數は、そこに住んでゐる人間の總數よりも確に多いに相違ないと。歐洲人はよく云ふのですけれど、ブラジルは黒奴の樂園であると、そしてまた毒蛇の樂園であると、そして彼等歐洲人は云はぬのですけれど、私は云はうと欲するのですけれど、ブラジル人は怒るでせうか、私が彼等の國を猿猴の樂園であると云つたとしたら。

その爲めかどうかは知らぬのですが、桑港の日本人が「ジャップ助平!」と云はれると火のやうになつて怒り出すやうに、ブラジル人も外國人から「マカコス・ブラジレロス!」と毒づかれると猿のやうに赤い顔をして怒り出すのです。

ブラジル。すべてが新しい國。古いものとては山河のみの國。いやその山河も決して古くはない新しいのです。蓋は世に知られてからまだ僅に四百年しかたつてゐないのですもの。こんなに新しい山や河が日本の何所にあるでせう。

お酒の高價い國は人間にとつては住みにくい國です。一升一圓もする白米のエキスを飲んで居たのでは酔も高價な道樂につきますね。ブラジルには安くつていいお酒があります、甘蔗から取つたピンガです餘程の大酒飲みでない限りは十錢も飲んだら足腰が立たぬと云ふことです。

ブラジルでは、お金が儲かりますかと云ふおたづねですか? さうですね。儲かるかも知れません。儲からぬかも知れません。私にはお金は儲かりませんでした。一文も。私はあべこべにお金を使つてゐたのです。そしてそれだから、ブラジルが私にはあんなに住み心地がよかつたのかも知れません。由來、お金の儲かる氣候は人間にはあんまり住み心持のよいものではないのです。ごぞんじでせうか?

リオからパラへ船で行く途中、船が何とか云ふ小さな港に立ちよつたのです。其所は今私が手許にある地圖を取り出して調べて見ても分らぬ程な名もない小さな港なのです。棕櫚なぞのあらう筈もなく、船會社の代理人が獨木舟で沖に泊つてゐる本船へやつて來ると云つたならほぼ想像されるやうな、ココアを積み出す小港なのです。町と同じ名を持つた河の河口が港になつてゐて、船の泊つたあたりは河ともつかず海ともつかず、流れぬ水がおどみとどまつて、陸はと見れば入江を遠く抱くやうにして、水平面とすれずれに沼ともつかず陸ともつかぬ青草原の所々に扇椰子が立ちならんで、遠くまで山の姿を見ぬ平野なのです。其所の渚邊に、朝夕に、河のかみから五百六百と群をなして、餌をあさりに來る紅鸛の美しかつたことを。私は死ぬ前には忘れずに思ひ出し度いものだと普段から心がけてゐるのです。何故かと云つて、理由は至極簡單です。あの朝には旭を浴びた、そして夕には落陽にてり榮えたうす紅いろの生きて動く雲のことを思ひ出したら、き

つと私は快よく死に就くことが出來るだらうと思はれる程それは美しい光景だつたからです。ともすれば私はそのうす紅いろの雲に乗つてそのまま極樂へ行けるかも知れません。

サン・パウロ州の奥へ入りこんで、日本人の農業ぶりを見に行つた時の、これはお話です。日本から家族をひきつれて渡伯してからもうやがて七年になると云ふ一人の四十男。今ではおかげさまで自分で土地を持つて、數名の雇人を使つて米や珈琲を作つて裕福に暮してゐると云ふ。日本とブラジルとどちらがよいかとたづねると「それは較べものにはなりません、ブラジルの方がよろしうございます」と云ふ。何故そんなに較べものにはならぬほどブラジルの方がよいのかとたづねると、彼が答へる「何しろブラジルには法律と云ふ七めんどうなものがありませんからね！」とうそぶいて、箸箱のやうな四角な指の生へた手でマッチをすつて臭い葉巻をきゆう〳〵云つて吸ひつける。彼はどうやらブラジルには本當に法律がないと心得てゐるらしい。多分日本にゐた時分にはややつこしい法律と云ふもののおかげで非度い目に會つて來た男に相違ない。こんな心がけでないとブラジル移民も仲〳〵に成功はむづかしいらしいのです。この男なぞやがて近いうちに豪農になるにちがひありません。その時からもう五六年もすぎてゐる今日では、ともすれば彼はすでに立派な豪農になりすましてゐるかも知れぬのです。彼は今でもまだブラジルには法律がないと思つてゐるでせうか？　どうか永久に彼がさう信じてゐるであらうことを私はかげながら彼の爲めに祈るものです。

アルヂエンチンのことについては、私はあまり多くを知らぬのです、ある年の夏のさなか——十二月から一月にかけて——を一と月ほど觀光客としてボエノス・アイレスに滞つたにすぎぬのですから。それで私の知つてゐるあの國の都會は、と云つたら、首府のボエノス・アエレスと學府のラ・プラタと南方太平洋に面した避暑地の海水浴場マアル・デル・プラタとの三つにさへすぎぬのですけれど、然しまたこの三つの都會はそれぞれにアルヂエンチン共和國を完全に代表する三つの都會であることも事實なのですけれど。

船がラ・プラタ河の泥水を十時間あまりも遡航して、——あんなのをも泥水とわれ等は呼ぶ可きでせうか？　若しも水の中に多少の泥が交つたものを泥水と呼ぶのであるとすれば、この名詞はあのラ・プラタ河の水を呼ぶには極めて不適當な言葉なのです、と云ふのは、それは決して水の中へ泥の交つたものではないからです。あれはむしろ水泥と主客を顚倒した言葉で呼ばる可き物質だと私は思ふのです、何故なれば、それは正に泥の中に多少の水の交つたものに相違ないのですから。何しろあの河の水の上澄を掌中に掬つて見ればそれはすぐに分る事實ですが、そして掌中に掬つただけの分量の水で否、泥ですでに手の筋が見えなくなる程、それは不澄明な水なのです。——ブエノス・アエレスの大袈裟な近代風な商港の棧橋へ近づくと、最初に旅人の心を打つ感じは、おや、おや、南米のはてにこんな大都會があつた筈であつたか知ら！　と云ふ驚異の感情です。初めてブエノス・アイレスの

市を見る人のおそらく誰もが抱くこれはその感情だらうと私は思ふのです、よし彼がすでに如何に多くをこの市について教へられて居る場合にも。

この地球の上で、この市に比較さる可き市を、ニユウ・ヨオク以外には私は知らぬのです。ことにその生き生きした活動的な空氣と物質上の贅澤極まる消耗に對する市民の熱情的な傾倒との點に於いて、よくこの市のことを南米の巴里だと呼ぶ人があります。市の美術的な施設の行きとどいてゐる方面から見たら或はこの市は巴里に比較さる可きでせう。然し其所で私たちが呼吸する空氣は正にニユウ・ヨオクのそれだと私は思ふのです。

物價の高いことも、對岸のモンテヴイデオと共に世界第一です。この點ではるかにニユウ・ヨオクをしのいでゐます。そのくせ、世界中のありとあらゆる最上等の品物は何でもこの市に集つてゐるのです。この市の市民ほど贅澤な暮しをしてゐる人間は他には多分あるまいと私は思つてゐます。上は上相當に、下は下相當に、食物の美味なことも驚異の一つです。そして贅なことも、ブエノス・アイレスのプラザホテルのグリルで私たちが食べるものより美味なものと云つたらさう澤山にはまだ地球の上に存在しなかつただらうと思はれます。それも無理ではないのです。何しろ牛肉では世界一の國柄ですからね。アルチエンチンのチルト・ミイトが歐洲へ輸出されるやうになつて以來、當今ロンドンの一流どころのホテルやレストオランで用ゐる牛肉は悉くアルチエンチンのチルト・ミイトだと云ふことです。チルト・ミイトは冷肉とでも申すでせうか、在來のフロズン・ミイト、凍肉のやうに凍らせずに輸送する方法が近年行はれてゐるのです。何れは日本へも來るでせう。あの廣大な國中がまるで牧場のやうな國ですから、いい牛肉のあることも不思議はないでせう。それに小麥の産額は大したものだと云ふことです。詳しいことは知りませんが、どうやらそれも嘘ではないらしいのです。と云ふのはあの國で私たちが食べる麵麭と云ふのがまるでお菓子のやうに美味なのです。私はあの國へ行つて見て、世の中には途方もない麵麭を食べて生きてゐる人間があるもの哉と舌つづみを打つて三嘆した程です。

マアル・デル・プラタと云ふのは、國中で一番に贅澤な海水浴場なのです。「銀の海」と云ふ名の付いてゐるだけあつて、冷たい程に澄み渡つた水と白い砂との海邊です。日常ラ・プラタ河がはき出す泥に染まつて黄色い水ばつかりを見て暮すブエノス・アエレスの世人たちがよろこびさうな所です。何しろ遠い所にあるのです、急行列車で十二時間位はかかつたやうに記憶してゐます。一寸鎌倉へ出かけるのとはささかわけがちがひます。

其所へ行つて見て驚きましたね。丁度、私が行つた時は、夏のシイズンの眞盛りで、一番に人の出さかる時でした然しそれにしても、私がその時に行李を解いたホテルの宿泊料が一日、室代だけで一金百六十圓也と云ふのです。何も別に善美を極めた大きなアツパルトマンを所つたわけでも何でもなく、三階の正面にある、ありふれた、寢室と客室と浴室との三つ揃のスヰットにさへすぎぬのです。初め私は何かの間違だらうと思つた程でした。無理もないことだと私は今でも思つ

て居るのです。おそらくこれが私の一生のうちか支拂つた最高價の室代になるのだらうと思つてゐるのです。

行きには夜汽車でしたが、歸りは晝の急行にしました。國の樣子が見度いからです。そして私は、そのかへりの汽車の中で一生忘れられぬ感じを見たのです。

それは私が、そのかへりの汽車の中で終日パンパスを眺めて暮したことです。パンパスと云ふのはあの國獨有の廣い果しのない牧草原のことです。云はば平な草の海ですね。見る限り、際限もなく打ちつづいて。其所に牛や馬や羊が放牧されてゐるのです。所々には人の住む部落があつて、ポプラの木立が聳えてゐるのでそれと知れるのですけれども、それが地平線の彼方をめぐつて消え失せると、またも平な草の海なのです。

アルヂエンチン・タンゴの曲を御存じでせうね。あの、死と戀とを思はせるやうな幽鬱なメロデイ、あれがパンパスで生れた音樂なのです。一度パンパスを見た人でないと、タンゴの曲の中からにじみ出して來るあのよりどころのない頼りなさの身にしむ節のまことの味は解りません。

そんなにパンパスは、さびしい感じを與へるのです。それは道に迷つて日の暮れる時のさびしさです。それは、愛するものに生きて別れる時のさびしさです。それは廣い世界にたつた一人の自分を感じる人のさびしさです。パンパス、それは草の海です、そしてまたメランコリヤの沙漠です。見渡す限り草また草、灰色の鷲がその上をとんで、死んだ牛馬の白骨がくつがへつた車のやうに肋骨の空を天にさらして、無窮への道しるべのやうに、其所此所にほのかに白く……。

近詠六首

柳原燁子

待ちあはす人まだ見えぬ停車場の群衆の中のさみしきひとゝき

玩具屋の前にしばらく立ちどまる母なるわれをガラス戸に見し

子らはまだ起きてまつやと生垣の間よりのぞく我家のあかり

買いて來しおもちやをならべ親たちはねむれる子らのそばにあそべる

やゝさみし思ひのまゝになりていましみ〴〵泣かむいとまさへなき

よごれたる衿を氣にして人にあふいまのおもひはこの外になき



現代の女性に與ふ

吉田絃二郎

けふはこの春になりて初めての雪である。

ちやうど昨夜からわたくしは久し振りでロバート・バアンズの詩を讀んでゐた、たま〳〵吹雪の夜をうたつたかれの詩「冬の夜」を讀む。エマアスンにいはすればかれの詩こそ「人類の財寶であり、慰めであつた。」「げにバアンズの思ひ出こそ…あらゆる大人らも、子供らも、乙女らもバアンズの歌の一くさりを憶えてゐる、しかも心からバアンズの詩をうたふ。殊に不思議なのは書物によつてかれの詩を學んだのでなく、たゞ口から口へと傳へられて學んだことである。風はバアンズの詩をうそぶき、鳥はかれの詩をさゝやく。玉蜀黍、大麥・太藺もまた枯れ枯れな聲でバアンズの詩を戰がす。」（ロバアト・バアンズ論）

エマアスンがいつたやうにかれの詩はスコツトランドの到るところで牧童も、村の娘も、大酒飲みの渡し守もうたつてゐる。スコツトランド人にとりては、かれはイングランド人にとりてのシエークスピヤに比較さるべき國民愛敬の的である。カアライルがいつたやうにその寛大な萬人の心を持てる詩人といふ點に於いて殊にかれはシエークスピヤに比べられてゐる。とりわけその婦人に對する同情者として十八世紀以後の詩人中最も忘れることのできない詩人でなければならぬ。

雪の夜である。

疲れたる勞働者は嵐に搖られた塔のなかに靜に眠つてゐる。かつて春の日によろこびの歌をうたつてくれた小鳥らは冷たい吹雪のなかにおびえてゐる。その雪の眞夜中である。男に捨てられた若い女は嬰兒をかゝへて雪の道を步いてゐた。

バアンズは女を捨てゝかへりみない冷酷な男に對して次のごとく訴へる。

「恐らく、この時、いたましくも捨てられた女のみじめな巣のなかにかの女は何のよろこびもなきかの女の胸にお前の赤ん坊を抱きしめてゐるであらう。

そして家を搖かす嵐をきくたんびにかの女は母親らしい心づかひから顫く。」（冬の夜）

男に捨てられた女に對する同情は十八世紀以來幾多の詩人や小說家たちの作品の上にあらはれて來た。殊に英吉利文學に於いてその傾向は著しかつた。デイツケンス以來トマス・ハアディに至る英吉利文

點に於いてわたくしたちは幾多の例を擧げることができる。

ほとんどすべての近代文學の基調は、弱き庶民階級に對する同情と、弱き婦人に對する思ひやりにあつたといつても差支はあるまい。無論ストリンドベルクのやうなウーマン・ヘーターもあるにはあつたが、それは極めて例外のことであつて、ほとんどすべての人たちはむしろ女性讃美者であつた。長い時代を通じて虐たげられてゐた女性の解放、女性の擁護のために「クロイツエル・ソナタ」の作者も「罪と罰」の作者も筆を執つた。

抑も、何ゆゑに近代の文學者たちは女性のためにかくまでも筆を揃へ立つたのであらうか。そこには無論憐愍といふやうなキリスト教的な人間愛の思想が文學者の胸に目ざめて來たことも一つの原因であつたであらう。しかしその根底的な原因は一個の人間の價値についての自覺でなければならぬ。人間の權威、個我の絶對値についての意識の發生でなければならぬ。けれどもそれは單に女性の場合のみに限られたことではない。男性の場合に於いても、さうであつた。たとへば一人の奴隷が解放せられなければならぬといふストウ夫人の「アンクル・トムス・ケービン」の場合に於いても、その思想の根底としては個我の絶對値についての自覺がある。

女性が文學の上に特別の地位を保ち、文學者に對して特殊の魅惑を持つ所以がさらに他になくてはならぬ。その特殊の魅惑とは何であるか。

或る印度の詩人は、「男は散文であり、女は詩である」といつた。女は女自身すでに詩である。その美しさに於いて、その瞑想的な情操に於いて、その幻想的な思惟に於いて。

神がアダムの脇腹から一枚の肋骨を削つてイヴを作つたといふ童話的な傳説はいろいろな興味をわかさせる。イヴはアダムの分身である。けれどもアダム全體ではない。イヴはアダムの一枚の肋骨だけを分身したのであつた。その一枚の肋骨は何であつたか。

恐らくそれは美であつたであらう。神秘であつたであらう。不可思議なる魅惑であつたであらう。それは弱きがゆゑに強きものであつたであらう。柔和なるものであつたであらう。忍苦的なものであつたであらう。清淨無垢なるものであつたであらう。

ともかく男にとつては女は不可思議なる魅惑である。若い男にとつては女は時として天使のごとく尊くも、美しくもある。若い男たちは一人の女を獲るために、かれ自身の魂を惡魔に賣つても後悔はしない。恐らく女性はかの女自身のうちに、男をしてその魂を賣らしむるに足るだけの尊い何ものかを潜めてゐるのであらう。

その不可思議な力は何であるか。或る人は單に性的な慾念に結びつけてしまうかも知れない。そこにはたしかに性的慾念から生れて來る或るものが存在してゐる。しかしそこにはまた性的慾念を絶した或るものがなければならぬ。或る淨化されたるものが潜んでゐなければならぬ。

戀愛或ひは結婚は性的慾念を外にしては考へられない。けれども同時にそこには性的慾念以上の或るものが加味せられなければならぬ。すべての女性はその或るものを持つてゐる筈である。

ドストエフスキイの名作「罪と罰」の女主人公ソーニャのモデルは誰

であつたか。恐らくかれのためにかれの口述を筆記したところの平凡な女助手であつたであらう。

無智な、平凡な、そしてすでに狼のやうな男たちのために汚された女、そのやうな女性がいつもドストエフスキイの作品にあらはれて來る。「虐げられたる人々」に於いても「貧しき人々」や「白痴」や「カラマゾーフ兄弟」に於いても、わたくしたちはソニヤに似た女主人公を見出だす。

ドストエフスキイに、一番つよく魅惑を感じさせる女はソニヤ型の女であつた。かれはソニヤ型の女のうちに一番多くの或るものを見出だしたのであつた。かの女は無學に近い女であつた。かの女は貧しい父のためにかの女自身の處女としてのほこりをさへも賣らなければならなかつた。

「白痴」に於いてもわたくしたちは淫賣婦型の女を女主人公として見出だす。しかもドストエフスキイの眼に眞實の人間らしい人間の情操女らしき女の愛を感じさせたものはそれらの女であつた。

「カラマゾーフ兄弟」に於いて眞にわたくしたちを動かす女性は教育ある聯隊長の娘ではなくして、淫賣婦型の女であつた。

かれの作品の中に生きてゐる主人公に苦しい、可憐な愛をさゝげてシベリヤまで伴いてゆくのはいつもソニヤ型の女たちであつた。

ドストエフスキイがソニヤ型の女に一番強い魅惑を感じたといふ事實は、わたくしをしてキリストに於けるマグダラのマリヤを聯想せしめる。マグダラのマリヤもまた娼婦であつた。恐らくマリヤも亦ソニヤのやうな無智な女であつたであらう。

何ゆゑにキリストはエルサレムの賢い女たちや、上流の婦人たちの間に味方を見出ださないで娼婦マリヤに一番親しい歸依者を持つたのであらうか。ドストエフスキイがソニヤに或るものを見出だしたやうに、キリストも亦娼婦マリヤに或るものを見出だしたのではなかつたか。

すべての女性が性的慾念以上の或るものを持つてゐなければならない。しかも自らを賢しとする女、自らを正しいとする女たちは、ソニヤやマグダラのマリヤに見出だされる或るものを失つてゐるのではないか。

わたくしは時々所謂世間的な女流教育家或ひは社會的に活動してゐる名ある女流たちと逢つた場合にやゝもすればさういつた不滿を感じさせられることがある。あの人たちはどこまでも女性でなくては持つことのできないその尊い或るものを失ひかけてゐる。或ひは失つてゐる。一口にいへば女性を通して現はれて來る最も人間的なもの、人間的なあたゝかさ、ゆたかさを失つてゐる。

このやうな悲しむべき魂の硬化はどこから生れて來るものであらうか。

その主なる原因の一つは女性の自卑的精神に在るのではあるまいか。

女性自らが女はつまらないもの、智慧の足りないものだと自分らの同性を廉價に値踏みしてゐる。だからしてたま〱自分自身が社會的に男子と伍して、相當な仕事を爲し終はするやうになれば、直ちに自分自身をいつぱしの優れた人間でゝもあるやうに考へ易いのではない

か。

女性は女性自身尚少し自分らのうちに潜んでゐる尊いものを自分自身に見出だすことを工夫しなければならぬ。そして誰よりも先づ女性自身がかの女の自身の價値について眞に意識し、自覺しなければならぬ。

今日たとへば一般の讀み物から判斷して、たいていの婦人雜誌といふものは、男子の讀み物に比較して一段も二段もレヱルを引き下げて編輯されてゐる。いつたい男子の雜誌、女子の雜誌と區別されてあるのからしてずゐぶん妙なものであるとわたくしは思ふ（無論特殊な婦人專門の科學的、職業的智識の雜誌は存在し得るが）。然るに婦人のための物といふ場合には、故意にレヱルを幾段も引き下げて作られてゐるこれは婦人にとつて決して名譽なことではない。このやうな編輯法の雜誌が、婦人の間に平氣で歡迎せられてゐる間は、わたくしたちはどうしても現代の婦人はなほ男性に比較して自らを覺ることの甚だ遲いといふことを認めないわけにはゆかない。

今日、特殊の一二の婦人雜誌を除いては、多くの婦人雜誌に掲げらるゝ作品を見ても、作者が何等かの手加減を加ゆるか或ひは最初から、婦人雜誌だからといふやうな心持ちで筆を執つてゐるといふことは否定することはできない。さすれば今日の多くの女性たちは不幸にしてかの女たちが眞に求めなければならぬ作品からはいつも遠ざけられてゐるといふ傾向になる。

今後いろ／＼な女性專門の雜誌や單行本が出版されるであらう。しかしわたくしはそれらの雜誌なり、單行本なりがすけなくとも男性が要求してゐると同程度の本質を持つたものであることを希望しないではをれない。今日の婦人雜誌に掲げられてゐる一般の記事なり、文藝作品なりは、すけなくとも男性の第一流の雜誌に掲げられてゐるものと同じレヱルの質を持つたものまで引き上げられなければならぬ。

×

一八五五年九月二十日、ボストンに於いてエマースンが「婦人」といふ題で朗讀したレクテュアのなかに、かれは面白いことをいつてゐる「一般の婦人が國家的に低い地位を持つてゐる東洋、或ひは國家の法律が婦人の教育や解放を拒んでゐる東洋に於いて――たとへば回教徒の信仰に於いて、婦人が豫言者として男子と同じく權威な地位を持つてゐるといふことは面白いことである。」

エマアスンが說いてゐるやうに束縛のうちに育てられ、狹く限られた教育のうちに育くまれた女性が、昔から回教に於いては無論のこと、希臘に於いても、印度に於いても男子同樣に、時としては男子以上に豫言者的な仕事の範圍では大切な役目を果してゐる。

これらの歷史上の事實は一般の女性がその感受性に於いて、靈覺に於いて遙かに男性にまさつた力を持つてゐることを證つてゐる。

エマアスンはさらに同じレクテュアの中に於いて婦人を論じて「文明とは何ぞや？ そは善き婦人の力である」といつてゐる。婦人は人類を文明化する力である。婦人はすでに全く仕上げられたところの詩である。完成せられた美である。このことについてかれは ロバアト・バアンズの興味ある言葉を掲げてゐる

「これはバアンズが謀つたことであるが、バアンズが初めてエディン

バラの町を訪ねた時である。かれは田舍生活をしてゐる男とエディンバラの都會生活をしてゐる男との間にほとんど何等の差異をも發見することはできなかつた。無論田舍の生活は一般の流行によつて洗練されることもなく、また學問によつて啓發されるといふこともなかつたが、それでもかれは田舍にゐてもいろ／＼の見聞やいろ／＼の智識を見出だすことができた。たゞしかし磨き上げられた何も彼も完備したといふ女性だけは田舍育ちのかれにとつては全然新しき世界のものであつた。」

バアンズが驚歎せしめた善き婦人たちはエディンバラの文明を產み出したのであつた。エディンバラの女たちはバアンズの知識以上のものを作つてゐた。

エマアスン流に考ゆれば恐らくかつてアゼンスの文明を產み出したものも組織の善き婦人たちであつたであらう。この論法をさらに進めてゆけば近代の都市生活を產み出したるものは近代の婦人だといはなければならぬ。

こゝに於いて婦人そのものゝ責任は誠に重いものとなつて來る。一つの都市を打ち建てるとする。土を運び、煉瓦を積むものは男であるが、町全體の色彩、町全體の感覺を支配するものは女である。旅人は一つの都市に入るごとに先づ街を步いてゐる女を見ることによつて愛すべき都市であるか、醜なる都市であるか、居心地のよい都市であるか否かを判斷することができる。すべての都市は若いかの女たちの智慧と感覺と、神經とから產み出されてゐるから。

その感受性の銳いといふ點に於いて、その神經の纖細であるといふ點に於いて、ほとんど理智や、數理や、合理的といふことを忘るゝほどに空想的であり得るといふ點に於いてわたくしたちはかの女を羨しく思ふ。かの女はいつもジャンダークたり得る。かの女は詩人でなくてはならぬ。かの女はたしかに詩人である。しかもかの女が詩人たることを自ら意識しないでゐることが、かの女をしていつも男性の後から步まねばならぬやうな狀態に置くのである。

かの女は詩人である。詩人たることを自覺しなければならぬ。

娼婦マグダラのマリヤがキリストに愛せられたといふ第一の原因はかの女自身のうちに詩を持つてゐたからである。わたくしはさう思ふ。

ソニヤ型の女がドストエフスキイの心を惹きつけたのはかの女のうちにゆたかに詩を持つてゐたからだ。

エルサレムの學者たちがキリストを見ることのできなかつた際に、無智無學なマグダラのマリヤがキリストを見出だしえたといふことはマリヤのなかに潛んでゐた詩人らしい銳い感受性であつたにちがひない。かの女らの叡智は地上に於いては失敗するかも知れない。けれどもかの女らの叡智は往々にして天上界の秘密を虹のなかに見出だす。エルサレムの學者たちよりも遙かにすぐれた感受性をかの女が持つてゐたといふことはすべての女性の名譽でなければならぬ。

さらに多くの弟子たちが最後にキリストを疑ひ、キリストを棄てた時、かの女のみはつひにキリストを疑はなかつたこと、或ひはキリストの墓に最初に詣でたものはかの女であつたことなどを考へると、同じ

然女性のうちに潜められてゐる尊いものについて暗示せられるやうな氣がする。

×

わたくしは女性の鋭い感受性について述べた。たしかに鋭い、デリケートな感受性は女性を特色付けるものである。殊に近代の繁雜なあわたゞしい都市生活はすべての人々の神經をいやが上に、ほとんど病的にまで昂奮さしてゐる。もと〳〵感じ易い女性である。今日ではほとんど無批判的にまで鋭い感受性を働かせてゐる傾向が見える。

一夕銀座通りを漫歩した人々は必ずやあまりに膚淺沒趣味なアメリカ式の流行が、そこを往き來してゐる若い人々の服裝の上に、態度の上に見出だされるのに、驚かされるであらう。わたくしの一友人は大學を出る間もなく北海道の雪の中に馬鈴薯を作りに出かけてしまつた。三年ばかり經つてからかれは二三週間滯在の豫定でその故郷である東京へかへつて來た。かれは一日銀座を歩いて歸つて來てわたくしに話したことがあつた

「僕もかつてはあんな生活をしてゐたのかと思ふと恥づかしくて耐りませんでした。片つぱしから擲りつけてやりたいと思ひました。」

わたくしは銀座を歩くたんびにこの友人の言葉を思ひ出す。わたくしも銀座を歩く。そしてカフヱに立ち寄つて珈琲をすゝることもある。そのたんびにわたくしの眼には吹雪の中で厩舍の手入れをしたり、白楊樹の間伐をやつたりしてゐるであらう北海道の友人の顔が映つて來る。

無論今日の都市生活のこのやうな色彩なり、氣分なりを醸させたについては男にも大きな責任がある。或ひは全然男の責任であるといひ得られるかも知れないが、都市の色彩、都市の情調を直接にわれ〳〵の眼に訴へてくれるところのものは婦人である。殊に若い婦人である。その人たちがその生活樣式の上に女性本然の落つきと、愛撫と叡智のかゞやきとを見せてくれたならばわれ〳〵の都市生活はどんなに居心地のいゝものとなるか知れない。

ウイリアム・モリスは都市建設について、都市の人すべてが責任を感じ美を中心としてわれ〳〵の都市を築かなければならぬことを論じてゐる。一條の道を切り拓くとして、どのやうな曲線を描いて道を通ずることが都市全體の美を增すことになるか、一草一木を植ゆるとしても、そこに都市全體の美を第一の考慮に置かなければならぬといふのである。

女性はたしかに詩であり、詩人である。わたくしたちは女性がいよいよ美しく、いよ〳〵快濶であらんことを冀ふ。美しき女性はわれわれの町を飾り、都市をかゞやかすものである。しかしその美しさはたゞ外形的に飾りつけられた美しさであつてはならぬ。そのやうな美はむしろ不快さをさへ感じさせる。かの女自身の魂の内から洩れて來る叡智の美しさでなければならぬ。愛撫でなければならぬ。

わたくしは文藝復興期に於けるフロレンスの賢き女性たちを想像する。微風が吹いてゐる。菩提樹の下には大理石の腰掛がある。森をくゞつて流るゝ靜な水がある。そこには孤獨の老天才ミケランゼロをめぐつて三四人の女性たちがプラトーの哲學について語つてゐる。

わたくしはまたレオナルド・ダ・ヴンチのカンヴスの前にかすかな微

笑みを見せて靜に坐つてゐるモンナ・リザを想ひ出す。
ダ・ヰンチが描き出したモンナ・リザは何であつたか、女の微笑みである。女の神秘な微笑みである。かれは不可思議なるモンナ・リザの微笑みを掴むために三年或ひは四年の勞作と觀照とを苦しまなければならなかつた。あの大天才の力をもつてしてもなほ女一人の微笑みの深さはそれほどの謎を潜めてゐた。

モンナ・リザの顔の美しさは決して外から飾りつけられた美しさではない。それは内から溢れて來る無氣味なほどの靜寂と、叡智と、愛撫と、神秘とを湛へた美である。

ダ・ヰンチはフロレンスの街を歩いてゐてたまく\心を惹きつけられる顔を發見すれば、終日その人を追ふて顔を眺めて夜になつて家にかへつて來た。そして夜が明けるまで、頭に刻みつけられたイメーヂをたどつて、カンヴスの上に顔を描き出したとつたへられてゐる。

かれがモンナ・リザの顔を見た刹那、かれは人間の魂の最も深いあらはれをかの女に感じたのであらう。かれはつひに三四年の間かの女の顔を見つめてゐたのであつた。それでもなほかれはモンナ・リザの顔にあらはれた女の魂の深さを完全に掴み出すことはできなかつたであらう。

恐らくすべての女たちはモンナ・リザほどの魂の深さを持つてゐる筈である。生れたまゝのかの女の微笑、生れたまゝのかの女の黒い瞳、生れたまゝのかの女の柔かな手、生れたまゝのかの女の滑かな素足にかの女の不可思議な美が、蠱惑的な美が潜んでゐる筈である。生れたまゝの乙女の白い纎細い一本の指のみが天上の星をゆびさす權威を持つてゐる。

女は美である。女は詩である。その美、その詩をほんたうに生かすものはかの女の叡智と謙虚と愛撫でなくてはならぬ。かの女はいつも鳩のごとく柔和に、蛇のごとく賢くあらねばならぬ

×

現代思想の一つの特色は現世的といふことである。殊に昔から婦人はたいていの場合男子よりも現世的であるやうに感じられる。現世的であるものは常に幸福ならんことを冀ふ。生存の基調がいつも幸福と享樂の上に据ゑられる。わたくしたちは人間としてわたくしたちの生存が幸福と享樂とにめぐまれることをつねに思念してはゐる。しかしながらわたくしたちは世間的な幸福や享樂のきはめて空虚なものであることを知らなければならぬ。よし、空虚でないとしても決して第一義的のものでないことを知らなければならぬ。

現身の世にあるかぎりは幸福を求むるのはきはめて自然のことではあるが、わたくしたちは不運の底からも、暗黒の中からも生きてゆくところの意味を見出だすことを知らなければならぬ。

鋭い女性の感受性を哲學化すること、それが現代の女性にとりて第一のことではないか。かの女らの鋭い感受性にさらに正しい批判力を加味すること、正しい、深い鑑賞力と思惟力とを賦へること、それが現代の女性にとつて一番大切なことでなければならぬ。

かの女らが要求してゐるところの幸福の本體が何であるか、かの女らが生きつゝある生存の本質が何であるかに關して、かの女らをして

その鋭い感受性を靜に沈潛せしめて、哲學的に思惟せしむることである。

イブセンは「鴨」のなかに於いて「人生は幸福のために存在してゐるものではない」と語つてゐる。いかにも徹底した言葉である。

眞理の探求、眞理の闡明のためにブランドは生きなければならなかつた。眞實を基礎とした生活を生きるためにヤルマアは苦しまなければならなかつた。ブランドもヤルマアも一日も幸福はめぐまれなかつた。ヤルマアがかつて幸福だと信じてゐたものはすべて虚僞の上に据ゑられたものであつた。

眞實の上に生きることは苦しい。しかし生きよとイブセンは教へる。

次の世界、死の世界には苦しみも悲しみもない。苦しみも悲しみも現世のみのものである。それならばわれ／＼は少しでも長く生きのびてもつと／＼多くの悲しみと苦しみとを生きてゐる間に嘗めようといふのがゴリキイの作中の人々の生き方であつた。ロシヤの曠野を歩む遍路たちの願ひはたゞそれのみであつた。

悲しみは人々の魂を淨化する。苦しみは人々をして、人間の魂の深さに於いて生活することを教へてくれる。

ソニヤ型の女がドストエフスキイの心を惹きつけた所以は何であつたか、かの女らの魂は悲しみによつて淨化されてゐたからではないか。

今日の學校教育がどれほどまでにかの女たちの魂を深めてくれようぞ。どれほどまでにかの女らの魂を淨化してくれようぞ。

かの女たちは先づかの女たちが持つてゐるすべての外殼的な智識を捨てなければならぬ。そしてソニヤと一緒に生きるか死ぬるかの境に立つて靜に人生を思惟しなければならぬ。そこから眞に內實的な智慧が生れて來る。

「カラマゾーフ兄弟」に於いてドミトリイを眞に愛することのできた女、そしてまたドミトリイに眞に愛されることのできた女は貴族の娘でなくしてやはりソニヤ型の女であつたことを想はなければならぬ。

マグダラのマリヤがキリストに愛せられたといふ事實は世の中の自らを正しとし、賢しとする女たちに一層の深い反省をあたへるであらう。

罪なき人々は先づ石をもつてマリヤを打つがいゝ。しかし石をもつてかの女を打つ人々よりは、石をもつて打たるゝかの女はめぐまれてゐる。

わたくしたちは生活の刹那々々に石をもつて自分自身の魂を打たなければならぬ。それこそ智慧の生活である。

一つの石がわたくしたちを打つ時わたくしたちは魂の深さに於いて一歩深く歩み寄る。さらに一つの石がわたくしたちを打つ時、わたくしたちはさらに魂の深さに於いて一歩深く生きる。

わたくしはすべての女性たちが修道院の女たちのごとくあらんことを冀ふものではない。

すべての女たちは小鳥のごとく快濶でなければならぬ。美しくなければならぬ。かゞやいてゐなければならぬ。わたくしたちの都市は美しい女たちが笑ふことによつて、小鳥のごとく語ることによつてかゞ

やかされてゐる。

詩人ブレークは「もし地上から人間が失はれたとしたら、自然は何といふ空漠たるものであらう」といつた。わたくしたちの都市からもし美しい女が失はれたとしたら、何といふ空漠たるものであらう。

女性よ美しくあれ。

しかしながらかの女は蛇のごとく賢くあらねばならぬ。

モンナ・リザの脣にたゝへられた微笑の神秘さと、かの女の瞳にかゞやいてゐる叡智とをもつてわたくしたちの生活にさらに深い落着きをあたへてくれなければならぬ。

厚い毛皮にくるまつて幸福な街を歩いてゐる女性たちよ
ベートウヱンの音樂に聽きとれてゐる都市の女性たちよ
慈善舞踏會に、浮かれ男の胸に抱かれて踊り狂つてゐる女性たちよ
北海道の雪の中に馬鈴薯を作つてゐる男のあることを思へ
工場町の正午ころを歩いてゐる青ぶくれした少年工のことを思へ
女性の鋭い感受性と、鳩のやうな愛撫と、蛇のやうな叡智とによつて爲なければならぬ仕事は幾らも殘つてゐる。

女性たちよ、「人生は幸福のために存在してゐるものではない。」
叡智をさらに深くせよ。そして靜に人間の苦しみについて考へよ。
苦しみに對して感謝せよ。
眞に賢き女、眞に人生を哲學的に考ふる女、そしてすべての人間的な苦しみを靜に愛撫する女、それこそ「人類の財寶であり、慰めである。」

――一九二七・二――

近詠

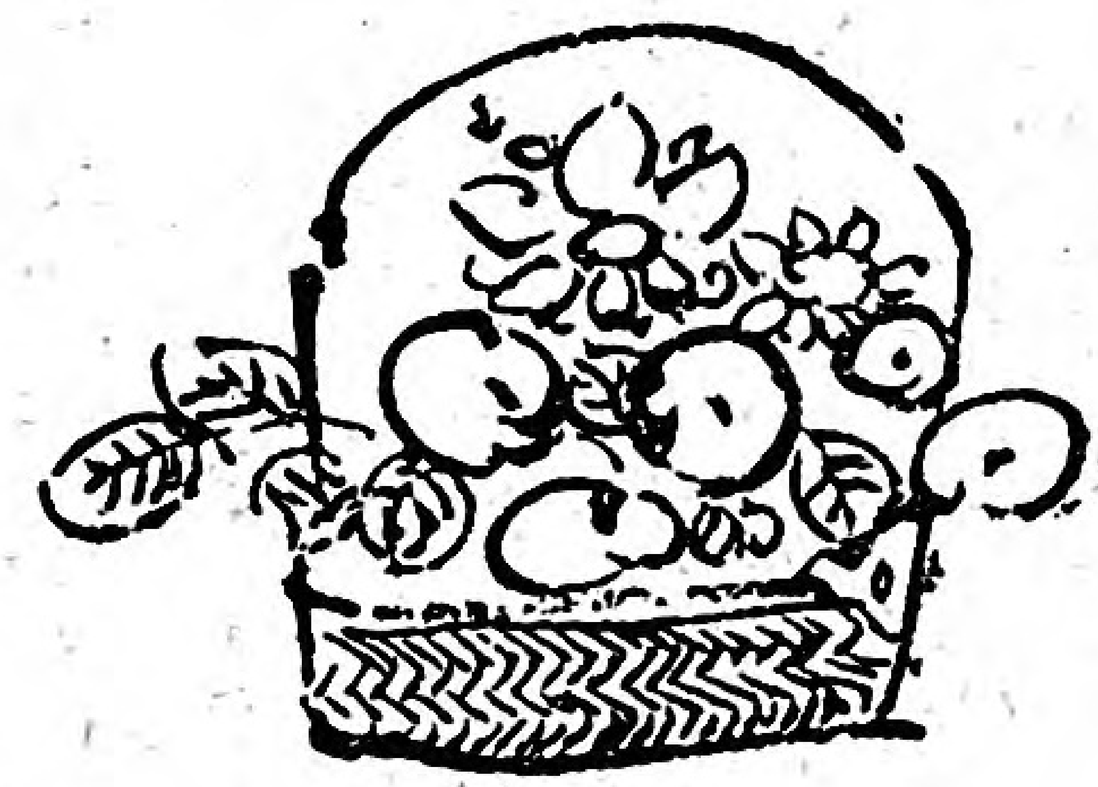
窪田空穗

權力を暴力とせぬ何人か世にはありける、畏きはすめらみかど、み力を惠となします、古よ今に。

わが齢五十に近く、もの忘れ頻りにすなり、忘るべくて忘れえざりし、よしなし事忘れうる日よ、漸くや來し。

井戸側のとたん塀に、夕雀四五羽あつまり白雪を踏みこぼしつつ、せはしく鳴きかはしゐる、米や見つけし。

（二年二月）



幼兒と環境

北原白秋

一

「僕の腸さん、男、をんな。」

「そりやあ男さ。」

「なぜ。」

「坊やが男だから。」

「さう。ぢやあ幾歳になるの。」

「六歳さ。」

「どうして。」

「坊やが六歳だから。」

「僕、胃の腑さんはをんなだらうと思ふ。」

だらうと思ふが小生意氣だ。

「なぜ。」

「だつて、をんなみたいな名なんだもの。」

「ふふん。」これは新感覺だな。

「ね、をんなだらう。」

「男さ、やつぱり。」

「なぜ。」

「坊やが男だから。」

「篁子ちやんの胃の腑さん、男。」

「ありやをんなさ。」

「どうして。」

「篁子ちやんがをんなだから。」

「さう。をかしいなあ、男だつたり女だつたり。どうしてなの。」

弱つて了つた。

私の長男は三歳の篁子の兄で、まだ滿五歳には達しないが、日本流

に云へばもう六歳になる。今が恰度「なぜ」と「どうして」の時代である何もかもが驚異の對照ならざるはなく、その何もかもを探究せねば、また何かしら會得のゆくだけの解決を與へてもらはねば承服できない智識慾から、時としては突拍子もない奇問を投げつける。いい加減な答ではなかなか滿足しさうにもないのである。幼兒の疑問は宇宙の疑問である。その道々の巨匠や大學者すら一々正しくは應答しかねるところのものを、しかもまたその答は極めて簡潔でなければならぬのである。童謠の眞骨頂はここにこそあるとは思ふが、科學上の本質的な疑問に對しては我々無學の父親たり母親たるもの少からず辟易しずには濟まされない。幼兒に對して知らざるを知らずと云ふこれ聖なりなどとは逃げてゐられないのである。で、しぜんとこちらも研究的になる。

　であるから、こちらから强ひて敎へるなぞと云ふことは考へるも空おそろしくさへ思はれるのである。ことには私學齡以下の幼童に對しての早敎育は心から愼つていいと思ふ。ただでさへ應酬に暇ないのである。かの必然的な旺盛な生長慾に對して、何を大人の私たちが小我的な理智の上から恣に彼等を强制し妨害し抑壓しよう。だからまた彼隆太郎が、自動車の運轉手に對ふに王侯のごとく、或は市井の音樂狂が樂聖ベエトオベンに對するごとく、或はまた方今の新進作家が菊池寛に對するごとくに鞠躬如として仰望侍立するごとき態を爲すこともあながち咎められないのである。彼隆太郎は比較すべからざるものをも同一平面に觀てパパよりは汽車がえらく自働車がえらいと思つてゐる。その偉大な近代の怪物を自由自在に操縱し得る運轉手こそは、と、りもなほさず天上天下の一大英雄に外ならぬのであらう。父親たるもの恐竦せざるを得ない。隆太郎が心から崇拜渇仰することに我々は何をまた嗤へよう。運轉手その者の人格態度などにつき幼兒の知らざることまでも我々は示唆し解明する必要がない。職業は神聖であるからさうしたいい方面の觀念で受け容れてゐればいい。またそれ以上に幼兒は理想化してゐるであらう。それでよいではないか。自働車を、また運轉手を理想化して幼兒が禮拜する時、すでに幼兒の靈魂は自働車となり運轉手となり縱橫無盡に宇宙を馳走しつつある。すばらしい生長があるのである。ここでまた臣は君を子は親を國民は國家を人は隣人を大切にしなければならぬなどと敎へたところで隆太郎には此の理解をも爲しえないであらう。「お代りのタイヤは大切にしようね。」と云へば直ぐにも「さうださうだ。」と答へる。お代りのタイヤを愛惜することは本然の感情であるからである。しかもその心はあらゆるものに向つて高まつてゆく。

　で、敎へるよりかは今のところ保護第一に如くはない。何よりも自由に生長させるといふことである。環境を純にし淨くすること、また豐かに朗かに健全にあらしむることである。これについては私は主として母親の愛に信賴してゐる。肉親の感情としては父以上であり、痛切である。母の愛は不聽明でないかぎり細心の保護と警戒と誘發と薫育とを吝にする筈はない。加へて父たるものが子と母との日常の應答

を聽き、生活を觀て、注意すべきは注意し、高むべきは高め、その周圍を廣く明るく堅固に、不淨を掃滌し擁護すべきことは當然の愛であり責務でなければなるまい。子はづん〳〵と伸びてゆく。

環境の影響如何について考へる時、私は常に胸を撲れる。孟母三遷といふ故事は全く理なきことではなかつた。かういふ話があるのである。

小田原の山荘生活當時、隆太郎は隣の寺の子とよく遊んでゐた。寺の子が蜜柑の空箱を擔いで、「棺桶だい〳〵。」と駈け込んで來ると、彼はそこらに散らかつた細ぎれを早速に孟宗の枝にひつかけて、「なむあみだ〳〵」であつた。

この谷中の墓地裏に越した翌日、兩手にあまるほどの百合や虞美人草やカーネエションやグラヂオラスを抱いて擁へて來たのも彼であつた

「ほら、こんなに花が咲いてゐたよ。」

これには驚かされたが、それは墓地の花立の花であつた。全く彼は花が咲いてゐたと思つて狂喜して走りまはつて集めて來たのであつた。この發見は無心この上なしであつた。だが、その後日ならずして、彼はとんでもない遊戯に耽りはじめた。ついこの前の墓地のこの家から二丁も離れてゐない小徑に「白秋若目田氏之墓」といふのがある。これを私も見つけた當時は一種異樣の寂しい感じがした。その婦人菊池氏とも並べて彫つてあつた。妻の名の菊の字までがいつしよに彫つてあるのであつた。その前を通る時には私は自分の死後の姿までもまざまざと見るやうな氣もした。然しいつかしら却て親しみが加はつて來た。その前に立ちさへすれば私の心は常よりも靜かになつた。安らかな微笑が湧いて來た。で、妻子を連れてはそのあたりをよく散歩をした。

「白秋の墓に行かうよ、パパ。」と隆太郎もよく駈け出して行つた。時とすると父の友人なぞと散歩に出かけるときつと「白秋の墓があるよ」と先きに立つて走つた。それからのことである。

「白秋の幽靈だよお。」

誰が教へたか、兩手を面の前にダラリと下げて、緣側を、「幽靈だよお。」である。すると庭の向うの珠數屋の窓から、

「うらアめしやあ、〳〵。」

と子供の聲である。晝の日中から幽靈ごつこである。私ももう十年前に「詩人白秋はすでに詩の幽靈に過ぎない。」などと誰やらから惡罵されたものだが、その當時は別に驚きもせず、今日でも惡罵した人よりも未だに詩作を續けてゐるし、自分の方がより豐富に生きてゐるとは思つてゐるが、この無心な自分の子から眞向にやられた時は全くたじたじとなつて了つた。それも朝から晩まで脅かされるに至つては少くとも苦笑しずにはゐられないのである。その上にまた、よちよちの三歳の篁子までが兩手を頭の上から、ヂウユレイー〳〵である。おお怖いと云ふとます〳〵チユウレイ〳〵。

兒童の種々ごつこは全く環境の縮寫である。「鬼ごつこ」「赤清ごつこ」も早速であるが、紅燈の巷の兒童は何をするか。「旦那ごつこ」であるさうである。三四歳の男の子がふところ手で床をうしろに、ちやぶ臺の前に坐ると同じ位の女の子がそこへ出て來て、如才なく氣輕にさうして下手に品をして兩手をつくと、うやうやしく眼で見あげて、

「旦那、おあつらへは。」

すると、小さな旦那樣は坐蒲團の上にチンと澄まして、應揚に

「きうりもみ。」

うちの子は汽車電車自働車崇拜から次第に兵隊崇拜時代に入つて來た。ただおもしろひのは大將はきらひで並みの兵隊さんを以て任じてゐる。黄と紅との軍帽で背嚢を負ひ、木銃をかつぎ、紙製の彈藥盒と短劍を腰につけ、腕には針の廻らぬ腕時計、胸には五色の鉛の金鵄勳章をぶらさげ、喇叭までも慾張つて吹き立てる騒ぎである。家にあると外にあるとを問はぬ。たまたま大人の同僚若くは軍隊に遭ふと、ピタリと歩を留め、直立不動擧手の敬禮をやる。實にその直視は謹嚴なものである。彼にとつては一つ星の兵隊さんでも老骨の大將以上に憧がれる何かである。ある日、木銃と背嚢だけではあつたが、武裝した彼と私とが銀座のタイガーで紅茶を喫んだ。その時一年志願兵らしいのが、若い斷髪のモダンガールと喃々としては入つて來て、向うの窓際の卓に對ひ合つた。陸太郎は直ちに立つて、その前へ行くと、大眞面目で擧手の禮をした。かの志願兵はそれを面前で見て、しかも微笑さへくれず答禮も省みなかつた。私の小さな兵隊は泣き出しさうになつて歸つて來た。崇拜の對照たる文壇人からは手ひどくはねつけられた文學青年のごとくである。私はこの時かの冷血の兵卒をたたきつけてもやりたかつた。憤りに堪へなかつたのである。モダンガールごとき唾すべしである。思無邪な幼兒の謹嚴なる敬禮に對して一顧もしない傲慢無禮は大人にとつて果して許されるであらうか。私は幼兒に對しても禮儀として、直ちに立ち上つて擧手をするか、微笑或は哄笑してその可憐な頭を撫でまた握手するのは當然であると思つてゐる。彼の小兵士が、曾つて阪下町の電車通りで或る小隊に遭つた時、みんなが頭を撫で、或は微笑を向けて行つた、その時歸つての彼が如何に感激し亢奮したか。

ここで云つて置く、私は頑固な軍國主義者ではない。然しながら尚武と剛健の精神は三つ兒にして而かも養ふべきだと思つてゐる。私が私の幼兒に武裝の模倣を許すのは形式以上に彼のやむにやまれぬ生命力の迸さを思ふからである。必ずしも彼は軍人にはならないだらう。また將來欲すれば彼の自由である。私は陸太郎と同年ぐらゐの時、町内の兒童軍の總帥となつて殿樣征伐をした。敗殘の小舟に分乘して、水路より藩主の邸内に投石し、城内の武士の子と闘つた。階級感情に基づく町人の子の憤激と反抗とを代表したのだ。然しながら今日では別に軍人にはなつてをらぬ。一管の筆による無位の詩人である。ただ詩の道を守る上に於てかの剛健の氣を今に於ても保持してゐるつもり

である、全く私たち九州の兒童は雪中をも素足であるき、薄着をし、我自ら烈風となり、熱火となり、鬪士となつた。柔弱な子は常に制裁された。理髮した翌日の「青坊さん」に對して祝意を表することは、一同のすばらしい打擲であつた。いかに寒中と雖も襟卷や手袋を私なぞが嫌ひなのもこの習慣にある。成人後に於ていかに人情上の弱氣者でもその底には毅然たる道の上の意力は持つてゐる者の多くが私たちの間にあることはまたこの故である。

さてまた、私のうちの小兵士に筆は移る。

生れて病身にして柔弱なのは親として堪へられないだらう。幸にして彼は健康で活潑で、自由で、怖るるところが無い。坦々たる大道を馳驅する自働車のごとく、洋上を樂々と進航する軍艦のごとくである。彼は背嚢を負ひ、木銃を擔ぎ、墓地のあかい山茶花の下で足踏みをする。チテチテトタタである。

だが、闊達で無心なかの小兵士の上にも、たちまちにして蒼茫たる月光が射し、後には瀟々たる冬の小雨がふりかかつて來た。

　スンダラホネヲタノムゾヨ。
　スンダラホネヲタノムゾヨ。

笑止なこの小兵士の哀調は何だ。

「小母さん、あの兵隊さんは何つて歌つてゐるの。」

ある日、麻布のある通りで、ある小母さんと歩いてゐたうちの子が、市中行軍の一つの中隊と出あつたのださうである。小母さんは東北の人だもので、「スンダアだあよ。」と教へた。

　スンダラホネヲタノムゾヨ

それからである。みんなが腹をかかへて幾度も訂正さうとしたのだが、なかなか一度習つたことは直らないものらしかつた。やつと、シンダラにはなつた。だが、

　ここはお國を何百里
　はなれて遠い滿洲の
　あかい夕日に照らされて、

から、

　友は野末の石のした

が大好きで、それから、チテチテタ、トテトテタテタだ。

それだけならばいい。あるさむざむとした冬の夜、妻の友人のある若い一女性と外出して、日暮里驛から坂をあがりかけたところで、いつもなら必ず燭光のあかるい町の方を通つて歸る筈のところを、どうしたものかその晩にかぎつて、墓地をぬけて行くと云つてきかなかつたのだ。仕方なしに眞つ暗闇の墓地にかかると、時も時、時雨がさあつとかかつて來た。

　シンダラ　ホネ　ヲ　タノムゾヨ。
　シンダラ　ホネ　ラ　タノムゾヨ。

と、

「僕、お墓の中にはひるよう。」

と駈け出すのだ。

「僕、お墓の中に弟が死んでることにするのだ、そして僕もはひるんだ。」

蒼くなつて、そのナアさんが留めると、

「いやだ、〳〵、はひるんだよお。」

さうして二人ともびしよ濡れになつて歸つて來た。ナアさんは幽靈のやうに眼がふるへてゐた。

私と妻とはその話をきいて、また蒼くなつた。「この子は死ぬんぢやないか。こんなに墓の下を慕ふ子は。」

この戰慄を兩親たる私たちに與へ、その子を黒い死に魅惑し誘引したものは何か。「友は野末の石のした。」である。「死んだら骨を頼むぞよ」である。兵隊とは人を殺し自分も死ぬものだとこの六歳の子は解してゐるのだ。軍政者は軍隊はいつたい何をしてゐるのか、こんなに無邪氣な幼兒にこんなに極度にセンチメンタルな病原液を注射して、果して一國の士氣を保ち得るか。この子一人ばかりでない。行軍に接しこの軍歌に接する國中のことごとくの日本の幼兒の天眞を損ふものは誰だ。このごとき卑俗の婦女子の哀調で未練切々たる軍歌は決して市中を放歌行軍さしてはならない。哀調は時の慰めではある。時と處によつては慰むべし。然し日本民族としての浩然の士氣は愈々益々揭げねばならぬ。思ふに士氣を鼓舞し興隆せしめるには歌謠の力と精神と曲調とがいかに重大なものであるかに、一國の軍政者たる要路の大官乃至軍團の統率者等がしみじみと思ひ及ばぬのはあまりに寢ぼけきつてゐる。いつまでも日清日露戰役の軍歌——それも愚劣で蕪雜で型にはまつた——や、元寇の「敵は幾萬ありとても」や、種が盡きると「熊谷次郎直實は」や「筑前筑後肥後肥前大隅薩摩で六ヶ國」の刈萱道心石童丸やである。豪壯で颯風的で、素朴で、剛健で、日本の國威、國民性を颯爽と顯揚し、平時にも眞の、意味の殺人獎勵的でない、祖國愛護の、責任感の强い、また人類としての平和の爲めの眞の軍歌は現代に、この昭和の御代に、眞に興らなければならないのである。

「日本にムツソリニはゐないか。」

よし、軍歌は詩人が作る。

私は憤激してゐるのだ。

私はかのごときへろへろ軍歌を泣きめだつて、だらけきつて歌つて來る演習歸りの軍隊などに、私の子をこの帝都のまん中で逢はせることとはならぬ。

それから、私はこの墓地裏を私の子のためにもいよいよ引拂ふことにきめた。淸閑で幽雅ではあるが、つくづく考へられる。そこで私は四月に世田ヶ谷へ越すことに決心した。坊やは大喜びである。世田ヶ谷には聯隊の兵營があり、タンク隊がその家の門前を黄塵濛々とあげて馳るからだ。だが、父親たる私として心痛するのは差し迫つた彼の今後のことである。彼は來年學齡に達する。愛子のためにすぐれたいい小學校を選定しなければならぬ。通學の行路も、それから出來得る

ならば今年いつぱいでも何とかしていい幼稚園に入れてやりたいと思つたからである。

教育もだが、兒童は兒童の中に放たなければならぬ。私は探してやらねばならぬ。健全な正しく賢い學友を、さうして兒童としてのいい集團生活を、愛を、秩序を禮節を、さうして自由を。

二

昨年の暮春まで、私はまだ小田原の半壊の山荘に引籠つてゐたが上京前二三ヶ月間、隆太郎を西海子通りの聖公會の幼稚園に通はして置いた、通ふのにかの子は小兒用の赤自働車に乘つて、自分でペタルも踏めないのにただ矢鱈にベルを鳴らした。女中に綱で曳いてもらつて山から坂を下り、ガードをくぐり、町の電車通りをガラ〱〱〱であつた。見る人からいつも笑はれた。幼稚園では寧ろ獨で勝手に遊んでゐたらしい。他の可憐な學友たちが揃つて唱歌を歌つても見向きもしなければ、遊戯にも加はらず、電燈が點いたりヘッドライトが光つたりする巨大な玩具の電車がいちばん氣に入つて、それはかりいぢくり廻はしてゐたさうである。さうでない時には、みんなの椅子をひつたくつて勝手に縦に並べると、汽車の連絡だといふわけで、自分が第一の椅子に大得意で踏んばると、さつそく、ピピーであつた。「ビール、正宗、煙草にマッチ新聞。」少くとも傍若無人であつたらしいのである。食事の時一同が額に手を當ててお祈りをする中でも、彼は一向に平氣で省みもしなかつた。隣の女の子が心配して、

「隆太郎さん、かうするのよ。」とやつて見せたところで、

「うん、僕はこれでいいんだ。」と拳を握つて右の腕をぐつと頭の眞上へ差し上げたさうだ。これは一つ話になつてゐる。

「今日はね、ママ、西洋菓子の歌をならつて來たよ。」と勢ひよく歸つて來たことがあつた。さうして盛んにカステラをせびつてやまなかつた。何の事かと訊き糺して見ると、「何々せよかし、何とかせよかし」と云ふ教訓の歌らしかつたのだ。幼兒のことである。いかに教へようとしたところでせよかしは西洋菓子だぐらゐに受け取つて了ふ。さうして甘美な食慾だけが亢進する。だから腸さんや胃の腑さんが男か女かと云ふ問題が天下の大事になるのだ。

これでも小田原の兒童たちの環境は暢達で素朴でもあつた。

上京以來、私は幼稚園の選定に多大の不安を感じた。殊にこの附近ではさうであつた。で、家庭で充分に遊ばせることにした。さうして私たち兩親も一緒に遊び戲れることが最も正しくさへ思へた。それにしても父には父自身の仕事があつた。母はまた家事の務めに忙殺された。それでかの子は毎日のやうに、動物園に遊びに出された。

幾日かの後彼はとうとう澁り出して了つた。

「いやだなァ動物園も飽いちやつたァ。」

「なに、飽いちやつた、獅子がゐるぢやないか。」

「獅子なんか、ウゥといふだけだァ。」

「象がゐるだらう。象が。」
「うむ、象なんか、口が無いや。」
で、今度は植物園に連れて行つた。
「植物園つてつまらないや、花屋さんの大きいだけだ。」
なるほど、箱根や相模灘や大島の噴煙やを始終眺め暮らしてゐた子供にとつては、植物園ぐらゐはさした驚異にも値しなかつたであらう。
「東京にはお星が無いお星が無い」とも失望してゐた。
そこでまた、お勝手の前の空地に無恰好な急ごしらへの辷り臺が造られた。だが、肥えふとつた父親が第一番にするく\とやつて、急勾配を自分の重みで一氣にどすんと辷り落ちる、腰の骨をいやといふほど土にぶつけたところでこれはいけない、危險だとなつた。
近所の子供たちに遊びに來てもらつた。と、この頃では極めて卑猥な示唆的な術語の數々をすら無心のかの子の頭腦に注入し初めた。私達は蒼くなつた。
で母は母で毎夜のやうに父の童謠集を讀んできかせたり、繪雜誌に載つてる父の童謠レコードのものなぞを觀せたり聽かしたりすることに腐心した。それにもかの子は飽いて了つた。
「パパの童謠なんてもう古いや。」
この小僧め、云ひたい放題のことを云ふと思つたが、毎晩聽かせられるのぢや飽いて了ふだらう。父としてはまた自分の童謠を自分の子に歌はせるには隨分の羞恥を感ずる。歌はれても厭な氣持が先きに立つ。そればかりでない。創作時の感興なり歌詞の精神や香氣となるところのものと全然似て非なる歌曲や妙に甘美な少女歌劇式のセンチメンタルな獨唱のやを、レコードやラヂオのキヤイ\調で聽かされる時の場面が父自身にも堪へられない場合が尠くないのだ。また無選擇にも沒階級の低劣な童謠などと混淆されて、寂びの無いマイクロホンから急速に吹き立てられる時の不愉快さは夢にもうなされさうに感じる。私は作品については道として常に純に、高く向ひたいと專心してはゐるが、また論議も辭せぬが、作品發表以外自作童謠などの實行宣傳については否である。かう云へば差し障りがある向きもあるとは思ふが、別にさうした人々を惡く見ようとするわけでもない。性に合はず、自分は自分で信ずるところもあるからである。また音樂家の作曲についても、遊戯の振付についても、童謠踊についても、私には私の批判があり、省みて自己の見識を矜持しなければならぬ場合も知つてゐる筈だからである。童謠の提唱についてもである。また自信ある作品は多く理解されず自分にも赤くなる程度のものが却つて作曲家に迎へられる事實も可なり經驗してゐる。私は私自身にもやかましいのである。この私が如何にして輕々にほしひままな實行宣傳などを敢て爲されよう。その私がラヂオ地獄に週に何度とかかるのである。私は多くの場合はラヂオの放送に耳を塞うてゐる。僅少の時の外樂んで聽くことは尠い。
私は童謠の創作にはひたぶるの心を傾いてはゐる。兒童の自由詩を

も培ひ育ててゐる、日本の童謠の將來の進展を常にまた念じてゐる。然し書齋にあつては自己の藝術、自己の感興に高翔してゐる。若くは日本の子供世界の子供についての愛に熱中してゐる。かうした時、自分の子と眞實に遊ぶ餘裕がさうさうは作られない。子は子で勝手に玩具の汽車や自働車で騷ぎ立てる。かと思ふと疎でもない或る他の作家の童謠、その父の觀て低劣とし卑俗極るとする童謠などを却つて聽き覺えて大聲に坐敷の中を放吟してあるく。何といふ皮肉であるかと思ふ。家庭のささやかな一悲劇と思へる。

私はまたラヂオで幼稚園や小學生徒の童謠合唱をよく聽く。指導者の無選擇と鑑賞眼の愚劣とを知つて、どうして氣安く自分の愛兒を其處らの幼稚園に預けられよう。

さうしてラヂオの童話もである。あの落語家臭の、浪花節式の童話口調は、あの妙に兒童に阿り操らせ、戯けて笑はせかかる狂言口調はいつたいあの人たちは子供を何と思つてゐるであらう。かう思ふと放送局のマイクロホンの前でまざまざと眼をむいたり舌を出したりしてゐる俗惡な顏付や身振までが不快に眼に映つて來る。あれを眼前に敎壇で仰がせねばならぬのかと思ふと自分の子は預けられぬ。

ラヂオの童謠や童話が通俗の娯樂を主とした寄席ものであつていいわけは無からう。學校がまた市井のおさらひ式の華々しい兒童劇場であつてはよくなからう。役者の子供ではあるまいしといふ氣になる。童謠ダンスの振付をする敎師たちの幾人かがまた眞に私たちの藝術としての新童謠を理解し鑑識し得てゐるであらうか。私はあまりに低級な歌詞の選擇と、下俗な振付とを雜誌の寫眞などで見過ぎてゐる。自分の子が幼稚園から家庭に歸つて、習ひ覺えた不自然な媚々たる嬌態を行つたら、相當に見識ある兩親ならば堪へられないであらう。殊に自作の童謠から思はぬ變貌を以て嫋々と脅かされるに到つては苦笑以上の悲憤が來よう。

童謠踊もであるが、この頃は淸元の師匠あたりで盛んにはなつた。聞くところによると、あの社會では家庭ものとしては今は行き詰つてどうにも童謠からでも建て直さなければならなくなつてゐるさうである。「宵や待ち」や同じく卑猥な或種の琴唄などよりは、如何なる低級な童謠、童謠踊の方が確かではあらう。一大革新だと思ふが、それにしても現代の智識階級では家庭へ三絃樂の踊や、淸元の下地がないと唄へないやうな童謠は喜ばぬであらう。演藝としては、いいものでありさへすれば兒童に觀せもする。然し、新童謠に對し、否、眞實の童謠味の詩に對して、殆ど理解の無い師匠達が、自ら童謠を作りまた作曲して恣に富家の子弟を敎導するに到つては驚くの外はなからう。かうした向きは童謠とは調子のいい、子供げた、滑稽な操り以上には考へてはゐないらしいのである。然しまたかの人たちばかりを嗤へないのである。滔々として世俗は、或る種の敎育家までが、否々、自ら任じた或種の童謠作家までが、同一の談林風の見解を童謠なるものに未だにも加へてゐるのだ。有力な新聞紙上の兒童作童謠なるものまでがお

ほむねこの流であることに於て啞然として了ふ。滑稽童謠を募集して兒童の純心を汚す幼年雜誌もあれば、私なぞの童謠に滑稽唱歌の題目を附して無斷に作曲して曲譜を出版した音樂家も既にあつた。

一般世間が新童謠について知るところなく、また批判なく、ただ俗的盛名やジャナリズムの宣傳にのみ追從して、個々の價値の段階の懸隔にも盲して見るを得ないのは當然であらう。一般世間のみでない。兒童教育について直接の任にあたる全國の小學教師の過半、上つては兒童學に於ける有數の大家たる人々の中にまで、かうした半知半解の俗見は及んでゐるのだ。まして、兒童自ら作るところの自由詩についてをや。

のみならず、兒童藝術教育を標榜するその種の教育雜誌の幾多について見ても、根本からの誤謬が既に因襲してないことはなかつた。創作の體驗の無い教育家には如何なる童謠が眞の藝術品であるか否かがわからぬと見える。然しながら、從來あまりに「詩」或は藝術について知るところ、或は知らうとしたことが稀ではなかつたか。あまりに穿きちがへはひど過ぎる。

何といふ、また、飛び越した新らしがりの藝術教育だらう。根據の無い、突拍子もない、藝だらう。

私たち曾ての同志は新童謠の提唱以外自由畫に、手工に、音樂に、藝術自由教育を主張し、その新運動を興した。機關雜誌「藝術自由教育」をも刊行しだ。もう五六年以前のことである。しかもその當時に於て之に共鳴した人士は極めて限られてゐた。私たちは世の教育者側より寧ろ邪道視し異端とされた。それが今日ではどうだらう。童謠は興隆し自由畫は普及した。しかもまた昨日の敵は今の雷同者の大部となつた。いや寧ろ私たち以上の所謂藝術教育家となつて業々しく私たちの前方を眩かしてゐる。この奇觀はいつたい何たることか。「詩」はさうした人々から謬つて見られて了つてゐる。

私の思ふ「詩」は童謠は道である。煌々として明るく、しかも寛々として、また嚴肅なる道である。かの人たちの考へるやうな浮華な、甘美な、上品らしい表面上の雅趣や、生彩のない裝飾品やでない。

また或種の「詩」の無い、似而非道心の所産たる、殊に韻律に蕪雜な童謠は、寧ろかの小學唱歌以下である。

また云ふ。曾ての小學唱歌の作曲者であつて、また今日の童謠作曲者である人々の作と今との見解に作曲の態度にさした相違を見出せぬ時に於て、如何にして自覺された藝術としての新童謠に相應した曲譜が望まれ得るか。

また云ふ。單に米鹽の資を得るに容易であるために、童謠を詩の附屬物のみとして平生は侮視しながらいい加減に第三義以下の童謠作を爲して憚からぬ詩人はどうか。兒童の童心と、鋭敏なる彼等の感覺とを眞に畏れてよい。

童話について云はう。

日本の創作童話がさして振はず、兒童の眞の喜びとなることの遲い

理由の一には、眞の意味の創作童話に專心精進する向きが小說作家或は詩人よりも遙かに少いことにあらう。二には日本の國民性、土俗についての第一義の藝術的充實が少い。三には飜譯飜案物に執し過ぎる。しかもまた原作者の名すら揭ぐることの少いのは良心の上から見て兒童の信賴を可なりに裏切るものではなからうか。またいつまで王子や魔法使物の蒸し返しばかりが多いことだらう。眞の童心に遊び、日本の兒童を誰が眞にまた愛してくれてゐるであらう。

繪雜誌幼年雜誌について云はう。

あの繪雜誌の色彩の毒々しさは、その畫材の俗惡なことは、あの趣味の下劣なことは、これは先づ論外にして置かう。然しながら、ともすると、正直な汽車電車自働車の寫生は怪しい空想的な動物學校や人工化藝術化の草花の畫などよりは兒童を謬るところ少いであらう。智識階級の家庭向きとしての氣品を矜る高等の繪雜誌に於て私たちの關係してゐる「コドモノクニ」などは遙かにすぐれてはゐる。然しまだまだ改良の餘地は充分にある。持ち込み原稿に對する情實の纏綿について、この以外にも可なりに困難を感ずる向きも多からう。この苦勞は編輯者の身になつても氣の毒に考へられる。

幼年雜誌についても、「赤い鳥」以外果してどれだけの藝術的に優良な童話童謠雜誌があるであらう。藝術以外科學的にも修養上にも果して如何なる堅實にして童心に豐かなそれらがあるであらうか。自分の子を思へば滅多に見せられない雜誌ばかりのやうな氣がする。俗、俗、俗、俗。探偵物、活動、——忍術。——猿飛佐助、何、何、何々。諸太郎はまだまだ自働車や汽車電車の畫しか喜ばす、木銃のコルクだまをすぽん〳〵だからいい。もう二三年も經つたら、私はそこらにそれらの幼年雜誌を放ふり出して置くことさへ恐れなければならなくなるだらう。

その妹の篁子が生長したとする。私は斷じて今日のごとき少女雜誌に觸れさしたくない。ああ、それまでにいい時代が來れ。あの少女雜誌の編輯精神なり態度なりは精神的な家庭の見識と趣味とに果して一致し得るであらうか。殊に少女詩の作者のほしいままに假作して自ら淫する桃色式カフエ式センチメンタリズムは、あまりに現代の藝術少女を作り過ぎる。あまりに浮薄である。あまりにキユラソオのペエパアミントの色が沁み過ぎる。あまりにお芝居過ぎる。藝術らしい所謂藝術、詩らしい所謂少女詩、さうしたところに眞の詩の香氣と氣品とが、また純なる生命の流動があるであらうか。何故にまた淸淨な、素朴な、純潔な、或は奧深い美、高品な、健康で明るい、また無邪な詩品がそれらの雜誌に求められないであらう。世の少女は模倣する。眞の詩の詩境を示せばいい。編輯者並びに寄稿家の態度如何である。現在畸型な半幽靈的な背ばかり高い桃色レタアペエパア式の少女は、外でもない、かの人たちが創作したのだ。

なほ、私は幼兒の父であり母である人たち、殊に「詩」の童謠の愛好者たちに云はう。

幼兒の詩、學齡以上の兒童の自由詩は「赤い鳥」その他に於て實に目ざましい進歩をした。日本の兒童は驚くべくその詩を作るに到つた。前代未聞である。私は私自身に誘導し開拓して來た「赤い鳥」の詩欄を見、「コドモノクニ」の幼兒の詩品を觀て、豫想外の驚異と歡喜に搏れてゐる。兒童は眞によく自然を觀照し、細かに鋭く、さうして注意深く彼等の生活感情の中に眞に彼等自身の詩を發見した。然しながらまた一面にその生徒を強ひ、その愛兒を強ひたる自己の虛榮の爲めに虐たげてまで、詩作を強ひ、月に五十篇百篇二百篇をさへ投書さして喜びとする向きも現れた虐待である。ある學校では投書係宣傳係までも教師が分擔して、童謠第一の模範校たらんと營々たるものがある。

私が兒童に詩を奬めたのは、日本の兒童の凡てを詩人とする爲めでは無かつたのだ。詩を生活の根本たらしめ、兒童自身の生活を確實にし豐富にするにあつた。彼等兒童の聲は詩そのものである以上ただ詩がそれであることを自覺せしめさへすればいいのだ。兒童に「童心句」なる童心の俳句をしきりに作らせる向きもある。然し兒童はすでに童心の保持者であるのだ。成人から見れば童心は驚異であるが兒童にはあたりまへなのである。童心で作れなど云ふは寧ろ冒瀆であり、僭越である。

私たちは幼兒の聲に耳を傾けて、その聲を書きとめて置く親としての注意を細かに眞實に保つことが、詩を發見することが眞の深切であつて、強ゐることは禍である。私は隆太郎の風貌を朗らかにその母を守護し、常にその詩の發見につとめてはゐた。豐かにし、示唆し濕かに、また清新な滋養は與へた。然し強ひはしなかつた。今に於ても他のある親たちのごとく對世間に彼の詩集を編むとか、一日も早く有名にしよう、などとは毫も思つてゐない。幼兒時代より有名者の悲哀を彼自身に惡しませることは殘虐以上の何物であるぞ。

隆太郎遊ばう。

さあ、パパが象になるぞ。そら見ろ、このシャツの腕がお鼻だ。はうらブラ〳〵だ。タツタ、タツタ、トテトテタテタ、お鼻のうしろに口がある。

凡愚列傳

長谷川如是閑

目が開いた日には大變な男

このお婆さんの胃痙攣も猛烈だが、それに應じて、それを揉み崩さねばならぬ按摩の源太の奮鬪もたいしたものだ。

婆さんはもう七十に近い、ふだんは全く乾からびたたゞの婆さんで、たゞそのだぶ〳〵とした皮膚のだるみに、太く逞しかつた昔の肥ぶとりの若い姿を想はせるだけだが、それが『差し込み』が來たとなると、腹から胸にかけて太い鐵の棒を差し込まれたやうだといふ、その太い鐵の棒が恐ろしい彈力をもつてそり返るかと思はれるほどの力で脊中を返らせるのを、按摩の源太はもろ肌ぬぎで、これも十人力で荒れ馬を押へたといふ若い頃のそれを想はせるやうな骨組みの腕が、牛の骨を油皮で包んだやうになつてしまつたのをぎゆうと二本突出してその兩の拳で、そのお婆さんの脊中を岩も透れと押しつける。大つぶの油汗が源太の額から、その眞白な見へない眼へと流れ込む。

それは大がい眞夜中に起る事だ。源太の落ちついた錆びのあるえい〳〵聲と、お婆さんの若々しい唸り聲とが夜陰に響いて一層光景を凄慘ならしめる。

それが長い時は夜あけまで、短い時でも一二時間を缺いたことはない。醫者が馳けつけてモヒを注射するまで、源太は、自動車ポンプの來るまで蔦口を振つて猛火と奮鬪する消防夫と同じ役目をつとめる。

醫者が微笑みながら、源太と奮鬪してゐるお婆さんを靜かに源太から引離して、注射をする間、源太は、諸肌ぬぎのまゝ、兩肩をいからして、たつた今道具をぬいだ劍客のやうな構へで、そつちの見當に向つて斜に構へてゐる。その頭から脊中からホツホと湯氣が立つてゐる。

注射がすんで二三分たつか經たぬに、お婆さんはケロリとして、横になつてゐた身體を半分起して、頭の上を手探りで探る。それは煙管を探つたのだが、醫者のゐる間は、それでも遠慮して――暫く止められてゐるので――その手が煙管に探りあてゝも、それを取り上げずに、そこに煙管があるので安心したといふ調子でその手を引込ます。

源太は、それらの光景がよく見へでもするやうに、きつとそれをしほに肌を入れて、ごし〳〵と額や脇の下の汗を手拭ひでこする。

源太は多くの年寄りを得意としてゐるが——源太の得意先は大抵年寄だ——このお婆さんほど按摩の強い人に嘗て出喰はしたことがないが、お婆さんの方でも、この源太にぶつかるまでは、『まるで猫にでも舐られてゐるやうな按摩』ばかりで遣りきれなかつたが、源太にやつて貰つて始めてほんとうの筋揉みに出喰はしたといふので、源太はほとんど毎日のやうにこの婆さんのところへ出入した。さうして月に一遍は流石の源太も諸肌ぬぎでヘト〳〵になるやうな目に遭はせられるのであつた。源太の方でもまた、

『私はお隱居様のお療治をするやうになつて始めて眞劒の揉み療治になつた氣がいたしました。指の先きにほんの一寸力が入つても大の男が、「アイタタ」なんて仰しやられると、「旦那様、療治なんかおよびにならないで、女中さんにでも撫でさせたら何うでございます」と申あげたくなりまさ。』

などゝいふのであつた。實際あの錆のあるえい〳〵聲を出す時の源太の、その聲といひ様子といひ、如何さま、そんな誇りを示してゐるのであつた。

このお婆さんも按摩にかけては一かどの經驗家で、『天子様のお療治を承つてゐた』何某といふ按摩も、『おとめ』になるまでは常に此のお婆さんを揉んでゐたのださうである。宮中に出るやうになつてからも、時々やつて貰つたが、

『天子様のお療治を承つてゐる間は一言も口を利いてはならないといふのださうだよ。それはさうなくちやならないわけさね。』

『いかさま。』と源太は應ずるが、二人とも、『さうなくちやならない』わけがわかつてゐるのでもなかつた。

『天子様も、大分按摩がお強くつていらつしやつて、××さんの外には御療治の申上げ手もなかつたのだよ。××さんはお前さんのやうに、糞力のある方ではなくつて、誠に穩かな品のある方だつたけれど、それは〳〵強い按摩でね、それがお前、私の身體には相當骨が折れるつて、よく云ひ〳〵なすつた位だもの。さう申しちや何だが、若い時分には女だてらに一升酒をのんで、鰻の大ぐしを三人前も平らげたんだからね。鰻だつてその頃のは今時のやうにしみつたれたのぢやないでせう。鉤であごを引かけて、かうやつてぶら下げると地べたに引ずる位な奴だらうぢやないか。それをお前三人前もペロリとやつて平氣な身體だもの。』

從つて胃擴張もそれに應じて猛烈で、ある點まではお婆さんの論理は進展しないが、源太は天子様を揉んだ按摩が揉んだお婆さんを揉むことによつて天子様を揉んだことになるかの如く——それはタブーを持つものにふれたものがタブーとなるといふ思想である——一種の光榮と誇りとを感じない譯に行かないのであつた。

自然、源太とこのお婆さんとは、いろ〳〵の點から肝膽相照らしたので、源太は、あのやうな大奮闘を必要としない平和の療治の間に、互の身の上のことなどを語り合つた。身の上話といつても、お婆さんの方は、たゞその昔、女に珍らしく大酒を飲んだ——今でも可なり飲む——が、さうしてそれが時々源太をして悪戰苦鬪せしめる原因なのだが——といふ話位なもので、これも御殿奉公をした時に、殿様が、慰みに蓮酒といふのを飲ませたお蔭だといふ辯解を作つてゐるのであつ

た。蓮酒といふのは、大きい蓮の葉を莖のまゝ切つてその莖を管のやうにして口に含ませて、上の葉に酒を入れて飲ませるのだ相である。

『今時そんな結構な殿様があつたら、わつしも按摩を廢業してお奉公に出ますぜ。』

度々聞かせる同じ話に對して、源太はいつも同じやうにそんなことをいふのであつた。

源太の方は、その眼明き時代の經歷は、泥棒の外、人間のするあらゆる惡い事はし盡してしまつたといふのである。源太が眼くらになつたのは三十過ぎであつたといふが、

『考へて見ると、それからいくら生きてゐても、新らたにやつて見やうと思ふ惡い事は先づねへでせうね。』

そういふ所から見ると泥棒の點もやゝ怪しいものであつた。源太が目くらになつた時は、奏任以上は皆馬に乘るといふ規則のあつた時で、ある奏任官の馬丁をしてゐた彼れは、元來馬の心得なんかは根つからなく、たゞ腕づくでいふ事を利かせるつもりでやつてゐたが、それに反抗した馬は、一旦彼れを乘せたまゝ主人の家の廐にかけ込んで、その際入口のかんぬきで彼れの兩眼をたゝきつぶさせたのであつた。

『考へて見ると、やつぱりけだものゝ方がえへや。おめへのやうな惡黨は眼でもつぶしてやらねへと何を仕出來かすかわかつたものぢやねへ、といふのでございまさ。全くその通りこいつは骨身にこてへましたな。どんな大德が現はれてお說敎の百まんだら列べたつて、あの馬のやうにわつしを叩き直してくれることは出來なかつたに違へねへ、所がわつしのお主人は、怪しからねへ馬だつてんで、わしが病院に入つてゐる間に、その馬を二束三文で出入の肥桶屋へ賣り拂つてしまつたんでさ。尤もその當座わつしだつていめえましい馬だ、眼が癒つたら毆り殺してやらうと思つてましたがね。』

盲目になつてから何が一番恐ろしかつたかとお婆さんに聽かれた時に彼れはいつた。

『嬶に逃げられやしめへかと、それが何より恐ろしうございましたよ。何よりぶつ飲む、遊ぶ所ぢやねへ、三日にあげず喧嘩をして監獄には出たり入つたり、嬶の面見てゐる時間よりも、看守の面を見てゐる時間の方がよつぽど多い始末ですからね。一體、何が面白くつて手めへ俺の嬶なんかになりやがつたんだなんて、醉つぱらうと怒鳴つたもんでさ。けれども三十面さげて俄めくらでせう。嬶を離れると、まるで赤ん坊同然で、湯茶一つ口に入れることも出來ねへんでせう。こゝで嬶に逃げられた日にや目さへ見えれば草を分けても探し出して、只は置かねへんだが、盲目ぢや仕方がありませんや、死ぬより外に道はねへが、首を縊るにも俄めくらぢや何處に梁があるか見當がつかねへ。身を投げるにも、何方の見當に河があるかわからねえつて譯でさ。』

『でも、おかみさんは全く感心だね。』

『そこがお方便なもんで、わつしが始めてそれをうちあけた時に、嬶は、いふんでさ。「お前が目明でゐたらわたしはきつと逃げ出したらうよ。私はよくさう思つてゐたんだよ。眼でもつぶれてくれたらお前も

ちつとは人間らしい人間になるだらうつて。お馬大明神樣だ。」つてさうぬかすぢやございませんか。わつしは、この時位嬉しかつたことはなかつた。わつしもそれからお馬大明神に宗旨變へをいたしましたやうな譯ですよ。はい。』

それはよかつた。さうして源太は自分を幸福なめくらだと信じ切つた長い年月を送ることが出來た。このお婆さんを揉み出してからも既に十數年になるが、源太の按摩の生活がこの唯一のお婆さんを中心として低徊してゐる間に、按摩の世界は、源太を俊寛のやうに取殘してしまつたのであつた。彼れはいふのであつた。

『所がいけませんや。もうとうの昔わつしどもの時節ぢやなくなつてしまひました。何しろ按摩が官員さんのやうな洋服を着て、つぶれた眼がむき出しぢやいけねへてんで、色眼鏡をかけて杖のかわりにステッキぢやありませんか。第一名前からして「源太」なんてごろつきのやうなのはありやしません。皆昔のいくさ人の名乘りのやうな七六かしい奴でさ。だが身なりや名乘り位のことならわつしどもだつて、ちつとばかりきまりの悪いのを我慢すりや出來ねへこともありませんが、そんなことだけぢや收まらねへ、セイリ學だの何學だのつて奴をあの賽の目のやうなテン字て奴で勉強しなくちや一人前の按摩ぢやねえつていふことになつてしまひました。わつしも目くらになつた時には隨分面喰つたが、あの時には一時に面喰つたので却つて始末はよかつたが、此の頃はなしくづしに面喰つてゐるんで、死ぬ氣にもなれやしませんや。』

さう云つて源太は、お婆さんを揉む手先に覺へず力を入れるのであつた。

『だつてお前、そんな按摩さんに揉んで貰ふ位なら孫にでも摩つて貰つた方がよつぽど増しだよ。』

『所がさういふ按摩でなくちや當世は流行りません。今ぢや一升酒のんで鰻の大ぐしを三人前一人で平らげるやうなお婦人はありませんからね。』

『大きにね。オホ、、、』

『按摩も術で行かずに學問で行くやうになつた時には、わつし共のやうな、七の字はどつちへ曲げるのかよつぽど考へなくちやならねえやうな按摩は上つたりでさ。ねへお隱居さん、情ねへぢやありませんか。でもさうでございませう。わつし共は、漸く昨今、娘子供にどうやら餓もじい思ひをさせずにすむやうになつてやれ、安心と思ふと、もう上つたりなんですからね。三十年近くも辛抱した甲斐が何處にあんですお隱居さん。そんな位ならめくらになつた時に死んでしまつた方がどんなによかつたかわかりやしねえ。』

そんな時には、源太は白い眼をむいて、見當もなく睨め廻しながら、それでもお婆さんを揉むことだけは忘れないで、屹度かうつけ加へるのであつた。

『ねへ、御隱居さん。わつしが今もし眼があいたら、世間の奴等がオッ魂消げるやうなことやつて見せますぜ。』

だが不幸にして――世間にとつては、幸ひにして――源太の眼は永久に開かなかつた。

雪を廻すは男

その男の親爺が生きてゐた頃は、まだ電燈といふものを見世物で見せてゐた時代であつた。

親爺は、彼れの記憶によると、恐ろしく立派な體格で、太鼓のやうな腹をつき出して、黄八丈の着物をきて白縮緬のへこ帶を巻いてゐた。そんな風采の男を、彼れはその後實際に見たことはないが、いつか芝居で見た西郷隆盛にそれとそつくりなのを見たことがあつた。

親爺は元來武士の出だが、當時の所謂士族の商法でいろ／＼の事に手を出して悉く失敗した末に、何ういふ關係からか香具師の仲間入をして電燈の見世物を持ち廻つて全國を歩いたものであつた。

少年時代の彼れは、それについて廻つて歩いたばかりでなく、五色の豆電燈を澤山つけた衣裳を着て舞臺へ現はれたりしたのであつた。親爺は、その堂々たる風采で、今考へれば燕尾服であるが、それを着て、舞臺で活動し、

『愈、これよりインカン電燈。始まり左様ッ。』

など〻怒鳴つてゐたのである。

動力は、大きい車を人力で廻してモーターを動かすのでそれも舞臺に据へつけてあるのだが、その動力になる男が中々骨が折れるので、いつも角力のやうな男が雇はれてゐた。無論給料が安いので一ケ月と續けたものはなく、從つて時々動力不足の男があへぎ／＼車を廻すこともあつた。そんな時には仕方なしに燕尾服の親爺が時々一緒にハンドルを廻した。

それよりも困つたのは『雪を廻す』男であつた。それは、電燈應用の生人形で、その正面の圓窓の奥に、雪片のやうに切りこまざいた紙片をはりつけた黒布を絶へずそろ／＼と廻して見せると、丁度そこに雪の降つてゐるやうに見へるのであつたが、その雪を廻すのに朝から晩まで人手が要るのだが、無論人數の多くもない興行團だから、交代もなく、食事をする時の多は全く一人で間斷なく雪を廻さねばならず、忙しい物日などは、食事さへも雪を廻しながら握り飯を喰はねばならなかつた。

親爺はまた、その雪の廻し方を馬鹿にやかましく云つて、早過ぎるとか遲過ぎるとか不同だとか絶へず小言をいつてゐた。頗る樂なやうにも見へるので望み手はいくらもあるが實際やらせると三日とつゞくものはなかつた。で少年の彼れは、親爺から時々その雪を廻す命令のでるのを何よりも恐れた。薄暗な、身動きも出來ないやうに狹い、外のちつとも見へない、道具裏に入つて、そろり／＼と把手を廻す、その退屈さ加減は話にならない。それに一様の速度でゆつくり廻さうとすると、ぢきに手先が痺れて來て、それを耐へて、半日もやると、二の腕の邊がもぎとられるやうに痛くなつて來る。いやだといへば、親爺になぐられる。彼れはいつもシク／＼泣きながら雪を廻した。

所が彼れのために救ひの神が現はれた。

ある日親爺の小屋に、見るから勢のない、彼れが始めて一目見た時には、何か青い細いものがふら／＼と動いてゐると思つたやうな若い男が現はれた。小屋の若い者が、その男を親爺の前につれて來た時にその若い者は親爺にいつた。

『此男が何でもいゝから使つてくれつていふんだが、見た所一寸使ひ道があり相もねへから、駄目だつていつたんだが、しつこく云つて出て行かねんです。』

その男をじろ／＼見てゐた親爺は、例の如く苦虫をかみつぶした樣な顏で、――親爺がそんな顏をする時には何か氣に入つたことのある時だ――その男の身の上などを尋ね出した。だが青い男は、何か口の中でぐど／＼いふだけで要領を得なかつた。

『まあいゝ。』と親爺はさういつて若い者に向つて、『おい手前、此男をあの雪の所へ連れて行つて廻させて見ろ。さうしてやつて見るて云つたらやらして置け。』

所が、その時以來、雪は間斷なく廻ることゝなつた。その男は一日そこに入つたきり――恐らく便所にも行かないで――いつ親爺が來て見ても、早いとも遲いとも不同だとも怒鳴らずに苦虫をかみつぶした顏をして行つてしまう位、忠實に雪を廻してゐた。

彼れは、飯時になつても出て來ない青い男の所へ毎日握飯を運んでやつた。その度彼れは『ぼつちやんありがたう。』といつて淋しい笑顏を見やた。青い男は皆のやうに彼れの名をいはずに『ぼつちやん』といふのが彼れに妙な感じを與へた。無論青い男は彼れの名を知らなかつたのだ。

彼れも嘗つてはぼつちやんと呼ばれたのだが、彼れ自身物心を覺へてからは、誰も彼を『ぼつちやん』などゝ呼ぶものはなかつた。でこの青い男から始めてぼつちやんといはれて、彼れは變な氣になつて、その思ひがけない呼びかけをした男を更めて見ない譯に行かなつた。すると、細い身體を横向きにして、靜かに把手を廻してゐるその男の青い細い襟元の二筋の肉の襞が、少年の彼れの眼に映つた。それは彼れをぼつちやんと呼ぶにふさわしい姿のやうに子供の彼れにも想はれた。從つて彼れも此青い男を皆を呼ぶやうに『何公』といはずに『何さん』といはねばならないやうに思つた。で彼れは尋ねた。

『お前何さんてへの？』

『わたし？トモてえのですよ。』

『トモさんかい？でもトモ何んてへの？トモジロ？トモキチ？』

『トモきりですよ。』

『トモきり？をかしいな女見たいだな。』

それをきつかけに、彼れは此の青い男と仲好しになつた。今までは、そこに入つても身慄ひの出た道具裏を彼れは度々訪づれた。が青い男は、彼れが傍に來ても、たゞ淋しく笑つて見せるだけで、ろく／＼に口も利かなかつた。彼れもそこでは口を利いてはならないと命じられてゐるので、たゞ時々小聲で一言二言いふ外は、默つて此の男の傍に座つてゐるだけであつた。飯時には、自分が代つて廻してやるから向ふへ行つて皆と一緒に飯を喰ふやうに、彼れがすゝめても、彼れはたゞ

『わたしはやつぱりぼつちやんの下さる握飯の方がいゝ。』

さういつて動かうとはしなかつた。

そんな風にして一月餘りも過した。そのうちに、時々、親爺が前に雪の男に怒鳴つたやうな聲の聞へるやうになつた。

『あいつは一番几帳面だつたが、この頃は少しをかしくなりやがつ

た。』

親爺はさう皆にいつたりした。

『あいつを一月もつゞけりやちつとはをかしくもならうぜ、親方』

皆はさういつて笑つた。彼れは、それをきくと悲しくなつた。あの細い女のやうな襟元をもつた男が、親爺にがなられるのを見るのがつらかつた。

で彼れは一層頻繁に青い男を訪ねたが、彼れが傍にゐる間は男は決して雪を廻す手を緩めも休めもしなかつた。時々淋しい笑顔をかれに見せながら靜かに把手を廻してゐる男を見ると、彼れも、雪を廻す役目をそんなに嫌ふ氣がしないやうになつた。やがて此の男も親爺に怒鳴られて逃げ出せは、彼れはまた此道具裏に追ひ込まれるのだが、今はそれが恐ろしいよりは、此男の追ひ出されるのを見るのが恐ろしかつた。そのために彼れは、此男がいつまでも〳〵かうして雪を廻してゐてくれゝばいゝと思つた。

どうかこうか更に一月ほど經つた。がその間に親爺の怒鳴る聲がだん〳〵頻繁になり烈しくなつた。それでも此男はいま迄の男のやうに、道具裏から逃げ出してしまはなかつた。それが一層親爺をいら立たせるかのやうであつた。お客のゐる前で怒鳴つて、急に雪が動き出すのでお客が笑ひ出したりすると、親爺は齒ぎしりをして拳を握りつめて怒りを抑へるのであつた。

ある日の朝、やつぱり雪が止まつてゐたので、親爺は例によつて怒鳴つた。

『やい間抜け、朝ぱらから寢ぼけやがるとどやしつけるぞ。』

いつものことだが、その聲があまりに烈しかつたので、彼れは舞臺からとんで來た位であつた。

がいつものやうに雪は急に動き出さなかつた。親爺は一層大きな聲で怒鳴つたが、やつぱり反應がなかつた。

そんな時に親爺が何をするかをよく知つてゐた彼れは、殆んど無意識に、道具裏へ飛んで入つた。

見ると、男は、例の細い頸筋をぐたりと曲げて、把手に身體をもたせかけて眠りこけてゐた。彼れは親爺の來ない間に彼れを呼び起して雪を廻させやうと近づいたがもう遲かつた。

飛び込んで來た親爺は、いきなり男を蹴とばした。道具全體がボコ〳〵といふ音を立てゝ震動した。

けれども、男は蹴られたので身體をのめらしたまゝまだ眠つてゐた。

彼れは親爺の怒憤を恐れるよりも、此男の再び蹴られるのを見るのに堪へなかつた、で走りよつていきなり男の首玉にしがみついたが、同時に彼れはアッといつて飛びのいて、親爺にかぢりついた。

彼れの手にふれた男の身體は氷のやうに冷めたかつたのだ。

凡骨の男

彼れは一種の『凡骨を帶びた』男だと社長が許したやうに、何さま凡骨ではないらしいと給仕までがさう思つてゐた。

年は四十内外で、小ぢんまりと引締つた、ちつとも贅肉のないやうな體格で、武者人形そのまゝの眉と眼つきと顏の輪廓とをもつた男であつた。口を利かせると、極要領のいゝことを少しばかり云つて、「も

うあとは云はぬ――といつた調子で、唇をへの字にきつと結んで見せる。といつて格別悪い癖の見へる風采でも態度でもなく、頭に生へた一撮の髪を話しながら右の拇指と中指とでこよりを拈るやうな手つきでひねるのが癖といへば癖であつた。少し物々しいのは、常に紫の長い房のついた鐵如意をもつて歩いて、社で仕事をする時でもそれをちやんとテーブルの左手に正しい地位に置いて置かなければ承知しなかつた。電車へ乗つた時には隣に少しの空席でもあれば、必ずそれを左手に置いて、兩の掌を膝の上に組み合せて、眼を半眼に開いて首をすへるのである。

日露戰爭少し前の新聞社には――何うかすると會社銀行にさへ――往々そんな男がゐたのである。さうして雜輩どもを尻目にかけたやうな莊重の態度で社中を睥睨して、何うかすると雜輩以下の月給をもらつてゐたのであつた。

けれども彼れは、その風采と態度とでとにかく社長にさへ一目置かせて、役所廻りや政黨廻りを命ぜられもせずに時々、『凡骨のある』文章に署名して紙上に現はれる光榮を有つてゐた。

ある秋に、社長の別莊で當時の大官を招いて菊見の宴が開かれた時に、社の幹部所がそれに陪席を仰つかつたが、彼れもその一人に加へられた。

宴酣なる頃、大官がこゝの社長の義太夫の名人たることは餘り有名で、我輩も屢々拜聽の光榮に浴したが、社中の諸士も、名將の下に弱卒なしで定めし多士濟々であらう。一つこゝで披露されたいとか何とか、豪い人がこんな時にいふやうなことをいつたが、相憎新聞社では、さういふ一藝の士は社長か下廻りかで、こゝに列んだやうな人達は與らないのであつた。で社長も大官への御馳走に誰れか何かやつてくれゝばいゝと一々名ざして一巡り命令したが、誰れも應じるものがなかつた。一座やゝ白け渡つた時に、

『では乞食より始めん。ご免』

と變な切口上で立上つた　その『凡骨の男』であつた。

彼れはいきなり着てゐた紋つきの羽織を脱ぐと、その下に袴を着けてゐたのであつた。さうして

『社長しばらく、御秘藏を拜借いたします。』

とか何とかいひながら床の間に飾つてあつた太刀を取つて帶に差し込んで腰に差してゐた扇を左の手にもつて、さつと開いて、それを頭の上でひらく／＼やりながら妙な足どりで躍り出したと思つたら、飛んでもない艶つぽい聲で、『落花片々雪紛々』とやり出した。

『日本もつひ近頃までこんな人間が居たのだよ。おゝさうだ、その男は××といつてね君と同姓だつたよ。』

さういて中老のプロフェッサーは、若い學生にいつた。

『……それは私の親爺です。』

若い學生は、さういつて眞赤になつてうつむいた。

二人の凡人

何も知らずに平生の通りに登校した豫科の生徒等は、掲示場に、本月限り豫科を廢止するといふ掲示の出てゐるのを見て驚いて騒ぎ立てた。

騒ぎ立てたといつても、元來餘り生徒の少ないことが經濟上から學校をして豫科の廢止を斷行せしめるに至つたのだから、その日も登校してその掲示に驚いた生徒の數は、大教室に全部集合した時に總體の机の三分の一も充たさない位の數だつた。

でも、元來法律學校の豫科のことだから理屈は中々八かましかつた。學校は規則書によつて現在の生徒に一定の契約の申込を爲し、生徒はそれを承諾して契約が成立したのだから、現在の生徒の卒業まで規則書通り授業の義務がある、と演説するものがあると、いや規則書は契約の申込ではなく契約の豫備だから申込たる効力をしないがしかし豫科を廢止するのは生徒の入學申込と學校の承諾とで成立した契約の不履行だから、學校はその責に任ぜねばならぬと怒鳴るものがある。理屈なんか面倒臭い、すぐとこれから事務所を襲撃して幹事を毆つてしまへと馳け出すものがあると、それを抑へるものがあり、幹事を毆る前に生徒同士が毆り合ひを初めた。

結局、何が何だかわからなくなつて、生徒はたゞ無暗に暴ばれ廻つて、教場中の机と椅子を全部ひつくりかへしてしまつた。

そこへ、ひよつこり、今日の授業の受持の教師のAがやつて來たが、この有樣に、驚いて教室の入口でぼんやりしてゐた。

『先生何しに來たのです』と生徒が口々に怒鳴つた。

『何しに？授業に來たのです』今月中はまだ授業がある筈ぢやないですか』

『馬鹿にしてゐら。誰れが今月の末まで授業をうけてゐる間拔があるものが。僕達は一日も早く外の學校へ入らなければならないのだ。』と一人の生徒が怒鳴ると皆がそれに應じて喝采した。

『でもそれまで授業はうけたら何うです。』

『アッハッハッ。』と生徒一同は何時までも割れるやうな笑ひ聲をつゞけて、先生を立ちすくませた。

先生は教室に入つたが、結局教壇を見たゞけでそこへ登るにも机や椅子が倒れてゐて道もなかつた――悄々と、それでも愛嬌笑ひを見せながら出て行つてしまつた。生徒一同はその背中に、一際高い笑ひ聲を浴びせた。

その一時間は、やつぱり煮え切らない前後策でがや／＼やつてゐるうちに、次ぎの時間の鐘が鳴つた。

間もなく、今度は學校を出たばかりの若い法學士のB先生が、受持の英語の書物を小脇に挾んでやつて來た。

生徒等はA先生に向つてやつたと同じ罵聲や笑聲をB先生にも浴びせかけた。

B先生は、生徒等のその勢ひに、一寸入口に立ち止つたが、ジロリと教壇の方を見たかと思ふと、すまして、のこ／＼入つて來て、倒れた机や椅子の上を飛ぶやうに歩いて、突き當りの教壇に上つて、いつものやうに椅子にかけて、卓子の上にその書物をひろげた。

がや／＼云つてゐた生徒は呆氣にとられて、一時鳴りを靜めた。

すると先生は、すまして今日の處を讀み始めた。

生徒は再びがや／＼やり出したが、先生の英語は依然として續けられて、それがやむと講釋が始められた。生徒は一層がや／＼やつてゐるうちに、又先生の英語が聽へ出した。又がや／＼やつてゐると、更

に講釋が始まつた。それをくりかへしてゐるうちに、とう〳〵時間の鐘がなつた。

先生は、本をとぢて、生徒の方を一寸見ていつた。

『諸君はまだ學校へ來ますか？』

『誰れが來るものですか。』

『それでは僕も來ない。これでお別れです。』

さういつて先生は立ち上つて、又倒れた机の上を飛びながら教室を出て行つてしまつた。

A先生とB先生と違ふところはたゞこれだけだつた。

その後、A先生は老先生になつた。B先生は總理大臣になつた。

いゝかい、ところてんは、その入口の撰び方が違へば自然出口も違ふ譯だ。A先生とB先生とが、めい〳〵入り口を撰ぶ流儀に違ひのあつたことは、その日の二人の態度に現はれてゐた。

酸素で死ぬ女

彼女は、夫の鐵道工夫が、もう六十に近い身體で、荒仕事をしてゐるのでハラ〳〵してゐた。

『お前さんにもしものことがあつたら』

それが彼女の口癖であつた。

『やいもう一本つけろよ。』

『いゝかい？大丈夫かい？お前さんにもしものことがあつたら……』

『おい、一寸川開きを見てくるぜ。』

『大變な人出だといふぢやないか、橋の落ちることなんかありやしまいね。』

『篦棒め、今の兩國橋がおつこつてたまるかい。しやうのねへ大馬鹿な』

『でもお前さんにもしものことがあつたら……』

『おい餓鬼どもどこへ行つてる。こんな晩くまで歸つて來ねへのを平氣でゐるやつがあるかい。』

『ほれご覽、お前さんだつて子供がそんなに氣になるだらう。私はお前さんが朝仕事に出て行つてから、一日案じてゐるんだよ。何しろ荒仕事だらう。お前さんにもしものことがあつたら……』

そんな調子の彼女が、ある日の夕方、無殘な死骸になつて鐵道病院の寢臺に横はつてゐる彼女の夫の死骸を見せられたのだからたまらない。

彼女は氣違ひのやうに夫の死骸にかぢりついて喚つた。さうして顔から胸から上半身を石膏のやうに包んでゐる繃帶をむしり取らうと騒いだ。それは一目夫の死顔が見たいのであつた。

それと知つた醫員も、その顔を包んでゐる繃帶をとることは躊躇しない譯に行かなかつた。けれども、彼女は、醫員を引つこづいでそれを迫つた。醫員も仕方なしに、その繃帶をとりかけたが、半分も解かないうちに、ざくろを踏みつぶしたやうに眼鼻の形もなく崩れ果てた夫の顔をちらと見た、彼の女はそのまゝ氣絶してしまつた。

やがて息を吹き返した彼女は、夫の死因をいつて聽かされたが、確とのみ込めなかつた。

それは酸素接合をやつてゐる時に、何うした拍子か酸素管が破裂し

て、そのすぐ傍にゐた彼れはまるで爆彈に當つたやうに上半身を打ち砕かれてしまつたのであつた。

それをきかされて、彼女は、世の中に酸素といふものほど恐ろしいものはないと信じ込んでしまつた。

『うちは酸素で殺されました。』さういつて彼れは泣きながら人にそれをいふ時にも、酸素の恐ろしさに身慄ひの出ることを禁じ得ないのであつた。

三人の子供を抱へて途方にくれた彼女は、やがてある驛の掃除女に雇はれて、漸くその日を凌ぐことが出來た。

が今度は『もしものこと』が彼女自身の上に襲ひかゝつて來た。鈍重な彼女が、汽車や電車の頻繁に往來する構內をうろ／＼するのを見て、始めのうちは驛員達もハラ／＼してよく注意を與へたものだが、次第に日に馴れると、誰れもこの芋虫のやうな女の往來を氣にとめるものもゐなくなつてしまつた。と間もなく彼女は電車に刎ね飛ばされた。

二日目に漸く意識を回復した彼女は、病院の寢臺の上に寢かされてゐる自分を發見したが、朦朧とした意識のうちに、彼女は夢のやうに自分の寢てゐる寢臺が、夫の死骸の乘つてゐたそれと全く同じだといふことを感じてまた氣が遠くなり相であつた。

彼女は、自分の鼻の先に變なラッパのやうなものがチラついてゐるのを見た。そしてそこから臭い息が吹きつけるので、それをよけやうとして顏を外向けたが、そのラッパもやつぱり鼻の先きにちらついてゐるのでいら／＼した。彼女は手でそれを拂ひのけやうとしたが、自由が利かなかつた。

『いやだ。』と彼女は精一杯に叫んだ。

『おゝ氣がつきましかた。しつかりなさいよ。もう大丈夫ですよ。』と看護婦の嬉し相な元氣な聲がきこへた。

『いやだ。臭さい。』と彼女はまた精一杯にいつた。

『いやぢやありません。臭いことはないですよ。』

『臭い。』と彼女は首をふつた。

『臭いことはありませんよ。』看護婦は大きい聲でつけ加へた。

『酸素ですよ。』

『アッ！』と彼女は異樣の叫び聲を發した。

看護婦が驚いて、脈をとると、もう止まつてゐた。

文明の醫學も、文明の工業も、彼女や彼女の夫にとつては、たゞ自分達を殺す組織に過ぎなかつた。

善良な卜者

有名な賣卜者の堂々たる邸宅の眞向ひの見すぼらしい長屋に、賣卜の看板をかゝげたのは、彼れである。

『飛んでもねへ箆棒ぢやねへか。あの威かめしい屋敷門の眞正面に乞食の小屋のやうな賣卜を開業する奴があるかい。』

さういつて、夜になると彼れの出張する大道の同業者の一人が彼れを笑つた。

『何あに、細工は流々だ、見てゐたまへ。』と彼れは嘲笑つた。

成る程、その後樣子をきいて見ると、新らたに開業した。彼れの賑

へ來る客の數は、外の所に古くから開業してゐる同業者の所へ來る客の數に劣らぬのみか、何うかすると多い位である。

『向ふの大將だつて、俺だつてちつとも違つたことはねへんだ、たゞ向ふは金をたんと取る、俺の方は少しかとらねへだけのことよ』

『だからあんなとてつもない屋臺骨になつたのだ。』

『さうぢやねへよ。あいつは賣卜で儲ける前から金持なんだよ。何處の國に賣卜で何萬圓もする屋敷を建てた奴があつてたまるかい。さうぢやねへか、お互、どんなに死物狂ひになつたつて、猫の住ゐほどの家も持てやしめへ。さうぢやねへんだよ。あいつはてんから金持なんだ。だからあんな大きい屋敷を構へて賣卜を始めると世間ぢや豪い賣卜者だと思つて亡者共が高い金を拂つて有りがたがつてゐるのだ。大間違ひさ。賣卜で豪いんぢやなくて、資本が大きいだけの話だ。俺にだつてあいつほどの資本を持たせて見ろ、あんなものぢやねへ、銀行を十も建てゝ見せるよ。』

『さういへば、死んだ高島嘉右衛門だつて、賣卜で儲けたんぢやない、もとが大金持だわのう。』と外の一人が應じた。

『賣卜で儲けたのは、こいつを出した××博士だけだ。』と隣の賣卜が自分の前の本をふりあげて見せた。皆が笑つた。

『所で大將、まん前に豪い奴を控へてゐながら、君の所へ迷ひ込む連中の多いのは何ういふ理屈かな。』

『だから君方は賣卜者の資格なしだといふのだよ。』彼れは得意になつて云つた。『理屈も何もあるもんかな。人間は淺ましいものだよ。金もねえ癖に大病にでもなればぢきに博士にかゝりたがる。貧乏人でも、判斷をして貰ひたい時には、やつぱり有名な高島だのあの屋敷門だのが胸にうかぶだらうよ。所がやつて來て見るとあの構ひだ。とても貧乏人にはあの門をくゞる勇氣は出ねへだらう。けれども折角來たものだから、そのまゝ歸るのも忌ましいので、うろ／＼してゐるうちに、『おや向ひ側にも卜ひがゐら。こいつはいかさま貧乏人向きだ』といふので迷ひ込みもするだらうぜ。』

皆は面白さうに笑つた。

『ほんとだよ。中にはこんなのもあつた。見てやつてから見代をきくからいくら／＼だといふと、變な顏をして、「それだけですか」といふからそれだけだといふと、「こちらはあの××先生でせう」ていふだらうぢやないか。「いや大違ひ、××先生はお向ひの大名屋敷です」といふと、面喰らつて逃げるやうに歸つて行つたよ。後で、そんならもうちつと吹いてやつたら、まるきり氣がつかずに、俺を××先生と思ひ込んでウンと置いて歸つたらうに、惜しいことをしたと思つたよ。何あに、さういつてふんだくつてやつたつて、元來、中味はこつちの方が上等なんだから、詐欺取財にはならないよ。』

その大名屋敷から、盛大な葬式が出た時に、彼れは、自分の家の前に立つて、眞向ひの門から徐々と出て來る柩に向つて恭しく合掌禮拜した。

彼れは正直な男であつた。



蔣介石は何處へ行く

（國民革命の將來）

古莊國雄

蔣介石は何處へ行く――これは重大な問題である。支那にとつても、日本にとつても、否、世界的の大問題である。――軍縮會議の成否より――英米人は彼に"Strong Man"といふ尊稱を奉つてゐる。そして昔のヂンギスカンのやうな、或はナポレオンのやうな巨人であると恐れてゐる。一方日本の支那通の間には、起伏常なき支那革命以來の武將と同樣に、彼の存在も追々夢のやうに消え去るであらうと言ふ者がある。彼の將來は光明に充ち充ちてゐるものであらうか。或は悲觀すべきものであらうか。

一、蔣介石最近の言葉

蔣介石を知る爲に最も適切な資料の一つは二月十六日附の北京順天時報（日本人經營）に現はれた會見記である。彼は絶對に外人との面會を謝絶してゐるがただ廬山において第二革命當時の親友小室敬二郎氏と會見して次の如き意味の問答を試みてゐる。

（問）英國の對支態度及其出兵について如何の觀察をもつか。

（答）英國の今日對支態度は全然植民地を俟つと同樣なり、實に支那に對して無理解極まる。英國にして此態度を改めざる限り對抗する止むを得じ。而して國民軍は敗るるやも知れず、その時は奥地に退却して須く時を俟ちて英國を討たん。而して英國と開戰せば北方の青年將校も我々と共に動作して國難に面せん。

（問）國民軍は露軍の指揮に動きつつありや、そして露國の爲に利用せられつつあるにあらずや。

（答）露國の援助は國民革命を理解しての思想的共鳴である。何等露國の眞意の疑ふべきものはなし。

（問）露國の援助を拒絶する意思はないか。

（答）現國民革命遂行上、金錢、武器、智慧は必要缺くべからず理解してのこれ等の露國の援助を拒絶する必要はなし。

（問）列强に南方政府承認を求むるの意なきか。

（答）國民革命は未だ途中にあり、現在に於て進んでかかることに出づることなし。

(問) 國民革命はいつ完成すべきか。

(答) 玆二三年にあり。但しこれは軍事行動のみ。一切の建設事業は約十五年かからん。

(問) 北方軍閥に對して勝算ありや。

(答) 北方軍閥の青年將士中我等の主義に共鳴するもの多し、今日は此等の同志と連絡中なり、又馮玉祥は西北國民軍を率ゐて今西京に屯してゐる。本年夏は我々と呼應するの約有り。

(問) 勞資問題の將來は奈何。

(答) 勞働者地位の向上は我々の主義である。我々はこの問題の爲めに努力せん、ただ勞働者が國際關係を紊るときには放任することなく非常手段に訴えんのみ。

蔣介石の答へはどこまでも明快である。そして本年夏季に至れば北西の馮玉祥軍も猛然呼應して起つと明言した處や、國民革命の完成には今後十五年を要すると遠大な抱負を打明けた點など最も注目すべきものであらう。

二 米誌に寄せた抱負

續いて紹介したいのは蔣介石が一月卅日發行の San Francisco Examiner 紙に寄せてゐる一文である。これは彼が廣東革命軍の總帥としてその態度を外國の新聞紙上に表明した最初のものである。

私は勞農ロシアの子弟ではない。私はカール・マルクスについて何事も知らない。私は無學である。難かしい事には一切無智である。私はむしろ愚直な男だ。しかし私は支那民衆が何を要求してゐるかを知つてゐる。私は支那人の缺點と美點を知つてゐる。彼等の缺點も彼等の美點も悉く知りぬいてゐるから、彼等は私に從ふのである。現在において支那民衆の心を鼓舞激勵してゐる三つの主義がある——即ちナショナリズム、デモクラシー、及びソシアリズムである。(筆者言ふ、蔣介石はいはゆる三民主義を上記の言葉で說明してゐる)孫逸仙氏の教へは我々の政策の案內者である。孫逸仙は我々にナショナリズムの精神を教へ込んだ。支那人は實に數世紀に亘つて平和を愛好した人種である。然るに侵略的な西歐人は絕好の植民地としてのみ支那を眺めた。そして支那の各地に地盤を作り强大な武力によつて、或は支那軍閥に對する贈賄をもつて、巧みに彼等の竊盜行爲を續けたのである。支那は眞に目覺むべき時期に到達した。我々は支那國民を自覺せしむる爲に五つの方法を知つてゐる。

(一)支那にはびこる歐洲の力は支那人の生活を危ふする所以を知らしむること。

(二)支那各地に分散する勢力を打つて一丸とし完全なる民族的團結を行ふこと。

(三)支那人に存する傳統的特質たとへば仁愛、孝悌、溫情、至誠、眞實、正義、及び平和愛好などの美點を甦へらしむること。

(四)支那人を知識の吸收に熱心ならしめ、支那は如何にして支那自らを治むべきか、人間の生活に對して學術のもたらす幸福の如何に多きかを知らしむること。

(五)あらゆる支那民衆の胸奥に進步的精神を植付くること。

蔣介石の理想と抱負は以上の記述でやゝ明瞭になつた。

三　蔣介石の過去

彼は今から卅九年前、即ち明治二十一年の春、浙江省の奉化に近い寒村に生れた。彼の父親は彼の幼少の折に死去した。母親は彼を親戚なる寧波の商人に預けた。そこで彼の少年時代が過された。彼が浙江に生れ、寧波で幼時を送つたといふ事に私は無限の興趣を覺える。傳統と環境が人の性格に影響する事は偉大なものである。複雜な支那人の性格をごく大まかに分くれば三つになる。急進破壞的な廣東氣質、穩健、平和的な長江流域氣質、武斷的、官僚的な北支那氣質——そして蔣介石は平和的、常識的な長江氣質の環境に生れ、野心家の多い寧波に幼時を送り、更に廣東をその旗上の地としたのである。寧波の少年時代から、彼は早くも衆に勝れた才能をあらはしてゐた。明治卅九年、彼は新らしく保定府に出來た國民士官學校に入る四十名の浙江省選拔學生の一人となつた。それは淸朝の末期において後ればせながら西洋流の軍隊教育を授くる爲に初めて開かれた學校であつた。一年の後彼は日本留學を命ぜられた。あだかも日露戰爭の直後にあたり、多數の支那青年は日本に送られて、同文同種の日本、戰勝日本の軍事教育を受ける事となつたのであつた。我が振武學校に學んで後、彼は士官候補生として高田騎兵隊に入隊したが明治四十四年、支那革命の機運熟するとともに、彼は多數の留學生同樣に本國に呼び返された。革命政府は彼を上海旅團の指揮者に任命した。初めは熱心に軍隊教練をやつてゐたが、やがて幻滅の悲哀を感ずるやうになつた。そして約二年の間、舊式な支那軍閥の手先と同樣な生活を送つた。彼は飲酒に耽つた。麻雀を好んだ。花柳の巷に入りびたつた。數十日の間行方不明になる事も度々あつた。袁世凱は共和を標榜しながら一種の帝政を敷かんとする意途を示して來た。眞面目なる共和主義者達は袁の凄腕によつて次第に沒落の悲運に遭つた、この形勢に奮起した孫文は明治四十六年、第二革命の旗をあげたのであつた。蔣介石も孫の下に走つた。それ以來、彼の運命は『共和の父』なる孫逸仙によつて左右され、その參謀となり秘書となつて活躍した。しかし、最初の十年ほどは彼は無名の一士官として何等の注目も受けなかつた。强いて言へば彼が投機相場に手を出した話位である。彼はそれによつて一擧百萬長者となり、濡手で粟の百萬元を孫逸仙に提供したとも噂されてゐる。大正十一年孫逸仙の北閥に當つて、陳炯明は反旗を飜し、孫は廣東大本營から脫れて軍艦永豐に移り、約一ヶ月の間沙面前方の河中に頑張つたが、その間終始孫の許を離れず補佐したのが蔣介石であつた。大正十二年の春、彼は廣東軍の參謀長となり、孫は更に彼を廣東の黃埔軍官學校長に任命した。當時廣東政府の財政狀態は極端に窮乏してゐた。彼は孫逸仙の命を受けて大正十二年末、秘かにモスクワに使した。勞農政府は喜んで彼の意を迎へた。一年の後彼は廣東に歸つた。そしてボローヂンが廣東に派遣された、ボロヂンは廣東にとつて非常な恩人である。ロシアは其後ガラン將軍其他軍事上の專門家や、軍資、小銃、彈藥等を蔣の許に送つた。

黃埔における青年士官の養成とともに彼はガラン將軍の援助と僅少な金力をもつて廣東少年軍を養成した。彼は廿五歲以下の青少年を集

めて、支那の爲に死に、孫逸仙の爲に死に、蔣介石の爲に死ぬ事を辭はざる勇敢な愛國者を造りあげた。同時に彼は孫逸仙の遺志を繼いで『三民主義』の宣傳に力をそゝいだ。孫逸仙が晩年において異常な衆望を負ふたのは高らかに『不平等條約』の撤廢を叫んだからである。蔣介石も同じくその道に突進してゐる。

四　支那の常勝軍

蔣介石の名が初めて中外の注目を惹いたのは一昨年、陳烱明を破つた時からである。陳は廣東省の北方に長く勢威を張つてゐた男。蔣が北部の戰線にある時、廣東には叛亂が起つた。彼は折角占領した數個の市街を棄てて急ぎ廣東に歸り、彼の留守を好機として廣東を奪つた傭兵を一掃した。そして直ちに引返し、第二の大戰によつて陳烱明軍を大破した。惠州の戰ひである。唐の時代から千餘年、難攻不落の地と呼ばれた惠州を陷入れた。彼の率ゆる決死隊は、一團となつて雨の如き彈丸の中に突進する、幾百の死者を出すとも、目ざす敵地を占領せねば止まぬのである。

惠州における大勝の後、彼はひたすら黃埔軍官學校の士官養成に努めた。それが何よりの急務と考へるやうになつた。廣東には昔からの遺物である傭兵があつた。彼等は蔣の支持する國民黨政府に忠實であつた。しかしそれは國民黨政府が彼等に給料を拂ふといふ唯一の理由によるものであつた。彼はかうした傭兵の中に、黃埔出の靑年士官を送り、或は愛國主義の福音を說き、孫逸仙主義の宣傳に熱心な靑年思想家を送つた。元來支那の軍人といふものは征服さるれば直ちに寢返り、征服者の意のまゝに働くものであつた。しかし蔣はそうした烏合の衆の結合に頼らなかつた。彼の手に育てられた軍人は、捕虜となつた場合、敵將の爲に戰ふかはりに、敵を改宗させる事に努めるのである。敵地にあつても國民革命の思想を鼓吹するのである。彼の軍隊は如何なる敵をも恐れない。勝算なき場合でも勇敢に進んで行く。『クリスチアン・ゼネラル馮玉祥の國民軍に就てどんな考へを抱いてゐるか』或人が彼に質問した事がある。その時彼は次のやうに答へた。

『將軍を見て、その軍隊を云爲してはならない。軍隊そのものを直視せねば軍隊の內容は解るものではない。どんな將軍が軍隊を率ひるかを見るよりも、どんな種類の人間が軍隊を形造つてゐるかを見極めるのが先決問題である』

彼はかくの如く自己の軍隊について誇りを感じてゐる。軍隊の內容に自信を持つてゐる。彼は廣東から、鐵道もない、道路もない山路を過ぎて北方一千哩の長江一帶に進出した。支那軍閥の巨頭なりし吳佩孚の勢力を一掃した。急速なる彼の成功は支那の歷史をながめても比較すべき者のない程である。しかも、支那軍隊の統率者としての彼が、從來の武將、將軍と著しく異つてゐる點は、彼の力量によつてかくの如き成功を見たといふ解釋を一切受入れぬ處にある。彼は彼の締を[illegible]く團體を代表する。個人の手腕、奇略等は一切口にせず、强固なる團體の偉力を說き、團體を構成する人間の力に信賴する點にある。

五　或日の蔣介石

萬事に形式ばらぬ處、話の早わかりする處がまた蔣介石及び廣東政

府の人々の强味である。それは彼等の若さにもよる蔣介石が當年卅九歳といふのは例外的に年長の方で、南軍總司令部政治部主任の鄧演達が卅一二歳、政務局長陳公博も同年輩、課長級になると何れも廿代の青年ばかりである。滿洲王張作霖などは王者の如き態度で訪客を迎へる。吳佩孚も物々しく從者を從へてゐる。孫傳芳などでも、最近まで訪客あれば、仰々しく喇叭を吹奏するといふ有様であつた。蔣介石の場合はこれ等とまるで變つてゐる。試みに近着のニューヨーク・タイムスに現はれたレウイ・スエス・ガーネット氏の蔣介石訪問記を譯出して見やう。

……私は廣東の近代的な小さい三階建の入口で名刺を差出した。ボーイはそれをしげ〴〵と眺めた。そして靜かに上の方を指さした。私は三階に昇つた。そこにはいかにも快活さうな一青年がゐた。青年は士官の制服を着けてゐた。しかし階級を知らする肩章などは一つも見えなかつた。

「蔣介石氏はどこにゐるんです？」

簡單な英語で私は聞いた。

「はい、蔣介石です」

と青年は答へた。

「どこに、どこに蔣介石氏はゐるんですか？」

私は迷ひながら重ねて問ふた。青年は寢室を指さした。私はその部屋に入つて腰を下した。しばらくして秘書の陳氏が現はれ、この快活な青年士官こそ蔣介石その人なる事を說明して吳れた。飾りもないこの部屋が蔣介石の寢室であり、同時に彼の事務室であつた。お定りのお茶が運ばれた。それから固い干菓子、古さうな餅菓子などが運ばれた。蔣氏は何も食べなかつた。そしてお茶の代りに熱い白湯をすゝつてゐた。長い會見の間、彼は正坐してゐた。キチンと組んだ手をテーブルに乘せてゐた。彼は大言壯語をやらなかつた。少しの身振りも交へなかつた。しかし穩かな中にも冐す可らざる威嚴があつた。支那人としては稀なる品位の持主、否世界の如何なる人にも劣らぬと思ふ程の品位を備へてゐた。靜かに、微笑をもらしながら彼は語つた。きやしやな、すらりとした彼の姿、四十に足らぬ彼の顏を見つめて、これが大衆を率ゐて支那統一を志す人間とはどうしても思へなかつた。尖つた頭、廣い額、デリケートな五體、小さい骨ばつた手などを見ればどうしても學者のタイプであつた。

「ロシアが實際支那でやつてゐる仕事はどんなものか？」

私の問に對して彼は次のやうに答へた。

「私達は彼等の數名を傭つて專門的の訓練に援助して貰つてゐる。如何なる國の人も、支那に同情し、支那を救はんと欲するならば喜んで迎へる積りである。ロシアの態度は支那に對して諸外國よりも友誼的であり、鄭重である。彼は第一に侵略主義を棄てた。領土的野心を棄てた。そして不平等條約を廢棄した。我々は廣東にあるロシア人を愛してゐる。」

「貴下は支那の將來についてどんな考へを持つてゐるか、國民革命運動の將來は如何なるものであらうか」

「私達は支那各省をも國民黨に入れる爲に努力する。そして支那

全土を統一する豫定である」

「それは非常な大問題だ」

「然り、しかし私達は必ずそれを爲し遂げる。我々は既に着々それを實現しつゝある、……全國の愛國主義者は私達の運動に注目し、私達を待つてゐる。……私達は敢て戰爭のみを好むものではない。ただ、組織ある國としたいのである。私達は北方に進出する。揚子江一帶には國民黨の支持者、信奉者が多く、私達の進出を待ち兼ねてゐるのだ」

これは當時にあつて一場の夢に過ぎないと私は思つてゐた。しかし彼の現狀を見れば短時間の間に彼は私に語つた以上の飛躍を試みてゐる。しかし彼の飛躍はほとんど停止するところを知らないといふ觀がある。

「豫定の行動が成就したら貴下は何を初める積りか」

「私達は第一に不平等條約を廢棄する。そして支那を自由の體にしなければならない。それは必しも困難な事業ではない。一、二年の後か、遲くも三年の後においては私は必ずやり遂げる覺悟だ」

「貴下のいはゆる不平等條約と稱するものは何を意味するか。貴下は上海の行政權を奪回し、香港を英國に還付させる積りであるか」

「そんな事は政治的の問題である。そんな事は先づ支那が統一されてから論議さるべきものであらう。支那の統一が何よりの急務である。第一の事業である。治外法權、關稅自治等の問題は我々が香港の還付を迫る前に當然踏まねばならぬ道程であらう。」

それから彼は私に向つて反問した。

「アメリカの支那及び日本に對する態度はどんなものか。アメリカの政治家は支那に對してなか／＼親切げな口吻をもらす。しかしながら結局は英國や日本と同じ步調をとるのではないか。私はむしろアメリカが英、日に反對な態度を取らん事を望むものである。」

支那人は如何にも宣傳が巧みである。しかし、蔣介石が前記のやうに米誌に寄書し、或は小室氏に語り、米國記者に答へた言葉をもつて單なる巧妙な宣傳と輕視してはならぬ。多少の相違はあつても、彼の言葉――軍事上の豫言も、思想宣傳の方策も次第に實現されつつある。ただ彼等の集團が強大になればなるほど、彼の運命に萌した暗影の度が濃厚になるやうに私には感ぜられる。それは彼の率ゆる軍隊が、張作霖の勢力と接近する爲ではない。日、英、米等の列强が廣東軍の膨張に對して廻らしてゐる虚々實々の策戰の爲ではない。

六　トロツキーかケマルパシヤか

蔣介石が孫逸仙の學徒であり、支那の愛國者としての誠意と熱意とを有してゐる事は疑ふべくもないが、彼はいはゆる「支那統一」の大業に當つて何としても思想傾向を異にする多數の人々と共力して働かねばならぬ。廣東においては國民運動の初期において共同策戰の必要上國民黨と共產黨の結合が行はれた。現在の北伐軍は共產黨と國民黨

の寄合世帶である。しかし共產黨の領袖陳獨秀一派と、三民主義の信徒なる蔣介石等との間には越ゆ可らざる思想の隔がある。昨年三月、彼は廣東において非常手段をもつて共產黨彈壓を行つた。その當時彼は次のやうに語つてゐる。

『國民革命は久しからずして成功するであらうが、共產革命は廿年乃至百年後にも成功すまい。今日の支那に必要なるは國民革命であつて、この目的を達する爲には強力にして統一ある一個の黨があれば足りる。我國民黨は實にこの指導者であつたが、孫中山の逝去とともに我黨はその中心點を失つた。元來革命には一黨あれば足り、主義もまた一個あれば足る。然るに支那には今日兩黨がある。この兩黨は事實上合して一となる事は出來ない。共產黨は工農兩界を代表し、國民黨は各階級を代表してゐる。故に前者は後者に入黨は出來るが、後者は前者に入黨は出來ない。しかしながら兩黨が衝突すれば、革命は必ず失敗するであらう。これ敵に乘ぜられて革命戰線に破綻を生ずべき恐れがあるからである……』

かくの如く彼は、大なる事業を完成する爲には共產黨とともに共同戰線に立たねばならぬ所以を力說してゐるが、兩黨の間に存する反目は、事毎に暴露して著しく將來の不安を感ぜしめてゐる。現在においては帝國主義打破、軍閥倒壞といふ焦眉の急に迫られてゐる爲、內部の軋轢をさまで外間に示さぬやうであるが、彼等の豫定行動が一段落を遂げた頃には意外なる破綻が生ずるものではあるまいかと想像される。彼の武功があがればあがる程、彼の勢力が增せば增す程、文人派即ち共產黨側は彼に對して猜視、憎惡の眼を向けるのである。

も一つの暗影は從來の軍閥の仲間にも見えた競爭者の勢力爭ひである。革命軍の各軍は各々成立の歷史を有し、革命軍中の一軍となつてゐても、その各將師の抱く感情と、利害の打算とは彼等の間をいつまでも完全無缺なる一塊の革命軍として維持して行くものとは思はれない。現在、廣東にあつて留守軍事部長たる李濟琛は蔣介石の職務を代行してゐるが、彼は元來保定軍官學校派を代表する者であつて、蔣及びその直系たる黃埔系の軍官に對して一種の競爭者的立場にある者である蔣の武威は延びて今や、堂々たる軍閥としての形體を備ふるに至つた。しかし、勢威を張れば張るほどかうした仲間同志の勢力爭ひが露出するといふ結果になるものではあるまいか。更に、武漢の攻略に當つては唐智生の如き、むしろ廣東側にとつて異分子とも云ふべき武將をも巧みに味方に引入れるといふ不自然な行爲を行つてゐるかうした外樣大名的人物の存在が他日彼の運命に大なる影響を與へる事になるかも相れない。彼の自ら率ひる革命軍青年將校の寫眞を見れば、元氣な顏面に愛國の熱情が見え、白虎隊の面影をしのぶが如き壯烈な感さへも抱かしむる。その賴もしき手兵をもつて彼は今日の成果を得たものであるが、氣遣はるものは彼の將來である。彼は口を開く每に自らを語らず、その黨を談じてゐるが、實際においては黨人といふよりもムッソリーニの如き獨裁官たる行動をとつてゐる。支那においては革命以來、數々の强大な人物が現はれ、且つ沒落してゐる。蔣介石は旣に行く處まで行つたのであらうか、或は彼の事業は今後に殘つてゐるのであらうか。彼は氣短かな性質の持主である。しかしながら自分が統率者であるといふ事を自覺してゐる。たへずいらだつ神經をその爲

に押し鎭めあらゆるものを抱擁せんと努めてはゐるが、彼に對する共産派の不平は次第に高まる傾向である。トルコのケマルパシヤは政權を握つた後に共産黨を小氣味よく誅つたが、蔣介石もさうした藝當を演ずるであらうか。彼が彈壓策をとらんとするには共産派の勢力が餘りに根强いやうである。勞農政府の方向轉換に當つて、武將トロツキーは勢力を失墜し、放逐さるといふ結果になつた。支那革命の勢力增大とともに由來武よりも文を重んずる支那にあつては廣東政府內部にも共産派の勢力が根强く延びつゝある。共産派全盛の時代となつて、彼はトロツキーの如く遂には逐はるるのであらうか。彼は若くして賢明であり、彼の身邊には謀將ボローヂンがひかへてゐる。トロツキーの如き悲運や、ケマルパシヤの如き彈壓策を彼にとらする事はあるまいとも思はれるが、勢のおもむく處、どんな結果を起すかも解らない。私は革命軍の對外關係や、北方軍閥との係爭などよりも、かうした內部的變化に甚大の注意を拂はねばならぬと思つてゐる。今後數ヶ月以內に彼の運命に激變の生ずる事はほゞ豫想される。たゞ彼が如何に切り拔け得るかゞ問題である。

門中瑣事

——をとめ子の守りしくりやは、蟋蟀鳴き　冬來凍みつき、秋冬を經ぬ

釋迢空

道なきに似たるこの世も、相なごみ　おのづからにし、道はとほれり

八年まで叱りきためて、かひなさよ。このたはれ男は　うつらざりけり

寢し夜らの　胸觸(ムナフ)る時の、身に染(ソ)みて忘れぬものを　あはれと思へ

をみな子は　すべなきものか。病みて子を瘞み、憑(タノ)みし人は　家に來らず

小路(コウヂ)多き麻布狸穴(マミアナ)　年くれて　明日(アス)の春衣(ハルギ)を着たる子も居り

諒闇に　歳窮(キハマ)れり。世の人のうへも　靜かに我は惟(オモ)はむ

信託の話

吳　文　炳

一、信託の觀念と信託會社

子孫の維持と財産の所有とは人類本來の欲求である。人が其の子孫の繁榮を希ふ時、先づ逢着する問題は如何にせば其の遺産を以て子孫の生命に安定を計り得るかと謂うことである。個人の生命には限りがあるが、子孫の生命には限りがない。此の矛盾を調和して子孫保護の目的を達する爲めに全財産を擧げて自己の信頼するものに移して後事を託する之が信託である。信託會社とは卽ち此の信託の引受を營業の目的とするものである。信託の關係者は法律上の言葉を以て謂うと、信託をするものを委託者、依賴を受ける信託會社を受託者、信託された財産より生ずる收益の受取人を收益の受益者、契約期間滿了の際、元本の返還を受けるものを元本の受益者と謂うのである

信託會社を別の言葉で說明すると、金錢其他の財産の預託を受け委託者の意圖に從つて之が管理、運用を爲す處の金融機關であると謂うことが出來る。

卽ち信託會社は財産の受託機關としての一面と資金の需要者に對する授信機關としての一面とを備へてゐるもので銀行、及保險會社と相並ん金融機關の一種を成すものであると謂へる。

第一に信託會社の受入れる財産は金錢、有價證券、金錢債權、動産、不動産等の一般財産である。而して此の受入れる財産の範圍の廣いことは信託會社の特質の一つであつて、彼の銀行又は保險會社が金錢の受入のみに限られてゐるのに比べて確かに異彩を放つてゐる。次に信託會社が此等の財産に付て爲す受入の性質であるが、之が又銀行、保險會社と異なつたもので所謂、信託なのである。

銀行に於ては預金者から金錢を受入れ又、保險會社に於ても保險料金を契約者から受入れるけれども、孰れの場合に於ても金錢の所有權は銀行又は保險會社に移り、隨つて之が管理運用は一に此等のものゝ自由に屬するのである。唯、預金者又は保險金の受取人に對して夫れ〻利息の支拂及元金の拂戾債務又は契約保險金の支拂債務を負ふに過ぎないのである。

然るに信託の方は一定の目的に從つて管理運用させる爲めに爲す財産權の移轉又は處分である。隨つて金錢の所有權其他の財産權は信託に依つて受託者たる信託會者に移ること銀行又は保險會社の場合と異らないのであるが、此の財産權の處分は財産の管理又は處分を爲さしむる究極の目的を達するための一手段に過ぎないのである。而して其の所謂、一定の目的は委託者に於て自由に定めることが出來るので、信託會社は委託者の命令に從つて管理處分しなければならないのである。

斯樣に等しく金融機關であつても銀行、保險會社は他人の金錢を受入れて自己の爲めに

運用利殖する、所謂自主營業である。隨つて運用收益は始め契約に從つた預金利子、又は保險金として支拂ふ外、一切自己のものとする、所謂利得主義であるのに對し、信託會社の方は他人の金錢又は有價證券等を受入れて之を他人の爲めに運用、利殖する所謂、他主營業であり、自己は報酬として單に一定の額の手數料を取るに過ぎないので、運用收益は一切委託者受益者に與へると謂ふ手數料主義に據つてゐる。此の自己の爲めに非ざる委託者のための財產受託機關たる性質は信託會社特有のもので、信託業は單純なる營利的性質に加ふる公益的性質を持つてゐると謂はれる所以である。

其處で信託會社は此等の受入れた金錢其他と自己の有する固有資金とを以て貸付又は投資の形式の下に需要者に對する資金の供給者として金融經濟上重要なる職能を有するのである。信託會社の經濟上の性質中一番重要なのは此の金融機關としての特質であり、彼の受託機關としての特質を消極的特質と謂ひ得べくんば、此れは積極的特質と謂ふことを得るもので、銀行、保險會社と鼎立して金融經濟界を三分するものである。

以上で大體、信託會社の性質は明かになつたのであるが、尚、一應繰返して謂ふと信託會社と謂ふのは社會に分散してゐる處の零細的資金を蒐集して之を長期事業資金として供給する金融機關の一種であると謂ふことが出來る。

信託法に依ると信託會社は資本金百萬圓以上の株式會社でなければならぬことゝなつてゐる。而も免許營業である上に供託義務や特別の法定準備金と謂ふやうな重い負担を課せられてゐる。信託會社を株式會社組織に定めた理由の一つは實に資本金の巨額な事を欲したからであつて、社會の信用を厚くし委託者をして安心して自己の財產の委託を爲さしめ圓滿に營業を續けさせ度い爲めである。免許營業である事も矢張り社會の安寧を維持し矢鱈に會社を設立することの出來ないやうに取締る點から、豫め設立される會社の內容や營業の性質、種類、方法等に付て了解を求めさせ免許を受けることゝしたのである。それから、信託會社は政府に對して一定の供託金を納めなければならない。此は信託義務に背いたゝめに受益者に損害を被らすやうなことのある場合のために設けられたものであつて、少くとも會社の資本金の一割だけは政府に積立てなければならない。供託すべきものとしては値段の變動を防ぐ爲め國債に限られてゐる。而して之に依て受益者は萬一の場合には先づ最初に此の供託金から辨濟を受けることが出來るのである。積立金に就ても普通は資本金の四分の一に達する迄は會社利益金の二十分の一以上を積立つべきものと定められてゐるのであるが、信託會社には特に資本總額に達する迄、利益の十分の一以上を積立つべきものとしてゐる。此は積立金が資本金と相並んで受益者及他の一般會社債權者に對する公稱担保である點から觀て出來得る限り信託會社の內容を健實にして受益者に損失を被らせないやう間接に信託財產を保障してゐる所以である。

二、業務の內容

さてそれなら信託會社の取扱ふ業務は如何なるものであるかと謂ふに先づ主要業務とし

て信託の引受があり附隨業務として諸種の代理業務がある。更に特殊のものとして擔保附社債信託業務がある。以下其の各に付て説明を加へてみると第一に一般財産に關する信託の引受が信託會社の業務の中心を成すことは固より當然のことであるが、今其の引受くる財産の種類は(一)金錢(二)有價證券(三)金錢債權(四)動産(五)不動産(六)地上權及土地の貸借權の六種に限られてゐる。

(1)、金錢の信託

金錢の信託とは委託者が自己又は他人の爲めに資金を信託會社に信託して自分の欲する處に從つて之を管理運用させるもので例へば遊金を安全な投資に振り向けるとか或は現金を子女の教育又は結婚の基金にする目的で利殖させるとか又は公益事業に寄附するために資金を信託して管理させるとか謂ふが如き之れである。而して此の金錢の信託のうちには(イ)金錢信託といふのと(ロ)金錢信託以外の金錢の信託と謂ふのとある。其の區別は前者は信託會社が受入れる時も拂戻す時も等しく金錢を以てするものであつて銀行預金と稍似た點がある。

後者は受入れる時は金錢を以てするが拂戻す時は金錢とか債權とか不動産とか其他拂戻當時に於ける現狀財産を以てするものである。

故に必ずしも金錢で返すことゝはならないものである。金錢信託の方は資金の運用方法に依て、更に之れを指定金錢信託、特定金錢信託、それから特定指定なき金錢信託の三種に區別することが出來る。

指定金錢信託と謂ふのは資金の運用方法が委託者の意思で或る範圍まで指定されるもので例へば資金を貸付金に運用するとか、有價證券に投資せよとか謂ふやうなのがそれであり、此の中運用方法を貸付及預金に限定したものを特に貸付信託と呼んでゐる。銀行の定期預金に類似してゐる處から屢々銀行との間に問題を惹起した所謂信託預金なるものは之れである。此種の信託は委託した元金に萬一損失を來たしても信託會社が責任を以て必らず補塡すると謂ふ附帶契約を許され同時に豫定收益の得られなかつた時にも會社をして豫定利益の補足をさせる契約をすることが出來るので其の最高歩合は年五分四厘とされてゐる。

然し實際は今日信託會社から委託者に渡す收益率は信託手數料を差引いて年七分見當で各社が行つてゐる。指定金錢信託に限らず金錢信託は皆一口の受入額は五百圓以上となつて居り特に指定金錢信託の場合には二ヶ年以上と謂ふ期限の制限が附加されてゐる。

特定金錢信託と謂ふのは資金の運用方法が委託者の意思に依て或る特殊の方法に限られたもの、例へば資金何千圓を某不動産を擔保として某氏に貸付け利息年何歩、辨濟期日何年何月何日と謂ふやうなもの、或は又資金を以て甲會社社債何千圓を何圓替で買入れよといふ風に總ての運用條件方法が具體的に定まつたものを謂ふのである。之を應用すると自分の關係してゐる會社とか友人とかに對し直接の貸付、投資を避けたいとか蔭で助力したいとか謂ふ場合には極めて便利でまづ理想的の代理貸付の方法であると謂へよう。目的も充分に達せられ回收も確實である。而も金額は五百圓以上なら幾程でもよく期限の制限もない。

特定、指定なき金錢信託と謂ふのは運用方法に何等の定めのないもの即ち委託者が資金運用を一切信託會社に任せるのをいふのであつて、之は信託會社が餘程愼重な態度を執らないと資金を滅茶苦茶にする恐れがあるから之に對しては絕對に安全な法定の投資物が設けられて居り、其の以外の運用に依ることを禁ぜられてゐる。大正十一年勅令第五百十九號第五條と謂ふのがそれであるが資金の範圍が著しく制限されて居り資金の確保といふ點からは理想的であるが利殖といふ目的からは遜色がかつてゐるやうに思はれる。

(2)、有價證券の信託

有價證券の信託と謂ふのは公債、社債、株式等の證券を信託して之が保管と利息、配當金、償還金の受取り、未拂金の拂込等に當らせ證券所有に伴ふ煩はしさを免れるに好適の方法である。

而して此れには(1)表示有價證券の信託と(2)運用有價證券の信託と二種がある。前者は證券面に信託財産であることの表示を爲すのである。此の手續を濟ますと爾後、證券は信託財産として絕對不可侵の性質を帶ぶるのであり讓渡されたり、差押へられたりすることが全くなくなる。家族の世襲財産に對して一般人の世襲財産が出來る譯で家産維持の方法として此れ以上の良法はないと信ずる。後者は先に述べたやうな表示をせず信託會社が品貸或は之を擔保にして得た資金を運用し斯くて得たる品貸料又は利鞘を運用益として特別に配當するのであつて是亦證券の活用方法として興味あるものたるを失はない。今日の實際に於ては信託會社が受くる運用有價證券の種類は大抵國債に限つてゐる。之は社債や株式迄を引受けると運用上困難であるのと一方に株式などは市價の浮動的であるためである。又、信託會社の引受けた國債は供託法に依て供託金代用若くは政府に對する保證として使用され酒造税、各種消費税を始め官廳工事請負、相續税等の延納の擔保、物品納入の擔保、身元證金として代用されてゐる。

(3)、金錢債權の信託

金錢債權の信託といふのは既に成立してゐる金錢債權を其の儘信託するのであつて例へば貸付金、賣掛代金、生命保險などの債權を完全に保全し適當に取立てさせるやうなのが之である。個人間の貸借は却々埒のあかないものであるが信託會社が相手方となると矢張り債務者の方も眞摯となり、又債權者も自分の名を出して厭な思ひをしたり、不完全な素人考へが因で債權の回收に手を燒くやうなことがなくなる。殊に生命保險金の如きは遺族の保護と生活の保證とを目的として保險契約者が汲々として保險料を掛け込むのにも拘らず、實際に其の目的を遂してゐるかといふと誠に疑はしい。之は一時的に多額の金錢を受取る遺族の多くが世間慣れない若年のものとか利殖には無經驗な婦人であるために、その管理運用について見當が付かず或は氣が弛んで一時に費消したり又は不正金融業者に欺かれたりして遂に元も子もなくしてしまひ、可惜故人の意思を水泡にするのが多い。此れなどは契約者が保險を附けると同時に家族を受益者として之を信託會社に信託し萬一の場合には受取つて保險金を何處迄も遺族の爲めに保管、利殖させるやうにすべきであらう。此の生命保險信託は米國でも比較的新規のもので

あるが日本でも最近此種の信託の引受がぼつぼつあると謂ふことである。將來必ず盛んになるものゝ一つであらう。

(4)、動產の信託

動產の信託の目的物たる動產は米、麥、雜穀、綿絲、綿布、生絲等取引所に於て大量取引を爲さるゝものに限られて居り、大藏省は動產の信託を引受ける信託會社には金錢の信託の引受を認めないと謂つてゐる。此は此等の重要商品に關する特殊の金融と關聯して特別の性質を具へた信託會社たる事を要する點から觀て、尤もな制限であると思ふ。現在では未だ此種の信託會社は起らないやうである。

(5)、不動產の信託

不動產の信託と謂ふのは法律上の用語で謂へば土地及其の定著物の信託と謂ふことであり此は信託と同時に不動產登記簿上に信託の登記が爲され、隨つて前揭表示有價證券の信託の場合と同じく絕對不可侵の財產となるものである。而して其の目的は地代、家賃等の不動產收入の取立て、租稅、公課の納付、土地の利用、家屋の修繕、不動產權利の保全其他不動產に關するあらゆる事務の取扱を爲すものである。從來の差配人等に有り勝ちな弊害を除き得る良法である。借地、借家兩法以下社會政策的立法の漸く頻繁ならんとする今日地主は餘程心して自己の不動產の管理に當る必要がある。又、借地人、借家人、としても地主、家主又は差配人等との直接交涉に代るに信用の大たる信託會社と公明正大な交涉を保つ方が遙かに合理的な解決を得ることが出來やう。

(6)、借地權の信託

借地權の信託は即ち地上權又は土地の賃借權の信託を謂ふので例へば他人の土地の上に地上權を得又は賃貸借契約に依て土地を借受けた者が此等の權利を信託會社に信託し、之に適當な家屋を建てさせ、之を賃貸して利殖させるやうなのが之である。素人が不手際な遣り方で失敗するのに比べて遙かに巧妙に利殖の目的を達し得るものである。

以上は信託會社本來の業務であるが更に此の信託業務の性質に撞着しない範圍に於て種種の業務が併せ認められてゐる。(一)保護預り(二)保證業務、(三)不動產及金錢の賣買及貸借の仲介、(四)公債、社債、株式の募集、拂込金の受入、元利金配當金の支拂業務、(五)一般財產の所得、管理、處分、貸借、財現の整理、淸算、債權の取立、債務の履行等に關する代理業務が之である。更に我國に於ける信託業務の嚆矢として相當古い歷史を持つてゐる擔保附社債信託業務も營むことが出來ることになつてゐる。此等の業務は特に說明を要せぬことゝ思ふけれども要するに信託に依る名義の移轉を必要としない程度のものに對する便法であつて事業の發達、會社の增加に伴れて其の效用を發揮すべきは疑を容れない處である。

三、信託財產は如何にして保護されるか

茲に信託財產と謂ふのは信託の目的を以て委託者から受託者の名義に移された財產例へば委託者甲が利殖の爲めに金五千圓を某信託會社に託する金錢信託とか又は妻子其他の者を受益者として託する處の不動產信託の如き

それである。又信託財産の管理、處分、滅失、毀損其他の事由に依つて受託者の得た財産は之れも信託財産と謂ふことが出來る。而して信託契約が終了すると此等の財産は其の契約の定めた處に從つて各其の歸すべき人に返還されるのである。右の例に於て金錢は委託者甲に又不動產は妻子其他の受益者に行くといふやうな譯である。處で元來信託は或る目的の許に財産を他人名義に移して其の管理處分に當らせるものであるから此の目的を妨げるやうな事件が起つても何の影響をも受けないやうにして置かなければ折角の制度の趣旨が立たなくなる譯である。此點に鑑み先づ信託法は信託に附せられた財産を特に信託財産といふ特別財産として取扱ひ更に信託業法は受託者たる信託會社に對して種々の監督規定を設けてゐる。換言すれば信託財産は信託法に依て直接の保護を受くると同時に信託業法に依て間接の保護を受けてゐるのである。隨つて信託會社に信託された財産は個人受託者のそれに比して保護の點に於て間然する處がないと謂ひ得る。先づ目につくのは財産は一旦信託すると其後は特別な二つの場合を除いては絶對に他から侵されることのない特別財産となることであつて之を信託財産の不可侵性と呼んでゐる。即ち信託財産は委託者、受託者、受益者等の信託關係者の債權者などの爲めに差押へを受くることが絶對になくなるのである。若し假りに此等の處分があつたとしても立派に之を覆へすことの出來る異議の訴の途が開らかれてゐる。然し乍ら前にも述べた通り二つの例外がある。其の一つは此等の強制執行や競賣處分が財産を信託する以前に既に存在してゐた權利に基いて爲された場合であつて例へば委託者に五千圓の借金があつた其後に或る信託會社に一萬圓の金錢を信託した。處が貸主が期日になつて貸金の返還を請求して來たが返金しない。而も差押へる財産もない。唯一萬圓の金錢信託があるだけであつた。そこで裁判所を通じて一萬圓の中五千圓だけを貸主に引渡せと謂ふ轉付命令が出た。此の場合、會社としては此の命令に從つて五千圓を貸主に拂はなければならないのである。而して此の信託が委託者の妻子、家族のためのものである場合には家族其の人達には誠に氣の氣な事であるが一方貸主の方から見れば此等の家族の爲めに信託する以前に既に金を借りてゐるのであるから此の貸金の取立を認めないとすると一層氣の毒な譯である。要するに後から生じた權利は前に生じた權利に讓るべきものであると謂ふ法律上の原則に從つた結果であつて當然なことである。他の一つの例外といふのは信託事務の處理に依て生じた權利に基いて強制執行や競賣處分があつた場合である。信託事務の處理とは信託財産の管理の實行に外ならないので例へば家屋を信託した場合に於て其修繕をした爲めに大工や左官に賃銀を支拂はなければならぬといふやうな時に其の支拂を怠つた爲めに大工や左官が賃銀債權に基いて執行を爲し處分をするといふ場合である。之は兎に角修繕其他の行爲の結果信託財産たる家屋が維持されるのであり、改良されるのであるから之に依て生じた權利を保護する爲めに此の例外を認めたのであつて此亦當然のことゝ謂ふべきである。以上二つの場合を除いては例令、委託者、受託者、受益者等に如何程借金があつても其の爲めに信託財産が他人から侵される惧れは絶對にないので此れは可なり廣範圍に亙

る而も强力な保護と謂ひ得る。

次には受託者が信託された金錢を銀行預金にしてゐて而も受託者自身が銀行から借金してゐる場合に於て預金は受託者の名義で預けられてゐるのであるから普通ならば銀行の借金と差引かれて終ふのであるが、それでは委託者や受益者は受託者といふ他人の借金の爲めに自分の預金を差引かれる事となり不合理な結果に陷り、隨つて信託の趣旨にも反することゝなるので斯くの如き相殺は出來ないことゝなつてゐる。又、受託者は原則として誰れの名義を以てしても信託財產を自分のものにすることは出來ない。それ故信託された土地、家屋を買入れるとか、又は信託された證劵を質に取るとかいふことは例令他人の名義を使つても出來ないのである。此れは受託者が信託財產を安く買入れるやうな不正なことを防ぐ爲めの保護方法である。其の他受託者が信託の本旨に背いて信託財產を處分した場合例へば管理の爲めに信託された土地、家屋、證劵等を賣り飛ばして終つたやうな場合に於ては受益者は登記簿其他の方法に依て其の財產か信託財產であるといふことを證明して之を取戾すことが出來る。更に又受託者の管理の方法宜しきを得ない爲めとか又は前に述べた如き不當な處分をした爲めに受益者が信託財產を取戾すことが出來なくなつた場合には受託者に對して損害を償はせることが出來る。殊に受託者が法人である場合、即ち信託會社である場合には受益者に損害を加へた取締役、支配人の如きは會社と連帶して損害賠償の責任を負ふのであり會社財產を以て償はれない場合には各自その足らない部分を償はなければならないのである。斯くの如く信託法と信託業法とに依て信託財產上に直接、間接特別の保護を加へられてゐる信託制度は實に財產に關する唯一の安全地帶と謂ふことが出來るのである。



怪奇小説

未亡人の妖術

阿部徳藏

一

とり急ぎ用件のみ申上げます。私かねぐ\分身術の研究をいたして居りましたところ、此程やうやく完成をいたしました。お聞き及びかとも存じますが、この分身術は、自由に人の靈體を遊離させて、その人と同じ姿を、離れた場所に現はす術で御座います。

私同時に五ヶ所へ分身させることが出來るやうになりました。言葉をかへて申しますと、私を合せて私とまつたく同じ人間が六人、同時にそれぐ\六ヶ所の空間を占めるので御座います。

是非一度みな樣に觀て頂いて、それから世の中へ發表したいと存じて居ります。

就きましては四月一日の例會で、その實驗をいたしますから、當日は午後五時までに、是非々々私どもまでお越し下さいますやう、お待ちして居ります。

もしお差支がお有りになりましたならば、とは私申上げません。これ程おどろおどろしい實驗——恐らく現代の科學を根底から覆へすと信じて居ります——をお差置き遊ばすほどの御用件は、よもお有りにはなるまいと存じますから。

昭和二年三月二十八日

松下澄子

前原敏郎樣
御許に

×　×　×　×　×

澄子が松下家へ嫁いだのは、十九の春だから丁度十一年前である。結婚後まもなく夫が××會社のロンドン支店長に轉じたので、共に渡英して同地の××大學にはいり、心靈學を專攻した。すでにその時分から、澄子の異常な學才と明晰な頭腦とは當時の學者を驚かせたが、とりわけ、靈媒能力に關する澄子の卒業論文は、心靈學上に一時代を劃するものとして、學界の驚異となつた。

かくて在英六年の後、夫が會社の大株主であるところから、取締役となつたので、共に歸朝した。その翌々年、はからず夫君に先立たれた澄子は本郷の宏壯な邸宅に一未亡人として、令息の秀雄君を養育するかたはら、好きな心靈現象に一切を忘れてゐた。すくなくとも一切を忘れやうとしてゐたのである。

時々心靈問題に關する新學說を發表したり、あるひは透視術、交靈術などの實驗を公開したりして世間を驚かせてゐた。

冒頭に掲げた一文は、澄子夫人が五人の男の許へ速達便で送つた手紙である。

五人の男――ちよつとその人となりを述べて置く必要があらう。

理學士、前原敏郎、眞理の穿鑿には何事も猶豫しないが、しかし一面には非常に淚もろい、そして情に厚い人。

長谷川三之助、××會社專務取締役社長、でつぷりとして俗にいふ重役聲を出す人、年中シガーを銜へてゐる爲咽喉をあらしたのがもとで、それが地聲になつたのだといふ。堂々たる紳士。

笹山翠峰、現代に時めく日本畫家、趣味性に富んだ萬事たしなみ深い紳士。

森田靑雲、木彫家、三十年前の書生氣質をいまだに存續し、隨つて、衣は肝にいたり袖は腕にいたつて居る。醉ふと吟聲に劍舞術、「十八交りを結ぶ健兒の社、北客よく來らば何をもつてかむくいん」などの勇壯活潑のあたりになると、滿身にちからが漲るので、氣の弱い見物は縮んで仕舞ふ。「森田さんが破裂しやしないかと思つて、あたくし心配するわ」と夫人にはら〱氣を揉ませておいて「いや御覽の通りの書生流で」とあつさりやつてゐるところは、野狐禪の穿違へばかりでも無いらしい。

西村紫夫、帝大工學部の學生で、夫人の甥。あらゆる運動に堪能ですこぶる快活な靑年。西村靑年を除く外は、ことごとく亡夫の親友で、夫君の沒後も生前同樣に親しく出入して、何かと相談もうけ、力添へもして居るのであつた。とにかく未亡人といふものはたよりないのだから、誰しも其人に對して衷心からの同情と親切とを惜まないであらう。まして澄子のやうな學識才能ともに一世にぬきんでた美人を、どうして珍重せずに居られやう。

毎月朔日一回、時によると二回、この松下邸で趣味漫談の會が開かれる。去年の七月思ひついて始めたので、その期節を紀念するため、そのまゝ麥秋會と名がつけてある。正會員としては以上の人達だけだが、しば〱飛入りも這入るので、かなり賑になる。

この會が中心となつて、この人達と夫人との間は、日に月にうちとけて行くやうに見えた。分身術の實驗も、この麥秋會の例會でまづ發表することになつたのである。

實驗をするからいらつしやい。何んといふ凄じい招待狀であらう。會員いづれも吃驚したが、とりわけ驚いたのは前原理學士である。科學者として、眞理の探究者として、人一倍驚いたも無理はない。もし分身術が、夫人のいふ通りに出來るとしたら、それこそ夫人のいふ迄もなく、現代の科學は根底から覆つてしまふ。宗教も哲學も、開化も文明も、一切がこれ改められねばならん。到底出來ない相談と思はれるが、しかし相手が心靈學の權威で、殊に實驗をするからいらつし

やい、とまでいつて來たことを考へると、まさかと思つてゐても、又さうでもないのかしらんといふ弱腰にもなつて來る。

とにかく四月一日になればわかる。二十九、三十、三十一、朔日と、前原理學士は子供のやうに指を折つて、その日の來るのを待ち佗びて居た。

二

食事が濟むと一同は夫人の書齋へ這入つて行つた。壁に入れ込んだ書棚には、心靈問題に關する洋書がぎつしり、詰まつてゐた。

席につくと前原理學士は待ちかねた樣に、

『奥さん、早速ですが今日の實驗に關する、具體的のお話がうかゞひたう御ざいます』といつた。

『はあ、お話いたします』

すこしうつむき加減に考へてゐたやうだつたが、ちよつと眼をあげると、じいつとみんなの顏をみた。水晶の樣にすきとほつた夫人の眼は一切の物質を突きぬいて行く樣にかゞやいてゐた。これならX線透視術ぐらゐはわけのない筈であらう。

『先達もちよつとお手紙で申上げましたが、この分身術は人の靈體を遊離させる術が御座います。

しかし只今は靈體遊離論に就いての學說、例へば接神學者の基礎的學說の一つを爲してゐるといつたやうな、理論的方面に就いてはお話する時間も御ざいませんし、いづれ日をあらためてゆつくりきいて頂くことにいたします。

兎に角人のからだは肉體と靈體との二つから成立つてゐて、特殊の心靈能力を持つてゐる者だけが、その人の意志の儘に、靈體を遊離させることが出來るので御ざいます。

遠隔透視術などもこの一種で、例へばこゝにゐて、大阪の出來事が知り度いと思ふ場合には、この靈體が野も山も、谷も川もまるで平地を歩くやうに遊行して、先方へ行き色々そこの有樣をみて歸つて來るので御ざいます。しかしこの靈體といふものは、もと〳〵物質では御ざいませんから、普通の人の目ではみることが出來ません。たゞ其人に特別な透視能力がありますと、影の樣に動いて行く姿を、あり〳〵とみとめることが出來るので御ざいます。

只今歐米の靈媒者の中でもこの術の出來るものはごくすくないやうで御ざいます。しかし私は永年の研究がむくいられまして、私から五つの靈體を分離させることが出來るやうになりました。

その方法としては、先づ精神統一に依りまして完全な恍惚狀態に入り、自分の肉體から一つの靈體を遊離させて、肉體と靈體の間をつないで居ります靈的震動の働きによつて、激しい力を送りますと、肉體から分離した靈體が、一つ二つ三つ四つ五つとまた五つにわかれるので御座います。次に分離した五つの靈體に、やはり靈的震動の力によりまして行先を敎へますと、各々敎へられたとほりにその場所へ參るので御座います。そこでふたゝび激しい靈的震動をとほして私の靈力を送りつけますと、五つの靈體はそれ〴〵五ヶ所で、いはゆる具象化現象を起しまして、皆樣の御目にとまるやうになるので御座います。

それゆゑ今晩皆樣が御覽になります私の靈體も、決して幻影としてではなく、客觀的に存在するもので、隨つて動物の目にもみえますし時によると口をきくこともあるので御ざいます。』

その時笹山畫伯が、

『それでは奧さん、魂は肝臟に宿つてゐるもので、肝臟が邪氣をうけると魂がゐられなくなるので、ふら〳〵體からぬけ出すといふ支那の離魂病や、日本の隨筆などでよくみかけます同じ人が二人出來るといふ、影の病と同じものでせうか』

『さうで御座います。事實としては同じものと思はれます。

しかし只今も申上げましたやうに、私のは五つの私を五ヶ所へ遊離させるのですから、心靈現象としても、もつと複雜したものかと自分では思つて居ります。

この場所で五つの靈體をたゞ分離させますより、皆樣に離れた五ヶ所へいらしつて頂いて、それ〲五つの靈體をその場所へ送り出した方が、實驗の上にも妙味があるかと思はれますから、さういふ形式をとつて、今晩七時半に靈體をそれ〲の場所に現すことにいたします。

その場所に就きましては、前原さんは、麹町に居ります私の親戚の橫田までいらしつて下さいまし。

笹山さんは、瀧の川の茶會席の指月庵へいらしつて下さいまし。

繁ちやんは、××ホテルの十六號室へおいでなさい。』

と甥の西村青年には命令する樣にいつた。

『こちらの好きな處へ行つてはいけないんですか』

と長谷川社長が聞いた。

『それでもよろしいんですの、すこし骨が折れますが、行先の分らない方は、私の透視力によつて行先を探らなければなりません。』

『それはなほ面白いです。それでは私は自分の好きな處へ行かせて頂きませう。』

『ではかう遊ばして下さい。お好きな處へいらつしやる代りに、あなたのおはいりになるお部屋へ鏡をおいて、鏡に寫つたあなたのかげをぢつとみていらしつて下さいまし。』

といひながら、夫人はちよつと立ち上つて次の間から小さな、金屬製の箱を持つて來た。それを目の前で封印して、長谷川の手に渡して、

『この箱の中には、私の指環が入つて居ります。どうか七時半になりましたら封印をとつて、中から指環を出して左の手でぢつと握つたまま鏡の中のあなたの姿をみつめてゐて下さいまし。くれ〲も申上げますが、七時半になるまではこの箱を決しておあけにならないやうにお願ひいたします。もしおあけになりますと、私の心靈術は忽ち破れてしまひます。もと〲微妙な心靈作用なので御ざいますから。』

『斷じてあけません。』

と長谷川社長はきつぱりいひ切つた。

夫人は森田彫刻家に向つて、

『あなたもお好きな所へいらしつて下さいまし。たゞし往來では外に人が居りますので困ります。お友達のところでも、旅館でも、どこへもおすきなところへいらしつて下さいまし。それだけで何の條件もつけません。

長谷川さんの場合には、指環もお預けしてありますし、鏡といふ對照物もございますから、場所の透視も幾分らくに出來ますが、あなたの方はちよつと骨が折れるだらうと思ひます。しかしこれも特殊な實驗として、いたすことにいたします。

そこで皆様に申し上げますが、私の靈體が現はれました時に、決してそれに手をおふれにならないこと、もうひとつは、外の方を實驗室へおいれにならないで、あなた方おひとりだけでお立合ひ下さることゝいふ、この二つを是非お願ひして置きます。

前にも申し上げましたやうに、靈體の現はれますのは七時半ですから、遠方の方でも八時頃にはおほよそこちらへお歸りになれると思ひます。皆様でもう一度こちらへお集まり下すつて實驗の御模様をお聞かせ下さいまし。』

『それは勿論です。』

と前原理學士がいつた。

『あゝ忘れてゐました』

と夫人は懐中から小さい紙包みを出して、

『これは十三世紀頃の錬金術者が用ゐた神秘の藥品で御ざいます。今晩七時二十七分になりましたら、實驗室の机の上の香爐の火にくべて下さいまし、かならずお忘れにならないやうにね。』

といつて、その紙包みを前原理學士の手に渡した。一同はそれ〴〵自働車を飛ばして、出かけて行つた。

三

前原理學士が麹町の横田邸へ着いたのは七時大分前だつた。名刺を通ずると、お待ちいたして居りましたとすぐ奥まつた日本間へ案内された。

理學士が此家を訪れたのは、今度が始めてだが、しかし夫人の處では度々落ち合つてもゐたし、勿論今日のことに就いては、前々から話しもしてあつたのだから、主人夫妻も非常に打ちとけて、心からの歡待をした。

とりあへず來意を述べて實驗の話しを始めたが、夫婦とも委しいことは知らないらしく、たゞ心靈上の實驗をこゝですることゝ、實驗室へは前原さんの外誰も這入つてはいけないと夫人からかたく申し渡されたとだけいつてゐた。

何しろ目先に、大問題を控へてゐるので前原理學士は餘談どころの場合でない。とき〴〵とんちんかんな返事をしては時計ばかり見てゐた。

『おやもう七時十五分です。そろ〳〵實驗室の方へ伺ひませうか』

といふと早速夫婦で案内をしてくれた。

實驗室といふのは、奥二階の十五疊の西洋間で、絨氈も窓掛も暗紅色のものが用ゐてあつた。おまけに電燈には眞赤な玉が取付けられてゐたので、室の中はかなり薄暗く、したがつて靈體の出現には、誠に相應しい趣きに見受けられた。

『私共が實驗にたづさはりますと、後で松下に叱られますから失禮いたします。いづれお後でゆつくりお話を伺ひませう』と主人が會釋すると、『御免遊ばせ』と夫人もとも〴〵下へおりて行つた。

室の眞中に、丁度電燈の眞下に、さゝやかな、やゝ丈の低い卓子があつて、其上に大形の香爐が載せてあつた。そのすぐ手前に大きな肘掛椅子があつて、そこが立合人のすわる處で、もう一脚別な椅子が室の右の隅の方に置いてあつた。

理學士は大きな椅子に、どつかりと腰を下して、さあ來いといふ心構へをもつて怪異の出現を待つてゐた。

いよ〳〵約束の七時二十七分になつた。ポケットから、夫人に渡された香の樣な藥品を取り出して、香爐の火にくべると、かなり高い香がして、頭がぼーつとする樣に思はれた。

初めはじわ〳〵燻つてゐたが、しばらくたつと、蛇の舌の樣な細長い火がちよろ〳〵燃え出した。と今度は白い煙りがぽつぽつと立ち始め、みてゐるうちにその分量が段々ふえて來て、果ては濛々と立ち登つて、赤い電球を下からふつくり包んで仕舞つた。後から〳〵舞ひ上る煙りの中に赤い光が射し込んで、綾をなして八方にゆらめく樣は、無數の蜘蛛が吐き出す糸に生氣が通つて、血を浴びながら、渦に巴に、纏れ合ふかと思はれた。

前原理學士は、無氣味な樣な、見蕩る樣な心持ちで、しばらくぼんやり眺めてゐた。

ひとしきり煙りが餘計に立つたと思ふと、其中へぽーつと人の顏が現れた。『出たな』と油斷無く身構へてゐると、次第に煙りがうすれて行つて其儘立ち止んで仕舞つた。みると卓子の向ふに、肩から裾まで暗紅色の布を掛けて、夫人が立つてゐた。

理學士はきつとなつて相手を睨みつけた。先方でも理學士の目を、じつと見据ゑてゐた。

二分、三分、五分、理學士の頭は幾分朦朧となり始めた。『これはいかん、何だか妖術にかゝつたやうだ』と思はず肩を怒らし、はつたと睨み返した。と夫人の顏の何處やらに、優しいうす笑ひの樣なところが見えたやうでもあつたが、其儘ぐるつと後を向いて、室の隅の椅子へ腰を掛けて、はおつてゐた布をすつぽり頭からかぶつてしまつた。

二分、三分、五分、夫人は椅子に腰かけた儘、さながら大禪定に遊戯するものゝ樣に寂然として控へてゐた。

理學士は考へた——今のは分身した靈體であらうか。眞個の夫人が自身來たのであらうか。それとも誰かゞ夫人に扮して現はれたものであらうか。しかし今みた夫人が替玉で無いことだけは確に鑑定がつけられる。よしんば、薄暗い赤い光の下でみたにしても、ごく僅の處で五分あまりもにらんでゐたのだから、其點に就いては萬間違ひは無いつもりだ。してみれば、靈體か實體かのどつちかゞ來たに違ひない——八分、十分、夫人は布を被つた儘じつとすわつてゐる——どつちだらう。兎に角あの布を取つて、もう一度み直しさへすれば、疑ひは即座に解けるのだ。もし夫人自身で來たとすれば、分身術とは噓の皮だが、さうなると外の四人の處置がつけられなくなる。矢張靈體であつたかしらん。「かならず私のからだには觸つては下さるなよ」とくれ〴〵も夫人から念を押されてゐるが、どうもあの布が取つてみ度い。みす〳〵目の前にすべての解決がつくものを、この儘に捨てゝおくのはいかにも殘念だ。早い話しがこれから本郷へ歸つた時、ほかの連中もそれ〴〵自分と同じやうな報告をしたとなると、今のこの疑問

は永久の疑問となつて殘つてしまふ。後になつて、なぜあのとき布を取つてみなかつたかと思つたところで間に合はない。夫人としても、眞劍な學術上の實驗だ。自分も科學者として眞面目にこの實驗に立ち合つてゐる。眞理の探究には何事も猶豫しないといふのが自己の主張では無いか。我張けとる。斷じてとらう。そして後で夫人に重々おわびをすればよい——と決心がつくと、やをら椅子から立ち上つて、つかつかと夫人のそばへ寄つた。右の手をかけて、かゝつてゐる布を掴まうとした瞬間、ほとんど間髪を入れず、夫人も布も、はつと消えた。思はず學士は「やッ」といつたが、ぞーつと總氣立つて、ばたばたと廊下へ馳け出した。かうなると、がらんとして人氣の無い西洋館が急に薄氣味惡くなり、廊下で二三度まごついて、やうやく日本座敷へかけつけると、奥から主人夫婦が出て、「どうで御座いました」と聲をかけた。「いや實に驚きました」と口では本音を吐いておいて、樣子だけでは強いて落ち付かうとはしてゐたが、顔の色も青ざめて、そわそわしてゐるところから、忽ち主人夫婦に氣どられて「まあ葡萄酒でも召し上つて、ゆつくりお休みになつてはいかゞです」といはれてしまつた。

「はあ、有難う御座います。急ぐわけでもありませんから、さうさせていたゞきませうか」と三人で奥の日本間へ通つた。

佛蘭西渡りの飛切りの葡萄酒を新規に拔いて、茶や菓子と慇懃にもてなされた。

實驗の模樣をきかれたので、今みた通りの委しい話しをした。『さうでしたか』といつて主人夫婦もしきりと考へてゐた。

實驗の結果が非常によかつた爲ではあらうか、兎に角も、自分の家へ始めて尋ねてくれた珍客が、眞青になる程吃驚させられたといふことには、術者が自分達の親戚であるだけに、何となく間接の責任を感じたらしく、氣の毒さうに何くれとなく饗應し、かつ勞つてゐた。

『松下ではちよいちよいお目に懸つて居りましたが、ほんとによくお訪ね下さいましたのね、どうぞこれを御緣に、是非またお遊びにいらしつて下さいまし』

と夫人は何度も繰り返してゐた。

『是非お邪魔に出ます。一度お伺ひしておけば、後は氣輕にといつては甚だ失禮ですが、お伺ひをしよくなりますし、第一今日の實驗と共に御當家の印象は、終生忘れることは出來ません。』

『まあ、何だかお氣の毒の樣な氣がしますわね』

『何がお氣の毒のことがあるものですか。實に驚くべき實驗でした。外の連中の報告をきいてみなければ、まだ何ともいはれませんが、ことに依ると我々の科學に根底からくつがへるかもしれません』

と理學士は眞面目になつた。

『まさかそんなこと』

とはいつたものゝどう返事をしてよいか一寸途方にくれたといふ樣子で、何とか合槌を打つてほしい樣に主人の顔をみた。主人はあまり口數をきかない方で、應接はあらかた夫人にまかせてゐたが、絶えずもの柔かい微笑を浮べながら、いかにも人なつこさうな樣子をしてゐた。

『いや約束の時間になりました。本郷へ出かけませうか』

といつて、挨拶もそこ〳〵、主人夫婦に丁寧に玄關まで見送られて歸つて行つた。

四

『何だかいやに寒いぢやあ有りませんか』

前原理學士がいつた。

『雨のせいよ』

夫人がストーヴへ火を入れた。

夕方から降り出した春雨は、廣い松下邸の庭園に音もなく煙つてゐる。

そよ〳〵肌寒い風に送られて、何處からともなく沈丁花がかをつて來た。

夫人はくるつと室の中を見廻した。

『あすこが明いてるんですもの、寒いわけだわ』

と今度は隅のガラスを閉めに行つた。

五人の紳士と夫人とを合せて、仲のいゝ六人の人達はもの寒い春の夕べを、ストーヴを圍みながら、怪異實驗の物語りに移るのだ。

『どなたからお始め下すつて』

と夫人が聞いた

『さあ、兎に角並んでゐる順にしましやうか。前原、長谷川、笹山、森田、西村、此順では如何です。前原君、君から話し給へ』

と長谷川社長がいつた。

前原理學士の實驗談は此處に再度する必要はない。たゞ前に記した通りの話をして、ことに依ると今度の心靈現象で、近代科學の滅亡する時が來るかも知れぬと、付加へた。

次は長谷川社長の話である。

彼は吸ひかけのシガーを、惜氣もなく灰皿の中へ押潰すと、紅茶を一杯飮んで、元氣よく話し出した。

『好きな處へいらつしやいといはれてみると、樂みも多いかはりに、何處にしたものかと迷ふものだ。同じことなら、靈體の現はれにくさうな處へ、なんといふ道樂氣も出て、自働車の中でもまだ迷つてゐた。いろ〳〵思案した擧句が一番氣のおけない、駿河臺の藤田といふ友人の處へ行つてしまつた。かた〴〵會社關係の用もあつたのでその方の話もしやうかとも思つてゐたが、逢つてみると今日の話で持ち切りさ、藤田も驚いてね是非僕も立ち合はせろといふんだらう。隨分斷るのに困つたが奧さんとも堅いお約束がしてあるのだからと、やう〳〵賴むやうにして、僕ひとりといふことにした。

まだ大分時間もあつたので、今日の實驗の想像談や、奧さんのお噂や、噂といへば勿論すてきな美人で、すてきな學者で、自然君子連が大勢入り込むので、さぞおうるさからうなんていふとんだ御同情や――僕もおほきにそのひとりなんだらうがねハヽヽ――まあそんなことをいつたりしてゐるうちに七時二十分になつた。

二階の座敷の眞中へ、大きな姿見を置いて、奧さんからお預りした箱をちやんと膝の上へ載せて、鏡に寫つてゐる自分の顏をじいつと覗てゐたんだ。諸君は經驗がないかもしれんがかうあらたまつてくると妙にうすつ氣味の惡いものだね。毎日々々見つけてゐる顏なんだが神

經作用とでもいふんだらうか、實際別人の觀がしたよ。自分の顔そのものがすでに、えたいのしれぬ妖怪のやうな氣がしてね――もと〳〵さうなんだから――はひどいね、森田君、僕も腕力にかけては、森田君の暴力に及ばんとしてもさ、相當自信はあるんだが、どうもその靈的問題となると、からいくぢなしでね。心の底から臆病風が吹き始めた。時々電車の音がする。それみなさい、電車がとほつてゐるぢやあないか。何も野中の一軒屋にゐるんぢやあなし、大都會の眞中で、おまけに下に森田を始め、召使ひを合せると十何人かがたゞさへ來たいところなんだ、おーいといへば、すぐかけつける。一體どうしたといふんだと、獨力みをしてみたが、僕も臆病だね、とてもこわいんだよ。愈々七時半になつたので、お約束どほり、上包みの封をきつて、箱をだして、中の指環を左手でしつかり握つて、右の手で箱を押へたまゝ、鏡の中の自分の顔をじつと睨んでゐた。指環を握つてゐる手からは、じと〳〵汗が出る。一生懸命に自分の顔を見詰めてゐると實に妙だつた。いつ變るともなく、それが奥さんの顔になつてゐるぢやないか。實に驚いた。しかし危なくなると多少度胸も据わるものだね、こわい〳〵と思へば棕梠箒も鬼に見える。「柄に手をかければ元の柳哉」だ、これは心の迷ひだらうと、兩手で目を擦つてまた見直したが、矢張り奥さんの顔だ。とその時、鏡の中の奥さんが僕の顔をみて、いつものとほりの笑ひ方でにつこりとしてさ、優しく口元がうごいたと思ふと、何か君、いひ出しさうにされたんだ。やその時の僕の驚きといふものは、諸君察してくれ給へ。ほとんど無我夢中で、いきなり右の手に持つてゐた金屬製の箱を、鏡の中の奥さんへたゝきつけたんだ。なにしろ相手はガラスだからたまらない。ガチヤ〳〵音がして、姿見は毀れて仕舞つた。

その物音を聞きつけて、家内總出で上つて來て、どうしたといふんだ、ろく〳〵口も利けやあしない。水を飲んだり、ウイスキーを貰つたりして、やう〳〵今の話をして聞かせたところ、森田を始め一同實に驚いて居つたよ、

「丑待ちといふ話は度々聞いたことがある。むかし御殿女中などがよくやつたことで、丑滿時にたつた獨で、鏡に向つてゐると、中に寫つてゐる姿がいつの間にか消えて仕舞つて、入代りに自分の將來の有樣があらはれてくるのださうだ。しかし丑待なんていゝ加減なことかと思つてゐたが、やはり本當にあつたことなんだ」

と森田はしきりと考へこんでゐた。後で毀れたガラスの掃除やら、女中達は大騷ぎをやつてゐたよ」

といつて長谷川社長は、新しいシガーに火をつけた。

一同は自分達の實驗と、思ひ合せてあれこれと考へてゐるのであらう、一言も口を利かなかつた。こわい〳〵と口でもいつてゐたし、また實際こわかつたのも事實であらうが、しかし長谷川社長は根が陽氣な質性なので、つい氣分もそれにつられていつて、一同紅茶をのんだり洋菓子を撮んだり、何となくざわめく樣子もあつた。

次は笹山畫伯の番である。畫伯は長谷川社長とはうつて變つたものしづかな方なので言葉遣ひも鄭重に、ちよつと結城づくめの襟元をかき合せるとつゝましやかな口振りで話し出した。自然一座の空氣もしんみりと落ちついて來た。

『お指圖のとほりに、瀧の川の指月閣へ行きますと、茶寮では自働車の音を聞きつけたか、女中が門へ出て待つてゐました。

先程當邸を出かける時分から、何だか怪な空合だとは思つて居たんですが、とう〳〵降り出した春の細雨は、車の戸口へ差し掛けてくれた傘の上にかすかな音をさせてゐました。檜皮葺の門を這入ると、左手にちよつと八つ手があしらつてあつて、右の方へ蜿つた延段の石を踏んで行くと、突當りが玄關です。

前にも二三度來たことがありますので、女中も顏を見知り越しの樣子で、殊に奥さんからのお話もあつたとみえて、萬々心得てをるといふやうに案内をしてくれました。

廊下を二三度曲つて、奥庭の椽側から庭へ下りて、十間あまりも行くとこんもり植込みになつてゐます。

兩側からおひかぶさつてゐる立木から、折々こぼれ落ちる梢の露を氣にしながら、すぼめ加減にさして行く傘の中へ、大事に兩袖を抱へ込んで、薄ぼんやりした足許燈火をたよりに、女中の後からついて行くのですから、飛石傳ひの植込みの中は、隨分覺束ないものでした。

暗い木立の下を通り抜けると、ほんのり空薫の匂ひがして、捨石の水に映つた濡鷺燈籠の火がゆら〳〵動いてゐるちよつと横から左に折れると、ちいさな茶室があつて、そこが今晩の實驗室にあてゝあるのでした。

女中の案内で濡椽を上ると、入側つきの六疊の間で、電燈をつかはずに、ことさら短檠を用ゐた處も奥床しく、間詰りの板床にはわびた一行ものがかゝつてゐて軸、わきの花入れには白玉が一輪さしてあります。

しばらく經つとさつきの女中が、とり菓子を運んで、つゞいて薄茶を點て出して來て、

「どうぞ御ゆつくり」と言葉を殘して出て行きました。

折角の御馳走ですから、菓子を撮み、薄茶に喉を濕はせながら時計をみると、やうやく七時です。怪異の起るのにはまだ三十分も暇があります。かういふ時にはなりたけ心を落ち付けなければならないと、兩手を正しく膝に置いて、下腹へぐつとちからを入れてみましたが、何となく落ち付けません。

すこし目先でも變へてみやうかと、椽側へ出て、戸外を眺めました。

唯さへものさびた庵の庭は、しめやかな春の雨にしつとりうるほひを含んで、前栽に植ゑ込んだ隠れ蓑の冬を越した古葉だけが、ぼんやり短檠の燈火に浮び出て暗いもの影からは、蹲がはりに落したらしい水の音がちよろ〳〵聞えてゐます。まだ宵のくちだといふのに、四邊は森閑と靜まりかへつて、流石に瀧の川の奥は淋しいなあと思ひました。

大分心も落ちついた樣ですから、ひと先づ室へ這入つて、ゆつたり靜座の氣分にくつろいで居りますと、間遠ながらに聞えてゐた軒の雨垂れも、いつか筧の音へ溶け込んで、うすねむいやうな、うつとりとした氣分になつて來ました。

ぢつと眼をつぶつてゐるうちに、何だか戸外に人のゐる氣配があつたので今頃になつて怪いなあと思ひながら、庭をみますと、この雨の中を傘もさゝず、しよんぼり誰やら椽先に立つてゐるんです。「何誰で

す。何か御用ですか」と聲を掛けたんですが、一向耳へは這入らないといふ様子で、雨にそぼ濡れたまゝ、上へあがつて私の前へ坐つた時思はず私はさけびました。

「お靜つ。お前は靜だね」

誠にお恥しい懺悔話ですがひと通りお聞き下さいまし。』

× × × × × ×

『今から丁度六年前、私が三十四のまだ獨身でゐる時分でした。この女は確二十二であつたと思ひますが、靜岡在の以前は相當な家の娘ださうで、容貌もよし、氣立もいたつて優しく、殊に古風に育つたところが私の氣に入つて獨身の氣輕さにといつては甚だ勝手がましい次第ですがまあさういつたわけで、つひ手を付けて仕舞ひました。

足掛三年といふもの其儘に暮してゐましたが、私も今のを貰ふやうになつた爲、誠に不憫だとは存じましたが、ひと先づ暇をつかはすことにしたのです。

とんだ惚氣を申し上げる様ですが、其時も泣いて別れを惜みながら生涯獨身で暮しますなどゝ申してをつたのです。其後は一度大變に御厄介になつたといふ意味の細々しい手紙をよこしたゞけで、絶えて音信もありません。何處かへ嫁入てゞもくれゝばよいが、それともわづらつてゞもゐやあしないかとも思つたり雨に付け風につけ案じてゐたんですが、今のゝ手前すゝんでどうかうといふことも出來ませんので、心ならずも其儘にしてゐました。それが不圖この雨の中を傘もさゝず、跣の儘、指月庵へ尋ねて來てくれたのです。

「お靜、大變にやせたねえ。どうしてゐるかとしよつ中案じて居たんだよ」といひますと、顔もあげられぬほど泣いてゐましたがやうやくのことで、

「先年お邸からお暇をいたゞいて國元へかへりましてからも、方々からかたづくやうにとすゝめられましたが、所詮おそばには居られぬものとは存じながら、何の因果かあなた様のことが忘れられず、戀しさお懐しさに、三年の月日を過しました。その間も何度かお手紙をさし上げやうとは存じましたが、なまじお便りを申上げて、もし御返事でも下さると、反つて思ひを増すだかりだと、ぢつと我慢して居りましたが、丁度昨年の秋、不圖わづらひついたのが元となつて、遂々儚くなりました。私は此世の者で御座いません。はからず今晩松下様の奥様の口寄せにおまねかれして、假に姿を現しましたもので御座います。旦那様。露さら御恨みには存じませんが、たゞたゞ不憫な者とだけ思召して下さいまし」と、また潸々と泣入りました。

私は胸が一杯になつて、こはいも、恐ろしいも忘れてしまひ、「お靜、さうだつたか」と、思はずその手を取らうとしますと、何とした事でせう、今の今迄お靜の姿にみえてゐた女は、いつのまにか御當家の奥さんに變つてゐたのです。

「篠山さん、お驚きでしたらう。分身した私の靈體にお靜さんの靈をのりうつらせたのです」といはれたかと思ふと、奥さんの姿も掻きけす様に消えてしまひました。

そよ〳〵うす寒い風が襟元へ吹き込んで、今迄氣がつかずにゐた香の匂ひがはつきり鼻へついて來ました。これが正氣づいたとでもいふ

のでせうか。「さうだ今夜は實驗に來てゐたのだ」と思ふとたんに總身水を浴びせられた樣に覺え、無我夢中で雨の中を、おもやへ飛んで逃げてしまひました。

それでも流石に實驗に立合ふといふ責任は忘れなかつたと見え、氣付に水を一杯飲んでから時計を見ますと、丁度七時三十八分でした。

さて氣がついてから考へてみますと、お靜や、奥さんの姿の見えてゐた時と、その後とではまるで世界が變つてゐるやうに思はれました。

つまり、お靜のことがしよつちゆう頭を離れないものですから、それが奥さんの潜在意識に感應して、激しい恍惚狀態に這入られた際、お靜の靈を呼び出されたものと思はれます。

誠にお恥しい次第で、今迄は一度も口に出したことはありませんでしたが、今日はからず奥さんの通力に見破られたので、始めて懺悔をいたす次第で御ざいます。誠にお靜も不憫なもので、明日にも國元を尋ねてお墓參りでもいたしませう。

いやとんだのろけまじりの長話しをいたしました。』

と笹山畫伯はほつとひといきして、冷くなつた紅茶を一口啜つた。氣のせいか、彼の優しい目にはしつとり涙が浮んでゐる樣であつた。

今迄身動きもしないで聞いてゐた前原理學士は始めて口をきつた。

『やはり交靈術だ。しかし心靈現象もこゝまで突き進まうとは思はなかつた。』

といつて夫人の方に向きなほり、

『奥さん、あなたは實に恐ろしい人です。あなたは妖女です。惡魔です。すくなくとも世界の文化を破壞す惡魔學者です……

人類の幸福、文化の向上の爲に、血の出るやうな研究をつゞけて來た吾々科學者も、遂に妖術者にやられてしまつたのだ。科學の權威はどこにあるんだ。

恐ろしい妖術が現代科學に代つて、世界は妖精の蹂躙に……』

愈々興奮して理學士が何かいひださうとしたときに、

『アハツハツハツ……』

といきなり森田彫刻家が笑ひ出した。

『今度は我輩が話す番ぢやらう。しかし、かう眞劍になられてはとてもわしには話しが出來ん。アハツハツハツ……』

とまた笑ひ出した。前原理學士は屹と向き直つた。

『森田ッ。何が可笑つ。』

『何がつて貴樣。貴樣も我輩も、アハハ……誰も彼も、みんな一杯喰つたんぢや』

この時みんなでくす〳〵笑ひ出した。

『もつと前原さんをかついで上げやうと思つていろ〳〵工夫がしてあつたのに、いやだわこわしてしまつて』

と夫人はをかしい中にも、いく分殘念だといふ樣子もあつた。前原理學士もすこし張合拔けがしたらしくみえたが、まだ半信半疑で、

『一杯喰つたとは何んだい』

『話さうか。アハハ……。わしには話せん長谷川、貴樣に賴む。』

といつてまた笑ひ出した。

『それぢや僕が種明しをしやう。さつき話したやうな筋合ひで、七時

二十分から、眞正直に鏡と睨みつこをしてゐたのだ。そのうち七時半になつたから、指環を出さうと思つてお預かりした箱をあけると、指環なんぞはありはしないで、たゞ僕に宛てた手紙が這入つてゐた。怪いなと思つたが、封を切つてみるとこれなんだ』

と長谷川社長は脊廣の內がくしから一通の手紙を取り出して、

『まあ讀んでみ給へ』

と理學士の手に渡した。

けふは四月一日でオール　フールス　デイよ。だからあなたをエープリル　フールにしてあげたの。かついだつてあなた怒る？　まさか？　と思ふけど。ちよつと鏡みない？　あなたが寫つてるわ。堂々たる紳士ねえ。みてゐれば乾度あなた笑ふわよ。いゝ郭公が出來たつて。

萬愚祭の日　　澄子

三之助様

是非御相談したいことがありますからすぐ歸つて頂戴。待つてゝよ。

非常に興奮しきつてゐたゞけに、理學士の張合の拔けさ加減はまたひとしほで、

『さうーか』

といつたつきり　しばらくは口もきけなかつたがやう〳〵のことで、

『それぢや長谷川君、今夜の實驗で夫人に逢つてゐるのは僕ひとりなんだね』

『さうだ、外の者はみんな手紙一本ですつぽかしさ。僕をみたまへ、かつがれた上に、「鏡をみない？」とまでいはれちやつた。殘念だつたがちよつとのぞいてみたがね。成程利口さうな顏はしてゐなかつたよ』

さすがの長谷川社長少々しよげぎみだつた。

『こんなことが會社へでも知れてみたまへ。もうにらみはきかんからね』

『それでまづわかつたが、まだ腑に落ちんところがある、郭公といふのは一體なんだい』

『實は僕もしらなかつたんだが、奧さんの說明によると、スコットランドで、萬愚祭の日にだまされたものゝことを郭公といふんださうだ』

『ふふーん』

といつたが

『しかし森田君のは怪しいね、てぶらで出かけてどうして行さきがわかつたんだい』

『西村靑年はもと〳〵夫人と共謀で自働車の後からオートバイをとばしてゐたんだ』

『さうかい。だが……』

といつて、こんどは夫人の方を向いて、

『横田さんのところで、あなたがぱつときえてしまはれたのはどういふわけでせう』

『なんでもないことよ、ちよつと「美人の消失」といふ奇術を應用し

ましたの。ほら、ロンドンで御一緒にみたぢやあないの。ステージの椅子へ女が腰かけて、布をかぶせておいて、ピストルを撃つと、人も布も目の前でなくなつて仕舞ふ奇術を。

さつきあなたがこわい顔して、きれをとりにいらしつた時には、あたくしもう少しで噴飯すところでしたのよ、横田でも奇術つてことを知つてるものですから、一緒にあなたをお擔ぎするやうで、何だか申し譯がないから困るつていふんでせう。あたくしの方が困りましたわ。ですからさういつてやりましたの。前原さんは特別なんですから、いくら擔いだつていゝ人なんですわつて。さうしたら從妹がくす〳〵笑つてゐるんですもの、あたくし何だか……』

とあまえる樣な眼で理學士の顔をみた。

『さうですか』

とはいつたものゝ、ちよつと返事の仕樣にも困るといふ樣子もあつた。

『道理で横田さんでも大變に氣の毒がつて居られました。しかし美事に擔がれたものですねえ』

としんから感心したらしい

『だけと前原さん、歐米の心靈現象といふものは、みんなかうしたものですのよ。

種のあるのを知らないで後援してゐる學者の説を聞いて、正面からその職業的心靈術者の心靈現象をみてゐますと、實に不思議にみえるんですけど、ちよつと裏へ廻ると思ひもよらない處に仕掛があつて、誰だつて呆れてしまひますの。まあ今日の實驗にしてもさうぢやあ有りませんか。假によその方にお聞かせするとして、笹山さんのお話まででで後をお話しゝなかつたら、屹度その方不思議に思つておしまひになりますわ。心靈現象もまつたく同じですの。種を知らない間は、眞面目な學術上の實驗ですけど、仕掛がわかつてしまへば、唯の手品になつてしまひますの。それが世間へはわからないものですから、立派な學者が、始終騙されてゐるんですの。何だかお氣の毒のやうな氣がしましてねえ。今日のことなんぞはお心安だてにみなさんを擔いだゞけなんですけど、かういふ喜劇が歐米では、眞面目に行はれてゐるんですの。もし前原さんが外國にゐらつしつて、さういふ渦中へお入りになつたとしたら、いの一番に騙される方ですわ。だけど前原さん、今日のことゆるして下さるわねえ』

と夫人は親み深い眼をあげた

『ゆるすもゆるさんも、奥さん、私大いに光榮に思つてゐるくらゐで……』

としんから感謝の意を表してゐるやうだつたが、みんなの方へ向きなほると、

『實に諸君は怪しからん人達だよ』

と急にいふ事が變つてしまつた。

『あれだけ奥さんから擔がれてゐて、一矢その怨みに復讐いやうともしないで、かへつて夫人の驥尾にふして、年來の友を賣つてよろこばうといふんだから』

『いや、さういふわけでもありませんが、淑女第一が吾人の踏むべき

道だといふ尊大人の御持論にちよつと敬意を表しただけで』

と笹山畫伯がひやかした。

『まあ何とでもいひ給へ、しかし人生女なるかなだ、欺して擔いで、すゞしい顏をして、欺されて擔がれて、悦んでゐるのが僕等なんだから、僕はいよ〳〵女人禮讃の信念を強うしたよ』

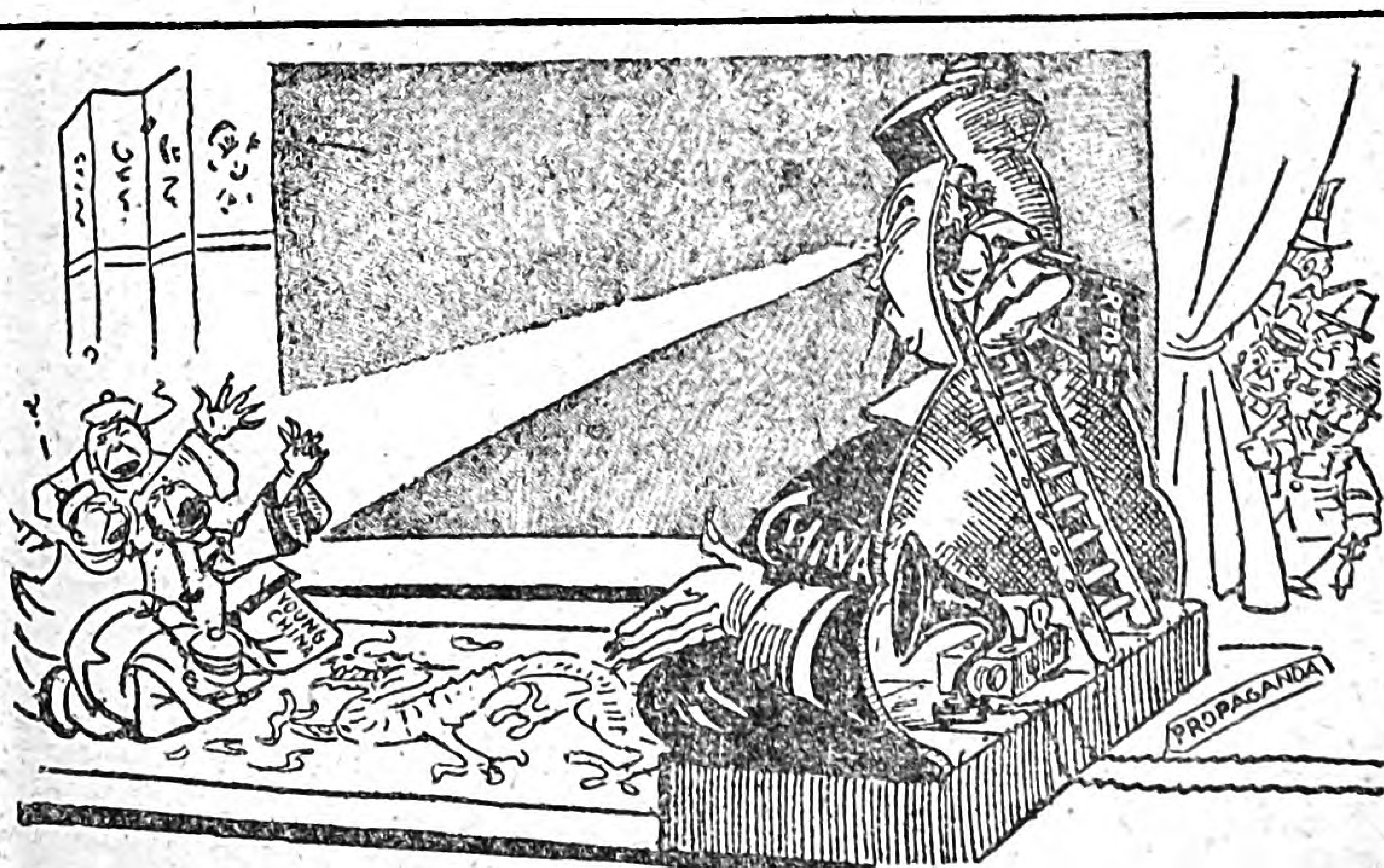
『まあ、そんなに女がお好きならいゝ事がありますの。私いま心靈學上から、自由に兩性を轉換させることを研究してゐますの。近々に完成すると思ひますから、その時は一番先にあなたを御禮讃なすつていらつしやる女にしてあげますわ』

『いや奧さん、今日の御實驗だけでもう充分です』

と言つてゐたが、腹の中ではこんなことを考へてゐた。

『夫人と一緒に僕を擔いだと思つてゐる連中は、結局擔がれてゐて、一番ひどいめにあつてゐる僕が、すなはち夫人の目ざしてゐる郭公なんだらう』と

いひ合せた樣に、一同がだまり込んでしまふと、今度ほ雨の音がはつきり聞えて來た。ことに夫人は人知れない氣疲れも出た樣子で、窓によりかゝつた儘ぼんやりおもてを眺めてゐた。



THE "RED" EYE OF THE LITTLE YELLOW GOD
—*The Daily Express* (London)

◇佛樣の『赤い眼』

デーリー・エキスプレス(ロンドン)紙所載

黄色い佛像の背後からのぼつた赤色の魔手、それが恐ろしい『佛の赤い眼』となつて若き支那を脅威する。列國は度膽を拔かれた形でカーテンの陰からのぞいてゐる。

島崎藤村小論

武藤直治

一

島崎藤村氏は、ある年の夏、友人につれられて、初めて訪問した。[illegible]と、その友人に向つてこんなことを云はれたことがあつた。

『——今年はメーデーを見ましたがね。行列が來るまでは、何かから胸がわくわくをどるやうだつたが、いよ〳〵行列が見えると、みんながひどく憂鬱で、元氣がない樣でね——』それで話しを切つて、その時の印象を回想するやうな、胸がいたむといふやうな顏つきを見せられたのだつた。

もう髮も大分灰色になつた氏にとつては、いまの青年たちが、何を考へ、何を苦しんで生きてゐるかゞ、自分にも果してわかると云へるものか云へないものか、それを突きつめもまた、たしかめもしたいと云つて焦燥を感じて居られる容子が私の胸にきた。

『いまの青年は、何かに强いノスタルヂヤを感じてゐるでせうかね』ふと、こんなことも云ひ出された。

と、私の友人も私も、しばらく默つてゐたので氏はつゞけてから云はれた『たとへば、みんながいまの、、、に對して感じてゐる深い興味などにも一種の强いノスタルヂヤとか、、、、とか云ふものがありはしませんか、自分たちの現在の生活に對する不滿とか、懷疑とかから來たといつたやうな』

しばらく刈り込まれないらしい、すこし長めな、灰色な髮が、病氣上りの青白い大きな額にかゝつて、すこし前こゞみな、長い間の座りのくせのついた身體つきで、端座した兩脚に重みを托してゐた、黑地の木綿縞の單衣のえりがはたけて、やつれた胸元が見えた。たゞ、瞳だけが、若々しく、するどく、しかも濕つて輝いた。ほんとうに、それは若ものの眼だつた。

『もうすつかりいゝんですけれど、一寸風邪をひいたやうでね』などと、氏は、丁寧にたゝんだ手拭を二つにひろげて、いくどもはなを强くかんだ。そして『人間はみんな、仕事を完成しないで死んでしまふんですね。このごろしきりにさう思ふ』と、何か前からの考へごとのつゞきのやうに云はれた。そして、實は、一年ごしに書いてゐる作がまだ出來上らないんです。もう大分進んでゐるにはゐるけれど、まだ

安心といふところまでは行かないのでね。』などと、島崎氏とは舊知の間柄である私のその友人と話しつゞけられるのだつた。

私は島崎氏が新しい時代の生活や生活意識に對する、いはゞむしろ感覺的な、直感的な敏感さと、そして緊張した注意力を休みなくいつも働かせて居られる、若々しさと意志とをはつきりとそこに見たのであつた。

かうした間にも、氏は『敷島』を吸はれる手を時々止めて、片ひぢを机にかけたまゝ、兩手をにぎり合はされる。きちんと端座した兩膝は、いつまでもそのまゝに崩れやうともしない。時間がたつにつれてなぜか、氏の顔や眼や聲の、如何にも若々しい感じが、そのやつれて弱々しく老年じみた陰影などをすつかり打ち消してしまつてゐるのが異樣にも感じられるのだつた。

二時間ほども、私たちは長居をして、歸りかけた。私には、氏の話された一こと一ことが深い意味をもつた成句のやうにはつきり記憶された。氏のやうな話し方をされる人を外に私は知らなかつた。

まもなく、私は、氏とは舊知の間柄であるその友人によつて、『藤村の歩める道』を書かれて、一本を惠まれることになつた。島崎氏の云はれた、その作品は、やがて、雜誌に發表された。『嵐』といふ題だつた。然し、初めて氏を訪ねた折りの記憶は、かうしたその後の色々の出來事によつて、愈々深められ、愈々忘れがたいものとなつてきたのだつた。

私はその『嵐』をよんだときも、また『食堂』をよんだときも、或ひは『飯倉だより』や『春を待ちつゝ』をよみ返したときも、また『藤村カルタ』の明るいユーモアと笑ひに富んだ美しいエピグラムを拾つたときも、氏の心のすがたのいろ／＼な側面を見たと思つた。あるものは全力をこめて描かれた氏の自畫像であり、あるものは氏の即興詩であり、またあるものは、自然と藝術への、または時代と社會への觀察のノートであつた。ことに、『ある女の生涯』以來、『三人』『明日』、そして『食堂』と一連續の小說の各篇では、いまの時代と社會環境の中に生きる各々のゼネレーションと、教養と、氣質とを代表するところのさま／＼の女性の性格と、その生活とを象徴し、表現した。

島崎氏について、私は曾て、『島崎藤村論』といふ一篇を書いたことがあつた。それは、氏の作品のあるものについての殆んど用意のない感想にすぎなかつたが、改めて、いまそのつゞきとして『續島崎藤村論』を書かうとすると、やはり私は自分の仕事の準備の不足と、氏への理解と同感の貧しさのために、たちまち行き詰つて了ふのを如何ともしがたいのである。

私はいはゆる文壇社會の人々が、氏をどう觀察してゐるかを、改めてしらべる暇がなかつた。が、たゞ、いはゆる文壇社會以外の一般社會のひとたちの中に、餘りに多くの島崎氏の愛讀者がゐることをきいてゐる。その人達がめいめいに、『自分の藤村氏』といふ、特別の親愛をよせて、氏とその作品を見守つてゐるといふ事實をも知つてゐる。私は、その人たちのもつところの氏への深い理解と同感に對して自分自身の敢へて遠く及ばざることをよく知つてゐる。したがつて、以下私自身の貧しい理解と同感とに立つた、準備の乏しい仕事について、幾多の訂正と補足を求めて止まない次第である。

考へてみると、『藤村詩集』の早き出發の頃からして、『嵐』の諸篇の最近まで、島崎藤村氏の歩んだ道は、氏の生活とその文藝的表現の歴史は餘りに永く、久しかつた。その間にも島崎氏は、文藝家としては、或ひは時として、一般文藝社會とは離れて、孤獨の道を歩まれることを餘儀なくされたこともあつたかもしれない。然し、社會人として、氏はいつも無數の愛讀者を、云ひかへれば、よき友、よき隣人を有して居られた。それらのよき友、よき隣人たちと共に、氏は默々として、時代と社會と共に徐に歩んで來られたのである。實に、氏はいつも餘りに多くのよき友、よき隣人を有して居られる。『自分の藤村氏』と思ひ、或ひは『藤村氏のよき友達、よき後進者』をもつて自ら任じてゐる人々――しかも、その大部分は氏自身にとつてさへも、未知、未見の人たちである――がどんなに多いことだらうか。その人たちをさしおいて、氏のことを語ることは、私にとつて返すがへすも、面はゆく考へられるのである。私はその人たちに重ねて、私ひとりが島崎藤村氏を語るの非禮をお詫びして置きたく思ふのである。

二

長篇小説『嵐』については、すでに、色々な機會に於いて、さまざまの人々の批評の對象となつたやうである。發表の當時、私も『嵐』を讀んだ。否、くり返して讀んだ。單行本になつてからも、改めて再三讀み返した。私はなぜといふ理由をあげることが困難だが、『嵐』がいくど愛讀しても飽かせない何かをもつてゐることを云ひたいと思ふ。私たちは『嵐』のもつ魅力が何であるかを考へたい。もちろん、そこに描かれた生活や主人公の父親の生活態度には、いくぶん、若干のゼネレーションの、時代のへだたりを感じるものがないではない。然し、『嵐』は何よりも先づ、現代の社會環境の一斷面を描いてゐる。あの父親と云ひ、四人の子供たちと云ひ、若い女中と云ひ、よべばこたへさうな親しい現代の社會生活者である。現代の社會生活者が、誰しも直面するさまざまの社會的の現象に對してのその人々の觀察、主觀、意識、そして全生活。それは特殊のものではない。それは普遍性をもち、同感と愛をよびおこすものである。そこに描かれた人々の生活と生活態度とは、あるがまゝの現實の社會生活の一斷面であるといふことが何よりも私たちの關心の中心に置かれるが、作者はそのあるがまゝの現實の生活記錄を、たゞ平板な生活のドキユーメントに止まらせないで、それを一個の創作の世界にまで高め、具象化し、象徴化してゐる。

> ある著作が人生の好い記錄であれば、その事が既に貴い。それが創作と云はれるほどの域に達したものならば、更に貴い。多くのすぐれた人達の書いたものを見ても直に創作として許すべきものはその人達の全生涯を通じて數へるほどしかない。それを見ても、創作の難いことが今更のやうに感じられる。(「春を待ちつゝ」一五五頁)

と氏自ら云はれたが、島崎氏には詩から散文に轉じられた最初のころからこの『嵐』まで、一貫した寫實家としての一面がある。氏の散文藝術の基調は即ち『漸くレアリテエにふれはじめたばかりである』ところの日本の文藝社會の中に、飽くまで『私は一寫實家として進んで行くことを恥としない』とするところの、徹底した現實主義者(リアリスト)としての態度である。『春』、『家』、『新生』そして『嵐』との間に、島崎氏が現實主義者としての、成長と成熟とを見ないわけには

行かない。氏は、最初からして現實の生活記錄をつくるだけに滿足しなかつた。ルソーの『コムフエッション』の最も早い讀者だつた氏が、その著物によつて、生涯の生活の方向にある深い暗示をうけたことは察するに難くない。懺悔と告白、全生活のあるがまゝの表白の欲求は、人の本能的發現の一つであると共に、近代人の特色でもある。島崎氏の現實主義には、一面にこの熾烈な主觀的要求がある。然し、『新生』から『嵐』へ來ると、そこには在來の自己告白的の欲求が、新しい一つの轉向を示してゐる。島崎氏最近の著しい傾向であるところのいくぶんの象徴的の要素と、美しい藝術的風格をもつた汎神論的世界觀（人生觀）の要素が全面に芽ぐんできてゐる。

『嵐』は背丈ののびてゆく子供たちが、背くらべをする賑やかな騒ぎやそのための柱の古い傷跡などから序述がはじまる。その描寫がすでに、單なる寫實ではなく、よき象徴的の意味をもつて訴へかける。子供たちの生活や父親の子供たちに對する深い煩ひなどが、單なる寫實に止るべく、餘りに、よき象徴的の意味をもつて表現されてゐる。ある人々の云ふやうに、描かれた生活は平凡であるかもしれない。然し、そのよき平凡を通じて、普遍性のある現代の社會生活の一斷面が象徴的に表現されてゐる。現實主義に徹した氏の、新しき象徴的の要素には、いはゆる象徴主義の病的な曖昧さや不明瞭がすこしもない。それは極めて明朗な、快適な、健全なユーモアと美を含んだ象徴主義的要素である。

『伸び支度』などで示されたところの、すべての若きもの、新しきもの、伸び育つものへの祝福と憧憬は、『嵐』の中にも全幅面にみちあふれてゐる。『伸び支度』にはかう書かれた。

『溢れて來るものは、すべて濟い。あだかも春の雪にぬれて反つて伸びる力をます若草のやうに、ひとなりざかりの袖子は一層いき〳〵とした健康を恢復した。……（中略）……袖子の母さんは、彼女が生れると間もなく激しい産後の出血で亡くなつた人だ。その母さんが亡くなる時には、人のからだから差したり引いたりする潮が三枚も四枚もの母さんの單衣を雫のやうにした。その恐ろしい勢で母さんから引いて行つた潮が——十五年後になつて——あの母さんと生命の取りかへつこしたやうな人形娘に差して來た。空にある月が滿ちたりかけたりする度に、それと呼吸を合せるやうな奇蹟でない奇蹟は、まだ袖子にはよく呑みこめなかつた。それが人の云ふやうに規則的に溢れて來ることは信じられもしなかつた。故もない不安はまだ續いてゐて、絶えず彼女を脅した。袖子はその心配から子供と大人の二つの世界の途中で路端に息づき佇へてゐた。

と、一人の少女の心と肉體の春のめぐんでくる頃を描いて、氏はその中に、若きもの、新しきもの、伸び育つものへの祝福と憧憬を、無韻の詩に織りなしてゐる。『嵐』に來ると、その藝術的風格をもつた汎神論的世界觀（人生觀）がさまざまな社會現象に對しても、肯定的に、しかも同感と理解とをもつて觀察することにさせてゐる。生長さかりの四人の子供たちの、各々の才能や體質に應じて生きてゆく道を考へてやる父親の心、それが同時に、父親自身の生きて行かうとする意志のうごきでもあるのだつた。『……そして、その墓地から起き上る時が、どうやら自分のやうなものにも來たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、「父は父、子は子」でなく、「自分は自分、子供は子供等」でもなく、ほんとうに「私達」への道が見えはじめた』と考へるやうになつたのだつた。そこに、氏はいはゆる『さびしい嵐』にもたとへられた七年間の氏自身の内面的及び生活的の苦悶と鬪爭の跡を自己告

白して居られると共に、この新しい主觀的境地に立つて、自分自身とその環境とを、そして、現在及び來たるべき時代と社會とを觀察し、理解しはじめ、且つ自らもまた生活しはじめやうとして居られるのであると思はれる。

そこにはすべての新しき出發がある。この作に描かれた、氏自身の思想も、生活も、生活態度も、生活意識も、すべてがこの新しき出發への準備として、過程としてばかり見られなければならない。この作の中に描かれたそれらのものをそのまゝにとつて、現在の氏の思想として主張として、乃至は理想そのものとして取扱ふことは正しくない。『嵐』は最近の氏の自己告白であり、同時に、新しい出發のことばでもある。『嵐』によつて、最近の氏の新しき時代と社會環境とへの接觸點を求める意志を表白してゐられるのを見るならば、また、『食堂』に於ては、氏のこの心的生活を象徴化されたやうなひとりの女性の性格とその生活を見ないわけには行かないのである。

三

以前の時代については云はず、島崎氏の近業だけについてみると、『ある女の生涯』(大正十年)以來、『三人』(十三年)、『明日』(十四年)、及び『食堂』(十五年)まで、一連續の各篇には、氏が現代の時代とある社會環境に生きて行くそれぞれのゼネレーションと教養と氣質とを代表する女性たちの性格とその生活とを描いてあるが、氏の象徴的態度と、汎神論的態度とは、のちになるほど、より濃厚に、より力強いものになつてきてゐる。

島崎氏のフェミニズムは、極めて早い頃の抒情詩にも現はれてゐるが、それは氏のその頃のよき友だつた北村透谷氏の影響と共に、近代歐洲の浪漫主義文藝と基督教思想の感化にまで遡つて考へねばならない。氏のフェミニズムは浪漫主義から自然主義へ轉じ、理想主義から、リアリズムに沈潜するに至つても、一つの力強い基調をなしてゐた。實に、現代の時代と社會環境の下に、女性の生活がどんなに無言の犧牲と迫害のうちにあるかを心づくものは、ある意味でのフェミニズムに進む外はない。島崎氏のフェミニズムは一方は女性たちのあるがまゝの現實に對する深い觀察と理解から、また一方は氏の本來の理想主義的氣質と思想的傳統から由來してゐる。

『ある女の生涯』に描かれた老女と、『食堂』の女主人公の老女と、いづれも同じやうなゼネレーションに育つた人々ではあるが、一方は自我の強い、いづれかと云へば悲劇的な性格をもち、一方はすべてに耐え、すべてをうけ入れる弱いが故に強い性格のもち主である。『食堂』には、舊い時代に屬する人々が、どうしたらば、新しい時代と社會との調和點を見出して、自分もまた共に生活して行けるかといふ課題の解決を求める作者の心が現はれてゐる。『嵐』に對する批評に對する無言の答へのやうな氏の別の一面がこの作の主題に象徴化されてゐる。

『今度といふ今度は私も眼がさめました。…今度の震災は何もかもひつくり返してしまつたやうなものです――昔からある屋臺骨でも――舊い暖簾でも。上のものは下になるし、下のものは上になるし――もう今迄のやうな店なぞを夢に見てゐる時ぢやありません』

『上のものが下になつて、下のものが上になるなんて何だかお前の云ふことは恐ろしい』とお三輪は云つてみた。

『いえ、さう云ふ時が來てゐるんですよ。』と新七は言葉に力を入れ

て『お母さんだつて御覧なさいな、茶の湯や衍元がこんな時の役には立ちますまい。そこへ行くと、お力なぞはお母さんのやうなたしなみはないにしたところで、何か斯う下から頭を持ち上げて來るやうなところがあるぢやありませんか。あれにはさう云ふ强いものがありますよ……』

『食堂』に描かれた生活の雰圍氣は、かうした時代と社會の轉換期の、社會現象だつた。その中に置かれた一時代前の階段とゼネレーションに屬するお三輪とよぶ老女にとつて、理性的には、すべてのことが不可解で、そして異樣な底知れない驚怖を感じさせるものばかりだつた。かの女の長い間の經驗や智慧でもつてしても、それをどう理解することも出來さうになかつた。たゞ、彼女には、生れたまゝの素直な、あたゝかい、素朴な本能的な感情と、女性特有の何ものにも耐え忍んで生きてゆく不思議な生活力とがめぐまれてゐた。彼女は滅びてゆく自分の階級と時代を惜しむ思慕の淚にかきくれながら、やはり新しき時代につれ立つて、どんな運命にもしたがつて生きて行かうとする女だつた。そして、つゝましやかに、自分だけの仕事を守つて、周圍のために出來るだけのことをつくして生きて行かうとする女だつた。彼女は自分の心ひそかに人々に分れをつげてまたもとのかくれ家に歸りかける。

明日もあらば—また東京を見る日もあらば—そんな考へが激しく彼女の胸の中を往來するやうになつた。彼女は自分の長い滯在がこの食堂に働く人達の妨げにならうかと考へ、上京して見て反つて潤和へとこゝろざすやうになつた。彼女は親に從ひ、子に從ひ、孫にまで從つて來たやうに、どんな運命にも逆はうとしなかつた。

かうした年老いた一人の女の性格とその生活をもつて、島崎氏は何の意味を象徴して居られるかは、私にもおぼろげながら推察することが出來ないでもない。私たちは、如何にしたら、過去の階級と時代とに屬する人が、新しき時代と社會とにどこまでも調和を見出して、自分もまた、ともに生活して行けるものかどうかといふ課題に對する氏のしづかな答へがこの中に讀みとれる。お三輪といふこの老女は、氏の新しき心境と思索の一面を象徴してゐるやうにも思はれてならない。

『食堂』の老女に對して、『明日』の中の娘は、新しく生きて行かうとする若いゼネレーションを象徴してゐる。いはゞ最近の島崎氏の全生活の三つの側面は、『嵐』『明日』、『食堂』の三篇にそれぞれ具體化され、象徴化されてゐるやうに私には見うけられるのである。『明日』の女主人公はおせんとよばれる教養も知識も乏しい町娘である。たゞ、この女には何ものをもしのいで生きて行く素朴な力強さと生れながらの情熱と意志とを惠まれてゐる。明日を約束されてゐるものはかうした人々ではあるまいか。『おせんが明日を待ちうける心は、ほと〱嵐をまちうける心だつた』と氏は書いてゐる。が、彼女はその實・どんな恐しい嵐にもたへて生きてゆく力をもつた女性として現はれてゐる。彼女にはどんな嵐をもしのいのびてゆく若さと新時代とがある。自分たちの戀愛をさへ叫ふことの出來ない弱い無力な職人や、過去の因襲の中に、こり固まつてどうにもならない家庭の中に、この若い女性は明日をまち、嵐をまち、つひに職人にも肉親にも反いて、自分自身のみちを切りひらかうと決心するのだつた。島崎氏はこの平凡な若い女性の中に、すべての嵐をもしのいで明日への、新しい時代と社會

への準備をとゝのへてゐる頼もしい精神を象徴して居るのである。

私たちは、『嵐』、『明日』、『食堂』の三篇を通讀することによつて、島崎氏自身の全身の自畫像が私たちの心象におぼろげながらも、うかび上つてくるやうに思はれる。それらはいづれもが單なる生活記錄でもなければ、また客觀描寫の小說でもない。いづれもが、氏自身の全生活の文藝的表現であり、創作である。そしていづれもが相まつて、最近の氏自身の生活と心境と思索とを私たちに理解させる。

四

『ある女の生涯』、『三人』の二篇については、私も曾てやゝくはしく書いてみたことがあつた。『或る女の生涯』では一人の女性が、失敗した結婚のために、慘ましい肉體と精神の傷害をうけて、年老ひ、氣が狂つて、見も知らない瘋狂院の一室で死んでゆく迄を、序述したものである。おげんといふその老女は、六十に近づく老齡の身に、故鄕を去つて、流離の旅に出なければならなかつた。彼女は自分の精神がすでに人なみでなくなつてゐる。それに自分は氣がつかないで、悶え、苦しんだ上句、瘋狂院の一室で、身うちのものもゐない、孤獨の中に死なねばならなかつた。最後には生來のはげしい氣象が靜まつて、髮を剃りたいなどと云ひ出してみるその老女の心に、島崎氏はまだ時代の夜の明けない暗鬱中にゐる舊いゼネレーションに屬する日本の女性を表現して居る。『三人』ではめざめかけた過渡期の知識ある若き女性たちの生活の惱みと悲劇を描いてゐる。この三人の女性たちは、それぞれ專門教育をうけて、時代と社會環境に對する觀察の眼もひらけかけてゐる。現代の深い時代と惱みとに行き當つて、それを切りぬけて行くには意志の力の足りないインテリゲンチヤである。彼女たちの理性や知識だけでは生活の行き詰りを切りぬけることが出來ない。嘆くにも甘い感傷の涙ではなしに、苦い冷たい涙がとめどなく頰をつたふばかりである。知識あるものの惱みは深い。こゝに『三人』の中の過渡期の女性の獨特の生活の惱みと悲劇が在る。

『ある女の生涯』が舊いゼネレーションに屬する日本の女性を表現し、『三人』が過渡期のインテリゲンチヤに屬する若き女性を描寫してゐるならば、『明日』と『食堂』ではまたそれぞれ別の型と性格の舊き新しき女性を創造されたのである。この數年に亘る島崎氏の思索と觀察の結果が、氏を暗鬱な懷疑と苦悶の夜から、次第に明朗な肯定と祝福の朝まで導いてきたのであるが、それはまた、氏自身の步みと共に時代と、社會環境が、さま〴〵の激しい嵐をしのいで新しき春へ、新しき曙へ、と進んで行く步調の足どりを氏自らが直感して居られるためではないだらうか。私たちは時代と社會環境とともに步んで行く、島崎氏の步一步の足跡を、氏のこれらの作品に於いて最も明瞭にみることが出來るのである。

私たちは作家を、一個の文藝人として見ると同時に、一個の社會人として、社會生活者として、觀察し、批判することが最も妥當であると思ひ當つてゐる。したがつて、またすべての文藝的表現が、何を書くかを離れて、如何に書くかを問題にすることは全然無意味に考へる。文藝的表現が、その生活現實をはなれ、時代と社會環境をはなれて、たゞ單に、如何に書くか、如何に巧みに書くかだけを問題として

ゐたならば、たちまち、彼れ自身の生活からかけ離れ、時代から社會生活からかけはなれて、たちまち行き詰り、頽廢してしまふ外はない。何を書くかが決定することによつて、即ち何を主題とし、何を對象とし、如何なる觀察と主觀との見地に於いて書くかゞ決定することによつて、如何に書くかが、即ち如何なる文藝的表現の技巧、形式、文體をもつて書くかゞ必然的に決定されてくるのである。すべての文藝家と、そして、すべての文藝的表現、創作をこの意味から觀察し、批判することが妥當であると私たちはすでに、考へ當つた。そして、私たちはまた考へる、……いくたりの文藝家が、そして、どれだけの文藝的表現創作がこの意味の觀察と批判の對象として値するだらうか？

島崎藤村氏のいま迄の生活と作品の歴史は、いはゞ、現代の日本の文藝社會の歴史であると云つてもいゝと思はれる。氏はそれほど永く永く時代と共に、そしてわが文藝社會と共に歩むで來られてのである。然も、人の生活とその歴史には、決してきは立つた區劃はないものである。それは、徐々なる變化の連續である。例へば島崎氏の歩まれた生活のやうに、日本の文藝社會の歴史のやうに、最初のロマンテイシズムのめざめからナチユラリズムの深い反省に往き、そして最近の新しき理想的現實主義（現實的理想主義）までの、その間幾多の消長變化を經て、矛盾から統一へ、統一から再び矛盾への道程は、決して一足とびの飛躍ではなく、徐々な、斷へざる、デアレクテイツクな變化の連續である。

それにしても、斯くも、永く、永く島崎氏は彼れの生活とその藝術的表現の歴史を歩みつゞけて來られたことではあらうか？ひとの生活の成長、變化は、極めて徐々であり、そしてデアレクテイツクな道程を辿るものである。私たちが、島崎藤村氏の生活と、その藝術的表現の歴史とを區劃づけて、

一、『藤村詩集』の時代（浪漫主義の時代）
二、『破戒』『春』『家』の時代（自然主義の時代）
三、『新生』及び『エトランゼエ』の時代（新現實主義の時代）
四、『嵐』（『ある女の生涯』以後『食堂』まで）の時代と區劃を分けて觀察することも出來る。恐らくは、在來の文藝批評の見地に於いてならば、かうした區劃を分けて、個人及び文藝社會の歴史を觀察することを常習としよう。然し、かうした表面的の便宜の方法によつて、人或ひは集團の生活とその歴史を批評することは餘り好ましく思はれない。私たちはかうした傳統的の方法をすてゝ、かう考へる。島崎氏の全的生活（その藝術的表現も）の歴史は、一個の社會人の、ある時代と社會環境に成育したゼネレーションの一人の、永い永い、徐々なる變化の歴史である。島崎氏は、いつも休まず、努め、努めて、社會と時代と共に、歩んで來られた。いなこの後も、氏は愈々努めて、社會と時代と共に、そして、日本及び全世界の文藝社會と共に、つきざる道を倒れるまで歩みつゞけられることだらう。

人は、時として、島崎氏について、ゼネレーションの差違から來る不滿や批難をいだくことはあり得る。然し、それはまた、氏自身にとつて、一つの刺戟ともなり、よき內心の糧ともなるだらう。氏はいつも歩んでゐる人である。生活してゐる人である。たへず、新しく、歩んで、生活してゐる人である。來たるべき日は云はずとも、今も、い

ままでも、氏は餘りにも、するどい直覺と智慧と、更に論理とをもつて、時代と社會に、たへず新鮮な觸手をのばして居られる。その敏感な觸手は、いつも、氏をあるがまゝの現實そのものから遊離させることがないし、また、氏をして、そのあるがまゝの現實に對するあるべき理想を把握してゆくに十分である。

現實主義と理想主義と、一見正反對の生活的及び思想的の態度のやうに見られる。けれど、理想主義者なるが故に、現實を愛し、認識し、執着するのではないか。現實を愛し、執着し、認識する現實主義者なるが故に、理想を追求し、把持するのではないか。理想主義者と云ひ、現實主義者と云ひ、窮極するに、人が生活する態度の盾の兩面ではあるまいか。更に云へば、あるがまゝの現實を愛し、認識し、それに執着するが故に、同時にまた、あるべき理想を憧憬し、追求し、把持するのである。この故に、現實主義に徹する者は同時に、理想主義に徹する者であり、理想主義に徹する者であるためには、現實主義に徹する者としての半面をはなれることは出來ない。

そして、現實、對象に對する愛、若しくは同感と理解と、或ひはまた理論的認識とが深く切實であればあるほど、彼れは現實と對象のあるがまゝの實質を把持し得る。彼れのこの現實的態度が、深まり、擴大すれば、やがて、象徴的態度、汎神論的態度を含んでくることがある。然し、本來の現實的態度が稀薄にならずに、しかも、象徴的態度藝術的風格を持つた汎神論的態度を加へて全的に深まり、擴大するものは、極めて少數の。特殊の人々の晩年にばかり見るところである。

最近の島崎藤村氏の藝術的表現が、在來の現實主義或ひは現實的態度の外に、象徴主義の要素或ひは象徴的態度、汎神論的の要素或ひは汎神論的態度を加へ、深め、擴大してきてゐることは少しく注意する讀者の氣付くところである。私たちはそれについてはすでに、少しく觸てきた。たゞ、此上には、島崎氏の生活と文藝的表現の將來の成熟と發展を注意深く見守りたいと思ふ。

が時として、島崎氏を、一個のつくり上げられた偶像として見るものではない。その反對に、偶像破壞の氣もちから氏を見るものもないではない。が然し、そのいづれもが、島崎氏自身及びその生活と文藝的表現、創作に對して無關係である。何よりも氏は現代に歩み現代の社會に生活する私たちの同時代者のひとりである。この意味をもつて、氏の過去があり、現在があり、そして未來があり得る。氏の歩みには氏の個人的及び社會的生活とその文藝的表現の生活にはいつも、たへず、いろ〳〵な矛盾對立と、その矛盾對立を克服止揚するディアレクテイツクな發展があり、進化がある。卽ち眞に人の生活とその歷史とがある。私たちは氏のそれを觀察、理解しなければならないと思ふ。

五

人は老年の終りまでも成長し、成熟する。人の生活の不斷の、徐々なる變化は、たへず、人を成長と成熟に導く。この不斷の、徐々なるディアレクテイツクな變化は成長の理法である。舊い形而上論者ならいざしらず、我々の同時代者の辨證法論者であつたならば、この成長の理法を會得してゐるはづである。

近ごろの島崎氏にとつて、來たるべき老年といふことが、甚だ問題となつてゐる。老年は、氏にとつて、禍ひでなく、むしろ祝福でさへある。氏は『飯倉だより』にも『春を待ちつゝ』にも、近づいて來る老年と人生の冬を迎へるために色々な思索と苦悶を經驗された跡が見うけられる。然し、最後には、その老年と人生の冬は、光り輝いた、微笑と祝福にみちたものであることが明らかになつてくる。もちろん人にとつては、生理的の老年はさけ得られないものであるが、同時に、心理的の老年とは、萎縮でなく、若さの成熟であり、完成した青春に外ならないのである。この意味で、氏は永久に若々しい青年の心を失はれないであらう。それにしても、この『飯倉だより』、『春を待ちつゝ』に書かれた氏の感想はどれもが樂しく、美しい。その一語一語に島崎氏獨特の言語づかひをもつてした、文藝、藝術、思想、社會現象などについて智慧と直觀とそしていくぶんの獨自の論理をも含んだ觀察や思索のノートである。

然しそれにしても、氏の中の若さと青春が、愈々熟し、完成するばかりで、決して涸渇しないのは、氏が時代と共に、社會と共に、歩んで行かれるからではなからうか。また、氏が理想と光りとをめざして進む、本來のファウスト的な氣質からではなからうか、それ故に、やがて、いとも輝きと祝福にみちみちた、眞の老年が、氏の上に來やう。その眞の老年とは、同時に成長し、成熟した若さと青春である。島崎氏の明朗な象徴主義と美しき藝術的風格を具へた汎神論的世界觀（人生觀）とはこの眞の老年期に於いてのみめぐまれ成熟するところのあるものであるやうにも思はれる。

私はそれについて嘗てから書いた。……もともと島崎氏は、プロテスタント風の基督教の信仰に養はれ、且つロマンティシズムの情熱と理想に育つて來られた。なかごろ自然主義の運動によつて、氏の元來の理想主義が、根深いリアリズムの中に沈潜させられたが、氏は現實の暗さや虛無感の中に安住して、むしろ安易に享樂を感じてゐることの出來る人ではなかつた。島崎氏は自然主義リアリズムの洗禮をうけながら、なほ且つ現實の絕望と暗さと虛無感の彼方に、希望と明るさと理想を期し、且つ求めて止まれなかつたらしく思はれる。そして、最近の氏の心境と思想とは暗さを完全につきぬけた明るさ、朗かさを見出された。或ひはそれをたしかめられた。氏のいはゞ一種の汎神論的の見かた、考へかたは、最近の氏の著作の至るところに散見して、私たちを微笑ませ、希望づけられるのである。

暗鬱をつきぬけた光明と理想、老熟した若々しさと情熱。美しい藝術的汎神論の見かた、考へかた。それらを最近の島崎藤村氏の作品に、心境と思索とに於いて私たちは感じることが出來る。

島崎氏は絕望し切り、虛無感に安住し切ることが性格的に出來ない人であるらしい。安易さとなげやりの生活に一刻もたへられない人であるらしい。初期の作品。例へば『春』の中の岸本三吉といふ人物が島崎氏の青年時代の面影を寫してゐるとするならば、そこにも氏の同じ性格が窺はれる。自然主義は、氏にあるがまゝの現實に深く沈潜して、すべてのものに對してあるがまゝに直面することを敎へた。氏はそこから再び現實の中に、光明と理想とを把握することを學んだ。氏は自分自身の胸の中に『太陽を掲げた』のであつた。島崎氏は『太陽の言葉』の中で、彼れが生涯この自分自身の太陽を光明と理想を求めてきた道程を象徴的にのべて居られる。

……それにもまして忘れがたいのは、初めてわたしの中に太陽の登つて來たことを感づいた時だ。青年時代のわたしの生涯は艱難の連續で、ほと〳〵太陽の笑顏を仰ぐといふことなしに多くの暗い月日を過した。……日光の饑ゑ——このわたしの要求はかなり强いものであつたと見えて、明けさうで明けない薄くらやみが懶いに行つた

時には、わたしもひどくがつかりした。わたしは幾度か太陽を見失つたこともある。太陽を求める心すら時には薄らいだこともある。……けれども、一度自分の内部にも太陽の登つて來る時のあることを知つたわたしは、幾度となく夜明けを待ちうける心に歸つて行つた。……わたしは三十年の餘も待つた。おそらく、わたしはこんな風にして、一生夜明けを待ち暮すのかも知れない。しかし、誰でもが太陽であり得る。わたしたちの急務はたゞ〳〵眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等の内部に高く太陽を揚げることだ。……このわたしたちの力强さに比べたら、太陽のことは想像も及ばない。絶え間のないあの飛翔と、あの跳躍、夜毎の沒落はやがてまた朝紅の輝きにと進んで行くあの生氣、まことの老年の豐富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが最も若いといふことには、わたしは心から驚かされる。『お早う』とまたわたしは聲をかけて見たが、返事がなかつた。しかし、わたしはこの年になつて、また自分の内部に甦つて來る太陽のあることを感づくところから見ると、どうやら夜明けも遠くないやうな氣がする。

この象徴的な、無韻の散文詩的表現の中に、最近の島崎氏の心境と思索が、どんなに力强く、全體的に云ひ現はされてゐることだらうか？私たちは氏の永い過去の生涯と歴史とを考へずには、これらの言葉を聽くことが出來ない。氏の五十何年の苦鬪の生涯は、最近に至つてはじめて、行くべきところにまで行きついたとも考へられる。すでに氏には、明日を迎へ、新しき時代を迎へる用意が出來たのだ。そして、氏は自分自身の中に甦へつてきたところの新しい『太陽を揭げる』ことが出來たのだ。

島崎藤村氏について、書きたいこと、語りたいことは、まだまだ、いくら書いても盡きないやうである。ことに氏自身のことばをもつて、氏の生活とその文藝的表現についてのべることには、私などよりも、たとへば『藤村の歩める道』の著者達が居る。この好ましい著述は、恰かも、ゲーテに於けるエッケルマンのやうな親しさにゐる山崎斌氏の書いたものである。それにしても、島崎氏の生活とその文藝的表現との歴史を十分に理解するには一つの世界とその歴史を理解するほど困難なものが澤山ある。

私はいま、ひそかに空想に描いてゐる一つのドラマがある。それは演劇的の動作ではなしに、一個のひとの全生活とその歴史の各々の斷面を描く四幕ものである。青年期のなやみとロマンテイシズムの情熱を描いた『春』と『藤村詩集』の時代を序幕として、壯年期の『家』の時代を第二幕とし、中年期の『新生』の時代を第三幕として、最後に、すべての人生の嵐と暗黒をしいので、再た新しく明朗の肩をしづかに呼吸する白髮の老翁がすべての新しきもの、生ひ育つもの、みちあふれるものを祝福と微笑をもつて見守る動作とことばを描いた第四幕に終らせたいと思つてゐるのである。（完）

ケマル・パシヤ會見録

山本英輔

千九百二十六年九月十一日午後、軟らかい夏の陽が新興の都アンゴラのスロープを輕くなでゝゐました。

この日、大統領の應接間の、それは水色の壁に圍まれた、さほど廣くない長方形の一室の入口で、私は、豫て我等を待ち受けたケマル・パシヤと最初の堅い握手を交換するのでした、彼はニコリともせずに……。

傳統を生命の如くに尊重する人々から見れば、恰も反逆兒であるかの如く、卒然歴史ある君府を捨てゝ草原の眞中に首都の建設を急ぎ、歐洲大戰後悲境の最低度に沈湎せる土耳古帝業の復活を第二義とせる彼の政治的手腕に對し、列國は擧げて驚異と猜疑と、そして彼につきまとへる遊蕩を風評して、侮蔑の眼眥をすら投じて幾ばくもない時でありました。

前日の午後四時半、我等は（出雲、八雲の兩艦長、幕僚若干、小幡土耳古大使、土國駐在海軍武官山村少佐、宗村大使館書記官、海軍練習艦隊司令官たる私）君府の對岸、アシヤ河のハイデル・パシヤ驛發の汽車で新首都訪問の途につきました。

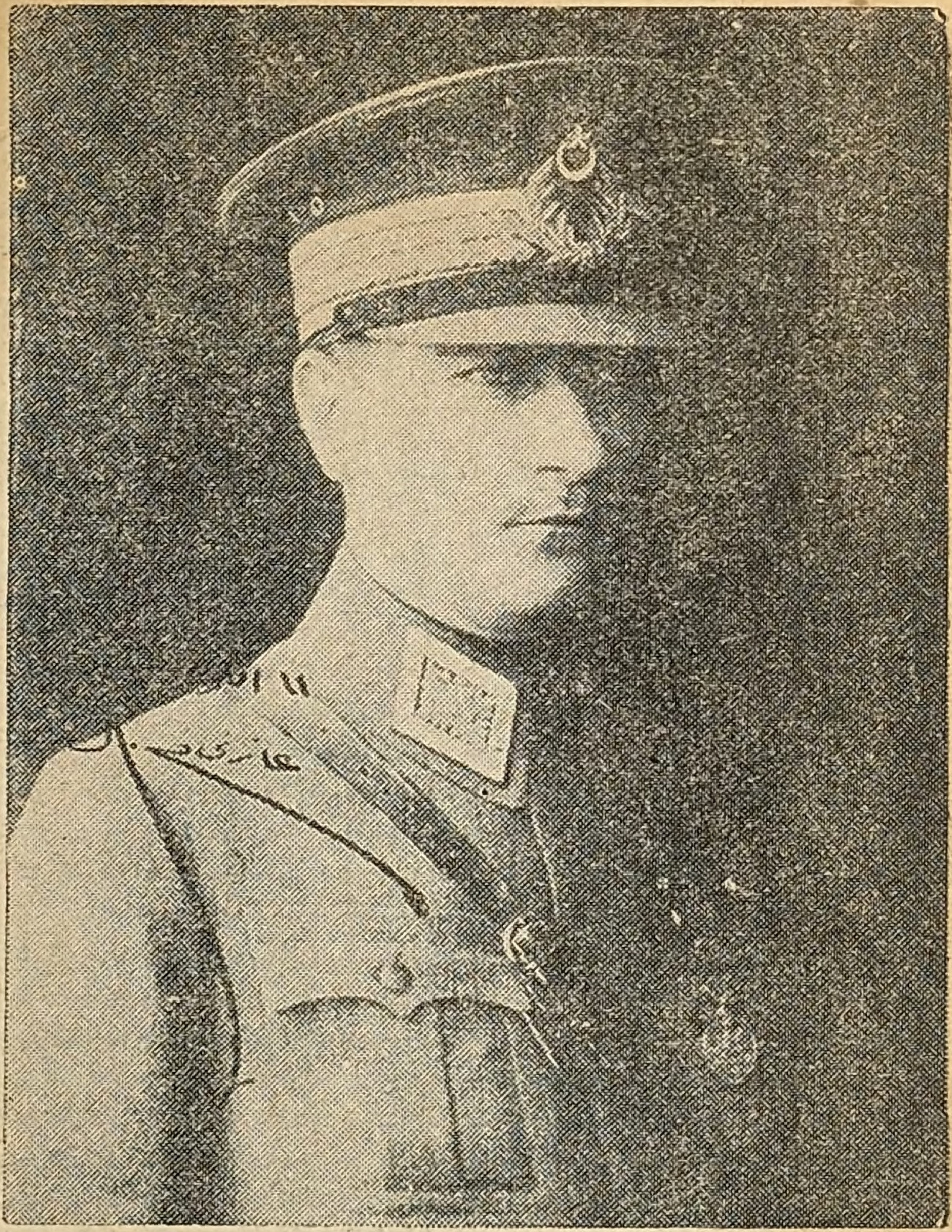
こゝで、土古耳國民の對日感情を述べるならば、彼等は我が艦隊の到着を一日千秋の思で待ち焦れたのでした、日土國交恢復、使節交換に覺醒された國民は、遙かに極東の島帝國研究に沒頭し、その急速な進歩の跡に驚異を感ずると同時に、同じく亞細亞民族てふ喜悅に滿足の意を表し、早くも遠く離れた親戚の來訪を受けたるが如く全土の民衆は緊張し、加ふるに三十六年前、土古耳使節を乘せたるエレグロール號はあの通り無殘に紀州の熊野灘に沈沒し、その生存者を我が比叡、金剛の兩艦によつて送還された古い好印象を蘇生せしめ、恩義に酬ゆる意味も多分に盛られて、我が艦隊の君府に投錨するや、全市は歡迎の一大渦紋と化したのであつた。

斯うした歡迎の渦きを後に、我等は鐵道沿線の左右に迎接する、良く耕まれた畑、實た果樹等異國の風物を觀賞しながらダラ／＼上りに奧地へ奧地と馳るのでした。エスミツドで陽は沒し、明くれば草原と呼ぶ荒漠たる枯野原を過ぎて、十一時四十分といふに漸くアンゴラに着いたのでありました。旅裝を解くべきホテルすらない新開街を、嚴然たる儀仗兵に護られながら、我等は先づ海軍大臣の招待會に臨み、式武官の通告によつて其後午後四時といふに大統領官邸へと赴いた。

大統領官邸は、アンゴラ停車場の南方、チヤンカヤ丘上の山陰に作られた二階建て、途上中腹と覺しき所に、露西亞、獨逸の兩大使館がありました。

玄關の次の謁見所に導かれて間もなく、右手の扉を排して現はれたのが大統領ケマル・パシヤです。小幡大使と私とは大統領に向つて左、土耳古外相と式部長官とが右の席に着

上圖はケマル・パシャ最近の照影
下圖は、ケマル・パシャ及夫人、山本中將、小幡公使等の寫眞





き、小さな茶卓を挾んで彼は先づ小幡大使に
「久しくお目にかゝりませんが、最近健康は如何ですか？」
と尋ね、大使は「頗る元氣です、有難う」と應酬して次で私との會話に移りました。
　モーニングを着て、時計の鎖をチョッキの上ポケットに騎兵型につけ、ハンカチの端を上着のポケットから覗かせた彼は、骨格逞しき一個の偉丈夫である。彼を特長づける俺まで濃い眉。——鋭い眼對手の足許から上へ見上げる癖、白人に近いまでに見ゆる白皙な顏、稍赤味を帶びた健康さうな双頰、薄い唇を堅く結んで頸の細く突き出た男性的姿態。一見するに彼は全身意志の結晶のやうである。そして華麗な、爛熟の極に達した舊都を捨てゝ沙漠の如く荒凉たるアンゴラに鍬を執るに相應しい風雲兒であります。
「君府には幾日碇泊なさいます？　此の度の航海では日本から何日かゝりました？」
私に與へられた質問の第一矢はこれである
私は
「八日間碇泊するつもりです、本國からは二ケ月を要しました」
「モット早くは來られませんか。」
「急げば一ケ月で來られます。」
「貴下は海軍々人ですから、陸上よりも海の方が面白いでせう、それを何の爲に此麼山奧まで來られました？」
「お言葉の通り、私は海の人間ですが、貴國を訪問した以上、親しく世界的偉人である貴下の謦咳に接する事を冀つたのと、且つは新興の氣溂る貴國を知らんがためには、私をしてアンゴラに來る事を餘儀なくせしめました。」
「有難う、貴下は日露戰役に從軍しましたか。」
「從軍しました、今回貴國を訪問した軍艦出雲の僚艦として旅順の海戰を最初として、あらゆる戰鬪に參加致しましたが、幸に微傷だも負はず、近くは日獨戰に際し、青島を攻略しました。」
私の言葉の終るを待つて、彼はニユツと微笑しました、彼は人と對談中滅多に笑はない、從つてこの「微笑」は貴重なものとして誌して置きませう。彼は、
「日露戰爭當時私は、參謀本部に居りました、日本軍の勇敢な動作の報告に接する毎に、パンフレットを作り、軍隊教育の資料として國內の各隊に分配した記憶を持つてゐます。眞實日本は立派な將卒を持つてゐて、健羨の至りです。」
「さうです、日本は立派な軍人を持つてゐます、然しこれは國民一致の精神が一貫してゐるからであります。」
「國民精神程偉大なる力を有し、且つ尊重すべきものはない、これを維持する事が國家當面の急務であります。」
「凡そ武器は時と共に進步し改革されて行くが、これに配するに國民的大精神の作興が重要事であります、日本に於ては、精神修養の目的のもとに、柔道、角力、擊劍等盛んに獎勵されてをります、かのダンスの如きは、この意味から見て百害あつて一利なきものと思ひます。」
何も知らない私が、かういつてのけると、彼は微かに苦笑して話頭を轉じるのであつた。(これは後に聞いた事であるが、彼は大のダンス黨で、ダンス攻擊の私の言葉を不愉快に感じたのであつたらう)

「君府は如何でしたか」
「海上から見ても、上陸して見ても風勝絶佳のところと思ひます、然し私は前にも申しましたやうにそれ以上に貴下に謁するのを無上の光榮としてアンゴラを訪問致したのであります」と云へば、彼は氣持よくほほゑみながら、
「それは非常に嬉しく思ひます。然らばアンゴラの感じはいかがですか。」
遷都以前は人口僅かに三萬、近時漸く十萬を算するに致つた大原野の中の小都會を、言葉を極めて賞讃する事を避けた私は、
「將來立派な大都會となるでせう。」
と答へるより他はありませんでした。すると彼は、大きく首肯しつつ、
「さうです、必ず立派になります、その時再び訪れて來て下さい。」
いかにも希望を將來に懸けて、彼は理想の實現に自信あり力ある面持でありました。この時珈琲が運ばれて、私との談話は、しばしたたれたのでありますが、國際關係を重視する彼は思ひだしたやうにかたへにありし小幡大使を振りかへりながら、日本大使館は何日頃アンゴラに移るかを尋ね　大使は「目下政府に於て豫算編成中なれば、議會に提案し、その通過を待つて直ちに移轉する」旨を答へました。次で別室に控へて居つた我が兩艦長以下が謁見の爲め導かれレモン水のもてなしに舌鼓を打ちました。その間私は式部長官に向ひ「今日は世界的偉人に面謁するを得て極めて愉快に思ふ、そして此の會見を永久に記念する爲めケマルの寫眞を下さるまいか、この旨大統領に直接話してもよろしきや否や」を質すと「却つて直接願はれた方がよろしいであらう」との事だつたので短刀直入に申し出ると。
「それ程に私を思つて下さる事は感謝に堪へません。」
と却つて感謝の言葉を與へた上、即座に二枚署名してくれました。私は最後に今回我が練習艦隊が、貴國を訪問して受けた手あつい歡迎を謝し、尚ほ
「ハルキー兵學校參觀の際、嚴格なる規律の下に元氣に滿ちた分列行進が行はれた、それを見ては、如何なる強敵と雖も擊破し得る事を信じます、併せて私は貴國の民族的基礎既に確立し、將來強大なる國家として全世界に雄飛すべき幸運を持たるゝ事を信じて疑ひません。」との挨拶をするや。ケマル之に對して、
「オットマン帝國の滅亡と同時に滅亡に近い狀態にまで立到つた我が軍備ではありました、が然し、將來は必ず面目を一新するでありませう。」
辭するに當つて昂然として述べた抱負、これ軈て彼が近東の大立物として、多難なる國政の上に揮はんとする怪腕の片鱗と見る事が出來るでありませう。
私はこの會見記を擱筆するにあたり一國の存立上多額の財政的犧牲を拂つても尚ほ忍ぶべしとする産業政策を度外視し、遠く首都を遷して酒色に耽る彼の昨今を指摘して、その將來を揣摩する世の所謂識者に對して、一言せんとするのであります。抑も君府はボスポラス海峽に直面し、現在は一門の防備砲臺も持たないのであります。過去の歷史に徵すれば、相當防備の威力ある砲臺を有して居つた當時に於てすら尚ほ且つ四隣の脅威を受け、內政は常に諸列强の力に依つて左右さるゝの

狀態にあり、孤立國としての眞實の價値と體面とを保持する事が極めて困難とせられ、時の政府當局は何れかの國の支持を必要とせられてゐました、しかも無防備の今日一度弩級艦の砲口を向けられたとするならば、土耳古は一戰を交へずして敗者の憂目を見なければならないのであります。彼は歷史的に繰り返された古土耳古の弱點を知るの聰明を缺いてはをりません、果然現代の科學を以つてしては、何等の脅威を齎らさざる着彈距離以外の地に逃避し、こゝに悠々彼の政策を實行せんとはするのである。これ遷都の第一理由であります、第二は舊都君府はコスモポリタンの地で常に各國革命家が集合し、加ふるに頽廢的氣分が骨の髓にまで沁み込んでゐる土地です。今や新興大衆相一致して新土耳古の建設に全精力を傾倒するのとき、酒と女の淫蕩な巷は、彼にとりては廢墟に等しいものです。廢墟はまだ忍びませう、質實剛健の氣風を涵養して、新興精神を打込まんとしつゝあるこの際國民の意氣を銷磨せんとする銷磨の棲家からは、一刻も早く退いて新鮮な空氣を呼吸しなければなりません。即ち草原のアンゴラへ！アンゴラへ！と急いだのであります。

小亞細亞人を國外に驅逐して、一時產業不振の聲をきいたが、異分子を一掃した結果は、自然國民的に常時の總動員となり、一大新首都の實現への努力の跡を雄辯に物語り、奮鬪の一助ともなつて、民衆の力は新興の一途に集中され、新土耳古國の再生再飛を見る、賢明なる政治家の執らねばならぬ當然な政策を、勇敢に實行したものと見るの他ありません。即ち彼にして凡庸政治家であつたならば、國家を永遠に生命づける大策の前に盲目であつたかも知れませんが、早くより父を喪ひ、母の手に具さに艱難と戰ひ、祖國の窮狀を眼前にして、身軍籍になりながら斷然軍隊の力の國家を救ふに足らざるを自覺し、政界に走つて今日を成した程の彼であります。遷都日尙ほ淺きに酒色に耽溺して國政を顧みずといふが如きは、列國に對する彼一流の僞裝であります。しかも彼を補佐するに明敏なる總理大臣エスミツト・パシヤがあります。本年四十八才のケマルは、過去十五年間にバルカン第一次第二次の戰爭、世界大戰と引續いた戰爭の慘禍に、疲弊しつくした國内の狀勢を達觀し、露西亞を初め隣邦諸外國と平和的外交態度に出で、教育、鐵道、衞生、產業等鋭意内治に專念し、往年師團長としてガルパリー半島に英佛聯合軍を粉碎した意氣を以つて、新興土耳古の運命を開拓していくであらう事を私は信じて疑はぬのであります。

長編小説 地妖（1）

三上於菟吉
木村莊八畫

發端　いかにして地に妖を生じたるかの事。

——ぐわう〳〵と、荒々しく闇を搖して騒いで行く暮春の夜風は、聽く耳にさう〳〵しく焦立たしいが、さりとてじつと聽きすますと、何とも言へぬ寂しさ、遣瀬なさ、胸苦しさをも感じさせる。さうした大南風が宵の口から吹きつのつて、夜が更けると辰巳の空からもく〳〵と黒雲がはびこり出し、どうやら嵐にもなりさうな模樣——で、このあたりに軒をならべた廻船問屋、船宿どもも、この風に火を出しもしては、といつもより早仕舞をしてバタ〳〵大戸を下してしまふし、永代から川下へ泊つてゐる何艘となない船も、暴れにそなへる手立をしてお互になるべく安全な場所へと漕繰りこむやうな格好で列を成しながら、悄乎とした灯をめい〳〵に一つづゝ、紅黄いろにまどろませてゐるのが妙に儚なかつた。

河岸に人通りがパッタリ途絶えて、夜廻りの拍子木が間遠に遠のくと、チラ〳〵みえてゐた星空が、今はすつかり薄氣味惡い雨雲で一ぱいになつて、とうたうポツ、ポツと、大粒な雨が落ちて來た。時々ヒラ〳〵と雪のやうに白いものが闇に漂ふのは、思ひかけきや、晩櫻の落花がどこか遠いあたりから荒つぽい風に捲かれて飛んで來るのだ。ひたり〳〵と、いよ〳〵荒らいで岸を打つ波——眞黑な沖では、もう暴風になつてゐるかも知れぬ。

——と、こんな時刻、こんな空合の夜ふけの河岸に、俄かにあらはれたひとつの人影、忍びやかに、小刻みに油堀の方から、大河の方へ驅け拔ける。近づくに從つて、闇夜とはいふものゝ、ぼうとした水明りに頰、頸筋、素足のほの白さが、みる月があつたら瞳に沁みるかとばかり——疑ふべくもなく繊弱い娘——その娘が、もう少しで、荒らかな夜あらしに騒ぎ立ちつゝ、滔々と渦卷流れる水が、ざぶりざぶりと水沫を散らす河岸緣へ、駈けつからうとするあぶない瞬間！

ほんにあぶないその瞬間──前後の成行からみて、てッきり身投げ娘だが、一度ざんぶと飛び込んだら、この夜更けと言へ、荒模様と言へ、到底助かりッ子のない、そのあぶない一刹那に、バタ〱と褄先みだして追ひすがつた今一人──これも同じ年格好、同じ背丈、同じかよわさの娘だが、さすがに覺悟は極めてみても、黒く漲る夜の水を目の下に眺めて、たゆたふともなくたゆたつた先なる子の袂を摑みしめた。

「まあ！　何をなさる？　菊枝どの。」

ぐいと、纖手に力をこめて引き戻されて、相手はよろ〱とよろめいたがはじめて止め手に氣がついた風で飛八丈の兩袖で白く匂ふばかりな顏を蔽ひながら振り放さうともがくのだつた。

「お放しなすつて！　お姉さま！　お放しなすつて！」

「いゝえ──ほんたうに亂暴な！　無考へとも、愚かしいとも、言様のないことです──私がみつけたからには、どうして殺せますものか。」

と、抱き付くやうにして、死力をつくして食ひ止めながら、

「そのやうに暴れるなら、飛び込んでお死になさるもいゝが、それなら私も生きてはゐませぬ。お前と一緒に死にませう──さあ、お死に──私も一緒に死にますから──」

「──だつて、ああ！　お姉さま！」

菊枝と呼ばれる娘は、はじめてぐつたりと姉の腕に身を凭せて、わッと哭き出しさうになるのを、奥齒でしッかり嚙みしめて、肩を顫はせて咽び入るのだつた。

相手が鎭まつて、自分にからだを任せ切つて、泣き出したのをみると、一方もハラ〱と落涙した。やさしく肩に手をかけて、のぞき込んでいたはつて、

「わかつてゐますよ──お前が死にたい、身を投げようと決心した氣持はよくわかります──でも、御病身の叔父さまや、お前に死なれたら、片腕もがれたよりも手頼なくなる、この私のことを考へてくれたら──いゝえ、私、決して責めるのではないけれど──」

「ええ、ええ──濟みません──私、氣が違つたのでせうけど、でも、生きてゐるにはあんまり哀しいものだから──」

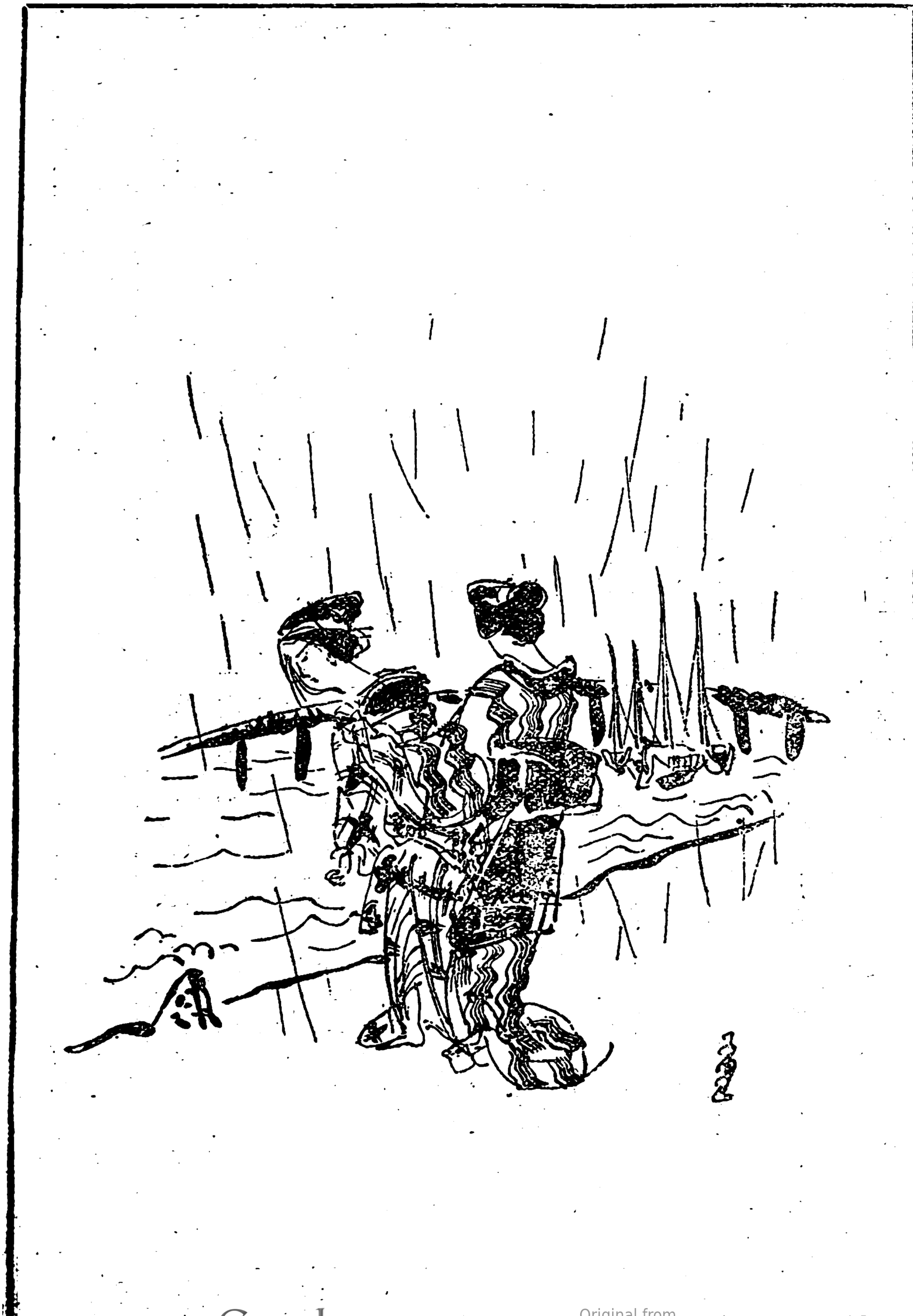
と、妹はせぐゝり哭きと一緒に、これまで何一つ隱し合ひも秘め合ひもしなかつたであらう、年さへ二つと違はぬ姉に取りすがつて詫びるのだつた。

「でも、人目にもかからなくつてよかつたこと──ほら、雨脚がこんなに強くなりました。」

と、姉は不幸な妹の背に手をまはすやうにして、元來た方へ歩ませて、

「ね、もし叔父さまが、お氣付きになりでもしたら、御病氣にも支るに違ひない──早く歸りませう、ね、もう哭かないで──」

かもめが暴しに吹かれて、哀しげに鳴きながら飛びすぎると、斜な



大粒な雨が重たいひゞきを立てて强まつて來る。

忙しく手頼なく、肩を寄せ合ふやうにして、美しすぎる二つのすがたは油堀の堀割の岸を、界隈切つての大問屋港屋の森と靜まつた構へをめぐつて、長屋つゞきのいぶせき裏町にはいつて行く。

——一口に港屋長屋と呼ばれて、こゝに栖む手合は、大工、船大工、左官、河岸もの、按摩、鍼醫にいたるまで、家作の持主港屋一家のお蔭の下に生きながらへてゐると言はれるこの露地並びの、一ばん奥に讀書指南の看板をかけた、棟割ながらいくらかみよげな家の前まで來ると、姉妹は、ぴたりと足を止め、息を詰めて、内部の氣配に耳をすます。

しいんとして、家内は死のやうな沈默。

姉はホッとしたやうに、妹の手を片手で引いて、片手で格子をソッと開ける。

「叔父さまはおやすみの容子——靜かにね。」

妹の咽び哭きがともすると高まるのを、叱いていたはりながら、足音をしのばせて上つた一間には、消えがての行燈がともつて、部屋隅には寺子の机が五六脚積み重ねられ、灯の下に近く、今まで姉娘がかかつてゐたらしい仕立ものの、黄八丈が、こればかり、あたりの幽暗さ、疊の赭さ、障子、襖の煤びと哀しい對照を示して、眞新しく美しかつた。

部屋にはいると腰にも膝にもまるで力を失つてしまつたやうに、ぐたりと頽れるやうに坐つて、ガク／＼と身慄ひをしながら、細い、白い頸元もたよりなくうなだれて、やがて袂のはしを嚙みしめてうつぷしになつた妹へ、姉は白湯を汲んでやつて、ひそやかに、

「ほんたうに今のことを、叔父さまがお知んなすつたら、御病氣が嵩じて、とてもお癒りにはなれまいよ——ね、もう哭いてはいけません——辛抱してネ、辛抱してネ——」

がくり／＼と妹はうなづく、それを眺めて、これも伊豫染めの袷の袖で顏をかくして、

「生きられないと言ふのもわかる、でも、お前が死んだとても浪吉さんが生きかへるわけでもなし——」

と、言ひかけて、淚をはらつて、姉は妹よりもなほ窶れた顏に、凄いまでキッとした表情をうかべたが、

「それに若し、私たちの推量通り、浪吉さんが若しや殺されでもしたとしたらその證據を握つてかたき討ちをしなければ、お前の女が立つまいと——私にすれば思つてゐる位です。」

落魄れても武家娘、ゾッとするやうな氣魄があつた。

さう言はれて、片手を疊に、弱枝も相手の顏を振り仰ぐやうにしたが、がつくりと頽れた手つくねの島田のほつれ毛が、紙のやうに青ざめた頰にすさまじい美を添へて、淚に濡れた瞳には思ひ入つた激しさがきらめき出した。が、その輝きはすぐに消えて、新しい淚があふれて來る。

「お姉さまはお氣強いから——私はどうしてこんなに意氣地がないのでせう。」

「いゝえ。」

と、姉は菊枝の涙の目を見据ゑるやうにして、

「私も女なら、お前も女、强さも弱さも變りはありません。夜の風を聽いてゐても涙がこぼれる程弱いのも女。だけど時と場合では大の男の胸元に匕首を突きつけるのも女です。第一今夜のお前にしても、思ひ詰めればこそあの黒い水の中へ飛び込まうとさへしたではないの？それ程につきつめて決心した位なら、死んだ氣になつて淸吉さんの菩提のために、もつと十分あの人の死に方を調べて見るがいいと思ひます。あと先の事情から、だれが聽いてもいぶかしい節ばかり——それはいかに港屋の若旦那が、横道ものでおいでだとは言へ、横戀慕にことを缺いて、淸吉さんをだれかの手で殺させやうとも思はれぬけれど——あんまり怖ろしい推測で、どうやら女の邪推のやうでもあるけれど、それにしても私には、どうしても合點が行かない氣がしてなりません。」

菊枝はじつとうなだれて、ボタリボタリと熱い涙をとめどもなく膝に落した。

ああ、彼女には、ひと月以前に港屋の持船に乘つて、地方まわりをするために、心をあとに殘しながら別れをつげに來た、あの美しい、悧發げなうら若い手代淸吉のすがたがあまりにはつきりと目に殘りすぎてゐる！　あまりにはつきりと心に燒きつきすぎてゐる！

その船が五日前に歸つて來て、船頭の口から、江戸川が利根本流から分れる關宿の激端——この川すぢ第一の難場ときこえたあたりで、戀人が夜深に舷から落ちて、水くづと消えたと聽いた時の驚き！戀は辛いもの、難儀なもの、いたましいものとは知つてゐたが、嬉しい思ひでの、あまりに短かかつたのに、哀しみはあまりに激しく、あまりに大きく、あまりに突然に襲つて來た遠慮深い若い同志の戀だから、手先を締め合つたことさへ稀れで、心と心との思ひをごく內場に運び合つて、目と目の呟きに夢のやうなはかないよろこびを貪つたまでであつたものの、それゆゑ却つて、內の慾求、內の願望、內の魅惑は、身も魂もそのために燃えつきんばかりであつたのに！

「姉の身で妹の戀を唆るやうなことをするのもと、今迄は口に出してあんまり言ひはしなかつたが、淸吉どのは町人でも、人品、縹緻、才氣もひと柄も押しも押されもされぬ立派な人、どうにかして一日も早く、お前方の戀をかなはせて、長年苦勞のたえない生みの親より恩のある叔父さまに安心させて上げることが出來たなら、この私の一生なぞはどうでもいいとまで思つてゐたのに——だからお前が、どんなにこの哀しみのためにわれを忘れても、狂つても、それも無理はないと思ふけれど、そこ迄思ひ入つたことなら、その遣瀨なさを死んだ氣で怺へて、あの人の死に方のあと先を突込んで探つて見るがいい——及ばずながらこの私も手だすけはする積りだから——」

よよと、泣きくづれる姉の言葉が消えたときだつた。煤びた間の襖間のかなたで、力のない咳ばらひ──姉妹が、さては病人が目をさましたかと、ハッとした刹那──

「淸乃──菊枝、これへ來い。」

と、皺枯れた、老の聲である。

二人は顏を見合せた。さては今の一部始終を聽かれてしまつたのか──當惑と怖れとがめい〳〵の顏をサッと走つて急には應へも出來ないのだつた。

次の間の聲はいくらか強められた。

「これへ來い、話がある──」

姉の淸乃は口籠もるやうに、やつと答へた。

「はい。只今。」

思ひ切つて、スッと立つて、襖を開けると、この一年、胃癌の病を煩つて、今は身うごきさへならぬ叔父が、枕に兩手を重ねるやうにして穴のやうに凹んだ、目に涙のあとのうるみを見せ、じつとこちらをみつめてゐた。

「菊枝、お前も來るがよい、是非とも今夜、お前たちに話して置かねばならぬことがある。」

淸乃は叔父の肩元に搔卷をかけてやりながら言ひわけするやうに、

「菊枝は何だか頭がいたむとか言つて、今夜は元氣がないのでございますよ。」

叔父は含笑つた──まるで艶のない、土色の脣を含笑ふやうにかすかに綻めた。

「いや〳〵、叱りもせぬ、責めもせぬ──この病みほうけた叔父に、お前たちを叱りつける元氣がある位なら──」

と、苦つぽく言つて、

「さあ、菊枝、お前もぐつと進んでくれ、わしは出來るだけ低い聲で話したい──聲さへ思ふやうに出ないのだから──」

うなだれて、姉の蔭に小さくすわつた菊枝を、あはれむやうに彼は眺めた。

「わしももう今度こそは、七日とは持つまいからだ──遺言と言ふのもあらたまるが。二人揃つて聽いてもらひたいことがある」

「まあ、そのやうな不緣宜なことを──」

と淸乃は、溫くなつてゐた藥湯をすすめて、

「何かお耳にさはつたことがあつたかも知れませぬが、お氣になさらず、お藥を召上つてお眠みになつた方が──私たちはもう少しお裁縫をして寢ますから──」

「いゝえ、もう慰めもはげましも、今となつては遲いわしだ。」

と、病人は藥に乾いた脣だけしめして、

「實はナ、お前たちの一生のために、言はずに置かう──默つたまま死んで退けやう──秘密はあの世まで、墓穴の底まで持つて行かうと決心してゐたことなのだが、このごろの菊枝の嘆き、今夜の成行を。

老人の早耳で聴いてしまつて、いろ〳〵思ひ合せると、どうしても、このまゝ黙つては死に切れぬやうな氣がして來た。」

と、洞ろのやうな目に、恒にない激しい輝きをドス白くきらめかせて、

「この橋爪右門は、亡い兄夫婦のあとを、お前たちをあづかつて、人並に育て上げようとした日から、いつか一度は此の秘密を打明けねばならぬのだとは知つてゐたが、浪人流浪の貧しい中にも、ことさら女房どもがみまかつて男手ひとつの屆かぬ中にも、日毎月毎に二人とも成人して行くのを見るにつけ、右門が武士はすたらうとも、この子供たちにだけは何も知らせず、無事な樂しい一生を、たとへ町人百姓の嫁にしても、送らせやうと思ふやうになつたのだつたが――」

叔父の右門は、苦しげに肩で息をして、

「それなればこそ、病氣でかうして寢てゐる耳に、港屋の手代清吉と菊枝とに何やら謎めいたことがあるさうなとひゞいても、それを黙つて知らぬふりですごしてゐたのだ――世が世ならとは思つても――かうした身の上に馴れて見れば、人間の仕合せといふものは、權門格式の中にばかりあるものでもない。好き合つた仲なら乞食非人の夫婦でも、呪はれた權貴の御殿で暮す人たちより、ほんたうのよろこびを汲み分けられよう――さればなにごとも秘めかくして、このまゝ清吉に嫁がせるのが、いつそ慈悲と考へたのだつたが――その清吉もどうやら非業で果てたさうな、ああ、やつぱりお前たちは、どこまでも呪ひを受けた姉妹だなあ――今次の間で、清乃が言つた言葉を聴いて、わしはもうかくさずに、お前たちがどのやうなむごたらしい運命のいけにえとして生れて來たかを、今夜こそはつきりと話して置かうと思ひ立つたのだ――」

ムズと黙り込んで、宙を睨むやうに、右門は慘と瞳を据えた。

清乃は膝を進めて、

「それでその秘密といふのは、一たいどのやうなことなのでございませう？ これまでほんに叔父さまから、何か怖ろしい裏のあるやうなお言葉は伺つたこともございませなんだが――」

叔父の額には油汗がジリ〳〵と浮んで來た。削けやつれた米かみから頬へ痙攣が走しり、聲はもつれた。

「なう、清乃、お前はさき程菊枝に戀人に敵があつたら討てとすすめたなう、清吉を殺した奴がありもしたら、生かして置くなと言つたなう――」

と、ギラリとみつめて、

「だが、敵を持つたら討たねばならぬ義理なれば、お前方にはもつと大きな敵があるのだ。」

「えツ？」

と、清乃はもとより、うなだれてゐた菊枝も擦り寄りながら、

「もつと大きな敵とは？」

姉妹の蒼ざめた顔に、サッと殺氣が流れたのは、叔父の口から語ら

るべき物語が、どのやうに呪はしく、憎むべきものであるかを、娘氣め直覺で豫想したからかも知れなかつた。

「もつと大きな敵とは、叔父さま、どのやうな敵でございます——若しや父上母上が——」

と、まなじりを釣るやうに、迫つて來る清乃を、右門は骨立つた手で制して、

「せくな。お前たちの浮世の仕合を全うさせようと、地獄へ落ちてから非命で死んだ兄夫婦の幽鬼に責められるのも覺悟して、口外すまいと思ひ切つてゐた大事を、今こそ言つて聽かすのだ、靜かに聽け。」

凄然として息を呑んだが——

「おお、かうして屋外を荒れ狂ふ荒しの叫びにも、わしには何だか冥途の兄夫婦の浮かばれぬ阿鼻叫喚がまじつてゐるやうな氣がする——清乃も菊枝もよく聽くがよい。お前たちの父親、母親、わしには肉親の兄者は、清乃が四ツ、菊枝が二つの緑り子の砌、今から十八年以前今ぞ世に時めく、旗本八萬騎切つての切れ者、百目鬼玄蕃の手にかかつて、暗々非業に仆れたのだ。」

「何と仰有います！　あのお旗奉行の百目鬼さまが、私たちの親の敵——」

清乃はさう叫んだが、菊枝は驚愕と恐怖に、しどろもどろに亂れてゐた。妹は今は戀人を失つた歎きも忘れたか、瞠目して我れを失したやう——

右門は却つて激情をさへも乘り越したやうに、眦は眦をささへ形ちを正して、いかにも旗奉行、九千石、お覺え目出たい百目鬼玄蕃は、お前たちの父伊皿子三彌夫婦を手にかけた當の敵じや。」

「え？　伊皿子とは？　三彌とは？」

と、姉妹の驚きは募るばかり、

「私たちの父上は、御家人橋爪兵馬と聽いてをりましたに——」

「佛壇のお位牌にも、俗名橋爪兵馬としるされてありますのに——」

と、口々に言葉せはしい。

「それといふのも、十八年以前、亡兄のわすれ片身お前たち姉妹を引き取つてどうにもして行々、かの敵に恨みの一太刀むくいさせたさにそれまで世を忍び仇敵の目をくらまさうと、ひとまづ江戸を立ち退き上州野州をさすらふ頃、かりに設けた僞名なのだ。このわしとても、橋爪右門とは假名、三彌の弟伊皿子右門——」

二人は驚きの果てに、身も魂も虚脱したか、茫然として叔父の顏をみつめてゐる。

「話すも穢らはしいことじやが、その當時はかの百目鬼もまだ壯年、恰度妻に死別して閨さびしい折と言へ、兩三年前召しかゝへた用人伊皿子三彌の戀妻の、あまりに美くしくやさしげなのに、邪しまな戀慕の末とうたう鬼畜の心と變じ、ある晩琴一曲聽きたいと所望して、花どのを奥殿にいざなひ置き、書院にて、だしぬけに三彌兄を無禮討ち——その引明け方に、花どのは良人が殺されたのも知らず、浅間し

いた玄蕃の閨で、舌を噛んで死なれたのだ——」

姉妹は、いつか互に擦り寄つて、わなゝきふるへる手を取り合ひ、ひしげるかとばかり握りしめつつ、息ざしは炎を吐くやうだ。

「わしはその頃、既に卅を越へた身であつたが、幼少より虚弱の身兄の情けで、嫁いで間もない女房どもと、ひそ〴〵と暮してゐた御家人——恥しながら、兩刀は手挾めど、武事にはうとく、文學を好んで詩、歌、俳諧に浮身をやつし、兄夫婦の急變、非命の最期に、見るも無殘な死骸を目のあたり見てゐながら、備きびしい百目鬼屋敷へ、切り入ることもならなんだ。口惜しさに齒噛みをし五臓を憤怒に燒き爛らせつつも、泣く〳〵お前たち二人を引取り、僅かの緣のあるままに、上州へは落ちたのだつたが——おお、三彌兄、花どののむごたらしげな呪はしげな、あの恐ろしい死がほは、今も目にあるやうに忘れぬぞ——」

清乃の聲は筒走しッた！

「だが——そのやうなことなれば。何でお上へ訴へて、是非を正しはなさらなんだ？」

「年若いお前のその訝ねはもつとも——だが——」

死病に憑れた右門の顏は、淺間しい嘲笑に歪んだ——

「そのやうに正しい世の中なら、心すぐな人々が、權門富家の邪曲の轍に虐げられて、泣きを見ることは少しもないのぢや。これだけは、よう覺えて置けよ、清乃、菊枝、この世では力あるものはいかなる罪業、惡事を働かうとも、いつまでも榮えてゐられるのだ。力弱く貧しいやからは、妻を奪はれ、虐げられ、果てはいのちを取られようといづくの天に向つても、愁訴さへかなはぬのだ。力や富は、どのやうな惡をも洗ひ流す、どのやうな罪をも塗りつぶす、——されば兄夫婦、お前がいかに清吉どのの、最期の模樣を知らうともがいても、もしもそれが港屋の手で成された惡業なら、とてもなみ〳〵の手立では知るとはならぬぞよ。港屋ほどの黄金があれば、八逆無道を犯さうとも、極樂淨土へも行かれるが此の世の中——あの時百目鬼玄蕃の罪狀をわしの手から訴へ出でようとも、玄蕃は井伊本多の顯紳とさへ緣ある家筋——無根の誹議との咎めで伊皿子三族が斷たれるが落なのだ。」

「そのお言葉が眞理なら、どんなに私たちが、親のかたきを討ちたくとも——」

と、清乃は叔父を見上げて脣を血のにじむ程噛むのだつた。

「それだからこそ、いつぞ何事も語らずに、お前どもに素直な女の仕合せを、此の世で享けさせようと思ふたのだが——しかし、何事も宿命じや。悲慘なさだめの下に生れたものは、いつまでも我れとわが假惜の業火に燒かれねばならぬ——わしはお前たちがかよわい女の身で、あまりに大きな恨みと呪ひに壓しつけられながら、仇、敵の榮えを目の前に、足ずりして生きねばならぬのがいぢらしいぞ。」

「では、叔父さまは私たちにはどうしても仇は返へせぬと仰有るのでございますか？」

——不思議にも、頽廢の世にも無慘な最期を今はじめて聽かされても涙は姉妹の蒼白い頰を濡らさなかつた——焦ら立たしげに、叔父に問ひ迫つた清乃の目は、熱い涙に濡れるかはりに、寧ろ黑闇の奥から射出ず、物凄い炎に赤くきらめいてゐた。

右門はじッと目をつぶつた。怪しい靜けさで彼は答へた。

「勿論、わしも、どうかなして、お前方二人の力で、怨敵を討たせたさに、それからの長い月日を悶えくらしたのだ。だが、何を言ふにも百目鬼は名だたる人物——過去の惡業はともあれ、萬夫不當の勇士の上に、これまで他人からさま〴〵の怨みも受けてゐれば、出、入、居、住に、オサ〳〵用心怠りない。とりわけて、百目鬼二天と呼ばれる辻左司馬、馬場壯平、戸ヶ崎流祖から破門は受けても、その流の劍豪、聽えた邪智のしれ者どもじや——正面からいかに押し迫らうとも、蟷螂の斧、繊手岩懸を打つのたぐひ——」

「では、叔父さまは、生みのふた親を、そのやうに淺間しい殺し方をした敵を忘れようと仰有いますの？」

清乃の辭色ははげしかつた。さう突きつめて問ひかけて、きゆつと嚙み〆めた唇が、どこか傷いたか眞赤な血が、細い糸を口尻に曳いた。

叔父は目を閉ぢたまま、すぐには答へない——苦しみと惱みとが極端に達したあとの、死のやうに怖ろしい暗影が、病み倒けた顏中を、不氣味な無表情で塗りつぶしてゐた、

「ねえ、叔父さま、教へて下さいまし、お願ひでございます。」

清乃が取つた手を、右門は振りはらつた。

「それまでに言ふか、清乃。」

右門の呻きはいつそ嚴そかだつた。

「わしにはたつたひとつの術しか無い。獸と爭ふには獸になる外はない。」

清乃と菊枝は、怨恚で輝やく目を、じつと見据へて聽きすます。

右門は皺枯れた咽喉の奥から呻きつづけた。

「鬼に刄向ふには鬼の牙が入要だ。邪しまなものには、邪しまな手立を怖れてはならぬ——わしはそれが言ひ度くなかつた——だが、どうせ、いぢらしい菊枝さへ、十九、廿歲のうら若い身を、自ら毀さうとさへ思ひ切つてゐるとすれば——」

突然、右門はカッと兩眼を瞠らいて、

「清乃お前はわしを問ひ詰めるが、生きながら鬼となり、妖魔となれと申せば成るか？」

右門のいくらか霜をまじへた、蓬々たる鬢髮は逆立つた。まなじりは激しく裂けた。鬼氣が病みさらばへた全身から迸つた。

しかし清乃は目も伏せなかつた。輝やいた目で見返して、却つて叔父をなだめるやうに、柔しい調子になつて答へた。

「一たん望みに燃えた女子は、生きながら蛇とも鬼とも成つたためしが、この世に幾らもございます。」

そして、俄かに艶然と——蒼ざめ果てた美女のおも立ちに、突然浮んだあでやかさは、寧ろ見る人を總毛だたせる凄さであつたが——彼女はニキマリと微笑んでつけ加へた。

「そのやうなことは、芝居狂言、草双紙にさへ、あまたあるではございませんか——」

右門は目を反けた——しかし、彼も哭かなかつた。菊枝はたゞじッと、細い頸を白く見せてうなだれてゐる。

清乃は今迄、かくも恐怖すべき物語を交したあととも思はれず、すんなりと言ひかけた。

「長ばなしで、叔父さまお疲れあそばしたでございませう——さあお藥をもうひと口、そしておやすみなさいましな。」

右門は今度も土氣いろに乾いた唇だけを藥に濕らしたまま、枯木のやうに瘦せ細つた身を、無言で清乃のするままに横たへた。

——間の襖は元のやうに閉ざされる。

ぐわう／＼とすさびつゞける眞黒な夜嵐、車軸を流すやうな雨——菊枝は行燈の下に坐つて、姉を眺めて、そして又しても泣き伏すのだつたが、清乃の表情は奇怪なまでに靜かだつた。

「菊枝、お前もさぞ氣根がつかれたでせう。床をのべて先きにお寢みなさいな。私はその急ぎの仕立ものを一寸でもよけいに縫つて寢ますから——」

縫ひさしの黄八丈を取り上げて、餘事は言はず仕事にかゝる。手元にはもう先程のわななきのあともなかつた。

× × ×

その翌日から、ひと言も言はねば、ひと口の藥も飲まず、勿論飲食は言ふも更なり、身じろぎすらしないやうに見えた本名伊川子右門は三日目の晴れた夕ぐれ朽木のやうに息を斷つた。武士のはしくれ、枕べに刀は置きながら、長の煩ひに自ら殺す力も失つた彼は、十八年間の重荷を下して、もう此の世に用のなくなつた殘軀を、刃のかはりに斷食と死を求める意思とに依つて仕末をつけたわけであらう。

——叔父の死を見ても、清乃は哭かなかつた。彼女はとかくこのごろ恩を賣りつける港屋一家や、近隣の人々に不幸を知らせる前に、これまでになく厚く化粧つて髮もつややかに掻きつけた。

そして菊枝は、姉が生れ變つたやうにあでやかに、よそほひをこらすのとあべこべにこの三日でいとゞゲツソリと、風にもたへぬまで瘦れ細つてしまつたのだつた。

（つゞく）



詩五篇

千家元麿

月

路次を出ると
月が出てゐる
長屋が並んだ
狭溢な路次の奥から
溷板を鳴らし歌つて出てくる子供らの上に
明るい大きな月が夢を浮べてゐる
星は冴えた光りの中に
銀河が零れてゐるやうに
天の一方にかたまつてキラ〱煌めいてゐる
あゝむさ苦るしい路次の奥も
この月夜には光りの宮殿だ
燈火が節戸から洩れて
月光と交じり、霜の花が溷板の上に夢と睨さ
髮を亂した母が飢じさうな子供らと
ゴタ〱眠る薄い壁の相隣る
貧しい長屋の破れた屋根の穴からも
星は美しく悲しげに見下ろしてゐる
あゝ月光よ、疲れ果て眠鎮つた都會の夜に
私はものを思はれて悲しくて眠られ無いのだ
こんな月明の清い夜
誰か貧困と勞苦と罪の生涯を思はないものがあらう
冥想と神秘に人の頭を狂はす月よ
深夜、陰暗く落ちてゆく月を見れば
自分と同じ貧しい人々の眠りの上を思はないでゐられやうか

あゝ月は泪を落してゐるのだ
月は大海の上にも、都會の上にも
凛々孤獨の人々の上に
月は、月は、涙をそゝいで居るのだ

夜の場末

空には青い星が
ウヨ〳〵と蠢めいて
寒い風がザワめく夜の潮の中を荒れ廻り
星の中を突切り、くゞりぬけ
町のこみ入つた通りのどこにでも
魔のやうに潜つて漂々と吹いてゐる
あゝ今晩も自分は外套の襟を立て
襟巻で顔の半面を隠して
すつぽり冠つた帽子の廂の下から
眼ばかり出して、探偵のような眼付で
うさん臭い場末の町を彷徨ふ

氷のやうな寒さに背骨は痛み
耳や鼻は殺かれるやう
私は辷らない用心をして
固く凍つた道を歩み
人出疎らに店々の燈火が
閑散に輝く場末の街を
安カフエや煮込屋の店先に
どてらを着た老ひたる無頼漢や
榮枯盛衰を知つた娼婦の成れの果てや
醉ぱらひ等が
おでん屋の爺仁と
不景氣と寒さを喞ち乍ら
己が昔話に花を咲かしたり
寒さに身の衰へを嘆じてゐる
これら一團の不幸な人々の上に
氷つた半月は青龍頭のやうに青ざめ
貧しい巷は犯罪區域のやうで

私の異樣な風態は探偵と見違へられさう

春の夜

町中に住んで居ても
春の夜は矢張り春の夜らしく
靜かにしめやかに朧ろだ
二三日ゆるむ寒さに
屋根の上では二匹の猫が忍び合ひ
ひつそりしづまつた往來を
人の出步くけはひも春めいて
浮き／＼してゐる。
屋根と屋根との間には
青い星が朧ろに瀲めいて
出かゝる月の遠いけはひも
遠い市のどよもしも佗い。
あゝ夜よ、孤獨な燈火が
ポツツリとともつた私の部屋で
晝間の忙しさに取紛れて
忘れて居た自分をやつとこゝに見出した。
もう今夜は私一人で
いつになく、靜かに恍惚として更けゆく夜と共
勝手な空想に耽らうよ
夜陰のつもるもの靜かさの裡で。
こうしてうつとりとして居ると
街の方を、木賃宿から出て來たらしい
流しの三味のあとから、
哀れな盲人が竹の笛を鳴らしてゆく
その陰氣な古風な笛の音は
安息と悲哀を感じさせる貧しい街の音樂だ。
その笛と三味の音をきいてゐると
星はいよ／＼蒼ざめ
屋根の上の猫の音樂師も
喉のヴホオロンを甘く鳴らす
夜の迷宮は晝を遠ざかるに從つて

愈々美しく、大きな月は屋根を離れ
夜間の超然とした天空は
甘美な魔力を帶びて完全してくる

月

月よ、成大の光りを引き摺つて
東から西に歩む
汝聖なる僧貌の月よ
汝はいかなる高僧か智者か
いかなる冥想の極致に
汝は淨罪の姿に照り輝き
人々を淨め勵ますのか
オヽ神秘な燦爛と輝く法衣つけし大いなる月よ

春の夜

空にはきよらかな雲母のやうな光りが浮んで
春の裝ひこらした白い木蓮(こぶし)が高々と立つてゐた
豐滿な白い花は天空に星の光りをあつめて
天空を祝ぐやうに立つてゐた

菜畑

瀧井孝作

冬越す魚に池に枯枝々をつけておく
庭の土鳩の啼交はす聲のはげしさ
淺い流滯をいぢつてる子の滯緣に臥
頸の長い牝鹿を捕へた（新婚の人に）

以上四句奈良にて作

閉ぢたる淺利貝歪んでゐる
裾端を鼠のたべた雨外套
菜畑へ子供のはいる裏庇
こして來て山を眺むれば田草取

以上四句京都にて作



詩三篇

堀口大學

すぎた日頃。

行つてしまつた
遠くの方へ
すぎた日頃は
よい日であつた

すぎた日頃よ
かへらぬ昨日。

泣くをやめよう
私のこころ
海と山との
景色がのこる
一人でながく
心のために

行つてしまつた
遠くの方へ
すぎた日頃は
よい日であつた

雪

あなたとお目にかかつた日
ほのかに雪がふりました

とけずに残る冬の雪
風の花とも呼びませう

今日も熱海に雪がふる
つもらずとける春の雪
海も芝生も一面に
ぬれてつもらぬ今日の雪

あなたとお目にかかつた日
私のこころのとけた日は
とけずにつもつた冬の雪

あなたとお目にかからぬ日
私のこころのとけぬ日は
とけてつもらぬ今日の雪

その日の雪や今朝の雪
私の戀とあべこべな
逢瀬をするかへんな雪

御返事

わたしのさびしさを
一緒に泣かうとおつしやるの
わたしの膝にもたれて
いいえ　奥さん　いけません
お泣きになつてはいけません

わたしが泣くのをおそれて
あなたのさびしさを
かくしてゐようとおつしやるの
私の膝にもたれて
いいえ　奥さん　いけません
おかくしになつてはいけません

あなたの心臓の燃えるままに
あなたのやさしさのみなぎるままに
私の膝にもたれて
身さへ世さへ忘れて
溺れてゐようとおつしやるの
いいえ　奥さん　いけません
溺れになつてはいけません

奥さん　わたしの膝にもたれて
あなたはその三つのあなたの
どれであつてもいけません
どれでなくてもいけません
奥さん　奥さん

すずめ

中塚一碧樓

雲のうすうす雀巣立ちたり
なか〳〵に雨のふりやまず春の水
二三軒棟のさみしきや竹の秋
われらゆく道もせに杉菜のしげり
一日一日山の霞みつゝわれら
雨ふりかけ咲いてゐる畦のたんぽゝの花
けふの日の暮るゝ葱のぼうずかな
風吹き來るこのあたり地の草青く
地やうらゝか二三ぼん樹のかげす
春夕の家に歸り來し家の空

本社の觀劇招待

二月十九日本社は本社のために關心せらるゝ方々を歌舞伎座に招待して觀劇會を催しました。現代著名の學者・思想家・藝術家・政治家・實業家等八百名に及び盛大な然も打寛いだ觀劇會でした。殊に各國使臣が此の招待會に出席して左團次、羽左衛門、梅幸の演ずる土蜘、兒島高德、道行旅路の花聟等を打喜び興じあえるは我社の國際的發展を意味するものである。

獨逸大使ドクトル、ゾルフ　同夫人
伊太利テイ、テイ、ラバゾナ　同夫人　ノビレ少將
和蘭公使イエー、ゼー、パプスト
露西亞代理大使ベセドウスキー　同夫人
秘露公使エメ、エリアス、ボンヌメソン
瑞西公使アルフレッド、ブルンネル
智利代理公使サン、クリストバル
瑞典公使オー、エヴエロフ
北米合衆國書記官其他數十名

白耳義大使ド、バッソンピエール　同夫人　同令息
葡萄牙公使ホセ、ダンコスタ、カルネイロ　同夫人
波蘭代理公使イエンヂエイウヰチ　同夫人
亞爾斯丁公使マリオ、ルイスデ、ロスヤノス
芬蘭公使ヂヨン、ゼイ、ラムステッド
丁抹代理公使アイナル、ヴエールム
墨國公使　同夫人
佛蘭西代理大使及大使館武官

三宅雪嶺　三輪壽壯　三宅正太郎　本位田祥男　永井柳太郎　富田勇太郎　米田實　瀨川昌世　森於菟　佐藤春夫　久米正雄　宇野浩二　森田草平　厨川蝶子　古泉千樫　恩地孝四郎

福田德三　朝比奈知泉　吉野作造　床次竹二郎　八並武治　太田正孝　中村唯一　青木得三　桑田芳藏　上司小劍　里見弴　戶川秋骨　茅野蕭々　三宅やす子　折口信夫　中川一政

堀江歸一　馬場恒吾　三宅驥一　德富猪一郎　杉村廣太郎　木村銳市　山根眞治郎　篠田義市　佐多芳久　正宗白鳥　菊池寛　川路柳虹　室生犀星　佐々木ふさ　前田夕暮　豐島與志雄

大山郁夫　昇曙夢　杉村楚人冠　梶原仲治　鶴見祐輔　加藤恭平　戶澤民十郎　今小路秀麿　河東碧梧桐　近松秋江　久保田万太郎　佐野學　窪田空穗　佐々木茂索　室伏高信　土岐善麿

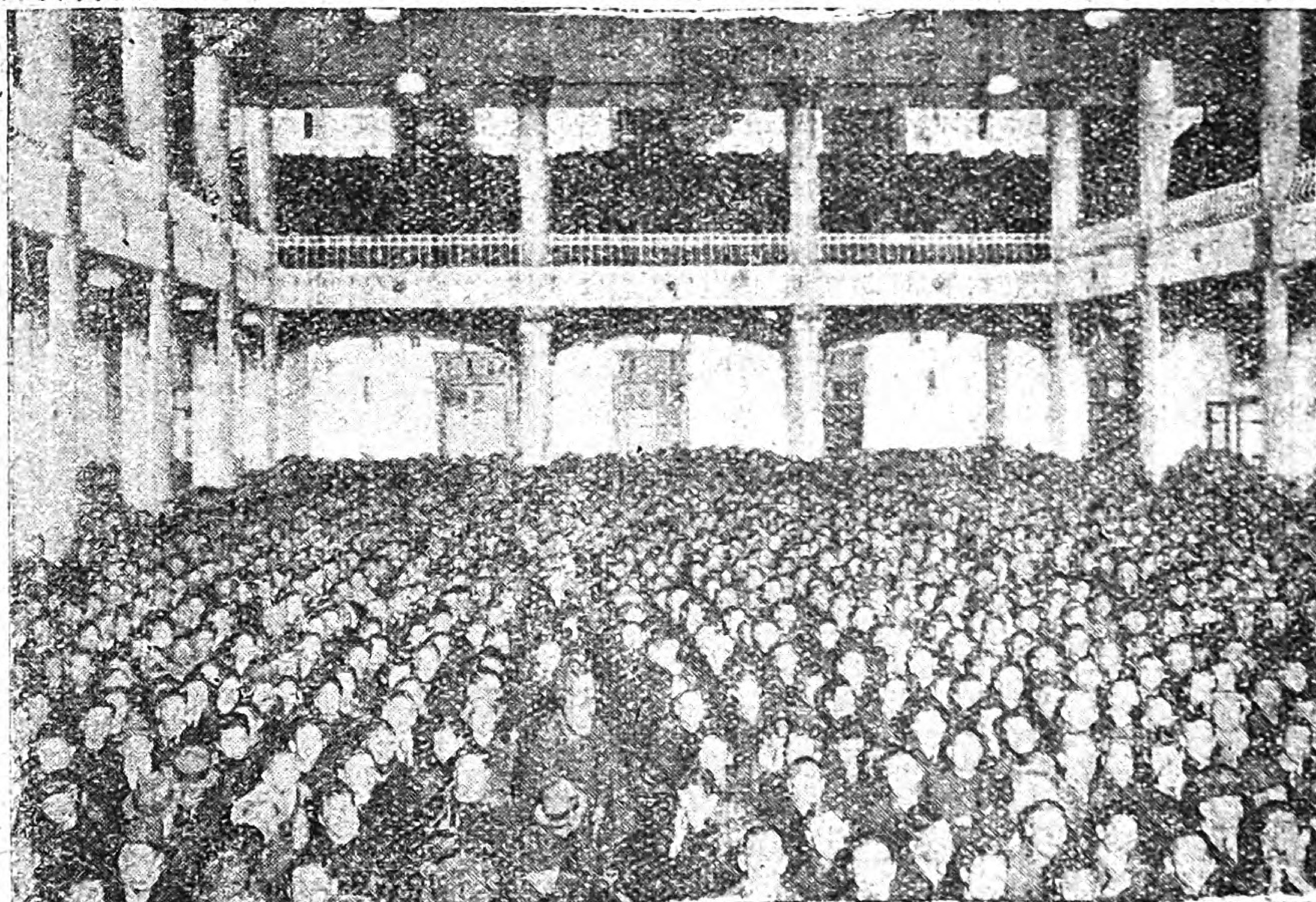
長谷川如是閑　杉浦非水　高柳賢三　山本英輔　松木竹二郎　近　憲二　加藤鋼一　平塚米次郎　高濱虛子　德田秋聲　福本和夫　北澤新次郎　岸田國士　高畠素之　鈴木文治　山内得立

吉江喬松　有島生馬　今村明恒　堺利彥　加藤恭平　緒方竹虎　山本信博　長井止一郎　江見水蔭　泉鏡花　廣津和郎　權田保之助　秋田雨雀　白柳秀湖　松岡駒吉　小野武夫

松本亦太郎　廣島晃甫　武島又次郎　增田義一　杉山義雄　明石德一郎　大野孫平　福田良太郎　田山花袋　芥川龍之介　吉井勇　猪俣津南雄　馬場孤蝶　高橋幽吉　石川三四郎　河西太一郎

土肥慶藏　石井柏亭　那須皓　光永星郎　今北策之助　岡部賢一　大橋光吉　河合晋　内田貢　齋藤茂吉　吉田絃二郎　小川未明　吉屋信子　中村武羅夫　河野通勢　谷[illegible]德三郎氏等

（順序不同）



講演會の盛況

大阪に於ける 本社講演會

粉雪ふる二月二十七日、我社は大阪中ノ島公會堂に於て、本誌愛讀者の爲めに講演會を開催しました。寒さにも、雪にもめげず午後一時の開會といふに九時頃より來會者踵を接し讀者の來會するもの實に六千人。正午には場内立錐の餘地なく、遠來の讀者に「滿員お斷り」の札を出したやうな氣の毒をいたしました。此點は充分に皆さんにお詫びします。聽衆は實に肅靜で、六時間半の長講演に咳一つ出さず熱心に傾聽された。全く其類を見ざる模範振りを示して下さつた。そしてこんな盛大な講演會は未だ曾つて我國にもないほどで、我社はすべての來聽者たる本誌愛讀者に心から額づきます。（左記講演の順）

開會の辭　山本實彦

大學といふもの　佐藤春夫

舌頭小説　芥川龍之介

不景氣と景氣の分岐點について　堀江歸一

漫談（プロレタリア文藝について）　久米正雄

奇術閑話　阿部德藏

まごころ　里見弴

太平洋上の風雲　鶴見祐輔

獨唱　永井郁子女史
伴奏　箏　宮城道雄
尺八　吉田晴風

講演の大要

社長　山本の開會の辭

『改造』の十倍擴張運動は諸賢の同情と聲援により近く實現可能となります。ただ我誌は部數を多く出すことのみを欲しません。過去の光榮ある歴史に鑑み本誌は摯實に世の動向――我國の動向そして我國民として何處に行くべきかを示標するために十全の意をこめて――そして諸賢の行衞につき指導者たり、好侶伴たることについて並々ならぬ苦慮をいたしています。それがために、そして我々の行衞を遮ぎるものに對して勇ましい解放戰を戰ひつづけました。未だ戰ひの途中にあります。此の戰ひがより多く好果あるやうに皆さんと協力邁進したいのであります……我誌は茲に物質的に多大の犧牲を忍んで擴張運動を斷行しました、勿論讀者が多くなればなるほど第二次第三次の値下も可能であるし、そして内容もいよ〳〵豐富充實して行くことが出來るのです。我民族、我が國を飛躍せしむる爲には我誌がモット廣く讀まれることを希望します。又、廣く讀まれても我誌は一點恥しいところなく、否我誌は國民的誇躍として世界のどこに推し出すも矢張り嶄然頭角を拔く第一流の雜誌たる自負があります云々

久米氏講演の梗概

私に今司會者が言ひ譯して吳れた通り、風邪氣で、こんな廣い公會堂で、こんな澤山の聽衆を前に、話をする勇氣は阻喪して居るが、前に芥川龍之介も言つた如く、改造社のポスターとして、其色彩の配合上、連れて來られた上は、何か喋らなくてはならない。就ては別に準備もない事だから、プロレタリア文學に就て、平素考へてゐる所を、漫談の形式で話さう、と前提して、聲樂家關鑑子女史が、嘗つてそれを唱つて、警視廳からお目玉を食つた「赤旗行進曲」と言ふ歌を例に取り、此の歌のメロディーは、一個別に存在して居て、一方では、「演習」と稱する歌詞がついて居り、考へように依つては、軍國主義の宣傳とも取れるものであるが、それに關鑑子女史の夫君たる小野宮吉君が、「……友の腕よ、吾の腕よ、固く結びていざや行かん、吾らが、き旗の下に」と言ふ歌詞をつければ、、旗行進曲となる。此の歌詞は一方は明に軍國的で、一方は赤化思想であるが、その歌詞如何に係らず、歌の節は同一である所に、何かプロレタリア藝術に對する一種の批判を齎らす。と分り易き例より初めて、結局、メロディーを藝術の本質と見做せば、プロト云ひプルと云ふも、只歌詞だけの役目を勤める事になるし、又更に論を進めて、プロレタリア藝術が、完全に成立するためには、歌詞に必然な節調を生み、内容と形式とに眞にプロレタリア藝術としての改革が生ずるか、又はプロレタリア民謠とも稱すべき、自然に發生したプロレタリアの聲――卽ち小説で云へば、眞のプロレタリアの「私小説」が生じた場合だと斷じ、さう言ふ藝術の完成は、寧しろ双手を擧げて望むべきであるが、前記プロプル兩派

の闘士たちの、目前にのみ局限される文壇難に依つて、洒りを弄すに過ぎない現狀を嘆き、皮肉の中にプロレタリア文學派諸氏に望むところあつて降壇。

景氣不景氣の分岐點

（堀江歸一氏講演）

不景氣の狀態

金利の低落を豫想して、好景氣を迎へるには、金利の低落、金融の緩漫と爲ることを出發點としなければならない。蓋し金利低廉であつて、營業者は負債を整理し、又新に資金を調達して、事業の擴張に資す可く、一方に金利の低廉は株式の市價を高値にして、其利廻りを低落せしめ新に市場に供給される資金をして新事業に向はしめるからである。此點から考へると昨年十月日本銀行が所謂第二次利下（大正十四年四月商業手形割引日歩を二錢二厘から二錢に引下げたのを第一次利下と云ふ）を行ひ、商業手形割引日歩を一錢八厘に引下げたことは、景氣恢復の道程に於て、輕々に看過す可からざる事實である。既往の事跡に徴すると、日銀の金利歩合は金融市場に對して、常に大なる統轄的勢力を有し、同銀行が利下を行へば、直に他の諸銀行をして日銀の爲す所に追随せしめて、些の誤まる所なきを得たのである。然るに昨年十月は些か此事例に反し、京阪兩市場の市中諸銀行は年末に臨んで金融の緊縮することに掛念を懷いて、日銀の利下を目前に眺めながら、預金利子を引下げる態度に出でず、斯くて日銀の金利政策をして孤立無援のものたらしめた。斯くては日本銀行は金融市場を統轄する機能を失つた次第であつて、日銀の權威から云つて、甚だ面白からざる事實を生じたのである。然しながら年末の金融市場の無事に經過する一方に、金融緩漫の勢は年初に入つて、益々其强きを加へた爲め、始め高利を維持することに頑强であつた銀行業者殊に東京方面の營業者も此大勢には對抗し切れず、遂に二月上旬に至つて、預金利子を引下げることゝ爲つた。既に一方に日銀の割引歩合が引下げられ、他の一方に預金利子亦引下げられたとすれば、市中諸銀行は營業資金を調達する二様の方面に於て、負擔の輕きを告げることゝ爲つた次第であつて、當然の順序として、次いで來る可きは貸出割引歩合の引下であり、斯くて金融緩和の事實を確實のものたらしめなければならない。現に[illegible]日銀第二次の利下は約四個月を經て、其效果を現はすを得たのであつて、遲蒔きの嫌はあるとしても、日銀の市場に對する統轄的勢力は依然として相當の强味を持つと云へる。昨日歩一錢八厘は之を年利に換算して、六分五厘位に當り、之を

國際間の關係

に徴して、英蘭銀行の割引歩合五分、北米聯邦準備銀行の割引歩合四分に對照すると、餘程の高利と爲るし、又内地關係のみに就て考へても、中央銀行の歩合が六分五厘位であり、市中諸銀行の歩合亦其れよりも幾何かの上位に居る次第であつては、事業を振興せしめることも出來ず、又事業の振興に依つて、物資や勤勞に對する需要を旺盛にし以つて景氣恢復に伴ふ利益を洽く世間に及ぼすことも望まれない。卽ち景氣恢復の勢をして確實のものたらしめるには、過般の第二次利下に次

いで、

日銀の第三次利下

が近く行はれ、續いて第四次以後の利下があつて、我國の金利歩合をして餘程低い標準點に下降せしめることを必要とする。然らば此點に於て、日本銀行は斯る利下の政策を徹底的に行ふものであらうかどうか。元來中央銀行の金利政策に於ける根本方針としては、

大勢順應と市場利導

との二者があり、前者は市場に於ける大勢は次いで、日銀自ら金利を上下するものであり、後者は近く大勢の斯くある可きを察知し、之を促進する目的を以つて、金利を上下するものである。日本銀行は實に多年大勢順應を方針として、金利政策を決定して居つたのであつて、金融の狀勢緩漫と爲つて、市場の金利の低落した後を承けて、日銀亦利下げを爲したり、金融の狀勢緊縮し、市場の金利亦昂騰した際に、之に從れざるの意を以つて、利上げを爲すの常であつて、多年間此方針に遵つたのは、二三の事例を數へるに止まつた。然るに昨年十月の第二次利下に於ては、日銀の爲す所は實に多年の慣例を破つたのであつて、市場に於ける利下の狀勢の未だ充分に醸成されざる際に、市場を利導する見地に於て、利下の擧に出でたのである。而して當時は上述の如く、直に市場利導の實を見るを得なかつたとしても、四個月を經た本年二月に於て、略ぼ其目的を達するを得、日銀の市場に對する統轄的勢力の必ずしも衰へたに非ざる事實を立證した以上は、今後に於ても政府は政治上の權略から、一日も早く景氣の恢復を促進する考へに動かされ、日銀に命じて利下を行はしめるかも知れない。是れが近き將來に於て、第三次利下の行はれるであらうと云ふ推測に對して、有力なる論據と爲るのである。唯第三次利下が行はれて、市場の大勢が之に追隨するかどうかと云ふ問題に就ては、私は本期議會の議事に關係するもの少なからざることを考へる。今期の議會が無事に進行して、一方に

昭和二年度の豫算

が成立し、他の一方に震災手形問題が解決したならば、其金融市場に及ぼす影響の良好であることは、吾人の看過す可からざる所である。蓋し明年度豫算案に對して、金融上の見地に於て、重要視す可きは、歲計剩餘金の繰入に依つて、國債償還金に四千四百五十一萬圓の增額を告げる一事であつて、此事は自ら國債價格を高からしめ、資產として國債を所有する銀行に資金融通力の餘裕を生ぜしめると共に、擔保として國債を利用する者に擔保價格增加の利益を收めしめ、二者相俟つて、金融上の働きに大なる力を與へる所以と爲る而して震災手形問題の解決に就ては、特に或る銀行若しくは其銀行と特殊の取引關係を有する或る政商に利益を與へると云ふ故を以つて、今や政界に大なる波紋を畫いて居るが、之を全體から云へば、震災手形は之を所有する銀行に取つては、一種の病であつて、爲めに銀行の資產を固定せしめ、其金融的能力を局限したもの少なしとしなかつた。今其れに對する救濟法新に成立して、震災手形が公債と爲り、公債として、銀行に資金を流動せしめる力を與へることゝ爲つたならば、金融市場に一道の光明を放つに至ることは、論を俟たない。卽ち今期議會に於て、一方に豫算案成立し、他の一方に震災手形整理の確立し、金融市場の安定に資する機會に於て、日銀第

二次利下の行はれることを可能ならしめる所以と爲るのである。然しながら上述した所は經濟社會に對する目前の觀察に止まる。目前の觀察から離れて、我國經濟社會の爲めに、聊か永き時期に亘つて、

其運命の如何に行くか

を考へるに就ては、私は本年の外國貿易が如何なる狀勢となるか、又貿易外の收入に如何なる異動を示すかと云ふ二點に注目しなければならない。我國年來の貿易が常に入超に傾き、大正十三年六億四千六百萬圓の多きに上り、同十四年度に二億六千七百萬圓に減少したかと思へば、昨十五年には三億三千二百萬圓に盛返し、外債募集、在外正貨の下げ、地正貨の現送等に依つて、之に對する決濟を果して居るのは　誠に我國經濟社會の病弊であつて、景氣恢復の前提としては、此貿易の不權衡が或る程度まで　矯制されるか、多少の入超は殘つても、貿易外の收入に依つて　決濟される程度に止まるか、孰れかの狀態の出現することを必要とする。然らば本年の外國貿易は如何なる狀勢を辿るであらうか。元來昨年中の入超が上半季頃に於ける吾人の豫想に反して聊か大なる金額に上つた重なる原因は爲替相場が政府の爲替政策に依つて、年初に於ける四十三弗から急騰して、下半季に於て四十八弗四分の三と爲り、爲めに輸出の抑制と輸入の獎勵とを惹起したからであつて、支那の內亂、銀價の劇落も亦輸出の減退に與つて力ありと云へる。然るに

本年中の貿易狀勢

に於ては、爲替の關係から、特に輸出を抑制する恐れは絕無である。假令ひ政府が金輸解禁を行つた所で、今日以上爲替に相場の騰貴する幅は頗る狹きものであつて、特に輸出を妨害するものと思はれず、一方に銀價も昨年下半季の二十四片台が底値であつて、今後は次第に恢復して、支那や、印度の市場に於ける購買的效果を大ならしめるであらうと思はれる。支那が今後動亂に動亂を重ねて、先づ南方が赤化し、續いて此赤化が支那の全土に及びはしないかと云ふことに就て、中外人士の間に、少なからざる疑惧の念が懷かれて居る。支那の赤化した曉には、假令ひ一時にせよ、日支兩國の經濟的關係を危殆ならしめるは勿論であつて、私も此點に就て、多少の掛念を持たないではないが、南方人士が革命運動の目標とする所は實に孫中山の遺訓である三民主義即ち民族民權民生の主義を實現しやうとするものであつて、此目的を達するには、從來の政治組織や、經濟制度に革新を加へる必要はあるとしても、此以上に支那を赤化する必要は認められない。差當り今日の所に於ても、動亂の行はれる一方に我國物資の賣行に大なる妨害を加へず、現に綿絲綿布の輸出の行はれる狀態であり、米棉が昨年の豐作況を承けて、價格低落し、爲めに我國に於ける棉花の輸入價格を少からしめて居り、更に合衆國に於ける我國生絲市況も昨年中に比較すれば本年に入つて、著しく活氣を加へ來つた等の諸事實を綜合するときは、私は何としても本年中に於ける貿易の狀勢が我國に取つて有利なる方嚮に動くことを想像せざるを得ない。若しも此際

貿易外の收入

が今少し我國に取つて、有利と爲り、其金額を增加したならば、爲めに景氣の恢復を促進する效果のあることは、論を俟たないが、此事は兎に角現狀維持の儘で推移するとして

も貿易金融其他の方面から、徐々に景氣の恢復を助けつゝあるのではあるまいか。現に諸物價が昨年の下半季を底値として、爾來次第に騰貴の狀勢に就き、投機市場に於ける商品の價格亦之に伴いつゝあるが如き、景氣恢復の曙光を示し來つたものではあるまいか。顧みれば大正九年三月の恐慌以來我國は來る年も來る年も

不景氣に暮れて、不景氣に明け、國民をして一時は絕望の深淵に沈淪せしめる趣きすらなしとしなかつた。而して經濟社會が不景氣に苦しみつゝある際財政上に於ては積極政策の如きものが政友會內閣に依つて、濫行され、爲めに經濟社會の整理を妨げて、不景氣の病根を深くするの傾きがあつた。最近兩三年間我國に於て財政上に行はれた消極政策の如き、必ずしも徹底的のものでなく、寧ろ微溫に失する嫌なきを得なかつた。然も其行はれる一方に、政府の消極政策に依つて、民間經濟社會に整理緊縮の行はれたことは、國民に對し一時大なる苦痛を與へたに相違ない、物資の賣行きの減縮したことや、失業者の增加したことに依つて、國民の疲弊困憊した事實は數ふるに遑なき次第であつたが、之に堪へたればこそ、景氣恢復の緒に就くを得たのであつて、私は一方に財政上に於ける消極政策の行はれることの遲かつたのを嘆ずるが、他の一方に消極政策の加へる脅迫に對して、國民の堪へ得たことを稱讚するに躊躇しない。此景氣恢復の發端をして次第に發展せしめ、然も其發展に大なる力あらしめるか、其れとも一の中間景氣に終らしめるかに就ては、外國經濟社會の狀勢に負ふことの大なるは論を俟たない。支那印度若しくは北米合衆國の如き、我國重要物資の販路と爲る諸地方が今後如何なる景氣を示すかと云ふことは、吾人の觀察を逸す可からざる所であるが、同時に我國民が輕擧を愼しみ、自制以つて其職に盡すことは、今後の經濟社會に處する所以であつて、私は此點に就て

我國經濟の中心地

である大阪市民諸君の猛省を促さうとする。彼の政治の方針若しくは政治家の野心に依つて、經濟社會の攪亂される弊害の如何に深刻であるかは、既往數年間に亘る不景氣時代に於て、吾人の味つた所である。政治と經濟とは之を分離することを許されない。唯吾人は經濟をして政治に依つて傷けしめず、政治家の野心に依つて紊さしめざることを必要とするのであつて、此點に於ても、政權から全然獨立して、商工業を營みつゝある大阪市民諸君の力に大なる望を繫がざるを得ないのである。

言はうと思つた事

佐藤春夫

僕のは文字どほりの漫談で話の要領を問はれると自分でもよくわからない。「文字といふもの」といふ題で文學といふものに就ての雜談を試みたのである。芥川君のが舌頭小說なら、僕のは舌頭隨筆だつた。隨舌とも稱すべきたびのおしやべりである。

文學といふものは言葉の藝術であり、藝術とは要するによきものであり、よきものとに即ち感動を與ふと深きものである。そのやうなものを文學といふ。その文學は要するに夢の一種である。――時代的にも個人的にもとの事は言ひ得る。正夢だの逆夢だの難夢だの

晝夢だの夢にさま〴〵の種類があるごとく文學にも、寫實的な文學やら、浪漫的な文學やら、また時代の精神を反映した文學やら、時代などは全く眼中にない文學などもある。しかしいかなる文學にもせよ、それを作者との關係は夢と夢みる人との關係のやうなもので、剛毅の強いものの感激の多いものが、その度合に應じて、夢のなかにつゞられるのである。夢が夢みる者にとつて無意識のうちにも必ず實生活の反映であるがごとく、いかなる種類の文學も個人的にも亦時代的にも、その生活を反映してゐないものはない。文學の眞實は、亦、夢の世界を支配するところのその同じ方則に從ふ眞實である。實生活のうちには雜念によつて反つて忘れられてゐるやうなものが、夢の中に於ての方がもつとはつきりと見えたりすることもある。――文學者の使命は世俗的な一切のものを眠らせてしまつて、本然の人間になることによつて、そこに我々の實生活の正しい姿を發見することにある。これらのことはもつと精密に論じなければならないのだし、また自分でも論じられるだけにわかつてゐるやうな氣がするのだが、時間がないし、また大きな聲でしやべつてゐるのぢや細かい事はとても言へないので要領を得ない事は知つてはいるが、まあこれで引下らせて貰はう……とまづ、そんなことを言つたかと思ふ。

その時言ひたいと思つた事はいづれ好機を得て一度精しく書いてみたいものである。

まごゝろ（里見弴氏講演の大要）

僕は後れて行つたので佐藤芥川久米の三君が勝手に極めこんで終りから二番目といふ、前には堀江氏の老巧、後には世界中に演說で鳴る鶴見氏といふ所に挾まれて手酷しく罰せられだ形だつた。僕の話は「まごゝろ」といふ題であつた。

平素何氣無く言つてゐる言葉、文章がよく分つてゐるやうでなか〳〵分らないものだ。「まごゝろ」といふ言葉も「嘘いつはりのない本心」「眞實な心」「一生懸命な氣持」いろ〳〵言つて見たつて要するに各人のもつ實感の程度に解つてゐるきりである。そして人間は普通その簡短な言葉が分らないなりで濟む樣に平素の生活がつきつめられないで過ぎて了ふさういふ生涯を僕は醉生夢死と云ひたい。: You must will the thing; You will. といふ、ヘンリック、イブセンに千古の名言がある。「汝は汝の欲するところを欲せよ」このイブセンの言葉は、克己心の淵源も勿論であるが。欲せざるところ」は「やるな」の意味も十分にある。だからと言つて、だらしない三昧をしろといふではない。

そこで普通の心理學の方便に從ひ、心的活動を二分して、智、情、意、に區別して考へると、まづ「やりたい」の眼目を理智の光りのもとによく〳〵見極めること第一、「たい」と思ふ感情の純一や清麗が肝心であること第二、意志を強固に飽までも貫く精力、第三――この三つは決して判然と區別を立てられるものではない。凡て「たい」のなかた含まれてゐるのだが、その意氣で、You must will the thing, You will なのだ、云ひ換へれば、この言葉の中には、したいと思ふことをはつきり掴め、といふ意味も、とは云へその氣持を理屈つぽくしずに、無邪氣なありのままに保てといふ意味も、したいと思つたことは必ずちやんとして了はなければいけない、との意味も含まれてゐる。

簡單には說明出來ない、僕の自辯な漫記を一讀して貰へば話の受け取れる人には私の言はふとする意味も受け入れて貰へると思ふ。

ウイリアム・ブレイクの象徴主義

土居光知

一

我々はみな獨特な、他人のみる夢とは比較することもできない夢をみるのであらうか。日常の經驗から最もかけはなれた、空中を飛ぶ夢を思ひだしてみると、地上數尺の所をすれ〳〵に飛んでゐて、屋根より高くのぼることはない。飛び方はとんぼのそれと、水泳ぎとの中間であつて、多少上下する跳躍運動を交へてゐる。かゝる夢は少年時代に多く、その後稀になる。多くの人の經驗もこれに近いものではなからうか。

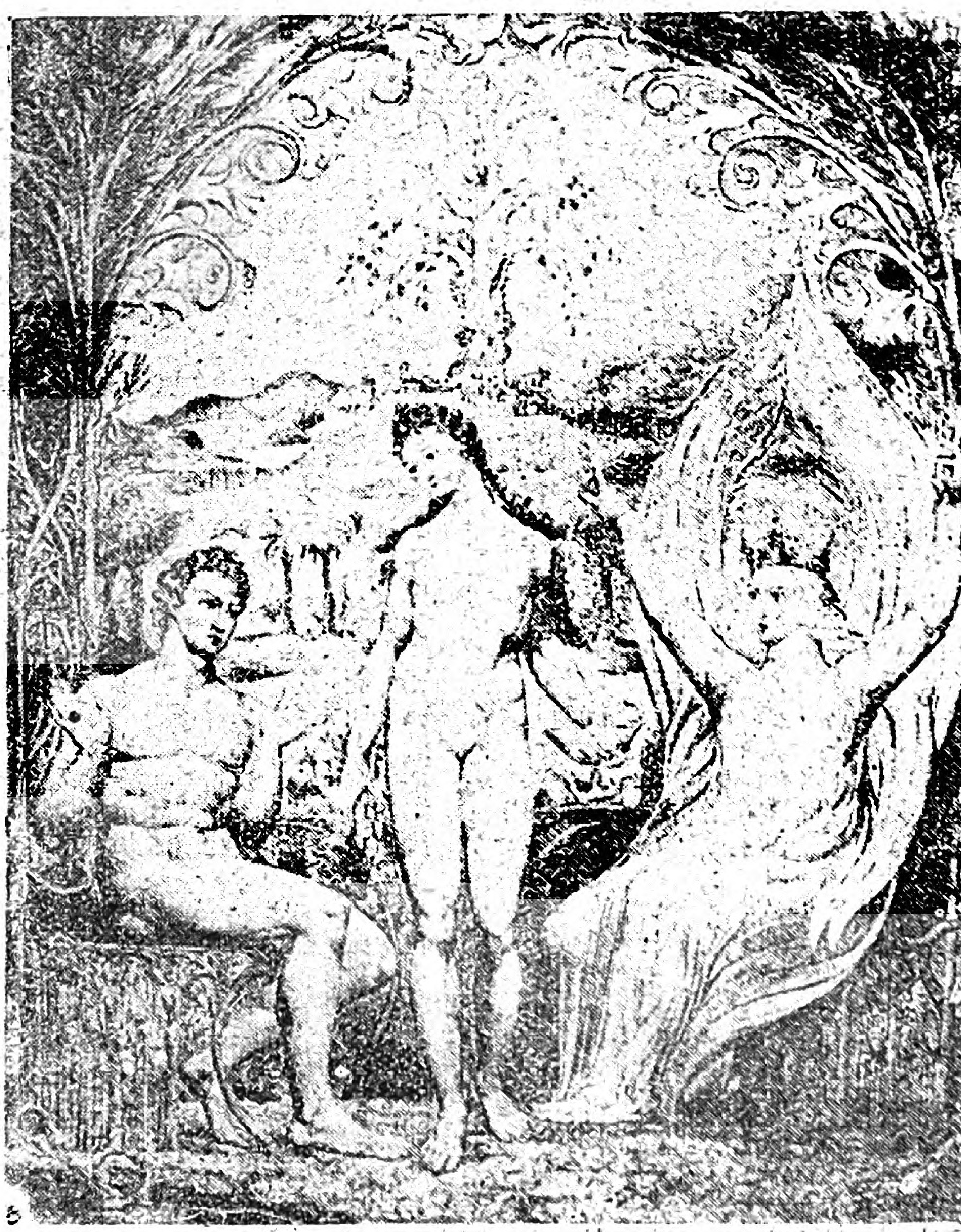
また近頃の出來事や、新しく交際を始めた友人を夢みることは稀であつて、夢には少年時代のことや、日頃は思ひ出しもしなかつた過去の人々が甦つて來る。近代都市の恐怖である自動車は、ひかれんとして危く免れた夜の惡夢とはならず、夢の魔は未だ文化的でなく、原始時代の人々を襲ふことがふさはしい、樣々の怪奇な姿をしてゐる。また英語を學ぶ日本人が夢のうちで英語を語るやうになるのは、五六年の歳月を經、三千頁の英書を讀んだ後であらう。要するに、夢となつて現はれんがためには、意識の表面に一二度映寫されただけでは不充分であつて、無意識の底に沈澱し、生命の中に織りこまれ、有機的な記憶となることが必要であるらしく思はれる。

藝術に於いて用ゐられる象徴に就いても、同樣のことが考へられるのではなからうか。藝術的象徴――即ち藝術家が、色と感と姿と想とが未だ分れぬ意識の奥にひそみ、おのづからそこに觀る姿は、各の藝術家に獨特なものであるやうに思はれるけれども、それには各人に相通ずる方面がある。もしさうでなかつたならば象徴を以て他人に語ることは不可能であらう。

また藝術的象徴は久しい時を經て人間の心の底に滲み徹つたものであることを必要とする。例へば、三越百貨店が現代生活のある方面の象徴であるとはよく言はれるが、現代生活の姿として三越を心の中に思ひ浮べる時、それは心の奥から生みだす姿でなく、記憶によつてとりだされる外から與へられる姿である故に未だ藝術的の象徴ではない言ひ換へれば未だ、無限の聯想と餘韻とをもつてゐない。中世生活のある方面の象徴として伽藍を思ひ浮べるときにはこれと趣きを異にす

るものを感ずるのであらう。

林檎は西洋に於いてはアダムとイブの時から性愛の、また女性の象徴とされてゐる。林檎と梨とを較べてみると、梨の方がはるかにこかやかで、複雑である。新鮮さが賞味される林檎には酸味が強く、北國の山村の影立つ朝のやうな、爽かさが味はれ、男性的であるが、爛熟を待つて賞味される西洋梨は少しく黄味を帯びて透きとほるやうな皮膚のきめも細かく、形は複雑な曲線からなり、甘い香と融けるやうな味、そして外部から虫の食ひこんだ痕もなく核心が蝕ばまれてゐるや否やが、最後までわからぬ點に於いても、何となく女性的である。それにもかゝはらず、エリスが述べてゐるやうに林檎が女性の象徴として用ゐられるのは、林檎が古代からあつた最も美味な果實であり梨が改良され、大きく美味な果實となつたのは近代のことである故である（Havelock Ellis: *Impressions and Comments.* P.231参照）



かく藝術の象徴とされるものはある年代を經たものでなければならぬ故、近代の藝術に於いても、日、月、星、嵐、朝、夕、獅子、鷲、蛇、海、洞穴、樹木等の如きものが常用されてゐる。これらの象徴が近代の詩歌に於いて如何に用ゐられてゐるか、その象徴が時代によりどんな異る意味の喩を以て用ゐられたかを考察したならば、未だ試みられたことを聞かぬ、趣味深い一冊の本となるであらうが、私はこゝでは問題を極めて狭く局限し、百年前に死んだ英國の象徴詩人でかつ畫家であつたウイリアム・ブレイクが木と花とを如何に表現したかを解説してみよう。

二

ブレイクの象徴的な木は「生命の木」と「知識の木」とに大別する

ことができるが、エデンの花園にあつたと傳へられるこの二つの木をブレイクが如何に解釋したかを知ることは、彼自身の象徴を考察するためにも必要である。

聖書創世記によるとエデンの樂園の中には生命の木及び善惡を知るの木があつた。神はアダムとイブに樂園の中の木の實を心のまゝに食ふことを許したが、たゞ善惡を知るの果實だけは食ふことをかたく禁じてゐた。然るに狡猾な知者である蛇がイブを誘惑し二人にこの詛はれたる果實を食はしめた、かくして人間が無邪氣な心を失つたことを知つた神は、彼等を樂園から追ひ出し、天使ケルビムをして焔の劍を以て、生命の木を守らしめた。

ブレイクの描いた知識の木は、いつも葉のない、枯木のやうにみえるそして枝にも幹にも刺が生じてゐる。その實は愛と歡びとの結果ではなく、五感による經驗、後悔と慾と損得の念から熟した果實である。生命の木は情愛を象徴する蔦蔓によつて抱擁されてゐるが、知識の木には蛇がまつはつてゐる。美しく暖かい毛も羽もなく、翼も手足すらも與へられなかつた蛇は、創りし者に對する不平と、恩恵ゆたかに創られし者に對する羨望と、手足の無きを侮る敵に對する憎惡から頭の中に怖るべき毒素と狡智とを醱酵せしめた。この木の果實を味ふことによつて得られる知識はこの蛇の智と共通なものであらう。それはまた毒ある果實である。『汝これを食ふ日には必ず死ぬべければなり』（創世記第二章十七）

ブレイクは人間がエデンの生活から墮落した原因は、生命に對する深い理解と愛となく、すべてを善と惡とに別ち、生命の發現を制限するものを善となし、本能を高め醇化せんとはせず、戒律を以て本能を抑壓せんとしたこと、かくして僞善、腐敗が生じ、享樂は盜まれるものとなり、損得の知識等が流行し、靈の生活が蔑視されるやうになつたことにあるとした。

次にブレイクが聖書傳中の生命の木をいかに解したかは、『天國と地獄との婚姻』の中にある一節によつても知ることができる。

『六千年の後に世界が火で燒きつくされるといふ古の傳説は、眞實である。その時が來ると火焔の劍をもてる天使ケルビムは生命の木を守る役目を解かれる。かくて今有限になり、また腐敗せる如く思はれてゐる萬物は燒き淨められて、無限に、神聖になるのであらう。

このことは性愛の淨化によつて實現されるのであらう。

それには先づ人間の靈と肉とが別々であるとの考へを消すべきである。……

知覺の門戸が淨められたならば萬物はありのまゝに、無限にみえる。

人間は自己を閉ぢ込め、萬物を彼の洞穴の隙間から覗くやうになつてゐる。』

これによると彼は生命の木を愛の象徴としてゐる。愛を靈的なもの肉的なものの如く區別することは無理である。また人間が僞りと、卑しい享樂の慾から生命の果實を盜まんとする時、天使の守護も必要であらう。しかるに人間が物質の束縛、即ち利己的な所有慾や享樂慾から解放され、愛の中に生きるやうになるとき、歡喜の焔はすべてを淨

め、摂取の對象、享楽の手段としてのみ考へられてゐたものは、全く別な相をもつ、精神的存在として眺められる。といふのがこの一節の意味であらう。

三

ブレイクの抒情歌集は『無心の歌』(Songs of Innocence)と『分別の歌』(Songs of Experience)の二巻となつてゐるが、『無心の歌』中には「くろんぼの子供」と題して

母さんが木の下で私に教へて下さつた、朝の冷しい木蔭にすわり
私を膝にのせ、くちづけし、
さて、東を指さして言はるゝには、
『坊やごらん、おてんとう様のおのぼりを、
神様がゐらつしやる、光りや暖かさを下され
花や木や獣や人々が
朝には慰めを、晝には喜びを授けられる。
私たちが此の世にゐるのは暫の間
それも愛の光に耐へられるやうにならんがため、
この黒いからだ、日にやけた顔は
日蔭になる雲や、葉のしげつた森のやう、
たましひが愛の熱さに耐へられるやうになると
雲は消え失せ、神様の御聲がかゝる、
「森から出ておいで、かはいゝ坊や
そして金色の天幕のまはりに小羊のやう集ひ喜べ」と。』

の如き歌があり、『分別の歌』中には「虎」と題して、

虎！虎！
夜の森に燃え輝ける。
いかなる御神のたくみ
なが怖ろしき姿を整へしや。

の句で始まる有名な歌がある。これ等の歌を象徴的に解しようとするならば、生命の木と知識の木とを想起する必要があらう。ブレイクは枝葉が繁り、やさしい蔦のからまつた生命の木のもとに子供を描いた愛の太陽はすでに東の丘の上にのぼつてゐるが、朝霧の中に眠りと夢とをつゝんでゐる。人の子はその太陽の直射に耐へ得るやうになるまで、生命の木蔭で、母なる自然により、五感の教育を受けねばならぬ未だ想像や直感によらず、五感によつて事物に接してゐる間、人は「黒ん坊の子供」である。

彼はまた幹が裂き砕かれた一つの巨木を以て、憤怒の虎が燃え輝いてゐる「夜の森」をあらはした。その木の葉のない一つの枝は長く引かれた線となりその端は小さい蛇となつてゐる。夜の森とは、愛の太陽の照すことのない戒律と、善悪の知識の森であり、虎はそれ等を蹂躙し踏みにじる強烈な生命の力の象徴ではあるまいか。

四

『無心の歌』の中にはまた「花」と題する詩がある。

たのしい、たのしい花、
濃緑の葉蔭で
幸福の花が、
矢のやうに飛ぶお前を
みてゐる、
私の胸のほとりに
狭いやどりを探して。

かはいゝ、かはいゝ駒鳥、
濃緑の葉蔭で
幸福の花は
お前がすゝり泣き、すゝり泣くのを聞く。
かはいゝ、かはいゝ駒鳥が
私の胸のそばで。

ブレイクはどんな花を心の中に思ひ浮べながらこの詩をつくつたのであらうか。彼がこの花を畫にしたのをみると、それは黄と紅の焔である。ブレイクは『無心の歌』の綵入版の中で三たび花を描き、花の中に歌を書いた。一度は「幼き喜び」と題する詩のために焔よりなる愛のマンダラゲの花を描き「神のみ姿」と題する詩のためにはこゝに譯した「花」の姿と同様に焔を描いてゐる。この畫では右の下端に光明につゝまれた基督のやうな人物が、地上に眠れる二人の中の一人をすでに甦らし、その前後から焔と葛とが生じ、葛にも花が咲き、焔の上端は飛ぶ者、歩む者、抱擁する者を支へてゐる。



ブレイクにとつて花と喜びと愛とは三つにし一なるものであり、それが神の相の一つではなかつたらうか。この感じ方は花や果實といふ言葉が樂しさや喜びを言ひあらはす唯一つの言葉であり、冬が去り、始めて開く桃の花に、愛の神のほゝゑむ焔の天使を見た太古の人の感じ方に似てゐる。「モーゼ……神の山ホレブに至るにエホバの御使柱の眞中より焔の姿にて彼にあらはる。彼みるに柱は燃ゆれどもその柱焼けず」（出埃及記三章二節）ロンドンのまなかで、さゝやかな靴下店に生れ、十四歳の時に彫版師の家に弟子入りしたブレイクがたま〳〵郊外に散歩して、自由な心持になり、野の花と語つた時にはかうした感じ

を論じたのであらう。かく考へると、この標語として意味の捉へ難い「花」の象徴的な意味を察することができるかも知れぬ。花とは輝やき生命の木にさく幸福の花であり、歡びまたすゝり泣く小鳥は愛のおもひの小鳥ではなからうか。

五

「花や木は、しかしながら、肉體に縛り着けられた、地上生命及びその愛や喜びしか象徴することができぬ。しかし愛や喜びは地から、肉體から離れて、自由にならうとする。「あゝ睡蓮よ」と「わが天人花に」はかゝる心が寄せられてあるのではなからうか。

あゝ睡蓮よ

あゝ睡蓮よ、時に倦み、
日の歩みをばかずへつゝ、
想ひわぶる金色のゆかしき國――
旅人の旅路のはてに在りといふ。

そを願ひ、若人は窶れはて、
蒼ざめし處女も雪の衣をつけ、
墓場をあとにあくがるゝ
わが睡蓮の訪ふかなたの國へ。

Sun-flower とは普通向日葵のことであるが、太陽が照す時に開き、かげる時にしぼむ睡蓮の花の如きをも稱する。エヂプトのロートスは昔から、わが菊花紋章の如く、十六瓣にして朝の太陽が光線を放つ姿に表はされ、西に沈んでは翌朝東に復活する太陽になぞらへられ、復活を象徴する花となり、印度では蓮として、西洋では睡蓮として、宗教的象徴に用ゐられた。ブレイクはこの詩に對してはたようづまきを畫いてゐるが、別に彼が畫いた「日の花」をみると向日葵と蓮と睡蓮とを合せた花である。彼は多分現實にはない、幻の花を眺めてゐたのであらう。さればこの花を向日葵とよぶことも、蓮とよぶことも勝手であるが、現世の喜びが淨らかでない限りは拒絶して受けず、現實の太陽を慕ふのではなく、太陽が沒し復活する理想郷を戀ひ慕ふ花としては睡蓮が最も似つかはしいやうに思はれ、蓮はあまりに佛教の聯想が強すぎる。またブレイクの「夢の國」(The Land of Dreams)を讀んでも睡蓮と譯することが妥當なやうに思はれる。

ブレイクは最も大膽に本能を肯定した詩人であつた。彼は人間を淨化するものは禁慾でなく愛であることを信じてゐた。しかしその喜びを汚辱するやうな享樂をば拒絶し、靈の墓である肉體をあとにして、靈の自由な國を戀ひ慕ふこの「日の花」のやうな心をもつてゐたことは想像するに難くない。

「わが天人花に」はよく誤解される歌であるが、「あゝ、睡蓮よ」と並べて讀まるればこの歌の心が感じられる。

わがてんにんくわに

かはゆき天人花に繋がれて、
花のあたりに散りしけど、
倦み窶れつゝわれは坐す、」

わが天人花の下に、
など我繋がれてあるべき
わがかはゆき天人花に。

ブレイクはこの後に「愛、自由なる愛は地に生ふる如何なる木にも繋がるゝにたへず」といふ句を書き添へたが、あまりに説明的であると思つたのであらう、消してしまつた。この天人花を妻のことゝ解することはよいとしても、彼が一夫一妻に倦んで、所謂自由戀愛を歌つたものとしてはならない。天人花は風のあたらぬ南向の谷に栽培され、枝葉が茂り、その葉は薫り、樂しい日蔭を與へるため、聖書では平和とよろこびの象徴とされてゐる。またギリシア神話ではヴイナスの神木であり、婚禮の花環に用ゐられ、婚禮生活の象徴とされた。ブレイクの用ゐた象徴が殆んどすべてヘブライ的であることを考へると、この場合に於いて後者をも含め得るけれども、彼は妻ばかりのことに關して歌つてゐるのではなからう。彼は天人花を厭うてゐるのではないそれはいつまでも新らしく喜びの花をまきちらす。しかし愛は地上に生ふるいかなる生命の喜びにも拘束となつてはならぬ、愛の住む世界は自由なる想像の世界、かの隱遁のあくがるゝ世界である。愛が地上生命の木にさく喜びの花に捉へられるときには、精進の翼を失ひ、弛廢せざるを得ぬといふことがこの詩の意味であらう。

六

かくの如く一つの木に關する主要な一象徴から出發して、詩人が長年月の間に作つた木或は花に關するあらゆる詩を理解しようと試みることは、文藝の鑑賞としては誤れる態度ではなからうか。しかし我等は象徴が一たび心を捉へる時には心は容易にその象徴から自由になり得ないことを感ずる。意識的に或は慣習に從ひ、甲を以て乙を代表せしめることは譬喩であつて、やがて忘れられるものである。象徴とは無意識の底に沈潛し、感じと想ひとが一つである所にみられるものであつて、心の中に根を張り、葉を出して次第に生長する。古代の埃及アッシリア等の文化は象徴的であつたが、二千年の間東洋の精神がその象徴の森にさ迷ひ、純粹な思惟の自由を得なかつたこと、ギリシア精神が思想の自由を得んがためにいかにこれらの象徴と奮鬪したかは人々の知る所である。

エイツはブレイクの象徴主義を説明して、詩的譬喩と神秘的象徴主義の主要な相違は後者が完全な體系をつくるといふことである。「心緒亂れて浪うち騷ぐ海の如し」といふのは譬喩であるが、海の魚、貝、雲の影等すべてを心の現象のすべてと一致せしめるのは象徴主義である。と言つてゐる。ブレイクは一度木を以て物質的生命を象徴せしめるや、その根を以て物質に深く根ざした情慾、その花を以て愛の喜び、その果實を以て性の享樂を象徴せしめるといふ風にして一つの象徴の體系を作つた。彼の詩に於いて花をつみ、果實を味ふといふやうな語は皆かゝる内容をもつてゐる。

かく木に人生の諸相の象徴をみる態度を更にすゝめると、さま／＼の木にさま／＼の人生の象徴をみ、更にすゝんでは木に限らず、鳥にも獸にも石にも人生のある相の象徴をみるやうになる。

我友バッツ君よ、
フエルファムの濱邊に坐し
始めて私がみた
光明、赫奕たる幻を語らう。
太陽は麗しき輝きを
高き天の河より
海陸の上に注ぎつゝあつた。
私の視力は
空に遠く擴がり、
心にかゝる雲もなく、
欲望のとゞくことなき、
淨火の天に達した。
朝の光は
天上の山々を飾り、
輝く分子となり、
光の寶玉となり、
朗かに一つ一つ照る。
愕きて心おのゝき、
各の分子をみれば、
あきれて心はまどふ、
各が人間であり、
人の姿をしてゐる。
彼等が招く故

私は濱に沿うて
遠く走つた、かく言ひながら——
「濱邊の砂の一つ一つも
野の石の一つ一つも
岩も岡も
泉も小川も
草も木も
山も地も海も
雲も星も流星も
遠くよりみれば皆人である」と。

（To Thomas Butts の前半）

ブレイクは、すべての物象を心の奥にみようとし、外形からその想像力を自由にし、草や木や山や海を「遠くよりみ」即ち自己の中に見出し、それを彼の藝術に表現した。彼はかゝる意味に於いて想像力を尊重した。想像の世界は時間なき世界である。それは心が植物的肉體から自由にされて住む無限の國であり、そこに自然の植物的な鏡に映寫されたものゝ本體が在る。彼は言ふ。「余は外形をみぬ、外形は邪魔物であつて生命の活動でない故に。汝は太陽の上る時金貨の如き火の圓盤をみずやと余に尋ねる。否、余は聖なる哉、聖なる哉、主なる萬能の神と唱へる無數の天使の群をみる。余はみることに關し肉眼の窓にすぎぬを思ふ。余は肉眼を通じてみるので、肉眼でみるのではない。」(A Vision of the Last Judgment)

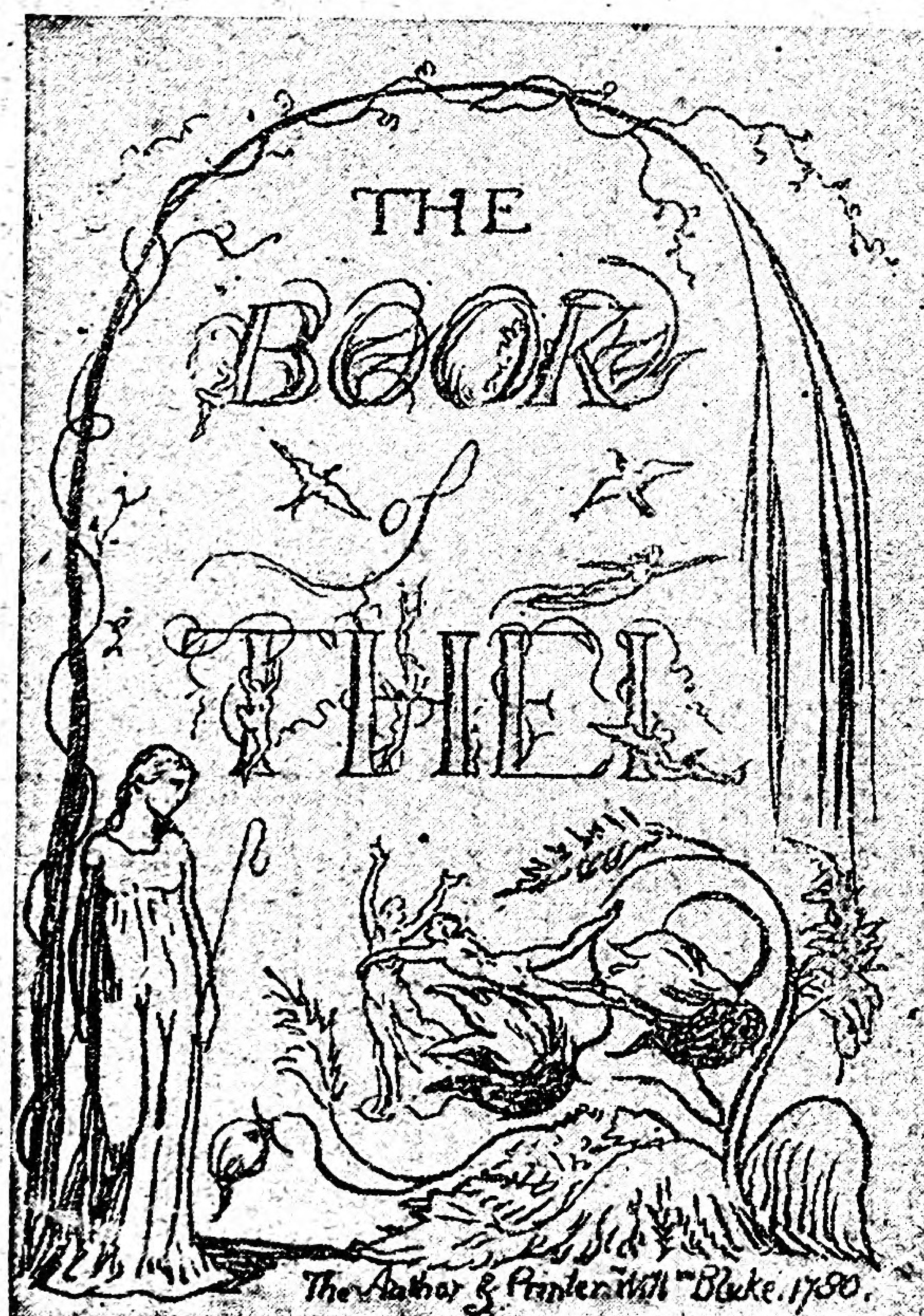
彼はまた想像によつて直視されるものと譬喩とを區別して言ふ。「譬

喩或は説話は詩歌の低級な、實在するもの、表現である直觀或は想像とは全く別種のものである。譬喩は記憶の娘達によつて作られ、想像は靈感の娘達によつてとりまかれる。ギリシア人が「時」を老人としたのは説話であつて、時を眞に直視すると永遠の青年にみえる」と。

ブレイクは想像によつて直觀さるゝ人間の形を彼の藝術に表現した。かくして天明の星も、朝の太陽もすべて創造の讃歌を稱へる天使の群となり、木や花は戀する男女となり愛の喜びの姿となり、風や雲や水や蚤に至るまでそれ〴〵に人の姿となつた。しかし彼は外形を全くすて去つたのではない。

わが行く道のべ
わが足を止むる薊の花
人々にはさゝやかなる
ことも
ほゝゑみと涙にくれしむ。
わが目にはいつも二重にみえて
二重の幻、おれに伴なふ、
内なる目には白髪の翁、
外なる目には道のべの薊。
（Los the Terrible の一節）

もし鈴蘭を描かずして可憐な處女を描き二つの花を描かずして老人を描いたならば、どうして我等はそれが花であることを知り得やう。彼の想像はすべてを人にして外形をなくしたのではなく、多くの場合に於いて二重の姿に描いた。しかしこれにはもとより偏頗があり、ある時には人形が主になつて外形が見失はれ、ある場合には外形が主になつて人が殆んでそのうちにかくされてしまつた。彼の『分別の歌』と預言書の象徴詩との過渡期に書かれた The Book of Thell の中にある畫はみなこの二重の幻視に屬するものである。



七

以上は主として生命の木に屬する象徴に就いてのべたが、この節に

は知識の木を彼がいかに象徴したかを紹介しよう。

知識の木は自然のうちには見出されず、心の中にのみ生ずる木である。ブレイクは、想像力を缺ぎ、愛と同情なく、功利的な、冷酷な知識、より高き本能を育てるためでない禁欲主義等が人間隨落の原因であるとし、それが心のうちに植はれた木を育てるものとした。彼は愛なき知識はすべて誤謬だとした、それ故この木は「永遠の誤謬の木」とよばれてゐる。彼はまた禁欲主義の宗教が迷信や地獄の恐怖を以て本能をため撃壓せんとしたことからこの木が生じたものとしては「神秘の木」とよび、憎惡と虚僞によつて育てられたものとしては罪惡の木とよんだ。そしてその頑強なことは樫の木に比べらるべきものであるためか「永遠の樫の木」とも呼んでゐる。そして彼は言ふ、かゝる木は自然の中にはなく、人間の腦中のみにあると。

海陸の神々も
この木をみんと自然の中を探せしが
そはすべてあだなりき、
人間の頭腦の中に生ふるものなれば。

(The Human Abstract)

彼は『分別の歌』の中では「愛の園」(The Garden of Love)「人間概說」(The Human Abstract)「毒の木」(A Poison Tree)の如き詩篇でこの象徴を用ゐてゐるが、『豫言書』の中では、詩的想像や愛を絶緣したユウリゼンが「戒律の鐵書」を書いてゐた時に生じた木であるとしてゐる。ユウリゼンは、後に愛を象徴するフイウゾンをこの木に磔にした。

（八）

以下私はブレイクの象徴の性質を考へんとして、彼の用ゐた象徴の中では決して主要なものでなく、殆んど無意識に用ゐられた如く思はれる、そのために私の目的には最も適してゐる木の象徴をとつて、その單純なものから、次第に複雜なものへ移つてきた。即ち第二節では古代象徴のみなほし、第三節には象徴を背景として與へたもの、第四五節のは全く感じの上の象徴であり、藝術的象徴としては最も普通であるもの、第六節では二重の視覺と稱するもの、第七節では無形なるもの、象徴を心の中で創造したもので、誤謬の木、神秘の木とよびながらも、自然界にあるいかなる木の姿を思ひ浮べることも、この象徴をみる邪魔になるものである。

もしブレイクの象徴主義がこゝで止まつてゐたならば、彼の詩はかくも難解なものにならなかつたのであらうが。

今私には物が四重にみえ、
四重の視覺が私に與へられた。
歡喜の極に達した時には四重であるが、
ビユラの柔かき夜に於いても三重である。
そして常には二重——願はくは神よ
物がたゞ一重にみへること、
科學者の心の眠りに陥ることから我を護り給へ。

(To Thomas Butts)

と言つた如く彼は三重或ひは四重の象徴を眺めた。かの「誤謬の木」は

初め戒律、偽善、迷信の堆積、闇の森に迷ふやうな憂鬱絶望の氣分の象徴であつたが、後に想像の視覺が缺けてゐるので物が二重にしかみえぬ現象界全體を意味し、更にかゝる唯物的な世界觀等を内容とするに至つた。

呪はしき神秘の根は「時」の天に
まで枝をのばし、
中うつろなる枝の垂れ下りて地に
觸るれば
そこにまた根を生じ、再び枝をの
ばし
茂り縺れて灰色の空を覆ひぬ。
(Vala: VII, 32—35)

人の姿は人類の娘達により亂され
そめ、
知覺は散亂して形をなさず、
人類の木と呼ばるゝ巨いなる珊瑚
礁となりぬ。
彼等は憎惡により結合し、互には
離れ〴〵なれど
淵海の底なる巨いなる珊瑚礁なり。



樫の木に寄生木の生ふるごとく、人
類の木は永遠に寄生す。
愛によりて合せざるものは憎みによ
りて結ばるべし。
(Jerusalem: p. 66, ll 45—56)

ブレイクがこの木を海底にあるとした理由は人類は感覺の洪水に溺れ、清澄な靈氣の世界に呼吸してゐないことを諷せんためであらう。ブレイクは尙さま〴〵にこの神秘の木を象徴してゐるが、それをこゝに紹介することは殆んど不可能である故、私はこの神秘の木の象徴であらしい一つの畫を示すことにする。一つの大きい「日の花」が時間と空間の海の上に浮んでゐる。その花瓣は向日葵の如く、花托は蓮の如く、水の上に浮んでゐる樣は睡蓮のやうである。この花を蓮臺のやうにして坐してゐるのは、かの睡蓮のあくがれ求めたビユラであらう。ビユラとは夢幻の國でもあり、人間の心の最も奧深き所にある境地でもある。

ビユラと名づくるはなごやかに樂しき
安息。

やはらかに月照る世界、女性にして、愛らしく、
淨らかに靜けく、眠るものに與へらるゝめぐみ。

(Vala, I, ll.197—199)

彼女の翼は三重であるらしいか、内なる二つは離なす水のやうでもあり、彼女は時の流れの中に坐して涅槃に入り冥想に耽つてゐる。しかし外の翼のやうにみゆるものは巨大な貝殼らしく、しかも太陽と月と數多き星とのあることをみると、ブレイクが「うつし世の貝殼」或は「神秘の木」とよんだ物質的世界の象徴であるらしい。この太陽と月とは光明を與へず、光明は却つて物質世界、即ち貝殼の背後に放射されてゐる。たゞ彼女が瞑目し、想像の眼によつてみてゐるためであらう、彼女の顔が照らされ、髮は焔の如く輝いて、冠をとりまいてゐる。これブレイクの所謂三重或は四重の象徴である。我々は無限の暗示をうけるが、この畫に統一した説明を與へることは困難である。

九

日常用ゐられてゐる言葉で書かれた詩の中に一つ二つの象徴があるのは、よく整へられた庭園の中に千年の古木がある如く、聯想を深めることが多い。「無心の歌」などにはこの種のものが多い。しかし詩の全部が象徴から成立するとき、讀者は道なき神秘の森に迷ふ如く、木々は風に搖らいで混雑した言葉を發するが、その言葉を聞きわけるやうになるには容易でない。『天國と地獄との婚姻』以後の彼の詩はかゝる森に比することができやう。げに象徴は藝術的な人の心を捉へる。かくブレイクの心も象徴に捉へられ、不明な表現は不可能になつたらしい。次に『天國と地獄との婚姻』の一節を譯出しよう。

「天使が私を訪れて言つた。「憐れむべき、愚かなる若者よ、怖ろしく慘ましき境遇よ、汝みづからで準備しつゝある永劫の焦熱地獄を思へ。やがて汝はそこに投げ入れられやう。」

私は言つた、「あなたは私のために、私の永劫の運命を示されよ。かくて共にそれを觀じ、あなたの運命といづれが願はしいかを見ませう」

そこで彼は私を厩に伴ひ、寺院を通りぬけ、地下の納骨所に降り、その行きづまりにある製粉所に行つた。そこを出でゝ洞穴に入りゆき、屈曲せる長くものうき洞穴を手搜りして進み、遂に地獄の虚空の如きものを下に見、木の根につかまつて此の虚空の上に懸つてゐた。私は言つた。「いざ、この空虚に身を委ねて、こゝにも神意が支配するか否かを試みよう。あなたが欲しなければ私は私だけでも。」しかし彼は答へた。「慢心をつゝしめ、若者よ、こゝに留まるならば、闇は去り、やがて汝の宿命は見られやう。」

かくて私は彼と共に留まり、樫の木のふしくれの根につかまつてゐた。彼は虚空の方へ下向きに生じてゐる菌の上にとまりつゝ。

次第に虚空が見えるやうになる。燃ゆる都の煙りのやうに、下の方遥かのかなたに太陽が煤けて搖く。そのまわりには火の道があり、巨大な蜘蛛が餌食を求めつゝ這ひまわつてゐる。餌食となるものは、腐敗から生じた動物の最もあさましい姿で、虚空の中を游ぐが如く飛んでゐる、それらが空中に群がり、空氣がそれでできてゐるやうに思はれるほど。私はいづれが私の永劫の運命であるかを尋ねた。彼は言つた、「黑と白との蜘蛛の間」と。

その時黒白の蜘蛛の間に火雲湧き起り、渦巻いて虚空に擴がり下の方を闇にした。下天はいま黒き海の如く、怒濤の響き怖ろしく動く。下の方は何も見えず、唯闇の嵐が荒れるのみであつたがふと雲と波との間から東方をのぞむと、火焔の交つた血汐の瀧があり、近く數町の所に鱗かゞやく大蛇のとぐろまいてゐるのが見えた。遂に直東から三度ばかり離れた所、波の上に火焔のやうな頭があらはれた。徐に黄金の岩よりなる山の背の如くその頭が高められ、紅蓮の焔の如き二つの目玉があらはれると、海も雲煙となつてたじろいだ。それはレヴァイアサンの頭であつた。その額には虎の額の斑の如く、緑及び紫の條があつた。やがて我等は見た。彼の口及び赤い鰓は怒濤の泡沫の上に垂れ、暗黒の海を血潮の輝きもて染め、鬼神の如きすざましい勢で近より來るを。

私の伴なる天使は彼がゐた場所からよぢ上り製粉場へ逃れた。私はひとり留まつてゐた。さうすると幻は消え去り、私は月光に照された川の傍の樂しい堤に座し、立琴をひきつゝ歌ふ詩人に耳を傾けてゐたのであつた。』

この一節の解説は幾通りもあらうが、私は次のやうに解する「天使」とは神の教へを傳へると稱する僧侶である。「厩」とは基督の生れた所「寺院」とは基督教會である。僧侶は若きブレイクに地獄の恐怖を語り、基督の一代及び教會のことを語つた。然るに教會の精神は既に死し「納棺所」となつて居り、宗教の精神が死滅した所には、生命を論理の臼で粉にする煩瑣な宗教哲學の「製粉所」がある。「洞穴」とは頭蓋骨の中、即ち頭腦としてよく用ゐられる象徴である。今ブレイクは頭腦の中に入り、善惡を分ち、天國と地獄との賞罰を說く宗教が人間の思想に何を與へたかを見んとする。それは要するに「虚空」であるたゞそこには永遠の誤謬の木なる「樫の木」が生じてゐる。ブレイクはこの所謂「善惡を知るの木」の根柢を探りそこに坐してゐた。この「迷信の木」に寄生する「菌」が似而非宗教家の座である。僧は彼の席に就いた。そして迷信がつくる種々の恐怖が展開する。「黒白の蜘蛛」は人間の靈魂を爭ふと說かれる惡魔と天使とである。ブレイクは惡とは生命の横溢する力であり、善とはそれを制限する理性であると、感じ、靈肉、善惡を對立せしめる考へ方を輕蔑してゐた。それ故前者に蜘蛛の形を與へたのであらう。この對立を說くために宗教は地獄の殘酷な恐怖を以て久しい間人心を暗くしてゐた。「大蛇」とは自然の生命或は人間の本能を禁慾的宗教の立場から眺めたものである。また人間は久しい間肉感覺の洪水に溺れてゐる。それ故大蛇は水の底にゐる。僧侶は怖れをなして「論理の粉場」へのがれた。彼は其處でのみ本能をを否定することができるから。

僧侶が去つたのでこの象徴が消失した。この象徴全體が迷信的な宗教によつて生じたものであつて、迷妄から解脱した想像によつて見は自然は美しく、人生は詩である。

×　×　×　×　×　×

こゝに示したやうな表現の仕方はブレイクに於いては初期中途のものであつた。墓、洞穴、木、蜘蛛、大蛇等は二重の視覺を表現することはできるが、三重、四重の視覺を表現せんとすればこれらの語の平常の意味が邪魔者になる。それ故彼はユウリゼン、ルヴサ、ピュラ、セル、フウゾン等の如き名稱まで新しい多くの象徴をつくり、彼の後期に屬する「豫言書」を非常に難澁なものとしたのである。

文藝的な、余りに文藝的な

——併せて谷崎潤一郎氏に答ふ——

芥川龍之介

一　「話」らしい話のない小說

僕は「話」らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない。從つて「話」らしい話のない小說ばかり書けとも言はない。第一僕の小說も大抵は話を持つてゐる。デッサンのない畫は成り立たない。それと丁度同じやうに小說は「話」の上に立つものである。（僕の「話」と云ふ意味は單に「物語」と云ふ意味ではない。）若し嚴密に云ふとすれば、全然話のない所には如何なる小說も成り立たないであらう。從つて僕は「話」のある小說にも勿論尊敬を表するものである。「ダフニとクロオ」との物語以來、あらゆる小說或は敍事詩が「話」の上に立つてゐる以上、誰か「話」のある小說に敬意を表せずにゐられるであらうか？「マダム・ボヴアリイ」も「話」を持つてゐる。「戰爭と平和と」も「話」を持つてゐる。「赤と黑と」も「話」を持つてゐる。……

しかし或小說の價値を定めるものは決して「話」の長短ではない。況や「話」の奇拔であるか奇拔でないかと云ふことは評價の埒外にある筈である。（谷崎潤一郎氏は人も知る通り、奇拔な話の上に立つた多數の小說の作者である。その又奇拔な話の上に立つた同氏の小說の何篇かは恐らく百代の後にも殘るであらう。しかしそれは必しも「話」の奇拔であるかどうかに生命を托してゐる訣ではない。）更に進んで考へれば、「話」らしい話の有無さへもかう云ふ問題には沒交涉である。僕は前にも言つたやうに「話」のない小說を、——或は「話」らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない。しかしかう云ふ小說も存在し得ると思ふのである。

「話」らしい話のない小說は勿論唯身邊雜事を描いただけの小說ではない。それはあらゆる小說中、最も詩に近い小說である。しかも散文詩などと呼ばれるものよりも遙かに小說に近いものである。僕は三度繰り返せば、この「話」のない小說を最上のものとは思つてゐない。が若し「純粹な」と云ふ點から見れば、——通俗的興味のないと云ふ點

から見れば、最も純粋な小說である。もう一度畫を例に引けば、デッサンのない畫は成り立たない。（カンディンスキイの「即興」などと題する數枚の畫は例外である。）しかしデッサンよりも色彩に生命を託した畫は成り立つてゐる。幸ひにも日本へ渡つて來た何枚かのセザンヌの畫は明らかにこの事實を證明するのであらう。僕はかう云ふ畫に近い小說に興味を持つてゐるのである。

ではかう云ふ小說はあるかどうか？　獨逸の初期自然主義の作家たちはかう云ふ小說に手をつけてゐる。しかし更に近代ではかう云ふ小說の作家としては何びともジユウル・ルナアルに若かない。（僕の見聞する限りでは）たとへばルナアルの「フィリップ一家の家風」は（岸田國士氏の日本譯「葡萄畑の葡萄作り」の中にある）一見未完成かと疑はれる位である。が、實は「善く見る目」と「感じ易い心」とだけに仕上げることの出來る小說である。もう一度セザンヌを例に引けば、セザンヌは我々後代のものへ澤山の未完成の畫を殘した。丁度ミケルアンヂエロが未完成の彫刻を殘したやうに。――しかし未完成と呼ばれてゐるセザンヌの畫さへ未完成かどうか多少の疑ひなきを得ない。現にロダンはミケル・アンヂエロの未完成の彫刻に完成の名を與へてゐる！……しかしルナアルの小說はミケル・アンヂエロの彫刻は勿論、セザンヌの畫の何枚かのやうに未完成の疑ひのあるものではない。僕は不幸にも寡聞の爲に佛蘭西人はルナアルをどう評價してゐるかを知らずにゐる。けれども、わがルナアルの仕事の獨創的なものだつたことを十分には認めてゐないらしい。

ではかう云ふ小說は紅毛人以外には書かなかつたか？　僕は僕等日本人の爲に志賀直哉氏の諸短篇を、――「焚火」以下の諸短篇を數へ上げたいと思つてゐる。

僕はかう云ふ小說は「通俗的興味はない」と言つた。僕の通俗的興味と云ふ意味は事件そのものに對する興味である。僕はけふ往來に立ち、車夫と運轉手との喧嘩を眺めてゐた。のみならず或興味を感じた。この興味は何であらう？　僕はどう考へて見ても、芝居の喧嘩を見る時の興味と違ふとは考へられない。若し違つてゐるとすれば、芝居の喧嘩は僕の上へ危險を齎らさないにも關らず、往來の喧嘩はいつ何時危險を齎らすかもわからないことである。僕はかう云ふ興味を與へる文藝を否定するものではない。しかしかう云ふ興味よりも高い興味のあることを信じてゐる。若しこの興味とは何かと言へば、――僕は特に谷崎潤一郎氏にはかう答へたいと思つてゐる。――「麒麟」の冒頭の數頁は直ちにこの興味を與へる好個の一例となるであらう。

「話」らしい話のない小說は通俗的興味の乏しいものである。が、最も善い意味では決して通俗的興味に乏しくない。（それは唯「通俗的」と云ふ言葉をどう解釋するかと云ふ問題である。）ルナアルの描いたフィリップが――詩人の目と心とを透して來たフィリップが僕等に興味を與へるのは一半はその僕等に近い一凡人である爲である。それをもか通俗的興味と呼ぶことは必ずしも不當ではないであらう。（尤も僕は僕の議論の力點を「一凡人である」と云ふことには加へたくない。「詩人の目と心とを透して來た一凡人である」と云ふことに加へたいのである。）現に僕はかう云ふ興味の爲に常に文藝に親しんでゐる大勢の人を知つてゐる。僕等は勿論動物園の麒麟に驚嘆の聲を吝しむものではな

い。が、僕等の家にゐる猫にもやはり愛嬌を感ずるのである。

しかし或論者の言ふやうにセザンヌを畫の破壞者とすれば、ルナアルも亦小說の破壞者である。この意味ではルナアルは暫く問はず、振り香爐の香を帶びたジッドにもせよ、町の匂ひのするフィリップにもせよ、多少はこの人通りの少ない、陷穽に滿ちた道を歩いてゐるのであらう。僕はかう云ふ作家たちの仕事にアナトオル・フランスやバレス以後の作家たちの仕事に興味を持つてゐる。僕の所謂「話」らしい話のない小說はどう云ふ小說を指してゐるか、なぜ又僕はかう云ふ小說に興味を持つてゐるか、――それ等は大體上に書いた數十行の文章に盡きてゐるであらう。

二　谷崎潤一郎氏に答ふ

次に僕は谷崎潤一郎氏の議論に答へる責任を持つてゐる。尤もこの答の一半は一の中にもないことはない。が、「凡そ文學に於て構造的美觀を最も多量に持ち得るものは小說である」と云ふ谷崎氏の言には不服である。どう云ふ文藝も、――僅々十七字の發句さへ「構造的美觀」を持たないことはない。しかしかう云ふ論法を進めることは谷崎氏の言を曲解するものである。とは言へ「凡そ文學に於て構造的美觀を最も多量に持ち得るもの」は小說よりも寧ろ戲曲であらう。勿論最も戲曲らしい小說は小說らしい戲曲よりも「構成的美觀」を缺いてゐるかも知れない。しかし戲曲は小說よりも大體「構成的美觀」に豐かである。――それも亦實は議論上の枝葉に過ぎない。兎に角小說と云ふ文藝上の形式は「最も」か否かを暫く措き、「構成的美觀」に富んでゐるであらう。なほ又谷崎氏の言ふやうに「筋の面白さを除外するのは、小說と云ふ形式が持つ特權を捨ててしまふ」と云ふことも考へられるのに違ひない。が、この問題に對する答は(一)の中に書いたつもりである。唯「日本の小說に最も缺けてゐるところは、此の構成する力、いろいろ入り組んだ筋を幾何學的に組み立てる才能にある。」かどうか、その點は僕は無造作に谷崎氏の議論に賛することは出來ない。我々日本人は「源氏物語」の昔からかう云ふ才能を持ち合せてゐる。單に現代の作家諸氏を見ても、泉鏡花氏、正宗白鳥氏、里見弴氏、久米正雄氏、佐藤春夫氏、宇野浩二氏、菊池寬氏等を數へられるであらう。しかもそれ等の作家諸氏の中にも依然として異彩を放つてゐるのは「僕等の兄」谷崎潤一郎氏自身である。僕は決して谷崎氏のやうに我々東海の孤島の民に「構成する力」のないのを悲しんでゐない。

この「構成する力」の問題はまだ何十行でも論ぜられるであらう。しかしその爲には谷崎氏の議論のもう少し詳しいのを必要としてゐる唯大手に一言すれば、僕はこの「構成する力」の上では我々日本人は支那人よりも劣つてゐるとは思つてゐない。が、「水滸傳」「西遊記」「金瓶梅」「紅樓夢」「品花寶鑑」等の長篇を綿々と書き上げる肉體的力量には劣つてゐると思つてゐる。

更に谷崎氏に答へたいのは「芥川君の筋の面白さを攻擊する中には、組み立ての方面よりも、或は寧ろ材料にあるかも知れない」と云ふ言葉である。僕は谷崎氏の用ゐる材料には少しも異存を持つてゐない。「クリップリン事件」も「小さい王國」も「人魚の嘆き」も材料の

上では決して不足を感じないものである。それから又谷崎氏の創作態度にも、――僕は佐藤春夫氏を除けば、恐らくは谷崎氏の創作態度を最も知つてゐる一人であらう。僕が僕自身を鞭つと共に谷崎潤一郎氏をも鞭ちたいのは（僕の鞭に棘のないことは勿論谷崎氏も知つてゐるであらう。）その材料を生かす爲の詩的精神の如何である。或は又詩的精神の深淺である。谷崎氏の文章はスタンダアルの文章よりも名文であらう。（暫く十九世紀中葉の作家たちはバルザックでもスタンダアルでもサンドでも名文家ではなかつたと云ふアナトオル・フランスの言葉を信ずるとすれば）殊に繪畫的效果を與へることはその點では無力に近かつたスタンダアルなどの匹儔ではない。（これも又連帶責任者にはブランデスを連れてくれば善い。）しかしスタンダアルの諸作の中に漲り渡つた詩的精神はスタンダアルにして始めて得られるものである。フロオベエル以前の唯一のラルティストだつたメリメエさへスタンダアルに一籌を輸したのはこの問題に盡きてゐるであらう。僕が谷崎潤一郎氏に望みたいものは畢竟唯この問題だけである。「刺青」の谷崎氏は詩人だつた。が、「愛すればこそ」の谷崎氏は不幸にも詩人には遠いものである。

「大いなる友よ、汝は汝の道にかへれ。」

三　僕

最後に僕の繰り返したいのは僕も亦今後側目もふらずに「話」らしい話のない小説ばかり作るつもりはないと云ふことである。僕等は誰も皆出來ることしかしない。僕の持つてゐる才能はかう云ふ小説を作ることに適してゐるかどうか疑問である。のみならずかう云ふ小説を作ることは決して並み並みの仕事ではない。僕の小説を作るのは小説はあらゆる文藝の形式中、最も包容力に富んでゐる爲に何でもぶちこんでしまはれるからである。若し長詩形の完成した紅毛人の國に生れてゐたとすれば、僕は或は小説家よりも詩人になつてゐたかも知れない。僕はいろいろの紅毛人たちに何度も色目を使つて來た。しかし今になつて考へて見ると、最も内心に愛してゐたのは詩人兼ジヤアナリストの猶太人――わがハインリツヒ・ハイネだつた。

四　大作家

僕は上に書いた通り、頗る雜駁な作家である。が、雜駁な作家であることは必しも僕の恥ぢではない。いや、何びとの恥ぢでもない。古來の大作家と稱するものは悉く雜駁な作家である。彼等は彼等の作品の中にあらゆるものを抛りこんだ。ゲエテを古今の大詩人とするのもたとひ全部ではないにもせよ、大半はこの雜駁なことに――この箱船の乘り合ひよりも雜駁なことに存してゐる。しかし嚴密に考へれば、雜駁なことは純粹なことに若かない。僕はこの點では大作家と云ふものにいつも疑惑の目を注いでゐる。彼等は成程一時代を代表するに足るものであらう。しかし彼等の作品が後代を動かすに足るとすれば、それは唯彼等がどの位純粹な作家だつたかと云ふ一點に歸してしまふ訣である。「大詩人と云ふことは何でもない。我々は唯純粹な詩人を目標にしなければならぬ」と云ふ「狹い門」（ジツド）の主人公の言葉も決して等閑に附することは出來ない。僕は「話」らしい話のない小

を論じた時、偶然この「純粹な」と云ふ言葉を使つた。今この言葉を機緣にし、最も純粹な作家たちの一人、――志賀直哉氏のことを論ずるつもりである。從つてこの議論の後半はおのづから志賀直哉論に變化するであらう。尤も時と場合により、どう云ふ横道に反れてしまふか、それは僕自身にも保證出來ない。

五　志賀直哉氏

志賀直哉氏は僕等のうちでも最も純粹な作家――でなければ最も純粹な作家たちの一人である。志賀直哉氏を論ずるのは勿論僕自身に始まつたことではない。僕は生憎多忙の爲に、――と云ふよりも寧ろ無精の爲にそれ等の議論を讀まずにゐる。從つていつか前人の說を繰り返すことになるかも知れない。しかし又或は前人の說を繰り返すことにもならないかも知れない。……

（一）志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。立派に？――この人生を立派に生きることは第一には神のやうに生きることであらう。志賀直哉氏も亦地上にゐる神のやうには生きてゐないかも知れない。が、少くとも淸潔に、（これは第二の美德である）生きてゐることは確かである。勿論僕の「淸潔に」と云ふ意味は石鹼ばかり使つてゐることではない。「道德的に淸潔に」と云ふ意味である。これは或は志賀氏の作品を狹いものにしたやうに見えるかも知れない。が、實は狹いどころか、反つて廣くしてゐるのである。なぜ又廣くしてゐるかと云へば、僕等の精神的生活は道德的屬性を加へることにより、その屬性を加へない前よりも廣くならずにはゐないからである。勿論道德的屬性を加へると云ふ意味も敎訓的であると云ふことではない。物質的苦痛を除いた苦痛は大半はこの屬性の生んだものである。谷崎潤一郎氏の惡魔主義もやはりこの屬性から生まれてゐることは言ふまでもあるまい。（惡魔は神の二重人格者である。）更に例を求めるとすれば、僕は正宗白鳥氏の作品にさへ屢々論ぜられる厭世主義よりも寧ろ基督的魂の絕望を感じてゐるものである。）しかし又この屬性は志賀氏の中に勿論深い根を張つてゐたのであらう。この屬性を刺戟する上には近代の日本の生んだ道德的天才、――恐らくはその名に價する唯一の道德的天才たる武者小路實篤氏の影響も決して少くはなかつたであらう。念の爲にもう一度繰り返せば、志賀直哉氏はこの人生を淸潔に生きてゐる作家である。それは同氏の作品の中にある道德的口氣にも窺はれるであらう。（「佐々木の場合」の末段はその著しい一例である。）同時に又同氏の作品の中にある精神的苦痛にも窺はれないことはない。長篇「暗夜行路」を一貫するものは實にこの感じ易い道德的魂の苦痛である。

（二）志賀直哉氏は描寫の上には空想を頼まないリアリストである。その又リアリズムの細に入つてゐることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一點を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしにトルストイよりも細かいと言ひ得るであらう。これは又同氏の作品を時々平板に了らせてゐる。が、この一點に注目するものはかう云ふ作品にも滿足するであらう。世人の注目を惹かなかつた「二十代一面」はかう云ふ作品の一例である。しかしその效果を收めたものは、たとへば小品「鵠沼行」にしても寫生の妙を極めないものはない。次手に「鵠沼

行」のことを書けば、あの作品のディテエルは悉く事實に立脚してゐる。が、「丸くふくれた小さな腹には所々に砂がこびりついて居た」と云ふ一行だけは事實ではない。それを讀んだ作中人物の一人は「ああ、ほんたうにあの時には××ちやんのおなかに砂がついてゐた」と言つた！

（三）しかし描寫上のリアリズムは必しも志賀直哉氏に限つたことではない。同氏はこのリアリズムに東洋的傳統の上に立つた詩的精神を流しこんでゐる。同氏のエピゴオネンの及ばないのはこの一點にあると言つても差し支へない。これこそ又僕等に、――少くとも僕に最も及び難い特色である。僕は志賀直哉氏自身もこの一點を意識してゐるかどうか、は必しもはつきりとは保證出來ない。（あらゆる藝術的活動を意識の檻の中に置いたのは十年前の僕である。）しかしこの一點はたとひ作家自身は意識しないにもせよ、確かに同氏の作品に獨特の色彩を與へるものである。「焚き火」、「眞鶴」等の作品は殆どかう云ふ特色の上に全生命を託したものであらう。それ等の作品は詩歌にも劣らず（勿論この詩歌と云ふ意味は發句をも例外にするのではない。）頗る詩歌的に出來上つてゐる。これは又現世の用語を使へば、「人生的」と呼ばれる作品の一つ、――「憐れな男」にさへ看取出來るであらう。ゴム球のやうに張つた女の乳房に「豐年ぢや、滿作ぢや」を唄ふことは到底詩人以外に出來るものではない。僕は現世の人々がかう云ふ志賀直哉氏の「美しさ」に比較的注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。（「美しさ」は極彩色の中にあるばかりではない。）同時に又他の作家たちの美しさにもやはり注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。

（四）更に又やはり作家たる僕は志賀直哉氏のテクニイクにも注意を怠らない一人である。「暗夜行路」の後篇はこの同氏のテクニイクの上にも一進歩を遂げてゐるものであらう。が、かう云ふ問題は作家以外の人々には餘り興味のないことかも知れない。僕は唯初期の志賀直哉氏さへ、立派なテクニイクの持ち主だつたことを手短かに示したいと思ふだけである。

――煙管は女持でも昔物で今の男持よりも太く、ガッシリした拵だつた。吸口の方に玉藻の前が檜扇を翳して居る所が象眼になつてゐる。……彼は其の鮮な細工に暫く見惚れて居た。そして、身長の高い、眼の大きい、鼻の高い、美しいと云ふより總てがリッチな容貌をした女には如何にもこれが似合ひさうに思つた。――

これは「彼と六つ上の女」の結末である。

――代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い寫眞帳を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃まで來てぴたりと手を留めた。其處には二十歲位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顏を見詰めてゐた。――

これは「それから」の第一回の結末である。

出門日已遠　不受徒旅欺　骨肉恩豈斷　手中挑青絲　捷下萬仞岡
俯身試搴旗

これは更にずつと古い杜甫の「前出塞」の詩の結末――ではない一首である。が、いづれも目に訴へる、――言はば一枚の人物畫に近い

造形美術的効果により、結末を生かしてゐるものは同じことである。

（五）これは畢竟余論である。志賀直哉氏の「子を盗む話」は西鶴の「子供地獄」（大下馬）を思はせ易い。が、更に「范の犯罪」はモオパスサンの「ラルテイスト」（？）を思はせるであらう。「ラルテイスト」の主人公はやはり女の體のまはりへナイフを打ちつける藝人である。「范の犯罪」の主人公は或精神的薄明りの中に見事に女を殺してしまふ。が、「ラルテイスト」の主人公は如何に女を殺さうとしても、多年の熟練を積んだ結果、ナイフは女の體に立たずに體のまはりにだけ立つのである。しかもこの事實を知つてゐる女は冷然と男を見つめたまま、微笑さへ洩らしてゐるのである。けれども西鶴の「子供地獄」は勿論、モオパスサンの「ラルテイスト」も志賀直哉氏の作品には何の關係も持つてゐない。これは後世の批評家たちに模倣呼ばはりをさせぬ爲に特にちよつとつけ加へるのである。

六　僕等の散文

佐藤春夫氏の説によれば、僕等の散文は口語文であるから、しやべるやうに書けと云ふことである。これは或は佐藤氏自身は不用意の裡に言つたことかも知れない。しかしこの言葉は或問題を、――「文章の口語化」と云ふ問題を含んでゐる。近代の散文は恐らくは「しやべるやうに」の道を踏んで來たのであらう。僕はその著しい例に（近くは）武者小路實篤、宇野浩二、佐藤春夫等の諸氏の散文を數へたいものである。志賀直哉氏の散文も亦この例に洩れない。しかし僕等の「しやべりかた」が紅毛人の「しやべりかた」は暫く問はず、隣國たる支那人の「しやべりかた」よりも音樂的でないことも事實である。僕は「しやべるやうに書きたい」願ひも勿論持つてゐないものではない。が、同時に又一面には「書くやうにしやべりたい」とも思ふものである。僕の知つてゐる限りでは夏目先生はどうかとすると、實に「書くやうにしやべる」作家だつた。（但し「書くやうにしやべる」ものは即ちしやべるやうに書いてゐるから」と云ふ循環論法的な意味ではない。）「しやべるやうに書く」作家は前にも言つたやうにゐない訣ではない。が、「書くやうにしやべる」作家はいつこの東海の孤島に現はれるであらう。しかし、――

しかし僕の言ひたいのは「しやべる」ことよりも「書く」ことである。僕等の散文も羅馬のやうに一日に成つたものではない。僕等の散文は明治の昔からじりじり成長をつづけて來たものである。その礎を据ゑたものは明治初期の作家たちであらう。しかしそれは暫く問はず、比較的近い時代を見ても、僕は詩人たちが散文に與へた力をも數へたいと思ふものである。

夏目先生の散文は必しも他を待つたものではない。しかし先生の散文が寫生文に負ふ所のあるのは爭はれない。ではその寫生文は誰の手になつたか？　俳人兼歌人批評家だつた正岡子規の天才によつたものである。（子規はひとり寫生文に限らず、僕等の散文、――口語文の上へ少からぬ功績を殘した。）かう云ふ事實を振り返つて見ると、高濱虚子、坂本四方太等の諸氏もやはりこの寫生文の建築師のうちに數へなければならぬ。（勿論「俳諧師」の作家高濱氏の小説の上に殘した足跡は別に勘定するのである。）けれども僕等の散文が詩人たちの恩を蒙

つたのは更に近い時代にもない訣ではない。ではそれは何かと言へば北原白秋氏の散文である。僕等の散文に近代的な色彩や匂を與へたものは詩集「思ひ出」の序文だつた。かう云ふ點では北原氏の外に木下杢太郎氏の散文を數へても善い。

現世の人々は詩人たちを何か日本のパルナスの外に立つてゐるやうに思つてゐる。が、何も小説や戯曲はあらゆる文藝上の形式と沒交渉に存在してゐる訣ではない。詩人たちは彼等の仕事の外にもやはり又僕等の仕事にいつも影響を與へてゐる。それは別に上に書いた事實の證明するばかりではない。僕等と同時代の作家たちの中に詩人佐藤春夫、詩人、室生犀星、詩人久米正雄等の諸氏を數へることは明らかに僕の説を裏書するものである。いや、それ等の作家ばかりではない。最も小説家らしい里見弴氏さへ幾篇かの詩を殘してゐる筈である。

詩人たちは或は彼等の孤立に多少の歎を持つてゐるかも知れない。しかしそれは僕に言はせれば、寧ろ「名譽の孤立」である。

七　詩人たちの散文

尤も詩人たちの散文は人力にも限りのある以上、大抵彼等の詩と同程度に完成してゐないのを常としてゐる。芭蕉の「奧の細道」もやはり又この例に洩れない。殊に冒頭の一節はあの全篇に漲つた寫生的興味を破つてゐる。第一「月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり」と云ふ第一行を見ても、輕みを帶びた後半は前半の重みを受けとめてゐない。(散文にも野心のあつた芭蕉は同時代の西鶴の文章を「淺ましくもなり下れる姿」と評した。これは枯淡を愛した芭蕉には少しも無理のない言葉である。)しかし彼の散文もやはり作家たちの散文に影響を與へたことは確かである。たとひそれは「俳文」と呼ばれる彼以後の散文を通過して來たにもしろ。

八　詩歌

日本の詩人たちは現世の人々にパルナスの外にゐると思はれてゐる。その理由の一半は現世の人々の鑑賞眼が詩歌に及ばないことも數へられるであらう。しかし又一つには詩歌は單に散文のやうに僕等の全生活感情を盛り難いとによる訣である。詩は――古い語彙を用ひるとすれば、新體詩は短歌や發句よりもかう云ふ點では自由である。(プロレツトカルトの詩はあつても、プロレツトカルトの發句はない。)しかし詩人たちは、――たとへば現世の歌人たちもかう云ふ試みをしてゐないことはない。その最も著しい例は「悲しき玩具」の歌人石川啄木が僕等に殘した仕事である。これは恐らくは今日では言ひ古されてゐることであらう。しかし「新詩社」は啄木の外にもこの「オデイツソイスの弓」を引いたもう一人の歌人を生み出してゐる。「酒ほがひ」の歌人吉井勇氏は正にかう云ふ仕事をした。「酒ほがひ」の歌にうたはれたものはいづれも小説の匂ひを帶びてゐる。(或は心理描寫の影を帶びてゐる。)大川の秋の夕暮に浪費を思つた吉井勇氏はかう云ふ點では石川啄木と、――貧苦と鬪つた石川啄木と好個の對照を作るものであらう。(なほ又次手に一言すれば、「アララギ」の父正岡子規が「明星」の子北原白秋氏と僕等の散文を作り上げる上に力を合せたのも好對照である。)が、この仕事は必しも「新詩社」にばかりあつたことではない。

齋藤茂吉氏は「赤光」の中に「死に給ふ母」、「おひろ」等の連作を發表した。のみならず又十何年か前に石川啄木の殘して行つた仕事を――或は所謂「生活派」の歌を今もなほ着々と完成してゐる。元來齋藤茂吉氏の仕事ほど、多岐多端に渉つてゐるものはない。同氏の歌集は一首ごとに倭琴やセロや三味線や工場の汽笛を鳴り渡らせてゐる。（僕の言ふのは「一首ごと」である。「一首の中に」と言ふのではない。）若しこのまま書きつづけるとすれば、僕は或はいつの間にか齋藤茂吉論に移つてしまふであらう。しかしそれも便宜上、齒止めをかけて置かなければならぬ。僕はまだこの大手に書きたいことを持ち合せてゐる。が兎に角齋藤茂吉氏ほど、仕事の上に慾の多い歌人は前人の中にも少かつたであらう。

九　兩大家の作品

勿論あらゆる作品はその作家の主觀を離れることは出來ない。しかし假に客觀と云ふ便宜上の貼り札を用ひるとすれば、自然主義の作家たちの中でも最も客觀的な作家は德田秋聲氏である。正宗白鳥氏はこの點では對蹠點に立つてゐると言つても善い。正宗白鳥氏の厭世主義は武者小路實篤氏の樂天主義と好箇の對照を作つてゐる。のみならず殆ど道德的である。德田氏の世界も暗いものかも知れない。しかしそれは小宇宙である。久米正雄氏の「德田水」と呼んだ東洋詩的情緒のある小宇宙である。そこにはたとひ娑婆苦はあつても、地獄の業火は燃えてゐない。けれども正宗氏はこの地面の下に必ず地獄を覗かせてゐる。僕は確か一昨年の夏、正宗氏の作品を集めた本を手當り次第に讀破して行つた。人生の表裏を知つてゐることは正宗氏も德田氏に劣らないかも知れない。しかし僕の受けた感銘は――少くとも僕の受けた感銘中、最も僕に迫つたものは中世紀から僕等を動かしてゐた宗教的情緒に近いものである。

我を過ぎて汝は歎きの市に入り
我を過ぎて汝は永遠の苦しみに入る。――

（追記。この後二三日を經て正宗氏の「ダンテに就いて」を讀んだ感慨少からず。）

十　厭世主義

正宗白鳥氏の教へる所によれば、人生はいつも暗澹としてゐる。正宗氏はこの事實を教へる爲に種々雜多の「話」を作つた。（尤も同氏の作品中には「話」らしい話のない小說も少くない。）しかもその「話」を運ぶ爲にも種々雜多のテクニイクを用ひてゐる。才人の名はかう云ふ點でも當然正宗氏の上に與へらるべきであらう。しかし僕の言ひたいのは同氏の厭世主義的人生觀である。

僕も亦正宗氏のやうに如何なる社會組織のもとにあつても、我々人間の苦しみは救ひ難いものと信じてゐる。あの古代のパンの神に似たアナトオル・フランスのユウトピア（「白い石の上で」）さへ佛陀の夢みた寂光土ではない。生老病死は哀別離苦と共に必ず僕等を苦しめるであらう。僕は確か去年の秋、ダスタエフスキイの子供か孫かの餓死した電報を讀んだ時、特にかう思はずにはゐられなかつた。これは勿論コムミユニスト治下のロシアにあつた話である。しかしアナアキスト

の世界となつても、畢竟我々人間は我々人間であることにより、到底幸福に終始することは出來ない。

けれども「金が仇」とは封建時代以來の名言である。金の爲に起る悲劇や喜劇は社會組織の變化と共に必ず多少は減ずるであらう。いや、僕等の精神的生活も幾分か變化を受ける筈である。若しかう云ふ點を力說すれば、我々人間の將來は或は明るいと言はれるであらう。しかし又金の爲に起らずにゐる悲劇や喜劇もない訣ではない。のみならず金は必ずしも我々人間を飜弄する唯一の力ではないのである。

正宗白鳥氏がプロレタリアの作家たちと立ち場を異にするのは當然である。僕も亦、——僕は或は便宜上のコムミユニストか何かに變るかも知れない。が、本質的にはどこまで行つても、畢竟ジヤアナリスト兼詩人である。文藝上の作品もいつかは滅びるのに違ひない。現に僕の耳學問によれば、フランス語のリエゾンさへ失はれつつある以上、ボオドレエルの詩の響もおのづから明日異るであらう。(尤もそんなことはどうなつても我々日本人には差支へない。)しかし一行の詩の生命は僕等の生命よりも長いのである。僕は今日も亦明日のやうに「怠惰なる日の怠惰なる詩人」、——一人の夢想家であることを恥としない。

十一　半ば忘れられた作家たち

僕等は少くとも錢のやうに必ず兩面を具へてゐる。兩面以上を具へてゐることも勿論決して稀ではない。紅毛人の作り出した「藝術家として又人として」はこの兩面を示すものである。「人として」失敗したと共に「藝術家として」成功したものは盜人兼詩人だつたフランソア・ヴイヨンにまさるものはない。「ハムレツト」の悲劇もゲエテによれば思想家たるべきハムレツトが父の仇を打たなければならぬ王子だつた悲劇である。これも或は兩面の克し合つた悲劇と言はれるであらう。僕等の日本は歷史上にもかう云ふ人物を持ち合せてゐる。征夷大將軍源實朝は政治家としては失敗した。しかし「金槐集」の歌人源實朝は藝術家としては立派に成功してゐる。が、「人として」——或は何としてでも失敗したにしろ、藝術家としても成功しないことは更に悲劇的であると言はなければならぬ。

しかし藝術家として成功したかどうかは容易に決定出來るものではない。現にラムボオを嗤つたフランスは今日ではラムボオに敬禮し出した。が、たとひ誤植だらけにもしろ、三册(?)の著書のあつたことはラムボオの爲には仕合せである。若し著書もなかつたとしたらば、……

僕は僕の先輩や知人に二三の好短篇を書きながら、しかもいつか忘れられた何人かの人々を數へてゐる。彼等は今日の作家たちよりも或は力を缺いてゐたかも知れない。けれども偶然と云ふものはやはりそこにもあつた訣である。(若し全然かう云ふ分子を認めない作家があるとすれば、それは例外とする外はない。)それ等の作品を集めることは或は不可能に近いかも知れない。しかし若し出來るとすれば、彼等の爲は暫く問はず、後人の爲にも役立つことであらう。「生まるる時の早かりしか、或は又遲かりしか」は南蠻の詩人の歎きばかりではない。僕は福永挽歌、青木健作、江南文三等の諸氏にもかう云ふ歎きを感じてゐる。僕はいつか横文字の雜誌に「半ば忘れられ

た作家たち」と云ふシリイズの廣告を瞥見した。僕も亦或はかう云ふシリイズに名を連ねる作家たちの一人であらう。かう云ふのは格別謙遜したのではない。イギリスのロマン主義時代の流行兒だつた「僧」の作家ルイズさへやはりこのシリイズの中の一人である。しかし半ば忘れられた作家たちは必ずしも過去ばかりにある訣ではない。のみならず彼等の作品は一つの作品として見る時には現世の諸雜誌に載る作品よりも劣つてゐるとは言はれないのである。

十二　詩的精神

僕は谷崎潤一郎氏に會ひ、僕の駁論を述べた時、「では君の詩的精神とは何を指すのか？」と云ふ質問を受けた。僕の詩的精神とは最も廣い意味の抒情詩である。僕は勿論かう云ふ返事をした。すると谷崎氏は「さう云ふものならば何にでもあるぢやないか？」と言つた。僕はその時も述べた通り、何にでもあることは否定しない。「マダム・ボヴアリイ」も「ハムレツト」も「神曲」も「ガリヴアアの旅行記」も悉く詩的精神の産物である。どう云ふ思想も文藝上の作品の中に盛られる以上、必ずこの詩的精神の淨火を通つて來なければならぬ。僕の言ふのはその淨火を如何に燃え立たせるかと云ふことである。それは或は半ば以上、天賦の才能によるものかも知れない。いや、精進の力などは存外効のないものであらう。しかしその淨火の熱の高低は直ちに或作品の價値の高低を定めるのである。

世界は不朽の傑作にうんざりするほど充滿してゐる。が、或作家の死んだ後、三十年の月日を經ても、なほ僕等の讀むに足る十篇の短篇を殘したものは大家と呼んでも差支ない。たとひ五篇を殘したとしても、名家の列には入るであらう。最後に三篇を殘したとすれば、それでも兎に角一作家である。この一作家になることさへ決して容易に出來るものではない。僕はこれも亦横文字の雜誌に「短篇などは二三日のうちに書いてしまふものである」と云ふウエルズの言葉を發見した。二三日は暫く問はず、締め切り日を前に控へた以上、誰でも一日のうちに書かないものはない。しかしいつも二三日のうちに書いてしまふと斷言するのはウエルズのウエルズたる所以である。從つて彼は碌な短篇を書かない。

十三　森先生

僕はこの頃「鷗外全集」第六卷を一讀し、不思議に思はずにはゐられなかつた。先生の學は古今を貫き、識は東西を壓してゐるのは今更のやうに言はずとも善い。のみならず先生の小説や戲曲は大抵は渾然と出來上つてゐる。（所謂ネオ・ロマン主義は日本にも幾多の作品を生んだ。が、先生の戲曲「生田川」ほど完成したものは少かつたであらう）しかし先生の短歌や俳句は如何に贔屓眼に見るとしても、遂に作家の域にはひつてゐない。先生は現世にも珍らしい耳を持つてゐた詩人である。たとへば「玉篋二人浦島」を讀んでも、如何に先生が日本語の響を知つてゐたかは窺はれるであらう。これは又先生の短歌や俳句にも髣髴出來ない譯ではない。同時に又體裁を成してゐることはいづれも整然と出來上つてゐる。この點では殆ど先生としては人工を盡したと言つても善いかも知れない。

けれども先生の短歌や發句は何か一つ微妙なものを失つてゐる。詩歌はその又微妙なものさへ摑めば、或程度の巧拙などは餘り氣がかりになるものではない。が、先生の短歌や發句は巧は即ち巧であるものの、不思議にも僕等に迫つて來ない。これは先生には短歌や發句は餘戲に外ならなかつた爲であらうか？　しかしこの微妙なものは先生の戲曲や小說にもやはり鋒芒を露はしてゐない。（かう云ふのは先生の戲曲や小說を必ずしも無價値であると云ふのではない。）のみならず夏目先生の餘戲だつた漢詩は、――殊に晚年の絕句などはおのづからこの微妙なものを捉へることに成功してゐる。（若し「わが佛尊し」の譏りを受けることを顧みないとすれば。）

　僕はかう云ふことを考へた揚句、畢竟森先生は僕等のやうに神經質に生まれついてゐなかつたと云ふ結論に達した。或は畢に詩人よりも何か他のものだつたと云ふ結論に達した。「澁江抽齋」を書いた森先生は空前の大家だつたのに違ひない。僕はかう云ふ森先生に恐怖に近い敬意を感じてゐる。いや、或は書かなかつたとしても、先生の精力は聰明の資の共に僕を動かさずには措かなかつたであらう。僕はいつか森先生の書齋に和服を着た先生と話してゐた。方丈の室に近い書齋の隅には新らしい薄緣りが一枚あり、その上には蟲干しでも始まつたやうに古手紙が何本も並んでゐた。先生は僕にかう言つた。――「この間柴野栗山（？）の手紙を集めて本に出した人が來たから、僕はあの本はよく出來てゐる、唯手紙が年代順に並べてないのは惜しいと言つた。するとその人は日本の手紙は生憎月日しか書いてないから、年代順に並べることは到底出來ないと返事をした。それから僕はこの古手紙を指さし、ここに北條霞亭の手紙が何十本かある、しかし皆年代順に並んでゐると言つた。」――僕はその時の先生の昂然としてゐたのを覺えてゐる。かう云ふ先生に瞠目するものは必ずしも僕一人には限らないであらう。しかし正直に白狀すれば、僕はアナトオル・フランスの「ジアン、ダアク」よりも寧ろボオドレエルの一行を殘したいと思つてゐる一人である。

十四　白柳秀湖氏

　僕は又この頃白柳秀湖氏の「聲なきに聽く」と云ふ文集を讀み、「僕の美學」、「羞恥心に關する考察」、「動物の發性期と食物との關係」等の小論文に少からず興味を感じた。「僕の美學」は題の示すやうに正に白柳氏の美學に當り、「羞恥心に關する考察」は白柳氏の倫理學に當るものである。今後者は暫く問はず、前者をちよつと紹介すれば、美は僕等の生活から何の關係もなしに生まれたものではない。僕等の祖先は焚火を愛し、林間に流れる水を愛し、肉を盛る土器を愛し、敵を打ち倒す棒を愛した。美はこれ等の生活的必要品（？）からおのづから生まれて來たのである。……

　かう云ふ小論文は少くとも僕には現世に多いコントよりも遙に尊敬に價するものである。（白柳氏はこの小論文の末にこれは「文壇の一隅に唯物美學の呼聲、若しくはそれに關する議論の現れる絕對以前」に書いたと註してゐる。）僕は美學などは全然知らない。況や唯物美學などと云ふものには更に緣のない衆生である。しかし白柳氏の美の發生論は僕にも僕の美學を作る機會を與へた。白柳氏は造形美術以外の美

の發生に言及してゐない。僕はもう十數年前、或山中の宿に鹿の聲を聞き、何かしみじみと人戀しさを感じた。あらゆる抒情詩はこの鹿の聲に、――雌を呼ぶ雄の聲に發したのであらう。しかしこの唯物美學は俳人は勿論遠い昔の歌人さへ知つてゐたかも知れない。唯敍事詩に至つては確かに太古の民のゴシップに起源を發してゐたのであらう。「イリアッド」は神々のゴシップである。その又ゴシップは僕等には野蠻な莊嚴に充ち滿ちた美を感じさせるのに違ひない。しかしそれは「僕等には」である。太古の民は「イリアッド」に彼等の歡びや悲しみを感ぜずにはゐなかつたであらう。のみならずそこに彼等の心の燃え上るのを感ぜずにはゐなかつたであらう。……

白柳秀湖氏は美の中に僕等の祖先の生活を見てゐる。が、僕等は僕等ばかりではない。アフリカの沙漠に都會の出來る頃には僕等の子孫の祖先にあるのである。從つて僕等の心もちは丁度地下の泉のやうに僕等の子孫にも傳はるであらう。僕は白柳秀湖氏のやうに焚き火に親しみを感じるものである。同時に又その親しみに太古の民を思ふものである。（僕は「槍ヶ岳紀行」の中にちよつとこのことを書いたつもりである。）しかし「猿に近い吾々の祖先」は彼等の焚き火を燃やす爲にどの位苦心をしたことであらう。焚き火を燃やすことを發明したのは勿論天才だつたのに違ひない。けれどもその焚き火を燃やしつづけたものはやはり何人かの天才たちである。僕はこの苦心を思ふ時、不幸にも「今の藝術といふものなど、無くなつてしまつてもよい」とは考へない。

十五 「文藝評論」

批評も亦文藝上の一式である。僕等の譽めたり貶したりするのも畢竟は自己を表現する爲めであらう。窓の上に映つたアメリカの役者に、――しかも死んでしまつたヴアレンテイノに拍手を送つて脊まないのは相手を歡ばせる爲でも何でもない。唯好意を、――惡いては自己を表現する爲にするのである。若し自己を表現する爲とすれば。……

小說や戲曲も紅毛人の作品に或は遙かに及ばないかも知れない。が、批評も亦紅毛人の作品に遜色のあるのは確かである。僕はかう云ふ荒蕪の中に唯正宗白鳥氏の「文藝評論」を愛讀した。批評家正宗白鳥氏の態度は紅毛人の言葉を借りれば、徹頭徹尾テクニックである。のみならず「文藝評論」は必ずしも文藝評論ではない。時には文藝の中の人生評論である。しかも僕は卷煙草を片手に「文藝評論」を愛讀した。時々石のごろごろした一本道を思ひ出しながら、その又一本道の日の光に殘酷な歡びを感じながら。

十六 文學的未開地

イギリスは久しく閑却してゐた十八世紀文藝に注目してゐる。それは一つには大戰の後には誰も陽氣なものを求めてゐるからであらう。（僕は私かに世界中も同じではないかと思つてゐる。同時に又大戰の爲に打擊を受けない日本さへいつかこの流行に感染してゐるのも不思議なものだと思つてゐる。）しかし又一つには閑却してゐた爲に文學者たちの研究に材料を與へ易い爲もある訣である。俗は米のない流しも

とへは來ない。文學者たちも同じことであらう。從つて等閑に附せられることはそれ自身發見されることになる訣である。

これは日本でも同じことである。俳諧寺一茶は暫く問はず、天明以後の俳人たちの仕事は殆ど誰にも顧みられてゐない。僕はかう云ふ俳人たちの仕事も次第に顯れて來ることゝ思つてゐる。しかも「月並み」の一言では到底片づけられない一面も次第に顯れて來ることと思つてゐる。

等閑に附せられると云ふことも必しも惡いことばかりではない。

十七　夏目先生

僕はいつか夏目先生が風流漱石山人になつてゐるのに驚嘆した。僕の知つてゐた先生は才氣煥發する老人である。のみならず機嫌の惡い時には先輩の諸氏は暫く問はず、後進の僕などには往生だつた。成程天才と云ふものはかう云ふものかと思つたこともないではない。何でも冬に近い木曜日の夜、先生はお客と話しながら、少しも顏をこちらへ向けずに僕に「葉卷をとつてくれ給へ」と言つた。しかし葉卷がどこにあるかは生憎僕には見當もつかない。僕はやむを得ず「どこにありますか?」と尋ねた。すると先生は何も言はずに猛然と(かう云ふのは少しも誇張ではない。)顋を右へ振つた。僕は怯づ怯づ右を眺め、やつと客間の隅の机の上に葉卷の箱を發見した。

「それから」、「門」「行人」「道草」等はいづれもかう云ふ先生の情熱の生んだ作品である。先生は枯淡に住したかつたかも知れない。實際又多少は住してゐたであらう。が、僕が知つてゐる晩年さへ、決して文人などと云ふものではなかつた。まして「明暗」以前にはもつと猛烈だつたのに違ひない。僕は先生のことを考へる度に老辣無双の感を新たにしてゐる。が、一度身の上の相談を持ちこんだ時、先生は胃の具合も善かつたと見え、かう僕に話しかけた。――「何も君に忠告するんぢやないよ。唯僕が君の位置に立つてゐるとすればだね。」……僕は實はこの時には先生に顋を振られた時よりも遙かに參らずにはゐられなかつた。

十八　メリメエの書簡集

メリメエはフロオベエルの「マダム・ボヴアリイ」を讀んだ時、「超凡の才能を浪費してゐる」と言つた。「マダム・ボヴアリイ」はロマン主義者のメリメエには實際かう感ぜられたかも知れない。しかしメリメエの書簡集(誰かわからない女に宛てた戀愛書簡集)はいろいろの話を含んでゐる。たとへばパリから書いた二番目の書簡に、――

ルウ・サン・オノレエに貧しい女が一人住んでゐた。彼女は見すぼらしい屋根裏の部屋を殆ど一度も離れなかつた。それから又十二になる娘を一人持つてゐた。その少女は午後からオペラへ勤め、大抵眞夜中に歸つて來るのだつた。或夜のこと、娘は門番の部屋へ下りて來て「蠟燭に火をつけて貸して下さい」と言つた。門番の女房は娘のあとから屋根裏の部屋へ昇つて行つた。するとあの貧しい女は死骸になつて横たはつてゐた。のみならず娘は古トランクから出した一束の手紙を燃やしてゐた。「お母さんは今夜死にました。これはお母さんが死ぬ前に讀まずに燒けと言つてゐた手紙です」――娘は門番の女房にかう

言つた。娘は父の名も知らなければ母の名も知らなかつた。しかも生活の途と言つては唯せつせとオペラへ勤め、猿になつたり、悪魔になつたり、ほんの端役を勤めるだけだつた。母親は最後の敎訓に「いつまでも端役でゐるやうに、又善良でゐるやうに」と言つた。娘は今でもこの敎訓通り、善良な端役に終始してゐる。

もう一つ次手に田舎の話を引けば、今度はカンヌから書いた書簡に、——

グラッスに近い或農夫が一人、谷底に倒れて死んでゐた。前夜にそこへ轉げ落ちたか、抛りこまれたかしたものである。すると同じ仲間の農夫が一人、彼の友だちに殺人犯人は彼自身であると公言した。「どうして？ なぜ？」「あの男は俺の羊を呪つたやつだ。俺は俺の羊飼ひに敎はり、三本の釘を鍋の中で煮てから、呪文を唱へてやることにした。あの男はその呪ひに死んでしまつたのだ。」……

この書簡は一八四〇から一八七〇——メリメエの晩年に亘つてゐる。（彼の「カルメン」は一八四四の作品である。）かう云ふ話はそれ自身小說になつてゐないかも知れない。しかしモオティフを捉へれば、小說になる可能性を持つてゐる。モオパスサンは暫く問はず、フイリップはかう言ふ話から幾つも美しい短篇を作つた。僕等は勿論樗牛の言つたやうに「現代を超越」など出來るのではない。しかも僕等を支配する時代は存外短いものである。僕はメリメエの書簡集の中に彼の落ち穗を見出した時、しみじみかう感ぜずにはゐられなかつた。

メリメエはこの誰かわからない女へ手紙を書きはじめた時分から幾つも傑作を殘してゐる。それから又死んでしまふ前には新敎徒の一人になつてゐる。これも亦僕にはニイチエ以前の超人崇拜家だつたメリメエを思ふと、多少の興味のないこともない。

十九 古典

僕等は皆知つてゐることの外は書けない。古典の作家たちも同じだつたであらう。プロフエッサアたちは文藝評論をする時、いつもこの事實を閑却してゐる。尤もこれは一概にプロフエッサアたちばかりとは言はれないかも知れない。しかしそれは兎も角も、僕は晩年に「あらし」を書いたシエクピイアの心中に同情に近いものを感じてゐる。

二十 ジヤアナリズム

もう一度佐藤春夫氏の言葉を引けば、「文章はしやべるやうに書け」と云ふことである。僕は實際この文章をしやべるやうに書いて行つたが、いくら書いて行つても、しやべりたいことは盡きさうもない。僕は質にかう云ふ點ではジヤアナリトであると思つてゐる。從つて職業的ジヤアナリストを兄弟であると思つてゐる。（尤も向うから御免だと言はれれば、默つて引き下る外はない。）ジヤアリズムと云ふものは畢竟歷史に外ならない。（新聞記事に誤傳があるのも歷史に誤傳があるのと同じことである。）歷史も亦畢竟傳記である。その又傳記は小說とどの位異つてゐるのであらう、現に自叙傳は「私」小說と云ふものとはつきりした差別を持つてゐない。暫くクロオチエの議論に耳を貸さずに抒情詩等の詩歌を例外とすれば、あらゆる文藝はジヤアナリズムである。のみならず新聞文藝は明治大正の兩時代に所謂文壇的作品に遜色

のない作品を殘した。德富蘇峯、陸羯南、黑岩涙香、遲塚麗水等の諸氏の作品は暫く問はず、山中未成氏の書いた通信さへ文藝的には現世に多い諸雜誌の雜文などに劣るものではない。のみならず、――

のみならず新聞文藝の作家たちはその作品に署名しなかつた爲に名前さへ傳はらなかつたのも多いであらう。現に僕はかう云ふ人々の中に二三の詩人たちを數へてゐる。僕は一生のどの瞬間を除いても、今日の僕自身になることは出來ない。かう云ふ人々の作品も（僕はその作家の名前を知らなかつたにしろ）僕に詩的感激を與へた限りやはり、ジヤアナリスト兼詩人たる今日の僕には恩人である。僕を作家にした偶然はやはり彼等をジヤアナリストにした。若し袋に入れた月給以外に原稿料のとれることを幸福であるとするならば、僕は彼等よりも幸福である。（虚名などは幸福にはならない。）何う云ふ點を除外すれば、僕等は彼等と職業的に何の相違も持つてゐない。少くとも僕はジヤアリストだつた。今日もなほジヤアナリストである。將來も勿論ジヤアナリストであらう。

しかし諸大家たちは暫く問はず、僕はこのジヤアナリストたる天職にも時々うんざりすることは事實である。

（昭和二・二・二十六）

或る夜の歌

吉井勇

おのづから手も杯に觸れぬべしいきどほろしき世ぞと思へば

酒に醉ふ否々あらず堪へがたき憤りにしもわれは醉ひぬる

夜は更けぬものを思へば壁の上の己が影ばかりなつかしきかな

いくたびか棄てていくたびかまた取りぬこの杯はかの君に似る

かにかくに酒の苦さも身に染みて命かなしくなりにけるかな

夜はくだつしんしんとして夜はくだつ杯の酒冷ゆるまにまに

饒舌錄（感想）

谷崎潤一郎

今月は東洋主義と云ふことに就いて少ししやべつて見ようと思ふ。實は此の事は座談的でなく、秩序を設けて組織的に述べた方がいいのであるが、さうして一度はさう云ふものを書いて見たく思つてゐたのだが、論文は自分の柄にないし、目下頭を整頓させる暇もないから、矢張り饒舌錄式に、思ひ出すままをだらだらと述べよう。

第一東洋主義と云ふのは何を指すのか、此れが自分にもはつきりしない。要するに東洋的なる趣味、物の考へ方、體質、性格、――何と云つたらいいか知れぬが、單に文學藝術に限らず、政治宗教哲學から日常茶飯の出來事や衣食住の細かい點に至るまで、東洋には何か西洋とは異つた獨特な物のあるのが感じられる。少くとも東洋人にはそれが分つてゐる筈である。自分は其れを指すのである。東洋主義と主義の文字を使ふのは或は穩當を缺くかも知れない。英語で云へばオリエンタリズムとでも云ふのか、まあ名前はどうでもいい。自分の云はうとすることは讀んで行くうちに分つて貰へよう。

例を卑近なところから取る。自分は食ひしんぼうであるから、先づ食ひ物で說明をしよう。西洋料理と云ふものは今でこそ日本に於ては下品な安手なものになつたが、私の子供の時分にはさうでなかつた。洋食屋も今ほど澤山はなかつたし、食ふ機會も少なかつたので、日本料理よりはずつと御馳走だとされてゐた。私の最も古い記憶では、五つか六つの頃、日本橋蠣殼町の家で、當時鎧橋のほとりにあつた吾妻亭（今でもある筈）から、ビフテキと蠣のフライか何かを取つて食べたことがある。そんな古いことをどうして覺えてゐるかと云ふと、私はその時子供心に、こんなうまいものが又と世間にあらうかと思つたからである。私にはすべてが奇異で美味であつた。まだ味覺の發達してゐない幼時のことで、何を食べても特別にうまいと感じたことのなかつた私は、始めてうまい味と云ふものを知つた。バタやソースなどと云ふものまでが實にたまらなくおいしくつて、こんなものを年中食べてゐる西洋人が羨ましかつた。當時私の家では毎月の十日が祖父の

忌日に當るので、その日になると佛前へ祖父の寫眞を飾り、供へ物をして、そのお下りを私たちが食べたものだが、兩親は多分子供を喜ばせる爲めにであらう。いつの間にかその供へ物を洋食のオムレツにする習慣になつた。それで私は毎月十日が來ることを樂しみにしたものである。同じ卵であるけれども、オムレツの味は卵燒や炒り卵とは全然別な味で、うまさはとても比較にならなかつた。「おめへたちは洋食が食ひてえんでおぢいさんを出しに使つてゐやあがる」と、父は江戸辯で冷やかしたものだが、正にその通りであつた。その頃小學校の友達にWと云ふ體の弱い兒があつて、その兒は營養分を取るために毎日夕食に西洋料理を食べてゐた。で、よく私と外戸で遊んで夕方家へ歸る時分、茅場町の保米樓と云ふ洋食屋の前に立ち寄り、自分の好きな洋食を注文して歸るのが常であつた。私はこのWをどんなに羨ましいと思つたか知れない。自分は一と月に一度ぐらゐしか洋食が食べられないのに、Wは毎日、それも好き放題なものをいろいろ取り變へて食べるのである。どうも話が卑しくなつたが、これを思ふに、東洋流の――少くとも日本流の――食味は微妙に過ぎて、子供の官能には訴へるところがないのに反し、西洋流のは刺戟が強いだけ、それだけハツキリと分るのである。私は父や母が此の刺身はうまいとか、此の吸ひ物がどうだとか云ふのを聞いても、一向自分には分らなかつた。大人と云ふものは變な贅澤を云ふものだ、お刺身なんぞ孰れも同じ味ぢやないかと思つたりした。

繪に就いても同じやうな經驗がある。私の家なぞ下町の町人で、碌な藏幅があらう筈もなく、せいぜい浮世繪の版畫や草双紙の類に親しんだくらゐなものだつたから、そのせゐもあらうが、日本畫に於て繪の美しさを感じたことは殆んどなかつた。そして私の腦裡に最も強い印象を與へたものは、隱居所の床の間に置いてあつた聖母マリアの像であつた。これは多分、祖父が晩年耶蘇教信者になつたので、祖父の形見の品だつたであらう。(私は嘗て此のことを何かに書いた。)そして恐らくは西洋の名畫の複製だつたに違ひないが、非常に立派な額緣の中に收まつてゐた薄暗いその像は、云ひ知れぬ氣高さと、恐ろしさと、美しさとを以て迫つた。そこには、少年の頭では明確に掴めなかつたけれども、何か「永遠の女性」と云ふやうなもののあるのが、おぼろげに感ぜられた。ところでもしその時分、私が奈良や法隆寺の佛像の前へ連れて來られても、きつとあの聖母の像ほどには感じなかつたであらうと思ふ。お寺と云へば抹香臭い陰氣な所とのみ思つて、推古天平の佛像も、本所の五百羅漢や人形町の大觀音と一緒にしたであらう。子供を感心させるのには、先づ何よりも實物に近く描いてあること、生きた人間によりよく似せてあることが必要だ。遠近法があり、光線の陰影があり、距離や質量の感じがほんたうらしく表現されてゐなければ、子供を動かすことはむづかしい。日淸戰爭や日露戰爭のパノラマを見て、非常な名畫だと思つた子供は私ばかりではないであらう。あの聖母の像は今考へればどれ程のものか分らないけれども、日本畫

よりは寫實的であつたことは勿論である。子供の私は、最初にそこに現はされた性質に打たれた、さればこそ其の美しさや氣高さが分つたのだ。

○

私はしばしば作品の中で、東洋の趣味は素直でない、無邪氣でない、何處かヒネクレた、病的なところがあると云ふことを書いた。此れは小說中の人物に云はせたので、必ずしも自分の今の意見ではないが、しかし此の、西洋の藝術の方が子供の心に入り易いと云ふ點は、確かに一考に値ひすると思ふ。云ふまでもなく、子供は正直で白紙のやうなものである。その感覺も案外銳敏で、溌溂としてゐて、或る場合には大人以上の鑑賞力を發揮する。子供に分らないのは、世故人情や、學識や、性慾に關係のある問題が絡んで來る場合ばかりである。單純な形式の物であれば、子供は大人と同樣に分る。その證據には子供の時分に讀んだり見たりして面白いと思つたものは、大人になつてからも大概面白い。優れた童話は大人にも子供にも興味がある。子供を馬鹿にすることは出來ないばかりか、子供の鑑賞力の方が却つて純粹であるとも云へる。然るに子供は、十人が十人とも暗い東洋趣味よりも明るい西洋趣味の方を喜ぶのである。

茲に最も顯著な例は音樂である。今では西洋と日本の音樂が大分近づいて來たけれども、私の少年時代には兩者は截然と分れてゐた。當時の西洋音樂と云へば極めて幼稚で、ブカブカドンドンの樂隊であつたが、それでもあれを聞かされると、子供の血が湧き胸が躍り、心がひとりでに浮き立つて來て足拍子を踏んだ。それに引き換へ日本の音曲はどうであつたか。私の耳についてゐるのは從弟の習つてゐた寂しい琴の音や、妹の「宵は待ち」や「黑髮」や、父が醉つ拂つて唄ひ出す都都逸や、芝居のチョボで聞かされる憂鬱な、重苦しい、涙を誘ふやうなでんでんと云ふ三絃の響きである。此れがどうして少年の心を動かすに足らうぞ。全く子供の生活とは關係のない世界である。たまたまそれが少年を動かす場合があるとすれば、天眞爛漫に伸びて行く心を徒らに厭世的にさせるか、野卑にさせるか、兎に角惡い影響はあつても、決していい感化は及ぼさない。俗曲よりは高尙優美であるとされる謠曲になれば、尙更である。

斯くの如く端的に少年の心を捉へると云ふ一事から見て、西洋の藝術は東洋のものより健全であり、正道を濶步してゐるやうに思へぬでもない。

○

人はよく、西洋の文明は物質的であり、東洋のそれは精神的であると云ふ。私の知つてゐる範圍で、最も熱心に、機會ある每にその說を主張するのは印度のタゴール翁である。往年米國のジョン・デュウエイは翁のやうな說を駁して云つた、東洋人の精神的若しくは道德的と

云ふのは、果して何を意味するのか。東洋人は浮世を捨てて山の中へ隱遁し、ひとり瞑想に耽つてゐるやうなのを聖人と云ひ、高潔の士と云ふ。しかし西洋ではそんな人間を聖人だとも高士だとも思はない、それは一種のエゴイストに過ぎない。われわれは勇ましく街頭に出で、病める者に藥餌を與へ、貧しき者に物資を惠み、社會一般の幸福を增進する爲めに身を犧牲にして働く人を、眞の道德家であると云ひ、さう云ふ仕事を精神的の事業と云ふのだ。――と、たしかさう云ふ趣意だつたと思ふ。私は一槪にデュウエイに贊成は出來かねるけれども、タゴール翁の云つてゐることにも獨り合點のところが多い。ただ東洋は精神的、西洋は物質的と頭から極めてしまつて、何一つとして實例を擧げてゐない。成る程印度には偉大な佛敎の哲學があつた。しかし西洋にだつて希臘以來整然とした哲學系統があるではないか。プラトンやカントに匹敵するものが東洋にあるかと問はれたら、われわれは卽座には返辭が出ないではないか。のみならず今日のわれわれの頭には、印度の哲學よりも希臘獨逸の哲學の方がたやすく理解されるのである。支那の春秋戰國時代の哲學、宋の理學なども、到底西洋哲學の巍然たる組み立てや、奧深さには及ぶべくもあるまい。淺學な私はよく知らないが、最も物質的だとされる亞米利加にでさへ、ワルデンの森の聖者トーローがゐる。タゴール翁の云ふやうな意味での聖人高士も、捜したら隨分西洋にゐるであらう。要するに釋迦と基督とマホメットの三教祖を亞細亞から出してゐると云ふ以外、東洋がより精神的だと云ひ得る根據はないやうに思ふ。ただ西洋に比べて物質的の方面が著しく劣つてゐるために、精神的の方面ばかりが眼立つのではないか。タゴール翁のやうに物質文明を呪咀し、輕蔑するのもいいが、徹底的にその論理を推し進めれば、あらゆる近代科學上の發明や設備は不必要になり、汽車も電車も無線電信も飛行機もいらない、と云ふことになる。そんな不便な生活でも差し支へないのか。第一翁自身は物質文明のお蔭を蒙むつてゐないのか、物質文明を排斥する結果自分の國が亡ぼされてしまつても構はないのか、さう云ふ點が一向何とも說明してない。それでは全くの空威張りであり、負け惜しみである。翁が西洋で持て囃され、亞米利加あたりでひどく歡迎されてゐるのは、翁の思想や學識のためではなく、寧ろその聖者らしい優雅な風貌、美しい發音の英語の力に負ふところが多いのであらう。東洋人は偉い人ほどおしやべりをしない、外に向つて宣傳をしない。亞米利加あたりで持ててゐる日本人にはロクな奴は一人もない。紳士淑女にお世辭を云ふのが上手な、見てくればかりの喰はせものである。翁が鄕國の印度に於て餘り人氣がないと云ふのは宜なる哉と私に思ふ。

なほもう一人東洋主義のチャンピオンとも云ふべき人は、支那の碩儒辜鴻銘翁である。此の人も物質文明の排斥屋で、東洋の精神文明を高調するけれども、タゴール翁と同樣に獨斷的で、空威張りと云はれても仕方のないところがある。東洋の經濟は消費者を主にした經濟であり、西洋のそれは生產者を主にした經濟であると此の人は云ふ。

が、然らばさう云ふ經濟學の徒が東洋にあるか、さう云ふ經濟のやり方で西洋と競爭して行けるか、それらの說明は何處にもしてない。私のやうな政治經濟に疎い人間は、もつと精しく敎へて貰はなければ腑に落ちない。ただ此の辜翁にはタ翁と違つて、他人には通用しなくとも、自分はそれで濟んで行くと云ふやうな、頑固な、片意地な、生え抜きの東洋人らしい信念が見える。嘗て此の人が「女性」の誌上で支那の一夫多妻主義を肯定してゐるのを讀んだことがあるが、一夫多妻は支那の實際の家庭を見ると、それほど不道德でもなく、婦人のために不幸を持ち來たす制度でもない。あれで家の中は圓滿に治まつてゐるから、あれはあれでもいいものであると云ふのである。ただそれだけで、理窟もなければ說明もしてないのだが、古い習慣をそつくりそのまま受け入れて動じようともしないところに、却つて人を落着ける力がある。辜翁は偉い人なのかも知れない。

が、要するにかう云ふチャンピオンたちが西洋の文化を排斥するのは、萎靡した東洋の人心を鼓舞するためでもあらうけれども、公平に見て今日までのところでは、東洋よりも西洋の方が人類の進步に寄與するところが多いやうに思はれる。東洋人の方がより多く西洋人から啓發され、指導され、恩惠を受けてゐることは、殘念ながら否むべくもない。われわれは下らない負け惜しみを云ふよりも、寧ろ東洋人らしい謙讓の美德を以て、西洋人の功績を賞讃するのが至當であらう。

○

私は一方に於ては以上の如く考へてゐるのである。

然るに他の一方に於ては、東洋の文化も古代には西洋に優つてゐた時代があつた、だから將來再びさう云ふ時代が來ないとも限らぬ、西洋に打ち勝つことは出來ないまでも、少くとも東洋は東洋だけの文化を發達させなければ、東洋人は生きて行かれないと云ふ氣持ちを、近頃特に痛切に感じる。

それに就いて思ひ出すのは、私は嘗て支那趣味に關して「中央公論」に短い感想を寄せたことがある。今その全文を左に掲げて見よう。——

——

支那趣味と云ふことは、單に趣味と云つてしまふと輕く聞えるが、しかし案外われわれの生活に深い關係を持つてゐるやうである。われわれ今日の日本人は殆んど全く西歐の文化を取り入れ、それに同化してしまつたやうに見えるが、われわれの血管の奧底には矢張り支那趣味と云ふものが、思ひの外強い根を張つてゐるのに驚く。私は近頃になつて特に此の感を深くする者である。私もその一人であるが、嘗ては東洋の藝術を時代後れとして眼中に置かず、西歐の文物にのみ憧がれてそれに心醉した人人が、ある時期が來ると結局日本趣味に復り、遂には支那趣味に趨つて行くのが、殆んど普通のやうに思はれる。特に洋行して來た人人には一層それが多いや

うである。私は主として藝術家の場合を云ふのであるが、然し今日五十歳以上の紳士で、多少教養のある人々の持つ思想とか、學問とか、趣味とか云へば、大概は支那の傳統が基調を成してゐる。政治家、學者、實業家の古老などで、拙劣な漢詩を作り、書道を學び、多少なりとも書畫骨董に親しまない者はないと云つてよい。彼等はみな子供の時分に彼等の祖先が代々學んで來た支那の學問で育てられた、そして一時は西洋かぶれした時代もあつたが、歳を取ると共に再び祖先傳來の思想に歸復してしまふのである。「今日、支那藝術の傳統は最早や支那では滅びてしまつた。それは寧ろ日本に殘つてゐる」と、ある支那人が嘆じたと云ふ事を私は友人から聞いた。その言葉はたしかに一面の眞相を穿つてゐる。が、支那自身と雖、今では支那の智識階級全體が恰も日本の鹿鳴館時代の如く、ほんの一時の歐米心醉に囚はれてゐるので、やがては國粹保存主義に眼醒める時があると思ふ。支那の如き獨特の文化と歴史を持つた、保守的な國柄に於いて、それは一層明かな事だと考へられる。

私は、かくの如き魅力を持つ支那趣味に對して、故郷の山河を望むやうな不思議なあこがれを感ずると共に、一種の恐れを抱いてゐる。なぜなら、餘人は知らないが私の場合には、その魅力は私の藝術上の勇猛心を銷磨させ、創作的熱情を痲痺させるやうな氣がするから。――この事は他日精しく書く時もあらうが、支那傳來の思想や藝術の眞髓は、靜的であつて動的ではない。それが私には善くない事のやうに思へる。――私は、自分が、特に誘惑を感ずるだけ、尚更恐れてゐるのである。私も子供の時分には漢學の塾へ通つたし、母は私に十八史略を教へたものであつた。此の頃の中學校などで無味乾燥な東洋史の教科書を教へるよりも、あの面白い教訓と逸話に富む漢籍の方が、どんなに子供の爲めになるか知れないと、今でも私はさう思ふのである。そして其の後、一度は支那へも遊びに行つて來た。私は支那を恐れながらも、私の書棚には支那に關する書籍が殖えて行くばかりである。止さう止さうと思ひながら、私は時々二十年も前に愛讀した李白や杜甫を開いて見る。「ああ李白と杜甫！何と云ふ偉大な詩人だらう！沙翁でもダンテでも果して彼等よりえらかつたらうか」と、讀む度毎に私はその詩の美に打たれる。横濱へ移轉して來て、活動寫眞の仕事をし、西洋人臭い街に住まひ、西洋館に住んでゐながらも、私のデスクの左右にある書棚の上には、亞米利加の活動雜誌と共に高靑邱や吳梅村が載つてゐる。私は仕事や創作の爲めに心身が疲れたとき、屡々それらの雜誌や支那人の詩集を手に取つて見る。モーション・ピクチユア・マガヂンやシヤドウランドや、フオトオ・プレエ・マガヂンなどを開くとき、私の空想はハリーウッドのキネマ王國の世界に飛び、限りない野心が燃え立つやうに感ずるが、さて一と度び高靑邱を繙くと、たつた一行の五言絶句に接してさへ、その閑寂な境地に惹き入れられて、今迄の野心や活潑な空想は水を浴びたやうに冷えてしまふ。「新しいも

のが何だ、創造が何だ、人間の到り得る究極の心境は、結局此の五言絶句に盡きてゐるぢやないか」と、さう云はれてゐるやうな氣がする。

此の後の私はどうなつて行くか、――今のところでは、成るたけ支那趣味に反抗しつつ、やはり時時親の顏を見たいやうな心持ちでこつそりと其處へ歸つて行くと云ふやうな事を繰り返してゐる。――私がこれを書いたのは五六年前のことだが、この誘惑は今も變りがないばかりか、却つて段段強められ、深められて行くのである。子供の時分には刺身よりもオムレツがうまかつたのに、今では全然反對である。いつぞや何かにも書いたやうに、凡そ食ひ物のうちで一番まづいのは西洋料理だと思つてゐる。酒も灘五郷の近くにゐるせゐか、結局日本酒が一番うまいことになつてしまつた。全體日本人の皮膚の色を考へても、西洋の料理や食卓の器具は何だか感じがしつくりとしない。漱石の「草枕」の中に、西洋菓子には羊羹のやうな深みを持つた色彩のあるものが一つもないと云つてあるが、私は今にしてあの言葉を想ひ出す。西洋人の白い膚には明るく冴えたものが映るけれども、東洋人の黄色い皮膚には深く沈んだものが映る。日本人が無闇に角砂糖のやうな洋館を建てケバケバしい洋服を着るのは、考へて見ると自分の姿を一生懸命醜悪にさせてゐるやうなものだ。而も日本の西洋かぶれは主として亞米利加かぶれであるから、尚更たまらない。ちんちくりんな足の曲つたわれわれがヤンキー好みの所謂スマートな服を着けると、全く猿のやうになる。

猿のやうになつても仕方がない、薄暗い家に住み不便な着物を着てゐれば、生存競爭に負けてしまふ。今は過渡期であるからだが、盛んにスポーツを奬勵して西洋人に負けないやうに體格を練れば、次ぎの次ぎのゼネレーションぐらゐにはやがて猿でなくなるだらうと云ふ者がある。しかし昔から自分の長所を捨ててしまつて他人の模倣を事とした者に成功した例はない。模倣者は永久に獨創者の跡を追ふばかりである。西洋の眞似をしてゐる限り、猿が漸く人間になつても、結局白人を凌ぐことは出來まい。

○

私が横濱にゐた時分、子供のときから亞米利加へ行つて亞米利加流の教育を受け、ハーヴアード大學の文科を卒業して歸つて來た紳士があつた。この人は日本語がよくしやべれない代りに、英語は非常によく出來て、「横濱にゐる外人共は無學で困る。彼奴等は自國の文學も歴史も知らない。私は彼奴等に私の英語を褒められると、却て癪に觸はる。私の方がお前たちよりお前のことをよつぽどよく知つてゐるんだと、せせら笑つてやりたくなる」と云つてゐた。ところで此の紳士が或る時私の家で一人の青年と落ち合つて文學談を始めた。何しろ西洋の文科大學を出た人であり、當人も自負してゐるのであるから、青年の方は最初からその紳士を尊敬し、いろいろ教へを乞ふやうな態度で

話し出して見ると、豈圖らんや青年の方がずつと精しく歐米の文學に通じてゐる。青年はその紳士の知らないやうな片假名の名前を盛んに並べ立てて煙に卷いた。紳士は青年が歸つたあとで、「あの人は何と云ふのですか、非常な物識りですねえ」と云つて驚いてゐた。しかしながら此の青年は當時映畫監督の助手か何かをしてゐた男で、新進作家でも文學志望者でもなかつたのである。紳士は歸朝したばかりで、事情を知らなかつたから驚いたのだが、今の日本の青年は特に文學好きでなくつても、大概此の程度の物識りではある。彼等は東洋のクラシツクは知らないけれども、實によくいろいろの飜譯を讀む。恐らく世界中で、今の日本の青年くらゐ各國の文學藝術をかぢつてゐる者はないであらう。多くの亞米利加人はユージン・オネールを世界一の戯曲家だと思つてゐても、アルツウル・シユニツツレルの名は知らない。同樣に英吉利人は餘所の國のことは知らないでバーナード・シヨウを偉いと信じ、佛蘭西人はアナトール・フランスあたりを推すであらう。然るに日本の青年は自國のものは第二として、世界各國の文學を漁る。さうしてそれが新しいとなつてゐる。ところが彼等の此の該博な世界的智識は、皆恐るべき惡文の飜譯に依つて得られるのである。私も少しばかり佛蘭西語を稽古した時分に、原文のモウパツサンを讀み、今まで飜譯で讀んでゐたモウパツサンとは大變な相違なのに驚かされたことがあつたが、今の青年の智識と云ふのは、皆飜譯のモウパツサンなのである。無論飜譯でも知らないよりは知る方がいい。私の學生時代には大陸文學の飜譯は多く英語からの重譯であつたが、此の頃はさうでもなささうだし、大分上手になつても來たから、一概に惡くは云へないけれども、それでも歐羅巴と日本とは言語の性質が全く違つてゐるのだから、斯くの如くにして西洋の文脈が這入つて來ると、日本固有の含蓄のある文章の味は、だんだん廢れて行くと思ふ。一例を擧げると、日本の文章ではセンテンスの中に主格のあることを必要としない。然るに西洋ではお天氣の良し惡しを云ふのにも「It」と云ふ主格を入れる。此の云ひ廻しが日本にも流行つて來て、「それは麗かな日であつた」とか、「彼はどうした」「私はどうした」と一々斷はる。その爲めに現在の日本文は非常に煩はしい醜いものになつた。今の青年に源氏物語が讀めないのは、主格を省いてあることが最大の原因で、而もそこにあの文章の美しさがある。

けれども今の青年も、矢張り青年の間だけで、やがて歲を取つて來れば東洋趣味が戀ひしくなるのではなからうか。いつまでも飜譯文學と亞米利加製の活動寫眞で滿足してゐられるだらうか。いや、その心配には及ばない、彼等が歲を取る時分には東洋趣味なぞ完全に滅びてしまつてゐる。と、さう云へばそんなものかも知れぬが、さうなればつまりわれわれは愈々猿の境涯に甘んじることになるのである。

○

日本人は他國の長を取つて自國の短を補ふことが上手だと云はれ

る。けれど昔は支那や印度が相手だつたが、今度の相手は大分勝手が違ふのである。消極的な東洋の文化が積極的な西洋の文化の侵略を受ければ、しまひには十が十まで征服されて、固有のものは何一つ殘らなくなりはしないか。假りに私一人が頑張つて、山間僻地へ逃げ隱れて東洋主義にかぢりついてゐても、支那のやうな大國ならば知らぬこと、日本のやうな狹い所では、物質文明はどんな山の奧へでもどしどし入り込んで、またたくうちに鐵道が敷かれ工場が建つ。國を擧げて悉く同化されてしまふまでは、その勢ひは滔々として止まらない。それに西洋人は個人的交際に於ても、自信が強く、づうづうしくつてわれわれは常に壓迫を感じる。相手が自分より無學な下等な奴だと思つても、議論をすれば是非曲直が孰方にあらうと、愼み深い日本人は負かされてしまふ。「世界ぢゆうで一番人間らしい顏をしてゐるのは支那人である、西洋人の顏は獸のやうだ」と云つたのは、たしか長谷川如是閑氏であつた。成る程さうに違ひないけれども、面と向つてはあの大きな聲量にだけでも、肉體的に壓倒される。彼等は無言のうちに諒解し合ふと云ふやうな腹藝が分つてくれないのだから仕方がない。

此の間、女學校へ行つてゐる近所のお孃さんに會つて、「あなたはテニスをなさいますか」と聞いて見たら、「いいえ、致しません、テニスをすると餘りせいが伸び過ぎるからいけないと云つて、兩親が許してくれません」と、そのお孃さんは云つた。それからこんな話もある。私の友人Sの子供は大體に於て學校の成績も非常に良く、殊に數學は優等なのだが、ただ英語だけが出來が惡い。それを子供も兩親も苦にして、英國婦人の家庭教師を雇つて勉強してゐるのだが、それでも成績が思はしくないので悲觀してゐる。私はSにさう云つてやつた、「何もそんなに悲觀することはないではないか。君の子供は數學が優等なのだから頭はいいに極まつてゐる。數學的才能と語學的才能と、世の中へ出てから孰方が餘計實際に役立ち、應用の範圍が廣いかと云へば、云ふまでもなく數學の方だ。英語なんか出來なければ出來ないでもいい。殊に會話の稽古なんか何になるのだ。君の子供は日常外國人と交際する機會はないのだから、習つたつて忘れてしまふのは當り前だし、その必要もない譯なのだ。外國へでも行くやうになれば稽古しないでも自然と覺える。外人の家庭教師なんか止してしまひ給へ」と。私は今の爲政者や教育家が、萬般の制度組織を悉く西洋に則り、中學校では國漢文より英語の時間をずつと多くし、女學校では男と同樣の運動競技を奬勵したりしながら、一方に於て我が國固有の淳風美俗を保存しようと努めるのは、抑も無理な注文だと思ふ。飛行機やラヂオや超弩級艦の造り方だけを敎はつて、過激思想の感染を防がうとするのは虫が好すぎる。彼等自ら祝祭日にはフロックコートにシルクハットを被り、役所へ行けば椅子に腰かけてデスクに凭りながら、淳風美俗の保存もヘチマもあつたものでない。思ふに彼等自身にも何處までを保存し何處までを破壞したらいいか、確たる方針があるのではなく、その日その日の出來心でやつてゐるのであらう。いや、彼等ば

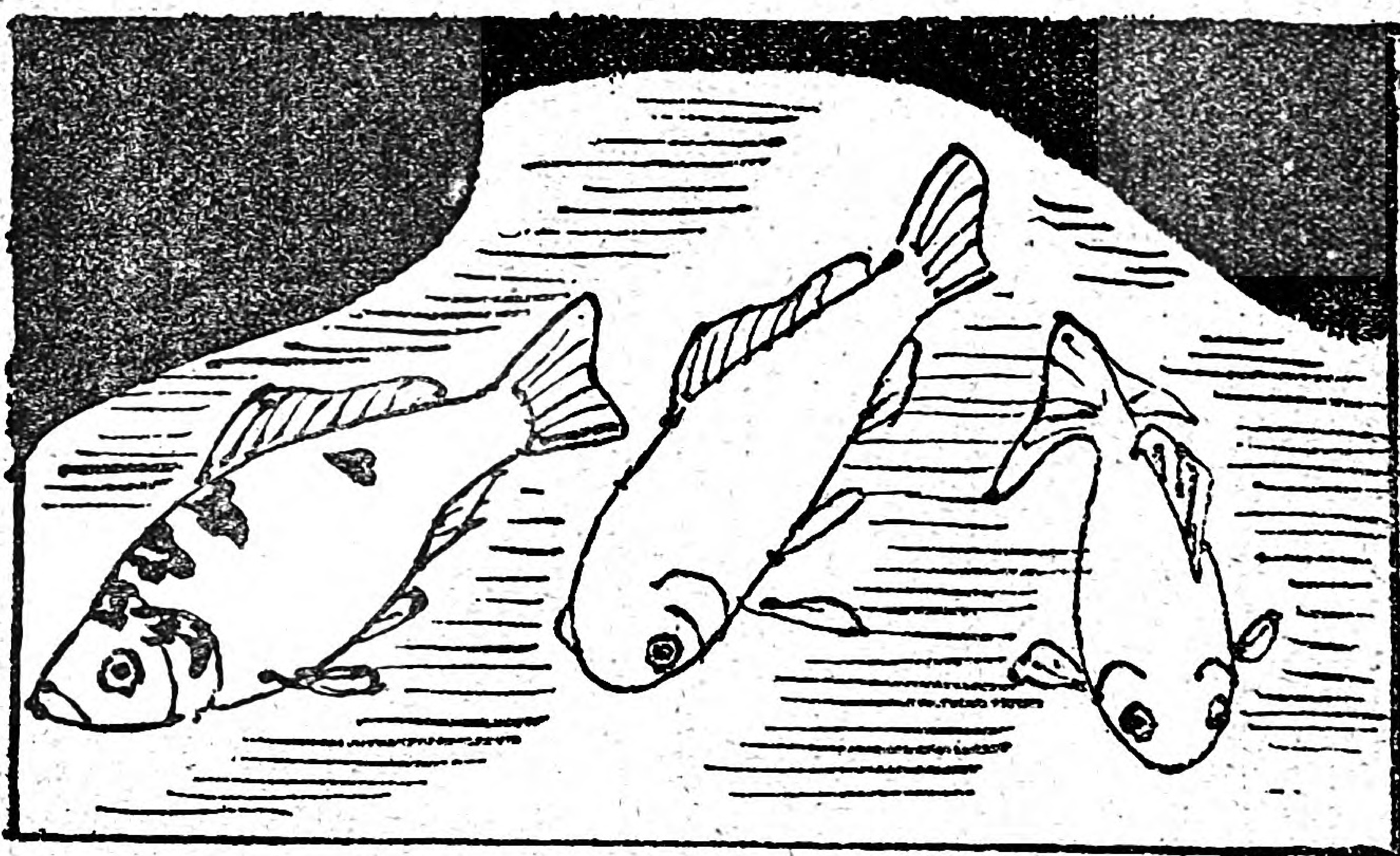
りでなく、大多數の日本人が皆さうなのだ、皆迷つてゐるのだ。(私も勿論その一人だが。)迷ひながらウカウカと時の勢ひに押し流されてゐるのだ。一方に於て漢字は不便だ、制限しなければいけないと云ひ、ローマ字使用を提議しながら、未だに漢字の美しさを忘れかねてゐる連中ばかりだ。

○

私は時々思ふのである、立憲政治とか代議士政體とか云ふやうなものも、果して日本の國民性に合致した政體であるかどうかと。立憲政治は討論政治であり、雄辯政治であり、煽動政治である。然るに前にも云つたやうに由來東洋人は偉い人程おしやべりをしない。古來大政治家で雄辯家だつたと云ふ人を聞いたことがない。日本で辯舌の巧みな奴は大概オッチョコチョイである。明治になつてからも大隈重信を始めとして尾崎行雄島田三郎の輩は政治家としては失敗してゐる。新聞は衆議院の泥試合を攻撃し、政黨首領株の待合政治を非難するけれども、代議士になるやうな連中はとても鼻持ちならないやうな下品な人物が多いのだから、泥試合になるのは當然の歸結である。これに反して待合政治は日本人の性に合つてゐるのである。靜かな四疊半式の座敷で、五六人の心を許した人達がじつくりと膝を突き合はせてこそ、始めて眞面目な態度にもなれれば良い考へも浮かんで來る。さればと云つて昔の君主獨裁や封建制度に復れと云ふのではないけれども、何か西洋の眞似をしないで、もつとわれわれの國民性に順應した新しい政體はなかつたものだらうか。若し西洋の文化が這入つて來なかつたなら、或は東洋は東洋流の別個の政體が發達しなかつたものだらうか。

假りにわれわれは科學の恩惠を蒙らず、物質文明の有難さを知らなかつたとする。さう云ふ世の中を考へて見るのに、必ずしもそれほど不幸ではない。汽車も電車もない代りには地球上の距離は今ほど短縮されてゐなかつた。衛生設備や醫術が幼稚であつた代りには人口過剩に苦しみもしなかつた。大量生産の經濟組織や機械工業がなかつたお蔭にはわれわれの衣服調度は皆丹精を籠められたる手藝品であつた。かう云ふ世界も亦一個の樂園ではないか。人類の幸福に變りがない以上、それは必ずしも文明の退歩だとも云はれまい。われわれは西洋に侵略され、國が滅ぼされる恐れさへなければ、實際それでも差支へないのだ。思へば西洋人は餘計なおせつかいをしてくれたものだ。畢竟われわれは滅ぼされても構はない氣で東洋主義に執着するか、でなければ全く西洋主義に同化するか、二つの岐路に立たされてゐるのだ。此の意味に於て東洋人は呪はれたる運命を荷つてゐると云はなければならない。

以上私の云つたことは矛盾だらけだと思ふけれども、私は實に此の矛盾に苦しんでゐるのである。(つづく)



卵塔場の天女

泉　鏡　花

一

時雨に眞青なのは蒼鯖魚の鰭である。形は小さいが三十枚ばかりづゝ幾山にも並べたあの暗灰色の菱形の魚を三角形に積んで、下積になつたのは、軒下の石に藍を流して、上の方は濱の砂をざら〳〵と其まゝだから、海の底のピラミッドを影で覗く鮮さがある。此の深秘らしい謎の魚を、事ともしない、魚屋は偉い。

「そら、持つてけ、持つてけ。賭博場のまじなゐだ。みを食へば喫か〳〵だ。」

と雨垂に笠も被らないで、一山づゝ十錢の附木札にして、喚いて居る。

矢張り綺麗なのは小鯛である。數は少いが、これも一山づゝにして、何の店にも夥多しい。二十錢と云ふのを、はじめは一尾の値だらうと思ふと、十ウ或は十五だから、なりは小形でもお話に成る。同じ勢をつけても、鯛の方は何うやら蒼鯖魚より賣手が上品に見えるのも可笑い。何の店のも聲を揃へて、

「活きとるぞ、活きとるぞウ。」

此の魚市場に近い、本願寺別院―末寺と稱へる大道場へ、山から、里から、泊りがけに參詣する爺婆が、また土産にも買つて歸るらしい。

「鯛だぞ、鯛だぞ、活きとるぞ。魚は鹽とは限らんわい。醬汕でほつかりと煮て喰はつせえ、頰べたが落こちる。――一ウ一ウ、二ア二アそら二十よ。」

何と生魚を、いきなり古新聞に引包んだのを、爺樣は汚れた風呂敷に捲いて、茣蓙の上へ、首に掛けて、てくり〳〵と行く。

甘鯛、いとより鯛、魴鮄の濡れて艶々したのに、青い魚が入交つて、鱒も飴色が黄に目立つ。

大釜に湯氣を濛々と、狹い巷に漲らせて、逞しい漢が向鉢巻で踏はだかり、青竹の割箸の逞しい奴を使つて、押立ちながら、二尺に餘る大蟹の眞赤に茹る處をほか〳〵と引上げ〳〵、疊一疊ほどの莚の臺へ見る間に堆く積む光景は、油地獄で、むかしキリシタンをゆでころばしたやうには見えないで、黑奴が珊瑚畑に花を培ふ趣がある。――こゝは雪國だ、あれへ、ちら〳〵と雪が掛つたら、眞珠が降るやうに見えるだらう。

「七分ぢやー八分ぢやー一貫ぢやーそら、お篝ぢや、お祭ぢや。家も藏も持つてけ。背負つてけ。」

などと喚く。赫耀たる大蟹を篝火は分つたが、七分八分は直段ではない、肉の多少で、一貫はすなはち十分の意味ださうである。

菅笠脚絆で、旅に積んで、女の賣るのは、小形のしほらしい蟹で、市の居つきが荷を張つたのではない。……濱から取立てを茹上げて持出すのださうで、女護島の針刺と云つた形。

「かうばく蟹いらんかねえ、かうばく蟹買つとくなあ。」

恁う言ふのを、爪は白し紅白か。聞けば、其の脚の細さ、みどころと云つてはいくらもない、腹に眞紫の粒々の子が滿ちて、甲を剝がすと、朱色の瑪瑙の如き子がある。それが美味なのだと云ふ。（子をば食ふ蟹）か、と考へた、……女が賣るだけに此は不躾だつた。香箱蟹ださうである。ことりと甲で蓋をして如何にも似て居る。名の優しい香箱を賣る姉さんだが、惡く値切らうものなら泡の如く毒を噴く。

びしや〳〵、茣蓙を着て並んで、砂つきの小鰈のぴかりと光るのを賣る姉えも同じで、

「おほゝだ、そんな値なら私が食ふ。」

と、橫咥えにペロリと舐める。

「活きものだ、活きものだ。」

何處も魚市は氣が强い。――私は見て居たが――妙なもので、こゝで鯨を賣ればと云つても、山車に戴せて桙で曳きもしまいし、あの、おいらんと渾名のある海豚を賣ればと云つて、身を切つて客に抱かせもしないであらうが、飯蛸なぞも然うである……榮螺、黄螺、生の馬刀貝などゝ云ふと、張出した軒並を引込んで、巽に薄暗い軒下の穴から恁う覗く。客も覗く。……

つま屋と名づくるのが、また不思議に貝蛸の小店に並んで居て、防風芹、生海苔、松露、菊の花瓣……此の雨に檜色の合羽占地茸、一本占地。雨は次第に、大分强い、山から小僧の千本占地茸、によきりと

大松茸は面白い。

私が傘を斜とすれ〴〵に翳して佇んだ處は――恁う言出すと、此の眞劍な話に、背後へ松茸を背負つてゐるやうで、巫山戲たらしく見えるから、念のために申して置くが、賣ものの其等は、市の中を――右へ左へ、肩擦れ、足の踏交る狹い中を縫つて歩行いた間に見たので、丁ど立つたのは乾物屋の軒下で四辻を一寸入つた處だつた。辻には――ふかし芋も賣るから、其の湯氣と、烏賊を丸燒に醬油の芬々とした香を立てるのと、二條の煙が濃淡あひ縺れて雨に靡く中を拔けて來た。

「御免なさいよ。――連が買ものをしてるのを待つてるんですから。」

私と袖を合はせて立つた橘八郎が、つひ其の番傘の下に成る……蜆の剝身の茹つたのを、笊に盛つて踞つて居る親仁に言つた。――どうも狹いので、傘の雫がほた〴〵と剝身に落ちて、親仁が苦い顏をして睨み上げたからである。

八郎は此の土地うまれで、十四五年久振りで、勤めのために歸鄕する――私の方は京都へ行く用があつた。其處で自然誘はれて北國の都を見物のため東京から信越線を掛けて大廻りをしたのであつた。

當國へは昨夜ついた。

八郎の勤めと云ふのも、其の身の上も、私が說明をするより宿帳を見れば簡單に直ぐ分る。旅店で……どちらもはじめてだが、とに角紹導だから……女中が宿帳を持參すると、八郎は其の職業の處へ――

「能職。」と認めた。渠は能役者である。

戸籍の屆出は、音曲教師だと云ふから、其の通りなり、何とか記しやうがありさうな處を、ぶつきらばうに、「能職」――これに對して私も一工夫したいやうにも思つたが、年の割に頭も禿て居るし、齋出に――學校教授、植村と名刺で澄ました。

霜月、もみぢの好季節に、年一回の催能、當流第一人のお役者が本舞臺からの乘込みである。こゝに聊かなりとも、其の出迎への模樣、對手方と挨拶の一服はあるべきだけれど、實は記すべき事がない――仔細は別にあるとして、私の連立つた橘八郎は、能樂家、音曲教師、役者などゝ云ふよりも、實に「能職。」の方が相應しい。

紋着、袴羽織、儀式一通りは旅店のトランクに心得たらうが、先生、細い藍辨慶の着ものに、紺の無地博多を腰さがり、まさか三尺ではないが、縞唐棧の羽織を着て、色の淺黑い空脛を端折つて――途中から降られたのだから仕方がない――好みではないが、薩摩下駄をびしや〴〵と引摺つて、番傘の雫を、剝身屋の親仁にあやまつた處は、まつたく「家。」や「師。」ではない「職。」であらう。

東京では細君と二人ぐらしで、――（私は謠や能で知己なのはでない。）どうやら極小人數の活計には困らないから、旅行をするのに一箱外套を心得て出ない事はない

あの、ぼつと霧雨に包まれた山を背後に、向つて、此の辻へ入る時だ。……

「魚市へ入るのに、外套で、ぞろりは變だ。」

と往來で傘をはづすと——（いま買ものをするのを待つと云つた）——此の男の從妹だと云ふ、雪國の雪で育つた、色の拔けるほど白い、すつきりとした世話女房、町で老舗の紅屋の內儀……お悅と云ふ御新姐が、

「段々降つて來るのに——勝手になさい。」

留めるのかと思ふと、脫がして、雜と折つて、黑地の縞お召の袖に引掛けて取つた。

「先生——」

次手だから言ふが、學校の教師だから、私を先生——と云ふ、私も時々、先生と云ふ。同じ事で……其の紅屋のを八郎が、「姉さん、」と云ふと、「兄さん。」と云ふ。「お悅さん。」と云ふと「八さん。」と云ふ。從つて、年も同じだと聞く。

「先生は、土地のお客人だ。着て居らつしやい。同じに脫ぐなんて串戲です、いや串戲ぢやない。」

どうも、鰯身屋の荷をかばふと、其の唐棧の袖が雨垂に濡れる。私は外套で入交つて、傘をたゝんだ。

二

時に、辻を向ふに、泥脚と臨の、びしよ〳〵雨の細流に杭の亂るゝが如き中へ、褄も上げない裾をきれいに、しつとりした友染を東京下りの吾妻下駄の素足に捌いたのが、ちら〳〵と交と見ると、人を別けた傘を斜めに、撫肩で、櫛卷の凜とした細面の見えたのは、紅屋の內儀で。年は八郎とおなじだが、五つ六つ若く見える處へ、女の一生に、四五度、うつくしい盛があると云ふ、あの透通るやうな顏に、左の眉から額にかけて、影のやうだが疵のあとが幽にある。

此の婦人を、私は八さんに囁いて、密に「三傘夫人。」と稱へた。別儀ではない。——今朝、旅籠屋で、朝酒を一銚子で、些と勢のついた處へ、內儀が速に訪ねて來て、土地子の立役者はありながら、遠來の客をもてなしの其のお悅の案內で、町の最も高臺だと云ふ公園へ、錦葉を觀に出掛けた。北國の習であらう、大池の橋を渡つて、眞紅に色を染めた櫻の葉の中に、細瀧を見て通る頃から、ぽつりと雨が掛つた。すぐに晴れようと、ロハ臺に腰を掛けた、が、其の上に蔽ひ掛つた紅楓の大木の美しさ。色は雨を染めて、影が袖に透る……霽れるどころか、次第に冷い雨脚から、三人を包んで、雫も落さない。其處で小學校の生徒たちの二列を造つて、辨當を持扱ひながら坂を下りに急るのを視たが、今日は、思掛けない雨だつたものと見える。其他、遊びの人たちも、慌しくはないが散り散りの中へ交つて……御休所と油障子に大きく書いたのを、背中へ背負つて、緋めれんすの蹴出しで島田髷の娘が、すた〳〵と、向ふの吹上げの池を巡る處を、お悅が小走りに衝と追つて、四阿がゝりの茶屋の軒下に立つと、しばらくして

蛇の目を一本。「もふけ損つて不機嫌な處だから、少し手間が取れました。」此の外套家だから、二本目は、公園の坂の出口を行越した町で、煙草を買つて借りたなぞはもの丶數でもない。三本目に至つて、私たちを驚かした。それは十町ばかりも脇町を歩行いて出た大川端の寂しいしもた家だつたが、「私、私は、私は(何とか)町の、竹谷の姪の娘が嫁に來たうちの、縁者の甥に當るもの丶母親です。」談ずるのが、戸外に待つて居る私たちに強く響いて、ひそかに冷汗に成つて居た處—「むふん。」と笑ひながら出て來て、ばり／＼と油の乾いた蛇の目傘を翳いた。トンと轆轤を切つて、外套兩名、相合傘で居た私に寄越して「一寸骨が折れました、遠い引掛りなんですがね……嬰で中風症のお婆さんが一人留主をして居るんだもの、驚きましたわ。」「驚いた。」と八さんが言ふから、私も「驚きましたなあ。」「だつてね、漸つと談判が調つた處で、お婆さん、腰が立たないんでしよう。私が納屋へ入つて捜まはして持つて來たんですのさ。」「肩がきがつくぜ、まるで畫鳥だ。」と八さんが言ふと、つんと横を向いたが、忽ち白い手で袖下を揃つて、「ウシ、ウシ、ウシウシ。」もの丶たとへにさへ云ふ……枯柳の川端を、のそ／＼と來た野良犬を、何と、佐川田喜六の蛙以上に可恐しがる、能職三十九歳の男に「ウシ、ウシ」と嗾掛けると、「不可い姉さん。」と云ふ下から、田舎の犬は正直で、ウ丶と吠掛つたから、八さんは、ワッと云つて遁げ出すと、追掛けようとする野良を傘でばッさり留めて、橋袂の榎に打つかりさうな八さんを「馬鹿だわねえ。……大きな態をして。……先生、おつきあひ遊ばすのに、貴方、さぞお骨が折れましよう。」其の凛とした眉が、雨に霞むやうに優しかつた……

いま其の三傘夫人の姿が見えると、すぐ後へ引添つて、袂をすれずれに大鯰が一匹、背筋を蜿らして、腹にきら／＼と黄金の波を打つて泳ぐのが見えた。見事な鯰よ、ぴち／＼と躍つて、宙に雨脚を刎ねるやうである。それは腰蓑で笠を被つた、蒲鉾引きの大年増が、旅に上げたのを提げて、追縋つた——實は、今しがた……其處に一群、鰻、鯰、鰌、穴子などの店のごちや／＼した中に、鯰を活かした盤臺の前へ立停まつて、三傘夫人が、其の大きいのを、と指さすと、ばちやんと刎上るのを、大年増が掌に掬つた時は、尾が二の腕に餘つて、私は鯉だとばかり思つた。

「こんなのは珍らしうござんすぞね、奥さん、乳の出る事は鯉のやうなものではなうてね、これ第一や。今夜から、流れて出るぞね。」

「質屋が驅落をしやしまいし。」

大潟で漁る名物だ、と八郎が私に云つたが。

「幾干なの。」

「さあ、掛値は言はんぞね。これで……さあ——」

此の掛値が又名物だと——八郎は話しながら、鮒は重なつて泳いで居ても、人ごみに傘の雨が濺ぐから、値の押合の間を、少時乾物屋

の軒へ引込んだのであつたが、よくは分らないけれども、俳人凡兆の句の——呼返す鮒賣見えぬ霰かな——の風情がある。

が、これは時雨で……買ふ人の姿も水際立つて、而して、反對に——一旦、直がかけ違つて、內儀が足を拔いたあとを、鮒賣の方が呼返して追つて來たらしい。

お悦は目ばやく私たちを見て、莞爾して、輕く手で招いた。

値が出來たのである。

「お邪魔をしました。」

八郎が剝身屋の親仁に輕く會釋をしたが、其の語氣は、故鄉人に對する親みぶりか、却つて他人がましい行儀だてだか分らないうちに、庇を離れて、辻で人ごみを出る內儀と一所に成つた。手に提げた籠の笹の葉の中から金光が閃めいた。

「姉さん、黃螺を買つて下さい、黃螺を。」と八郎が云つた。

「何にするの？」

「まさか獨樂にしやしない、食べるんだね。やあ久いもんだなあ。」

旅店を出がけに西洋剃刀を當てた頰を掌で中てた。

「東京には此奴が少いかして、めつたにお目に掛らないんです。いつか繪本を見るとね、灯を點した榮螺だの、兜を着た鯛だの、少し猥せつな蛸だのが居る中に、黃螺の女房と云つてね、くる〱と卷いた裾を貝から長々と曳いて、靑い衣服で脫出した圓髷が亂れかゝつて、其の癖、色白で、ふつくりとした中年增が描いてあつたが、然も旨さうに見えたのさ。」

「可厭な兄さん。」

「いや、お客樣に御馳走するのだよ。」

「御馳走ですな。」

「一寸……其のだらしのない年增の別嬪を十ウばかりお出しなさい。」

賣手は希有な顏をした。が、言ひ爭ひ無用なりと商賣に勉强で、すぐ古新聞に、ごと〱と包んで出した。……此の中に、だらしのない別嬪が居るのださうである。

姿が好いからと言つて、糸より鯛。——東京の(若衆)に當る、土地では(小櫻)……と云ふらしいが淺黃櫻で、萌黃に薄藍を流した鰤の若旦那。恁う面白づくに當にかゝると、娘の目に友染切で、見るものが欲しく成る。

私も自分で値をつけて、大籠に湯氣を搦めて提げた。

占地茸を一籠、吸口の柚まで調へて……此の髑髏を窄めた狀の市の中を出ると、忽ち仰向けに傘を投げたやうに四辻が擴がつて、往來の人々は骨の數ほど八方へ雨とゝもに流れ出す。目貫の町の電車の停留場がある。

——此處は八郎と連立つて、昨夜一度來て目覺えがあつた、それは紅屋を訪ねたので。——訪ねて扨て歸りには、お悦が丁ど此の辻まで送つて來て、勝手働きのまゝだつたから、玄關も廊下も晴がましい旅籠まで送り返すのを猶豫つて、唯一夜——今日また直ぐ逢ふ——北さ

べなごり惜さうに、元氣な婦に似ず、半纏の袖を懷手で刎ねながら姿に寂しく見送つたのであつたが。――察しられる。……處で、其の昨夜の事について、こゝで言ひたい事が少しある。

三

例の「能職」を稍暫に名のると直ぐだつた。

「先生……」

私に對して、八郎は其の親しい呼び方をして、

「もう晩の九時です。すぐに一風呂浴びて、お膳で一銚子と云ふ、旅では肝心な處ですがね、少々御無理を願ひたい事があるんです。――もうお互に年を取つて居るんですから、聊かたりとも御心配はありませんが、こゝに私を待つて居てくれる婦があるんです。――時々――貴方だからお話をした事がありますね、從姉なんですがね。……」

隔てない中だから、豫て、美人の其の婦のために、魂に火を點じて、幽に生命を消さなかつたと云ふのを聞いた。眞の性質は霜夜の幽靈のやうに沈んで寂しいのかも知れないのに、行爲は極めて蓮葉で、眞夏の如きは「おゝ暑い、」と云ふと我が家に限らぬ、他家でもぐる〱帶を解く。「暑い、暑い。」と腰紐を取る。「暑いんだもの。」とするりと脫ぐ。其の皓さは、雪よりも引緊つて、玉のやうであつた。お俠で、凛として居るから、聊かも猥りがましい處がない。但し其の白身で、八郎の古家で、薄暗い二階から、銀杏返し、肩で、背筋で、小身で、白晝の町の人通りを覗きながら、心太や寒天を呼んだのはまだしも、其の素裸で、屋根の物干へ立つて、遙に公園で打揚げる煙花火を視ながら、八が心ばかりの七夕の竹に短冊を結んだのには驚いた。其の頃年紀わづかに十七八で、然も既に二人の子の母であつたのだと言ふ。

私は、早く其の人を見たいと思つた。誰も、此の新月の寒さに裸體に成るものはない――見たいと云ふのに聊かも遠慮はあるまい。

「御存じの不性ものだから、時々のたよりをするでもなし、先方も同然です。今度こちらへ來たのだつて、前もつて知らせてはないんですから、構ひはしないやうなものゝ、血は遠くつても唯つた一人の身寄だし……家は多人數で、他のものは何う思はうとも、從姉だけは、故郷へ歸れば、屹と其の家で草鞋を脫ぐものと信じて居てくれるんです。

其處で、御前に一寸顏を見せて來たいんです、が、此のまゝ寛いで少しの間待つて居て下されば結構だし、御一所に願へれば尙ほ結構第一汽車で國境の峠を拔けた時、これからが故郷ですと云ふと、先生は何と言ひました。あの大瀉と海とが空に浮いて目一杯に田畑の展けた果に、人家十萬餘のあるのを視て、「これは驚いた……豫て山また山の中と聞いたから、崖にごつ〱と石を載せた屋根が累なつて居るのかと思つたら、割合に廣い……」と何うです。割合に廣いは情ない。私は國自慢をした覺えはなし、自慢どころか一體嫌ひなんだけれど、石屋根の家が崖にごつ〱は酷いや。其奴を話して從姉から先生を怨

ませたい。」

――思出しても可笑い。

「寧む處ですよ。」

其處で、黑い外套で、黑い中折帽で二人揃つて、夜の町へ出たと成ると、忍びで乘込んだやうで、私には目新しい事も多いのであるが、旅さきの見聞を記すのが此の編の目當ではない。

件の傘に開けた辻で、――昨夕、其の時電車を下りて、賑かな、町筋を歩行く。規模は小さくつても、電燈も店飾も、さすがに地方での都會であつたが、一寸曲角が眞暗で、灯一つ置かない夜店に、大な炭團のやうな栗の實と、火が少しおこり掛けたと云ふ柿を積んだ、背の低い影の如き嫗さんが、丁ど通りかゝつた時、生欠伸を一つして、「おゝ寒、寒、寒やの。……ありがたうござります。なまいだなまいだ。」と呟くのを聞いた。が、少なからず北國の十夜の寂と、親鸞の故跡の近さを思はせた。

「あれが、本願寺……」

と雲の低い、大な棟を指さしながら、

「御苦勞樣――此の小路を一寸曲るです。」

と言ふかと思ふと八郎が、

「おや……」

と立留まつた、

「此處に、あの菓子屋、此方が下駄屋と、あれが瀬戸物屋、小間物屋、合羽屋と、間違ひッこはないんだがな、はてな、違つたかな。」

と少しばかり狼狽へる。……

「違ひはしません、――紅屋は彼處ですよ。」

と私が笑つた。

「ですがね。」

「大丈夫……間違ひはありません。紅屋です。」

「先生は、紅屋の鑑定家なのかなあ。まるで違つてゐる。これは細露地を一つ取違へた……」

「はゝ、大丈夫、入らつしやい。――彼處に紅屋の息子さんが坐つて居るから確なものです。」

讀者も思掛けなかつたらうと思ふ……はじめての私が、八郎の故郷の然も親類の家を認めたのは――凡そ紅屋と言ふものを、嘗て京大阪の家造で心得て居たゝめではない。其の息子と言ふのが、一度上京して八郎の家に居た處へ、私が一寸行合はせて顏を知つて居たからである。

八郎は肩を揺つた

「あゝ、串戲ぢやあない――店ざらしの齷助の置物と云ふ處が、硝子箱の菊慈童と早がはりをして居るんだ。――これは驚いた。半部の蔀戸が總硝子に成つて、土間に黄菊と白菊か。……大輪なのが獅子咲、くるひ咲と牡丹のやうに鉢植で。成程、あの菊の中から、本家、紅屋の新看板が見えて居ます、串戲ぢやない。

第一、此の角の黒塗赤塗の合羽屋が、雑貨店にかはつて、京焼の雛賣とは、何事です。さあ二貫、二貫、一貫五百は何事です。」

と其處に人立の前では、極りの悪いほどの高聲で、

「さあ、おいでなさい、何にしろ驚いた。」

「……唯今、お迎ひに出ます處で。……何うもね、小路の入口に、妙なお上りさんがお二方と思ひましたよ。」

と前垂がけの其の息子が莞爾々々する。店の人たちも三人一齊に禮をしたが、十鉢ばかり、其の見事な菊を並べた、殆ど菊の中に彳んで、ほたりと笑ひながら同じく一禮した、十徳を着さうな、隠居頭の柔和な老人が見えた。これが主人である。内儀は家つきの一人娘で、其の十四の時、年の三十ばかり違ふのに添つた、婿養子で、當時は店の御支配人だつたさうである。

「變つた、變つた。」

と八郎は見廻して、

「可恐しくハイカラに成つたなあ、此處は何處なんだらう。」

「小父さん、正に御親類の紅屋です、はゝは。」

「いゝえさ、此の菊のある處だよ、土間が廣く成つて際張分らないね見當が。」

「菊のありますね、其の下は臺所の井戸ですよ。吃驚して、ははは。大丈夫、危險はありません。父が手造りでしてね、屋根で育てたんですが、少々得意でしてね、其の枝の撓つた、糸咲の大輪なんぞは、大分御自慢でしてね、人様に見せたいんだが外に置どころが外にありませんから。」

老人は又ほたりと微笑んだ。息子に、今年の春、嫁が出來て、すつぱりと店を譲つたので、隠居仕事の氣樂さに、永年の望みだつたのを今年はじめて苗から育てたと言ふのである。

「お樂みですな。」

「何の……あんた。」

「姉さんは？」

八郎は息子を見返つた。

「……えゝ、臺所に――あ、一寸。」

「入らつしいまし。」

すつと、其處へ、友染模様が浮出たと見ると、店口の敷居へ、結綿島田が突伏した。

「やあ、これは、これは何うも、……何分どうぞ、唯今、はじめまして、おめでたう。お正月のやうだ。」

と八郎は一人で照れて、

「いづれ更めて御挨拶を――何は、……姉さんは、お母さんは、……お悦さんは？」

とやゝ忙込んだやうに云つた。私は、はじめから其の心を察し得た。留守ではないか、私も一寸さみしかつた。而して、店の隅なる釣棚の高い處に、出額で下眼みをしながら、きよとりと圓い目をして、くす

りと笑ふ……大な古い、張子の福助を見た。色は禿げたが、活きて居るやうで。――(先には店頭にあつたのだと後で聞いた)――息子は好男子なのに、……八郎の言つた福助の意味も分つたが、何處に居ても眞夜中には、ふッと拔けて、屋の棟へちよんと乘つて、こゝの一家を守りでもしさうで、且つ何となく、不氣味だつた。

其時である。

「此方、此方、ほゝゝ。」

と派手なこゑが、嫁さんの花簪の上を飛んで來た。

すぐに分つた、店口を入る、茶の室と正面の階子壇の下に、炭火の赫と起つた鑪十能を片手に、立つてゐたのが即ち内儀で。……唯見ると艶々したその櫛卷、古天井の薄暗さにも一點の煤を留めぬ色白さ。若い事に裸身ではないが、不斷着で着膨れて居ながら、襟脚が長くすらりとして居た。

「勝手が違つたわね、……それでも此處が可懷いや。」

と八郎がすぐに長火鉢の前へ膝を支くと、

「其處は混雜するからさ――唯今御挨拶を――」

と私には言ひながら、八の脱いだ外套と帽子を置戶棚の傍へ押束ね状に、片手鑪に火鉢にかゝつた湯氣を噴く鐵瓶を提げて、すいと二階へ上つて行く。

間早な事に、二階に最う鑪の火鉢に、緞子の座布團が二枚直してあつた。

「はゝあ、お火鉢の方は、先祖代々だけれど、――此の布團は新規だな。床に和合神の掛ものと。」

「其の繪は――お手製の、たゞ奴と……」

と、眦の切れた目を一寸細うして莞爾しながら、敷居際で町家風の行儀正しく、私が面食つたほど慇懃な挨拶。

「おゝ、障子が新しく成つて、襖が替つた、疊も入かはつて――いや、天井の隙間まで紙が貼れました。彼處から、風が吹込んで、障子の破れから霰が飛込む、壁のけばが、枯尾花のやうに吹かれるのがお定りだつたがな、まるで他家へ行つたやうだ。」

「それでも矢張り、私の内さ、兄さん……」

と颯と寂しい影がさしたが、

「兄さんが大好きで、其方の物置の窓から、よく足をぶら下げて屋根を覗いた石菖鉢の緋目高ね……」

と、唇か、瞼か。――手柄にも襟にも微塵も其の色のない、ちらりと緋目高のやうな紅が、夜の霜に山茶花が一片溢れたやうに其の姿を掠めた。

「親代々、まだ續いて達者で居ます。餘りかはつたかはつたと云ふんなら、あれを一つ御馳走してあげましやうか。飯事の時、私の簪の珠を緋目高だと云つたお禮を兼ねてね。」

「串戲ぢやあない……」

其處で旅籠屋に獻立の出來てゐる事を言つて今夜の馳走を斷つた。

……では然うなさい。近々に兄さんの來なさるッて事が此地の新聞に二三度續けて出て居ましたからね、……五日ほど前に潟の鯔を取つて置いたの。お汁の熱いのをと思つてさ。いれものが小さかつたか、今朝は最う腹を見せたから、實は晩に皆で頂いて了つたの。……私は二人前、誰かの分とも。――嫁が笑ひましたよ。」

と輕く、乳のあたりを敲きながら、

「……明後日が舞臺ですつてね、……ちやあ打合せやなにかで、宿で大勢待つてるんでしやうね。」

「大丈夫……」

と、何故か八郎はぶつきら棒に、

「そんな事更になしだ。……宿の方は他人交せず……姉さん一所においでなさい。此の槇村先生と二人切です。勿論、幹事の方から宿も指して寄越したし、……これでも、こんな土地……違つた……」

と胡座を整然と直して、こゝで十萬軒が膝にごつ〳〵をぶち開けたが、「さうでござんすとも、東京から入らしつたんでは。」ために勢が挫けたさうで、又胡座で、

「これでも人寄せの看板になるんですから、出迎へやなんか、其の支度もあつたんだらうが、……其のくらゐなら、先生を誘つちやあ來ないんですよ。宿だつて知らせやしません。――生意氣を言ふやうだけれど、何のかのつて、煩いから。……明後日――時間前にさへ樂屋へ行けば可いんです。――若干金か、旅費を出して、東京から私を呼ぶつたつて……此の土地の人は、土地流の、土地能の、土地節の、土地謠の方が大した自慢でね、時々九段や、猿樂町……震災で燒けたけれど、本舞臺へ來て見物したつて、ふん、鴈鴨の不忍池に、何か帆を掛けてぢやい、此方は鯨の泳ぐ大潟の萬石船ぢやい――何のツイ言ふ口です。今度だつて。珍らしい處を見世ものゝ氣で呼んだんだからね。……唯遊びぢやあ旅客旅籠錢の餘裕はなし、久ぶりで姉さんの顏は見たし、いゝ幸に來たんだから、何うせ見世ものなら一人でも多く、珍らしがらせに、眞新しい處で、鏡の間から顏を出して、緋目高で泳いでれば可いんです。」

八郎は熱い茶を立續けに煽つて言つた。不思議に面に颯爽たる血が動いた。

「でもね、槇村さん、大諸侯の持もの御秘藏と云ふのが出るんですから、衣裳には立派なのがあります。――第一天人の面は私どもの方でも有名なのだし、玉の簪、笄、女飾、腰帶、摺箔縫箔、後で着けます長絹なんぞも、私が小兒のうち、一度博物館で陳列した事がありますがね、今でも目に着いて居ます。全く、三保の浦から松の枝ぐるみ霞に靉靆いて來たやうでしたよ。……すぐわきの築山の池に、鶴が居たつけ、なあ……姉さん……運動場で賣つて居た、ふかしたての饅頭が、うまさうで堪らなかつたが、買へなかつた。天人の前に、餓鬼が居りや世話はない。」

と云つて苦笑しつゝ、ほろりとした。

槇村八郎は、故郷の初の舞臺に於て、羽衣の一曲を勤めむとするのである。

話頭が轉じた。——

何の機掛もなかつたのに、お悦が、ふと……

「……おひささん……」

と恁う言ひ出したのが、私の耳を打つた。

「……お久さんから便りがあつたでしよう、兄さん。」

私たちが、もう立構をした時で

火鉢に中腰に浮かした膝が搖れて、八郎の顔が一寸暗く見えた。沈んだ聲で、

「……ありました、ありましたがね。」

「いゝえね、……此の春ごろでしたよ、ふいと店へ見えてね、兄さんの所番地はツて聞いたんですの。何でも十何年ぶりとかで、此土地へ歸つて來ましたつてね……永い間、北海道も、何とかツてづゝと奥の炭坑の方に居たんですつてさ。」

「僕は返事を出しません。」

とやゝ白けて言ふ。

「然うですか。」

「で、どんな樣子をして……いや、聞くまい、放蕩らしくつて、姉さんに恥かしい。」

「兄に何とも思ひはしません。」

「其下ツてどんな處です。村か知ら。」

「いゝえ、町ですよ、づつとはづれの方ですけれど、……ぢやあ逢ひませんか。」

「さあ、何うしやうかと思つて——槇村さん、聞かない振で居て下さいよ。」

「一寸、失禮しようかね。」

私は言つた。

「飛んでもない、いづれ先生には更めてお話しゝますがね——其處でだ、姉さん。」

「兄さん、構はないぢやありませんか、どつちだつて、逢つたつて……逢はなくツたつて……。」

「さあ、其のどつちだつてゝ實は弱つた。」

顔をうつむけに手をあてた。

「今度來るにも、づつと途中から氣に成つて居るんですよ。——新聞なんか見やうつて柄ぢやあないから、今度の事も知りやしますまい。湯屋、髮結所のうはさにだつて、櫻が咲いた歌舞伎の方と違つて、能ぢやあ松風の音ぐらゐなものですからね。それとも聞き知つて、いま此處へ訪ねて來たつて、居ないと言へば、それまでだし、……職業が職業だから、其處へ掛けては多人數で隔てが出來ます。樂屋口で斷るのも仔細ないけれど、然うかつて、實はね、逢ひたくないことはないんですよ。」

「ぢやお逢ひなさいな、何うしてさ。」

「處が眷屬大人數です。第一亭主がありましやう。亭主から、亭主の兄弟、其の甥だ、其の姪だ、また、其の兄だ、娘だ、兄の兄だ、弟の嫁だッて、うじやうじやして居る……此方が何ものだか職業も氏素性も分らなけりや、先方樣も同然なんだから。何しろ、人の女房で見りや、其の亭主に御承知を願はなけりや成らない……」

「それは、兄さん、仔細はないぢやありませんか。」

「さあ、處がね、義理にも、お目に掛らうなぞと來た日には——」

細君が何か言ふと、

「可厭、可厭、可厭なんだよ、そんな奴に」

とだゞを捏ねるやうな語調と態度で。

「博徒でも破戸漢でも、喧嘩に對手は撰ばないけれど、親類附合は大嫌ひだ。」

「あゝだもの。」

「聊か過激に成つたがね。……手紙の様子ぢやあ、總領の娘と云ふのが、此地で緣着いたさうだから、其の新婦か、又其の新郎なんのッてのが、惡く新聞でも讀んで居て、——「お風説は豫て」なぞと出て來られた日にや大變だ。」

「ぢやあ、兄さんの、好きになさい。」

が、些少も投出した様子はない。

「お久さんだけ、一人だけよ、一人だけなら逢つても可いんでしよう、何うて」

「さあ、然う、うまく行ぐか知らん。……内證で呼出したりなんかして、どんな三百代言が引掛まらうも知らないからね、此地は人氣が惡いんだから。」

「分りました。」

ふきこぼれる鐵瓶をトンと下ろして、

「私に任せてお置きなさい。」

翌朝——今朝は細君が八時に旅店へ訪ねて來た。疊んだ風呂敷を持つたまゝ、

「兄さん、お久さんは家へ來ます。時間は極めて置かないけれど……」

「早業だなあ—町はづれだと云ふのに最う行つて來たんですか、迅いこと、まるで女天狗だ。」

「一人だけ……。」

と口では言ひつゝ、八郎は自から其の深切に頭を下げた。

其の默つて頸づくのを視て、

「で、亭主は居なかつたかね。」

「居ましたとも、居たつて構やあしない。……逢ひたくないものは逢ひたくないんだから。」

「遣附けましたな、いや外交家だ。辣腕辣腕。」

と痩せた肩を突張りながら、
「他には、誰も。」
「その緣滑いた娘さんが歸つて居ますよ。トラホームで弱つてるんですつて。」
八郎は又颯と眉を曇らせた。尤も外へ出ると、最う、小川添の錦葉で晴れたが。
　やがて公園の時雨と成つたのであつた——

處で……紅き、靑き、又黃なる魚貝を手に手に、海豚が三頭、澁柿をぶら提げたやうな恰好で、傘の辻から紅屋の店へ入つたが、私は法然頭の老主人をはじめ店に居る人たちの外に、別に、「いや、昨夜は——」と其の店仕きりの暖簾を潜る時、隅の椽の、あの兩助に思はず聲を掛けやうとしたのには、あとで自分でも妙な氣がした。何故と云ふに、月をきよろりと出額の下から、扇子構で、會釋をしたやうに思つたからである。
「やあ、雪代さんか。」
　と八郎が聲を掛けた優婉な婦が居て、菊の奧を臺所口から入つたお悅の手から魚籠を受取つた。……品のいゝ、おとなしづくりの束髮でほつそりした胸に紅い背負上がちらりと見えて、そのほかは羽織も小袖も、昨夜の海に雪がすら〳〵と掛つたやうな姿であつた。——あとでも思つたが、其の繕はない無雜作な起居の婀娜さも然うだが、步行く時の腰の柔かに、倚らまでなよ〳〵と且つすんなりするのを、上手の踊のほかは餘り見掛けない。引しまつた、溫かい、すつと長い白い脚が、其のまゝ霞を渡りつゝ搖れるかと見える。同じくらゐの若さの時、お悅の方は颯と脫いで雪が露はれたのだし、此は衣を透通るのであらう。「雪代さん」と聞いただけで、昨夜から八郎も言はなければ、敢て私も聞かうとはしなかつた。其の「お久さん。」とか云ふのでない事は直ぐに知れた。雪代はお悅の娘で——主人は折から旅行中の或陸軍中佐の夫人だと言ふ。
「小父さん、入らつしやい。」
　八郎はづか〳〵と、
「よく、來たね。」
「えゝ、私今日は、接待員よ、御珍客樣の。」
「うむ、澤山あの先生にお酌をしてあげておくれ。——これで安心したよ。……やくざな小父さんなんぞと違つて、先生だからね、學校出の令夫人だ、第一義理がある。何しろ、故鄕は美人系だッてんで、無理に誘つて來たんだけれど、まだ一向別嬪にお目にかゝらないので、申譯のなかつた處なんだよ。お前さんの顏を見て、眞個に安心した。——如何です、槇村先生。」
「串戲ぢやあない、串戲ですよ。いや眞個です。」
　其處で私は雪代さんの禮を受けた。

八郎は、すぐ前の臺所へ出て、流に立つたお悦の背後から、肩越しに覗込むで居たが、

「來て御覽なさい槇村さん——此の鮎は見ものですから。」

私は未だ艶治に呼ばれて臺所を紹介された事がない。が、そんな心安だてより、魚の見事だつたのより、一寸話したいのは三令夫人の効々しさで……爼の上に目の下凡そ一尺の鮮鱗、ぱち〱跳ねるのに瞬も掛けない。……羽織を着たまゝ左の袖口に巻込んで、矢筈の鞘と云ふ形で、右に出刃を構へたが、清い目で凝と觀ると、庖丁の峯を返して丁と魚頭を當てた、猿の一打、急所があるものと見える。片手おろしに鱗を兩面にそいで、はじめて袖口から白い手を出して、腮を壓へて、ぎりゝと腹を。

「雪代、雪代。」

其の人も覗いて立つた。

「水、水。」

「ほッ。」

と言ふ……姿に似ない掛聲で、雪代はギイギイ、キクン、カッタンと、古井戸に、白梅のちりかゝる風情で、すんなりした、その肩も腰も靡かせる。

「はゝあ、床下を鐵管で引いたんだね。」

もくもく〱と湧出す水で、眞紅な血を洗ひながら、

「姉さん、姉さん。」

「はい。」

と二つ竈の大鍋の下を焚つけて居た姉さんかぶりの結綿の花嫁が返事をすると、

「其の大皿と丼を——それ、姉さん、其方の戸棚。」

此の可憐なのと、窈窕たると、二人を左右に從へて、血ぬつた出刃の尖を垂直に落して、切身の目分量をした姉御は、腕まくりさへしないのに、當府の素襖の若い女を現實した。

「槇村さん、——其處に柿の樹がありましやう。」

八郎は流の窓から指して、

「あの一番上の枝に草鞋が一足ぶら下つて居たんですよ。いつか私が來た時に、五月ですね。土地子だが氣がつかなかつた。何うしたんだつて聞くと、裏の家へ背戸口から入つた嫁屋の穿かへたのが、雪が解けて、引掛つたんぢやあない……乘つてるんだつて——」

「お目に掛けたいやうですわ。」

と私に、雪代が言つた。

「しかし、此土地も開けたよ。何しろ、お母さんが、嫁さんを呼ぶのに、姉さん姉さんは難有いよ。」

店で息子の聲がして、姉さんかぶりを一寸はづしながら出て行く、結綿の後姿を見ながら八郎が言ふと、

「……お恒——ぢや兄さんのお氣に入るまいと思つてね、いえ、不斷も、もうつゝと奉つて居ます。……でも、時々……お恒——とやる

事。……」

庖丁を一つ當つて、

「何てつたつけね、堅くさ、勿體らしくさ。」

雪代が微笑みながら、

「……なきにしもあらず……澤山よ、ほゝゝ。」

四

「さあ〳〵、泪立を食はないうちに、君子は庖厨を遠ざからう。お客樣は其方へ――一寸ぼくは、爰の佛間と云ふのへ御挨拶」――

前の違棚の前に、二人の中縮緬友染の布團が設けてあつたが、私と肩を別つやうにして、八郎が階子段下の小間へ入つた、大方其處で一拜に及んだのであらう。雪代の手から、私が茶を受け取つた時であつた。

仲仕切の暖簾に、人影が、そぼ降る雨に陰氣に映すと、其處へ、額の拔上つた、見上皺を深く刻んだ、頰のげつそりこけた、ぱさ〳〵乾干びた、色の惡い婦の、それでも泪でかためた銀杏返をちよきんと結んだのが尖つて、鬱紺木綿の筒袖の袖口を綿銘仙の下から覗かせた炭を引摑んだやうな手を、突出した胸で拜むやうに組んで、肩を窄めながら、萌黄の綿てんの足袋で、疊を擦るやうに出て來た。其の中仕切千本格子の板戸を隔てゝ立つた首が、丁ど棚の福助どのと合つた時、失禮だが、私は其の女房が化けたかと思つた。

佛間の敷居へ、もつそりと膝を支くと、

「あんさん、」

と、べろりと赤爛れに充血した瞼で、凝と視上げた、その目がぽろりぽろりと、見る〳〵涙に塞がつた

「うむ、お久さんか。」

八郎の顏は、いま私からは見えなかつたのである。

「お達者でねえ……」

「いや、一向どうも。」

擠れ聲して、

「もう、いつか、いつかゝら、眞個に逢ひたい逢ひたいと思ふて、どれだけ、何年になる事やら。」

と、言葉尻が泣聲で切れて、ひよいと刎ねるやうに兩袖で顏を隱した。何だか滑けたやうに見えつゝも、私は糾と胸を打たれる。

「さあ、お當り。」

お悦が其の中へ箱火鉢をどさんと置いて、

「ずつと中へお入んなさい。――あゝ、えゝ、分つてます。」

何うやら半分は、私に對して八郎が心づかひをしたのを呑込んだらしい口振だと思ふと、果せる哉、然に、一銚子、で、雪代が繪姿のやうに、淡而影を暗い茶の間から、ほんのりと顯はれて、

「先生、あの、一寸お一口。」

「これは何うも。」

「お酌に拙ですよ。旦那が氣が利かないから、下口の處へ、おまけにたゞ夕の妓なんですから。」

と、お役は直ぐ文臺所へ。

お久といふ人は、漸と其の火鉢の緣へ、瞬𢌞の袖口を引張つて、

「……思つたより、あんさんは若いこと。」

「うむ、何、いや何うも何だ、蔭張だ。」

「一度お逢ひした時から、もう二十四年か五年になりますね。」

「然うかなあ。……何しろ、何が何だか分が解らないんだからな、お互に。」

「いつも、ほんに、おたよりをしたいしたいと思つても、私は自分では手紙がかけず、震災のあつた時なんかも、遠い北海道の果に居て、どれほどお案じした事やら、それでも、まあ、御無事でねえ。」

「僅少に命のあるばかりさ。」

「それでも、まあお互に息災で居れば　かうやつて顏を見られますぞね。ほんとうに逢ひたうてねえ、何年も何年も毎晩夢に見ぬ事はないのです。其の夢にかつて、はつきりした顏は分らんほど遼々しうて、……此の羣も漸とお處が知れて、たよりをしたけれど……」

とくひしばつたやうな涙になる。

「いや、御不沙汰をしたよ、」

また顏にあてた袂をはづして、

「それはお忙しい事は知れて居るけれど。」

「大して忙しい事もないんだがね。名も顏も知らない、御亭主のある細君の許へは、うつかり返事は出せないよ。誰も別に悪戯をするとも思はないけれど、第一代筆だらう。きみだか何だか分りやしない。何人に斷つて、俺の妻と手紙の遣取をする。一體主人たるべきものに挨拶をしろ！　消傘ねやしない……地方は煩いからな。」

「煩いぐらゐで……こんなに私が思ふて居るものを、それに、そんな内の人ではないのです。」

「そりや何より結構だ。……然うかい、いやに仰けても居ず、きみに邪慳でもないのだね。」

「唯……困つては居るけれどね、――何にしたかて、兄妹ですもの。」

私は酌をうけながら、ふと雲代の顏を見た。美い人は頷くやうに一重瞼を寂しく伏せた。

「何だか、緣づいた總領の娘が、病氣で歸つて居るんだつて……」

「えゝ、緣があつて、一昨年十七で遣りましたがね、厄かねえ、秋のはじめから目を煩らうて、一寸治らんもんですから、診てもらうとトラホームやッて、……それでねえ。――あんさん煙管を貸してたあせ……今朝から御飯も欲うない、氣がせいてね、忘れて來た。」

「喫みたまへ。……然うだ、煙草を喫るんだつけな。」

「女だてらやけれど、工場で覺えました……十四の時から稼ぎに遣られてねえ。」

「その時分だつけな、一度一寸夢のやうに逢つたのは……――」

「いんれ、十七でいまの家へ一度緣づいたけれど、姑さんが餘り非道で、嚴しうて、身體に生疵が絶えんほどでね、とても辛抱がならいで又糸繰の方へ遁げて居た時でしたわ。」

「あゝ、ぢやあ、其から又緣が戻つた次第だな。」

「お腹に嬰兒が居たもんでねえ、いろ／＼考えては見たけれど、またお姑に詰められに……」

「で、子供たちは幾人だい。」

「えへ。」

と絹裂れたやうに、口元で寂しく笑つて、

「十一人や。」

「産みやあがつたなあ！其の身體で……」

「仕方がないもの。」

「御亭主は幾つだ。」

「六十五や。」

「恐るべく壯だなあ。」

「それでね、六人とられて了ふて、いま五人だけですがね、ほんにねお産の苦みと、十月の悩みと、死んで行くものゝ介抱と、お葬式の涙ばかりで暮すぞね。……ほんにね、北海道に十六年居る間でも、一人を負ぶして、二人の手を曳いて、一人を前に歩行かせて、雪や氷の川端へ何度行つた事やらね。因果と業や。私見たいに不幸なものはないぞね、藁の上から他人の手にかゝつて、それでもう八歳と云ふのに、村の地主へ守兒の奉公や。柿の樹の下や、厩の蔭で、日に何度泣いたやら。――それでもね、十ウの時、はじめて兩親はあかの他人じや、赤子の時に村へ貰らはれて來た、と聞かされた時ほど悲しかつた事はなかつたぞね。實の親の家に居れば、何が何でも、此の兒さんの……妹や。」

「恐縮だよ。」

「實のねえ、兩親の顔も聲も知らんのやけれど、自分で兒を持つて覺えがあるぞね、たとへ、どんな辛い思をしようと、食べるものは食べいでも、どんなに嬉しいか、樂しいか。」

「恐縮だよ。」

「ほんに、他人に育てられて見ん事には、其の辛さは分らんぞね、」

「恐縮だよ。」

「それを、それを、まだ碌に目もあかん藁の上から、……町の結構な家の上から、百姓の土間へ轉がされて……」

「少しお待ち！恐縮はするがね、お母さんは大病だつた――きみのお産をして亡くなつたんだ――が、きみを他所へ遣つたお父さんやお祖母さんのために、言譯ツて事もないが話がある。私も九つぐらゐな時だ、よくは覺えて居ないけれど、七夜には取揚婆が、味噌漬で茶漬を食ふ時分だ。まくりや、米の粉は心得たらうが、しら／＼明でも夜半でも酒精で牛乳を暖めて、嬰兒の口へ護謨の管で含ませやうと云ふ世の中ぢやあなかつた。何しろ横に轉がして使ふ鑵なぞ見た事もない

んだからね。……可いかい。それに活計むきに餘裕があるとなれば、又何うにも成る。いま、きみは結構な町の鄽からと言つたけれど、母親の寢て居た奧の四疊は破障子の穴だらけだ。然も雪の中の十二月だ。情ない事には熱くて口の渇く母親に、小さく堅めて雪を口へ入れたんだけれど、降たての雪はばさ〳〵して齒に軋むばかりで、呼吸を爲らせるほどの雫に成らない。氷がないんだよ。甘露とも法雨とも、雪の雫が生命の露だつて、お母さんが、頂戴頂戴といふもんだから、若い可愛い嫁の、然も東京で育つたのが、暗い國へ來て、嘸ぞ、どんなにか情なからうと最惜がつて、祖母さんがね、大屋根の雪は辷る、其は危いもんだから、母親の寢て居た下屋の屋根を這つて、頂中は積つて高い、廂の處まで這つて出で、上の雪を掻いて、下の氷柱は擽だし、板に附着いたのは汚し、中の八分めぐらゐな雪の六方石のやうに氷つて居るのを掻いて取つて、病人に含ませるんだが、部屋の中はさすがに鐵瓶の湯氣や炬燵のぬくもりで溶けるだらう。階子段を上り下りするやうに日に幾度屋根へ出入りをしたか知れないとさ、觀音樣に見えますと云つて、凝と優しい姑の顏を見ながら、莟の枯れる口を開けた、お母さんのおもひも、察するが可いよ。きみ、花を飾つた駕籠に乘つて江戸芝居を見た娘が其だもの。何も時節だ……冷いやうだが、いや、嚴いやうだが、いや薄情だと言へばそれまでだが、農家で育つて、子守をして、工女から北海道へ落ちたつて、それほど情ながつたり怨めしがつたりする事はなからうと思ふ。が、何うだい。

何しろ、そんな中だもの、うまれたての嬰兒が育てられるものか。あの時、もしも緣のあつた田舍へ養女に遣らなかつたら、きみは多分育たなかつたらうよ、死んじまつたかも知れないんだ。」

「それですから、それですから、私は一層死んだ方がと、昨日も、今日も……」

「まあ、待ちなよ。……亭主が出來て、十一人か、兒を拵えて居るぢやあないか。贅澤な事を云つて、親を怨むな、世間を呪ふな!……とは言ふが、きみの身の上は氣の毒だと思ふ。けれども考えて見るが可い、……きみは北海道の川端か、身投げをしやうとするのに、小兒を負つたり抱いたりしたらう。親子もろともなら或意味で本望だ、母さんは然うぢやあない、もう助からない覺悟をして、うまれたばかり、一度か二度か、乳を頬邊に當てたばかりの嬰兒を、見ず知らずの他人の手に渡すんだぜ。

私は、悲しい草双紙の繪を、一枚引ちぎつたやうに其の時の樣子を、目に刻んで知つて居る。

夜だ――きみの父親に成つた男は、表の間にでも待つて居たらう。母親に成るのが――私も猿の人眞似で、泥でも出て居たのか洋燈の灯が茫と成つた中に、大きな長刀酸漿のふやけたやうな嬰兒を抱いて、(良分に、さあ、一目。)と云ふ形で、括り枕の上へ、低う鐵漿の口を開けて持出すと、もう寢返りも出來ないで、壁の方に片寢で居たお母さん

がね、麻の縮巻へ掛つた黒髪がこぼれて横顔で振向いた。――目は今……私の目にも見えない。」

言が途切れた。

「――鼻筋が透徹るやうに通つて、ほんのりと歯と唇が見えた……其なりがつくりと髪も重さうに壁を向いた處へ、もう一度、きみの母親がのしかゝつて嬰兒を差出すと、今度は少し仰向けに成つたと思ふとお母さんの白い指が、雪の降止むだやうに、ちら〳〵と動いた、――自棄に鐵漿の口が臭くつて其奴を振拂つた、と今の私なら言ふんだがもう此の身で泣くのにも堪へられない、思切らせておくれ、と仕方をしたんだらう。――あとは知らない、しばらくすると、戸外を草鞋の音がびしや〳〵と遠のいた。」――

聞く方は泣じやくつて、

「もう、怨みもどうもしませんぞね。よそで聞けば、十四五まで着られる柔かい着もの一葛籠、お金子もそれ〳〵私につけて下さつたさうながね、私は一度かつて袖を通した事もないのです。父親は然うでもなかつたけれど、草鞋の音の、其の鐵漿の口は蛇體や、鬼でしたぞねそれは邪慳な慾張り。……少しは人情らしいものゝあつた養父の方が――矢張り何處までも私の不幸や――早く死んでからと云ふものは、子守で泣かせたあげくが工場へ遣られて、それが三日おき四日おきに、五錢十錢と取りに來る……月末の工賃はね、嫁入仕度に預るいうて洗ひざらひ持つて行つて、――さあ、否でも應でも今の亭主へ嫁ると云ふと、それこそ、ほんに、掴へるほどな、風呂敷づゝみもくれんぞね。どれほど肩身が狹かつたやら……其の裸か、またお姑の氣に入らんのですがね。

何處まで因果が續く事か。……また今度めの娘の婿は、年紀も少し。」

「幾才だい。」

「二十一や。」

「迅い奴だな、商賣は。」

「蒔繪の方ぞね。」

「結構ぢやあないか。」

「それや處がね。まだ見習ひで、十分にならてねえ、くらしはお姑さんが、おもに取仕切つてやもんですから、あんさん、これは酷いぞね――半月おきには、下駄の歯入れや、使ひまはしも激いし……それさへ内へ強請りに來るがね。「母さん十日お湯へ入りません、お湯錢たあせ、」と内證で來る。湯の具までもねえ、すれ切や、「母さん、……洗ひがへ買うてたあせ、」とソツと來るし……」

「情ねえ事を云ふ。」

私も雪代と思はず顔を見合はせた。

「情ないどころではないのですぞ。その上げくがトラホームや、療治は長びくし、うち中へうつるいふて、今度返されて來たですがね、病院へ遣らうにも、それでならうてさへ、内も樂どころではない處へ。」

「もん句は亭主に言へよ、亭主に。」

八郎の膝はやゝ浮立つた。

「それを言ふたかてねえ、出來るやうなら可いのですけれどもねえ。」

「きみの亭主にだよ、娘の事だ。——いや婿にだよ、誰がそんな事を知るもんか。」

「然う、もぎだうに言はいでも。」

お久といふ人は又袖を顔に當てた。

「私にかて、私にかて、生れてから、まだ唯一日も、一どころか一度でも、親身の優い言葉ひとつ聞いた事のない私に——こんなに思ひに思ふて漸つと逢つたのに、」

「抱いたつて擦つたつて何にもならない——現金でなくつちやあ、きみたちは駄目なんぢやあないか。」

「あれ、あんな又もぎだうな。」

「さあ〳〵、茶碗の一つぐらゐ引くりかへつたつて構はない。威勢よく、威勢よく〳〵さあよ。」

と結綿のに片端舁がせて、皿小鉢、大皿まで、お悦が食卓を舁出した。上には知らぬ間の大鯛が尾を刎ねて、二人の抜出した臺所に、芬と酢の香の、暖い陽炎のむく〳〵立つて靡くのは、早鮨の仕込みらしい。

「兄さん——さあ、お久さん……」

「それでねえ、——餞錢を何うと云ふではないけれどね、亭主をはじめてに、娘の其の婿もね、そりや謡が好きなのですぞ。……息子もねえ、一人は鐵葉屋の方を、一人は建具屋の弟子に成つて居るのですが、どつちも謡が大すきや。二人ともねえ、好きやぐらゐか、あんさんのお弟子にも成りたいとねえ……血統は爭はれぬもんぢやぞね。」

お悦が膳の上を按排しながら、此を聞くと、眉を顰めた、八郎の顔色が思ひ遣られる。

「婿もかい、矢張り、自然と繋がる縁やよつて、あんさんにお逢ひして、謡やら、鼓とか云ふものやら。」

「べらぼうめ、」

猛然として八郎が、尖がつた銀杏返に、膝を更はして敷居を出た。

「然う云ふ了見だから。……チヨツ、さあ、御馳走だ。お食べと云つたら、鱈ふく食ふんだ、遠慮をしないで、食ふものはさつさと食へよ。謡どころか、お互にすき腹がぐう〳〵言つてら。」

五

「——伯父、甥が何だ。……姪の婿が何うしたつて云ふんだ。他人樣の大切な娘を……妙齢十七八だつて。(お月樣いくつ)のほかに年紀ばかり唄に成るのは其の頃の娘なんだ。謡をうたふ隙に拜んでるが可い。私なんざ、二十二三の中年増に、お酌を頂いたばかりで……此の通り。」

八郎は當代の酌を受けて、恭しく頂いた——其癖酌を受けたのは今ばかりではない、最う可加減酔つて居る。實は私も陶然として居た。

「これ、土手で賣る馬肉ぢやあないか、蹴轉の女郎の切賣を買つたつて、當節では大錢だらう。女房は無錢で貰うんだ——娘に……簞笥、長持から下駄、傘、枕に熨斗が附いてるんだぜ。きみの許は風呂敷にもしろ、よしんば中が空だつて、結びめを蝶々にしたらう。裸で其奴を引背負つたつて、狢の生へた處は天津風雲の通路ぢやあないか。勿體なくも、朝暗いうちから廊下敷居を俯向けに這はせて、拭掃除だ、鍋釜の下を焚かせる、水をくませる、味噌漉で豆府を買ふのも丼で剝身を買うのも皆女房の役だ。つかひはや間の隙にはお取次、茶の給仕か。おやつの時を聞けば、もうそろ〱晩のお總菜拵えにかゝつて、米を磨ぐ。……皿小鉢を洗ふだけでも、いゝ加減な水行の處へ持つて來て、亭主の肌襦袢から安達ヶ原で血を舐めた婆々の鼻拭の洗濯までさせられる。暗いあかりで足袋の繼ぎはぎをして、皹あかぎれの手をけちで炭もよくおこさないから……息で煖める隙もなしに、鬼婆の肩腰を、擦るわ、揉むわ、で、其のあげくが床の上下し、坊主枕の繕ひまで取りかへて、旦那樣の御寢なれだ。

野郎一生の運が向いて、懷を拂いた、藝妓、女郎に惚れられたつて然うは行かない。處を好き自由に抱こに及んで、夜の明けるまで名代なしだ。神宮から小槌を貰つたつて、振つても敲いても嬶々は出ねえ。本來なら翁に納めて、高い處に奉つて、三度三度、お供物を取換へて、日に一度だけ扉を開いて拜んで居なけりや罰が當ら。……處を……ありがたい神佛の廣大なお慈悲の思召しで、それには及ばず、世間のならひ、好き自由にして擦り切れるまで使つて置いて、何だを、褌も買つて遣らない、里の母親の處へ、湯錢の無心、下駄の齒入まで強請らせるとは何事です。女房は何かたのみだ。せめて疾煩ひの時、優しい言も掛けられて、苦い藥でも飲まして貰はうと思へば、何だ、トラホームは傳染るから實家へ歸れ——馬鹿野郎、盲目に成つてポコ〱琴でも彈きやがれ。何だ、妹の娘で、姪の婿のよしみを以て俺に謠を聞かせろ、——まひを舞へ。わるく、此の酒でちらつかな目の前五六尺が處へ面を出して見ろ、鼓は未熟でも張扇で敲き込んでるから腕は利くぞ。橫外頰を打挾はせるぜ。

また其の錻葉屋と建具屋の弟子だつて然うだ、血統は爭はれぬ、緣に繫つて能役者が望みだ、氣障な奴だな。役者に成る隙があつたら、——お久。……」

と口を曲めて橫狀に視た。

「お前の其の蝦蛄の乾もの〻やうに成つた、兩手の指を、交る交る道つて舐めろと言へ。……いづれ劍劇や活動寫眞が好きだらう。能役者に成る前に、何故、鉋槌や鑿を持つて斬込んで、妹を苛める其の姑婆を打のめさないんだい。——必ず御無用だよ。然う云ふかた〲を御紹介とか、何とか、に相成るのは。」

「あんさんは醉つてゞすね。」

と涙も忘れて胸も、空洞に、ぽかんとして、首を眞直に据えながら酒の酌の碗を冷して、箸をきちんと、膝に手を置いた狀は可哀である。

此方には、蟹の甲羅——あの假の紫壁だか、軒に鬼の面の如く掛つたのを讀者は折々見られたであらうと思ふ——針を植えた樣と赤いのが烈々たる炭火に掛つて、魔界の甘酒の如く、腦味噌と酒とぶつ／＼と煮えて居るのに。——

「お悦さん——姉さん——私の言ふ事は間違つてるだらうか。」

「槇村先生にお聞きなさい。」

私は、……いま偶と妙な形容をしたのに對して、言憎いが、甲羅酒を搔つて唯笑つた。

「邪慳か知ら、薄情か知らん、たとへば、甲羅酒のやうに聞こえますか。それとも雪代さんの酷……」

「可厭だ、小父さん。」

「いや、天人だよ、大したものです。夾蟹のやうか、それとも、無臺で……明日被る……羽衣の面のやうか、と云ふんだよ。」

「どつちでも可いから、何しろ、まあお食んなさいよ。」

「名言だなあ。」

八郎は肩をのめらした手で膝を敲いた。

「何事もこれ食ふためだ。が、どつちでも可いたつて、憚りながら雪代さんの酷は舐めさせもしますまい。食ふと成りや、蟹の面だ。ぐつ／＼ぶく／＼と煮えて、ふう、あゝ、旨しさうだ。」

と被さるやうに鼻を持つて行つたと思ふと、

「ニヤーゴ！」

あゝ、其處へ猫が出たかと思ふ、私さへ吃驚した。況や、臺所から盆を運んで、階子段の下まで來かゝつた結綿は、袖を刎ね、褄をはらりと亂して臺所へ振向いた。

「あれえ、お勝手へ、野良猫が。」

聲を返したと見える。

雪代が一寸襟を合はせながら、

「お母さんなのよ。——困るわね。」

「眞に迫りましたよ。」

と私も言つた。

「だつて、兄さんが嗅ぐんだもの。」

「天人からはじまつて、地獄、餓鬼、畜生だ。——淺間しさも淺間しいが、人間何よりも餌食だね。私も餌食さへふんだんなら、何も畜生が齒を剝くやうに、建具屋の娘や、妹の娘の嫁か、其の蒔繪屋なんか嘗しりやしない。誰も彼も、内に轉がしといて見せも聞かせもしやうがね。」

坐り直つて、何故か、八郎は憮然とした。

「——姉さん、此處に居る、此の人が、」

八郎は片頬で妹を斜にさして、

「無心を云ふ警戒でもするやうで淺間しいが、聞いて下さい。私たちの職業として、主要な收入高と言へば、其の全體と言はないまでも八九分までは誰の弟子だよ。弟子をとるんだよ。弟子さへ付けりや、盆

暮の附屆けだけでも――云ふ事は下等だがね――一年はくらせやう。……はづんで、電話を呈しやう、稽古所を承らう。家を一軒――なぞと云ふのは、皆謡の弟子なんです。

　槇村さんも御存じの通り、……處を私は弟子を取りません。私は舞臺で能は演るが、謡の師匠ぢやあないと言ふんです。お聞きの通り、近頃は建具屋の弟子小僧まで、伯父の内弟子に成つて樂をして食はうと云ふ不了見を起すほど、此の職業も、盛と云へば盛だけれど、腹のくちい連中が運動がはりに聲を出すんで、能を見やうツて氣は些少もない。――また素人にや面白くないからね。芝居や活動寫眞のやうには行かないんです。だから御覽なさい。――明日の催しだつて同じ事さ。……手ン手が手本を控へて、節づけと目張りッこで、謡ばかり聞いて居る。夢中で浮かれ出すと、ウウウと頭を掉つて、羅宇の中を脂が通るやうな聲を出すんだから堪りやしません。死ぬ苦みで修業をした、舞臺の、其の時々のシテなんざ、まるで御連中の眼中にやないんだから。――然うかつて先方はお客だ。業も未熟だし、決してもんくは言やしない、言はないかはりに、一人だつて紳士方の腹こなしや、貴婦人とか云ふ媽々天下の反返りだの、華族の後家の退屈凌ぎなんか弟子には取らない。また取れやうもないわけなんだ。能役者が謡の弟子を取るのは、歌舞伎俳優が臺辭の假聲を教へると同じだからね。舞臺へ立つては、早い話が、出來ないまでも、神と現じ佛と顯れ、夜叉、鬼神とも成れば、名將、勇士、天人の舞も姿も見せやうとする。……遊女、白拍子はまだしも、畏多いが歌の住吉明神のお聲だつて寫すんです。謡本と首引きで、朱筆で點を打つたつて、眞似方も出來るもんか。

　第一、五紋の羽織で、お袴で、革鞄をぶら下げて出稽古に歩行くなんぞ、いゝ圖ぢやあないよ。いつかもね。」

　八郎は叩と頷つて、

「省線電車――まあ、其の電車に乘つたと思つておくれ。眞夏の事でね……五十面をてら／＼磨いて、薄い毛を白髪染さ、油と香水で眞中からきちんと分けて、――汗ばむから帽子を被りません――化粧でもしたらしい、白赤く脂ぎつた大面の頤を突出して、仰向けに薄目を閉けた、廣い額がてら／＼して、べつとりと、眉毛に墨を入れたのが、よく見える。紗の横縞の袴を突張らかして、折革鞄を傍に、きちんと咽喉もとをしめた淺黄の絽の襟を扇で煽ぐと、しやり／＼と鳴る漸羽織の五紋が立派さね。――此の紋が御見識だ。何と見えます――俳優ともつかず、遊藝の師匠ともつかず、早い話が、山姥の男妾の神ぬしの化けたのだ。……間が離れて向ふ斜めに、然も反つて居たのを、丁ど私の傍に居合はせた、これは又土用中、三暑の砌を御勉強な、かたぎ裝の本場らしい藝妓を連れた、目立たない洋服の男が居て、件の色親仁を視ながら、藝妓と囁いて、何だらう？――「分つた、能役者だ。」――と言つた。私は慄然として膚粟を生じた。正にそれに相違ないのだから。……流儀は違ふが、額も、鼻も、光る先生、一藝のお役者で、評判の後家――いや、未亡人――いや、後室たらしさ。

――あとで知つたが、其の言當てた男は、何とか云ふ、小説家だつたつて――餅屋は餅屋だと思つたよ。――

そんな脂切つたのがあるかと思ふと、病上りの蒼つしよびれが、頬ツ邊を窪まして、インバネスの下から信玄袋をぶら下げて、ごほ〱咳をしながら、日南を跣足で歩行いて行く。弟子廻りさ。「何うなすつた先生。」――「あひかはらず喘嗽が不可ませんでな。」なんぞは不情ない。が、決して惡く言ふんぢやない。絞つて肥つたのも、吸はれて痩せたのも、皆これ、お互に食ふためさ。今日の餌食ゆゑです。汝一人ならどうにか中くらゐにでも食へやうが、詮ずる處、妻子眷族、つゞいては一類一門のつながりに、係累がないでは居られないからだよ。漸と夫婦で、餌を拾ふだけで濟んでるから、何うにか能役者の眞似も出來る。……此の上兒でも出來て御覽、すぐ其の日から革鞄を提げた謠の師匠だ。勿論謠の師匠なら謠の師匠專門は結構だ。

が、然うなりや覺悟をする。……夫として、親として、女房子を食はせるのは義務だからね。私は成るべくは謠の師匠には成りたくない。たゞし其でも餌の足りない時は、先づ女房の前へ手をついて謝まるんだ。他樣の大切なお娘御の玉の如きお身體を自由にいたし申譯はありません。おはぐゝみ申す腕がございませんから、重々お詫の上、お身體だけ、お返し申上げます。女にすたりはない、いづ方へなりとも御自由にお使ひ下さいましとね。誰がそんな中で五人七人小兒を産ませる、べらぼうがあるもんか。女の方は産まないたつて然うは行かねえ、身振をするんぢやあないけれど、第一腕力に掛けたつて女は弱い、從はせられる、皆亭主の不心得だ。

惡くそんな奴が殖ると、忽ち、能職が謠屋を兼るやうな事が出來する。私が此のまゝで我を通せば、餓鬼、畜生と言はれても、明日の舞臺は天人だ。有象無象が現はれて、其奴にかゝづらうやうに成ると、見た目は天人でも藝は餓鬼だよ。餓鬼も畜生も藝なら好い、が、奈落へ落ちさがるのが可恐いんだ。

私は能役者で、今度だつて此地へ來たのさ。謠の師匠なら、さき樣の歡迎會や披露どころか。私の方から、顔出しもすりや、挨拶にも廻つて、魚市で、お悦さんに餡を强請る隙に、祝儀づゝみの十や十五は懷中へ入れて歸つて、トラホームの療治代ぐらゐ、即座に辨ずるんだが、何うだい。」

八郎は胸をしめて妹を見た。

「きみ、分つてくれたかい。」

お久といふ人はきよとんとして居た。

「あんさんは、ようものを饒舌つてや。……(向の山に猿が三匹の)

小猿にされて、八郎はぼかんとした。

身勝手な事を……然も醉つて居て饒舌つたのである。實は友だちの私にもよくは分らない。が、其の人となりと、境遇との婦人には、私の分らないほども分らなかつたらうと察しる。

「何うだい、綺麗な奧さん――いかゞです、姉さん、お悦さん。」

遠慮なく、箸をとつて居て、二人とも揃つて箸を置いたが、お悦さんの方は一口飲み込むと、酒は一滴も喫けない婦の白く澄ました顔色で、

「ニヤーゴ！」

「此奴は不可い。」

「あ、小父さんお客様。」

お母さんに肖て此も敏捷い！……折から、店口の菊花の周圍へ七八人、人立ちのしたのをちらりと透すとゝもに雪代が迅くも見てとつた。

六

――先生、先生、橘先生――これは又何うした事で。……既に電報で再度までも申出ましたものを、御着の時間どころか、東京御出發の御通知も下さらず、幹事一同は大狼狽。勿論、催能は明日に迫りましたものを、御到着にならぬと言ふ事は斷じてないと信じては居りますものゝ、各々氣が氣ではありませぬ。御歡迎なり、有志の御紹介なり、昨日も三つばかり、其のための會合がお流れと申す始末――

これから、誰彼口々の口上は、讀者諸君の想像にまかせた方が可い。

――當方で御指定いたした旅館へはおいでなくとも、先生が御宿泊なさりさうな四五軒、然るべき旅館も探したが、お見えに成らない。最早今夜に迫つては、いづれにせよ、是が非、御着に相違ないと、町中の旅籠屋と云ふ旅籠屋の目ぼしいのを御覽の通り此の人數で――

提灯が五張、それも弓張、馬乘の定紋つきであつた。オーバーの紳士、道行を着た年配者、羽織袴のは、外套を脱いで小脇に挾んで居る。菊花の土間へ以上七人、軒、沓石へ立流れて、尚ほ四人ばかり。

――で尚ほ念のために停車場へも多人數が出て居るやうなわけで、漸と思ひも寄らない旅店で、お名前を見つけました、それも今しがたの事で。然も、然るに御在宿でない。然るに然る處、何が何とあらうとも明日の演能に、今夜までおいでのない法は斷じてない、唯搜せ、捜すと極めて、當地第一の料亭、某樓に橘八郎先生歡迎の席を設けて、縉紳貴女、あまた、且は主だつたる有志はじめ、ワキツレ囃子方まで打揃ひ、最早着席罷在る次第――開會は五時と申すに既に八時を過ぎました。幹事連の焦心苦慮偏に御賢察願ひたい。辛うじて御當家、お内儀・御新造と連立つて、公園から、もみぢ見物――

と云ふ、其のお悦さんは、世話狂言の町家の女房と云ふ風で、暖簾を隔てに、細い格子に立つて覗いて居る。

八郎は、框の冷い板敷に、ひたりと膝をついたが、其の所は……餅屋は餅屋か、何處に用意をして居た知らん、扇子を帶にさしながら出迎へたのを、きちんと前に置いて、酒の勢で脱いで居たから、着流しのそげ腰で、見すぼらしく、土間に乘出すばかり手をついてお辭儀をして居る。

提灯は吹さらす風とゝもに、頻に菊の霜に動いた。

――手操しめて驅附け、顏を見て先づ安心、――が、其の安心をさ

せないで、八郎は――然やうな晴がましき席へは出つけませぬ、恁くの通り食べ酔ひまして、此の上御酒宴の席へ通りましては、明日の勤のほどが――と誰も続まない、酔つたのを枷にして、不参、缺席のことはりを言ふのである。

思つても知れやう、これを其のまゝで引取る法があるものか。推し返す、遣返す――突込む、突放す、引立てる、引手繰る。始末がつかない。

私でさへ、其の始末のつかぬのが道理だと思つた。

中に髯のある立派な紳士が、一公職の名のりを上げた。

「此の中には、藩侯御一門の御老職も見えて居られる。私も、武士の血を引いて居りますぞ。さ、おいで下さい。」

と云つた時は、

「能役者は素町人です、が失礼します。」

と云つた、八郎はぶる〳〵した。

皆黙つた。寂然とした。

店に居た、息子も若い衆も居直つたのである。

「酔覚めだよ。」

とお悦が小さな聲で、

「雪代、雪代。」

すつと寄ると、

「あ、内の雪はお嫁さんにさせないと氣まづいね……姉さん、」

嫁御は、もう臺所から半身出て居た。

「廣袖を出しておくれ。……二階だよ。」

「まあ、小父さん、お寒さうね。」

と雪代が店へ出ると、紺地に薄お納戸の枷立杵の羽織を、唯、白い手で、跼つた八郎の痩せた背中へ、ぞろりと掛けた。帯腰のしなやかさ、着流しは尚ほなよ〳〵して、目元がほんのりと睫毛濃く、莟める紅梅の唇が、艶々と艶な鬢の蔭にちらりと咲く

「似合ひましたなあ、はゝあ、先生。」

「それでは御出席に成れますまい。」

「いや、諸君は、何を言ふ。」

武士の血統は氣色ばんで一足出た。

「お聞きなさい、――橘さん……苟も東京から家元同格の貴下がおいでだと云ふで、今夕、申合打合せのために出向いた、地謡、囃子方一同は、念のため酒席と雖も、袴を用意して居るですぞ、何事ですか、此の状は。」

八郎は紅の八口を引緊めた。梅が散つて柳が靡く。

「最早、かうなれば八郎討死です。」

「何。」

「そのかはり、明日は羽衣を着て化けて出ます。」

「何だ！」

「あゝ、其の箱の下は井戸ですよ。」

お悦の高聲に、一同は、アッと退いた。

が、忽ち一團になつて詰掛ける。

我も思はず、お悦の肩を乘越した。

こゝに不思議だつたのは、其のお悦の袖の下にあつた、圓い、白い、法然頭である。此の老人は、黑光りのする古茶棚と長火鉢の隅をとつて、其處へ、一人で膳を構へて、こつねんと前刻から一人で、一口づゝ飮んで、飮んでは假睡をするらしかつたが、ごつゝり布子で、此の時である。のこ〳〵と店へ出て、八郎と並んで坐ると、片手を膝について、片手、掌を斜に、其の手造りの菊を恁う塞ぐやうに、

「貴客方、ちよこッと其の花を見て下さらんけ。……賞めて下さると、何ぢや、白いのを賞めて下されば、取次ぎの白粉ぢや、いろのを賞めて下されば、內の紅ぢや、一包づゝお景物をさしあげる事にいたしますぞ。」

ほたりと笑つて、

「どやろか。」

と云つた。

提灯の灯も黃に白に、菊見の客が歸つたあとで、皆が揃つて坐敷へ入つた時、お久といふ人は、自分の椀小皿をきれいに食べて、箸を置いて、而してうしろ向きで膳の上を拜んで居た。

「御覽なさい……あの通りだ。――嘘も大袈裟も、もの好きにもしろ、お囃子方は宴會の席へ裃を持つて出たかも知れないが、いま來た十人が十人、殘らず申合はせたやうに四角な風呂敷づゝみと折鞄を持つて居たでしやう。あの中が皆謠本さ、可恐い。……其の他一同、十重二十重に取圍んで、こゝを一つ、と節を突いて、浮かれて謠出すのさへあるんです。

其の癖、明日に成つて、舞臺で見たが可い。誰も富士も三保の松も視めちやあ居ない。氣まぐれに、舞を見るものも、ごま點と首ひきだから、天人の顏は黑痘痕さ。」

八郎は恥づるが如く、雪代の羽織を引被つた。

然矣。――十五の年渠を養子にした、當流の元老にして大家だつた養父も正に同じ事を歎いたさうである。上京の當時、八郎は舞臺所屬の或外國語學家の玄關に書生をして居た。祖父、伯叔父一統いづれも故人だが、揃つて能樂師だつた母方の其の血をうけて、能が好きだから、間を見ては舞臺を覗く。馴染に成つて、元老の娘が五つばかり年紀上だが優しい婦で、可愛い小僧だから、つひ親んで、一日、能會の日、中食の辨當を御馳走して、お茶を入れて二人で食べて居た――處へ、裝束を褄に直して、扇子を片手に澁い顏をして入つて來た、六十七の老人である。「うまく遣つてるな、坊主、能は何うだ。」と言つた。

大切な蒲鉾を頬張りながら、「何だか知らないが、小父さんは化けるね。」「何。」「だつて、舞臺ぢやあ其の色の黒い皺くちやな手首の處が綺麗で眞白だつたよ。」天女の扇を持つた手である。元老は當日羽衣を勤めた。「そして、（富士の高嶺幽になり、天つ御空の霞にまぎれ。）と云ふ處ぢや、小父さんの身體か、橋がゝりの松の上へすつと上つたよ。」「生意氣な事を言やがる。」お婆さんの御新姐が持つて來た冷酒を硝子盃で、かはりをして、三杯ぐつと飲んだが、しばらく差俯向いて、ニコリと笑つて、トンと袴を胡座をすると、たゝくと、思出したやうに、衝と住居から樂屋へ歸つた。

おなじやうな事が又あつた。盲目の景清である。「坊主今日も化けたか。」「化けた……何だか知らない、荒礒の小屋に小父さんが一人居て、——（目こそ闇けれど）……何うとかして——（寄する波も聞ゆるは）……と言ふと、舞臺中ざあと音がしてね、庵へ波がしらが立つのが見えた……魔法を使つたやうだよ。」お婆さんの御新姐の手から冷酒を三杯立つゞけて、袴に兩手をついて、熟とうつむいたが、澁苦い顏して、ほろくと涙ぐんだ。「こいつを聞きたいばつかりに、俺は五十年苦しんだ。姉さん、隱れ、うんと馳走してくれ、皆一所に飲まう。」後日、内弟子に極める時元老が聞いた——「坊主、修業をして、舞臺へ浪が出せるかな。」八郎が立處に。「いけなけりや、バケツに水を汲んで置いて打撒くよ。」

——「尋常に手柄とも言はないで、バケツは何うだ、しかし水を打ちまくかはりに、舞臺へ雜巾を掛けます。」と月を經て、嬉しさうに元老が吹聽した。娘の婿に極つた時である。

かくて、八郎は橘の家を繼いで、家名を耻かしめはしないのである。

人は呼んで、宗家同格と栞を稱へる。

「分らないな、——まだ世界に一人のあんさんだの、唯た一人の姉を言つて居る！一人の妹は分つたから、一人の妹に成つて來い。其のもじやくと生へた身うちの手足を殘らずたゝき切つてよ、何ばつかりなら、蝦蛄だつて大好きなんだ。六十五歳で十一人うませた親仁だの、其の子供だの、また其の婿だのを、私が親しいと思へるか、懷しいと思へるか、考えて見るが可い。——何、妹に面じて、逃ふだけだつて、煩いな！……そんな事に面じなけりや成らない何だだ？妹だ。……きやうだいは一つ身だと？御免を蒙る。血肉も骨も筋も一つに溶け合ふのは戀しい可愛い人ばつかりだ。何？——きやうだいは五本の指、嘘を吐け、——私には六本指、副指だよ。」

地方は電力が弱くつても、明るい電燈の下へ持出される言葉ではあるまい。が、燈明ばかり陰々とした、其處の佛間で、八郎の聲が聞こえた。

——座敷では人隊の朦朧とするまで、鍋の蜆味噌の再び煮返る中を、

何時の間にか、お久といふ人は歸りしなに……「一寸」……で八郎を呼出して、連込んだものらしい——

「な、六本指はあやまるよ、分つたか。」

言ひ棄てゝ、醉過ぎたか、覺際か、蒼白い顏をして、つか／＼と出て來たが、御飯に添へて小皿の小肴を、（此のあたりの習慣である。）手に載せて箸をつけて居た、雪代夫人を視ると、どしんと坐つて、

「何を食べてる。」

「篠鰈よ。」

「あゝ、」

と覗いて、

「東京の柳鰈か——すらりと細い……食つてるものも華奢だなあ、少しおくれ、撮つてだよ。」

「可厭な、先生。」

「何が先生だい、さあ、撮つて。」

小指の反つた白魚の目は紅い、指環にうつして、消えさうな身を三口ばかり、歯に觸りさうにもないのを、あんぐとうけて、むしや／＼と噛んだと思ふと——とだりと其のすんなりとした背に崩込んで、空色地に雪間の花を染模樣の帶のお太鼓と、梅ケ香も床しい細りした襟脚の中へ、矢鱈に顏を押込んで、ぐたりと成つた。

「襟脚の處が三寸ばかり、お前さんに似て美しい。」

と耳元に囁いたと思へば、背中へ倒れ込んで——此時、八郎は泣いたのださうである。

私は小さな料亭の小座敷、翌夜、雪代夫人から對座で聞いた。

チーン

すゝり泣く聲がすると、輪が鳴つた。……お久といふ人の、めんでんの足袋で歸るのを、立合はせた臺所から、お悦が送り出すと、尖つた銀杏返を、そゝげさして、肩掛もなしに、冷い顏をうつむけて、雨上りの夜道を——凍るか……かた／＼かた／＼と歸つて行く。……

七

土地に大川通がある。流に添つたのではない。優しい柔かな流に面し、大橋を正面に、峰、山を右に望んで、橋添には遊廓があり、水には艫船もながめだけに繋つてあつて、然も國道の要路だと言ふ、通は賑つて居る。

此の土地へ來て、第三日目——八郎が舞臺に立つた——其夜九時半頃、……結たての圓髷に薄化粧して、質實だが黒の江戸褄の、それしやには又見られない、かうとうな町家の内儀風の、しやんと識つたお悦と、急き心に肩を揃へて、私は、——瀬戸物屋で——骨董をも合は

せて陳列した、山近き町並の冬の夜空にも、沈んだ燦爛のある窓飾の前へ立つた。

「……ございませんね。」

「ありません。」

覗くまでの事はない。中でも目に立つた、落着いて花やかな彩色の花瓶が一具、まだ飾直しもしないと見えて、周圍一尺、すぽりと穴のあいたやうに成つて居るのだから。

氣の早いお悦が、別して或場合だつたから、つか〳〵と店へ入つて、

「御免なさい、」

「へい、これは。」

亭主が居合はせた。

「お晝ごろ、連の人と頂きました花瓶なんですがね、可なり大きさのあるこわれものですから、お店で、すぐ荷造りをして頂くか、それとも一旦、宿の方までお受取りしようか、……とに角、もう一度うかゞふ事に成つて居ました……」

「はあ、いえ、其でございますがな、まあ、御新造さん、お掛けなすつて、旦那も何うぞ。入らつしやいましたよ、つい今しがた、前刻の旦那が。」

「來ましたつて！」

と私の顏を見て、

「一人で……段も一人でしようけれど、どんな風俗をして居ました。」

ぽんと、馬づらが煙管を拂いた。

「ええ、其がな、紋着の着流しで、羽織も着ないで、足袋は穿いて居なさつたやうでやすが、赤い緒の鼻緒の草履を突掛けて……あの廊下などを穿きますな……何だか知りませんが、綺麗な大形の扇を帯に打込んで、せか〳〵おいでなさつて、「持つて行く。」と突如おつしやる。勿論、お代済でございますし、しかし、お風呂敷か何か、と云ふのに「直き其處だ、直き其處だ」と、如何樣……川端の料理屋でゝも飲んでおいでなさつたと云ふ御樣子で、直ぐ、お引抱へに成りますとな、可なり持ちおもりがするんでやすから、扇をつゝ支棒にして。……いや何うも、花瓶も見事でございますが、どつちが綺麗かと思ふほど扇もお見事でございましたがな。」

といひ〳〵、これも、怪訝さうに、じろり〳〵と覩る。……お悦が其の姿で、……こゝらでは今でも使ふ――角樽の一升入を提げて居たからである。

(――時に、此處で仄聞いたのが、綺麗な扇を持つた〳〵……友だちだから特に讃して言はう)白い手とゝもに舞臺から消えた、橘八郎の最期の消息であつた――)

私はやゝ狼狽へて居た。

次第を話さうが、三日めの此の朝、再びお悦さんが私たちの旅宿に音訪れた。またどんな事情があつて昨日の幹事連が押寄せないとも限らない、早く出やう。支度をするのに、直ぐ能舞臺へ出勤するのが道順だから、八郎は紋着を着た。其の舞袴を着けるのが實に早い。夜討に早具足だから、本來は、背後へ廻つて、支膝で、一寸腰板を當てるのが、景情あひともないさうなお悦…(早間に掛けては負けさうもない、四時半から髮結を起したと云ふ)が、うつかり見て居たから、八郎の袴羽織には初めて接したかも知れないのであつた、

途中を電車で、私の見物のために、一度いま話す此の大川通で下りて、橋袂に、梢は高く向ふ峯のむら錦葉の中に、朱の五重塔を分け、枝は長く背い淺瀨の流に靡いた、「雪女郎」と名のある柳の大樹を見てそれから橋を渡越した。志す處は、いづれも維新の世の波に江戸を落ちた德川の流の末の能役者だつたと言ふ、八郎の母方の祖父伯父また叔母、續いて祖母伯母又叔母などの葬られた、名も寺路町と云ふのゝ菩提寺であつた。――父母の墓は東京にある。――

寺と寺との間に、亡者の住居に石で裏階子を掛けたやうな、苔に辷る落葉の徑、しかも藪の下で、老猫の善良なのがもし化けたら、此のほかになりやうはなささうな、ぺろんと剝げて、くちや〳〵と目の赤い、鬢をそのまゝの頰の皺で、古手拭を被つた、影法師のやうな、穴の媼さんとか云ふ店で、もう霜枯だから花野は幻に成つた、水より日向かたよりらしい、軒に釣した坊さん華に、葉の枯れ〴〵の小菊を交ぜて、ほとけ様は五人と、八郎が云つて、五把、線香を買添へた時「あんやと、あんやと。」と唱名の如く呟いて、景物らしく硫黄の附木を束から剝いでくれたのには、私は髣髴として、生れぬさきの世を思つた。

寺の門には、樹立のもみぢに、ほか〳〵眞赤に日が射したが、墓所は濕つて暗い。線香の煙の五條むら生へる枯尾花に靡く時、又ぽつりぽつりと小雨が掛ると。――當寺の老和尙が、香染の法衣をばさばさと音さして、紫の袈裟を疉んだまゝで、眼に掛けた、その兩手に、木枝を屈づきに、突張つて、馴れて鳥の鳴く樹の枝下へ立つと、寺男が、背後から番傘をさしかけた。

「大僧正の見識ぢやの、はゝは。」

と咽喉を掠めて笑つて、

「はや、足腰もよう利かんで、さし掛傘も杖の中ぢや。意氣地はないの。呂律もよう廻らん、大分に嘘をついたからの、はゝは。」

中山派の大行者で、若い時は、名だゝる美僧であつたと聞く。谷々の寺に谺する、題目の太鼓、幾個寺か、皆此の老和尙の門弟子ださうである。

「よう御參詣ぢや――紅屋の御親姐…今ほどは又厨裡へお心づけ過分にござる。あゝ、其のお袴の御仁(八郎を云ふ)前にある黒い媼ぢやがの。それは東海道横濱にござつた、葛原(八郎の母方の姓)の妹娘の胥を入れて、――仲仙道上田にござる姉娘がの、去年供養に見え

た一具ぢやが、寺で葬るのに墓を穿つた時よ。私が立合ふて、思ふには、祖父祖母、親子姉妹、海山百里二百里とちり〳〵ばら〳〵に成つたのが、一つ土に溶け合ふのに、瀬戸もの〻欠が交つては、嘸ぞ疼からう。飯に砂利を噛んだやうにあらう、と思ふたぢやでの、棄てるも勿體なし……誰方ぞ參詣の折には、手向の花を挿れても可いと思ふて石塔の前に据置きましたぢや。さ、さ、回向をなされ、いづれも久しい馴染ぢやな。」とほろりとした。聞くもの〻袖も時雨れつ〻……

「——横濱の、え〻、叔母の娘、姉妹でね、……叔母の娘は可笑しいんですが、叔父は私なんぞ顔も覺えないうちに、今の墓に眠つてるんです。妹の方は——來る時、傍を通りました、あの遊廓で藝妓をして居て、此の土地で落籍されて、可なりの商人の女房に成つたんでしたつけ。何か商賣上もくろみがあつて、地方を了つて、横濱へ出て失敗をしましてね、亭主も亡くなつて、自分で藝事を教へて居ました。茶だの、活花だの。それより、小皷を打つてね、此の方が流行つたさうです。四五年前に、神田の私の内へ訪ねて來た時、小皷まで持參して、「八郎さん一調を。」と云ふぢやありませんか。しかも許しもの〻註文です。「何、私と一調だ、可からう。さあ素裸に成りたまへ、一丁組まう。」と云つたもんだから。——勿論、年増だが別嬪だから取組んでも可い料簡かも知れません……從妹め、怒つたの怒らないの、其切り出て來ない——音信不通同樣で、——去年急病で亡くなりました、が其の節は、私は大阪へ行つて居ました。

あ〻、信州の姉の方ですか。——これも藝妓で方々を流轉して、上田の廓で、長唄か何か師匠をして居る、此の方は無事で、妹の骨を拾つたんです。

横濱の新佛が燐火にも成らずに、飛んで來て居る——成程、親たちの墓へ入つたんだから不思議はありませんが、あの、苔が蒸して上の黒い、小さな先祖代々の石塔の影に、眞新しい白い塔婆で、すつくりと立つてたのには一寸面食ひました。——「八郎さん相撲……」と今にも言ひやしないかと思つて、ぶる〳〵としましたよ。あれと取組むのは當分恐れます。」

寺の歸途に、八郎が私とお悦に恁く話した。

雪女郎の柳を欄干から見る、其の袖もか〻りさうな、大川べりの料亭一柳で晝飯を濟ました。

で、川通りを歩行きながら、ふと八郎の覗込んだのが、前に言つた骨董屋の飾窓だつたのである。

其の花瓶だが、私は陶器など一向で……質も銘も彩色も分らない。總地の濃い藍に、桔梗、女郎花、薄は言ふまでもなく、一面に秋草を描いた。其の葉の透間、花の影に、墨繪の影法師で、ちら〳〵秋の蟲のやうなのを、熟と視ると、種々な露店の黒繪具である。また妙に、

食ものばかり。土地がらで、鮨屋、おでんはない。飴の湯、かんとう焼、白玉焼、葛饅頭、粟の餅、……餡を串にしたのださうだが、蒲焼など、ひとつ宛、唯其の小さな看板にだけ、賣名呼名をかいて、ほんのりと赤で灯が入つて居て、其の灯に草の白露が、ほろ〳〵と浮く……

「姉さん、これは夏場此の川通へ出る夜店そつくりだね。」

八郎の家は、すぐ此の近所だつたさうである。

「たつた一度だつたが、姉さんと一所に歩行いた――」

「眞個ね、……夢のやうだけれど、植木屋の花の中から見た所か知ら、そして月夜のやうだよ。」

眞中に手がついて、見ると、四角な釣瓶に似て、然も影燈籠の意匠らしい。

「一寸慾いなあ。」

「慾いの？」

「うむ。」

「慾いものはお買ひなさいよ。」

「値が何うも。」

「聞いて見ましようか。……私も些と持つて居る。」

「串戯ぢやあない。まだ給金も受取らないし、手が出せないと極りが悪いや。」

「八さんは、それだから可厭さ、聞くだけ聞くのに、何構ふもんですかね。」

八郎は其時十歩ばかり逃げるやうにしたのに、お悦はづん〳〵入つた。少し手間取つたが、胸を反らして出て來た。

莞爾して居る。

「何うでした。」

「幾干らだと思ふ。――お思ひなすつて、槇村先生。」

「さあ。」

「分らない。」

「五百圓。」

「えゝ。」

「……モ、七百圓もするんですが、うしろに一寸疵があります、緋目高一疋ほど。ほゝゝ、ですから、たゞそれだけで――百圓と云ふ處を……だわね、最も諸侯道具ですつて、其をお負け申して……九十圓。」

「買はう。」――

言つた通り、荷造りを頼むなり、受取るなり、――樂屋へは持つて行けないから――最う一度來るとして、それから三人で舞臺に向つた。

樂園と云ふのださうである、諸侯の別業で、一器、六方石の其の光澤水晶にして、天然に籠の形をしたのがある。石燈籠ほどの臺に据えて見事である。其ほか建築などは、いづれあとから擬へたものであらうが、築山、池をかけて皆揃つて居る。が、いま其の景色を言ふ場合でない。

表入口を松原越の南の町並に受けて、小高く、こゝに能樂堂がある。

八郎は稚い時、よく出入をして知つて居るので、其の六方石を私に教へようとして、弾かれたやうに指を引いた。直ぐそれから池の石橋を一つ。楽屋口へ行くと、映山紅、櫻の根に、立つたり跼んだり、六七人むく〱と皆頷いて出た。眞中に、尖つた銀杏返で胸を突出しながら、額越に熟と此方を覗たのは、昨日のお久といふ人で、其の兩鬢から躍り出した二人の少年が、「久の息子です、伯父さん。」「伯父さん僕です。」「橘さん、久の娘の婿ですよ。」と續いて云つたのは、色の白いにやけた男で、しよたりと裾長に、汚い板草履は可いが、青い友染の襦袢の袖口をぶらりと出して居る――踊つた――此が蒔繪師で…… 從つて少年たちは、建具屋と錺屋の弟子だから印半纒腹掛でゞも居るか、と思ふと、兀ちよろけた學生服、徽章無の制帽で、丸顔で色の眞黒な、目のきよろりとしたのが、一人はベースボールの小手を嵌めた手を振るし、就中一人ロイド縁の大目金を掛けたのが、チユーインガムをニヤチヤ〱と噛みながら、「久の息子です、伯父さん。」「伯父さん僕です。」「ごほん、……はじめまして、はい、久の主人でやして。」大古の黒の中山高帽を脱いで、胡麻鹽のちよぼりとした髯を拔きながら、挨拶したのは、べんべらもの丶被布を着て、煤くすぶりの縮の長い中位な頭巾を提げて居る。「御先生様。」「はい、大先生様。」と割込んだ媽々衆が二人、二人とも小兒を肌おんぶをした處は殊勝だが、其の一人は、負つた他に、兩手に小兒の手を引いて居た。

「あんさん、鐵者の人――此方は蜑家さきの兄の家内たちや――見物をさしてたあせ。……ほんに、あんさんのお庇で……今日と云ふ今日は、私は肩身が廣いぞね。」

時に、婦人にかけては、恐らく世の仁者だと稱へられる私でさへ、此には辟易したのである。

ふとお悦を見ると、額の斑あとが颯と濃化粧を切つて、その色はや丶蒼ざめた。

愕然、茫然、啞然として立竦んだ八郎が忽ち恭しくお辭儀をして

「誰方も御見物は木戸口から願ひます。」

と言つた。

「分りました。――兄さん、私にまかせてね、分りましたよ。あなたは默つて居る事……可ござんすか。さあ〱誰方も入らつしやい。――御案内……ツて入ッしやいッ。」

と冴えた聲で手招きをしながら、もう石橋を飄然と越えて、先へ立つて駈出すと、また柔順な事は、一同ぞろ〱ばたすたと續いて行く。

八郎は吻と息して、

「何とも、彼とも、ものに譬へやうがありますまい。――無理解とも無面目とも。……あれで皆木戸錢の御厄介です。またあの蜑母と云ふのがね、啞を刎ねて其の饒舌る事饒舌る事。追從笑ひの大口を開くと齒茎が鼻の上まで開けて、鐵漿の兀げた亂杭齒の間から咽喉が見える、怯えたもんですぜ。私が九ツ十ウくらゐの時まで。其奴が伯父伯母の姪の婿の嫁入さきの伜の孫の分家の新屋だと云ふのを、ぞろ〱と引に

卒して、しなくも可い、別院へ信心參りに在方から出掛けて來て、其の同勢で、久の實家だと泊り込むんです。草鞋を脱いだばかりで、草臥れて框から膝行込むのがある、他所の嬰兒だの、貰はれた先方のきやうだい小兒が尿を垂れ散らかすのに、負ふと抱くのが面倒だから、久を連れて來ない事があります。父親の方が可愛がつて片時も離さないと恁う言ふ言種でね。……父も祖母も、あれに當られると思ふから、相當に待遇するでしよう。いゝ事にして、同勢がのめずり込む、臭いの汚いの、煩いのつて――近頃まで私は、煩つて寢る時と云ふと、其の夢を見たんです。」

いや、何とも申しやうのない處を、木戸口をまはりに、半身で、向ふからお悦が、松を小楯においで〳〵を合圖した。

勿論八郎を呼ぶのではない。

「おいでなさい。――御退屈でしようが。お席が出來たやうです。あの人の事だから、今の連中と一所には決してしません。」

「そんな事なぞ。……私は樂みして居る。今日の天人の手は白いでしよう。」

不意を打たれたやうに、此の名譽の能職は、ふと默つた。外套から、やがて附手を、片手で其の手首を、然もいたはりさうに取つて、据えると、扇子持つ手の甲を熟と重たげに視て、俯向いて言つた。

「未熟ながら、天人が雲に背伸びはしますまいが、此の手首は白いどころか――六つ指に見えなければ可いと思ふんです――」

と、もの寂しさうに首垂れた。

「いづれ後程。」

樂屋口の板廊下には、松の蔭に、松の蔭に、羽織、袴が。おゝ、麻上下も立交る。

舞臺では間狂言の高聲が、見物の笑ひとゝもに板に響いた。

八

私は、こゝに橘八郎の舞臺については徒に記事を費すまい。草の花に露店の繪の花瓶を寫した、陶器に對すると同じ智識の程度では專門の能職に對して氣の毒だと思ふ。

たゞ、幸ひ、……いや推量の如く、お久と云ふ人たちとは席が離れて居た。最も殆ど滿員である。お悦と取つたのも、四人席を他と半ば分けて、歩板に附着いた出入に近い處であつた。

橋かゝりに近い、一の松の陰あたりに、弓代の見えたのが、單に天降る天人を待つ間の人間の花かと思ふ。

――なう其の衣は此方のにて候、何しに召され候ぞ――

幕は揚つた。揚幕の霞を出づる、玉に綾なす姿とゝもに天人が見はるかす、松にかゝつた舞臺の羽衣の錦には、脈打つ血が通つて、おほ空の富士の雪に照榮えた。

八郎の其の化け方も不思議だが、氣をつけて見ると、成程、もう其の時からして專念に舞臺を見て居るものは數うるほどしかない。最も

謡本を手にしないものも、稀である。

——涙の露の玉かつら、かざしの花もしを〳〵と——

と云ふ頃は、低聲であとをつけるのが、ぶつ〳〵ぶつ、ぼう〳〵と鳴いて、羽の生へたものは、蚊も、蜂も、天人であるかの如くに聞こえた。

——迦陵頻伽の馴れ馴れし、聲今更に僅かなる、雁の歸り行く、天路を聞けばなつかしや、千鳥鷗の沖つ波、行くか歸るか、春風の——

其のあたりからは、見物の聲が章句も聞こえて、中には月金の上へ謡本を突上げるのがあり、身動きして膝を敲くのがある。あゝ、然も聞け——お久と云ふ人の息子が一人、あとをつけて謡つたのを。

——シテ「いや疑は人間にあり、天に僞りなきものを——

氣の所爲か、チョッと舌打をしたやうに思つたが、それは僻耳であつたらう、やつと靜々と、羽衣を着澄して、立直つたのを視て、昨夜紅屋の霜に跪いて、羽織を着せられた形に較べて、ひそかに藝道の品と藝人の威を想つた……時である。お久といふ人が、席でヌッと立つて、尖つた銀杏返で胸を突出して正面に向合つた、途端であつた。立籠む霧が艶なる小紋を描いたやうな影が、私の袖から歩板へ衝と立つて、立つと思ふと、つか〳〵と舞臺へ上つた。其の、其のお悦の姿が、くつきりと稍小さく見えた時と、重り合つて、羽衣の袖が扇子とゝもに床に落ちて、天人のハタと折敷く、其の背を、お悦が三つ四つ平手で打つた……と私は見たが。……

「急病だ。」

「早打肩(腦貧血)だ。」

「戀の怨みだ。」

「激情の報だ。」

と急遽囁き合ふ聲が彼方此方して、天井まで湧返る響を、却つて、瞬間、寂然とする。

もう其の時、天人は、轉んだ踊子が、お母さんが抱かれるやうに、お悦に背を支えられて、しかし靜に、橋かゝりを引いて行く。……一の松、二の松、三の松に、天人の幻が刻まれて、其の影が板羽目に鏡を映しつゝ、藻抜けて消えたやうなシテの手に、も一度肩を敲いて、お悦が拾つて來た扇を渡したのが幕際であつた。

幕は消して取つた。

同時に、少し横なぐれに成るまで、身に振を加れて、今度は、友染の褄を蹴て、白足袋で飛ぶやうに取つて返すと、お悦が、私の手を取るが迅いか、引出すのに、眞暗に成つて、木戸口へついて出た、其の早い事、私が第一に目についたのは、靑いやうな駒下駄の鼻緒で、お悦は最う自分のを、自分で拔いて取つて、私の下駄をポンと並べた。

其よりして松林のたら〳〵下りを一散に驅出した。

「御免なさい、先生——八郎さんに逢ふまでは何にも聞かずに下さいましよ。」

「？……他國ものです、方角が分りませんから、何事も貴女次第です。」

町も此の邊は場末らしい。松を透いて小高く能樂堂の電燈が映すから、あのまゝ、潰れたのでも崩れたのでもない。が、雷か、地震か爆發の前一秒を封した魔の殿堂の趣して、樂園の柵も且つ霜柱の如く俤に立つのを後に、しばらくして賑な通へ出た。

「少し此處に隱れて居ましよう。」

落人の體である。其の饂飩屋へ入つた時は、さすがにお悦が「お水を、お水を。」と云つた。そして、立續けに煽つて、はじめて醉つたやうに、ぽつと血の色が顏に上つたのである。

「何にも言はないかはり、私は飲みますよ。」

「澤山めしあがれ、……あとで、又御馳走を。」

――電話で、旅宿を――それから呼出しだつたが紅屋へ掛けた。八郎は勿論歸つて居ない。栗屋に居る筈はなからう。居ても其處を尋ねる數ではないから、……再びお悦の導くまゝに――

恁くて川通りの骨董屋へ來たのである。

果して八郎は此處へ匿はれたのであつた。

微妙な靈感と云つてもいゝ。……此處へ見當を着けたお悦が、まだ驚いた事には、――紅屋で振舞つた昨夜の酒を、八郎が地酒だ、と冷評したのを口惜がつて、――地酒の然も、「劍」と銘のある芳醇なのを、途中で買つて、其を角樽で下げて居たのであるから。

掛けたか、掛けないやうに、お悦は、骨董店の椅子に腰を掛らして、

「そんな服裝で、花瓶を持つて、一體何方の方へ行つたでしようね。」

「えゝ、大橋の方へ、する〱とな。はあ……」

お悦が莞爾して、

「此の人通りぢや身投でもありませんね。」

亭主の顏を見よ。其の驚いたのへ引被せて。

「湯呑を一つ貸して下さい、お茶碗でも。」

「はあ〱。」

芬々薫る處を、波々と、樽から酌いでくれたから、私はごく〱と傾けた。實に美酒の鋭さは劍である。

「お樂みでございますな、貴女樣もお一つ如何で。えへゝゝ。」

と、自棄に、口惜しさうに、もう一つ出した茶碗へ、また充滿に樽の口をつけた。

「お酒だけは一滴も不可ません。――旦那めしあがれ。……御馳走樣。ほゝゝほゝ。」

九

橋手前辻の角の、古ぼけたが、店並一番の老舗らしい菓子屋へ入つ

て、露臺へ立ちながら、

「一寸……あゝ、番頭さん、お店の方もお聞きなさい。私ね、此の頃人に聞いたんですがね。お店の仕來りで、あの饅頭だの羊羹だの、餅菓子だのを組合せて、婚禮や、お産の祝儀事に註文さきへお配りなさいます。」

「へい、へい。」

「あの、能の葛桶のやうな形で、青貝ちらしの蒔繪で、三巴の定紋附の古い器が澤山ありますね。私たちが豆府や剌身を買ふやうに、なんでもなく使つて居らつしやるやうだけれど、塗といひ、蒔繪といひ、形といひ、大した美術品とやらなんですとさ。」

「へーい、成程。」

「佛蘭西のパリイの何とかつて貴族の邸の應接室で、ヴイオリンですか、樂器をのせる臺に成つて居るんですつて。」

「へーい、成程。」

「提灯を一つ貸して下さいな。」

「へーい、成程。」

「其處の道具屋さんで借りれば可かつたのに、つひうつかりしたもんだから。」

「へゝい、成程。——どちら様で。」

「別院傍の紅屋の家内ですがね、どちらだつて構はないぢやありませんか。」

お悦は澄まして、其の定紋つきの提灯を下げて前へ立つと、一軒家の傍を、石段づたひに、ぐいと下りた。大橋の橋杭が仰見た山の塔の高さほどに下から仰がれる、橋袂の窪地で、大柳の根の處である。

「此處が暗いんですからね。——一寸見たい事があるんです。」

片側川端の窓の燈は、お悦の鼈甲の中指をちらりと映しては、圓髷を飛越して、川水に冷い不知火を散らす。が、屈んで、差出した提灯の灯で見ると、あゝ、其の柳の根に、叩きつけたやうに成つて、秋草の花瓶がくわら〳〵と壞れて居た。石に化した羽衣を、打碎いたやうである。その斷片の處々、女郎花を、桔梗を、萩を、川水が颯と脈を打つて蒼白い。

「御覧なさい。こんな事だらうと思つたんです。小兒の時、あの人はこの美しい柳に魅入られたんですか、何ですかね、ふら〳〵として、幾度も此處で死なうとしたんですから——いゝえ……」

と優しい聲して、

「大丈夫、却つて身がはりに成つたでしやうよ。此の花瓶がですよ。でも、あの人の無事のお祈りのために、放生會をして行きましやう。昨日は大きな鯛を料理ましたから。」

持てとも言はず。角樽を柳の枝に預けると、小褄をぐい、と取つた緊つた足の白いこと。——姿も婀娜に、流へ張出しの板を踏むと、大川の水に箱造りの生簀がある。

「や、其を放すんですか。」

「えゝ、一柳亭のですかね、する事は先へして　あとで掛け合つた方が捗取りますから。」

仲上つて覗いたが、綱で結えたまゝ、錠は下してない。

踞んで、提灯を翳したと思ふと、

「あ、可厭な。」

と云つた。

「大な鰻が居ますか、居ますか、鯰。」

「お退き、お退き――」

と生簀を見詰め、頭を掉つて、

「いゝえ、私が何かしやうとすると、時々目の前へ出て來るんです。……裃を着た、頭の大きな、をかしな侏儒ですがね。」

私は思はず後へ退つた。葉は落ちつゝも、柳の茂りで、瀧に巻込まれる心持がした。氣の迷と思つたが、實はお悦が八郎を引ばたいた瞬間にも、舞臺の端をちよこ／＼と古い福助が駈けて通つた。

「可厭だつたら。何だい出額助。」

聲とゝもに、颯ともつれた鬢を拂つて、横に提灯の柄を口に啣えると、まくり手に二つ三つ生簀を揺つて、どぶんと水に浸した、鯉の刎ねる隙もない。魔の如き大きな黒い檣杭が、揃つて、並んで、どぶんどぶん、どぶんと餌を返した。

「さあ、參りましよう、お待遠樣。八さんの居所は、大抵もう知れました。」……

「……居る、居る。居ますよ。」

提灯をフツと消す……。蠟燭の香を吸つて消える、紅い唇を其のまゝに、私の耳に囁いた。

八郎の菩提寺の潜門を入つた、釣鐘堂の横手を、墓所へ入る破木戸で、生垣の前である。

「ほら、扉も少し開いて居ますわ。――先生ね、あなたね、少し離れた處で、密と樣子を見て居て下さい。……後生ですから。」

「お指圖通り。」

私も此處は聲を密めよう。

「兄さん、兄さん――」

「うーむ。」

「餘りつひ通りな返事だことね、うーむなんて。」

「うむ、だつて。」

「最う些と驚かなくつちやあ。……いきなり、お能の舞臺から墓所ぢやあゝりませんか。其處へ私が暗中に出たんだもの。」

「何だか來さうな氣がして居た處だからね。」

「えゝ、私も此處に兄さんが居さうな氣がしたんですよ。兄さん、御

堪忍ね。あれ、煙草を飲んでるんですね。」

「燈を手探りで、恁う冷い背苔を捜したらね、燐寸があつたよ。――今朝忘れたものらしい。それに附木まであるんだ。あゝ、何より、先生は何うした、槇村さんは。」

私は約束で息を呑んだ。

「先生はね、とに角、雪代がおともをして。おもてなしをして居ます。」

嘘を吐け。――

「何處で。」

「一柳亭で。」

「また一柳かい。いや、それにしても可羨しいな。魂を入かへたいくらゐなもんだ。――最も、魂は何處へ飛んだか、當分解らないから、第一其の在處を探してかゝらなけりや成らないけれどね。」

「だから、お墓所へ來て居るぢやありませんか。」

「まあ、そんなものか。――あゝ、それにしても羨しい。」

「串戯はよして、ほんとうに兄さん、堪忍してね。」

「何をさ。」

「だつて、あんな處で、兄さんを打つたりなんか。」

「いや、其の事なら、却つて禮をいふ。……當然のことのやうだ。何故だか、妹の事なり、何なり、誰かに引撲かれさうな氣がして成らなかつたからね。――一體、女形の面裡からものが見えるッて事はないのに、駢指が眞向ふへ立つたんだ。」

「さあ、其の事ですよ。『餘計な身寄は駢指のやうなものだ。血も肉も一つ身體に成つて溶け合ふのは、可愛い戀しい人ばかりだ。』ッて……あら、煙草を喫んでるから、ちら／＼顏が見えて、いくら私でも極りが惡い。」

「何、構ふもんか、全くそれに違ひないんだ。」

「兄さん屹と然う。」

「確かだ。」

「そんなら、何故、お久さんが眞向ふへ立つたつて、何故、打たれさうな氣がしたりなんかするんです――それは屹と世間體で、妹や、その親類の、有象無象に冷くつては人に濟まない、と思ふからでしよう。」

「世間なんか何うでも可い。人間同志だからね。しかし舞臺ぢや天人に成つてるから。」

「天人なら、餓鬼……亡者を見ても、畜生……犬を見ても、皆な簪の花の一つだと思はなければ成らないかも知れませんね。そんなら、何故、人間そのまゝの時、樂屋口で、お久さんの娘の婿が、淺黄の袖口をびらつかせた時、その、たゝき込んだ張扇とかで、人の大切な姑をたゞで水仕事をさせ、拭きまでして、姑に苛めさせた上、トラホームが傳染るから實家へ歸した、横ぞつぽうを撲かないんです。私はね撲けば可いと思つた。撲いて欲しかつたよ。兄さん、私はね、弱い

優しいおとなしい兄さんしか知つて居ません。――十四で亭主を持たせられた時分だつて、あゝ、兄さんがもう少し強かつたら、亂暴だつたら、惡たれだつたら、と思はない事はなかつたんです。――

藝事で氣が強く成つたんでしようね。――

昨夜は別れてから十何年ぶりかだし、それだし、昨夜くらゐ、善知識とも、名僧とも、ありがたいお說敎。神佛のおつげと言つては勿體ないかも知れません、夜叉、惡魔の御託でも構はない。あんな嬉しい話を聞いた事は生れてからはじめてゞす。だつて、餘計なものは肉親も駢指でしやう「血と肉と一つに溶けるのは、可愛い戀しい人ばかりだ。」といふんでしやう……」

「私は信じるよ。」

「信じますね……確かですね――然うすりや、私かつて、內の亭主は駢指です。」

私は舌を捲つた。

「お待ち、お待ち。――それは藝の上の話だよ。うざう、むざうに集られると、從者ぢや居られない、藝の師匠で、出稽古に信玄袋を持つて廻らなけりや成らないといふんだよ。」

「舞臺だけの役者だつて、私は、兄さんの羽衣とかの天人の顏を見て居るより、冶めりんすを引換くか、駢指の譬喩を聞く方がどんなに嬉しいか知れやしない。彼處で、あの羽衣の姿で、面で、雲から降りた其のまゝで、何千かの見物に、あの譬喩をしたら、どんなにかいゝ心持だらうのに――たのに、冶めりんすは引換かないし、じれつたくつて、自烈たくつて堪らない處へ、また餘り姿容が天人に成つておいでだから、これなり、ふッと何處かへ行つて了ひはしないだらうかと、夢中で血迷つて、留めようとして、ハッと思ふと、舞臺の邪魔をした私だから、私まで、駢指だと兄さんが言ひさうで、かつと口惜くもなるし、癪にも障つたし、したもんだから、つひ打つたりなんかして。」

「いや、最もだ。藝に達して、天人に成り澄まして居れば、羽衣さへ取返せば、人間なんぞにかゝはりはないのだけれど、まだ何うも未熟でね、雜念が交るから、正面を切つて佐の上でもきつぱりと行り切れないんだ。第一、はじめ、私は不意にお母さんが出て來たかと思つたよ。お久に對する處置ぶりが間違つても居るために。――丁ど裸體のあの邊で、お母さんに抱かれて能を見た事を覺えて居るから。はつと思つ――其が姉さんと氣がついた時は、私は、斬られるかと思つた……すばつと出刄庖丁でさ。……舞臺へ倒れた時は、鯛に成つたと思つたよ。此方より鮭魚だ。赤地の錦で、鏡板の松を斜に泳ぐ。……いや、もつと小さい。緋丁斑魚だ。緋丁斑魚結構。――おゝ、狩は出來た。姉さん、姉さん、いゝものを持つて居るんだね。」

「何處でも構はず、息づきに、逢つた處で、飲ませやうと思つてさ。」

「頂から――茶碗がない。」

「まさか、厨裏へも、ね。」

「飛んでもない、いまは落人だ。――あゝ、好いものがある。別嬪の

從妹の背綴です。かりに小鼓と名づけるか。此の烏調で遣つけよう、鼓不可いかな。」
「あゝ、好きになさい。思つた事をしないで何うするもんですか、鼓に成つたつて留めやしない。」
「其の勢で――と龕は何うだらう、落葉を集めて。」
「すぐに間に合ひますよ。」
「さきへ、一口遣つけてと。……ふーッ、さて、恁う度胸の据つた處で、一分別遣つゝけよう。私のこんな料簡ちや、舞臺に立てば引摺かれるし、謡の出稽古はしたくなし、……實は、みつしり考えようと思つてね、此の臺所へ遁込んだんだが。」
「よく、樂屋で騒ぎませんでしたね。」
「騒ぐ間がありやしない。また騒いだ處で、玄人の連中は、いづれ東京へ出れば世話に成らうと思ふから、そつとして置いたのさ。其處は流儀の御威光です。」
「何が又口惜くつて、あの花瓶を打缺いたんです。」
「最う見て來たのか、疾いなあ、天眼通だ。……あれはね、何、買う時から打壊すつもりだつたんだよ。あの繪に、秋草の中に、食るものばかりの露店の並んだのを見て、ふら〳〵と成つた――川通りの夏の夜店へ遊びに出ては、一軒一軒指を啣えて欲しい〳〵と凝と見たいさ。買へないだらう。あの粟餅のふかし立だの、白玉燒の餡子のはみ出した處なんざ、今想出しても、唾が垂れる。小僧、立つな〳〵見て居て腹は満くならない、と言はれた事さへあるんだから。
其時分と、自分のさもしい根性を一所に叩き破つたのだよ、――一度姉さんとお行いた時、何か買つて食べさしたいと思つたが、一錢あつた……狀あ見やがれ、じひたがね、大神のあの御郷の傍に、その駄菓子屋があつて、豌豆を賣つて居た。」
「覺えて居ますよ。」
「袋で持つと、プンと臭い。蒸見でる、と言つたら、浚つて食へと言つた。癪に障つて、打ちまけたら、お前さん、食べたより嬉しいと言つたぜ。」
「えゝ、覺えて居ますよ。」
「場所が場所だし、念ばらしに一所に打まけたんだよ。」
「其の癖ですよ。何だつて思ふまゝにするが可いんです。」
「勿体い、らむ其處で、分別も糊もつきさうだが、墓の前で、これは火鉢だ。德利を灰に突込むのさへ、三昧燗と云ふものを、骨瓶の酒は何だらう。まだ些とも通らないが、あゝ、旨い。」
「少し強く焚くと、灰が立つて入るもの。」
「嫌だなあ、お挽さんも。此の場合に、灰が飛込むなんぞ何うするものか。しかしお志は頂戴する、嫌は優しいな。」
扇子を開いて蓋をした、紺青にきら〳〵と金が散る、杳に火影の舞扇、……極彩色の幻は、あの、花瓶よりも美しい。」
内證の焚火は、骨瓶の下に伏せたに、右往左往遣つたが、何は反らしたの

であらう。青く潜つて、ちら〳〵と婦の褄をなぶり、赤く立つて男の黒小袖の膝を弄んだ。

「ふーツ、いゝ酒だ。これで暮すも一生だ。車力は出來ず、貯は買へず、——姉さん、死人燒の人足の口あるまいか、死骸を燒く。」

「ありますよ。」

「……。」

「市營なんのつて贅澤なのは間に合はないけれどね、村へ行くと谷内谷内と云ふ處の尼寺の尼さんが懇意ですがね。其の谷戸の野三昧なら今からでも。小屋に爺さんが一人だから。兄さんが火箸を突込めば私が火吹竹を吹く。……二人で吹きおこしたつて構はない。」

唯透し見ると、鬢の毛が木の葉にこぼれて、頰を地ずりに、瓶の下を吹いた。が、いつかくるりと裾を端折つた、長襦袢は、土にこぼれて、火とゝもに亂れたのである。(註。二人して火を吹くは燒場なりと云ふ俗信あり)

「些とも構やしない、火葬場ですもの。……寢酒ぐらゐは何時でも飮ませる。」

「面白い。いや、眞劍だ。——天人にはまだ修業が足りない。地獄、餓鬼、畜生、三途が相當だ。早い處が、舞臺で、伯龍の手から、羽衣を返された時、博覽會の饅頭の香氣がした……地獄、餓鬼、畜生、お悦さん、」

「えゝ、然うして、強くなつて、他が羽衣を奪らうとしたら、めそ〳〵泣かないで、引ぱたかなくつちやあ……」

「二人は雌雄の鬼だが……可いかい。」

「大好き。」

「家は?」

「駢指を切るんです。」

「世間は?」

「青めりんすを打撲くんです。」

「——姉さん、尼さんは懇意かね。」

「小屋の爺さんとも。」

「行かう。」

「行きましよう。」

「槇村の知らないうちに——何しろ、さしあたり行く處は、——何處にもない。」

「あれ。」

「え。」

「來た、來た、來た、また來た、煩い、煩い、煩いでは、チヨツ福助。」

婦が、這搦まるか、白脛高く裾を拂ひ、立つて縋るか、はら〳〵と兩袖を振つた婦に、ぱつと舞扇に火が移ると、眞暗な裏山から、颯と木の葉おろしするとゝもに、火を搦めたまゝ、羽搏いて扇が飛んだ。

「あれえ、火事」

「飛べ、獅子」

と言ふとゝもに、手鍊は見えた、八郎の手は扇子を追つて、六尺ばかり足が浮いたと思ふと、宙で留めた。墓石臺に高く立つて、端然と胸を正したのである。扇子は炎をからめて、眞中が金色の銀杏の葉のやうに小さく殘つた。

墓所の暗夜——

「お悦さん‥‥」

「‥‥‥‥」

「‥‥火の羽衣を舞はう。もう一度舞臺に立つて、人間界に降りた天人を、地獄、餓鬼、畜生、三途まで奈落へ墮して、‥‥と云つて、自殺をするほどの覺悟も出來ない卑怯ものだから、冥途へ捷徑の燒場人足、死人燒に成つて、膽を鍛えよう。それからだ、其の上で‥‥

——(愛鷹山や富士の高嶺かすかになりて、天つ御空の霞に)——

羽衣が三保の浦に蹉跎くか、何うかを見るんだ。しかし、お悦さん、‥‥。」

「兄さん、口で云ふ事は眞個に行らなくつては可厭ですよ。」

「勿論——しかしお悦さん‥‥酒はこぼれやしまいね。」

十一

私と云ふものは、——こゝで恥を云ふが——(崇拜をして居るから、先生と言ふ。)紅葉先生の作新色懺悔の口繪に、墓參の婦人を、背後の墓に小袴の脇をついて覗掛つて、熟と視て居る人物がある。先生の背面だと云ふ風說があつて、男振が如何にもいゝ。

——男振は論じない。私の此の場合が一寸其の趣に似て居た。困つた料簡方の男で、其處でいゝ心地に成つて、石塔に肱をついて、塔婆の陰から覗いたうちに、眞暗に成つたから、ハッと思ふと、誰も居ない。——とろりとして夢を見たのであらうか。

寺の屋根も、此の墓場も、殆どもの〻黑白を分たない。が、門の方の峯の森から、釣鐘堂の屋根に霧を辷つて來たやうな、落葉の褥を敷いた、青い光明は半輪の月である。

枯葎を手探りで、墓から迷つて出たやうに、尙ほ夢心地で、潜門を——何となく氣咎めがして——密と出ると、覺えた路は唯一筋、穴の婆さんのあたりに提灯が一つある。

——來る時此の裏の籔を潜つても、同じ墓所へ行く、とお悦が言つた——はゝあ搦手から出たかと思ふ、其の提灯がほんのりと、半身の裾を映す‥‥褄は彼の人よりも若く、しつとりと、霧に蔦もみぢした紅の内端に細さよ。

雪代であつた。夢ではない。

「あゝ、先生、母から自動電話で‥‥「大急ぎて此方へお迎ひに。」‥‥と云ふものですから。——すぐ自動車が間に合ひましたの。」

母——其のお悦は、しかし、電話を掛け乘てにして、八郎とゝもに行くべき處へ去つたのである。

一柳亭の奧座敷で、雪代がしめやかに話した。

「……眞個にこまつた人ですの。申譯はありません。時々、魔が魅したやうになりますんです。でも、惡魔ばかりではないと見えましてね……今日なぞは、舞臺で、母があの狂氣を行らないと、小父さんは、壯士のやうな人たち大勢に打たれる處だつたらしいんですよ。——橋がゝりの際の。私の居まはりにも、羽織袴だの、洋服だので。合圖をかはして居ました。氣がついて、はつと思ひました時が、母のあの騷ぎなんです。——歸りがけにね、大勢ぞろ〳〵と步行きます人中に、私も交つて居るとはお知んなさらないものですから。……「へなちよこ伯父が何だい、あんな節のない謠なんか、唯口を利いてるやうだ。東京の謠は場違ひだな、此方から緣を切る」と、お久さんの息子さんたちが言つて居ましたよ。お久さんは、しく〳〵泣いて居なすつたやうでしたけれども。………

八郎さんの奧さんに——いゝえ、先生、それは大丈夫でしようと思ひます……昔から、あの、店の、紅屋の福助の人形に邪魔をされますから。

電話でも、「あの張子を、奈うしろ向きにするか、針で目を潰して出ておくれ、今度こそは、屹と頼んだよ。母さんの頼みだよ。」と言ひました。けれども、私は決してそれはしませんでした。

ですから、谷內谷內——えゝ、おんなじ字を重ねますんです。谷內谷內の野三昧で、兄さんと死骸を燒くんでしよう。其は眞個で、そうして、それだけだらうと思ひます。

親類うちに、お產なぞありますとね、氣が向くと、京都、岡山までも飛出して、二月三月歸らない事が度々ありました。お產の世話なんかするのも、死人燒をするのも、そんなに違ひやしませんでしよう。」……

死人を燒くのと、產の世話と、そんなに違ひはしないと言ふ……此の母にして此の娘である。……雪の下を流るゝ血は、人知らぬ霧に燃ゆる。たとへば白魚に緋櫻のこぼるゝ如く。——

これに寄生蟹を見て、海底の砂礫の影を想つたやうな空なものではない。

聞く處に從ふと、紅屋の內儀の貞操は、かゝつて、おでこの古福助の燦の頭にある。心細い道德だが、ないよりは可からう。八郎に取つてもお久といふ人の一類と交涉を持たなくては成らないのなら、寧ろ野三昧の人足の方が爭かも知れない。況や、亡者を燒く烈々たる炎には、あの雪の膚が脂を煮ようものを。朱脣に煉炭を吹かうものを——

私にしても假に此の當代夫人と……

「でも、小父さんは氣が弱いんですね、——あの、お久さんの顏の下にが三寸ばかり、きれいで似て居るつて、」

耳朶をほんのり染めつゝ

「私の此處へ——觸れて泣いたんです。淚がね、先生、隨分泣いて、まだ、しつとりとして居ますわ。情の迫つた涙ですもの、着換へるのが惜いんです。」

私は危く其の背に手を當てやうとした。

翌日、朝、汽車で立つ時、雪代さんが、ひとり衣紋を正しく送つた。

最う一人中學の、くちや〳〵の制帽と服で、鍵裂だらけで、素足に高足駄を穿いた勇壯な少年がある。酒の席などでは閑却されたが雪代夫人の弟である。

「……先生、學校でも、教師も生徒も知つてるんですよ、先生の來た事を。僕、お話をきゝたかつたんだけれど、此の姉なんぞが邪魔にしをつて……」

「邪魔にはしませんよ。」

「何いつてやんでえ！おかめ。」

「あゝ、もう出ます——先生、くれ〴〵も八郎さんが言つてゞした。……ほかにお見せ申すものはありませんが、是非、白山を見て下さいつて。」

「先生、一番近いんぢやあ、布村つて驛を出て、約千五百メートルばかり行くと、はじめて眞白な頂が見えますから。——いえ、谷内谷内は方角が違うんです。」

私は學生に手を伸べた。

「君、握手しよう——姉さんは、よその奧さんだから。」

「まあ、可厭ですこと……」

學生に遊說する私の學問は、學校の名譽のために默つておかう。

白山は、瑠璃色の雲間に、雪身の龍に玉の翼を拔つて翔けた。輕く觸れむとするものには、其の羽毛が一枚づゝ白銀の征矢に成つて飛ばうが、其の暗く雲に包まれた麓の底に、一ヶ所、野三昧の小屋があつて、二人が火を焚いて居さうで成らない。

八郎はまだ歸京せぬ。

——細君は煩つて居るのである。

(三元)



色情文化

片岡鐵兵

山が動いた。野が動いた。森が動いた。家が動いた。電柱が動いた。一切の、風景が動いた。この氣味惡い經驗から、私の村の新しい文明史が始まつた。と云ふのは、怪談と文明とが同時に村を襲つたと云ふやうな解剖を語るのではない。新しい鐵道が敷設されて村にもステエションが建ち、朗かな空の下、青い草の上を、毎日何回か、汽車がとほり出したのだつた。それは春のことで、山國の荒地を埋める花やかな植物の間を、ペンキや油煙の匂ひが微風と一緒に纏れた。霞の奥には、他國者の鐵と石炭とがふざけ散らして居る、さう云ふ感じが、この村の今年の春を賑やかにして居た……

停車場が、やがて黒ずむだらうとは誰も豫想しない、だから停車場は、日の光を撥き返して、青いペンキを誇りながら建つのだつた。其所には、毎日、都會から何者かゞ運ばれて來る。それに就て最も敏感だつたのは、驛道に俄か普請で建つた二三軒の宿屋の女將ではない。それは、驛の近所に、昔ながらの姿で建つて居る古いペンキ塗の校舍の中の、小學生たちであつた。彼らは、自分たちの校舍のペンキ塗が、如何に剝げかゝつて居るか、如何に永い月日の雨と風とに虐げられて來て居るかを、新しい停車場のペンキに比べて初めて知つたのであつた。だが、その事實は彼らをして、自分たちの校舍を

釀成させる結果にはならなかつた。その事實は新しい停車場と云ふものに對して、彼らに尊敬と愛着を一切強く持たせる効果を持つたのである。そこで、彼らの停車場に就ての關心は、汽車其物に就てよりも一層大きかつた。

私はこの故郷に歸つて半歳になる。私は都會で戀愛と放埒と學究とで痛めた身體を故郷に持つて歸つたのであつた。私の故郷の家は、殆ど破産に瀕して居た。母家は人手に渡り、僅かに裏座敷——それも三間の小さな建物の中に、私と祖母とが暮して居た。

私は其所に、誰と何の約束もない心と身體を見出した。それが限りない平和であるやうに考へて居た。この世の中で、誰と何の約束もない位置にあるとは、珍しい發見であるに違ひなかつた、丁度、自分が死んで居ることを感じるやうな、殆ど有り得べからざる感動であつた。だが、私は生きて居た。私は仕方なしに、毎日本を讀んだ。

が、或日、私の平和が、突然亂されやうとした。都會から、一通の書状が不思議な香氣にまみれて屆いたのである。

『汽車に乘つて、貴方の所に參りますわ。一人つれて行きます。矢張り一緒だつたのかとお思ひになるわ、きつと。もうお分りでせう、それが誰であるかは、でも、何しに來るか、と不思議に思召すでせう。何しにでもないの。お金がなくなつたからですわ。債鬼を逃げて、田舍へ氣保養にね。それから。貴方にお目に掛りに——忘れて居ました、お久しう。お變りもありません事と存じます。さやうなら』

私は、然し、この手紙に就て多くの事を考へるのが煩はしいだけだつた。來るなら、來るが好い、誰と來ようたつて、勝手だ。この手紙には多分に彼女の空元氣な興味氣分が働いて居る。だが、今は非常にみじめな女として、私の冷やかな心に映るだけだつた。

じめじめした私の部屋に、赤らびた灯火が幾夜ともつたか。あの手紙が來てからの時の經過さへ私には確かでなかつた。或る輝かしい午後である。私は、あの美しい停車場に降り立つた一組の男女を迎へた

『しばらく——電報つきまして?』と彼女がまつさきに口を切つた

『尤も、電報がつかなければ、お迎ひにいらして頂ける譯もありませんわね』

『やア、しばらく』

と、彼がつゞいて私に挨拶した。

彼女がつれて來た男が彼だつた事に、私は大した驚きも何も感じはしなかつた。だが、私は何か云はなければならないのを感じて

『あゝ、君だつたのか』と云つた。

彼の顏が、味方同志のやうにニヤリと崩れた。どうだ、驚いたらうと云ふ表情で。

私は云つた。

『僕の今居る所は、生憎く狹いんだがね。泊つたつて好いが、君たち

が不自由だらうと思ふ』
『好いのよ、何所か宿屋はないか知ら』と彼女が淋しさうに呟いた。
『大へん淋しさうに云ふね。あなたには、そんな調子は不釣合ひだよ。』と私は微笑した。
『さう？　だつて、わたしは元から淋しい女だつたぢやない？』
彼女が媚びるやうに私を見上げた。殆ど同時に、彼の眼が嶮しく蒼白めて彼女の横鬢を射た。
『この景色は懐しい』と私はふと感じた。この景色は、曾つて私に親密な珍しからぬ場合として屢々起つたものであつた。いつも彼女がそこに居た。私が居た。それから、もう一人、誰かゞ居た。その誰かゞ、彼である時もあつた。又、彼でない他の人である時もあつた。いつも彼女が中心で、私と、誰かゞ居た――それらは曾つて都會に居た時の私の歴史の挿絵であつた。今日、その挿絵の頁を久し振りにほんの一瞬間めくり返した。が、今日の景色は少しちがつて居た。私たちは都會に居るのではない。今私たちが立つて居るのは、田舎の小驛の、白々とした廣場である。春の光が冷淡に降りそゝぐ廣場である。その廣場いつぱひに、彼女の匂ひが撒布されて居るとは云へ、彼女は空箱の上に千切れた桃いろのリボンよりも佗しく見えた。
彼女らは驛前の宿屋に、當分滯在することになつた。彼女たちをその宿屋に送つて行くと、私は自分の役目の濟んだのを感じた。
『ぢや、僕、失敬しようか』と私はそろそろ歸り仕度を始めた。
『お忙しいの？』
『いや。何も仕事はない。只、無暗に本ばかり讀んで居る』
『小説か？』と彼が
『小説ではない音樂に關する書物を。』
『ふん。妙な本を讀むんだな。君は音樂は嫌ひだとおぼえて居るが、近頃、蓄音機でも買つたのかな』
『音樂は相變らず嫌ひだよ。蓄音機も買ひはしない。よしこの田舎に突然パデレフスキイがやつて來て、リサイタルを開かうとて、僕は聽きに行きはしないだらうよ。』
彼はからかふやうな眼付きで叫んだ
『可笑しな話だ、音樂が嫌ひな癖に音樂の本を――君は無暗に讀むと云つたね、だが、そんなに面白いのかい？』
『面白いさ。只ね、音樂は僕にとつて全然無關係だから面白いんだ。小説や哲學は、何か僕たちに訴へやうとする。讀者に關係のある事に就て話さうとする。だが、音樂に就ての書物は、僕に何の關りもない知識の世界に屬するのだ。ベエトウブエンが偉い？　第五シムフオニイが、運命に就てどうした曲だつて？　みんなノンセンスだ。だから讀んで居て肩が凝らない』
彼らが默つて居るので、私は言葉を續けた。
『音樂の本でなくても、何か僕に有効な働きを現實に齎して呉れない。

本なら、何だつて好いんだよ。政治學だつて、歴史學だつて――」
「感情を鈍感にするための讀書だね」と彼が云つた。
「感情を刺激しない知識の蓄積――と云つた方が宜からう。」
「戀愛も、今の貴方には無關係らしいぢやないこと？」と彼女が冷笑するやうに云つた。
「全く」と私は答へた。
「さう。ぢや、Aさん」と彼女は彼をさし招いた。
彼は木偶のやうな表情になつた。彼女は私の眼の前で、木偶のやうな彼を抱いた。
「平氣？ Bさん」
彼女は木偶の頰をかすめて、針のやうな視線を私の方に投げた。
「平氣とは？」と私は反問した。そして靜かに立上つた。
「おぼえてらつしやい」
「私は彼女が叫ぶのを背ろに聽きながら、その部屋を出て行つた。

翌朝は枕もとの障子に正午ちかい日がさすまで、私は熟睡した、障子の外の庭から、しきりに私を呼ぶ聲がしたので、眼を醒した。
障子をあけると、近所の子供が三四人ゲラゲラ笑ひながら、庭の櫻の木の下に立つて居た。
今日は日曜だつたな、と私は思つた。私がこゝへ歸省した當時、一度近所の子供たちにシャアロック、ホームズの物語をしてやつたことがある。それ以來、子供たちは時折り、私を友だちか何かのやうに訪れて來るのであつた。勿論、煩い時は相手にもしないので、だん〳〵やつて來なくはなつて居た。今日は久し振りであつた。
「小父さん、さつきね、小父さんのお友だちが、自轉車をね、山の方へ歩いて行つてたよ」
「小父さんのお友だちつて、誰が！」
「昨日、停車場で話してたぢやないか」
さうだつた、と私は思つた。この子供たちは、誰にも増して停車場に對して敏感なのだつた。新しい鐵道が運んで來るあらゆる匂ひと色とを、眞先きに吸收するのは小學校の子供たちだつた。この鐵道に乘つて來るあらゆる都會的な物は、先づこれらの小學生の心に浸潤してこの村の物とならなければならない。
「それが、どうしたんだ」と私は心の中で呟いた。庭一杯に、數株の櫻の大樹が花咲いた下に、子供の顔が重なり合つてゲラ〳〵笑つた。
「何が可笑しいんだ？」と私は聲を出して問ふた。
「だつて、小父さんの友だちなんだもの、可笑しいや」
「何か君たちにして見せたのか」
櫻の下の顔は、その時一齊に、ワッと聲を立てゝ笑つた。
私は障子を締めた。晝のうす暗さが、私の身のまはりにやんわりとした影をおいた。私は今、子供たちの心から、何か彈力のある物の投射を受けたやうな氣がしたのだつた。それが何であるか、私には分ら

なかつた。が、確かに子供たちは、あの男女から何事かを見せられたのだ。でなかつたら、子供たちが、あの男女から何事かを敏感に汲み取つたのかも知れない。兎も角、あの男女の影が、子供たちの心を媒態として、私の上に掴み掛つて來たのが感じられた。

では、彼が、子供たちの前で木像のやうになつたのではあるまいか？

昨日、私は私の眼の前で、彼女が木像を抱いたのを見た。けれどもそれは私に、何の刺激でもなかつた。それだのに、今、私の昨日とは別の感覺を持つのだ。あの子供たちの新鮮な幻影を濾過した彼女と彼とは、別な感覺を以て私の胸に突き當つて來たのだ。これは何であらう。庭いつぱいの無數の花片は光りの斷片であつた。光る無數の斷片の下で、あの子供たちの顔が笑つたのだ。障子をしめて、私はひとり部屋の中に居る。今は潑溂と、眩しいほど藝術化された彼女が、どこか直ぐ私の近くにあでやかに匂つて居る氣配が感じられた――激しい香氣が感じられた……

『驚いたらう、昨日は』

午後、彼がひとりで私の家を訪れて來た。

『大して驚きもしないさ。あの女の昔からよくやる手なんだからね』

と私は答へた。

『あの妖婦がりさへなかつたら、僕はもつと打ち込むんだがね』

『それだけ打込んでたら好いぢやないか。こんなへんぴな所へ、わざ〳〵お伴して來たりなんかして』

『さうだ、その通りだ』と彼は急に悲しさうな顔になつて云つた。『もう君には、何も彼も分つて居るだらう。彼女が何しに此所へ來たか又僕が何のために彼女と一緒に此所へ來たかは――只一つの事情を除いたら、君にはみんな分つてる筈だ』

『只一つの事情？ ふむ。それだつて分らない事はないよ。彼女は借金取りを逃げて來たのだ』

『違ふよ。歸つて來たんだ、彼奴が』

『彼奴が？』

そこで、私は不思議に神秘的な不安を感じた、彼奴と云ふのは、永いこと滿洲の方に行つて居た彼女の亭主だつた。私が都會に居た時、私たちのグルウプの中心のやうに振舞つた彼女に、亭主があるのは、かくれもない事實だつた。その亭主が滿州に行つて居る留守を幸せにして、彼女は自由だつたのである。『亭主が歸つて來たら、妾は殺されるのよ』と彼女はいつも云つて居た。彼奴は若い時有名な不良少年だつた。喧嘩をして人を斬つた經驗は無數にあるのだつた。彼奴が留守の間の彼女の不品行は、彼奴の友だちの報告で、滿洲の彼奴にまで知れて居るのだつた。『お前の命も俺が歸朝するまでだから、そのつもりで居るが好い。』さう云ふ手紙は、彼奴の空脅しではない。彼奴が空脅しなんかする質の男でないことは、彼女が誰よりもよく知つて居るの

であつた。私の友だちは云つた。

「歸つて來る二三日前から、彼女は家出して、僕の下宿にかくれて居たんだよ。だが、彼女はだん〳〵恐怖症になつてね、つまり絶えず間もなしに殺される幻影に脅されるのだ。おしまひには、下宿の女中が西太后に見えるなどと云ひ出すんだよ。西太后！ 滿洲から斯うした連想を引起す彼女の無學を笑つては不可い。それから、彼女は、歸つて來た亭主が、東京中の支那浪人を糾合して彼女の探索をやつて居るなどと妄想し始めたんだ。だから一刻も東京に居るのが不安になつたから、僕に一緒に逃げて呉れと云ふんだ。逃げるのなら、僕は大阪か、名古屋か、でなければ福岡か――兎も角こんな山奥に來ようとは考へられないからね。だが、彼女は、大阪にも名古屋にも、福岡も支那浪人は居ると云つて諾かない。たうとう、君の田舍へと云ふことになつたんだが、君、僕は何と云ふ馬鹿だつたんだらう。をめ〳〵と一緒にお伴して來たりなんかして、尤も、僕は……」

「いや、君は決して馬鹿ぢやないよ。要するにあの女が馬鹿なんだから仕方がない。君の愚さが君を此所へ引張つて來たのぢやなくて、それは説明の出來ない不思議な執着なんだ。だが、安心したまへ、僕は彼女がどんな術策を弄しやうたつて、決してそれに引掛りはしないからね。第一、僕は生理的に駄目なんだ。それから精神的に去勢されてある。僕は、彼女に魅力を感じる動機を持たない。僕にとつては、あらゆる物が中生的存在だ。彼女は、今頃支那の女性の代表を西太后だなどと考へるほど無智なんだからね。そして、あらゆる無智なものが僕には醜惡なんだ」

「然し、彼女は必ず君を取るだらう。彼女は君を輕蔑するために僕を伴れて來たんだ。その事に初めて氣がついたのは、昨日、君の眼の前で彼女が僕に接吻した瞬間だつた……彼女はそれほどまでにして君を取返へさうと焦つて居るんだ。彼女は必ず君を取るだらう」

「彼女は必ず僕を取る、かも知れない。だが、彼女は必ず僕をすぐ捨てるだらう。何故なら、僕はもう駄目なんだ。僕は音樂會に行かない音樂研究家なんだ」

「いや、そんな事を云つても駄目だ。君の…………、單なる幻影なんだ。自己陶醉なんだ。でなくても、彼女はあらゆる…を知つて居るからな」

「君はいつの間にか、彼女に就て何も彼も熟知するやうになつたらしいが、なに、そんな神秘的な術は彼女は知らないよ」

私は半歳前までやつた私の都に於ける生活を思ひ出した。私たちの仲間は、都會の蒼白めた皮膚の上に咲いた一群の狂亂のやうな存在だつた。彼女を中心にして、私たちＡＢＣＤＥの五人の若者は神經と肉感との奴隷として同盟した。然し、彼女の氣持ちが、次第に私一人に向つて集中する傾向になつた時、私は突然彼らの群から離れて故郷に歸つたのである。私たちが深海の電氣鰻と云ふ綽名で呼び馴らした彼女の魅力から解脫するまでの、私の惱みは一通りの事ではなかつたの

だが。

然し、時は經過した。私はもはや昔日の私ではない。私はこの村落のあばら家で、誰とも、そして何物の約束もなしに呼吸して居る。それは、無用の知識を蓄積する以外に、生きて居ることの感じの殆どない生活なのだ。

『Dは結婚した。Eは死んだ。Cは或る少女と戀愛した。だから、殘つて居るのは君と僕との二人だけなんだ。僕は君に勝ちさへしたら好いのだ。それだのに……』と彼は熱情を以て云ひ始めた。

私は制止するやうに云つた。

『まだ、彼奴が殘つてるぢやないか。』

『彼奴が――或種』と彼は唸くやうに云つたが、やがて自ら慰めるやうに『だが、彼女は彼奴からは永久に逃避する位置にある』

そして、ふと、彼は思ひ出したやうに、

『だが、僕はどうしても疑問が解けないんだが、君は何故、あんなに突然に、僕たちのグルウプから逃げたんだい？』

『君はさつき、Cが或る少女と戀愛に陷つたと云つたらう。Cの奴はそれだけ健康なんだよ。彼女の魅力に引きずられるなんて、確かに健康的境遇だからね』

『然し、君がそれほど健康だつたとは思はれないが』と彼は冷笑するやうに云つた。

『或はさうかも知れない。だが、實際を云ふと、僕は或る氣味のわるい發見をしたんだよ。それで、君たちから離れないでは居られなくなつたんだ』

『氣味のわるい發見つて、どんな？』

『生理學的な發見なんだ。然も、生理學が知らない、僕ひとりの發見だ』

『と云ふと――？』

『彼女が美しき中間宿主であると云ふ……』

『病毒の？』

『いや、プロトプラスムに就ての』

『プロト……』

『Protoplasmだ。君、君は君と僕と、何所か極めて微妙な肉體的ニユワンスに於て共通な物のあるのを認めないか？…つまり、君は僕の上に、時々、君自身の影を感じはしないか？ 或時は眼と眼との間の皺に、或時は、こめかみの搖ぎに、ほんの瞬間に搖曳する表情の一點に君は僕と君と何所か似て居るのを感じはしないか。』

『さア……』

『僕はそれを感じてるのだ。君にも、Cにも、Dにも、Eにも、互ひに共通する肉體的なニユアンスが、いつの間にか出來て居たのを發見したんだ。我々はめいめいに、ABCDE五人の要素を共通に持ち合つた。これは何故であらう？ 僕は考へた。そして、結局、彼女が美しき中間宿主であると云ふ假說に落ちた。何故の中間宿主かと云ふと、それ

は我々五人の各々の原形質の、だ。それは僕の直感だ、生理學的基礎のない點ではね。だが、それは何所までも僕の實感で承認出來るんだ僕はこの氣味のわるい發見から、急に我々の關係が醜惡に感じられ始めたのだ。』

然し、その時彼は急に腕時計を見て云つた。

『ぢや、僕は失敬しやう』

『彼女が待つて居るだらう』

『いや、彼女は僕と連れ立つて家を出たんだが、途中で一團の小學生たちと知合ひになつてね。そこの小川の土手で遊んでるんだよ』

『小學生たちを、手なづけて見るのも宜しからう』と私は苦笑した。

玄關から辭し去らうとして、彼は皮肉に叫んだ、

『だが、この村中の小學生が、みんな君と同じプロトプラスムの交流者となつたら、君はどうするんだ？』

『馬鹿な』

月曜日の午後、時ならぬ鯨波の聲が、私の書齋にまで響いて來た。

それは無數の硝子の破片を撒るやうな、喧騷であつた。勿論、近所の小學校の校庭から來るのは分つて居た。私は多分、子供たちが、何か運動競技に白熱して擧げて居る感動の叫びだらうかと思つた。然し、私は何か不安になつて立上つた。そして、小學校の方を眺める窓をあけた。

窓から一町のげんげの野をへだてた二三町彼方に、小學校が見える。その手前に村の街道があつた。

小學生たちは、校庭の柵の間から無數の顏をのぞけて、往來を眺ながら、ワッと聲をあげて居る。そしてその街道には、彼と彼女とが腕を組みながら、歩いて居る。

ワーーッ。

忽ち、彼と彼女は街道のまん中に立ち止つた。二人は互に接近して相對した。

瞬間。今までワーーッとあがつて居た叫びが、ピタリと止んだ。春がすみの濃ふ野も山も。この一切の世界が無限の靜寂のうちに、鼓動をたち切られたかと思はれた。彼と彼女とが接吻して居る。

野の奥から。徐々と近づいて來る列車の響きが、地獄から湧き上つて來るやうに傳はり　やがて列車は小學校のすぐ裏の長い鐵橋にさしかゝつて、組み合ふ鐵板を急速に踏み鳴らした。同時に、小學生たちは、依然にも増した大聲で、歡呼の聲をあげた。列車はまだ鐵橋を渡り切らぬ。長い歡呼の聲はまだつゞいた――

まあ、四月だ。野の花の上を日光は碎けるやうに亂舞して居る。世界は瞬間の假死から蘇生した歡呼をあげて居るのだ。

私も、このうす暗い二階の書齋から、彼らの所へ出て行きたくなつた。

街道の二人はやがて散歩の歩みをつゞけて行き出した。無數の小學生たちは柵から離れると、白い運動場で滅茶々々に飛んだり跳ねたりし始めた。無數の帽子が、空に向つて投げられた。帽子は、空中をクルくとまはつて再び、小さな手の上に落ちては、又青空めがけて飛び上つた。

その時、停車場から、發車をつげる汽笛の音が響くと、まるでそれを合圖かのやうに、校舍の中から四五人の先生が、バラくと飛び出した。そして、其所に跳ねたり、帽子を投げたりして居る生徒たちを片端から摑まへやうとした。生徒たちは、右往左往に逃げまはつた。黑い詰襟の先生たちは、餘程怒つて居るらしい。誰か生徒を摑まへる度びに、ひどく亂暴に、平手で、子供のお尻をバタく叩くのであつた。

が　たうとう、始業の鐘が、朗かに鳴り始めた。

その日一日、私の腹の底には、いつまでもウァッと云ふ歡呼の聲が溜つて、それが身體の內側から、耳の鼓膜を、こそばゆくゆすぶつた。

私は、小學生たちの歡呼で、病氣にならされたのかと思つた。いや明らかに、あの無作法極はる男女の性慾が、小學生の歡呼を濾過して私の血管に何らかの注射を行つたのを感じた。

夜となつた。私は彼らの居る宿へ、こちらから出掛けて行かうと云ふ勇氣にさへ打たれた。私は、私の中に酸素のやうな幼い魂が忍び込んで來て居るのではないかと疑ひながら、まだうつらくと、耳に殘る歡呼の聲を聽いて居た。

が、思ひ掛けもなく、彼女が私を訪れて來た。

『ひとりかい？』と私は訊いた。そして『B君、宿屋に殘つてるんぢや、苦しいだらう』

『苦しいんでせうつて？ そんな珍しい話があつて？ 妾たちの間に一度もそんな事は起らなかつたぢやない？』

『それア。東京に居る時はね。だが、こゝは田舍だから、嫉妬でもしなくちや、退屈になるわけだよ』

『昔は、そんな事を考へる貴方ぢやなかつたわ。駄目ね、田舍者になつちやつて……』

二階の書齋である。私は今日の私の狀態を考へて危險を感じた。私はわざと庭に面した障子をあけた。

『夜櫻ですよ。』

『そんな物』と彼女は振向きもしなかつた。『Bさん、ずゐ分貴方は變つたのね。妾は死物狂ひで來たのよ。妾は貴方に助けて頂くより仕方のないのを、よく知つて居るの。貴方には、よくそれが分つて居る癖に』

彼女は腰をすゝめて私の方へにぢり寄つた。突然、私の內に溜つて

居た小學生の聲が、一時に鳴りをしづめたのを私は感じた。私は立上つて燈火を消した。

「まア」と彼女が囁いた。

私は回生した。私は彼女の肩に手を掛けた——が、室内の燈火が無くなつた今、庭の夜櫻は月あかりに、軒の下一面を白く塗つて、くつきりと現れた。私は駄目だと思つた。同時に、私は夜櫻の中から、無數に光る幼い眼が覗いて居るのを悟つた。

あの敏感な子供たち！いつの間に庭の中に忍び込んで、櫻の樹によぢ登つたのか。私たちの秘密な眺めを窃みに來た幼い魂だ。しづかな夜だつた。櫻の花は白く、さゆらぎもしない。私は、無數に光る眼に突きつけるやうに、彼女の情熱を煽つた。

『怖いわ、怖いわ、貴方！どうして、そんな怖い顔するの？』と彼女は叫んだ。

然し、私は、私こそ怖れて居るのだと感じた。怖れるのは、既に遲かつた。私は、彼女にとつて、半年前と同じやうに、一個の奴隷であるに過ぎなかつた。

いや、私は一個の小學生であるに過ぎなかつた。

…………………………

翌日、放課後の小學生が四五十人、私の家の裏のげんげ畑に集つた。げんげは伸びて、畑いつぱいが花と日光の織物だつた。四五十人の小學生たちは、二組に別れて、一齊にときの聲をあげた。そして、互に入れ亂れて組打ちを始めた。組み打つては、重なり合つてころ〱と花の上をころげまはつた。わはゝ、わはゝ、と彼らは笑ひつゞけた。畑中の花と云ふ花が、幼い肉彈のロオルに壓されて、碎け伏した。植物の群衆は、花びらを破られ、莖を折られ、葉を裏返へされて聲なき悲鳴を散らした。小學生たちは、いつまでも、重なり合つてその上を轉びつゞけた。傷付いた植物の血が青い雲のやうに地上を飛んだ。わはゝ、わはゝ。紅い花びらの舛型の列が、さゝくれ立つて蒼白めた。折られた莖から青い匂ひが發散した。折られた莖は、そして又折られゆく莖は、無數だつた。それ故、發散する青い匂ひは、野の空にむせかへるほど充滿した。日は輝やかしく降りそゝいだ。こゝは何かの饗宴の場所かのやうに、すべての物が刻々に捏れて行く氣配であつた。この盛なる興宴のうちに、豐かな光りのうちに、ひそやかに蒼白めてゆくものが在る！わはゝ、わはゝ、小學生は笑ひながら、この不可思議な爭鬪の戯れをやめなかつた。彼らの潑溂たるそして激烈な呼吸は、次第に新鮮さを失ふ花畑の上で、互ひに次第に縺れながら、リヅムを亂した。やがて彼らは足下のげんげを、手で荒々しく摑んでは、互ひに投げ合つた。そこで、花と葉と莖との彈丸が、音のない霰のやうに空中に飛び交うた。その霰はひとしきり濃やかに、急速に亂れ飛んだ。もしそれが空中に融けても、植物の霰の數は餘りに多くて、抱和

の程度を超えて咲き殘れる花びらもあるだらう、が、しばらくすると激しの勢ひが次第に衰へた。突然に日がかげつた。陰鬱な霧が彼らの亂舞を鎖つた。彼ら小學生たちは、もはや笑はなかつた。いつか力つきてもはや取組まうともしなかつた。彼らは花の上に倒れ出した。倒れるもの〻數が急速にふえて來た。倒れるもの〻上に、花の霰がバラバラと降りか〻つた。霰は全く飛ばなくなつた。すべての少年が、草花の上に身を投げ伏してしまつた。

然し、この光景は不思議に私を樂しませなかつた。障子をしめて、部屋に歸つたのちまでも、私の心の中には何となく、どんよりとした曇りが殘つた。私はもはや小學生と何の關りもないと云ふ氣がした。同時に、私は再び私を取返したのを感じた。私は昨日からの私が醜くて耐らなくなつた。私は今、小學生たちの戯れを見ると共に、曾つて我々五人の仲間の上に發見したプロトプラスムの搖曳を思ひ出した。今日の發見は、血に關することではなかつた。だが、もつと深い、神秘的な物に關してゞあつた。私と小學生たちとが、新しいレエルの齎らした運命に、このやうに醜く弄ばれて居ることが、私に不快を以て反省されたのである。では、私はどうしたら好いのか？　いや、私はどうしなくても好いのだ。私は安心だつた。私はもはや、彼女の魔力から解放された。私は一昨日さうであつたやうに、今日から再び、音樂の嫌ひな音樂鑑賞者であるだらう。

『何か用？』

私は彼女を玄關に迎へると云つた。幸せなことに朝のことゝて、小學生は授業中だ。今日は彼らの監視から解放されてあると思つた。

『何か用かつて――』

彼女は驚いた眼をして私を見上げた。

私は冷たい顏を崩さなかつた。

『僕、今本を讀んでるんだが』

『あ、さう』

彼女も急に冷い顏になつた。それから眞蒼な顏になつた。しばらく玄關に立つたまゝ、唇をふるはせたが、すぐ、又平然とした顏になつて云つた。

『嘘つきね』

そして彼女は笑つた。が、その笑ひが消えぬまに、涙がしづかに彼女の眼を濡らして來た……

『上げて下すつても好いぢやないの？　人の弱味につけ込んで、そんなに虐めなくつたつて好いわ！』

『A君は。どうしてるの？』とは私は少し語調をやさしくして云つた。

『追つ付け此方へ伺ふ事になつてるの。妾だけ、ちよつと――一足さきに出て來たのですけど。……一緒に來ると好かつたのね。』

『仕方がない。上りたまへ』

私は彼女を二階に上げた。

「君は。僕が君の趣味につけ込むなど〻今云つたが、一體それは何所でおぼえたセンチメンタルな口説なんだ。僕たちの間に、趣味も何もあつたものぢやない。君も、いつの間にか田舍の空氣に染み込んでしまつたらしいぢやないか」

私はさう云ひながら、別に非難するやうな顏付きをする氣にもなれなかつた。私は、何の感情も拔きにした冗談でも云ふほかに此對照の興味を搜し出す事が出來なかつた。

「貴方はさう御言るけど、妾の身にもなつて見て下さい。妾はね、あの人が滿洲から歸つて來てからと云ふもの、もうスツカリ度膽つてものが無くなつてしまつたんですよ」

「殺されるなど〻思ふのは、君の誇大妄想だがね」

「い〻え。妾はきつと殺されるのです。たとひ殺されなくつても、妾は今に氣が狂つて死んでしまひますわ」

「何故？」

「何故つて、妾は、つけ狙はれてゐんですもの。何所へ逃げたつて駄目ですわ。あの人の手下は日本中に在るんですからね。現に、貴方の村にでも來たら貴方に助けても頂けるし、それに、いくら手下が多くつても、まさかこんな山奥にまで手が伸びはしないだらうと思つて來ましたのに。それも駄目だつてことが分りましたの」

「僕が君の思ふ通りにならないからつて怨むのなら、いくらでもお怨みよ」

「い〻え、そんな事ぢやないの。妾、斯うして居るまも、安心ならないんですわ。あの人の手が、もうこの村にまでまはつて來てるんですもの！」

彼女はその眼に、深い怖れを湛えながら、身を縮めるやうにした。

「馬鹿だね。そんな馬鹿な——まるで我と我が影に脅えて居るやうな話ぢやないか、貴方の場合は」

「い〻え、貴方はあの人を御存じないから呑氣に考へていられるんです。あの人つて、それア怖しい人よ。人殺しなんか、何とも思つちや居ませんわ。人を殺して、いざとなれば、いくらでも身代りに自首して出る乾分があるんですからね。それに、どうせ滿洲ぢや血を見るのを屁とも思はないやうな、危い仕事をくゞつて來てるんでせうから、日本へ歸つて、今頃は血に飢えて居るかも知れない位ですわ——現にね」と、そこで彼女は急に聲をひそませて言葉をつゞけた。「現に、一昨日の晩、あたしがひとりで此方に伺つた時、さうですわ、あの晩から、妾、この村にかくれてたつて、矢張り駄目なのを知つたの……」

彼女はさめ〲と子供のやうに泣き出した。

「あの晩、どうしたと云ふんだらう——。あの晩は。君も。滿足して歸つたぢやないか」

「え〻、あの晩はね、」

彼女は涙を拭いて、朗らかに笑つた。

『ほんとに好かつたわ、嬉しかつたわ、あの晩は——ところが、さう思つたのが、妾の大變な間違ひだつたの、あの時、私は嬉しさで夢中だつたのね。でも、何だか、お庭の櫻のぼうつと白い、ふくらんだやうな中から、誰が大勢の人が、妾たちを覗いて居たやうな氣がしたにはしたのよ。妾は夢中だつたものだから、そのまゝ氣にも止めないでお宅を出たのですわ。月あかりの夜みちで妾は宿の方へ歸りながら、風に吹かれるのがむしやうに氣持ちが好くつてね、ところが、もう宿が半町ほどの所まで戻ると、急に、何だかうしろの方から、澤山々々の足おとがするやうぢやありませんか。何だらうと、妾は振返つて見ようとして、急に止しましたの。何故つて、その足おとは、妾をつけ狙つて來る足おとに違ひないのが分つたのですもの、うしろ振向いたりなんかして、顔でも見られたら、それこそ大變だと思つたのです。すると、妾は、ハタと思ひあたつたのです。お宅の、この二階に寢て居る間に、あのお庭の白い櫻の、ぼうつとふくらんだ中から、何だか大勢の人が覗いて居たやうな氣かしたつけ、とね。さう思ふと、櫻の花の中から、星のやうな物が、まばらに光つて居たのが、妾はぞつとしましたよ、あの光つて居たのは眼だつた！　眼だつた！　妾をつけ狙ふ眼だつた！　妾はもうその時は、一生懸命に走つて、やつと宿の軒をくゞつて居ました。二階の梯子を飛ぶやうにして上つて、自分たちの部屋に入ると、いきなり大きな二つの眼が、ギヨロリと光つて——』

彼女はそこで再び朗らかに笑つて

『その眼は、尤もAさんの眼だつたのですがね。Aさんの眼だつて、あの時は、仲々凄く光りましたよ。いろ〳〵貴方とのその晩の首尾を根掘り葉掘りきくのですけど、妾はそれ所ぢやないでせう。怖い、怖いと云つて、一生懸命に、Aさんの胸にしがみついてゝホヽヽヽ』

私は餘程、あの櫻の花の中から光つて居た無數の眼は、彼女の怖れて居る追手の眼ではない事、それは好奇心と知識慾に燃えた高等科一二年男生たちの眼であつたに過ぎない事を、説明してやらうかと思つた。だが、私はそれをしなかつた。彼女がそれに脅やかされて居るのは、結局私にとつて都合の好い事だつた。この山の奥にも、彼女の良人の手は伸びて居る、と云ふ幻影は、彼女を此上この村に長く滯在させないだらう。それは私にとつて氣持ちの晴れることだつた。また、あの可憐な小學生たちの心理も健康を取りかへすであらう、と私は眞面目に信じる。彼女が、どれほど幻影に惱まうと、それは私の關する所ではなかつた。彼女のやうな存在は、結局死んでしまつた方が、この世の中の健康のために衞生的なのだと私は考へる。實際、彼女のやうな、肉感以外には何の行動の動機も持たないやうな女の在ることは、醜惡だ。濁りのもとだ。悪臭のもとだ。

『それで、どうする、この村にも居られないとすると——』と私は冷

やかに訊いた。
『お馬鹿さんね、そんな顔しなくつたつて妾、逃げて行つて上げるわ』
『今度は。どこへ行くの？』
『そんな事、どうでも好いの、それより、貴方、さやうならよ、今日にでも、妾、立ちたいのだから』
其所へ彼が彼女を迎ひに來た。

私は、今日立つと云ふ彼と彼女を見送るために、彼らの宿に赴いた。
彼らの部屋に入つて見ると、座敷にトランクをおいて、しきりに洋服を整理して居た。
『荷物つて何もないのよ』
さう云つて彼女が開けて見せるトランクの中には、一箱のボンボンが入つて居た。
『そんなお菓子、何しに持つて來たの？』
『それが不思議なの。と云つて不思議でも何でもないわね。旅さきは不自由だらうつて仕入れて來たのを、今日までトランク開けなかつたものだから、スッカリ喰べるのを忘れて居たわけなの』
然し、その時、彼らの居る二階の部屋を見上げる往來には、學校歸りの一團の生徒たちが、何か口々に喚き合ひながら屯して居るのであつた。それが我々に分ると、彼女は微笑を含みながら立上つて、障子の外に出た、子供たちは。二階の廊下に立つた彼らの麗人を見上げると急に沈默した。その沈默は、何とも知れない、そして、何物とも眼に見えない香氣と色彩とへの熱望で張切つた。彼女はボンボンの箱を抱へて居た。彼女の白い手が、欄干の上でゴムのやうに渦卷いた。五色のボンボンが——紅い、青い、黄色い菓子が、日光を貫いて碎けた虹のやうに、子供たちの頭上に降りそゝいだ。
光る五色の玉の降る中で、幼い群衆は聲をあげながら雜沓した。が箱の中のボンボンが、或は子供たちの手の中に積もり、口の中に消え地の上に碎け盡して、次第に乏しくなつて行くに從つて、彼女の全身が次第に細り、次第に青白めて行くやうに想はれた。僅かに最後の時が來た。彼女は鋭く叫んで室内に逃げ歸ると、疊の上に身を投げ伏せた。
『どうしたんだ？』と彼が驚いて訊いた。
『早く、早く……』
忙しい呼吸使ひで肩まで波打たせながら、彼女は絶切れ〳〵に云つた。
『ボンボンが。日に光るんですもの。眩しくつて。眩しくつて、妾、だん〳〵眼がまはつて來たの、さうすると、氣持ちがボウとなつてしまつて、ふと、氣がつくと、妾の手から降つて行くボンボンの中に、いつまで經つても宙にピタリと止つたまゝ落ちないボン〳〵が二つだ

けあるの、それが白いの白い二つののボン〳〵なの、妾、腹が立つて、そして怖くて、そいつを。どうしても落してやらうと思つて、そいつを目掛けて、夢中でボンボンを投げて居るうちに、妾には分つたのです。それは二つの白いボン〳〵ぢやなくて、光る二つの眼だつたの：：驛の物かげからジツと此方を睨んで居る眼だつたの。彼奴の、眼だつたの——早く……、早く、逃げなくちや——」

彼女は、輝かな日光の中を激しく降る五色の菓子の交錯の間から、ジツと動かぬ一對の眼を發見した！ もはや、あの人が、この山奥の停車場にまで網を張つて居ると云つて諾かなかつた。

彼らは一刻も早く逃げなければならない。だが、あの停車場に彼奴が居るとすればこの村から汽車に乘るわけには行かない。

『君は幻影に追はれて居るのだ。心をしづめて、しつかりしたまへ。驛にはそんな恐ろしい他國人は一人も居ないんだから』

私はそんな事を云つたが、愚かな女の恐怖を、彼女の頭から拂ひ落す事は出來なかつた。

あの停車場を避けるとすれば、どうしても歩いて村の峠を越えて、一つ先きの停車場で汽車を掴まへるより他には仕方がなかつた。

新しい鐵道は、山奥の霞のおくに煙と油のペンキの匂ひを撒布した盆地を埋める春の植物の間を、列車は悠然と爬行した。村の文化は場末に開かれた新店のやうに、都會の化粧品のレツテルの美學に、徐々として基礎付けられて來た。然し、村の幼い魂の上に、何よりも急速に植付けられた物は戀愛文化の形式であつた。この文化の流入の勢ひは、病毒の猖獗を司る惡魔の精力に似て激しかつた。然し、その形式は矢張り都會から來る安白粉のレツテルの圖案より新しくはなかつた。たゞ、それが病的な支配力を持つて居る所に、村の文化の第一頁を飾る資格があつた。

そして此の第一頁は、無限の展開を豫想させて終つた。宿屋の裏口から、そつと拔け出した一組の都會の幽靈は、やがて村境の峠道にさしかゝつて私と別れをつげた。小山の溪まを、深い森の中へ進む峠道であつた。彼らの姿がその森の中へ消えてしまつた後、私はひとり路傍の石に腰掛けて、永いこと呆然と日光を浴びて居た。

私はやがて空を見上げた。そして、峠の山を眺めた。

峠の山は、溪まの峠路に平行した山の脊を青い空の下にゆるやかな山線で波打たせて居た。忽ち、私は瞠目した。柔らかな草を蔽くその山の脊を、一隊の小學生が蟻のやうに遡つて、駈足で行つて居る！

彼らは、溪まを行く彼らの戀人を追つて、彼らの幽靈を追つて、山の脊の近路を急いで居るのだ。蜒々としてつゞく山の脊を、蜒々とつゞく小學生の列が、限りなき幻影を追うて、限りなく青い空の彼方へ徐徐と動いて行くのであつた。

——昭和二年三月七日——



田園騒動

藤森成吉

僕は母や弟と別に、ひとりで下宿生活をしてゐたんです。母が、小作問題その他で國へ歸つたのは、去年の師走半ばでしたが、それッきり學資を送つてくれません。手紙で催促してやると、今、年貢やら何やらの騒ぎでどうする事も出來ない、もう少し不自由でも待つてくれッて云ふ、字もおろおろ走り書の返事です。丁度暮に差しかかッてすッかりまごついちまッたんですが、些しばかり原稿稼ぎなんぞやッてやッと正月へ持ちこたへて、今日か明日かと母の歸京の知らせを待つても、待つても、まるで梨のツブテです。おそくとも七草までには戻るッて歸つて行つたんですのに。

自分の金の方もですが、母の身のうへがさあもう心配で居ても立つてもたまらなくなりました。で、とうとう月半ばに、學校も何も抛ッたらかして、僕は急に國（小國の一地方）へ歸つて行きました。

いきなり行つためしに、さぞ母は怒るだらうと思つたのに、案に反して大よろこびで迎へてくれました。そして、今まで獨りで苦しみ抜いてゐた心配を、みんなぶちまけました。その時僕は、歸つてほんとによかつたと思ひました。もう少しうッちやらかしておいたら、母は氣ちがひになつて了つたらうと思ふばかり、やつれて苦しんでゐたんで

す。全く無理もありません。話を聞いたり見たりするにつれて、僕も驚くばかりでした。わづかマル二年ばかり歸らなかつたあひだに、かうも變れば變るものかと、まるで夢でも見るやうな氣もちになりました。

何しろ兩方とも——小作人達も母も——いゝその吐きッくら、掛け引きの仕ッくらです。

それに就いちやあ、國の氣風を少しばかりお話しなくちやいけません。國の人間と來たら、一般の定評になつてますが、實にずるい、不正直な人間揃ひです。何でもかんでも引ッかける事ばッかり考へて、そしてうまく行けば、非難される代りに、あの人間は悧巧だ、「ほんまに、いい都合におやりなさッた」ッて皆から賞められるッて始末です。だまされた方は、勿論阿呆呼ばはりで笑はれるッきりです。

一例を御話すれば、僕の家は代々かなりな地主で、小作のほか建坪なども大分貸してありますが、（家は、半分位は向ふで建てたもので、收めるのは米です）借人とのあひだには何の契約書も取り交してありません。ただの口約です。そこらは、むしろ昔風な田舎の鷹揚さでいい所ですが、何しろ三十年位前に定めた地代のまんまですから、今の地價から云へば馬鹿安です。で、新たにしッかりした證文を入れて貰ひたいと母が請求すると、みんな口を揃へて、長年の間からなのをひどい事を云ふ、ッて聞き入れないんです。そして揩つた揉んだの揚句が、いッそ全部此の際貰つてくれないか、ッて申し込みです。その條件が實に蟲のいい、いやいや、よすぎるもんで、今の安い地代を假りに五分位の利息代と見て、その元金の割で讓つてくれ、と、かう云ふんです。一寸見には、なるほど尤もらしい要求に聞えますが、何しろ昔に較べりやあ非常な地價のあがりかたですから、實は飛んでもないごまかしです。母がこッそり外の知り人に當つて見たところによると、その土地の地價は、先方の云ひ値の十倍位に當るんださうです。つまり、相手を頼りのない寡婦と見くびッて、十分の一位の安價でうまうま手に入れやうッて魂膽です。そんなことを、洒蛙々々と云つて來る人間が、いつも噛み合つてゐる間がらかッて云へば、どうして平生ごく懇意にしてゐる連中ですから、おどろくべきものぢやありませんか。

そのほかにも、同じ親類でゐながら、つづき合つてゐるこッちの地所へ、いつか斜に石垣を切り込んだり、貸地を取りひろげたり、山なぞを互ひに境を侵し合つたり、少しでも眼をかすめる事さへ出來りやあ泥棒沙汰です。その爲め、村の何かの寄り合ひでもあれば、さういふ小言や怨み言が附き物です。兩方でその席上で云ひ合ひ騒ぎです。

いくらそんな氣風だと云つても、大地主なんか今までは呑氣なものだッたんです。自分の實際の持地がどこにどれほどあるか、全體の廣さがどれ位あるか、境はどうついてるか、なんて事はまるきり知らずにゐた、ッて云つてもいい位です。ただ、定まつた小作代だけ知つてゐて濟んで來たもんです。それが、まあ何て變りやうでせう？

さて小作人ですが、その邊は所謂特殊部落が非常に多いんです。僕

の家の小作人なんか大抵部落の人達です。その取締――ッて云ひますか、つまり母の代理にいろいろ取り仕切つてゐる老人は、代々の小作の一人で實に好々爺です。家へ對しちやあ昔から家臣見たいに仕へて母達は呼び棄ての仕來りでゐますが、僕なぞが國へ歸つても早速御機嫌伺ひにやつて來て「まアよく御戻りになりました」なんて、泥をこぼしてよろこぶ始末です。それが母と小作人達とのあひだへ挾まつて母の立場も考へなければならず、小作人達の云ふ事もきかなければならず、氣の弱い性質でどうする事も出來ないんで、いよいよ交渉がはかどらないところへ持つて來て、なほ小作人達にはみんな受人てものがあります。つまり保證人で、それが中へ立つて仲裁役をやつてるんです。こいつが一種の油蟲で、兩方からの云ひ分を聞いちやアいろんな物を貰つて、ひとりでうまい汁を吸つて膨れてます。つまり彼奴等に取つちやあ、交渉がもつれりやアもつれるほど自分の利得になるんですから、兩方へうまい事を云ひながら、內實唆しかけてなりたけ長びかせやうと掛つてるんです。お蔭で、ますます手間はかかるばかりです。

小作人達の云ひ分は、年貢の輕減です。一體あの縣は大地主が多く從つて爭議も盛んな所ですが、さう云ふ氣勢に煽られて、彼等の要求は隨分頑强です。きき入れて貰はないうちは、團結して一粒も年貢を收めなかつたり、中には又、田や畑を借りるだけ借りておいて、作物をつくらない連中も幾人かあります。植木なんぞ田へ仕立てて、いくら地所を返せッて云つても返しません。無理に取り返す事は、又法律が許さないんださうです。

地主に取つて大痛手であるばかりか、さうなると、もう地面も滅茶苦茶です。あッちこッち僕も見て廻りましたが、どこの地面もひどく瘦せて來てゐます。みんな本氣に作らなかつたり、又ほかの仕事をして麥を作らないもんですから、年が變つてもまだ稻株が田へ殘つてる始末です。土なんぞ、勿論柔かく碎いてもやらない爲め、コツコツ固くなつて了つて、一目見ただけでも荒廢の氣分がわかります。

田園まさに荒れんとす、ッて言葉がありますね。僕はその實際を眼にして、いくら地主の息子でも、同じ土の力で育つて來た者だけしんから胸の痛みを感じました。――丁度さう云ふ散歩の或る日の事です僕は、或るお婆さんの小屋へ寄りました。

その年寄りの亭主ッてのは、昔は部落のなかでも隨分な金持ちで、だんだん地所を集めて大きな家を作つてゐたんですが、死んだあとひどい放蕩息子が出て、切角の身上を忽ち潰しちまつたんです。で氣の毒に、お婆さんは今たッた一人小屋掛けをして、まるで乞食のやうなくらしをしてゐるんですが、何か眼病を患つて物も碌々見えなくなつて了つてるんです。

久しぶりの事でもあり、又お互ひに寂しい際でもあり、僕はいろいろお婆さんと話して慰めてやつた揚句、小遣ひの足しにしてくれッて貳圓ばかり紙へ包んで置いて來たもんです。いや、決して慈善なぞの

氣もちからぢやアなく人間として氣の毒でならなかつたからです。お婆さんも、一二度辭退しましたが、大へんよろこんで取つてくれました、で、その日は珍しくしんみりした氣もちになれて、うれしく思つてゐると、翌日いきなり村の若衆の一人が訪ねて來ました。それは、小作人のなかでも一番左傾派の、元氣のいい頑强な、母を手古摺らせてゐる若者ですが、昨日お婆さんにやつた金を僕の前へ突きつけて、こんな物を貰ふわけはないから、御返し申す、ツて云ふんです。

僕はびつくりして、何も君にあげたわけぢやアなし、お婆さんも氣もちよく受け取つてくれたんだから、……ツて云はせも果てず、いや年寄りからさう云ふ話をきいて自分が代つて返しに來たんだ餘計な恩を着せられるのは、自分達にやあ何より不愉快だから、ツて、耳も藉さず置いて行つちまふんです。懷柔の手段だと思つたんでせうか、仲間の結束が鈍ると考へたんでせうか？……とにかく何の思惑もなくてした事が、却つて憤りを買つたのを見ると、僕は耻かしくて堪らなくなつて眞ッ赤になりました。

さう云ふ失敗を、も一つ繰り返しました。

毎日々々、受人だの宅地を借りてゐる人間だの、いろんな者が來て母と談判して行くんですが、それを傍で聞いてゐると、前お話したやうな掛引づくめです。見えすいたやうなことを、兩方で平氣で爭ひ合つてるんです。で、堪らなくなつて、僕は或る日母をなじりました。さう云ふ不正直な事を云ふなら、お母さんにも責任がある、こんなにイザコザが長びくのも、云はば自業自得だツて。——腹が立つたので隨分烈しい言葉で責めたんです。ところが母は眼を赤くして、私も決して餘計なうそは云ひたくないが、先方がうそづくめで向つて來るから、どうしても云はずにはゐられなくなる、正直な事ばかり云つてたら飛んでもない目に遭つて了ふ、ツて云ひわけするんです。

然し、そんな探り合ひばかりしてゐた日にやあ、いつまで經つたつて片附く見込みはあるまい、ツて云ふと、母は餘計泣き出しさうな顏つきをして、かう打ち明けました。

何しろ、お前の東京のおつき合ひのかた達とは、ここぢやアまるで氣風がちがつてる。誰も彼も、人を計らう計らうとばかりしてゐる。どつちを向いても計略やワナだらけで、一寸のあひだも氣が許せないから、疲れて仕方ない。自分も長いあひだ寡婦を立てて散々揉まれて來たから、今まですつかり馴れてゐたつもりが、二年間國を留守してサッパリした東京の生活をしてゐるうちに、いつかまるで呼吸を忘れて了つた。で、今度歸つて來ると、いきなり引ッかけられた、ツて云ふんです。

最初泣きついて來た小作の一人に、つい動かされて内密に少しばかり年貢を負けてやると、忽ち村ぢうへその話がひろがつて、我れも我れもと小作人達が嘆願や哀訴に押し寄せて來たんですツて、それはかりぢやなく、外の地主達へまで事件が波動して、あそこではこれこれ誰それに小作を負けなさつたから、こちらでも是非減らして貰ひた

い、ッて迫る騒ぎです。前ッから、小作人が一緒に固まつてるのに對抗して地主達の方にも聯盟がつくられて、申し合はせが出來てゐたんです。それに背いて、勝手に小作人の云ひ分をきいたッて云ふんで、地主仲間は又ひどく憤慨して了ひました。一體、僕が東京の大學へなぞ入つて彼等とは少し手色の變つた新しい思想を持つてゐて、とても歩調を共にする事も出來ない異端者だッて考へが、以前からみんなの地主の頭にあつたんです。で、決議で、とうと母は聯盟から除名されて了ひました。味方からは追はれる、小作人達からはいよいよ足もとを見すかされてぜびられる、まるで泣きッ面に蜂です。外に誰も相談相手はなし、親類さへ隙を見れば附け込まうとする、四面楚歌の獨りぼッちの身の上に置かれて、母はどんなに夜晝懊惱したかわからなかつたッて云ふんです。

もうつくづく田舎はいやになつた、何とか早くすつかり片をつけて東京へ引ッ越したいッて、限さへ窪んだ顏へ兩手を當てる母を見ると僕も氣の毒になッちまひました。で、母の苦勞を分けてやる氣で、ぢやアお母さん、一度僕に話させて御覽なさい、ッて賴んで見ました。母は大分不安さうで、馴れた私でさへこんなふうだから、まだお前になんか、ッて初めのうちは承知してくれませんでしたが、いや、自分にやあ自分だけの考へがあるから、是非ためさせてくれッて、無理矢理承知させました。

そして、いよいよ或る日小作人の代表に會つて、母に代つて話して見たんです。どうせ僕に計略なんか出來ッこもなければ、又今まで見聞きした穢い掛け合ひにやあ、ヘドの出るほど不愉快を感じてゐました。至誠天に通ず、もをかしいが、出來るか出來ないか、とにかく眞正面から自分の氣もちを訴へて見やうと思つて、相手の男と膝詰眞ばたで對き合ふと（ひどいもんで、今でも小作人達は決して地主の家の疊へはあがらない仕來りなんです。）からぶちまけて見ました。

僕は、こんな地主の子に偶然生れ合はせたが、地主なんて者の間違つてる事はようくわかつてるつもりだ。自分でも恥かしくッて仕方ない。が、とにかく今は全くあなたがたのお蔭で食べてゐる。今すぐどうしろッて云はれたとこで、どうする事も出來ない。おねがひだからどうかもう一年半ばかり待つてくれないか。さうすれば、僕も何とかして一人前のくらしを立てるつもりだし、弟も大學へ入るから、もう卒業もぢきでずッと金が要らなくなる。その時は何とでもしてあげるから、大へん氣の毒だが、……ッて、まアそんなふうに賴み込んだもんです。

いや、ほんとの氣もちです。僕達兄弟の暮しさへ立つやうになつたら、母を引き取つて、田地なんかみんな小作人達に呉れてやッてもいい、と今も思つてるんです。

ところが、如何にも變な事を云ふッて云つた顏つきで、小作人は初めからしまひまで、碌に物も云はずに、ぢッと聞いて歸つて行きました。あとで、隨分下手くそな云ひかたをしたと思つて赤くなりながら

でも、あれだけ何もかも打ち明けたからキッと少しはわかつて貰へたらう、と思つてゐると、どうして飛んでもない事になッちまつたんです。

小作人は、部落へ戻るが早いか早速みんなを寄せ集めて、地主の息子は今からからいつた、おれ達のお蔭で食つてるッていつた、ああいふ弱音を吹くとこを見ると、これからいくらでも苛めることが出來るぞ、おれ達アきつと勝てるぞッて、まるで反對に煽動したもんです。それを聞いて、仲間はワーッていふ大元氣で、みんないよいよ決心の臍を固める、結束はますます強固になる、ッて結果に終つたんです。

母は心配して、小作人との會見の時も、初めからしまひまでヂッと傍で聞いてゐてあとで深い溜息をついてましたが、その結果がわかると僕を呼んで暗い顏つきをしてからいふんです。お前が歸つて來た時はやッと何より力になる人間が出來た、と思つてほんとにうれしい氣がしたが考へて見るともうお前が戻つたんぢやとても駄目だ、いよいよその時が來たんだ——。

何の事か初めちッともわからなかつたんですが、母の話によると、僕の氣質が、僕のホンの小さな時なくなつた父にそッくりなんですッて。父は、母のとこへ養子に貰はれて來た人間ですが、中學校の國語漢文の教師なぞまでした、地方ではかなり學問のある、極の好人物だつたさうです。地面を引き繼ぎながら、小作なんかの事はまるッきりうッちやつて母任せにして、自分は小作人達と酒を飲んだり本をよんだり、釣をしたりして、悠々として世間離れの生涯を送つたさうです。そのくせ小作人達から泣きつかれたりすると、うん、よしよしで、何でも、かんでも承知して、あと散々母を手古摺らせたもんですッて、お蔭で母の手でも尻拭ひが出來ずに、大分先祖傳來の土地もなくしたさうですが、爭はれない事に、僕はその親父の性質に生き寫しだッていふんです。

母は、恐怖に打たれたやうに話しました。さうやつて二代目にかがつて、とうと土地がみんな離れるんぢやないか、ッていつたやうに。

——、誰が見たッて僕はかういふ百姓づらですが、子供の時は、殊に人並はづれて大きな額を持つてたさうです。さういふ廣い額はどッさり地面を持つ證據だ、この子は、大きくなつたらきッと立派な地主になれるだらうッて、母や親類達は大よろこびをしたもんですッて。案に相違して、飛んでもない相續人が出來あがつたもんです。

一寸ここで母の事を話しますが、一體母は幾人かの妹姉の末ッ子に生れながら、姉妹一番のシッカリ者だッて評判を取つてゐます。子供の教育なんかも、非常に力を入れて來たもんです。ほかの姉さん——僕に取つては伯母さん達は、揃ひも揃つて淫蕩な女ばかりです。もう大抵亡くなつて了ひましたが、今でもいろんな噂が殘つてゐる位です。たとへば墮胎の評判とか、赤んぼを殺した話とか。……もつともこれは僕の地方の一般的風習にも依つてゐたでせう、今でも古い家に

は昔の名殘を留めて納戸部屋ッてものがどこにでもきッとありますがそこが娘達の寢る場所で夜這ひの男が自由に這入るのに任せたもんださうです。それを防ぐ事は、昔はほとんど出來なかつたさうです。

とにかくさういふなかで、母一人は誰からも何ともいはれない位しッかり身を守つて來た女です。まあ男まさりッて型でせう。ところが、それでゐてーーッていふよりは、やつぱり遺傳らしいんですが、時々ヒステリカルになる事があります。一度なんぞ、ほんとに氣がちがつた事があります。長いあひだ寡婦を立てとほして、いろんな暮しの苦勞をひとりで背負つて來たんですから、いくら氣丈夫でも無理はないんでせう。

今でもどうかすると、少し調子が變ぢやアないかッて思ふ時がありますが、その僕の會見の手際に失望した時の母の樣子には、思はずゾッとさせられるやうな或る物がありました。とても暗い顏つきでした。なまじおこられたりするより、どんなに僕は淋しく、又自分の力に對する自信を失したか知れません。正直なところ、生れてその時ほど自分の無力を痛感した事はありません。

然しだんだん見てゐると、母のやりかたにも隨分ずるい所があるんです。とにかく僕はもう二十幾つで、名義から云つても立派に戸主になつてるんですが、家の金や經濟の事は一切母が握つてゐて、僕には何の實際の權利も與へてゐないんです。母にして見れば、まだ年も若く勉強中の身體で、おまけに何の世間的な經驗もない人間を、なまじそんな事に關係させるのは不安心も不安心なら、勉強の邪魔にもなると考への上の事でせうが、勝手に僕の印鑑なぞを使ひながら、ただ學校の當てがひ扶持ッきりくれてゐません。そんな事は、法律上からいつたら立派に文書僞造とかいふ罪になりませんか。

そのくせ他人との掛け合ひの時は、きまつて、息子に相談してから御返事しませう。ッていふんです。それが、困つた時の母の奥の手らしいんです。ところが、實際僕に相談した事なんか一度だッてありません。でも世間ぢやあ、母の言葉をそのまま信じてゐる爲め、僕は飛んだ誤解を受けてるんです。

何しろその邊で、東京の、おまけに大學へなんぞ行つてゐる者は、ほかに一寸ないとこへ持つて來て、まだ國の中學にゐる時分から、僕はよく地方の新聞へなんか投書して、文學や社會問題方面の侃諤の議論を發表して來たもんです。田舍はどこも同じ狹い土地ですから、それを人が知つてゐます。なのに、母の小作人との談判にやあ、いつでも僕の名前が引き合ひに出されるでせう。ですから、今度國へ歸つて友達なぞに會ふと幾人もから非難の言葉を聞かされました。「君は、口でいふ事と實際におこなふ事とまるでちがつてるあいつはうそつきだッて、みんな評判してるよ」

さういはれた時の口惜しさッてありません。少しでも事實があるなら兎に角、全然覺えのない事でせう。どころか、むしろ僕は母を責めてるぢやありませんか。僕は早速母を怒鳴りつけてやりました。と母

はほんとに濟まなかつた、でも、さういふよりほかいひ逃れやうがなかつたんだから勘辨してくれ、ツて泣くんです。……さういはれて見りやあ、なるほど無理もなかつたらうツて氣になります。そとからは攻められる、中からはやられる、まつたく母の立場は容易ぢやアないでせう。

小作人や宅地の人間や地主仲間のイキサツは、これでザツと御話ししましたが、そのほか一般の村の連中からも母は問題にされてゐるんです。丁度、村の消防道具を入れる小屋を新築する事になつたんです、が、火事の時車を自由に曳き出したりする餘地の爲め、その前の道を取りひろげる必要が起つたんです、ところが、僕の家の地面がそれに沿つてるもんですから、どうか寄附してくれツて申し込んで來たんです。母も、村全體の事だし、寄附するつもりでゐたんですが、例の癖で一應東京の息子へ問ひ合はせてからツてぐづぐづしてゐるあひだに火の手が擧がつて來たんです。

あそこの家で意地惡をいつて承知してくれないから、お蔭でおそろしく不自由な道が出來あがッちまつた、さういふ横道な氣もちなら、それでいい、その代り、今後もしあそこの家が火事にでもなつたら、決して消防してやらない事にしろ。どんなに燃えやうが抛つておけッていひ合はせたんです。そればかりか、家の地面境に沿つてぴツたり櫻の並木を植ゑつけました。おもてむきは景色をよくする爲めッていふんですが、その實、うちの地面の土を枯らしてやらうツて魂膽です

そんな櫻なぞ植ゑれば、ひどく根が張つて、傍の地味が見る見る惡くなるんださうです。それも母の惡い癖の結果で、いはば自業自得にはちがひありませんが、何しろ女一人で、實際母の手には餘つてるんです。孤影落寞とでもいふか、かうしてあらゆる方面から傾きかけて行く家を見ると、一種物凄い感じになりました。

取り越し苦勞かも知れませんが、もしほんとに火事でも起きたらどうなるでせう。何しろ舊家だけ、僕の家は大きなシツカリしたもんです。庭も可成りあつて、眞中に素敵な黒松が龍のやうにのたくツてゐます。これは家の何よりの誇りで、僕の地方では古い家になくてならない物の一つです。その全體が、背後に山を控へた高見に立つてゐるんですから、庭先きから見渡すと、部落の樣子は一目です。と一緒に下の方からも、亦どこからでも、まるで目印のやうに家が見えます。そいつが餘計いけないんです。昔地主が威張つてた時代なら兎に角、今のやうになつちやあ朝晩も目の敵にされるんですから。――それを考へると、家の中にゐながらも身體がすくむやうです。

もしそいつが火事にでもなつたら、ただでさへ水利の惡いところを一嘗めに定まつてます。その申し合はせの話を聞いてから、僕は夜寢ても氣味の惡い夢を見てまゐりました。いよいよ敵愾心に燃えた、例のはげしい部落の若者がみんなの寢靜まつた隙をねらツてそツと忍び寄つて來て家の一部へ石油をかけて火を擦るとパチパチと見る見る古い家が眞ッ赤な雲につつまれて、噴水のやうに火の子を振り撒きはじ

める。部落の方から見あげると、實に何ともいへない壯觀です。長いあひだ怨みぬいた團體が焼けるんだ、離れてはゐるし、自分達にやあ何の飛び火の心配もない、みんな手を打つて見物してゐるうち、さしもの大屋臺がすツかり灰になつて、松の木も何も立つたまま眞ツ黒く炭になる。と、又みんなで聲を揃へて歡呼する——。

そんな夢にうなされて、水のやうな冷たい汗を掻いた事もありました。眞ツ暗な中で目をさますと思はずホッとしながら、でもこれがいつまで夢で濟むか、と、又餘計暗い氣もちになるんです。

そんなわけで、僕達はもう出來るだけ小作人達の氣もちをこぢらせないやうにと、意氣地なくもそればかり考へるやうになッちまひました、が、又生憎な奴がゐるんです。丁度隣りの家は親類ですが、そこでは此の頃花崗岩の切り出しを始めて、東京や大阪方面へドンドン送り出してぼろい儲けをしてゐます。そのウンと金が入るあまりに、丁度僕と同じ年恰好の息子の奴め、毎晩近くのH市へ茶屋遊びに出かけるんです。そして自動車に乘つて、夜おそくブウブウすさまじい音を立てて坂を驅けあがつて來るんです。晝は又晝で、チヤラチヤラ、マンドリンを抱へて彈き歩くんです。そんな事をすると人目について、ただでさへ氣が荒くなつてゐる人間達を焚つけるやうなもんだからよせ、ッていふんですが、いくらいつても聞き入れないんです。

部落の連中は、そんな僕の氣もちがどうだらうと、やつぱり親類一味と思つてゐますからね。そのくせ、花崗岩の切り出しにはかなり人手も要り、金にもなりますから、連中はそんな人目を憚らない息子の樣子を見ても、それほど惡くは思つてゐないらしいんです。却つて、何もしない僕達の方を二重に惡く考へてゐるらしいんです。落ち目に祟目ツてまつたく助からない氣がします。

祟目ツていへば、こんな事もあるんです。

家の裏山はみんな僕のところの所有ですが、その全體の眺めが、冬で木の葉が落ちたり傷んだりしてゐるせいもあるでせうが、ひどく地が赤く透いて見えるんです。母に聞いて見ると、やつぱり木を盜まれるからださうです。木を伐られないまでも、落葉や枯枝は綺麗にみんなさらッて行くから、それで土の肌が透くやうになる、それまでやかましくいふと又部落の感情を掘るから、いはば見て見ない振りだ、ッていふんです。實際冬の眞ん中ではあり、貧乏な小作人達にやあ焚物が足りないのはわかり切つてますからね。

然し木まで無代で伐られちや堪りませんから、それは叱言をいふんですが、何しろ小さくても山一つです。始終は目も屆かなく、おまけに裏の方からも登れるもんですから、そつちはわかりません。時たま見廻る位が關の山な爲め、裏山は殊にひどい荒らされやうです。その寂しい哀れな眺めには思はず嘆息しました。

が、それよりもッと不愉快な事が起つて來ました。

僕の地方の特別な事かも知れませんが、昔から禁伐地ッてものがあちこちに定めてあります。一口に「砂止め」ッて呼んでますが、山裾

の或る部分を仕切つて村ぢうのいひ合はせで決して誰にも伐らせない事にしてあるんです。何しろ中國の例の赤土の地でせう、ところどころ土肌がむけて、崩れた砂がまるで學校の運動場のやうに擴がつてゐる場所がありますが、その砂がよそへ流れ出して田や畑の荒廢するのを防ぐ爲め周圍に樹を植ゑて、それは決して伐らせないので、みんな大木になつてるんです。

　ところが、今度近くのH市の大都市計畫で、僕達の村も市へ編入される事に定まつたんです。と一緒に、例の禁伐地も市有になるツて噂が立つたんです。そこで、今まで半分個人の、半分村の所有のやうになつてゐた場所について、動揺が起りました。實際は、市の方ではまだそんな細かい調査は手をつけられずにゐたんですが、ゴタゴタにまぎれて盛んに盗伐が始まりました。——何も市の持ち物になつたからツて、木が要らなくなつたわけぢやァなく、その大事な圍ひをなくしでもしたら、村ぢう取り返しのつかない事になるのはわかり切つてるのを、むざむざ市へ只取りされる位なら、ツていつた人間の心の淺間しさから、そんな愚かしい眞似をするんです。さうなつて來ると、持主は又抛つておくだけ損です。で、地主連中もドンドン伐り出しました。

　その流行を見て、僕の家へも受人の一人がやつて來て、勿體ない話だから早く伐つた方がいい、置けば置くだけ見す見す損だツて、頻りに母を勸めるんです。で、つい母もその口に乘つて、うちの「砂止め」の樹の中の、大きな松を三四本だけ賣る約束をしました。

　と、早速大工達が人を連れて來て、その松の根本のまはりへすツかり、鋸を入れてから、僕の家へ來てかういふんです。どうもあいつを倒すにやあ外の樹が邪魔で仕方がないから、面倒くさいが序に伐ります、左樣御承知おき下さい——。

　さあ母はびツくりして、ぢやあ約束がちがふ、もし又さうなら、何故鋸を入れる前一應相談に來て下さらなかつた？ツて責めると、いや、初めはどうにか行くだらうと思つてゐたが、だんだん伐らなければ駄目な事がわかつたんだ、ツていふんです。それはこつちの知らない事、何とか外の木は伐らずに濟ませてくれないか、ツて頼んでも、仕事の爲めにやアどうでも伐らせて貰はなけりや困る、の一點張りです。

　で、とうと母も我を折つて、ぢやあ仕方ないから伐つてもいい、がその餘分な木はここへ運んでくれ、ツて請求すると、そいつは出來ない伐るだけでさへ餘分な骨折りのとこへ、運ぶ手間までは掛けられない、ツてツていふなら、うんと手間賃を貰はうツて調子です。まるで盗人に追ひ錢みたやうなハメぢやありませんか。さすがの母もあんまりひどい相手のいひ分に腹を立てて、ぢやあ勝手になさい、ツていひ切つたもんです。

　と、得たり賢しとばかり、早速大工は外の樹もみんな伐つちまつたんです。眞赤な綺麗な實のついた、大きなアオキなんかも交つてゐましたが、そんなもの迄掘り出して、圖々しくも自分の家へ曳いて行つ

ちまつたんです。
　その翌日、丁度僕が大工の家の前を通ると、例のアオキがちやんと庭へ置いてあるぢやありませんか。僕もその時は何ともいへず腹が立つて、家へ歸るなり母にいふと、母も口惜しがつて涙をこぼしました。で、このまま棄てておくのはあんまり殘念だから、何とか手つづきをしやう、ッていつてゐると、丁度ヒョッコリ、例の口を切つた受人が訪ねて來ました。母は早速その話をして、あなたにも御禮をしなくちやアいけないが、兎に角かういふ事になつて了つた、ッて怨みまじりに訴へると、相手はシヤアシヤアし切つたもんです。いえ、そんなら私はそのアオキを頂戴しませう、ッていふんです。「そんなら」ッてのは、「御禮代りに」ッて意味です。あいた口がふさがらない、ッて言葉どほりです。受人と大工とのあひだにやあ、初めッからちやんと手管が定まつてゐて、かうしたらあゝするッてすつかりグルになつてたんです。母はマンマとその手に乘つたんです。そして長い年數を經た、氣もちからいつても實用からいつても金に替へられない大事な木を、ホンの端た金でみんなふんだくられて、おまけに無斷伐採のヒケ目を背負はなければならなくなつちまつたんです。
　何て圖々しくも狡い手口でせう。母や僕の氣の弱さと無知へ附け込んで、まつたく「いい都合に」ヤッちまつたんです。
　さういつた事を一々御話すればキリがありません。これぢやあ、どんな人間だッて正直一方にくらすわけにや行きません。それは破滅と同じですからね。僕は母のずるい口振りを見て、先祖代々の地主の血が知らず識らずに流れてゐる爲めどうしやうもないんだ、と最初考へましたが、だんだん周圍の樣子を見聞きするにつれて、血も血ながらなるほどかういふ中にゐちやあ誰でもさうならざるを得ないと思ひ出しました。――でもまだ母は見込みがありますが、僕はとても駄目です。小作爭議にしろ、とても僕の手にやあおへません。その世界で平氣でくらして行くには、尠くも土着の地主達の狡さと策略の標準まで行かなくちやあ問題になりません。そんな修業をこれからする？‥‥それこそ眞ッぴらです。なまじ教養を受けただけ、もう資格もなさそうです。
　といつて、では思ひ切つて一切の地主階級に反抗して、小作人達の爲めに立つか――それもいろんな事情が許しません。みんなくだらない事情かも知れません。それにまだ若い癖に、それッ位の決心がつかないか、ッていはれるかも知れませんが、たとへ僕が現在の地盤を離れたとこで、やつぱり同じ無力な一人に過ぎないぢやありませんか。もしほんとに一切を抛つて虐げられてゐる人達の味方になつて働けたら僕だッてどんなに愉快でせう。それも出來ず、あれも出來ず、ただ間へ挾まつて悶えるばかりです。ロシアの知識階級にも昔大分さういふのがゐたやうですが、それが今自分の實際の運命に落ちかかつて來やうとは？
　僕はもう半分自棄糞の、半分銷沈して仕様ない氣もちをまぎらせる

爲めに、妙な事に興味を持ち出しました。秘密の繪草紙に――

それには憶ひ出があるんです、昔、まだ母の母――僕をひどく可愛がつてくれた祖母が生きてゐた時分の事ですが、彼女はいつでも佛壇の横ッちよへ菓子を載ッけておいて、僕がせびるとそこから取つてくれたもんです。何しろちよッと高い場所ですから、子供には背が屆かない、至極恰好な小さな藏だつたんです。ところが、或る日のこと祖母がどこかへ行つた留守に、ひどくそいつが欲しくなつて、隅ッこの方から踏み臺を見つけて來て美事よぢあがつて掠奪したんです。で、そのまま降りりやアよかつたんですが、菓子の傍に一つ箱が置いてあります。祖母や母に負さつたり抱かれたりして菓子を貰つた時、かねて目覺えてゐましたが、ただ古い桐の箱とばかり、何が入つてるかちッともわかりません。そいつを、冒險序にひどく知りたくなつて、そッと蓋を取つて見ると、意外にも三册ばかり古い本が入つてるだけぢやありませんか。で、今度はその本に大いに好奇心を動かして、いきなり開けて見ると、どうでせう、枕草紙です。

何しろ思ひ寄らない事で、おまけにそれまでそんな繪を見た事は一度もなかつたんですから、その時のおどろきッてありません。何てッたらいいか、まあ名狀すべからざる混亂とでもいふ氣もちでした。一目……二目……見るなり、わッと僕は大聲で泣き出し、と一緒に、踏み臺もろともころげ落ちました。

そのけたたましい泣き聲を聞きつけて、裏にゐた母があはてて飛んで來ました。そしてすぐ全體を見て取りました。何しろ踏み臺と一緒に例の箱の蓋があいて本が散らかッてるんですからね。――その時の母のおこりやうッてありませんでした。そんなにひどく母から叱られた覺えは今まで一度もありません。

その事件は、二十年近くの今も忘れないほど、大きな感動を與へました。僕の記憶では、何でもその繪は迚も大きい物だッた氣がします……。

不意に、僕はそいつを思ひ出したんです。或る日のこと母へ向つてその話をして、もう自分も大人になつたから見せてくれ、今もあるだらう、ッてせびつて見たんです。ところが、そんなものはない、ッて返事です。ない事があるもんか、今でもはッきり覺えてるから、ッて攻めつけると母はひどく狼狽した恰好で、ある事はあつたがもう賣つて了つた、ッていひなほすんです。それは、昔お祖母さんが嫁入つて來る時嫁入り道具と一緒にもつて來たが、（もとは、實際性教育の本だつたさうですね）お父さんがなくなつてから、お前達は男ばかりだもう入用も何もなくなつたから、欲しがられるまんま外の娘のある家へ讓つて了つた、ッていふんです。さういひながら、長い朱羅宇の煙管をポンポン火鉢の緣へ叩きつけてるんです。

勿論、そんな言葉を信じッこありません。如何にもシラを切つてる母の樣子が餘計憎らしくなつて、そんなうそをいつたッて駄目だ、どこに收つてあるか教へてくれ、さうすれば自分で探し出すから、ッ

て幾らいつても、うそぢやアない、もうない、の一點張りです。

でもどうしても僕が信用しないので、ぢやアどこでも探して御覽ていふんです。僕も半分意地になつて、よし、きッと探し出して見せるッて、それから家ぢう、まるで家宅搜索見たいに検べ廻つたんです。ここらに、と思ふ場所は殘らず掻き廻しました。二階――といつても天井裏の、物置き見たやうになつてる所まで、鼠のやうにほじくり歩きました。いろんな古い物を入れた長持が二棹ばかりありますが、そいつなんぞ底の底まで中味を出して調べて見たもんです。何しろ暗い大きな家ですから、まる半日のうへ掛りました。が、でも不思議とどうしても見つからないんです。

疲れてがッかりして降りて來ると、母が、どうだ、あつたッか、ッて訊くでせう。いや、ない、どうも奇體だッて首をかしげると、それ御覽、ッて微に笑つてるんです。

僕は變に夢中になつて、翌日も又半日潰して埃だらけになつて這ひ廻りました。が、やつぱり出て來ません。で、前へ戻つて又母をせびッたもんです。東京なぞで、もう友だちから借りたりしてそんな物は幾らでも見てゐるんだ、ただ、家の古い奴がどんな物か、それを知りたい、なまじ今かくしてゐたッて、どうせ見せるもんぢやアないか、自分が戸主の事だし……そんなところへ「戸主」も變ですが、躍起になつていふと、とうと母も我を折つて、そんなにいふんならッて、二階へあがつてどこからか一册もち出して來ました。「繪本實娛經」ッて奴です。そして如何にも恥かしさうに僕の前へ置きながら、これも大事にしておくべきもんだ、今要ればいい價になるから、ッていふんです。

その言葉を聞いて、僕は何ともいへず變な氣もちになりました。家運が傾いて來て、そんな事まで母に思はすやうになつたか、と思つてね。

勿論、幾分はいひわけのつもりだッたんでせうが、金に替へやうなんて氣もちを口に出すだけでも、おどろくべき變りやうです。――本の感じも、昔僕の見た物かどうかわからない位變つてました。當時は何かすばらしい大型の、古いながら沈も色どりの絢爛な物だッたつもりが、一向小型の、むしろ燻んだ澁い色どりの本ぢやありませんか、勿論僕の考へちがひだッんでせうが、一寸がッかりしました。……外にもう二册位尠くもなくちやならない、と思つて、うんと母を攻めつけて見たんですが、いや、一册きりだッて頑張つてききません。ほんとでせうか。それも僕の見誤りとは思へませんが。

然しどうも仕方ありませんから、その一册を、それから暇さへあれば開けて氣もちをまぎらせてゐました。もう何もかも眞ッ暗になつて氣が滅入つて仕方ないやうな時でも、不思議とそいつを見てゐるとすッかり忘れて、了ふんです。實際の世の中から遠ざかッて、まるで古い藝術の世界を翔けめぐつてゐるやうな氣もちになれるんでどれ位助かつたか、知れません。

さうやつて十日ばかり滯在して、又ひとり東京へ戻つて來ました。僕がゐたところで、どうせ何の役にも立ちはせず、どころか、却つて母を困らせるだけの事ですからね。あと一人だけ母を殘しておくのは、例の氣の狂つた事件もあり一寸心配でならない氣もしましたが、さうかッて一緒に戻る事は出來ず、まあ出來るだけ氣らくにして、どうか自分にも小作人にも無理をしないやうにしてくれ、ッて頼んで來ました。──例の草紙も序にもつて來て、毎晩お酒でわづかに氣もちを慰めてゐます。

歸ると、僕は早速U市の高等學校へ行つてゐる弟の家を訪ねました。今まで、母が監督やら世話やらで一緒に住んでゐた家です。何しろ僕と同じやうに、弟も家賃や何かでひどく困つて、國の方の樣子を知りたがつてゐましたからね。

で、その借家へ行くと、丁度學校から歸つて來る彼と戸口のところで出會ひました。──弟は、同じ兄弟でゐながら僕とはまるで身體つきも性質もちがつてゐます。まだ二十一になつたばかりですが、僕よりずッと背も高けりやあ、堅肥りに肥つて、すばらしい體格です。一體身體の丈夫なとこへもつて來て、運動ずきで、野球で御座れ、テニスで御座れ、擊劍柔道何でも御座れで、然もみんな實に上手です。中でもテニスなぞ學校の指折りの選手で、まだ二年のくせに部の副將か何かになつてます。それで頭もよく、今クラスで二番の成績です。運動をしながらですから、よつぽど頭はシッカリしてゐると見えるんです、が、まだ母に傍にゐて貰ふ位ですから、氣もちの方はカラお坊ちやんで、世の中の事は何も知らない代り（それは僕も同然ですが）無邪氣にのびのびと、まるで若竹のやうな元氣な性質です。まだ色氣なぞもなけりやあ、なりふりもてんで構はない、質實剛健て言葉そッくりです。

それほど僕とちがつてゐながら、奇妙に二人仲がいいんです。母には、何しろ時代もちがつてゐるし僕達の氣もちをわかつて貰へない事も隨分ありますが、僕達兄弟は誰よりわかり合つてるんです。で、昔から、何か僕が母に反對すると弟はきッと僕の肩をもつ又弟が何かせびる時はきつと僕が口添へをしてやる、ッていつた調子で、母でさへ、どうしてお前達はさう仲がいいんだらうッて不思議がつてる位です──。

彼奴、僕の顏をみると迚も元氣のいい顏で、「やあ兄さん、どうだッた？」ッてきくんです。まアあがつてから話さうッていつて家の中へ入ると、どうでせう、室の眞ん中へは亂暴に敷きッ放した萬年床……それはかりならですが、室ぢう泥だらけぢやありませんか。

「どうしたんだ。こりや一體？」泥棒でも入つたのかと思つて訊くと、さつき學校から本を取りに來た時、面倒くさいから泥靴のままあがつたんだッて返事です。僕はあきれ返つて、そんな亂暴な奴があるもんか、おまけにお母さんの留守をいい事にして、こんなに床も片づけなかつたり、本も散らかし放しにしたり、歸つて來たらうんと叱られる

ぞッていふと、叱られたッて構ふもんかッて平氣の平左です。

仕方ないから、その夜其の上へ腰をおろしながら、いろいろ國の方の話を聞かせてやりました。僕の決心も話しました。僕は、もう大學をやめやうと腹を定めたんです。一體、前ッから學校に愛想をつかして、去年の半ヶにも退學するつて云ひ出して可なり母を手古摺らせたのを、母に泣きつかれたり、又主任の敎授からいはれたりしてひとまづいふとほりになつてゐたんですが、今度國へ歸つて樣子をみると、もう學校どころの騷ぎぢやありません。そんな安閑とした時期でもなけりや、又此の後學校にゐればゐるだけ、費用もかかり年月も要り、僕の氣もちと行ひはますます矛盾せざるを得なくなるぢやありませんか。で、前の決心もあり、斷然學校を出ちまつて、どんな仕事でもして自分だけの暮しを立てやうと定めたんです。

その事を、國にゐるあひだに母に話すと、あれほど去年反對した母が、如何にも思ひ切れなさうにしながら今度は承知してくれました。それだけ、わづか半年あまりのあひだに、周圍の事情がすつかり變つて了つたんです。人間の運命ッて、まつたく何時どうなるかわからないもんですね――。

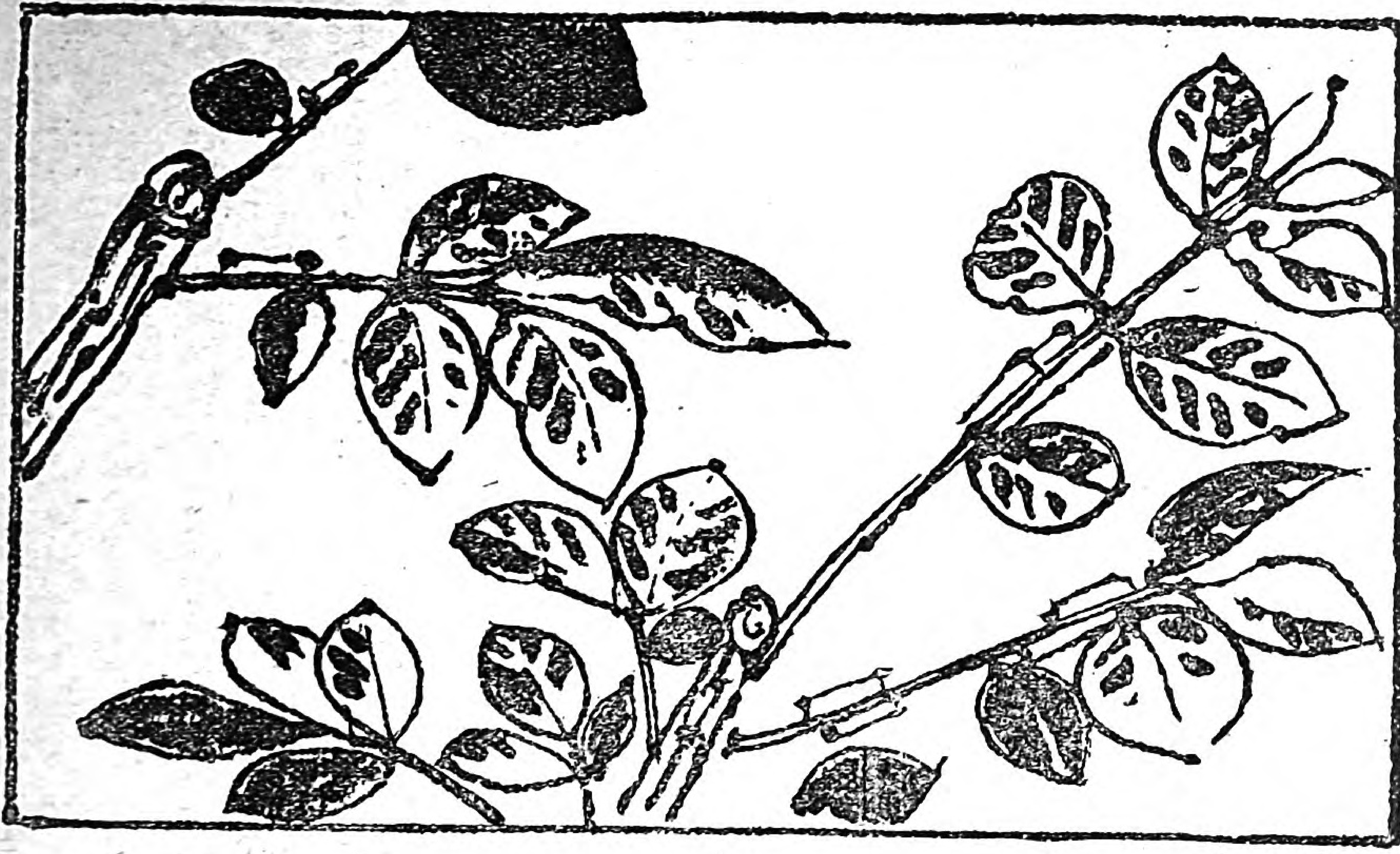
で、その話をすると、弟はひどく昂奮して、「いや、そんな事をいはずと兄さんは勉强をつづけてくれ。おれこそ、いざとなつたら學校なんぞすッぽかして働いてみせる。どんな事だッてして食つてみせる兄さん！此の腕をみてくれ、此の腕を！」ッて、いきなり洋服をまくりあげると、こぶこぶと鋼の筋のやうに固く盛りあがつた太い腕を出して、片手でポンポン叩いてみせるんです。

「なかなかいい腕だな。」ッて賞めてやると、いよいよ得意になつて、自分は今一度に十三杯づつ飯を食ふ、(母のゐないあひだ、彼奴は三度〳〵寄宿舍へ食べに行つてるんです)どんな事があつたッて、決してへこたれない自信がある、「いくらでも働いて、兄さんの學資位きッと稼いでやる！」ッて、まるで虹のやうな元氣です。

それをみると、それが彼の空想にしろ何にしろ、まつたく羨ましくなりました。自分の弱い身體と無氣力に引き較べて。――で、一方明るさ其の物のやうな彼の調子に元氣づけられながら、片方僕はますます氣銷沈して、「おれはもう駄目だ」ッて、思はず太い息をつきました。

「何が駄目な事があるもんか。兄さん！もッと元氣を出せ、元氣を出せ！」ッて、口に啣へた卷煙草を思はず落ッことすほど、彼奴拳固で僕の肩を叩きつけました。

(一九二七)



誘惑

——或シナリオ——

芥川龍之介

1

天主教徒の古暦の一枚、その上に見えるのはかう云ふ文字である。——

御出生来千六百三十四年。せばすちあん記し奉る。

　二月。小

二十六日。さんたまりやの御つげの日。

二十七日、どみいご。

　三月。大。

五日、どみいご、ふらんしすこ。

十二日。………

2

日本の南部の或山みち。大きい樟の木の枝を張つた向うに洞穴の口が一つ見える。暫らくたつてから木樵りが二人、この山みちを下つて来る。木樵りの一人は洞穴を指さし、

もう一人に何か話しかける。それから二人とも十字を切り、はるかに洞穴を禮拜する。

3

この大きい樟の木の梢。尻つ尾の長い猿が一匹、或枝の上に坐つたまま、じつと遠い海を見守つてゐる。海の上には帆前船が一艘。帆前船はこちらへ進んで來るらしい。

4

海を走つてゐる帆前船が一艘。

5

この帆前船の内部。紅毛人の水夫が二人、檣の下に賽を轉がしてゐる。そのうちに勝負の爭ひを生じ、一人の水夫は飛び立つが早いか、もう一人の水夫の横腹へずぶりとナイフを突き立ててしまふ。大勢の水夫は二人のまはりへ四方八方から集まつて來る。

6

仰向けになつた水夫の死に顔。突然その鼻の穴から尻つ尾の長い猿が一匹、顋の上へ這ひ出して來る。が、あたりを見まはしたと思ふと忽ち又鼻の穴の中へはひつてしまふ。

7

上から斜めに見おろした海面。急にどこか空中から水夫の死骸が一つ落ちて來る。死骸は水けぶりの立つた中に忽ち姿を失つてしまふ。あとには唯浪の上に猿が一匹もがいてゐるばかり。

8

海の向うに見える半島。

9

前の山みちにある樟の木の梢。猿はやはり熱心に海の上の帆前船を眺めてゐる。が、やがて兩手を擧げ、顏中に喜びを漲らせる。すると猿がもう一匹、いつか同じ枝の上にゆらりと腰をおろしてゐる。二匹の猿は手眞似をしながら、暫く何か話しつづける。それから後に來た猿は長い尻つ尾を枝にまきつけ、ぶらりと宙に下つたまま、樟の木の枝や葉に遮られた向うを目の上に手をやつて眺めはじめる。

10

前の洞穴の外部。芭蕉や竹の茂つた外には何もそこに動いてゐないそのうちにだんだん日の暮になる。すると洞穴の中から蝙蝠が一匹ひらひらと空へ舞ひ上つて行く。

11

この洞穴の内部。「さん・せばすちあん」がたつた一人岩の壁の上に懸けた十字架の前に祈つてゐる。「さん・せばすちあん」は黒い法服を着た、四十に近い日本人。火をともした一本の蠟燭は机だの水瓶だのを照らしてゐる。

12

蠟燭の火かげの落ちた岩の壁。そこには勿論はつきりと「さん・せばすちあん」の横顔も映つてゐる。その横顔の頸すぢを尻つ尾の長い猿

の影が一つ靜かに頭の上へ登りはじめる。續いて又同じ猿の影が一つ。

13

「さん・せばすちあん」の組み合せた兩手。彼の兩手はいつの間にか紅毛人のパイプを握つてゐる。パイプは始めは火をつけてゐない。が、見る見る空中へ煙草の煙を擧げはじめる。……

14

前の洞穴の內部。「さん・せばすちあん」は急に立ち上り、パイプを岩の上へ投げつけてしまふ。しかしパイプは不相變煙草の煙を立ち昇らせてゐる。彼は驚きを示したまま、二度とパイプに近よらない。

15

岩の上に落ちたパイプ。パイプ徐ろに酒を入れた「ふらすこ」の瓶に變つてしまふ。のみならずその又「ふらすこ」の瓶も一きれの「花かすていら」に變つてしまふ。最後にその「花かすてら」さへ今はもう食物ではない。そこには年の若い傾城が一人、艶しい膝を崩したまま、斜めに誰かの顏を見上げてゐる。……

16

「さん・せばすちあん」の上半身。彼は急に十字を切る。それからほつとした表情を浮かべる。

17

尻つ尾の長い猿が二匹一本の蠟燭の下に蹲つてゐる。どちらも顏をしかめながら。

18

前の洞穴の內部。「さん・せばすちあん」はもう一度十字架の前に祈つてゐる。そこへ大きい梟が一羽さつとどこからか舞ひ下つて來ると、一煽ぎに蠟燭の火を消してしまふ。が、一すぢの月の光だけはかすかに十字架を照らしてゐる。

19

岩の壁の上に懸けた十字架。十字架は又十字の格子を嵌めた長方形の窓に變りはじめる。長方形の窓の外は茅葺きの家が一つある風景。家のまはりには誰もゐない。そのうちに家はおのづから窓の前へ近よりはじめる。同時に又家の內部も見えはじめる。そこには「さん・せばすちあん」に似た婆さんが一人片手に糸車をまはしながら、片手に實のなつた櫻の枝を持ち、二三歲の子供を遊ばせてゐる。子供も亦彼の子に違ひない。が、家の內部は勿論、彼等もやはり霧のやうに長方形の窓を突きぬけてしまふ。今度見えるのは家の後ろの畠。畠には四十に近い女が一人せつせと穗麥を刈り干してゐる。……

20

長方形の窓を覗いてゐる「さん・せばすちあん」の上半身。但し斜めに後ろを見せてゐる。明るいのは窓の外ばかり。窓の外はもう畠ではない。大勢の老若男女の頭が一面にそこに動いてゐる。その又大勢の頭の上には十字架に懸つた男女が三人高だかと兩腕を擴げてゐる。ま

ん中の十字架に懸つた男は全然彼と變りはない。彼は窓の前を離れようとし、思はずよろよろと倒れかかる。——

21

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は十字架の下の岩の上へ倒れてゐる。が、やつと顏を起し、月明りの落ちた十字架を見上げる。十字架はいつか生ひ々々しい降誕の釋迦に變つてしまふ。「さん・せばすちあん」は驚いたやうにかう云ふ釋迦を見守つた後、急に又立ち上つて十字を切る。月の光の中をかすめる、大きい一羽の梟の影。降誕の釋迦はもう一度もとの十字架に變つてゐる。……

22

前の山みち。月の光の落ちた山みちは黒いテエブルに變つてしまふ。テエブルの上にはトランプが一組み。そこへ男の手が二つ現れ、靜かにトランプを切つた上、左右へ札を配りはじめる。

23

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は頭を垂れ、洞穴の中を歩いてゐる。すると彼の頭の上へ圓光が一つかがやきはじめる。同時に又洞穴の中も徐ろに明るくなりはじめる。彼はふとこの奇蹟に氣がつき、洞穴のまん中に足を止める。始めは驚きの表情。それから徐ろに喜びの表情。彼は十字架の前にひれ伏し、もう一度熱心に祈りを捧げる。

24

「さん・せばすちあん」の右の耳。耳たぶの中には樹木が一本鬱々と圓い實をみのらせてゐる。耳の穴の中は花の咲いた草原。草は皆そよ風に動いてゐる。

25

前の洞穴の内部。但し今度は外部に面してゐる。圓光を頂いた「さん・せばすちあん」は十字架の前から立ち上り、靜かに洞穴の外へ歩いて行く。彼の姿の見えなくなつた後、十字架はおのづから岩の上へ落ちる。同時に又水瓶の中から猿が一匹躍り出し、怖わ々々十字架に近づかうとする。それからすぐにもう一匹。

26

この洞穴の外部。「さん・せばすちあん」は月の光の中に次第にこちらへ歩いて來る。彼の影は左には勿論、右にももう一つ落ちてゐる。しかもその又右の影は鍔の廣い帽子をかぶり、長いマントルをまとつてゐる。彼はその上半身に殆ど洞穴の外を塞いだ時、ちよつと立ち止まつて空を見上げる。

27

星ばかり點々とかがやいた空。突然大きい分度器が一つ上から大股に下つて來る。それは次第に下るのに從ひ、やはり次第に股を縮め、とうとう兩脚を揃へたと思ふと、徐ろに霞んで消えてしまふ。

28

廣い暗の中に懸つた幾つかの太陽。それ等の太陽のまはりには地球

が又幾つもまはつてゐる

29

前の山みち。圓光を頂いた「さん・せばすちあん」は二つの影を落したまま、靜かに山みちを下つて來る。それから樟の木の根もとに佇み、ぢつと彼の足もとを見つめる。

30

斜めに上から見おろした山みち。山みちには月の光の中に石ころが一つ轉がつてゐる。石ころは次第に石斧に變り、それから又短劍に變り、最後にピストルに變つてしまふ。しかしそれももうピストルではない。いつか又もとのやうに唯の石ころに變つてゐる。

31

前の山みち。「さん・せばすちあん」は立ち止まつたまま、やはり足もとを見つめてゐる。影の二つあることも變りはない。それから今度は頭を擧げ、樟の木の幹を眺めはじめる。……

32

月の光を受けた樟の木の幹。荒あらしい木の皮に鎧はれた幹は何も始めは現してゐない。が、次第にその上に世界に君臨した神々の顔が一つづつ鮮かに浮んで來る。最後には受難の基督の顔。最後には？――いや、「最後には」ではない。それも見る見る四つ折りにした東京××新聞に變つてしまふ。

33

前の山みちの側面。鍔の廣い帽子にマントルを着た影はおのづから眞つすぐに立ち上る。尤も立ち上つてしまつた時はもう唯の影ではない。山羊のやうに髯を伸ばした、目の鋭い紅毛人の船長である。

34

この山みち。「さん・せばすちあん」は樟の木の下に船長と何か話してゐる。彼の顔いろは重おもしい。が、船長は脣に絶えず冷笑を浮かべてゐる。彼等は暫く話した後、一しよに横みちへはひつて行く。

35

海を見おろした岬の上。彼等はそこに佇んだまま、何か熱心に話してゐる。そのうちに船長はマントルの中から望遠鏡を一つ出し、「さん・せばすちあん」に「見ろ」と云ふ手眞似をする。彼はちよつとためらつた後、望遠鏡に海の上を覗いて見る。彼等のまはりの草木は勿論、「さん・せばすちあん」の着物は海風の爲にしつきりなしに揺らいでゐる。が、船長のマントルは動いてゐない。

36

望遠鏡に映つた第一の光景。何枚も畫を懸けた部屋の中に紅毛人の男女が二人テエブルを中に話してゐる。蠟燭の光の落ちたテエブルの上には酒杯、ギタア、薔薇の花など。そこへ又紅毛人の男が一人突然この部屋の戸を押しあけ、劍を拔いてはひつて來る。もう一人の紅毛人の男も咄嗟にテエブルを離れるが早いか、短劍を拔いて相手を迎へようとする。しかしもうその時には相手の劍を心臟に受け、仰向けに

床の上へ倒れてしまふ。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、兩手に顔を抑へたまま、ぢつとこの悲劇を眺めてゐる。

37

望遠鏡に映つた第二の光景。大きい書棚などの並んだ部屋の中に紅毛人の男が一人ぼんやりと机に向つてゐる。電燈の光の落ちた机の上には書類、帳簿、雜誌など。そこへ紅毛人の子供が一人勢よく戸をあけてはひつて來る。紅毛人はこの子供を抱き、何度も顔へ接吻した後、「あちらへ行け」と云ふ手眞似をする。子供は素直に出て行つてしまふ。それから又紅毛人は机に向ひ、抽斗から何か取り出したと思ふと、急に頭のまはりに煙を生じる。

38

望遠鏡に映つた第三の光景。或露西亜人の半身像を据ゑた部屋の中には紅毛人の女が一人せつせとタイプライタアを叩いてゐる。そこへ紅毛人の婆さんが一人靜かに戸をあけて女に近より、一封の手紙を出しながら、「讀んで見ろ」と云ふ手眞似をする。女は電燈の光の中にこの手紙へ目を通すが早いか、烈しいヒステリイを起してしまふ。婆さんは呆氣にとられたまま、あとずさりに戸口へ退いて行く。

39

望遠鏡に映つた第四の光景。表現派の畫に似た部屋の中に紅毛人の男女が二人テエブルを中に話してゐる。不思議な光の落ちたテエブルの上には試驗管、藥品の壜、小さい器械など。そこへ彼等よりも背の高い、紅毛人の男の人形が一つ無氣味にもそつと戸を押しあけ、人工の花束を持つてはひつて來る。が、花束を渡さないうちに機械に故障を生じたと見え、突然男に飛びかかり、無造作に床の上へ押し倒してしまふ。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、兩手に顔を抑へたまま、急にとめどなしに笑ひはじめる。

40

望遠鏡に映つた第五の光景。今度も亦前の部屋と變りはない。唯前と變つてゐるのは誰もそこにゐないことである。そのうちに突然部屋全體は凄まじい煙の中に爆發してしまふ。あとは唯一面の焼野原ばかり。が、それも暫らくすると、一本の柳が川のほとりに生えた、草の長い野原に變りはじめる。その又野原から舞ひ上る、何羽とも知れない白鷺の一群。……

41

前の岬の上。「さん・せばすちあん」は望遠鏡を持ち、何か船長と話してゐる。船長はちよつと頭を振り、空の星を一つとつて見せる。「さんせばすちあん」は身をすさらせ、慌てて十字を切らうとする。が、今度は切れないらしい。船長は星を手の平にのせ、彼に「見ろ」と云ふ手眞似をする。

42

星をのせた船長の手の平。星は徐ろに石ころに變り、石ころは又馬鈴薯に變り、馬鈴薯は三度目に蝶に變り、蝶は最後に極く小さい軍服姿

のナポレオンに變つてしまふ。ナポレオンは手の平のまん中に立ち、ちよつとあたりを眺めた後、くるりとこちらへ背中を向けると、手の平の外へ小便をする。

43

前の山みち。「さん・せばすちあん」は船長のあとからすごすごこへ歸つて來る。船長はちよつと立ちどまり、丁度金の輪でもはづすやうに「さん・せばすちあん」の圓光をとつてしまふ。それから彼等は樟の木の下にもう一度何か話しはじめる。みちの上に落ちた圓光は徐ろに大きい懷中時計になる。時刻は二時三十分。

44

この山みちのうねつたあたり。但し今度は木や岩は勿論、山みちに立つた彼等自身も斜めに上から見おろしてゐる。月の光の中の風景はいつか無數の男女に滿ちた近代のカツフエに變つてしまふ。彼等の後ろは樂器の森。尤もまん中に立つた彼等を始め、何も彼も鱗のやうに細かい。

45

このカツフエの內部。「さん・せばすちあん」は大勢の踊り子たちにとり圍まれたまま、當惑さうにあたりを眺めてゐる。そこへ時々降つて來る花束。踊り子たちは彼に酒をすすめたり、彼の頸にぶら下つたりする。が、顏をしかめた彼はどうすることも出來ないらしい。紅毛人の船長はかう云ふ彼の眞後ろに立ち、不相變冷笑を浮かべた顏を丁度半分だけ覗かせてゐる。

46

前のカツフエの床。床の上には靴をはいた足が幾つも絶えず動いてゐる。それ等の足は又いつの間にか馬の足や鶴の足や鹿の足に變つてゐる。

47

前のカツフエの隅。金鈕の服を着た黑人が一人大きい太鼓を打つてゐる。この黑人も亦いつの間にか一本の樟の木に變つてしまふ。

48

前の山みち。船長は腕を組んだまま、樟の木の根もとに氣を失つた「さん・せばすちあん」を見おろしてゐる。それから彼を抱き起し、半ば彼を引きずるやうに向うの洞穴へ登つて行く。

49

前の洞穴の內部。但し今度も外部に面してゐる。月の光はもう落ちてゐない。が、彼等の歸つて來た時にはおのづからあたりも薄明るくなつてゐる。「さん・せばすちあん」は船長を捉へ、もう一度熱心に話しかける。船長はやはり冷笑したきり、何とも彼の言葉に答へないらしい。が、やつと二こと三ことしやべると、未だに薄暗い岩のかげを指さし、彼に「見ろ」と云ふ手眞似をする。

50

洞穴の內部の隅。髭髯のある死骸が一つ岩の壁によりかかつてゐ

る。

51

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は驚きや恐れを示し、船長に何か話しかける。船長は一こと返事をする。「さん・せばすちあん」は身をすさらせ、慌てて十字を切らうとする。が、今度も切ることは出来ない。

52

Judas ………

53

前の死骸――ユダの横顔。誰かの手はこの顔を捉へ、マッサアヂをするやうに顔を撫でる。すると頭は透明になり、丁度一枚の解剖図のやうにありありと脳髄を露してしまふ。脳髄は始めはぼんやりと三十枚の銀を映してゐる。が、その上にいつの間にかそれぞれ嘲りや憐みを帯びた使徒たちの顔も映つてゐる。のみならずそれ等の向うには家だの、湖だの、十字架だの、猥褻な形をした手だの、橄欖の枝だの、老人だの、――いろいろのものも映つてゐるらしい。………

54

前の洞穴の内部の隅。岩の壁によりかかつた死骸は徐ろに若くなりはじめ、とうとう赤児に変つてしまふ。しかしこの赤児の顔にも顎鬚だけはちやんと残つてゐる。

55

赤児の死骸の足のうら。どちらの足のうらもまん中に一輪づつ薔薇の花を描いてゐる。けれどもそれ等は見る見るうちに岩の上へ花びらを落してしまふ。

56

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は感動し、何か又船長に話しかける。船長は何とも返事をしない。が、殆ど厳粛に「さん・せばすちあん」の顔を見つめてゐる。

57

半ば帽子のかげになつた、目の鋭い船長の顔。船長は徐ろに舌を出して見せる。舌の上にはスフィンクスが一匹。

58

前の洞穴の内部の隅。岩の壁によりかかつた赤児の死骸は次第に又変りはじめ、とうとうちやんと肩車をした二匹の猿になつてしまふ。

59

前の洞穴の内部。船長は「さん・せばすちあん」に熱心に何か話しかけてゐる。が、「さん・せばすちあん」は頭を垂れたまま、船長の言葉を聞かずにゐるらしい。船長は急に彼の腕を捉へ、洞穴の外部を指さしながら、彼に「見ろ」と云ふ手真似をする。

60

月の光を受けた山中の風景。この風景はおのづから磯ぎんちやくの充満した、険しい岩むらに変つてしまふ。空中に漂ふ海月の群。しか

しそれも消えてしまひ、あとには小さい地球が一つ仄い暗の中にまはつてゐる。

61

仄い暗の中にまはつてゐる地球。地球はまはるのを緩めるのに從ひ、いつかオレンヂに變つてゐる。そこへナイフが一つ現れ、眞二つにオレンヂを截つてしまふ。白いオレンヂの截斷面は一本の磁針を現してゐる。

62

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は船長にすがつたまま、ぢつと空中を見つめてゐる。何か狂人に近い表情。船長はやはり冷笑したまま、睫毛一つ動かさない。のみならず又マントルの中から髑髏を一つ出して見せる。

63

船長の手の上に載つた髑髏。髑髏の目からは火取蟲が一つひらひらと空中へ昇つて行く。それから又三つ、二つ、五つ。

64

前の洞穴の内部の空中。空中は前後左右に飛びかふ無數の火取蟲に充ち滿ちてゐる。

65

それ等の火取蟲の一つ。火取蟲は空中を飛んでゐるうちに一羽の鷲に變つてしまふ。

66

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」はやはり船長にすがり、いつか目をつぶつてゐる。のみならず船長の腕を離れると、岩の上に倒れてしまふ。しかし又上半身を起し、もう一度船長の顏を見上げる。

67

岩の上に倒れてしまつた「さん・せばすちあん」の下半身。彼の手は體を支へながら、偶然岩の上の十字架を捉へる。始めは如何にも怯づ々々と、それから又急にしつかりと。

68

十字架をかざした「さん せばすちあん」の手。

69

後ろを向いた船長の上半身。船長は肩越しに何かを窺ひ、失望に滿ちた苦笑を浮かべる。それから靜かに顋髯を撫でる。

70

前の洞穴の内部。船長はさつさと洞穴を出、薄明るい山みちを下つて來る。從つて山みちの風景も次第に下へ移つて來る。船長の後ろからは猿が二匹。船長は樟の木の下へ來ると、ちよつと立ち止まつて帽をとり、誰か見えないものにお時宜をする。

71

前の洞穴の内部。但し今度も外部に面してゐる。しつかり十字架を握つたまま、岩の上に倒れてゐる「さん・せばすちあん」洞穴の外部は

徐ろに朝日の光を仄めかせはじめる。

72

斜めに上から見おろした岩の上の「さん・せばすちあん」の顔。彼の顔は頰の上へ徐ろに淚を流しはじめる、力のない朝日の光の中に。

73

前の山みち。朝日の光の落ちた山みちはおのづから又もとのやうに黑いテエブルに變つてしまふ。テエブルの左に並んでゐるのはスペイドの一や畫札ばかり

74

朝日の光のさしこんだ部屋。主人は丁度戶をあけて誰かを送り出したばかりである。この部屋の隅のテエブルの上には酒の罎や酒杯やトランプなど、主人はテエブルの前に坐り、卷煙草に一本火をつける。それから大きい欠伸をする。頤髯を生やした主人の顏は紅毛人の船長と變りはない。(昭和二・三・七)

後記。「さん・せばすちあん」は傳說的色彩を帶びた唯一の日本の天主敎徒である。浦川和三郞氏著「日本に於ける公敎會の復活」第十八章參照

雪國雜題

中村憲吉

雪ごもり倦みて村の札付者がまた手博奕をはじむるらしき

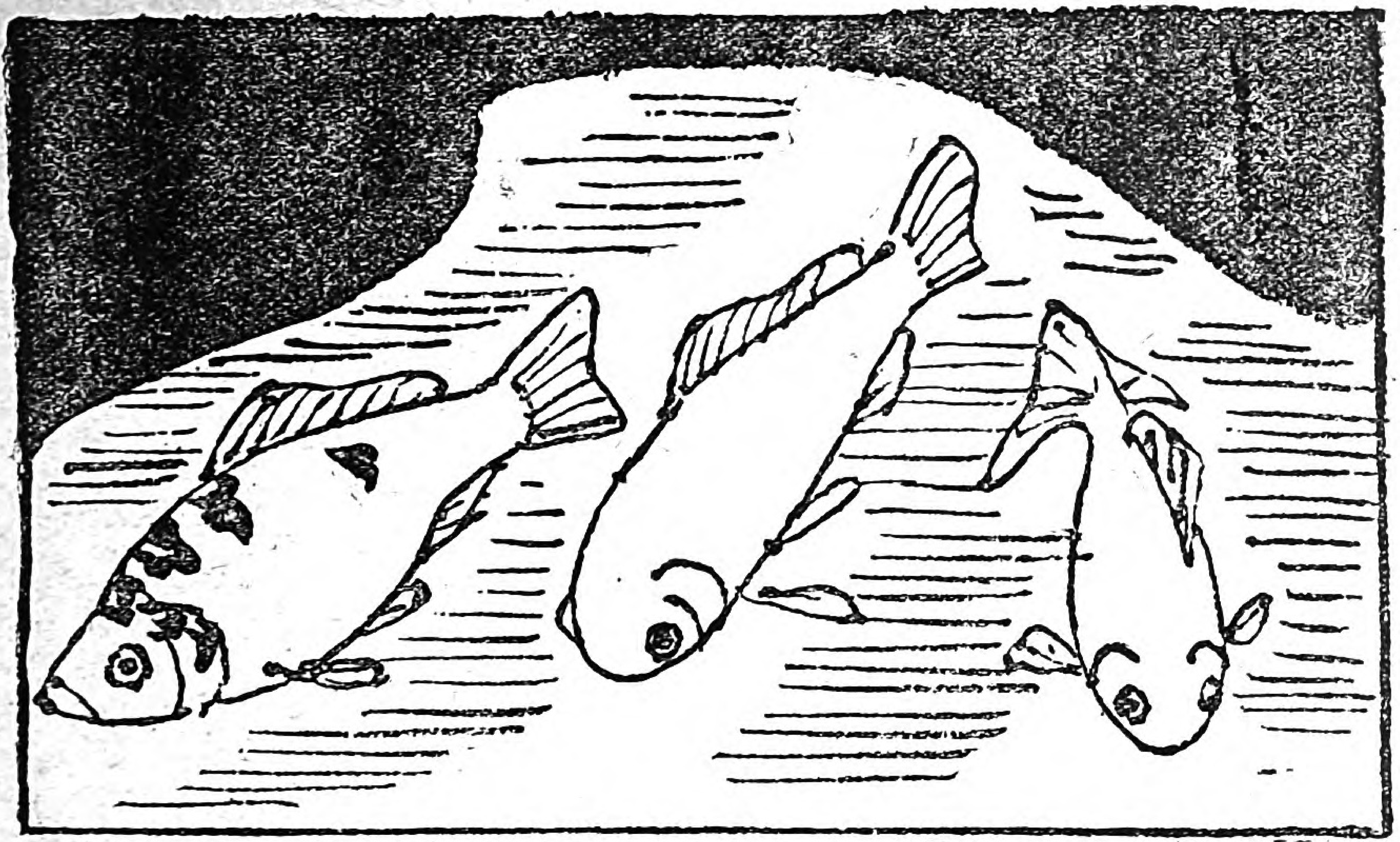
雪ふかく山なか三里出る町ゆ魚賣りに來むみち絕えにけり

降りやまぬ雪に稼げず村びとのたれかの家は飯に餓えなむか

大雪にひさしく開かぬ炭窯へ路ふみに行きひとの斃れし

雪山に今年も出たる熊は尋め櫃田のやまに見失せしと云ふ

雪晴れの大谷山にさわぐこゑ何の毛物を追ふにやあらむ



戀の軀

宇野浩二

私があんな女を氣にかけることはないぢやないか。あの女は私のたゞの仕用人ぢやないか。私の、カフエエ・リユウの、たゞのキヤツシヤアぢやないか。カフエエ・リユウといへば、大阪中の人は私を思ひ出すだらう。私がどんなに有名な女だか、どんな魅力を持つてゐる女だか。葉山龍子といへば、東京へ行つたつて、あらゆる藝術に携はつてゐる人、關心を持つてゐる人なら、誰だつて私の名を知つてゐるだらう。私はあらゆる藝術家の戀人だつた。

それが、小宮澄子は何だ。私があつての小宮ぢやないか。私のカフエエに、私の名で集まつて來る客たちに多少兎や角いはれるだけぢやないか。年が若くて、少しばかり可愛らしいといふに過ぎないのだ。それだつて、もう二十二といへば、女の盛りを過ぎてゐる。あの女が此頃あせり出したのは、女の私には分る。電話交換局にゐた時だつて、どんなことをしてたか分つたもんぢやない。それでも、交換局をお拂ひ箱になつたのを私に拾はれたお蔭で、十層倍も出世したことを忘れて、だん〳〵増長して、まるでこの家は自分がゐるので繁昌するやうに思つてゐる。私はそんな、外のカフエエのやうに、白首のやうな厭らしい女給を大勢おいて、客を集めるやうなことはしたくないのだ。私の家は私の名で客を呼んでゐるのだ。初めて來た客がカウンタアに坐つてゐる小宮を見

て私と間違へるといふのは當り前ぢやないか。小宮などと違つて、私の名は私を見たことのないどんなに大勢の人が知つてゐるか知れはしない。あの時計屋のお坊ちやんだつて、通ひ出してから三日目だかに丁度あの時京都から歸つて來た私を店で見て、初めて私を見たといつてゐた、小宮さんをあなたと早合點して、どうも變だと思つてゐましたと、嬉しいやうな吃驚したやうな顏をして、暫く私の姿を、頭の尖から足の尖まで目を見張つてゐた。時計屋の息子だけに、指輪や、帶止や頭のものゝ値踏みをしてゐたんだなんて、小宮が貞ちやんにいつてゐたさうだが、失敬な、それこそ古本屋の娘の素性を白狀してるやうなものぢやないか。あの女が今あの男に目をつけてゐること位、私の目はちやんと見通してゐる。あんな張り物のルビイの帶止なんか貰つて喜んでゐるところなど可愛らしいもんだ。私が貰つてやつた首飾の百分の一もしないものを貰つて。それで、あの男を自分のものにするつもりでゐるんだから、いゝ氣なものだ。私の家へ來たからこそ、それでも少しばかり男にちやほやされ、手紙をつけられ、送つて行つてもらふことを覺えたのぢやないか。あんな淫賣女は男にどこへ送らしてゐるか知れたものぢやない。まあ、しかしその位のことは大目に見ておいてやらなくつちやあ……。

しかしいゝ貞ちやんだつて、此頃は中々油斷が出來はしない。あの子供も顏ばかり青白くて、いつも角帽に紺サアジの制服なぞをきちんと着こなして、如何にも秀才らしく見えるが、小谷さんがいつてる通り學校の方はまるで駄目なばかしか、行つてるか行つてないか分らないといふ話だ。私は色々な秀才を見て來たし、その人たちが後に有名になるやうな人たちばかりだから、私の二十歲代の人たちは皆秀才だつたが、どこか皆骨があつた。癖があつた。あんな貞ちやんのやうな、男か女か分らないやうな人は一人もゐなかつた。小谷さんだつて、今のやうになつても、矢張りどこか違ふ。此頃家へやつて來て、小宮を相手に、椅子に糊づけになつたやうにいつ迄も動かない男たちと。第一、あの時分の人たちだつて女に、興味を持たない譯ではなかつただらうが、話すことが違つてゐた。今のやうに男のくせに白粉などをつけて來る男は一人もなかつた。そして、私はあの人たちと交つて、いつも議論をしたものだ。さういふと、私はあの頃から、文學より哲學の方に興味があつた。それでゐて、私といふ存在は藝術的だとよく人にいはれたが、それは私があの時分から友達には眞面目な、堅い人が好きで、輕蔑しながらいつもどつちかいふと男振りのいゝ、奇麗な人とばかり戀に陷ちて來た。その爲に小谷さんなど、私があの人の一生を臺なしにしてしまつたやうなものだ。小谷さんの口からさういはれた時は私は、穴にも入りたい氣持だつた。

しかし、私は此頃又小谷さんに會ふやうになつて、どんなに心の慰めになるかも知れない。あの人はもう二三年も前から此方へ歸つてゐたんださうだ。或日、貞ちやんが、あの人が厭るのを連れて來てくれた。私が貞ちやんから、あの人が住吉の姉さんの嫁づいてゐる先へ歸

つてゐると聞いたので、是非來るように頼んでおいたのだ。中々行かうといはないと貞ちやんがいふので、そんなら近い中に私の方から出かけると脅したものだから、到頭來てくれたんだが、一度來ると、毎日程來てくれるやうになつた。極りが悪かつたんだらう。男といふものは女から思ふと却つて極り悪がりが多い。それは男の方が正直だからだと、貞ちやんが柄にもない警句をいつたが、さうか知ら？　貞ちやんの一番上の、齒醫者をしてゐる兄さんと小谷さんと中學が一所だつたんださうだ。

小谷さんは全く正直な、純粹な人に違ひない。あの人は私の東京の下宿時代に、丁度此の頃のやうに毎日程私を訪ねて來ては、哲學の話をしてくれた。が、あの時分は私の一番盛んな頃で、あの人が一言か二言か喋らないうちに、もう乾度誰かやつて來た。でなければ、あの人は、玄關で私のところへ來てゐる客の人數を聞いて、聲をかけないで歸つて行つた時の方が多かつたかも知れない。だから、本當は哲學の話なんか殆どしたことがないのだが、したやうな氣がするだけなのかも知れない。

「僕はあの時分あなたのとこへ來た人たちの下駄や靴をすつかり覺えてしまつたものですよ、はツはツ〳〵〳〵」と此間もあの時分の話が出た時あの人がいつた。ぽつり〳〵、字を書いて行く位の早さで物をいふ、あの人の言ひ方が、此頃は一層あの人らしく落着いて來たが、昔の通り陰氣だ。笑ひ方にしても、何だか病人が笑ふやうな笑ひ方だ。あれでは女に好かれない。しかし、あの人がどんなに心の純粹な人だかといふことは、私が保證する。あの人は男と女が同じ部屋に寢ても、女が私は純潔だといつたら、そのまゝ信じる人だ。いや、それは私の場合、つまり戀する女の場合だけかも知れない。暫く東京の下宿で私はあの人と隣同士の部屋に住んだことがあつたが、丁度私が山根に愛想を盡かして、川原との戀が始まつてゐた頃だつたが、私が毎日芝居の稽古に出て行く時、あの人はいつでも今日は何時頃に歸つて來ます、と持前のゆつくりした調子で聞くのが、まるで子供が母親の歸りを待つやうないひ方だつた。そして、私のお腹が大きくなつてからも、あの人だけは世間の噂を聞く度に否定してくれてゐたといふことだ。その代り、私に子供が生れたと聞いた時、あの人は自分の部屋の楝木に紐をかけて、首を吊りかけたのを、まだ貞ちやんの兄さんが學生時代で、あの人が腕を組んでゐるところへ訪ねて行つたといふ話だ。私はその時は子供を生みに大阪の郊外へ來てゐたから、何にも知らなくてよかつたけれど、私の部屋が端から二番目で、あの人のが一番端だつたから、二三度あの人の部屋へ行つて知つてゐるが、あの人の部屋は斜になつた天井が端の方でなくなつて、楝木の露出しになつてゐるところがあつた。未だ山根が威張つてゐる時分で、川原と打突かると、私も未だ今ほど圖々しくない時だつたから、川原には伯父が來たからといつて、よく小谷さんのあの部屋に隱れてゐてもらつたことがあつた。山根が意地惡に髭尻をするので、そつと外の部屋へ行く

やうな顔をして、小谷さんの部屋で川原と會つたことがあつたが、その時は小谷さんは乾度坐を外して散歩に行つてくれたりした。その事を考へると小谷さんはもうあの時分には私の身持のことを厭でも知つてゐたのに違ひないのだが……。それであの人は私に一度も戀してゐるらしい手紙をくれたことはなかつた。言葉では無論のこと。しかし咲子の生れた時、初めて恐ろしいやうな戀の思ひを訴へた手紙をくれた。私はあの手紙を讀んだ時、初めて今まで知らなかつた、小谷さんの心の眞底に打突かつたやうな氣がした。しかし、それは私に何ともいへぬ氣味の悪い感じを與へた。手紙といふものは一番人間の本當の氣持が出るといふが、それだけ或種の手紙は幽靈のやな氣味の悪さがある。私のあの大型の支那鞄の中には、その幽靈が一ぱい詰まつてある。私は自分では何にも未だ書いたことはないが、あの手紙を一と纏めにして本にでも出したら、どんなに世間の人々を驚かすだらう。さうだ。私のやうな女は、自分では何にも書かない方がいゝのだ。生半可、貞ちやんなどに口述して本を書いたりしない方がいゝ。私が藝術そのものなんだから。何人の、今の一流の音樂家、畫家、小說家、詩人が、この私の胸に抱かれて、彼等の他所行でない顔を見せ、聲を聞かして行つたことだらう。

さうだ、松下正雄——あゝいふ人もその中にはある。此頃は勞働界の騷動がある毎に、何々組合委員長とか、何々同盟幹事とか、恐らしい名前を賣出して、一部の世間で大變持てはやされてゐるらしいが、私の膝の上にあの大きな身體を投げ出さうとして、自分の身體に氣兼をして、傍にあつた卓子の上に兩手を投げ出して、どうか川原を思ひ切つて自分の所へ來てくれといひながら、子供のやうに聲を上げて泣いた人だ。しかし、今考へて見ると、あの人も、小谷さんとは別の意味で——さうだ、小谷さんが陰性とすると、あの人は陽性だ。——純情な眞面目な人だつた。それにあの人は熱情家だつた。あの理想家的な熱情で、あの人は私から離れると今のやうな思想運動に走つたのだ。あの人の演說で何千人といふ聽衆が感激して、中には涙を催したといふやうな新聞記事を讀んだことがあるが、嘘ではないに違ひない。

あゝ、私にはあゝいふ革命家の血にも觸れたのだ。あの人から貰つた手紙は今讀んで見ても私をあの頃の心に誘つて行く。しかし、あの最後の手紙は恐い。あの人は手紙だけは隨分長い間くれたが、二度目の子が生れた時、あれがあの人の最後の手紙だつたが、あなたの子は誰の子だ、子の親は母親にしか分らない。……私はその先が讀みつゞけられなかつた。

私はその後あの人の手紙の文句をそのまゝ自分のものに借りて、外の男に出したことがある。思ひ出しても極りが悪い。人もあらうに、それをあんな男に——後にも先にも私を振つた三人の中の男の一人、塚越平三——だが、今になつて考へて見ると、振られた私が仕合せだつた。若しあの時私の思ひがかなつてゐたら、今頃どんなに私はひどい境遇に陥ちてゐたかも知れない。誰だつたかから聞いたのだが、あ

の男はあんなに自分のものか何ぞのやうに自慢してゐた勤め先の劇場をよされてから、その後どうしたかと思つてゐたら、去年の暮だつたか突然やつて來てこんな方が訪れてお出でになりましたといつて、女給が持つて來た名刺を見た時、しかし私もどうかしてゐる、一寸名前を見ただけぢや思ひ出せなかつた、尤も何とかいふ保險會社の肩書がついてゐる、あの男が大阪まで流れて來ようとは思ひもかけないから、一寸の間思ひ出せなかつたのも無理はないのだ。こちらへ通さないで丁度店の空いてゐた時だから、店で會つてやると、「いや、もうすつかり尾羽打ち枯らして、伯父の會社の、名刺には內勤となつてゐますがそれは外勤と間違はれない爲で、まあ遊軍のやうな役をしてゐます」などと、相變らずいふことだけは體裁のいゝことをいつてゐたが、伯父の會社なんて、どうせあの男のことだから出鱈目に違ひない、前の××劇場の社長の大村男爵だつて、何か緣故があるやうにいつてた男なんだから。でも、大の男に初めて會つた時は、——山根に紹介されたのだが、私も未だ二十歲前だつたから、××劇場といふ名前だけで脅かされてゐたんだが、幕內主任といふ肩書に迄敬意を表したものだ。しかし、幕內主任なんて、つまり藝のない男の振られる役だつたんだ。今の保險會社の內勤といふのと變りはないんだらう。それがどうだらう、性懲りもなく、ひよつこり私の家へやつて來て、よくのめ〳〵と舊交を溫めてほしいなんて、——舊交なんて何處を押したらそんな音が出るんだらう。しかし、少し極りが惡いが、私も大勢の男に會つて來たが、あんな形のいゝ鼻を持つた男を私は見たことがない。縱から見ても、橫から見ても、大き過ぎず、小さ過ぎず、強くなく、弱くなく、それにあの鼻の下の天鵞絨のやうな髭。（それが今度見た時は赤茶けて厭な髭になつてゐた。）私はあの髭…に觸つて見たかつたのだ。鶴龜々々。

さういへば、山根三太郎——あの男こそ私は心から崇拜といふより心醉してしまつたものだ。あの時分は、私は未だ二十歲前だつた。私は謂はゞ靑雲の志を抱いて、オペラ女優になるつもりで東京へ行つたのだ。そして最初に見たのがあの男だつたのだ。震へる手で洋室の樂屋の扉をノックすると、靜かに中から扉を開いた時、初めて見た時のあの男の立派さ！　私はたしかに、呑まれてしまつた。あの男のやうなのこそ、日本人ばなれをした風采の持主といふのだらう。大跨にゆつくりと歩いて行く後から、私はついて行く時、急に身體が小さくなつたやうな氣がした。あの男は私に椅子を指さして坐るやうにといつてから、自分は大きな、素晴しい飾りのある腕椅子に掛けた。向うの椅子が低くて、私の方が高かつたのが、却つて宙に吊し上げられて試されでもするやうな氣がした。そして、あの男が低い肘掛椅子に長い手足をきりぎりすのやうに樂々と折り曲げて、鼻眼鏡を普通の眼鏡に掛け換へながら、

「よく來たね、いつ來たんです？」と下から私の顏を覗き上げるやうにいつた時は、私は顏中が火になつたやうな思ひをした。

「え、昨日參りました」と私はどういふ譯か、氣が轉倒したのだらう今着いたばかりといふ代りに、さういつてしまつた。
「ほお、昨日來たんですか。どうして、東京へ來たらすぐに此方へ來なかつたんです？　今からそんな浮氣をしてると、えらい藝術家になれませんよ」
　といふ、その後厭といふ程聞き馴れた幅の廣い、朗かな聲は、まるで人間の咽喉から出る聲とは思はれなかつた。三尺と離れてゐない所で發音されたのだが、それは六尺離れて聞いても、十尺離れて聞いても、十間離れて聞いても、同じやうに聞える聲に違ひなかつた。あの男は何といつたつて當時日本で唯一の、そして最大のテノルの歌ひ手で、第一のオペラ俳優だつたのだ。口癖のやうに自慢してゐたやうに日本のオペラの先驅者には違ひないのだ。
　あの男こそ、今のやうなことにならうとは、あの男自身はいふ迄もなく、誰が思つたゞらう。あの時分よく牛肉を一日に三斤とか食べて、ビールを一ダース、キング・オブ・キングを一瓶空ける、それを時々傍の者が、それではどんな天才でも咽喉の爲に惡いからと忠告するんだが、俺の身體はそんな出來合ひぢやないんだからと傲語してゐたが、それがやつぱり三年つゞかなかつたから、怖ろしいものだ。でも、それが××劇場に歌劇部があつた間だけつゞいてゐたのは、未だしも神樣があの人の天分に惠をお垂れになつたのかも知れない。××劇場の歌劇部が解散になつて、間もなく淺草の劇場に出るやうになつた。あの人は、自分の聲のだん〳〵潰れて來たのを知つて、町の樂隊の中からあの高田を引張つて來たのだ。あの人はしかしさういふ人を見つけるのが上手だつた。あの人の細君は電話交換局から見出したのだ。そして、その三人で淺草に旗擧げをしたのはよかつたが、名だけあの人が座長でも、人氣は日に日に高田の方に出て來る。あの人にしては痛し痒しだつたに違ひない。それでも、矢張り歌劇界の元老らしい貫錄は保つてゐた。何しろあの立派な風采だつたから。四五年も淺草にゐたか知ら。そこへ、あの地震だ。私が地震前に川原が淺草の芝居に出てゐた時分に、一寸あの人を樂屋へ訪ねた時など、未だ虛勢を張つてゐたが地震には流石にあの人だつてかなはなかつたと見える。それ切りあの人も、日本のオペラもすつかり全滅してしまつた譯だ。それだつて考へて見ると、私の運がよかつたのだ。あの人の弟子になつてオペラ女優にでもなつてゐたら、今頃は‥‥。
　それにしても、あの男の相變らず負惜みの強いのにもあきれた。大阪へ來て、いや、來る前から、私のカフエの名を聞いてゐない筈はないのに、私がこの店をやつてゐるのを、保險會社で塚越から聞いて來たなんて。しかし流石に塚越などと比べると、山根さんの方がずつと藝術的なところがある。昔は唯剛慢なところだけだつたが、今度久しぶりで見ると、何ともいへぬ寂しいところが出來て、私は實をいふと好きになつた。が、今更あんな人を好きになつてゐる暇はない。それにしても、あんな時に何から何まで立派な風采をしてゐて、あんなに

落魄するといふことは、それだけで藝術的ではないか。十年、いや、もう十五年もつと前になるか、日本で唯一の洋式劇場で、あの驚くべき聲をその圓天井、その圓柱、その廊下の隅々にまで響かした華やかな歌ひ手が、いくら落ちぶれたとはいへ大阪三界に來て、音樂會を開くのにせめて公會堂でなくても、朝日とか毎日とかいふ大新聞社なら兎も角、あんな小新聞社の講堂で、自慢の細君と二人で寂しい音樂會を催すやうにならうとは。おまけに、頼みに來た切符が一枚九十九錢で昔ならその五倍の値の切符でも五十枚とか百枚とかを押しつけに來たところを、幾枚でもいゝからなんて、あの男があの日本人ばなれした堂々とした身體を曲げて頼むやうになるとは、私はこの私室に通して椅子に掛けて向ひ合つた時、初めて東京であの人と會つた時のことを思ひ出した。きりぎりすのやうな長い手足が、低い安樂椅子の四方に恰好よく突き出てゐる姿が、あの時の通りだつた。唯、私も安樂椅子に掛けて、あの人と對等、否、それ以上の氣持で話し合つただけの違ひである。あの人が私の部屋を見廻して、いゝ部屋ですなといつた時は、私はしかし得意な中に何か、あの人でない、誰でもない誰かに咎められてゐるやうな氣がしたので、用件の切符の方へ話を持つて行つた。餘程五十枚といはうと思つたのだが、三十枚でいゝ？といふ、三十枚、結構です、有難う、龍ちやんの友情を感謝します、と本當に嬉しさうにいつた。さういふ風な物の言ひ方をして決してわざとらしく見えない男だつた。考へて見ると、私とあの人とは五歳か六歳かしか違はない筈だつた。あの人はたしか川原より二歳上だつたから、つまり、私が初めて會つた時は、あの人は二十五だつたんだ。二十五歳で、あの風采で、あの天分で、あの名聲！何が悲壯だといつて、あの人のやうに少年で高科に上つて、普通の人の男盛りといふ年を、十年も二十年も後にして沒落した人の悲壯さには比べられない。それが株屋とか實業家とかでないだけに。私、何とかしてあの人を後援してやらうか知ら。唯、あの鈴子夫人が氣に入らない。あの女の爲に、私は未だ西も東も分らない二十歳の時代に、どんなに苦い目に遭はされたかさうだ、今こそ私はあの女に復讐しようと思つたら、思ふ存分に復讐してやることが出來る。今度東京へ行つたら訪ねてやらう。今夜にも行つてやらうか知ら。しかし、困つたことには所が分らない。貞ちやんにでも頼んだら、いや、貞ちやんぢや駄目だ。

あの音樂會があつてから、こゝへ集まつて來る連中の中でよく山根の話が出るやうだが、誰かゞこゝの龍ちやんとあの人とは親しかつたんだよ、といふのはいゝが、親しいどころか、龍ちやんが昔東京へ行つた時の最初の戀人だなんて、どこから聞いて來るんだらう、そんな話を聞いて來て、貞ちやんが呼吸を切らしながら私に知らしに來たことがある。その時、金泊屋の息子が小宮に、君もせめて男をこしらへるなら、せめてあの位の藝術家を戀人にするんだな、といつたさうだ。さすがにあの圖々しい小宮も顏を眞赤にしたさうだ。その時のあの女の顏を見てやりたかつた。誰か小宮のやうな女に、交換手上りの女に

――あ、さうだ、山根鈴子が交換手だつたのだ。畜生――だが、鈴子は器量は悪いが何といつてもあの綺麗な聲がある、小宮には何があるもんか、馬鹿々々しい。今こそ山根三太郎は多くの人々から忘られてしまつたが、兎に角あの人は日本の歌劇の先驅者なんだから。小宮などは私のおこぼれを拾つてゐるだけでも分に過ぎてゐるんだ。……

しかし、私が以前山根三太郎の戀人だつたといふことが、これが軍人なら勳章にでもなつて殘る筈だが、今の私にそれが何だらう。唯、私の十何册かのアルバムに殘つてゐるだけだとすると、戀愛とは果敢ないものゝ名だらうか。あの身を焼き盡すやうな火が、消えてしまつたら唯灰になる火に過ぎないのだらうか。いや、果敢ないのは戀ではなくて、戀の喜びなんだ。そして、いつ迄も殘るのは、戀の苦みに違ひない。私は戀の喜びばかりだつたのだらうか。いや、私のは戀ではなかつたのかも知れない。

おゝ、この山根の寫眞の何と澤山あることだらう。舞臺姿のだけでも何枚あるか知れない。

風のなかの
羽根のやうに
いつも變る
女ごゝろ

あゝ、こゝに馬上姿の寫眞がある。丁度山根が馬の稽古を始めた時分からだつた。私が川原と會ひ出したのは。この林の中のやうな所に立つてゐるのは、私と一所に日光へ行つた時、私があの人のカメラで寫してやつたのだ。同じ場所で私が立つてゐるのを、山根が寫してくれたのがあつたが、川原に見られてはと思つて破つてしまつた。この鎌倉の海岸のも私が撮つたのだ。二枚とも引伸したのだが、この海岸の方の、右の隅の前の方にある黒いぽーつとしたものは、私の手提の端なんだ。ピントが外れてゐるから分らないが、はつきり寫つてゐたら、これも川原に遠慮して、今頃はこんな所におさまつてゐなかつた筈だ。だが、かうして、横向き加減に立つてゐる姿だつても、山根といふ男は全く立派だ。

よくしたものだ。こゝからが川原の寫眞になつてゐる。やつぱり川原の寫眞が一番澤山あるやうだ。川原といふ男は前から見ると立派だが、どこかに横のがあつた筈だ。これこれ、横から見ると實に滑つぺらに見える。それに私があの人と一所になつた時分は、山根なんかゝら思ふと、あの人は本當に書生つぽだつた。何年私はあの人を養つたらう。山根とすつぱりと切れてしまつて、いや、さうぢやない、山根と後腐れのないように小石川に家を借りて、天下晴れて川原と世帯を持つた時が二十二の時だつた。それから……それから、私が……

あゝ、何も彼も私がいけなかつたからなのだ。私の心柄からだといはれても仕様がない。昌太郎が生れたのが二十三の時だつた。松下さんがあの激しい手紙をくれた時だ。川原が或晩芝居から珍しく不機嫌な顔をして歸つて來て、龍ちやん、お前、貴様、貴様は學者ださうだ

から知つてゐるだらうが、スリンドベルヒといふ人の「父親」といふ脚本を讀んだことがあるか、といはれた時はぎくつとした。私はあの人と向ひ合つて、昌太郎に乳を哺ませながら、呼吸が止まつたかと思つた。しかし、女といふものは何といふ罪の深いものだらう。松下さんの手紙は半分しか讀みつゞけられなかつたのに、當の川原にかう頭から極めつけられた時は、却つて一時どきつとした後は、自分でも不思議な程氣が落着いてしまつた。川原がその時分賣出したあの名調子のセリフ張りで「子の父親は誰か、それは母親にだけしか知られない」といつた時には、私はしやあ〳〵として、「あんたまでが岡燒連の出鱈目な作り事を眞に受けて、私を苦しめるんですか」といつて、私は胸に抱いてゐる昌太郎の頭を撫でながら、「私なぞはどうなつてもかまひませんが、それはこの可愛い坊やの一生を傷つけるものです。あんたが坊やの父さんでなければ、誰が坊やの父さんです」いふうちにも、私の目から涙がにじみ出た。

あゝ、その昌太郎も咲子も今は私の傍にゐないのだ。あの意地惡のお母さんに、而も東京にでもゐることか、こゝから半里と離れない所に、育てられてゐるのだ。この寫眞は咲子が三歳で、昌太郎が生れたばかりの時、これは夏子の七歳の時、此方は昌太郎が初めて學校へ行く時、これがその翌年、もうないか知ら、一枚、二枚、三枚、七枚しかない。地震の翌年に別れた切りだから、もう三年見ない。私は川原にはもう何の未練もない。だが、子は私のものだ。川原のものぢやない誰のものでもない。私のお腹から生れた私のものだ。あの時、川原との仲がだん〳〵もつれて來て、面倒くさくなつたので、突然二人の子を連れて、見つけられないやうに京都まで電車で行つて、ヤアミ・ホテルで一晩泊つた。ヤアミ・ホテルは私の一生忘れられない所だ。それは前の年の春のことだつた。川原は初めからそのつもりで部屋を二間借りたのだ。そして毎晩私を置いてきぼりにして、そつと中庭から出て行つた。私は彼の部屋のどんな物音も聞き逃さなかつた。私は彼が出て行く氣配を聞くと、ぢり〳〵する心を抑えながら、少し時をおいて私の部屋を出て行てつた。庭の千燭光かの電燈の光を浴びて、櫻の花が日本畫のぼかされた畫のやうな趣きを暗に浮かせてゐた。目を上げると、東山が黒々と畫見るとは全く別な神秘な姿で聳えてゐた。私はよく、その木立の間を當もなく歩き廻つた。そして、子の泣く聲を聞いては部屋に戻つて來て、自分の着物が夜露にしつとりと濕つてゐるのに氣がついたことが幾夜あつたか知れない。私はあのヤアミ・ホテルの櫻の庭の夜明けを覺えてゐる。或朝、夜の白々明けの頃、足音がするので、木の間を透かすと、裏口の方から歸つて來たらしい川原の姿が現れた。が、私が聲をかける前に、向うから抑えつけるやうな、例の名調子といはれるセリフ張りの聲で、

「何をしてるのだ、今時分」と叫んだ。「それでお前は二人の子供たちを育てゝ行けるか。」

「あなたはあの可愛い子供たちを私から引離して、あの立野に育てさ

せたいんでせう。さうは行きません。あの子供たちは私のお腹から生れたんですから」とあの人に武者ぶりつきながらいつた。あの人の着物も、夜露を浴びて、水に浸つたやうに濡れてゐる。あの時の着物の冷たさがあの人の心になつて、その時から私たちの間にどうにもならない溝が出來たのだ。

　あの人が私を忘れても、なんの、あの人だつて私を忘れ切ることが出來るものか、子供たちが母親を忘れることはある筈はない。子供たちはいつ迄も、母がその一年前にそんな苦しい思ひをした痕跡とは知らないだらうが、そこで父の家を逃げた母と送つた一夜を忘れないだらう。考へると不幸な子供たちだ。物心ついた時から始終旅興行に出る父親のことを、父さんはどうしてそんなに旅行に行くの、とよく聞いたものだ。だから、父親と離れて暮すことを何とも思つてゐなかつた。そして、あの時私に連れられて、京都から信州に入つて、あそこの方々の溫泉場を廻つてゐた時、姉の子の夏子が、「母さん、私、始終旅行をしたいわ」といふと、「僕も旅行好きだよ」と昌坊もいつた。一番長い間ひだ淺間溫泉では、あの子が元氣のいゝ日にアルプスが見えると、「母さん、アルプス山へ行かう」といつてよく私を困らしたものだ。子供等は別れた母をアルプスと一緒に覺えてゐるだらう。

　しかし、何といつても、あの子たちを今私は見ることは出來ないのだ。お金がなくなつて、信州から東京に歸つて、もう一度信州へ出かけるつもりでゐたのを、姉がヘマなことをして川原に居所を知られてしまひ、その後又やつとの思ひで赤坂の川原の家から學校へ通つてゐたのを途で連れ出して、その晩の汽車で上野を立つところを、待合室でつかまつて、それ切り私はあの子たちと引離されてしまつたのだ。今だつて、私が連れ出さうと思へば連れ出せないことはない。が、あの頃のやうな思ひ切つたことは、色んな事情があるからでもあるが、出來なくなつた。私はこゝで、こんなカフヱエをやつてゐる間は、あの子たちを連れて隱れる譯には行かない。しかし、誰が何といつたつて、あの子たちは私のお腹から生れた子だ。いくら立派なんかゝ親切ごかしに馴つけようとしたところが、子供のことだから一時は馴ついても、やがて大きくなつたら生みの母を求めるだらう。それを思ふと私は何で寂しいものか。私には二人も子があるのだ、私の腹から生れた子供が。誰がその子の親だと、私を除いて、いへるものか。人に貰つたり、自分でこしらへたりしたものは、結局自分のものではないんだ。神樣に授かつたものでなければ……川原だつて、さうなつたら、あの子を自分の子といひ切ることは出來ないだらう。さういへば咲子のなにも死んでから、早いものだ、もう今年は三年になる。あの人の寫眞は、と、どのアルバムだつたか知ら、確か五六枚あつた筈だ。あの人だつて、咲子の父親は誰だか知つてゐるのはお前だけだと疑つてゐたんだ。そこへ行くと、川原は正直者だ。あの人は咲子にしても、昌太郎にしても、自分の子だと思つてゐるんだから。

　あゝあ、だけど、厭だ厭だ。又來月から川原の芝居が角座にかゝ

るんだ。川原川原といふ名前を厭ほど聞かねばならない。名前だけならいゝが、あの人の下手な聲色をへどが出る程聞かされねばならない。下手なのも堪らないが、表へ流して來る聲色屋に一人、外の役者の碌すつぽ出來ない癖に、川原の聲色だけが憎らしい程得意な奴がゐる。この前の時など、あんまり巧いので、川原のだけはやつてくれるなといつて、祝儀を少し澤山はずんで歸してやつたら、いゝ氣になつて、一と晩に二度も廻つて來た。貞ちやんの話に依ると、小谷が贔屓てやらすんだといふ話だ。それに芝居のある間毎晩馬の脚や書生かやつて來て、珈琲一ぱいづゝ位飲んで、氣障な芝居の話ばかりするんだから堪つたものぢやない。いつそのこと、貞ちやんでも連れて、一ヶ月ばかり又、淺間温泉へでも行つてゝやらうか知ら。あゝ、それも駄目駄目。私はもうこの道頓堀の水と灯に一日も別れて暮してゐられない東京ももう厭。どんなことがあつてもこゝを離れない。どんなに苦しい工面をしてもこの店を手離すもんか。カフエエ、リユウがなくなつたら、道頓堀にカフエエらしいカフエエがなくなる譯ぢやないか。岩井は日本一の借金王か知らないが、尻を割るやうなことをしたから牢へ行くんだ、私は何も泥棒の金と思つてもらつたんぢやない。あゝああ、だけど、何だか寂しい。何だかもう私の世が終つたんぢやないかといふやうな氣が、この頃は時々する。あゝ、縁喜でもない。私とした、ことが、これ迄こんな女々しい氣になつたことは一度もないのにどうしたといふんだらう。さうだ、小谷さんが來るやうになつてからだ。あの人が來るやうになつてからいけないんだ。しかし、あの人のことを考へると氣の毒になつて來る。たしか、あの人は私より一歳上だつた。貞ちやんに初めて連れて來られた時、あの黒い顔を赤くしてゐた。何でも貞ちやんの話では、住吉の姉さんの家の離れで、東京から歸つて來た當座は、机の上に聖書と、床の間に赤い胴掛のついた三味線が一挺置いてある切りだといつて、ひどく感心してゐた。あんな年頃には一寸したことにも感心するものだ、さういふと小谷といふ人は東京にゐた書生時代にもそんな人だつた。同じ友達でも伊東さんや深江さんとはすつかり違つてゐた。しかし、思ひ出すと、私にはあの伊東といふ男が一番憎らしい。まだ深江さんの方は男らしい戀をしたら戀をしたといつて、私が東京から大阪へ歸ると、大阪までついて來るし、さうさう、こゝから見えるあの風呂屋の隣の宿屋に泊つて、その時分神崎にゐた私のところへ、毎日ほど手紙をよこしたものだつた一日に二度も三度もよこしたことがあつた。それが郵便でなしに、いつでもこゝから車屋に持たしてよこすんだから、成程、今のやうな剛膽な小說家になるだけのことは、あの時分のことを考へても、うなづかれる。あの人は小說を書くんだといつて、毎日あそこの宿屋の机で、いつの間に書くのか、二週間程の間に小說を三四篇も書いて、私が行く度に讀んで聞かしてくれた。私には小說といふものがよく分らなかつたが、いつもその批評を聞かれると、仕様がないから「結構です、面白いわ」といふと、あの人は喜んで、それからいろ〱文學の話をし

くれた。あの人は今のやうにえらくなつた人だから、あの時私が「面白いわ」といつても、「結構です」といつても、この女には小説は分らない位のことはとつくに知つてつたんだ、そんなことはどうでもよかつたんだ。そして、あの人は一寸の間でも長く戀人の顔を見てゐたかつたのだ。あの人はさういふ人だ。私が港町で電車を下りて、夏のことだつたから、暑い午後の日を背中に浴びながら、丁度この店の手前のところで、私は俥の上から、家と家との隙間に斜めに川を越してあの宿屋の二階の、あの人の座敷をちらりと見ると、あの人の方でも私の行く時間には一分間も休みなしに見張つてゐると見えて、すぐ私を見つけて屹度團扇を上げたものだ。あの人の座敷の廊下には西日が一ぱい當つてゐるのに、あの人はいつも日覆を半分上げて、籐椅子に凭れてゐたものだ。籐椅子の足下まで日が射してゐるのもかまはず、あの人は戀に熱中する人だつた。やがて私の俥がその橋の上にかゝると、あの人は欄干のところまで出て來て、團扇を振つた。そしてその歡迎振りといつたら。私は今迄に、金持にも、貴族にも、あの人ほどお金を惜しげもなく使つた人を見たことはない。

そこへ行くと、あの人を紹介してくれた伊東はどうだ。あの頃はあんな聖人面をしてゐて、それでゐて私を死ぬ程戀してゐながら、一度も戀してゐるといはなかつた。それで小谷さんをつかまへては毎日私の惡口を言つてたさうだ。だけど、あの人だつて、私が東京へ行かない先にくれた手紙の中には、「私はあなたなしに生きてゐられない、あなたが死ぬならいつでも死ぬ、」といふやうな文句を千も書いてゐる。私の支那鞄の底にはあの人の手紙が今でもある筈だ。それでゐて、あの人は何處かの淫賣女と戀に陷ちる小説を書いて、一躍文壇に乘り出すと、その次は私のことだ。默つて私を戀しながら、自分の戀は棚に上げて、私のことを、私が忘れてしまつたこと迄詳しく覺えてゐて、それを小説に書いて、あの人は益々有名になつてしまつた。莫迦面白くもない。しかし、その時は私はどうかして訴へられるものなら訴へてやらうと思ふ程腹が立つたが、考へて見ると、私あつてのあの小説ぢやないか。あの小説のお蔭でひどく迷惑はしたが、私の名前はあの小説で却つて有名になつたともいへるかも知れない。

さういへば、あの人の寫眞も、小谷さんの寫眞も、學生時代のが一枚づゝあるだけだつた。深江さんのは一枚もなかつたか知ら。……あつた、あつた。これはあの時分箕面で寫したといつてくれたものだ。さうさう、箕面からも毎日車屋に手紙を持たしてよこしたものだ。執固かつたが、どこか可愛氣のある人だつた。しかし、この一所に寫つてゐる人は實に厭な人だつた。今こそ大家だなんのと威張つてゐるがあの時分は屹度東京にゐられなくなつて、大阪へ逃げて來たのに違ひない。尤も京都の醫者とかに惚れて二條邊の何處かに世帶を持たしておいたのが、女がいつの間にか男をこしらへたんだとか、深江さんがいつてゐた。いつか私があの人たちのゐる宿屋へ行くと、「女といふものは何といふ人を魅する生き物だらう。」とあの人が私の方をちろ〳〵

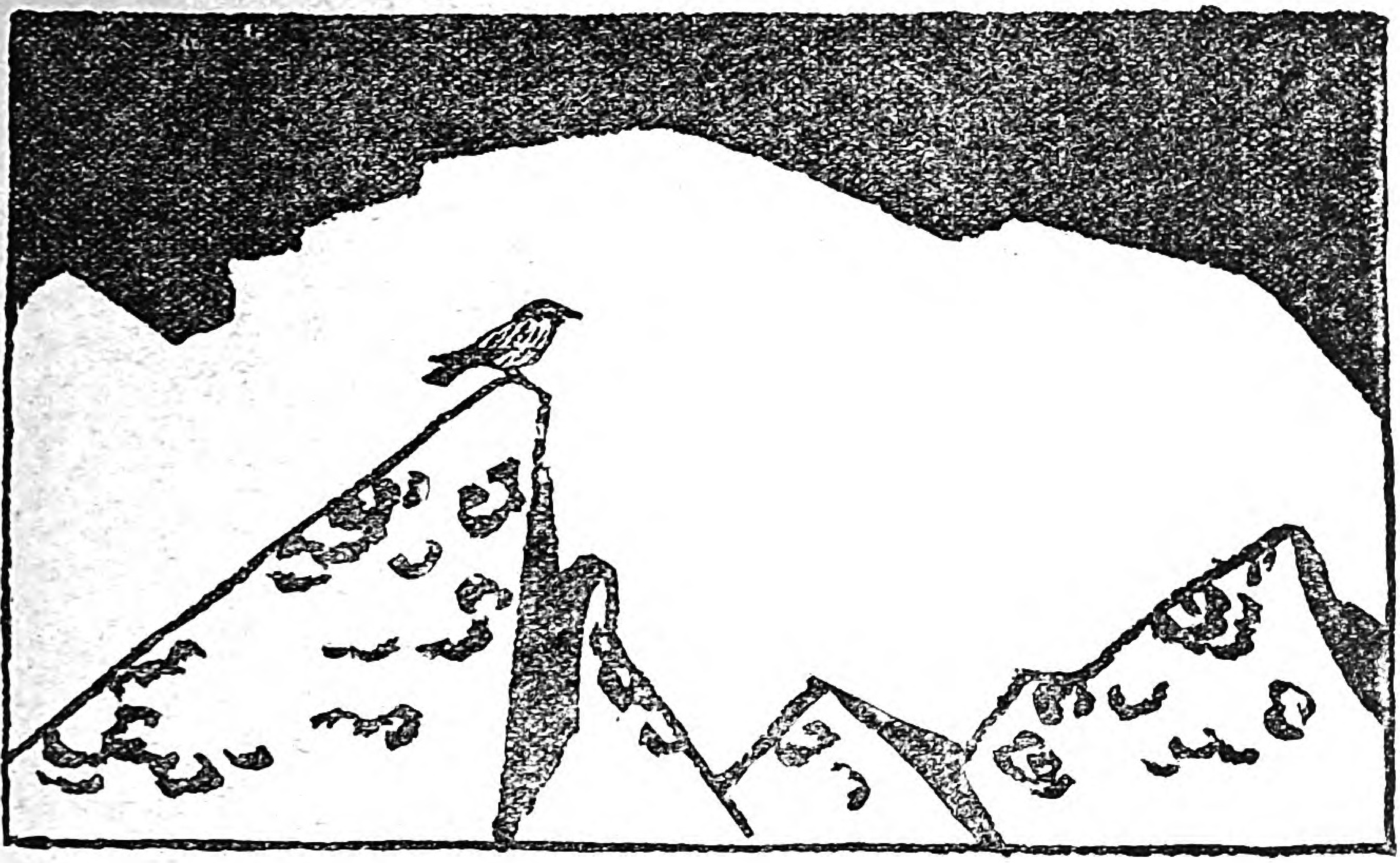
見ながら、いふと、「同感ですね」と深江さんがいつた。この寫眞で見ると、實物より餘程よく寫つてゐるが、私は本當にこの人のぢろ〳〵と人の顏を見る目つきが厭だつた。しかし、貞ちやんはいつかこの寫眞を見て、「あ、伊原さんが寫つてゐる」と目を輝かしながら、「この伊原さんと並んで寫つてゐる若い人は誰です？」と聞くから、「深江さんよ」といふと、一層驚いた顏をして、「驚いたな、姉さんのアルバムはまるで現代の藝術家の總覽のやうなものだな。それが小說家とか、音樂家とか、畫家とか、俳優とか、位まではいゝが、角力取から、政治家から、實業家から、學者のやうな人まであるんだから。それに、一々署名がしてある上に、年月日や、歌や俳句の文句まで書いてあるんだから。これと、いつか一つだけ見せてもらつた手紙、あの七箇の文箪笥に入つてある、——あれを合すと、立派な文壇の裏面史だな、情史といつてもいゝな、」なんて冷かしたので。私がむきになつて怒ると「いや、國寶といふ意味ですよ、文壇的國寶ですよ」と頭を掻きながらいつてゐた。しかしあゝいふ時の貞ちやんは食べてしまひたい程可愛い顏になる。しかし、あの人がいくらおませさんでも、あのアルバムに貼つてある人たちがみんな一度は私の……私の……何だとまでは氣がつかないだらう、たゞの友達か、後援者だつた位に思つてゐるに違ひない。いや、此頃は多少は感づいてゐるかな。いつかも私の指をおもちやにしながら、「姉さんは、惡いけど、小野小町見たいな人だと僕は思ふな」なんていつたことがある。……いや、さうかも知れない。しかし、小野小町の戀人は、よくは知らないが、深草小將とか、在原業平とかいふ外に、一人も有名な人はゐないぢやないか。

その時小谷さんが一所に來てゐて、例の一言一言言葉を探して物をいふやうな調子で、「だけど、僕は時々思ふんですがな、こんなことをいつたら龍子さん（私を龍子さんと呼ぶのはあの人と伊東さんと二人切りだ）怒るかも知れないが、結局龍子さんはこれ迄樣々な戀愛をして來られたとしても、それは謂はゞ戀愛の名をうたはれたゞけといふやうなものぢやないでせうか。そこへ行くと、僕はあなたと會はなかつた間、日下に惚れて、まるで三年といふもの、いえ」といつて、極り惡さうに、あの人の癖でそんな時屹度俯向くと額に下つて來る髮の毛を掻き上げながら、「いえ、僕は今でも戀しつゞけてゐるのです、そして死ぬ迄です。それは、こんなことは龍子さんに直接いふのは初めてゞすが、日下の顏と龍子さんの顏とは、僕の目ばかりでなく、實にそつくりなんです。御覽になつたことがありますか、今天王寺の樂天地に出てゐますから、一遍見て下さい。だから」と又しばらく後の言葉をどんな風に現さうと考へるやうに口ごもつてから、「つまり日下鏡子は私にとつて草間龍子なんです。氣持を惡くしないで下さい、尤も私はあなたに氣持を惡くさせることはないと思つてゐます、といふのは、戀といふものは二人でするものではなくて、一人でするものだと僕は思つてゐるのです。僕は伊東に紹介されて、あなたと初めて會つた時。」といつて、又しばらくいひ淀んでから、「僕は忽ちあなたに戀し

てしまつたのです。あなたを見ないやうになつて、三年程後、深江の家で初めて日下鏡子に會つた時、私はあなたに廻り會つた氣がしました。もし日下鏡子に初めに會つて、あなたに後で會つたとしたら、その反對だつたかも知れません。いや、しかし、それはいへません。それから、私はその時分行きどころに困つてゐたあの人に、私自身困つて深江の家に居候してゐたのですが、その私の部屋を空けてやつたのもその後あの人が誰かと正式に戸籍の上で結婚したら、經濟上に非常に助かるといふので、私が戸籍の上で結婚してやつて、家だけ三ケ月ばかりの金のある間あの人と同棲生活をしたのも、――その同棲生活の間も私は二階で獨身者のやうに暮して、今のあの亭主が始終入りびたりになつてゐたのです。そんな他人が見たら馬鹿々々しい生活も、私にはどんな事でも眞面目な戀愛生活でした、理屈でなく、私は戀愛しつゞけてゐたのですから。そして、それは矢張り、つまり、あなたに戀してゐたのだといへないことはありません」そんなことをいつたことがある。そして、最後に、「鏡子さん、僕のいふことを正しい、――少なくとも嘘でないとは思ひませんか。あなたは、遠慮なくいふとつまり『戀と名の思ひ川の畝』です。あなたは有名だつた、そして數知れない戀の思ひ川を持つてゐる。僕は、しかし、戀をした、そして戀をしてゐる、そして死ぬ迄戀をしてゐる、といへないでせうか」

私はあの時は顏の化粧が滅茶滅茶にくづれる程泣いて、泣いて、泣いた。……

あゝ、誰かノックする。お入り、なんだ、手紙。おや? 時計屋の坊ちやんだな、仲田恭吉といふのは。だが、女の手蹟。……おや小宮浪子、小宮浪子。小宮浪子。あの女、到頭地金を現したな。信州へ行つてるのだな、而も私の思ひ川の、あの淺間温泉へ。昨日から病氣だなんていつて、妹を代りによこしてゐると思つたら、いつの間にか仲田さんを欺して、もう妾の契約位してゐるのかも知れない。誰かゐない、誰かゐない? ……小宮の妹を呼んでおくれ。あんなもの、一日もキヤツシヤアに置いておけない。……あの、小谷さんはまだ見えてゐないの? なに、もう三時間も前から來て入らつしやるつて、どうしてそれを私にいつて來なかつたの。小谷さんはお金を拂はないお客様だつて、お前たちに輕蔑させないよ。あれは私の昔からのお友達なんだから。……いゝよ、いゝよ。私が店へ行くから。何ぐづぐづしてるの。小宮の妹はこゝへ今直ぐ呼んで來るんだよ。今日から私がカウンタアに坐るんだから。



雲と東洋人

「明るい人の續き」

犬養健

高木は襟つきのワイシャツに無雜作なネクタイを結びながら、上着をかゝへた儘肩に觸る薄の穗をよけて、禎三と隣り家の庭に入つて行つた。輕石まじりの土は最初の夕方のとほりにザクザクと音をたてた。コスモスの長い莖はやはり亂れ、井戸端の青い空瓶はやはり靜かに反射してゐた。だが禎三が第一印象で高木を洒落者だと感じたのは、おそらくあの嫉妬に似通つた孤獨な心持のさせた仕業だつた。

「奧さん、何でもないんですよ」高木は緣先から後姿の見えてゐる幹子に聲をかけた。彼は雜談かたがた禎三の診察を濟ませたところだつた。「病人騷ぎで少し運動不足だつたんだらう、君。——僕がひつぱり出していゝ加減歩かせたら、診る前にもうお腹がいゝ氣持にすいて來たやうだなどといふんですからな。——アトニイなんて君、そんな可愛いゝものぢやないよ。まあ胃酸過多さ」

「それはよろしうございましたね」と幹子が手輕ストーヴのなかを覗いた儘答へた。「この手際のわるいものをひとつ附きあつて戴けて」

「どうして。肝心なさらないとみんな平らげられますよ」

「はつは」

禎三は聲に出して笑つた。高木のつとめて禎三に神經を起させまいとしてゐる心遣ひが感じられたのでその笑ひは一層輕やかだつた。退屈な海邊での反動で笑ふことの樂しさをはつきりと感じてゐて、彼はその頃可笑しい言葉には待ち構へてゐたやうによく笑つた。笑ふ事はほとんど堪ふ事だ。いまも禎三は輕やかに笑つた。まるで心の底に潛む暗い感動をなぞ押し隠してゐないかのやうに。

「あなたもあんまり仰有れませんよ、召あがりもの丶事では」臺所の幹子が姉妹に共通した控へ目な抑揚で應對してゐた。「まあおかけ下さつてゐるうちにこれで試驗いたしませうね」

「いやわたしは失禮しますよ」胴まはりの太い上着をつけた高木が時計を見ながら斷つた。「もう行く時間ですよ」

「お掛へ？またその論文の御相談でいらつしやるの」

「それとまあ診察です。どうも診察ばやりです」

「御診察？」高木が冗談に近い口ぶりだつたので幹子は振り向いた。

「どなたかホテルのお客さんでいらつしやいますの」

「いやそんなに稼いでもね」今度は本當の冗談だつた。「——例の昨日の友達なんですがね。」と、馴れて見れば氣さくな高木は、彼の續けてゐる病理學的研究の助手をしてゐるその若い醫學士をさう單純に呼んでゐた。「わたしがこんな風に過激に働けなくなつた間ひとりで無暗と夏ぢう二人分を勉強したらしいんです。ちよつとその研究が藥學教室のはうと獸醫のやうなかたちになつてゐるものですからな。そこへいきなり汽車に搖られてむづかしい問題の相談に飛び出して來たものだから、先生から、疲れが出たんでせうな。さつき使を寄こして、熱が少しあるから今日のうちに上田へ廻つて二三日氣位に寢込んで來ると云つてゐるんです。上田が郷里なんです。まあホームシックですな。そこでホームシックの打ち合せに郵便局まで電話をかけに行つたところが、もう一人からういふ患者が見つかつたわけなんですよ。——さあ行くか」

「さう〻でも森島さんはおよろしいのでせう。おなかが忽ちお空きになつたつていふお話ですし」幹子が禎三を愛想よく留めた。「其處でお構ひもしなくつてお氣の毒でございますね。これはいま子供のおやつに作つて居りますの。人まかせだと燒け過ぎたりしますから。——その間こんなものでも御覽になつて下さいますか」

幹子は割烹着のまゝ大型の繪入雜誌や寫眞のアルバムを持ち出して來た。

「なにその心配は要りませんよ」門口で雜草の陰の自轉車をいぢつてゐた高木がまだ會話の仲間入りをしやうとしてゐた。「さつきのこの先生と來たら——人氣のまるでないテニスコートのベンチでぼかんとしてゐるのです。それがまた藥局のボオイや藥劑師の練習ぢやありませんか。馬鹿馬鹿しい」

實際禎三はその時、八つほど徒らに廣々と並んでゐるテニスコートのひと隅で、球の響き工合さへ悒いやうな季節外れの練習試合をぼんやり眺めてゐたのだ。こゝが高木が禎三の樣子をことさら滑稽に傳へるのはむしろ禎三には有り難かつた。彼はいま高木からも幹子からも平靜に思はれたかつた。平靜が必要でもあつた。——先刻高木が人影の少ないコートの向うから呼びかけた時、禎三は無制限に一つ事を考へてゐる瞬間をさまたげられた人間のやうに苦痛を感じたのだ。禎三は折から郵便局に立ち寄つて兼雄からの手紙をうけ取つてゐた。手紙には松子のことが澤山書き込んであつた。彼は心のなかで松子といふ人間を、幾年間かの松子を見つめてゐた。それから彼自身の生活の變化を凝つと見つめてゐた。——何氣なく裝つた彼の應對は大きい上體を搖りながら近寄つて來た高木に向つてぎごちなかつた。そして高木が病人騷ぎのあとの彼の身體工合を醫者らしく尋ねた機會に、禎三は撥をあはせて急に雄辯になつたのだ。高木が診てやらうと云つたのはそのためだつた。禎三はすぐに應じた。心の半端な狀態を消すに適當な方法を與へられたやうに應じた。禎三はまた松子が同じ時刻に多分訪ねて來るだらう事を知つてゐた。だが兼雄の手紙を讀んだその儘の頭で、彼は松子に出會ひたくはなかつた。松子にむかつて表情の普通でない事を怖れた。これが清敎徒的に躾られた、彼の自己防禦だつた。そのかはり彼は高木の隣り家の物分りのいゝ、氣さくな幹子の傍に少時置いてもらひたい誘惑をすでに感じてゐた。松子のゐない幹子の家の緣先はその午後の禎三の心持に一番適した避難所だつた。ゴツゴツした觸感のあきらかな西洋封筒を懷に入れた儘、彼は海にかくされた高木の家に屆いて行つた。——

「あなたの仰有つて下さつた事はこちらから申しあげたい事でした。妹こそ深く喜んで居ります」

「妹は迷惑どころではありません。あのやうに迂濶もので感情を外へ出す方法を知らないのです。そのためにいろいろのお附きあひも下手ですし、またお附きあひに自然と無精になつて居ります。妹はそのためにこれまでに數多くの大きい損をして來て居ます。自分を取り得ないと思つてばかりゐて仕方がないのです。(自分を取り得がないと思つて仕方がない！まるでつい先頃までの俺の眞似のやうな事を云つてゐると、讀みながら禎三は思つた。)しかしあなたの御家庭では幸ひにそれを寬大に觀て下さるやうで、妹は思ひがけなく近づかせて戴いた事を深く喜んで居ります。柄になく言葉にあらはして私に知らせて來て居ります。奧樣のお疲れをまぎらす事が出來たなどといふ事はほんたうの偶然だと思ひます。どうか奧樣に私のお禮のこゝろをこそお傳へ下さい」

これが兼雄の手紙——禎三が出した禮狀にまた應へて來た兼雄の手紙の一節だつた。兼雄は世辭の云へない人間なのだ。兼雄の文章は兼雄らしく素朴だつた。では、松子はその控へ目な感情の內側で禎三の一家を好んでゐたのだ！彼は何か心の急所を突かれたやうな氣がした。

親しみを押し隱す性向は彼のものばかりではなかつた。そして親しみの方向が彼からばかり目立たずに働いてゐたのではなかつたと知ると禎三は妙に當惑した矛盾した激しい感情だつた。郵便局から横町へ折れてゐた彼はそはそはと踏みがちに歩いて藥局に入つた。ソーダファウンテン部のひつそりした隅の卓に腰を下した。雲の多い午後で卓の面には複雜な光線の淡い影があつた。

だが手紙の内容はそればかりではなかつた。

「實はまたあなたに御めんだうをおかけしたいのです。それは妹の緣談の事です」

「この話は私の旅行中に起つたのです。私が先日公用で阪神の方へ出張したをりに、父の老友のお宅まで挨拶に出ましたところその話が出たのです。相手は大學の理學部の附屬試驗所で研究してゐる賴光といふ一寸變つた苗字の人です。そして其後調べましたところが、やはり寄宿學校から大學へ進んだ人だといふ事が分りました。それでまたあなたに御相談するわけです」

「いつもあなたにばかりかういふ五月蠅き事柄で御手數をおかけするやうで本當に相濟まないと存じますが、これは種々な話のなかの寄宿學校關係の方の場合だけあなたを勞はす結果になるので、それほどに老父達が妹のことを氣にかけてゐるとお解りになつて、寛大に嗤つて下されば有り難く思ひます。その點をくれぐれも惡しからず御諒解願ひたく存じます」

「しかし兄の立場から云つて、私には今度の事も特にあなたに御相談したい心持があるのです。M・N氏の場合にしても、あなたがあの時仰有つて下さつた事は大變當つて居りました。あなたはぼんやり者の妹のことを長い間よく御存知の方のやうに、細かく公平に云つて下さいました。(落葉の舞つてゐる暗い道で度を失つてゐた禎三がさうだつたらうか!)後でM・N氏のことを他の方からも伺ひました時に、なは同氏に對するあなたの御批評の態度を嬉しく存じました。この點について私の家の者は皆心から有り難く思つて居ります。今度も賴光氏の出身學校が分りましたら、父は早速あなたのお名前を口に出しましたので、御迷惑とは思ひながら私も力を得ました。御叮嚀な御禮狀に對していかにもすぐさま甘えるやうで心苦しく思ひます」

「因にこの話はさう至急といふほどではありませんが、あなたのお考へを參考までにうかがつて、甥の幼稚園の方もありますし、旁々妹に歸京して貰ふ事になるかも知れません。妹にはあまり度々の緣談のことゆゑ、この頃は私達が一應調べたうへで初めて本人にくはしい相談に乘つて貰ふやうにして居ります。それが必要なのです。それからこれは母達の考へですが、妹の齡の點もありますし、多少の缺點はお互のことだからといふ風に考へてゐるやうです。これも御參考まで申しあげます」——

彼の目の前に埃の目立つ、秋の感ぜられる白い卓があつた。なにか深い大きい悲しみがあつた。それは松子の結婚がもう花やか

ではあり得ないといふ、漠然とした考へから來てゐるやうだつた。常連らしく、派手な運動用のジヤケツを着た四五人の男女の學生が入つて來て横手の卓を二つ併せるなり傍若無人にピンポンをはじめたので、禎三はその儘外へ出た。そして此處もまた一隅のほかはひつそりした、徒らに網の張つた儘になつてゐるテニスコートの觀覽席でもう一度ゆつくり讀み返した。兼雄から頼光についてどんな人間かと尋ねられたと知つた瞬間に、禎三の頭の最初のはたらきは徹底して自我的なものだつた。それは頼光が——二つ下級生であつた頼光が禎三自身に安らかな優越感をもたせてくれる種類の、特色のない人間だといふ事だつた。

張つたまゝに忘れられた網と柵圍ひに添つて勢よく繁つた雜草の叢とが、昔の寄宿舍の倦るさに滿ちた休日の中庭を思ひ出させた。さうだ、頼光は寄宿舍で穩和しかつたと彼は考へた。何の不快な記憶もないことを先づ考へた。頼光は水産學を志望して、今では東京と三浦半島の臨海試驗所とで一年の半分づつを過してゐる筈だつた。顏の平たい、髪の柔かい平凡な良家の子弟、穩かな灰色、といふ感じだつた。だがさういふ頼光と松子との對照はあまりに突然だつた。それは禎三が松子の良人としては、彼にもつと孤獨な感情を投げつけるやうな頭腦と若若しさとをもつた青年を空想してゐたからだつた。その空想はたしかに嫉妬の變形であつた。理由のたゝない嫉妬であるのに。——いま彼は頼光の話に氣ぬけした。さうだ、この話には賛成したくないと考へた。こゝにも知らず知らず嫉妬の變形が入り混つた。理由のたゝない嫉妬が！だが兼雄から向けられた頼光の言葉に束縛されて、彼はつとめて公平にならうと自分を强ひた。

練習試合の球の往き來は懶くて平凡だつた。彼は顏を擧げた。雲がゆつくり峠町の上を過ぎてゐた。東洋人が空想をもつ時に好んで唯一の對手にする雲だつた。彼は解き放たれたかつた。「よく、よく考へやう」と自身に氣弱くつぶやいたりした。その時に高木が同じ郵便局の横町から現はれたのだ

いま幹子は縁先に茶を運んで、手輕ストーヴであげた手製の菓子をすゝめながら禎三に澤山のことを訪ねた。幹子は一度門口まで見舞に來てくれたのだ。——八重子の事や芳子の事や禎三自身の事や、松子からその都度聞き知つてゐて別に新しい話題にはならないそれらの事がらを、幹子は母親の經驗と怜巧な物言ひとで新しいものにしてゐた。禎三はまた松子のために芳子がどれくらゐ疲勞期の疲勞をまぎらす事が出來たか——要するに兼雄に宛てゝ書いたと同じ意味をこの兄妹ふたりの姉にむかつて云つたのだ。

「いゝえ、あのひとはたゞあれだけの事がせいぜいで、ちつともお勤めできませんで」と幹子は禎三の言葉を通り一遍の禮のやうに解つて見せてゐた。「あゝいふ性ですから。——あれで氣はあるのですけれど」

呼び返されたのだらう、横手の荒れた草原から低い土堤を越えて六七歳の幹子の娘とやはりそれくらゐの齡に見える甥とが土いぢりの道具をもつて縁先にまけつて來た。娘は一見して下山系統だつた。ことに長い睫毛の松子に似た眼差だつた。果實のやうに美しい兒だ。だがその美しさを自覺する年頃に達した曉は、叔母に似た顏立ちから忽ち母親似の顏立ちに變るだらうと思はれるのだつた。男の兒はどこか田舍じみて醜かつた。

「お辭儀をなさいよ。由紀ちやん。正男さん」

女の子は長い睫毛の眼で笑つた。松子にそつくりの笑ひ方だつた。禎三は思はず凝視して、その眼差のことを云ひ出さずにゐられなかつた。だが彼は逆にかう云つた。

「お母さん似ですね！」

「さうですかしら」

幹子の疑ふやうな言葉が禎三の耳に強く響いて、彼は稍々狼狽へた。

「それとも叔母さん似かな」

「さうでございませうか」禎三とは無關係に幹子は前のとほり快よい抑揚をつゞけてゐた。「叔母さんといへばこの子は（と彼女は由紀子に並んだ男の子を振り返つた。）もう叔母さんのすつかり巾着で。――さうねえ、正男さん」

「巾着だつて、巾着だつて」

女の子は菓子を頰張りながらさも可笑しさうに聲をたてた。だが男の子は身體を捩り氣味にむつつりと含羞むだ。可愛氣のないといふのだらう。この平凡な子の世話を松子は細かく見てゐるのだつた。して見れば松子は平凡な良人をも案外深く愛するかも知れないのだ。松子は自分の稟質の姿といふものを知らない。だから魂の調和といふ事も識らないのではないかしら。――彼は機械的にアルバムをめくつた。

「妹もいゝ叔母さんにばかりなつて、一向お母さんにはなりませんで」

「これ北京よ！前門の通りよ。叔母さんも出て來てよ」

まるで禎三の返事を救ふやうに由紀子が叫んだ。

「さう。由紀子さん僕にお話して下さい」

由紀子はいかにも國際的都會に馴れてゐた子供のやうにカステラのこぼれる手先でアルバムをめくつて見せた。實際それらの頁にはしばらくの間まだ由紀子の幼い、そしてまだ松子のゐない北京市があつた鈍い風色の埃つぽく厚ぼつたい城壁があつた。巨きい甍に草の生へた故宮や、楷書の看板の並んだ感傷的な雜沓や、萬壽山への小石と鵞鳥の多い郊外の路や、それから春を待つ幹子達の綿入れの目立つ單調な日向ぼつこがあつた。

「ほら叔母さんが！」

其處に突然加はつた松子はまつたく若かつた。まだ眞新しい婚期と

いふ不思議な、説明の出來ないものが一種彼女を充實させてゐた。

「その頃はほんたうに面白うございました。——氣候も申し分なくて——楊が芽を出して北京では一番の時で——いろいろの方をお誘ひして——」

幹子の云ふとほりあちこちの頁に同じ顏觸の、外交官らしい青年が二三人笑顏や眞面目な顏をさらして寫眞に適した鮮かな光線のなかに並んでゐた。

「そして子供達がめいめいの木皿を空にするだけの時間が經つた。

「その叔母さんの事で」とやがて幹子が冗談にまぎらせながら、先刻から何度も口に出しかけた事柄のやうに切り出した。「なにかお話がおありになるのではございませんの」

「え、——」

一瞬間、高木にさそはれる儘にこゝに來た自分を禎三は技巧家なのだと思つた。幹子はしかし覆ひ被せるやうに云つた。

「賴光さんて方、よく御存知?」

「知つてゐます」

「どんな方」

「どんなつて——さうですね——正直にお話すれば」さうさう、こんな動搖した心を押へた會話を兼雄と交した事があつたのだと禎三は考へた。そして彼は不意に苦笑に似た、一種の感情に充ちた貌付きでいまの説明のさきを續けずに懷から西洋封筒を取り出して云つた。「今日戴いた兼雄さんからのお手紙にこんな事が書いてあるのです——缺點はお互の事でもありますし——」

何を云ひ出すのかといふ幹子の表情が禎三のすぐ横にあつた。そして禎三は恰度人が爐火に向いてするやうに、秋草の小さく無雜作に咲いてゐる足もとの荒れた土を見ながら話し續けた。

「僕はこんな方針——と云ひますか、こんな風に打ち明けて戴くとすごつくのです。兼雄さんまで柄になく氣が弱くなつてゐるのかしら。——松子さんはそんな程度のお孃さんでせうか。——僕は松子さんにこれまで何度緣談がおありになつたか知りませんが——知るわけもないのですが——僕が兼雄さんから尋ねられゝばやつぱり、一番初めのお話のあつたばかりの頃とおんなじ松子さんを考へて、いゝ、やかましくお返事するよりほかないのです」

「それはあなた方はさうでいらつしやるでせうけれど」

「松子さんが多少齡をおとりになつたから、などといふ返事の仕方は何だか僕には出來ませんね。殘酷で。常人があの松子さんなのだから——齡が殖へれば賢くなつて整つたとも云へますよ。賢い感じといふのはまあ器量のうちに入りますよ。——僕の云ひ方が可笑しいですか」

「いゝえ」相變らず落ち着いた幹子が微笑んで見せた。「ぢやあ、つまりこの話には反對でいらつしやるの」

「僕はうまく云へないのですが」頭のなかのものを纏めやうとして、

五月蠅く附きまとつて來る自己解剖から禎三はやはり幹子を見ずに云つた。「松子さんには僕達はもつと特別にいゝ人を想像してゐたのです。頼光は無難は無難な人です。お聞きになつたでせうがあゝいふ仕事で臨海試驗所の磯邊で魚をとつたり貝をさがしたりして、毎日變化のない平和な生活かも知れませんが――松子さんはたゞ無難なといふ資格のひとのところへいらつしやる娘さんかしら。――松子さんはあんまり善良で！」

　こんな事を云つてもいゝのかといふ風に、禎三は幹子へ振り向いて拙い笑顏に紛らせた。だが幹子は案外しみじみと眞面目に合槌をうつた。

「えゝ。たしかに、人だけはいゝのです」

「それを十分知つて貰はなければ無駄ぢやありませんか。松子さんの性質を無駄にするなんて！」

「あのひとはまた無駄にし易いのです」

「それならばなほ松子さんといふ人をよく識つて貰ふやうに、傍で考へてあげなければ」

「えゝ、それはこれまでだつてたゞの簡單な、それこそ見合ひといふやうな事ばかりではございませんでしたの」幹子も素直に禎三の語氣に從いて來て熱心に云つた。「あのひとの性質は、性急にわかつて戴かうたつてどうせ無理でございますものね。ですから北京なぞでも城外に遠足にまゐつたり、ゴミゴミした場合でわざと汚い變つたお芝居を觀たりしてゐるうちに、隨分お話も出來かゝつたのですが、いざそれでは正式のお話を傍でもち出さうとなると、いつもあの人はから堅くなるのです。迷ふのです。迷ふといふよりも相手の方と十分にお附き合ひの出來るやうにわたくし達が仕向ける頃には、あの人は一寸のお茶のみ話も愼重にしてしまつて、自分の大切な心持ほど奧の方へ方へ藏つてしまうといふ風なのです。奧を割ればすてたものでもないのにわたくしなんぞ傍でほんたうに焦々いたしましたわ。ほんとにわるいといふところはないのに！ですから妹には、それこそ一生かゝつてあのひとのいゝと云つては身びいきになりますけれども、さういふ性質を外へひき出すやうに覺悟してかゝつて下さるやうな專門家でも出ていらつしやらなければ駄目なんだらうつて、よく主人と話すことがございますわ。――何、由紀子ちやん。これ？」

　庭木戸のところからしきりに臺所へ呼びかけてゐた由紀子に向つて幹子は女中に代つて廊下の隅の花模樣の大きい毬を投げてやつた。

「厄介だなあ」

頭のなかとは反對に、空々しいほど無雜作な言葉が禎三の口にのぼつた。

「厄介でございますわ、ほんとに」

深い叢の向うの通行人の話聲を眼で送りながら、茫んやりと鸚鵡返しに幹子が答へた。「――ねえ森島さん、妹は芳子さんにいろいろのお話いたしまして？」

「いろいろのつて云うと」
「佛蘭西の時なぞの」
「さあ」
さう云はれて見ると松子は尋ねられた時にしか、それも表現の不十分を感じてゐるかのやうに言葉少なくしか、話題には出さないやうだつた。だが禎三はそれを、同じ時日の間日本の、しかも田舍の小さい浦濱に籠つて暮した芳子への遠慮から出てゐるもの と解つてゐたのだ。
「さう。やつぱり芳子さんにも致しませんのね」幹子が意味ありげに言つた。「——妹 はことに巴里を思ひ出したくないのです」
禎三が問ひかけないと見ると幹子は眼を外らせ、稍々頰をほてらせたまゝ續けた。
「あのひとは巴里でほとんどお話がきまりかけたのです。誰方ももう左う思つていらつしやいましたわ。やはり外務省のはうの方でございました。父の職業があゝいふ風なので自然と國際的なお仕事の方へお話が出來るのです。父は病後でリオンから巴里に移つて、自宅で仕事をとりながら妹 と暮して居りましたの。それが間際に相變らずそつくりのあのひとの癖のために——でせうと思ふのですけれども——壞れてしまひました。隨分お噂の種になつたやうですわ。彼地では日本の方には廣い土地のやうでも狹くなります。妹 はよく神經をどうもしなかつたと思ひますわ。そこがまたあの人なのです。よく出來てゐるもので、御承知のやうな性質で救はれてゐるのです。自分のはうが至らないのだといふ風にぽかんと考へてゐるのです。無理に堪へてさうするのか、無理に堪へるほど苦しくないのか、妹 のことはわたくし達にはよく分りませんわ。でもこんど會つて見ますとやはり大變に大人になりました。變りました。——後でわたくしの耳に入つたのでございますが、巴里の日本の方のなかには、妹 のことを、失戀ぐらゐのお噂ならいゝのですけれど、まあ未亡人か何かのやうに云つていらつしやる方もあつたのです。わたくしはほんとにその時は憤りましたわ。そんな噂をなさる方にも、御本人だけぽかんとしてゐる 妹 にも」
「あの人に、そんな事をするのはひどい！」
何か兇暴な氣持から禎三は顏色を變へた。心にもなく自身の動悸を聽いた。だが禎三がそのやうに慘忍に近い衝動を感じたのは、その噂にではなく、若くて身輕で自足してゐるらしいその外交官に對してであつた。松子が塵ほどの變りもなく未婚のまゝで歸つて來たと知つた時に、あれほど本能的な悅びをどうする事も出來なかつた彼であるのに。
「あのひとは（と禎三はいつの間にか幹子の口癖を眞似てゐた）抵抗力なんぞまるでない人ぢやありませんか。まるで生れる時につい忘れて來たやうなひとだ。——でもそれが松子さんの强味なんですよ。（彼は意地のわるい事を云ふやうに語尾を强めた）相當に一所の土地にゐ

て、それが分らないのは馬鹿です。丁度よかつたのです」だが禎三は深入りし過ぎてゐる自分に氣がついて、和げるやうに言葉を變へた。

「鬱々しさといふものがあんまりないんだなあ」

「なにも鬱々しくなくつてもちつとも困らないのですが」これも禎三の言ひ譯に冗談を入れた。「――北京の時にしても、ずつと一緒に暮つてから、あゝいふ風な方ならば幸福になれたかも知れないなぞと、他人事のやうにわたくしに云つたりして。――かういふのこそ捌れ過ぎといひますのか、本當に見つともないから止して頂戴つて申してやりましたの」

妹を匿つた物言ひで、幹子は泣き笑ひに似た貌を見せた。

「あのひとなんぞ昔の娘さんにもなれませんし、この頃のお嬢さんにもなれないのです。風來坊です。下山の母までが、由紀子の時代にはもうこんな心配はないだらうなどと云つて居りますわ。自分の性質は奥に藏つておいて、分つて戴けるまでぼんやり待つ、分つて戴けなければそれまでにする。判じ物のやうなのです。まるで自分の心持と始終御夫婦になつてゐるやうなものですわ。――それに兼雄もいけないのです。妹のことをさも特別な性のやうに云つて聞かすものですから」

「それあ本當ですよ。兼雄さんの云ふとほりだ。善良過多とでも云うのかな」兼雄の妹に對する深い愛情を見ぬいたやうに思つたのは、やはり當つてゐたのだと禎三は考へながら、又もやわれにもあらず燥いだ言葉を口に出してしまつた。「善良過多症なんて少ないですよ。胃酸過多ならこゝにも居るけれども」

「善良過多?」幹子は笑ひ出した。「それは贔屓なさり過ぎますわ」

「いえ芳子もこんな事を云つて居りましたよ。松子さんは兼雄さんのところへいらつしやるのが一番だつて」

「うまい事を仰有るのね」

笑ひ出して容易に止らないのは幹子が姉らしく昂奮してゐる證據だつた。だが笑ひとまると、幹子は反對に妙に重たい、空ろな、しんみりした表情に變つた。

「あなた方はなかなか研究家でいらつしやいますのね。――妹をなかなかよく觀察していらつしやるのね」

「さうでせうか」禎三は稍々顔を赤らめて嘘を云つた。「僕のは尤も芳子から聞いたのですが」

「さう」と幹子が感動したやうに獨り言した。「妹はもつとお友達をお附きあひしなければ――さうしたら自分で自分がわかるでせう。――さう云つてやりませう」

曇り日の土堤の向うの草原で、松子の系統をその儘にひいた由紀子が従弟と毬を蹴つて遊んでゐるらしく、胸から上を見せたまゝ何度も小忙しく單調に往き來してゐた。

「あのひとは東京に歸るとまた自然とどなたにも御無沙汰してしまうのです。――芳子さんとは仲よくして戴けさうね。――さう云つてや

りませう」
花模樣の調が高くつまらなく彈んだ。
「ねえ森島さん、松子は」と、默り續けてゐる禎三を促すやうに幹子が語氣をあらためた。「成り行きにまかせて獨身なら獨身でもいゝと思つてゐるのではないでせうか。どうでせう」
「さあ――」
「さうでしたのね」と我にかへつた樣子で幹子が笑顏を向けた。「あなたに伺つたつてお困りになるだけね。でも、變なお話になりますけれども、妹は身のまはりのものはすべてピアノのお稽古で――どうせまだ内輪のお子さん方のですけれども――戴くもので始末してゐるのです。さう云つてなかなか聽かないのです。やはり向うの習慣が染つたと云ふのでせうね。巴里の冬は大變陰氣で、看護婦と交代でピアノばかり稽古してゐたさうですわ。――それにこの頃は佛蘭西語のお稽古も少しお教へしてゐるやうです。叱るなどといふ事がどうせ出來ないもので、小さい方には好かれるのです。さすがに小さい方には生地でお附きあひすると見えますわ！（幹子は苦笑した）頼まれて氣もなく始めたのが案外樂しいといふ風なのです。母なぞは、だんだんそんな事になるのを心配して居りますけれども、わたくしなんぞあの人には存外さういふお世話が向いてゐるのかとも思ひますの。強いられて乘り出して見れば、語學も相當らしいのです。だんだんさういふ方へ行くのではないでせうか。――それはいゝお話か、出來ればこれに越した事はありませんけれど」
「さうです。それに越した事はなさゝうです」
と禎三が低い聲ではつきり答へた。
「松子さんは或る意味で無自覺な人なんだから」
幹子は同感したやうに彼を注視した。
「――あの人は確に美しい性質を持つてゐますね。でも僕の考へ方では、（堅苦しい議論になりかゝつたので禎三は稍々困惑した顏付きだつた。）美しい性質を抱へてゐるといふだけでは何にもならないのです。さういふ性質を與へた自然は、何といふか、かう、虛無的なものだから。自覺してこそこつちの領分ですよ。小兒だけが天國に入るなぞと云ふのは古い！」
長い間松子について考へる時の多かつたゝめにかう容易く言へるのだといふ事を、その場合禎三は思ひつかなかつた。
「松子さんのやうな人は、誰かに自覺を與へて貰ふ必要があるのぢやないかしら」
「――さう」
切り開いてゐる遠くの道路のあたりで、新しい電柱に攀ぢのぼつてゐる工夫達がよく響く聲で互に合圖しながら、陰氣に光る電線を取りつけてゐた。
「子供さん相手で、あの方の性質が新しく發展するかしら」
工夫の太い鋭い合圖がまたふたりの注意を無理に遠くへ外らせた。

「自分の持つてゐる性質を發展させなければ、生きてゐる事はほとんと無意味ぢやありませんか。もともと九分九厘といふところまでは、それこそ一厘のすばらしい餘地をのぞいちやあ、無意味だとも云へるのに」

「――さうね」

間を置いて幹子が、「わたしも意味が約そ分つたから返事するのです」といふ風に悠つくり口を切つた。

「でも、そんな先きの事を仰有らずに、さしあたり芳子さんからさういふ風に仕込んで戴けるとよろしいのね。――あの人にも取り得もあるんだつていふ風に。――まあ家庭教師ですのね。して下さいますかしら」

「芳子がですか？さあ」禎三が笑つて遮つた。

「お易い御用？何しろ兼雄をお婿さんに見たてゝ下さつた方ですものね」幹子は、裏に厚意をふくめた芳子のその冗談が大變氣に入つたやうに笑ひ聲をたてた。もう夕方だ、ああ込み入つた話はもういゝ加減にしやう、肩を下して息を吐かうといふ樣子だつた。「えゝ、わたくしもいつぞや妹に、一體どういふ方ならば氣が合ひさうなのつて尋ねましたらね――」

禎三もまた奇妙な感情の爆發と、幹子に調を合はせたい或る技巧から更に笑ふのを用意してゐた。だが幹子は急に赧くなつた。うろたへた。そして彼女は先きを云ふかはりに、いつの間にか勝手口から上つて來た由紀子をかう叱つた。

「由紀ちやん、何ですの。お客さんの前で不好よ」

實際由紀子は閾のうへに立ち留つて小指を無遠慮に鼻の穴にあてゝゐた。これも黄ろい古風な大陸の影響かも知れなかつた。だが禎三は不意に支那語の發音を鮮かに使つた幹子を見あげた。赧く羞んだ幹子の顏は何故か稚かつた。どういふ譯か少女の樣に自制を失つてゐた。その瞬間禎三は、やはり姉妹は姉妹なのだと思つた。彼はさういふ幹子のうちに、幹子がそれほど氣遣つてゐた松子のあの特徴を見たやうに思つた。　（續く）

（「明るい人」はこの次に「人間の意志」といふ題にして約七十枚ほど書いて、完結させる豫定です。つゞけて讀んで下されば幸ひです。）



善魔

長篇「安城家の兄弟」の一部

里見弴

一

　どんな窮屈な姿勢でも、どんな半端な時間でも、眠さへひどくはつてゐない限り、まるで野蕃人のやうに熟睡できる昌造が、何かほんの微かなもの音で目をあいて了つた。曇つてゐるのか、まだ朝が夙いのか、摺硝子を入れた縁側の欄間から射し込んで來る光は、白ツぽく、薄暗かつた。千鳥といふ、一番奥まつた八疊の二階座敷で、昌造は、昨夜はじめてそこに案内されたのだが、枕の下はすぐもう田町の仲通りになつてゐるとみえて、車や人の行交が、なんとつかないざわめきになつて聞えて來た。

「おや？　起きてるの？」

その薄暗さではどす黒く見える、絞りはあるが眞赤な長襦袢の肩まで乘り出し、肘枕で、靜に長く煙を吹いてゐるのは瑛瓏だつた。

「えゝ。もう先刻から」

昌造も、可なり滿足りた氣持だつた。

「何時頃なんだらう」

手さぐりに、枕頭の眼鏡から、それが好みの、大きくて厚ぼッたい銀側時計を取りあげると、

「違つてるらしいわ。カチ〳〵いつてることはカチ〳〵いつてるけど」

「さう？」

そんな筈はない、と思ひながら、見ると七時ちよつとすぎだつた。「七時、…そんなもんぢアないのかしら」

「あら？　だつて、あたしが見たら四時だつたわよ」

「あゝ、それぢア、きつと、あたり前に見たんだ。これはね、から横にして……」

龍頭の附いてるところが三時にあたる式の指時面を、その正しい見方で、隣の寢床の方へ向けて見せた。目を細め、顔ごとよせて來たが、

「見えない」

「目が近いの？」

「近いも近くないも、まるッきり見えやアしないんですよ」

その、自棄くそじみた大袈裟さが可笑しかつた。

「だつて、眼鏡もかけずに、平氣な顔してるぢアありませんか」

「えゝ。でもね、大抵は勘でね…」

「小さい時分から？」

「さうなんでせうね。小學校に行つてた時分から、黒板の字が、はたの人たちには讀めて、あたしだけにはどうしても讀めないのよ。でも、口惜しいから、知らん顔してたんですけど」

「きつとそれがいけなかつたんだね。その時分から眼鏡でもかけてたら、さう度を進ませないですんだのかも知れない」

「でもね、女の眼鏡つて、生意氣で可厭なもんですからね」

「ぢア、かけたことないの？」

「いゝえ、持つてることは持つてるんですけど、めつたにかけたことないわ。芝居に行つた時なんぞでも、眼鏡ぢアとても駄目なんですからね、兩眼鏡でないと」

「あたしの友達で、眼鏡をかけてる女の人が大好きだつて人があるんですよ。そのわけはね、かけてる時とはづしてる時と、まるで顔の感じが違つて來るから、つまり、一人で二人分になるつて云ふんだ、――ずゐぶん慾ばつた話でさアね」

その、三谷といふ友達の云ひ方だと、そこに、もつと好色な氣持が浮んで來るのだが、昌造は、さらッと聞えるやうに、わざと「慾ばつてる」といふ解釋をつけ加へて話した。

「まア、さうお」

大して興味はなかつたらしいのを、言葉にだけ力を入れて答へ、煙草を捨てゝ、そろ〳〵また床にもぐり込みながら、「愛さん、よく寢てること！」

昌造も、ちよつと首を擡げて、瑛龍と一つ床のなかに、彼方向にな

つて寢てゐる愛香の方をすかして見て、
「ほんとに。……昨夜、久保君たちが歸つたの、何時だつたらう」
「かれこれ二時だつたでせうね」
「それから、あんた方が、歸るの歸らないのつて、暫くごちやごちや云つてゝ、こゝに來て寢たのはもう……」
「あたしは、ちつとも、ごちやごちやなんぞ云やアしませんでしたわ」
勝氣らしく、すぐさう反撥しながら、銀杏返しの鬢を大事さうにもちあげ、愛香とは背後合せに枕についたが、「貴方まだ眠いんでせう？」
「いゝえ。昨夜おそかつたわりに、さうでもない。一體、あたしは、夜更ならいくらでも平氣なんだ」
「あたしたちだつてさうよ」
今度は昌造が、腹ン匐に乘り出して、煙草に火をつけ、プカりプカり喫しはじめた。――いつぞや歌川に招ばれ、早速その翌日招び返したありしたあと、一二度逢ふには逢つたが、賣ッ妓の常で、さう永く落ちついてゐたことのない瑛麗だつたから、昌造も、醉つてゐるうちは兎も角、朝の氣持としては、かうして一つ部屋のなかに枕を並べてゐるのからして不思議で、尙更、すぐ喋りだせるやうな話の種などはなかつた。言葉が杜切れてみると、そのことが、やゝ重くるしく胸へ來た。
――ゆつくり一本喫ひ終つてから、
「ぢア、もうひと寢入りしますかね」
「あたし、なんだかもう寢られなくなつちやつたわ。話しない？」
云ふことが、いやにてきぱきしてゐるんだなア、と思ひながら、
「話さう」
「あたしね」
「うん」
「ずつと先から、貴方のこと聞いてたわ」
「さうかね。どんなことを？」
「貴方、お君さんと仲よしだつたでせう？　その時分よく話を聞いてたわ」
ずゐぶんヅカヅカ踏んごんで來る人だな、と思つたが、それは然し、ちつとも可厭な感じではなかつた。
「さう。それぢア、いづれ、あんまりいゝ噂ぢアないな？」
「そんなことないわ。なかなか評判がよかつてよ」
「先方にはちやんとした旦那があつて、こつちは書生ッぽで、……それで評判のよからう筈はないぢアありませんか。おまけに、結局は振られちやつたんだし……」
「だつて、それア……。今だつて、お君さん、貴方が好きなんぢアないかしら」
「別れる前に、そんな風に云つてよこした手紙もあつたし、あたしだつて、さう考へてゐたいのは山々だけれど、これが、いやいやながら旦那に退かされたとでもいふんならまた別だけれど、好きな人が出來

て、そこへお嫁に行つちまつたんぢア、いかに自惚の強いあたしだつて、どうにも、自惚てゐられる餘地がありませんからね」

「でも、わかんないわ」

「それア、解らないと云へば解らないが、……然し、大抵解つてるね」

「それで、貴方は、今だにお君さんが好きなんですか？」

「嫌ひぢアない。なんにも、嫌ひなるやうなわけがあつて別れたんぢアないんだから。さうかつて、昔日の好きさとは、まるで違つちやつてるけれど。つまり、好きつてほどぢアないが、懐しいつて程度で……」

「いゝわねえ」

「なぜ？」

「だつていゝぢアないの」

「さうかねえ。自分ぢアあんまりいゝとも思つてないがね」

「いゝわ！　大抵な人なら、さういふことがあつたあとなら、嫌ひになるのがあたり前よ」

「あたり前かどうか知らないが、かういふことは考へますね、――もしあたしが、もつとうんと好きだつたら、むきンなつて憤つちやつて、場合によつては殺すとかなんとか、――兎も角、もつとかうあたしの氣持に、なんか大きな變化が起る筈だ、それがないところをもつてみると、自分で思つてたほど本氣に好きだつたんぢアないのかも知れない、――そんな氣はしないこともないんだが……」

「だつて、その當時は、まるで平氣でゐられたわけでもないんでせう？」

「それアさう！　何しろ、生れつきの意氣地なしだから、たゞもうだらしなくまゐつちやつて、みつともない話だけれど、どうかすると、友達を捉まへて泣言を云つたりしたもんですよ。それくらゐだから、怨には思つても、憎いとか、可厭なやつだとか、そんな氣にはなれなかつた……」

「いゝわ！」

「さうかね、いゝかね」

「いゝわ！　ずゐぶんいゝわ！　それでこそ、ほんとうの好きな氣持ぢアないの？　あたし、ほんとにいゝと思ふわ！」

そのとき愛香が、うーんと唸りながら、寢返りをうつと、いかにも色氣のない寢惚聲で、

「なアに？　何がそんなにいゝのよ」

「はゝは」

と、瑛龍が、男のやうな調子で短く笑つて、「目が覺めた？」

「覺めるわ、それア。なんだか知らないけれど、いゝわ、いゝわつて、そんなにいゝ話があるんなら、あたしンだつて聞かして頂戴なね」

小柄な貞造より、遙に丈も高く、どこもかも大間な感じの愛香には、その間拔じみた調子も、いかにも地についたものだつた。

「あんたなんぞ聞いたつて解りやアしないよ。とても高尚な話をしてたんだからね」
「あら、さうお。ぢア、すむまで、もうちつと寝てませうか」
「あゝ、それがいゝ。寝てなさい、寝てなさい」
「今、一體何時なの？」
「七時ちよつとすぎたばかりですよ」
「あら、さうお。ずゐぶん夙いのねえ。昨夜ッからずうッと起きて話してたの？」
「あら、さうぢアないわ。もうちつと前からよ」
「さうお。何しろ七時ぢア仕様がないわね。ぢア、もう一度寝よう」
云ひながら、くるりとまた彼方向になつて了つた。實際、恣の人柄は別として、座敷では、ちよいと口も悪く、ふはりと軽い、ひようげたやうな調子で通してゐる愛香には、今の、惚話でもなく、泣言でもない、へんに生真面目な話では、彼方も口の入れどころがなからうし、こつちも聞かれてゐて氣づまりな感じだつたから、寝てゐて貰ふに越したことはなかつた。
「その話」
暫してから瑛龍が、形のいゝ頸の下に、掻巻の襟をたくし込むやうにしながら、「初めッからお仕舞ひまで、詳しく聞かしてくださらない？」
それア話してもいゝけど、別になんにも面白いことなんぞありアしませんよ」
「いゝわ！」
「うーん」
昌造は唸つて、「……困るなア。さて話となると、これぞつて、どうも……」
「ぢア、最初逢つたのは……？」
「それアね、まだ二度目に出ない前……」
「小若さんで出てた時分から……？」
「いゝえ、その時分は知らないんだ。一遍お嫁に行つて、そこがいけなくつて歸つてたでせう？　あの時分……」
「あゝ、さう。ぢア、素人で……。どこで逢つたの？」
「それがね、可笑しな話でね、どこイ行くんだかわけ解らずに、――歌川が、たゞ一緒に行かう、一緒に行かうつて誘うもんだから、ヒヨコ／＼くッついて行つちやつたんですがね、尤もあたし一人ぢアないんだ、宇田川君、畠山君、井口君なんて人たちも一緒で、――あれはね、大ぶ以前の話だが、歌舞伎座で、歌川たちが、「にごり江」つて芝居をやつたことがあるでせう？　その前に相談會みたいなものがあつて、あたしたち晝飯に招ばれて行つた歸途でね――、だから、あれが確か盆興業だつたから、六月の末くらゐかな、眞晝間、日のカン／＼あたつてる時分に、その同勢で、臆面もなくお巣さんのうちへどやどやどし込んだもんですよ。畠山君や井口君だつて、ほんの昨今の間柄

らしかつたし、あたしなんぞ、まるでどういふ人なんだか、お互に知らないんだから亂暴な話でさアね。尤も、あとで考へると、それが丁度、――一時、歌川とお葉さんと、どうのかうのつて噂があつたでせう？」
「さうでしたかね、知りません」
「何しろ、お葉さんのこつて、數が多いから……」
と、笑つて、「丁度それが、もやく〳〵ッと來かけてる時分で、その日も歌川は、やい〳〵云つて招ばれてたんだらうけれど、――あの人が、存外あれで弱氣でね、一人ぢやアちよいとてれたつたんでせうとなんでもかんでもつきあへつて云はれて、――あとで思へば取巻だ、あんまりいゝ役ぢアなかつたんだが、なんにも知らないから、ノコノコくッついて行くと、これが、大したもてなしでね。みんな飲める口だから、初對面もくそもあつたもんぢアない、忽ちのうちに大亂脈さ、――その時、お接待役に、妹さんが二人とも呼ばれて來てゐたんですよ……」
「あゝ、ぢア、おわかさんも……」
「その時分出てたのは、おわかさんだけだつたから、前から知つた顔と云へば、おわかさん一人なんだけれど、こつちは遊びたてゞ、面白くつてたまらない最中だつたから、まア、めちやく〳〵にはしやいぢやつたらしんですね。あとで聞くと、仕舞には、お踊を踊りだしたつて云ふんだから冷汗もんさ。でもね、感心に、自分で、引ッ込みだけはつけたんだね、――あの時分のお葉さんのうち、仲通りの方へ向けて、庭先に切戸がついてたさ、あすこから、羽織も帽子もなんにもなしで、庭下駄のまんまヒヨコ〳〵ッと出ちやつたとみえるんだ。氣がついた時には、一人で、松川家にぶんぞり返つてたんですがね、――だから、そんなわけだから、お君さんなんて名前も碌に憶えてなかつたくらゐで、そも逢ひそめの初まりといふやつからして、その三枚目さ加減、まるでなつちアゐないんだ、とてもお話にならないんだ」
「さう。それから？」
「その次に逢つたのは、半年ばかりたつて、――多分もう歳尾に近かつた頃と思ふんだが、松川家の帳場でね、――誰も來てくれないもんだから、おりてつて、――あすこに、そら、頭をくり〳〵坊主にしたお婆さんがゐたでせう？ あの婆さんは、なか〳〵飲るし、ちよつと話が面白いもんだから、とつ捉えて、爐ばたで、二人してチビ〳〵やつてるところへ、おわかさんと二人で、ぶらつとはいつて來たんですよ。――あんた、知つてるでせう？ あの爐の切つたつた部屋……？」
「えゝ、憶えてるわ。お帳場のすぐ前でせう？ あれ、お燗なんぞする部屋よ。……それで、そんとき好きンなつたの？」
「といふわけでもないんだけど、――その前から……」
「あゝ、ぢア、酔ッぱらつた時から好きだつたの？」
「いゝえ、いくらあたしだつて、そんなに一度や二度で、すぐ好きンなりやアしませんよ。それア無論嫌ひぢアなかつたんだけれど、さうはつきり意識して……。つまり、そこを、これから話さうつてんだけ

れど、……そのね、そのちよつと前から、松川家の女將さんに、近々おわかさんの姉さんが出るつて話は聞いてましたからね、あゝ、いつかのあの人だな、と思つて、ちよつとくらゐ樂しみにしてゐたことは慥ですね。好きといつても、つまりその程度の好きさだつたんですよ。そいでね、思ひがけなく、そこへはいつて來られたんで、――何しろこつちは、くり〱坊主のお婆さんと二人で、爐ばたに大胡座かなんかで飲んでる爲體だし、ちよいとてれちやつてね、へんにまごまごしちまつたんですよ。――今から思へば、そのまご〱したのなんぞが大へんよくなかつた、――よくないつてこともないが、つまり、この、病つきのもとにやァなつてまさァね。……どうも、ちつと話しにくいな」

「どうして？　いゝぢァないの！　よくわかるわ」

きれの美しい、ほんの少し斜視になる眼を瞑ぎもしずに、瑛龍は、どこまでも大眞面目だつた。それに力に得て、昌造も話し續けた。

「その時に、そばからおわかちやんも口を添えて、ちか〲に出るからよろしくつて、――これァまア、その場合、誰ンだつて云ふべき筈の挨拶でさァね、それを、こつちは、出たらば必ず遇ひませうね、とでも云はれたほどに肝に銘じちまつてさ、えゝ、是非どうぞ！　なんて堅くなつて……。然し、ちよつといゝとこがあるでせう？」

「いゝわ！　ほんとにいゝわ！」

「さう云はれると困るが、つまりそんなわけでね、出るとから、しよつちう逢ふやうになつたんですよ」

「あゝ、さうお！　そいで、……ずゐぶん永い間だつたんでせう？」

「さうね、肇てお藥さンとこで逢つた時から云へば、丸三年半になるんですがね、正味のとこは、――正味つてのもへんだけれど、つまりまァお互に好きでゐた間つてのは、三年に二月ばかり足りないんだ。もつと詳しく云へば、その翌年の二月から、まる二年目の歳尾までなんだから、永いとも云へないけれど、さうまた短かかつたわけでもないかなァ」

「さうね。そいで、いつからほんとうに逢はないやうなことになつちやつたの？」

「それがね、その年の十一月の末からだつたかな、あたし、仕事をしに修善寺に行つてたんですよ。その間に來た手紙だつて、なんのこともなかつたし、時々は長距離電話でも話してたんだから、豫定どほり、仕事がすみ次第に歸れてたら、――愚痴を云ふやうだけれど、そんなことにもならずにすんだんぢァないかと思ふんだけれど、丁度生憎なことに、風邪を引いちまつてね、どうしても熱がさがらないで、寢たッきりでゐるうちに、だん〱歳尾は迫つて來るし、仕方がないから、お正月の支度に女房だけ先に歸して、あたしはもう一ン日、もう一ン日、と延してみても、いつまで經つても熱がとれきれない。あとで考へると、どうも、ごく輕いパラチブスだつたらしいんですね。田舍の醫者で、それが解らないで、普通の風邪の手當ばかりしてくれ

てたんぢアないかと思ふんだ。何しろ、その年には、修善寺で、馬鹿にパラチブスが流行つてたんだし、それに、正月になつてから、女房は、本式の、可なり重いやつに罹つて、暫く入院するやうなことになつたし、どうも、あたしのも、輕いながらそれぢアなかつたのかと思ふんですがね、兎に角、一ン日でも早く歸らうと思つて、ずゐぶん養生してゐたんだけれど癒らない。たう〳〵大晦日になつちまつて、——その朝起きてみると大雪なんだ、それに熱だつてまださがつてやアしないんだけれど、仕方がないから、うんと厚着をして、歸つて來るなり、新橋の停車場からすぐに、——その時分にはもう松川家はよしちまつたあとで、福井つて、じみなうちがあるでせう？　あすこで逢つてたんですけれど、いきなりそこへ駈けつけてつて、電話をかけてみると、急にきまつて、今夜の汽車で、うちぢう揃つてお伊勢さんにお詣りに行つて來る、つて云ふ話なんだ。それはいゝとして、だから行かれないつて、——尤もその、發つて行かうつて汽車の時間までに、二時間たらずしか間がなかつたんだけれど、それだつて何も、俥が來れやア五分とかゝらない、つい目と鼻の間でせう？　一月も逢はずにゐたんだし、電話口でそんなことを云つてる手間で、下駄さへ突ッかければ、すぐ顏が見られるんだのに、——あすこであたしが、がむしやらに慍つちまへばまだよかつたらうと思ふんだけれど、夜になつて、熱は出て來るし、雪ンなかを無理な旅をして來て勞れてもゐたもんだから、すつかり氣持が弱くなつちまつてゝ、ぢり〳〵しながらも、福井の女中たちなんぞ、どうでもいゝ人間にばかり氣を使つたりして、わるく大人氣を出しちまつて、ぢア、歸つてからゆつくり逢はふ、つて、さも未練なげに電話を切つちまつたんですがね、あん時ちよつとでも逢ときやア……。なアんて、どうもちつとだらしがなくなつて來たなア」

「そんなことないわ。……そいから？」

「そいからさ、二日の朝歸つて來るつて話だつたから、二日にも行き三日にも行き、四日にも行つて、どうしても、一度も逢へないんだ」

「どうして？」

「どうしてつて、つまり、なんのかんのつて來てくれないんだ。それは、來られないなら來られないで、それアいくらでも我慢はなるんだが、何より辛かつたのは、福井の女中たちが、ひどくあたしを氣の毒がつて、一人ツぽつちにしといてくれた方がよつぽど有難いのに、なんてえとはいつて來ちア、さも陽氣らしい笑ひ話なんぞして、それとなくあたしの氣を引き立てやうとする、——こいつにまゐつちやつてね、どうにも居たゝまれないんだ」

「うーん」

額に八の字をよせて、瑛龍が、實によく解る、といふ氣持を、唸り聲に洩らした。

「仕方がないから、歸るとすぐ手紙を書いた、——なぜ、いつものやうに逢つてくれないのか、わけでもあるんなら、それを、さつぱりと

云つて貰つた方が氣持がいゝ……」
「なアにイ？」
だしぬけに愛香の寢惚聲が「まだ起きてるのね？　ずゐぶん永い話ねえ」
「いゝから、あんたは、もつと寢てなさいよ。まだなか〳〵すみアしない」
「さうお。ぢア寢てるわ。……おえいさん、あんたいやに突ッ張り返つてるのねえ。もうちつと、なんとか、柔かくならない？」
「いやよ、さはつちア！　擽つたいぢアないの！」
「だつて、なんだか、へんに堅くつて、石ッころと寢てるやうだわよ」
「そんなこと云つたつて仕方がないぢアないの。そいぢア、どうすればいゝのよ」
「どうするつて……。ぢアまアいゝわ。寢るわ」
「文句いはないで、大人しく寢てなさいよ」
「えゝ。……すんだら起してね？」
「起すわ」
「こゝら、無論晝間でも電氣來てるんでせう？　昨夜、消して寢たかしら」
「いゝえ。先刻あたしが起きてから消したの……そいでとうしたのよ。その先、早く聞かして頂戴！」
「さうするとね、その返事が、――忘れもしない、一月六日の日附で、から云つて來たんです。――どうしても貴方に逢へなくなつた。今後逢へないまでも、一度はお目にかゝつて、さうなつたわけをお話しなければならないんだけれど、どうしてもあたしにはその勇氣が出ないし、手紙でわけを書かうにも、それもどうもあたしとしては出來ない。いづれどこからか貴方にも知れることだが、なんとしてもあたしの口からは云へないから、それだけはどうぞ訊かないでほしい。今お別れしても、一生あたしは貴方が好きだ。それだけはどうか信じてゐてください。――さういふ意味でね、わけは解らないながらも、ちやんとしてゐるんだ、要領は得てゐるんだ。それだけにあたしは、尚更諦められなくなつちまつて、――これだけ筋の通つた氣持をもつてゐながら……、さう思ふと、なんとかもう一度考へ直して、……つまり未練ですね、今度は、前よりももつと長い手紙を書いて、あからさまにあたしの氣持を述べたてゝみたんだけれど、その返事も、前とおんなじ意味を、たゞもう少し言葉數を多く、いろ〳〵と丁寧に云つてよこしただけで、たゞお仕舞ひのところへもつて來て、今後幾度かういふ往復を繰り返してゐても、結局おんなじことだから、これッきりもうあたしからは御返事を差しあげません、電話にも出ません。――さうきッぱり止めをさゝれてるんだ。だから、なんのかんの經緯があつたわけでもなんでもないんで、あたしとしちア、實にあつけない別れ方さ。ね、さうでせう？　もうそこまで來ちまつちア、どこにどう力瘤の入れやうもないからねえ」

「さうねえ！」
　ばつちり目を瞬いたまゝ、暫く考へてゐたが、「でもね、――そのとき好ンなつた人が、今の御亭主さんなんですか？」
「さうですよ」
「ぢアね、その、そこへお嫁に行かうつて氣持になつたところに、なんか、……なんかかうあるやうな氣がするわねえ」
「つて云ふと、つまり、あたしには女房子があるが……」
「えゝ、まアそんな風なこともあるでせうし……」
「ところが、その人にだつて、女房子はあつたんだ……」
「さうですつてね、その話も聞いてますけど……」
「だから、つまりあたしは、女房は女房として好きなんだし、その人のは、天にも地にもたつた一人の好きな人として好いたんだらうから、――さうなればこそ、女房子と別れてまで一緒になつたんだらうから、早い話が、愛情の點で、既に五十歩も百歩も、あたしが負けてるのさ」
「さうかしら……」
　はなはだ疑がある、といふ顔つきだつた。
「それアさうですよ」
「だつて、貴方だつて、お君さん、ずゐぶん好きだつたんでせう？なんかそこになくつちアねえ……。一體、奥さんになるならないと、愛情なんてものが、きちつとさう一緒になるわけはないと思ふわ。それアさういふ場合だつてないとは云ひませんけれど、女なんてものは、なか／＼さう自分のほんとうの氣持で、あゝしたりかうしたりときめてくもんぢアないんですからね。そこは、男の人とはずゐぶん違つてるわ。さういふとこは、――あたしなんぞ人一倍さうだけれど、一體、女つて卑怯よ、不正直よ。だから、お君さんが、その人ンとこへお嫁に行つたんだつて……」
　へーえ、なか／＼どうして、これア、はつきりしてるな。迂濶に話を聞いてる人ぢアないな。――さう思ひながら、昌造は、ぢッと相手の目を見返してゐたが、そこまで來ると、言葉尻を掠めてから云ひだした。
「さうだ！　あんたの云ふことはよウく解つた！　あんたがそこまで突ッ込んで來るんなら云ふけど、そのずうッと前に、――さうだな、あたしたちが仲よくするやうになつて、半年かそこらした時分だつたらうかな、一遍かういふことがあつたんですよ。――あんまりあたしが、のべつにうちをあけるもんだから、女房が心配しだしてね、――一體あたしは、秘密つてことが大嫌ひで、――といふより、性分でなんにも隱して置けないんだが、そんなわけで、お君さんのことも、初ッから平氣で、何もかも女房に話して聞かせてあつたんだから、今更どうかう云はれるところはないと思つたんですけれど、そん時には、女房もなか／＼頑張でね、あの人と別れてくれるか、さもなければあたしに暇をくれつてえ騒ぎなんだ。それを、まア、いろ／＼に云つ

て、一旦は宥めたんだが、よく〳〵やりきれなかつたとみえて、今度はお君さんにあてゝ、――古風なやり方だが、どうかあたしが可哀想と思つたら別れてくれ、つていふやうな手紙を出しちまつたんだ。それも、あたしに默つてゝくれればまだよかつたんだけれど、出したあとでさう云ふもんだから、こいつは大へんだと思つて、早速あたしがあの人に逢つてみると、いゝ按配にまだ手紙が屆いてない先で、これ〳〵だからそのつもりでゐてくれつて、我ながら卑怯な話だが、先廻りをしちやつたんだ。さうされてみれば、あの人だつて、可哀想に板挾だ。あの通り大人しい人だから、とても女房の手紙に、そんなこと可厭です、なんて返事は出せない。さうかつて、あたしとも別れたくはない。その時ばかりは、ほんとに氣の毒だと思ふほど苦しんでくれたらしいんだが、結局、ぢア別れませう、つて立派にさう返事を書いて出しちまつたんだ。實際また、それを書いてた時には、別れる氣だつたんだらうけれど、なかなかさうもいかなかつた。その次に逢つた時に、實はこれ〳〵書いて出しちまつたんだから、今後は、お宅へは、絶對に秘密にしてくれつて頼まれてみると、どうもあたしも、それを押し切つて可厭だとも云へないでせう？　あたしがね、女房に嘘をついてるのは、たつた一つ、それだけなんですよ。それアね、あながち自分本位な考へ方からでもないんだ。その手紙を貰つて、女房の喜んだこと！　心から有難がつて、今時こんな立派な人はないつて、今だにお君さんのことつて云へば、口を極めて褒めてるんだが、その素直、いぢらしい氣持を、どうして慘たらしく踏み躙れるもんですかね。そんならいつそ、約束どほり別れちまやアよかつたのに、つて云はれるかも知れないが、――それアまたそれに違ひないんだが、――弱音を吹くやうだけれど、こいつがまた、自然とさういふ時が來るまでは、なか〳〵さう口で云ふやうにさつぱりいくわけのもんぢアないんだ。それから後は、今度はあたしが板挾みで、永い間、――今もつて、たつた一つそのことだけでは、女房を騙し終せてゐるんですよ。仕方がない、この嘘ばかりは、自分のためと云ふより、女房とお君さんのためにも、我慢して、墓場まで背負つてく氣でゐるんですがね、――前々、さういふ經緯があるにはあつたんです」

「あ、さうお！」

と、ひどく動かされた顔つきで、「でもね、それアいゝわね」

「何が？」

「いゝえ、貴方が、その嘘だけは、一生あかさないつていふ、その氣持は大へんいゝと思ふわ」

「さうかねえ」

昌造は、てれながらも、嬉しさうな笑ひ顔をしてゐた。

「さうお、そんなことがあつたの」

暫くしてから、さう呟いて、瑛龍は瑛龍で、考へぶかさうな目の色をいよ〳〵澄ませてながら、「きつと、そん時、奥さんが淋しくなつたんだわねえ」

「て云ふと……？」
「これァもう、好きな人ならば、なんでもかんでも、奥さんになつちまはなけれァつまらないなア、と思つたのよ。その、ちよつと感じたことが、あとになつて、――貴方が稍くゐなかつたんでせう？　その間に好ンなつた人が、彼方でも大へん好ンなつてくれて、奥さんを歸しても、是非とも一緒になるつて云つてくれたんですものね、――それァお君さんのこつたから、ずゐぶん煩悶もしたでせうけれど、嬉しかつたことも嬉しかつたに違ひないと思ふわ。そこを考へてみると、結局お君さんには、それがいゝ運になつたんだし、おんなじものでも、貴方にすれァ惡い運だつたのね。でもまァ、仕方がないわ」
「それァさう！　それァまつたくあんたの云ふとほりですよ」
「でも、お君さん、きつと今でも、貴方がずゐぶん好きよ。貴方だつて好きでせう？」
「だから、先刻も云ふとほり、決して嫌ひになんぞなつてやァしませんよ。だけど、逢ふのは、なんだか可怕いな」
「それッきり、おもてでも逢はないの？」
「逢はないんだ、不思議に逢はないんだ！　ずゐぶんこつちも、芝居やなんか、大勢人のよるところへ出て行くやうなことが多いんだけれど、――それにお君さん、銀座なんぞ可なり好きな方だつたから、どつかしらで逢ひさうなものなんだけれど、不思議にいつぺんも出會したことがないんですよ」
「さうお。でももう、それからずゐぶんになるんでせう？」
「もうかれこれ三年になりますね」
「あゝ、そいぢアもう、貴方だつて、そんなに寂しくもないでせう？――馴れたつて云つちァへんだけれど」
「それァさうさ。咽もとすぎれば熱さを忘るゝでね、人間さういつまでも、ひとつことばかりにくよ〳〵してゐられるもんぢァありませんからね」
「そんなこと云つたつて、その後、お君さんくらゐ好きな人、もう出來ないでせう？」
「出來ない！　殘念ながら出來ない！　三十五にもならないうちに、そんな馬鹿な話つてないと思ふんだけれど」
「でも、わかんないもんだわね。兩方で、それほどまでに好き合つてゐてもね……」
先刻までの、推理の明快さに似げなく、それはちよつと、殉情的にうち沈んで聞えた。それを、吹き拂つて了ひたい氣持で、昌造はわざと調子を輕く、
「あゝ、さう〳〵！　あんたンとこは、十何年も續いてゝ、ます〳〵御圓滿なんですつてね。聞きましたよ」
「大へんね！　十何年なんて……。やつとまだ六七年くらゐでせう」
「ほッ！」
昌造は、兩手を出して、いきなり頭をガリ〳〵掻きだした。「六七年

が、『やつとまだ』ですかねえ」
「そんなこと云つたつて、貴方ンとこは違ひますよ」
はッとして、昌造は口を噤んで了つた。
暫くしてから、
「あんまり一生懸命開いてたら、こら、こんなに手が冷たくなつちやつたわ」
云ひながら、布團のそとへ差し伸べつてよこした兩手を、昌造は、靜にぢッと握り返した。——反感と好意とが胸に混り合つて、然し、なんとも知れない亢奮は、その底から湧き起つて來た。

編輯だより

◇本月號は特別號として四百余頁とした。約一千四百枚の原稿が這入つておる。改革前の頁數にすると六百五十頁壹圓五十錢と云ふところだ。どうせ損失するならこの位の犧牲を忍ぶ方が男らしいと思つて。

へ頁數からも、紙質からも、內容からも本誌に追隨の出來る雜誌は世界に二つとない。ボロ原稿は唯の一枚もない。しかし本誌が多大の犧牲を忍ぶには何かの理由がなければならぬ。それは實に百萬部計畫の目標があるからだ。我等は本誌が新興日本の代表的輿論の府であり、實力であるやうに部數の增加を悅ぶ。

◇本誌は一度讀んですぐに拋棄する雜誌でなく、再讀、三讀する雜誌だ、永久に机邊にありて價値ある文獻や、不朽の小說が必ず採錄されている。古雜誌屋へは用のない名誌だ、大正文學の精髓、評論壇の史的代表作は必ず本誌に登載される。

◇本誌はいよ〱大衆的に解放されたが、しかし本誌の誇りは滿紙これ眞面目で、私人の私行をも發かない點にある。學說や政論やに對しては血みどろになつて闘はすが個人を非難する記事は一切避ける。大衆的にはなつたが、學說上の發見等については讀む人がない位難澁なものでも登載する。眞摯の風、敢鬪の氣に滿ちた本誌でありたい。私などは日本の大衆が個人非難の記事を悅んで讀む氣風のなくなるやうに努力したい。左傾派でも右傾派でも世に何物かを示唆する論文・說苑は何れをも歡迎する。だが、進歩的に潑溂たるものであつて欲しい。

◇今月號はいつもなら壹圓八十錢の特別號を出すのだがいろ〱の意味でそれはやめた。

◇しかし內容は確りしたものが集まつている。泉氏のが百十三枚犬養、藤森、宇野、片岡氏皆四十餘枚あります說苑欄でも、芥川氏のが五十三枚谷崎氏三十三枚野口氏八十枚福本氏が五十四枚、それに新歸朝以來始めて論文を發表した恒藤氏が五十七枚の雄篇である。

◇福田、戴、後藤氏等の所見記は本號の呼びものである。支那時局を見んと欲する人々へはなか〱趣味あるもので、革命の當路者と學者と政治家との集會は宛然一幅の好畫圖である。

◇五月號は部數も又增加するが、內容についても新鮮な問題、趣味深い讀みものを提供する。この三ケ月で約廿萬部の部數が增加した。世界出版界の一大奇蹟だ。

◇社會科學四月號は「帝國主義研究」號とする。猪俣、高橋龜吉、山川均、蒲政人、山田盛太郎、市村今朝藏、淺野晃、佐々木修一郎、向坂逸郎、岡田宗司、氏等が高力作を發表し、ジャン・ステン、スターリン、エス・デヴオイラツキー諸氏の意見をも發表す。近來の偉觀である。

◇現代日本文學全集中の「國木田獨歩集」は四月五日頃より配本されます。それから「菊池寬集」には氏の力作で千枚に近い「眞珠夫人」が全部掲載せられ、「志賀直哉集」には「暗夜行路」の名大作が這入り「佐藤春夫集」には「田園の憂鬱」が全部這入ることになつた。本全集はかくの如く陸離たる光彩に滿たされる。「里見弴集」にも長篇代表作が入れることに約束して貰ひました。大方の讀者に喜びお告げします。

◇本月は東京で改造の講演會を開きます。氏名と時日は新聞に廣告します。

◇本社員志望者は志望者多くして詮査がおく

れました、校正部は既に確定しました。編輯部出版部、營業部、は三月廿五日決定する筈です。志望者の論文履歴書は一切返送しないことになつています。

◇福田徳三氏は佛國學士院會員に推薦された。

◇東北大學の錦田義富氏は少壯有爲の身を以つて三月十四日仙臺に逝く、惜むべし。

◇長篇小説として評判の高かつた里見弴氏の「大道無門」は愈出版されました。それから谷崎潤一郎氏の「愛すればこそ」「と愛なき人々」の合冊が出來上りました、二冊で三圓六十錢のものが壹圓で買へるやうになつた。カウツキー著高畠素之氏譯の「資本論解説」も壹圓でよめるやうになりました本社はドシドシこんな廉價版を出して行きたいと思ふ。

◇本社が「現代日本文學全集」を出して以來壹圓版が雨後の筍の如く出るのは嬉しい。しかしイカものの壹圓版が續出するのはたまらないことである。

廣告料引上

本誌の部數の激增につれて廣告料は左の通り五月號より値上します。二月號三月號四月號は部數が增加したにも拘らず今までの御顧に酬ゆる意味で從來の値段を慣用していましたが今日の場合は業にそれでは多大の損失があるので止むを得ません。どうぞ惡しからず御諒恕下さい。そして本誌が三四ケ月にして數十萬の部數が增加したことは皆さんが一人も洩らず御承知のことと思ひます。

表紙の四	一頁	壹千圓
表紙二、三	一頁	六百圓
指定面	一頁	四百圓
その他	一頁	三百圓

半頁以下は之に準ず

智識階級を目標する廣告は他のいかなる廣告機關より利き目があらうことをも附言してよいと思ひます。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	貳錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和二年三月十八日印刷納本
昭和二年四月一日發行
(價五拾錢)
編輯兼發行人 東京市麹町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍
發行所 東京麹町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング一階 改造社
振替東京八四〇二
電話銀座(四五五八
營業部(一五〇四六
編輯部 一七三三